
ヘヴンズアンダーコンストラクション

Lizreel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘヴンズアンダーコンストラクション

【Nコード】

N3107N

【作者名】

Lizreel

【あらすじ】

そう遠くない近未来。日本政府は人類長寿命化による人口増加問題を解決するため、希望者の記憶をヴァーチャルユートピアに移住させる行政サービスを開始。天国を終の棲家とするライフスタイルが実現する。

厚生労働省の死後世界作成技師となった新人公務員の赤井は、神様役として住民に奉仕しながら、年収4億の高報酬と引き換えに仮想時間内千年ログアウト不能の環境で原始時代から近代文明を築き上

げてゆく。

自然科学ともんじゃ焼きをこよなく愛する陽気な青年が、人として神として成長し、彼を現実世界から見守り支えるプロジェクトチームと共に世界に羽ばたいてゆく物語。

科学内政系ほのぼのコメディ。時々シリアス。

プロローグ 天国の構築士よりご挨拶（前書き）

はじめまして。

温かいお茶をご用意のうえ、まったりお楽しみいただければ幸いです。

章構成

1章と2章前半は物語と伏線の都合上、視点を狭く絞っており、主人公は何も分からない状態で手探り状態ですので、もしストレスを感じたら適宜飛ばしていただければと思います。2章開始時点で仮想時間で9年進みます。

3章から過保護なほどサポート体制万全の安心モードに入ります。このあたりからストレスはなくなるかと思えます。

4章から三人称で現実世界の視点を交え、主人公がどのような評価を受けているかを描写し、サイバーパンク色の強い多元的展開となります。

ご注意

俺TUEEE、エロ、BLGL、バッドエンド、VRMMOではありません。主人公は仮想世界で男女混合ハーレム状態ですが、主人公が無性別の神様キャラなので煩惱がなく、あくまで健全な感じで慕われます。PG12程度の流血描写があります。主人公のみ一人称で描写します。

本編の挿絵は自作絵ではなく購入写真素材や概念説明図、地図で、作品イメージを損なうことはありませんので、挿絵表示はできるだけ「する」にしてお読みください。

プロローグ 天国の構築士よりご挨拶

人間^{じんかん}五十年 化天^{げてん}のうちを比ぶれば 夢幻の如くなり
一度生を享^うけ 滅せぬもののあるべきか 「敦盛（幸若舞）より」

終わりがあるから人生なんだ。
限りあるたった一度きりの人生だから、悔いのないように生きていんだ。

そんな人生観のもとに生き、尊い命を散らした歴史が人類にはたしかにありました。

しかし時は流れ、西暦2133年。
同じ地球の、同じ島国にて。

日本厚生労働省広報CM中

> i 2 3 3 0 5 — 2 4 9 6 <

魅力的な死後世界。

来世の創造を願う国民の皆様からのお声が、
かねてより厚生労働省へと寄せられてまいりました。

このようなお声にこたえ、第184回国連総会議決により各国参加型の全記憶投入型仮想空間を創造するとの宣言文に基づき、我が国では2125年4月より、仮想死後世界「アガルタ」日本版ゲートウェイが開設されました。

開設8周年を経て、2133年現在、全世界3億2180万柱、日本においては2192万556柱の御霊みたまに、安全かつ快適にご利用いただいております。

アガルタに入居される前に体験ダイブをご希望の場合は、30日間の無料体験コースをご用意いたしております。

公的年金保険料をお支払いの皆さまは満20歳よりどなたでもご利用いただけます。

また、いつご入居いただいてもアップグレードは定期的に行われ、世界規模で管理が行き届き、セキュリティも万全、システムダウンの心配はございません。

肉体から解き放たれた、皆さまの死後の快適な暮らしをお約束いたします。

詳しくは、お近くの社会保険庁まで。

CM終わり

つい二十一世紀初頭まで、不老長寿は有史以来の人類の夢でした。

健康寿命を伸ばそうとする飽くなき追及は妄執にも似て、膨大な遺伝子のスクリーニングやiPS細胞での再生医療、テロメア等に注目しての薬剤開発など、研究者たちが苦心惨憺とした甲斐もあって、人類の寿命は飛躍的に伸びてまいりました。

人類推定寿命が百五十年に達していた頃、気付けば人は多少のことでは死ななくなり、どんな病気もコンビニで販売されている万能薬でたちどころに治るようになりました。こうなると自然死は難しく、自殺をしない限り死ぬこともできない。

生きづらい世ではなく、死にづらい世の中です。

いよいよ不老不死が目前となったとき、私たちは途方もなく続く終わらない労働を伴う人生に怯え、そしてまた寿命の伸長はかねてより指摘されていた深刻な問題を露呈しました。

大陸と海洋は勿論、空と宙。あるいは太陽系を覆わんとする科学力を以てして、あらゆる場所に人類居住区が建設されても、私たちは地球上に根ざした暮らしをしています。地球環境に大きく依存した生活環境の中に在って、結局人は地球を最適の居場所と感じ、母なる大地からは離れられない生き物だったのです。

有限面積の地球上で人類健康寿命が延びたなら、人口増加に歯止めがかからない。その場合は死するという前提があつてはじめて、我々は次世代を残す権利を得る。

人類は連綿と続く命のリレーをこれからも続けるために限られた生を生き、そして必ず死ぬるもの。

科学がどれだけ歩を進めても、それは譲られることのない定理でした。

こうして世界規模で運営される、仮想死後世界アガルタは構築されるに至りました。

アガルタ（Agartha）とは地球の中心に存在するという伝

説上の理想郷の名。

その仮想死後世界アガルタを拡充させ、住民のニーズに応える花形職があります。

天国を創造するという、夢のある人気の仕事。

日本では構築士こうちくしと呼ばれる彼らは、最難関国家資格であり国際資格を所持しています。海外ではヘヴンズ・コンストラクター（天国の構築士）と呼ばれることも。

構築士の受験倍率は年々増え続け約二十万倍にもものぼり、その中でも最難関たる甲種一級の今年度の最終試験突破者はわずかに三名。

……その一人が私、私が人間だったころ。

申し遅れましたが私は構築士の赤井と申します。

現在、アガルタの主神の一柱として仮想時間千年間の勤務中です。

第1話 十年間の囚神と、素民の少女

> i 2 3 0 9 8 — 2 4 9 6 <

構築士としての任務初日。

私は期待と不安に胸を膨らませ、新品のグレーのスーツに父から卒業の記念にもらったネクタイを締め、桜舞い散る2133年4月1日、厚生労働省に記念すべき初登省。

やー、緊張するなあ。

厚労省とか不釣り合いもいいところ。何で採用試験受かったんだろ。建物も超高層ビルで立派だ、思わずはしゃいで厚生労働省の看板の前で写メで自分撮り。何かすごいお役所に来ちゃったよ、私やっていけるのかな。中にいるの、東大卒とかばっかだろうし。

正直、省内にいる全員がスーパーエリートに見えて緊張したけど、晴れがましい気持ちだったんだ。

登省すると拍手と共に迎えられ、非常に大きな花束を頂戴し、別室に通される。控室の椅子にはぼんと目出し帽とサングラスが置かれてた。何これ、仮装大賞？

新人は余興とか一芸しろって？

厚労省がそんなおちゃらけてていいんだらうか。

私はこれといった一発芸とか持ってないし普通の人は芸しろと言われても無理な話。もっと事前に言ってくれたらハNZのパーティーグッズ売り場でネタ調達してきたのに。

てな感じで焦ってたら、大臣室に普通に通され早くも認証式の運びへ。

大臣室で構築士認証式となるも、大臣の顔が見えにくいことの上ない。私、目出し帽にサングラス姿ですからね。一国の大臣の御前で帽子も取らないなんて不敬もいいところ。でも頭が痛いことに目出し帽にサングラス、スーツ姿の人間は大臣室にあと二人いた。私の他の今年度新規採用者だ、つまり同期。

でも客観的に見れば、アホ三人組だ。

私が赤い目出し帽。あと、白いのと青いのがいる。

白さんはベージュのスーツを着たスタイルのよい若い女性。目出し帽の中に髪の毛がおさまってるので、髪型はショートボブか。私と同様にこの待遇に不満があるらしく、時折口がへの字に曲がったりしてる。ええ、そのお気持ちはよく分かります。

青くんは私より背の高い、すらりとした若者。残念なことに全体的にチャライ。

大臣の前でも構わず終始貧乏ゆすりをしてる。真っ直ぐ立っていられなくて、軟体動物みたいになってる。その態度は社会人としてどうなんだとは思っけれど、私の弟が丁度こんな雰囲気なので、私は冷や汗をかきながらも何となく他人の気がしない。

赤、白、青と三人も目出し帽が揃っちゃだめですよ。

世界一ダサイヒーロー戦隊。何なら世界一ダサイヒーロー戦隊にも失礼なレベル。

そんなふざけた恰好だけど一応ガチガチに緊張しながら大臣から受け取った認証証を見るに、私はアガルタ第二十七管区担当だそう
だ。

白さんは二十八管区、青くんは二十九管区と見えた。

「あなたたちには大いに期待していますよ。私がぜひ入りたくなるような素晴らしい死後世界を創ってくださいね」

形ばかりの激励の言葉を私たちに送り、白髪の老大臣は次のスケジュールをこなすためにSPに連れられて大臣室を出て行った。忙しそうだな。

まあ大臣のことはいいや、目出し帽姿だけど私ら一応同期三人組後でモンジャ焼きでも食べながら親睦を深めることにするよ。すげー今、モンジャ食べたい気分。

白さん、美人っぱいしな。そのマスクの下、どんなだろう……

なんてな妄想をする間もなく、脇に控えていた女性担当官がずいとは張ってブリーフィングを始めた。胸元の名札には、西園とある。彼女は背が低く、黒縁のメガネに髪の毛をおだんごにしてまとめ、切れ長のエキゾチックな瞳。黒スーツで隙がなく気が強そうなのに上目使いで見えてくるのが素敵……女鬼教官の雰囲気たっぷり、キツそうところが私のタイプ。私はキツい年上の女性が好みだ。小さい女性がツンツンしてるって可愛いよね。

「さて、あなた方はこれから仮想死後世界アガルタの構築士として執務していただきます。初日ではありませんが、実地でのトレーニングをすぐに開始いたします。ああ、そうそう」

西園担当官の声が予想以上に芯が強く突き通っていたので、私はニヤリとくる。声も好みだ。

「重要な注意点があります。構築士は任期中、仮想空間中でも絶対に本名を名乗ってはなりません」

そんなのどつか資料に書いてあったっけ？

予め自宅に届いていた構築士の心構えというパンフレットは、付箋をついたりマーカーを引いて読み込んできた。構築士は仮想世界アガルタ内で執務し、基本的に人々の望む天国を創るのが仕事だ。クリエイティブで独創力を必要とする仕事だけど、その分死後世界の人々に喜ばれるしやり甲斐がある。新任の私たちはベータ版の仮想世界開発を期待されている。構築士の任期はわずか十年。十年目が定年退職だ。

構築士の年収は、現代日本の平均年収のおよそ百倍。

年収四億。それを十年で四十億！ 金に目がくらんで、数万〜数十万倍という大変な競争率になるわけだ。任期が短く年収が高い理由は、キツくてブラックな仕事だからなんだろうけど、稼ぎがいいので大抵のことには耐えるつもりだ。

そのパンフによると、構築士にはいくつか厳しい遵守事項があるらしい。

一番キツイと思ったのは、構築士は独身寮に住まい、家族や恋人、友人など外部とは完全に十年間、連絡を絶たなければならないこと。肉親の訃報があっても休めない。まあ神奈川に住み農家を営む両親はすこぶる元気だし、大阪の弟にも事情を説明してきた。聊か無責任な気もするが、両親にもしものことがあれば弟が面倒を見てくれる。

そのかわり十年後、稼いだ金は両親と弟にたんまりと仕送りする予定。

本名も名乗れないのか。頭に叩き込んでおこう。

ということは、同期三人組で自己紹介も電話番号の交換もできないじゃない。

もんじゃ焼きの会、終了のお知らせ。

「何故だか分かりますか、赤井さん」

赤井さん？ ああ、私が赤い帽子かぶってるからか。控室に白い目出し帽が置いてあったら白井さんしらいになっただけに違いない。もういいよ好きに呼んでくれ。

「いえ、存じません」

「構築士は命を狙われるのです。そこで今年度より絶対に構築士の身元を明かさないうことになりました」

年収が多いから犯罪に巻き込まれるのか、他の理由があるのか……。

「なので定年退職までご自宅には一日も帰れません。十年間、外部とは電話一本、手紙のやりとりもできず、連絡はとれなくなります。寮と職場に缶詰で誰にも連絡もとらず十年！？」

それって人権法的に大丈夫なの！？ そういう無茶な条件の承諾も込みこみで四十億なのか。あつげにとられたけど、もういいか。耐えるしかない。家族には事情話してきたし、友達も分かってくれてる。

「い、命を狙われるのですか？」

白井さんの喉がゴクリと生唾を飲んだのが見えた。

白井さんの質問には答えず、西園さんは話を続ける。

「では始めましょう。……構築士はアガルタ内部で構築士とは呼ばれません。死者たちはあなた方のことを神様だと認識します」

ぞーっと血の気がひいてゆく音が、私の背部から聞こえた気がする。

何でだろう。日本人には有難い響きなのに途方もなく嫌な予感がある。

「あなた方は一つずつの仮想世界を築く神様となり、死後世界の神様となった構築士は仮想世界から十年間現実世界に出られません」

……今何て言った？

驚いているのは私だけではない筈だ。職場と寮との往復ですらなくて！？ 一日も休みもなく！？ 公務員というからには、九時から五時の生活かと思つてました。仮想世界で精神だけで十年も生きるんですか！？ 肉体はどうなるんですか！？

「なつ！ 聞いてねえぞ！」

驚いた青さんが暴れだすと、西園さんが顎をしゃくる。屈強そうな黒スーツの男たちに囲まれ、私たちは必死に抵抗しようとしたが乱暴に鎮静剤を打たれ意識を手放した。私ら、どこ連れて行かれるの？

「最終選抜を勝ち残つたあなた方には、飛びぬけた素養があります。心からやりたかつた仕事でしょう？ では存分にあなたがたの民を幸福にしてあげてください」

現実世界で意識があつたのはそこまで。

真っ暗な装置の中で体中に電極をつけられ、意識と肉体が引き離され、喚いても許してもらえず、猛烈な吐き気と浮遊感を味わう。

さよなら、人間の私。

さよなら、慣れ親しんだ東京の街。

十年後、必ず生きて戻ってくる。

*

【アガルタ第二十七管区 第1日目 居住者10名 信頼率0%】

仮想死後世界アガルタ第二十七管区と思われる場所で私は一人、意識を取り戻した。

……寒い。

私は現実世界で薬を打たれ、意識を飛ばしここに来たんだっけ。肉体と心を引き剥がされたにも関わらず、まだ先ほどの吐き気を引き摺っている。五感はリアルだ。生きているときと何も変わらない。

私の体を大きな雨粒がしたたかに打ち、水滴は体を被覆しながら伝い落ちる。その不快な感触は現実世界のそれと遜色ない。本当にヴァーチャルなんだろうか。俄かには信じがたい。

震える身に鞭打ち腕をついて首をもたげ天を仰ぐ。襲ってくる恐怖とあたり一面の暗闇に、私が溶け込んでゆきそうだった。

夜の雨……宙からとめどなく落ち降りしきる雨は恐怖をかきたてる。

私は宇宙と繋がっている証を求める。現実世界にいた頃は社会人天文サークルに所属し、愛用のスコップ越しに夜空の星を見上げるのが好きだった。東京の夜空は明る過ぎて星が見えず、今度は暗すぎて不安になる。私は無神経に雨を撒き散らすこの夜空が、私の大好きだった宇宙と繋がっていないであろうことに怯えた。

ここが職場。

甲種一級構築士として十年間を生きる場なのか。

現実世界の私の身体はどうなる。十年間、彼は植物状態だ。戻ったら筋力衰えて歩けなくなってるかも。目も見えるんだろうか。人生棒にふったのかな。

そう思うと、やるせ無くなった。

雨脚がいつそう強まる。スコールのような降り方で、気候は亜熱帯かもしれない。私は雨よけもなく全身ずぶ濡れになりながら、見渡す限りに広がる雨夜の草原にいた。

土があり、植物が豊かに生い茂り天があり雨が降る。私が手を加えないうちに、世界の土台は既に出来上がっているかに見えた。

『私は一体、何をすればいいんだろう』

天地開闢あたりからやらないといけないのかと思っていたが、私達は地球人だからここまででは設定してくれてるのか。

『誰かいませんか』

呼べど叫べどいませんでした。あてもなく歩くと手頃で狭い洞窟を見つけたので、その夜は濡れた服のまま震えながら泥のようになつて寝た。

翌朝、雨はあがり洞窟の外に出ると新緑が眩しい。私は怪訝な顔で太陽と思しき天体を見上げると、現実世界でのそれと同じように熱をもって照りつけてくる。空には東京では見られないようなコバルトブルーの清澄な大気、ぼかぼかと雲が浮かび風が渡っていた。

……のどかだ。私が管轄するエリア、意外と広そうだ。

草原の向こう、うーんと遠くに海か湖らしき水面がきらきらと反射して見えたので、注意深く水平線に目を凝らす。あれ……おかしくない？

『な、なんだってー』

水平線はカーブしておらず、平坦だ。しかも、遠くにある小島まではつきり見える。いや、嘘だろ、だって地球なら水平線の向こうに島の一部が沈んで見えるはず。地球上で人間の視点から水平線までの距離を計算すると、観測者から僅か5 km未満の距離にあるって計算になる。

てことは平坦？ 丸みがないのか？ この世界では万有引力の法則とか物理学どうなってるの？ 宇宙の平坦性問題だとか宇宙の曲率（オメガ）が1だっていう前に大地の曲率が1だって話だよ、物理学がしょっぱな出鼻くじかれちゃってる。物理学法則通用しないとか勘弁してよ。

苛立ち紛れにばりばりと髪をかくと、爪の間に毛が何本か挟まった。何気なくとって見ると、

『赤っ！』

赤かった。何だろう、真っ赤じゃない、よく言えばワインレッド。髪の毛の長さは十五センチくらい。長すぎだ、目にかかるし散髪したい。これって現実世界の目だし帽の色そのままの色だ、恥ずかしいなあ。

今頃白井さんと青井さんも変な色にカラーリングにされて突っ込みを入れているかもしれない。元気があればいいけど、あの二人どうなったかな。

白井さん、女性だし寂しさも私どころではないだろう。

初日から孤独に耐えかねて泣いてないか。

一応、まつ毛も眉毛も抜いてみたけど全部髪の毛と同じ赤だった。鏡がないから手で顔をまさぐると、以前の私とは似ても似つかない容貌になっている気がする。彫の深さとか鼻の高さ、外国人みたい。赤毛の外人か……なんてこった。全然私の好みじゃない。

アバターにしても、全然似てくない？

そっか思い出した。

そうだった、構築士は本名も顔も覚えられてはいけないんだ。

これが世を忍ぶ仮の姿、それがこの浮世離れた姿。私は裾の長い白いワンピースを着ていた。ワンピースってか、古代人みたいな服。肩には一枚、長いストール巻いてる。これも白い。股下はスカートも同然なので、足がすーすーする。しかも裾はぞろっぞろ。裾を引き摺って歩くので、草原を歩くには邪魔。

不満は色々あれど暫くは真面目に歩き続け、草原を抜けるために必要な距離の途方もなさに失望し、飛べないかと考え始めた。それ系のチートができないと困る。

構築士は神様と呼ばれるってことは、空を飛べるし地形を変えるような力だっけって持っている筈。

ただ、困ったことにその秘められし力の出し方がわからない。カーンフーみたいな構えをしたり、シャドーボクシングしたり軽くその場でジャンプして奮闘すること数十分ぐらい。客観的にはすげー滑稽だろうけど、誰もいないから恥ずかしくもない。

私は昔から、家電を買っても説明書を読まずに使いはじめる癖があった。

パンフによると、アガルタでチュートリアルを確認できる機能があったんだよな。

チュートリアルは指先で長方形を書けばどこでもウィンドウになって現れるんだ。

私が指先で空に大き目の長方形を書き四辺を閉じると、ぼつと指先に沿って青い軌跡が宙に浮かび、宙をくりぬくように白いパネルになった。

『おおつ！ 出た！』

ちよいと触れるとページをスクロールすることができた。色々書いてあるな。

その一、構築士は万能かつ絶大なる力を持つが、自らの為に力は使えない

その二、アガルタ住民が構築士を信頼した場合に限り力が揮える

その三、構築士はアガルタ内では死なず、老いない

その四、民が苦痛を感じれば、構築士は一人あたり三倍の苦痛を感応する

その後もずらりと書いてあったけど。

私はアガルタ内でチートなのかと思っていたら、滅相もなかった。

住民がいて私に願わないと最強無敵の力が使えないみたいだ。構築士の独善や独裁を許さないってことか。それにその四の、住民の苦痛が私に三倍になって跳ね返るってどういうことだ。真に住民の為になるサービスを提供しろって話か。

まさに公僕。何なら国家公務員内でも最低ランクの公僕だぞ。

最大多幸のユートピアを創るなんて仕事は政治家の卵みたいな人

にうつってつけかもしれない。法律を考えるのだって向いてるだろうし、折衝にも長けてそうだ。

私はといえば地方国立大学、理学部生物学科出身。政治経済国際関係、交渉術、話術、まとめて一切苦手分野。学生時代、遊ばずもつと文系分野も勉強しとけばよかったと悔やむも後の祭り。

しかし清々しいほどに誰もいないな。大草原の小さな赤井だよ。途方にくれていると背後からガサゴソ音が聞こえてきた。

おや、草原をかきわけ、向こうから人が近づいてくる。子供だ。人恋しくなつてたところ……って

……え、全裸？

草原の下草の背丈が高いのでよく分からなかったが、彼女は一糸纏わぬ状態だった。私は視線をそらし、かあつと顔が熱くなって思わず赤面する。彼女は日本人のような顔つきをしている。小学生くらいの黒髪の女の子だ、にぱつと笑ってかわいらしくあどけない。

ところが草原に私と少女。そして少女は全裸。どうしたものか。彼女は私を見ると屈託なく朗らかに笑い、ちぎれんばかりに手を振ってきた。

「おにいちゃんだれー？」

声がいやに明るい。彼女は全裸であることを、気にもしていなかった。日本人顔だから私が恥ずかしく思うだけで、裸族なのか。私は一にも二もなく、私のワンピースの上から羽織っていた上着を彼女の肩に着せかける。

『はじめまして。これ、着てくれる？』

「なあに、これ。いいよいらないよ。おにいちゃん、そんなことよ
りからだかひかかってるよ！。きれーだねー、それどうやってやるの
ー？」

へーそうなんだ、私には見えなくても私って光って見えるんだ。
神々しい感じになっちゃってるのか。ところであなたは知らないか
もしれませんが、これは服という人間の最低限文化的な生活を保障
するものです。

ぜひとも着てください。

そういえば、素民^{そみん}というデフォルトの住民が最初からいるって、
パンフに書いてあつたっけ。私の管区はまだ開発段階なので、基本
的に外部からの入居者はおらずこの素民は入居者ではない、先住民
だ。彼女は興味を示したが、必要ないと思っっているらしく服を着て
くれない。

名前を聞くと、少女はメグといった。日本人らしい名前だ。

メグの状態は素体、つまり素民のデフォルトの状態。

メグに服を着せてあげると、メグはえへへ、と俯いて照れていた。
かわいい。

メグが素民の集落に私を連れて行きたいということで、私は慌てて
首を横に振った。最初に出会ったのが少女のメグだったからよかつ
たものの集落には成人男性、成人女性の全裸の素民がわらわらと暮
らしているに違いない。何とはなしに、私はふと股間に手をやる。
別に変態じゃないよ、男だったら普通です股間に手がいくのは。

ない。

あれがなくなってる！

……そうか。神様が煩惱まみれじゃだめだよね。私にも人並みの性欲はあったけど、天国建築に性欲は邪魔になるということとで肉体的な快楽は奪われたみたいだ。

私は万能の力を以て彼らに無償の愛と恵みを与え続け、彼らの苦痛を引き受けるだけ。

神として生きることの重みが、仮想の身体に辛くのしかかる。もっと、現実世界で人を愛しておけばよかったと思った。

生きてここを出たなら、私は三十二歳。

そのときは少しだけ、人の心の痛みがわかる優しい人間に成長しているといいな。

「この、ふくつてやつ……とてもあったかい」

メグがほっこりため息をついてそう言ったので、私は急に彼女がいとしくなつて頭を撫でる。メグは私にじゃれつくように抱きついてきた。私は以前より腕力がついているみたいだ、彼女の体を軽々と抱き上げる。

『メグさん、この服をあなたたちのお父さんとお母さんたちにも着せてあげたいですか？』

「うん、きせてあげたい！」

メグはきやつきやと嬉しそう。

よし今だ、と私は力任せに念じた。彼女は今、神である私に願ったんだ。ルールによると、彼女が願った今なら住民のニーズにこたえるというかたちで構築士としての力が使えるはず！

何でもいいから男女兼用の服、綿素材でいい！ 五十着ぐらい出てきてくれー！

祈るような気持ちで私は手を前に突き出し、力を込める。どんな

決めポーズで力が発揮できるかなんて知ったこつちやない。肝心なのは多分気分とノリだ。

メグが生唾をのみ静まり返った。

オーバリーアクションのわりに、期待していた服は出ない。代わりに私の手の上に載っていたのは、五十粒ぐらいの種子。

オーダー、微妙に違うよねこれ。

なにこれ綿の種ってこと？ 種から作るの？

木綿、たしか栽培するのに二カ月かかります？

「それ、なあに？」

メグが私の手の中を覗き込んで綿の種を見た。どうやら今の私は住民から受ける信頼の力が弱すぎて、この程度の力の行使が限度らしい。望んだ現物ではなく材料が出てくる。お呼びじゃねーよ、私は服を呼んだのに種はお呼びじゃねーの。って言っても種は私の手の中でコロコロと転がるばかり。

『これは種子ですね。メグさん、もう一度私にお願いしてくれませんか。服をみんなに着せてあげたいと』

「きせてあげたいー！ー！」

綿栽培より手っ取り早く服のできる素材と叫びたら何だ。蚕か。

蚕、千匹ぐらいカモン！

そう念じても、私の手の上にはうにょうにょと二匹の蚕がいただけだった。だめだこりゃ。

もっと力をつけるには住民たちから信頼される人間になるしかないってことか。

私は仕方なく居心地の悪い洞窟で寝起きをはじめ、小さな畑を素手で耕しせつせと綿花の栽培にはげんだ。この身は疲れを知らず、空腹にもならない。しかし私が神様だというなら、この地道な努力は何だ。創世期の神様って大変なんだな、歴代神様たちの苦勞が偲ばれる。

「メグだよ！ またきたよ！」

メグは私を慕って毎日会いに来るようになった。集落の人々から服を羨ましがられたと言っていた。彼らは衣服を欲しがっている。彼らの為に衣服を拵え、少しずつ信賴される人間になろう。

「えへへ、これおみやげ」

メグが差し入れをしてくれる未知の果実の種を採取して、畑に植え手をかけてやると数日で芽を出したので、果樹園をつくろうと思う。安定した作物供給が素民たちとのコミュニケーションの第一歩だ。作物が実り始めると、メグに素民たちへの土産として持たせた。彼女はとても喜んでくれた。私も嬉しい。

まだ見ぬ集落の住民は農作も狩猟も知らないらしい。彼らは主に道具も使わず採集を行っている。そして第二十七管区の素民人口は僅かに十名だと判明した。あまりに少ない。

管区住民が絶滅となると、構築士は最初から世界の構築をやりなおし。つまり十年という年限がりセットされる。それだけは絶対に避けたい。この凶神生活を一刻も早く、最良の結果で終わらせたいんだ。

それにしても、現実世界とアガルタの世界の時間の流れは違うんだろうか。

私はチュートリアルの上画面に刻まれた現実世界への帰還までの日数を数えるカウントダウンクロックの桁が、十年にしては多すぎ

ぎることに気付いていた。

千年だよ。千年ってどうすんの。途方もないよ。

私は千年かけて現実世界とは全く異なる独創的な死後世界のベータ版を構築しなければならなかった。だとすれば私は素民たちが知らない万物の理、自然科学を知っている。バイオテクノロジーも専攻してきた、最低限の生体現象に対する知識はあるし遺伝子だって扱える。

それだけが私の取り柄だ。……それだけか。

「あかいかみさま、はやくみんなにあつてね。みんなまつてるんだから。本当にまつているんだよ」

必死にそう言うメグには、何か悩み事でもあるのかな。理由を聞いても、とにかく皆に会わせたいの一点張り。まーまー、ちよつと待とうよ、まだこの先長いんだし急いで事は仕損じるよ。ここまです待ったんだから、準備は完璧にしてから行くよ。

そして今、私はささやかな後悔をしている。

千年モンジャ食べられないなら昨日、食べときゃよかったかな、と。

第2話 赤い赤井さんと十人の素民

【アガルタ第二十七管区 第61日目 居住者10名 信頼率10%】

ついにその日がやってくる。

明日は私が手塩にかけて育てた綿花の収穫の日だ。

あれからもう、二ヶ月がたったのか……色々あったが感無量だよ。摩擦熱で火を起こし草を灰にして土壌を中和し、素手で畑の土を耕し、綿花の種をまき、日差しが強ければ日陰を作り、洞窟の水を手で掬い水やりを欠かさず、花がついたのを喜び、実がはじけるのを待った。コットンボールがかわいらしく実をつけている。やっとここまで辿り着いたんだ。

『やっとここまでできた。嬉しいなあ……』

私は綿花を栽培している間、養蚕にも精を出していた。

二匹の蚕をこれでもかと甘やかして育てた。甘やかしすぎだよ、どこの世界にこんなに太った蚕がいるんだよ。蚕としてB M Iやばいんじゃないかと思う。

そんな丸々と太った彼らに小さな個室を与えると、小さな口から糸を出して自分用の衣を纏い、カイ子とコウ太（命名、赤井）はめでたく繭をつくった。本来の絹糸の作り方はここでカイコ丸ごと熱湯で茹でて絹糸をとるけど、私は彼らが気の毒でできなかつた。

そうこうしてるうちに二匹は純白の立派なカイコガとなり、彼らが羽化する時にプロテアーゼで大事な繭をとかしてしまったおかげで、絹としての質が落ち真綿になった。

カイ子とコウ太は羽化すると交尾し500粒ほどの貴重な卵を残してくれ、十日後にその生涯を終えた。愛着がわきすぎて思わず小さな墓をつくったよ、何やってんだ私。彼らの子を第二世代として私はまだ養蚕を続けている。蚕は人間に飼われるために進化し、野生では一日とて生きていけない、だから絶対に野生に返しちゃダメ。一日も経たず速攻死ぬよマジで。芋虫みたいな形してるけど木も登れねーし脆弱なんだ。

メグも手伝ってくれた。メグは私の仕事に興味を示して何でも真似しようとする。メグかわいいよメグ。私は僅かばかりの真綿を覚束ない手つきで縫って紡いで、手編みで生地にする。もう温かければ縫い目が少々変でも気にしない。二匹の蚕からとれた絹糸では一人分の貫頭衣の上半分も作れなかった。古来より絹糸が高級品だったわけだと納得する。

というわけで、大量に収穫の見込める綿花に期待を寄せた。

そうやって綿花栽培と養蚕をしているうち、ふと縄文人の方々の衣装を思い出した。布じゃなくても服作れるじゃん。

彼ら、そういえば動物の毛皮を着ていなかったっけ。手っ取り早く、今から奴らの身ぐるみはぎにいこう！ とテンションが上がったけど、メグはこの世界には毛皮のある大きな獣はいないんだよという。

ゾウとかカバとか、爬虫類とか、それ系の獣しかいないってこと？ 猫的なモフモフの獣いないの？ あれいないと猫好きは生きていけないレベルだ。どうなの？ って聞いても、いないんだってさ。私は首をかしげた。てか困る。

メグに隠れてチュートリアルを読んで了解した。

その五、構築士はアガルタ内に現代社会の構築を行ってはならない

だ。
二十七管区には現実世界とは異なる完全な異世界を創れってこと

だから現実世界にいる動物、熊だとかサルだとか牛だとか小鳥だとかはいない。私うつかり神通力で蚕を出してしまっただけ、現実世界にいる動物、昆虫を仮想世界に持ちこむことは好ましくないことだった。何故なら、オリジナリティが損なわれるから。

パクリ厳禁ってことね。モフモフした獣に著作権ってあつたっけ。

でも……素民の集落に行ったら、まずは養蚕と綿花栽培、作付の方法を伝えよう。余計なお世話かもしれないけど、最低限の人間的で文化的な暮らしだけはさせてあげよう。そんな思いでいっぱい、私は衣服のことに固執していた。私だけ白い神様服着てるの申し訳ないし。

メグは私を日に日に信頼してくれるようになって、私の力も呼応するように僅かずつ強くなっていった。とはいえ子供一人が私に寄せる信頼の力に支えられた奇跡は、素手で弱い火を起こせるようになった程度。私の瞳は、やっぱり赤井、じゃなくて赤いらしい。炎の色だって、メグは言うてくれる。照れくさいな。厨二病もここにきわまれり。

メグは火を知らなかったようで、燃え盛る炎を見て随分怖がっていた。
火を知らないって……さすがにどうかと思う。

ネアンデルタール人あたりでも知ってたのに……。まだ火を扱うには幼い気もしたけど、メグに火打石での火の使い方をお教えた

んだ。そして食べ物にはできるだけ火を通すように、と強調した。火は夜を明るくするだけでなく獣を追い払い、あなたたちの安全を確保する便利なものですよ、と必死に教えたよ。敬語でね。

メグは嬉しそうに小さな火打石を集落に持って帰ったけど、翌日には母様かかさまに捨てられたと言って戻ってきた。

『そうですか、捨てられましたか。便利なのに……』

火を扱うことは人間が人間であるための最低限の知識であり人である証なんだ。私はがっくりきた。彼らには手とり足とり、教育が必要だ。彼女は肩を落とした私に、遂に本音をぶつけた。

「あかいかみさま、どうして、ととさまたちに会ってくれないの。どうして」

メグ、必死な口調。思いつめたような……。どうしたんだ、メグ。どうしてって……まず服を準備しないと。手ぶらで会うわけにいかないよ。それに私は彼らに一刻も早く衣類を纏ってもらいたかった。防寒ができ、体温の維持が容易となる。二十七管区の気候は移ろいやすい。日照時間と日時計の記録をつけていて分かったけど、亜熱帯性で乾季と雨季がありそうだ。嵐だっってくるんだろう。

「ととさまたち、あかいかみさまなんていないんだって笑うの、おかしなことをいう子だって」

メグは悔しそう。私は私が存在していることを彼女に伝えるために、メグを軽く抱擁する。軽くね、軽く。ぎゅつとやったら驚くから。メグをハグだ。語呂がいいな。これは神だけが行える”祝福”という特別な行為。やってることは単なるハグ。で、簡単にいうと祝福を与えられた人が癒される。精神的にも、肉体的にもね。メグ

が幸せになりますようにってやつ。祝福はキリスト教なんかでは普通しょ？ あれを私たち構築士はハグでやる。

あと、抱擁することでメグが私に神通力を行使するための力をくれる。信頼の力って、心地よくて温かいんだ。

さらにメグ、小さくて柔らかくてかわいいの。そんなのがすり寄って甘えてくるともう辛抱たまらんってか溺愛。だからどんなお願いでもきいてあげたくなる。メグが悲しそうだと、こっちまで悲しくなるよ。彼女もすぐ会ってと言うし、会いに行こう。

『近いうちに、必ず会いに行きますよ』

そのつもりだった。彼女の名誉を挽回しなければ。

楽しみにしていた綿花の収穫日の前日、大事件がおき、

そしてその事件が起こって初めて、私は彼らに頑なに会わなかったことが彼らの命を脅かす致命的な間違いであったと知った。

夜中、洞窟で休んでいた私を猛烈な痛みが襲う。腹が猛烈に痛む。けれど構築士は不死身で病むことのない身の上だ。もしかして誰かさんの三倍の苦痛を受けているんだ。医療の発達していない未開の地で、腹痛。コレラや赤痢だったらどうすればいいんだ……。痛い……。くそ、痛いなんて生やさしいもんじゃない。下したりなどはないが、耐えられない。意識がちぎれ飛びそう。現実世界ではコンピニで万能薬が買える時代だったのに。

私は二十二歳の今日という日まで、これ以上の苦痛なんて知らなかった。

とてつもなく嫌な予感がする、伝染病などが起こった場合。集落の人間はいとも簡単に絶滅する。誰だよ、火打石捨てちゃったの。

かかさまかよ。火を通して何でも食べてくれよ、頼むから。

私、赤井はここにきて腹痛にたえかね、遂に人々と接触しようと思った。今更のように、メグの言葉を思い出す。彼女は早く会ってと言っていた。彼らは助けを必要としていたんだ。私は何故そのことに気付かなかった……。

もう彼らが全裸でもなんでも、服の準備が間に合わなくても構わない。夜があけたら痛む腹を抱えながら、這ってでも全裸の彼らに会いに行こう。

非常事態だ。

腹痛に苦しんでいる誰かさんを癒さなければ。

でも私に癒しの力なんてあるんだろうか。この際何でもいい、考えている余裕なんてない。

とてつもなく長く感じた怖ろしい夜があけ、息を切らせたメグが私の名を呼んで洞窟に入ってきた。私は洞窟の中を、くの字になってのたうつていたところだった。私の容体も誰かさんの容体も段階的に悪化の一途をたどっていた。

「あかいかみさま！ あにさまをたすけて！ あにさまが死んじゃう！」

メグは泣きじゃくってる。昨日の夜半から、メグの兄が腹痛に襲われ熱で顔を真っ赤にしているんだと。衰弱激しく、意識も朦朧としている。未開の地での病気は死に直結する。

『い……行きましょう、彼のところに』

私は前かがみになりメグに寄り添うようにして、途方もなく続く草原を歩み始めた。何なんだよこの理不尽なルール。何で誰かさん

の三倍だか三乗だかの苦痛を引き受けなければならぬんだ。肝心なときに動けなくなるじゃない。

私は職場環境と西園さんを呪いながら、だらだらといやな汗を流し歩む。案の定、歩行姿勢すら保てなくて何度となく草原に倒れ、起き上がれない。彼女の兄の痛みは限界に達している。私の体が直に痛むわけではないけど、感応する誰かさんの痛み……もう耐えられない、私も限界だ。

「たつて、あるいて！ あにさまをたすけてえ……どうしてすぐころぶの」

彼女は冷静さを欠いて喚き散らす、いつもの彼女らしくない。ごめんねメグ。不甲斐ないな、私はもう歩けないかもしれない……。申し訳なく思いながら再三、再四と崩れ落ちると、メグが絶望したような顔で私の肩を揺さぶる。私は彼女に、構築士の苦痛感応ルールを話していなかった。

『メグさん、ごめんなさい。私はもう力が出ません』

「どうして！ メグは心のそこからかみさまにいのってるよ！ あにさまを助けてほしいって」

うん、それは痛いほどよくわかる。てかもう痛いなんてもんじゃない。

彼女の温かな信頼の力が私の体に流れてくる。それはとても嬉しいし君の信頼の力に私も応えたい。でもこの痛みをやり過ぎすは、君の願いだけじゃ足りないかもしれない。

「どうしてたすけてくれないの！」

……！？

あれ、メグから与えられていた力が消えたぞ。いつも彼女が私にくれていたあの力……。

私、もしかしてきみの信用を失ったの？ 不甲斐ない私に失望して見放した？

「……………ひどいよ」

『誰かを連れてきて、もっと強く私に願ってください』

遺言のように言い残して果てそうになると、霞む視界の中でメグが泣きながら集落に走っていったのを見届けた。あの顔……忘れられない。彼女を深く傷つけてしまった……。

悔やんでも悔やみきれない。完全な失敗だった。

構築士は片時も民の傍を離れてはいけなかったんだ。メグが連れてくる民が、見ず知らずの私を信頼してくれるだろうか。そして再び、メグは私を信じてくれるだろうか。

……………無理かもしれない。

*

【アガルタ第二十七管区 第62日目 居住者9名 信頼率0%】

私の体から苦痛が消え、草原の真ん中で意識を取り戻した。

メグが去って数時間後……………。

震える手でインフォメーションボードを宙に描き確認すると、居住者が一人減っていた。

メグ……君のあにさまが亡くなったのか。

同時に信頼率が0%に変化している。

この世界でたった一人だけ私を強く信頼してくれていた大切なメグに、見放されたと思い知った。

今やアガルタ第二十七管区の世界で、信頼の力は誰からも流れてこない。

つまりアガルタの神の力の源が、民からの信仰ではなく信頼の力であることの意味を、私はようやく理解しつつあった。神と人が信頼関係を築き上げるためには、相互に対等で尚且つ神が彼らに尽くなければならぬんだ。

昨日まで簡単に起こせていた火も、起こせなくなった。

代替できる火打ち石はまだある。洞窟で一人隠れて暮らす私は素民たちに必要ない存在なんだ、だから力が使えない。彼らの信頼を取り戻さなければ。行こう。彼らに罵倒され黜られたとしても、私は彼らの傍に行こう。今度こそ彼らの傍にいて彼らを守り続けよう。

私はへこたれていた気持ちを奮い立たせた。道は一つしかない。

その日、やはりと思い直して荷物を準備することにした。メグと収穫するのを楽しみにしていた綿花を寂しい気持ちで摘みとった。

綿を天日で乾かし、温かで清潔な手編みの衣を徹夜で十着仕立てる。翌日、拵えたばかりの紐で縛り肩に担ぐ。何で私がここまで農業できるかってと、実家の両親や祖母が私に農家を継がせようと仕込んでくれたおかげ。実家は無農薬野菜農園。私は若いが、農業者としてはベテランの部類に入る。

そんな経験あって、どんな作物も枯らさずに育てることができた。この仮想世界においても。

余った綿糸でネット状の手提げ袋を編み、中にメグの種から栽培し収穫した桃色の甘い果実をみっちり詰め込んだ。メグも家族も泣き疲れてお腹をすかしているだろうから、これでも手土産のつもり。喜んでくれるといいな。

私が世話をやかないと死んでしまう蚕たちの箱だけは持って予備のクワつばい葉も用意して洞窟を出た。

さあ、行こう。

行って心からメグの兄を弔い、かけがえのない九人の素民たちに受け入れてもらおう。

最初からそうすべきだったんだ。

素民の集落の場所は分かっていた。水平線の平坦な、湖のほとりの岩陰。

人の歩く速さは凡そ平均時速四キロ〜六キロ。私は重い荷物もあったので、四キロメートル程度で歩き続けようやく着いた。宙に出現させたインフォメーションボードで時間を確認すると一時間。例の洞窟との距離は四キロメートルか。インフォメーションボードにより時間だけは分かるので、距離ははかれそう。大人の足で一時間……メグはもつと時間がかかっている。

メグは毎日、小さな足でよくこんな遠くまで歩いて通ってくれたもんだ。

ありがとう、メグ。私は彼女の笑顔が脳裏に浮かび、ほろりときた。

何で私はこれまで一度も、その事に思いを巡らせなかったんだろう。

この岩陰に素民たちがいる。私は覚悟を決めて岩陰を覗き込み、彼らの前に大荷物のまま飛び出した。公然猥褻だって何だっていい

から、まずは挨拶！

『はじめまして、こんにちは！』

気持ちのいい挨拶は社会人、いえ社会神しゃかいじんの基本！

明るくとはいかないけれど、誠意を込めて挨拶をした。岩陰に潜んでいた彼らは円陣になって、途方にくれたように肩を落し座っていた。岩場のゴツゴツした地肌。直射日光は防げ、そこそこきれいな水もある。ここが彼らの住処。住居ですらないので野外活動中か。九人の内訳は大人が五（男三人、女二人）、子供が三人（メグも含む女の子二人、男の子一人）、赤ちゃん一人だ。

で、私は唾然とした。子供たちは全裸だが大人たちは胸や下半身を部分的に隠してる。枯れ草を編んで。そっぴや草原があつて、草は豊富にあつたんだよね。何で服なんか拘つてたんだろ。二カ月間で養蚕とか綿花栽培以外にもつとすることは他にあつただろ私。どうしようもない馬鹿だよ私。

メグは今更のように現れた私に驚いたようだった、申し訳ない気持ちでじつと見つめ返すと、……目にクマができてるし腫れてる。まだ子供なのに。

昨日は泣き腫らしたのかな。

『私はアカイといいます。あなた方を守るために来ました』

彼らが私に話しかけてこようとしないので、不審者の私が先に自己紹介をする。偽名なんだけど。

『これからずっと、あなたたちの傍にいます』

自らに課す誓いのように私が宣言したとき……
痛っ。

だれかが石を投げた。それが私の頬にしたたかにぶつかる。血は出ないけど、目に入ってたらず失明したかも。

あつ……。

投げたのはメグだ。

メグは唇をぎゅっと結ぶと、もう一度私に石を投げた。本気だ。

さらにもう一度。メグに力いっぱい石ころを投げられた。ポロポロと、メグの大きな瞳から透明な涙がこぼれおちた。彼女の顔は私に見せていたあどけない子供のそれではなく、最愛の兄を失った妹の顔だったんだ。私はメグの悲しみとかつてない怒りに触れショックを受け、礫をよけもせず黙して受け止める。子供が投げる石ころだから我慢できない痛さじゃない。もつと痛いのは心だ。

メグ。

君の力はもう、私には流れてこない。私にずっと与えてくれた君の優しい感情、私がこの世界で一人ではないと信じさせてくれていたそれとは真反対のもの。君の憎しみが私に突き刺さるよ。今度こそ、私はこの世界で完全に一人ぼっちだな。

私はたまらなくなつてメグに顔を背け、俯きながら準備してきた手土産をその場に並べる。私はこれを準備するために二カ月も彼らに会わなかったんだ。こんなものがメグの兄の命より、大切だったんだろうか。本当に愚かだった。

たった九人しかいない、大切な私の民。何より大切なのは衣なんかじゃなく、彼ら自身だった。でも折角作ったから出すよ。メグの神経を逆撫でに思うけど。

『これはあなたがたの衣です。温かな衣を纏ってください。寒さをしのげます。そしてこれはあなたたちのお口に合うかと思いついてきた果実です、召しあがってください』

大好物の瑞々しい果実たちを見て、二人の子供たちの目は輝き、よだれを拭う。

ひとり、メグを除いて。

「ちがづかないでくれ」

ととさまと思しき人物がすつと立ち上がり、私にそう言った。彼は髭をたくわえた、かなりのワイルドな顔立ち。栄養状態が悪いのか、背は私より随分低い。百六十センチちよつとかな。原始時代の人は結婚も早いんだろうから、結構老けて見えるけど私と同じ年ぐらいじゃなかるうか。過酷な環境で必死に生きる、彼らの身を慮った。

『いいえ、私はここにいます』

私も譲らない。彼らのもとを離れるつもりはない。

私の民を見捨てはしない。できることはたくさんある。

「あかいかみ、お前は私たちを不幸にする。むすこが死んだのはあなたのせいだ！」

ととさまは息子を失った苦しみと憎しみを私にぶつけてくる。

もっと早く彼らに接触して、栄養状態をよくして彼らの健康に目を光らせておけば、あにさま（仮名）は死ななくてすんだかもしれない。というか、死なずに済んだ。

「でていけー！」

それでも去らない私にととさまが掴みかかってきたので、私は避けもせずにととさまに殴られた。

力任せに五、六発、気のすむまで殴られると、さすがに痛んでじんじんと頬が腫れる。

存分にやられた後、私はととさまの目を見据えタン力をきつた。

『だから……だからもう誰も、いえ今後は絶対に一人も死なせません！』

言いきつた。

もはやその気持ちに偽りは無い。

言い放った私の剣幕が凄かったかはいざ知らず。

鏡ないから分かんないけど、私の顔はそれなりに凄みがあるんじゃないかな。彫の深いイケメンなのかなと思ってたけど、彫の深い赤才ニみたい顔してたらどうしょ。いずれ鏡も必要だな、寝癖ついてたら直したい……って、そんな場合じゃない。

ととさま（仮名）は私に、それ以上出ていけとは言わなくなった。その代わり、素民全員から私ガン無視されてますけど。居心地悪いのなんの。で、子供たちはちゃっかり手土産の果物を食べていた。折角あつらえた綿衣は着てくれない。当然か。メグは私に視線を向けようともしないし。

皆にとって空气的存在でも君たちの傍にいられるなら、もうそれでいいよ。

彼らは円陣でしょんぼり座ってるのに、私はその輪から完全に八づられてる。この状態からハンカチ落としできるけどやる？ とか言える空気じゃない。ととさまに殴られメグに石投げられそう。気

まずいなー。

私は、少し離れたところに無造作に横たえられたあにさま（仮名）の遺体に近付いた。

まだ手をあわせてなかった。

素民たちに、人を弔うという風習はないんだ。

埋葬の習慣も。死んだら野ざらしにして腐るのを待つだけ。惨いとも思わないみたいだ。メグのあにさまはまだ幼い。中学生ほどの体つきをしている。彼は全裸だった。

あにさまの分だった筈の衣を一枚手に取り、肩から下を綿布で覆ってあげる。私の思う、最低限文化的で人間的な弔い方。手を合わせ、心の中で「力及ばずごめんなさい。愚か者でごめんなさい」と詫びた。許してもらえとは思わないけれど、謝罪した。

埋葬してあげよう。

心理的に居た堪れないし、あにさまが感染症を患って死んだ場合、遺体が素民たちの傍にあれば彼らは一瞬で全滅。

埋葬って大切な習慣なんだ……衛生上の面もある。火葬の方が私にとっては手間が省けて衛生的にも最良だけど、自然的ではない弔い方では素民たちの私への反感は強くなりそう。私はどう思われてもいいけど、彼らの心情を大切にしないと。

そのとき、ピローンとどこかでインターホンが鳴ったような音がした。

やけに人工的な音だったので驚いて辺りを見渡すと、おや。あにさまの頭上になんか出てる。

黄色の蛍光で「！」「マークが出てる！

こんなの初めてだよ西園さん！ 西園さんの仕業かどうかわからないけど、私は何かにつけ西園さんのせいにしていた。

跳ね上がりそうになる心を押さえつけ、インフォメーションボードを呼び出した。インフォメーションボードは私以外の素民には見えないらしい。それでも隠れて覗くと、見慣れない項目が出ている。

死亡者ログだ。

で……出たよ。ゴクリと唾を飲む。

緊張しながらタッチすると、解析が始まった。1%、2%、5%……解析中を示すナビゲーションバーの進捗具合が遅すぎたので、先に墓穴を掘りに行くのか。私は少し離れた草原の、柔らかな土壌を選んでリアルな意味で墓穴を掘る。素手で。爪がボロボロだ、腕も痛い、それでも不死身らしいから掘りますよ。手ごろな棒も落ちてないや。ざくざくと素手で掘り進める。無心になって三時間掘った。人間やればできるものだ。一人分埋められそうな穴ができた。屈葬にしてあげよう。

あにさまの遺体のもとに戻ると、メグが肩を落としてあにさまの傍にお供え物を並べていた。お供えものなんて概念が彼女にあるわけないから、蘇って欲しい、食べて元気になって、ってな願望のあらわれ。でも寂しいことにメグが供えていた果実は私が持ってきた果実じゃない、メグが長い道のりを歩いて自分で採集した小ぶりのなけなしのやつ。私の作ったやつの方が大きいよ？

肥料もたっぷりやってたし栄養価も高いんだ……でも言えない。

メグは私があにさまに近づくのを、快く思っていない。私の気配を感じ取るや、あにさまの前に陣取って、近づかせてくれない。けれども私が彼に与えた綿布はそのままの状態。温かいと知っているか

ら……。

私の厚意は、きっと彼女に伝わっている。私に害意がなかったことも。ただ、彼女は悔しかったんだ。成すすべなく死んでいった彼を、神である私が救わなかったから。助けてくれるものだと思っていたのに、信じていたのに裏切られたから。

メグがいるからあにさまに近付くことを諦めて、再度インフォメーションボードを呼び出す。死亡者ログ、解析完了と出ている。よしよし。

犠牲から学べることがある。何て書いてある？ えーと

緑、緑、赤、青、緑、青、赤。……色の、水玉模様！？

解析完了画面は一面、赤と青と緑の、規則的に並んだ小さな水玉模様に覆い尽くされていました。

なにこれ。

普通死因とか出てるんじゃないの！？ 何のための死亡者ログなの！ 水玉模様でどういうこと！？ 私はあらん限りのツッコミを入れているうちに冷静になり……思い出してしまった。

これ、まんま遺伝子発現解析の生データじゃん。

説明しよう！

遺伝子発現解析とは……もう墓穴掘って疲れて気力もないので中略。簡単に言ってしまうと、その人の体で起こった全遺伝子の発現パターン（つまりどの遺伝子が働いているのかってことね）が分かる遺伝子検査方法。学生時代やったもんだよ。病気を患っている人は発現パターンが普通の人と比べて異常がある。比べればすぐわかる

よ。ここには比べるものがありませんけど。健康な人のパターンと比べないと、どこが異常かわかんないじゃん。

まさかこれ以後、素民の死因を知るには毎回遺伝子解析やらされるんですか。幸い、赤と青と緑の生データの横には遺伝子名が書いてある。未開の地、原始時代よりなお酷いこの世界で、私はパソコンもないのに遺伝子解析。

遺伝子つても、人間の遺伝子つてざつと三万とかあるんです。

そんな一個一個の機能全部覚えてるわけないし暗記したことすらない……全部見ても生データなんて解析できるわけない。

あにさまの痛みは、ひどい腹痛だったな……。私はその痛みを、あにさまの三倍強く知っているんだ。私の中で増幅された痛みは、病気を特定するための手がかりになる。そのための三倍ルールなのか？

そんなこんなしてたら、インフォメーションボードの上に最大赤フォントで「緊急！」と出た。怖っ！

【第二十七管区 住民全滅まで 99時間59分59秒】

詰んだ ！？

詰み！？ もうダメ！？ 全員死ぬってことは、どんだけの苦痛が増幅されるの？ 一人あたり三倍っていうと二十七倍だけど、一人増えるごとにどうなるの？

そのあたり、ちゃんと書いてなかったな。倍数じゃなくて乗数だったら死ぬる。私は未知の死病の三の九乗の苦痛とともに住民を亡くし、世界構築も二か月前からやり直し！？

私はもう限界になって神様らしくもない絶叫をあげた。……素民
たちに聞かれてなくてよかったけど、いくら西園さんから監視入っ
ててももう演技とか無理。

西園さん鬼です。

たった九十九時間で力のない私に何ができるっの！

さっきとさまに「絶対誰も死なせません」なんてカッコいいこ
と言ったのに……口先男とはまさにこれ。

西園さん、見てますかこの惨状を。現実世界ではまだ二時間も経
ってないけど。

今頃ランチタイムなんですか？

とにかくやるしかない。

あにさまの病がどんな痛みだったか、二度と思い出したくもない
けど体が覚えている。

腹部を中心に、消化管に沿って広がる感じの痛みだった。私は「
アイドルはうんこしない！」精神なのか、この世界では神様らしく
食事も排便もしないので下痢症状は私の体に反映されていなかった
が、彼は下痢していたかもしれないな。

腹痛で死ぬ病気がこの世界にはあるんだろうか。未知の病原菌だ
ったらもう手がつけられない。

悶々と考えてたら誰かが草原に出てきた。

用便の為に草原に出てきた男の子に私が後ろからそりそりと
近づこうとすると、私の接近に気づいて男の子はダッシュで逃げた。
まだお尻拭いてなかったのに悪いことしたな。私は遠くからあにさ

まが下痢をしていたかその子に聞いてみた。ぼさぼさ頭の茶髪の少年の名は草でお尻を拭きながら、ロイだと言って遠くから叫んだ。

痩せた小さな子で、ちよつと色黒の小学校低学年ぐらい。この子もこの子でかわいいな。申し遅れましたが私、神様になってから子供には見境がありません。男の子も女の子もかわいいよ。前歯が二本ぬけてる。何かすげー愛嬌があるので、死なせたくない。

果実を持参した私に悪い印象は持っていない様子。病気を特定するための手がかりを教えてください。すっげー遠くからだけど。血の混じった激しい下痢をして熱を出していたって……。念のため、お腹が痛くなってないかと聞いてみた。すると彼はお腹が痛いと言った。やべーな……。ロイも感染してるのか。

私は懇ろに礼を言うと、彼の証言をもとに再度ボードを呼び出し、遺伝子発現解析結果に目を通す。

あにさまの熱は腸管炎症性の発熱だったんだ……。下痢もして苦しかっただろうな。出血に、脱水症状。いやあにさまも私も死ぬほど苦しかったんだけど。炎症によって発現する炎症性サイトカイン、インターロイキンなどが軒並み発現してた。

炎症が起こっていない人には現れないマーカーなんだよねこれ。

遺伝子発現解析の生データからは、人以外の遺伝子も同定されていた。何で人以外のあるの……。そりゃ、多少は常在菌とか人の体にはいるもんだけど。多いよ、発現多すぎるよ。

変だ。

エンテロヘモリシンが同定されてら。インチミンもあるじゃん。これは手がかりになる。

それに加え腹痛、発熱、出血性下痢……。

あ！

ちくしょう！ そういうことか！

私は舌打ちした。

VTEC（出血性大腸菌感染）かよ……何で仮想世界にそんな細菌がいるんだよ！

仮想世界だろここ！

私は仮想世界アガルタのディテールの作りこみように呆れた。何でここまでマニアックな病気があるんだ！

昔から人類は、病気と闘い続けることによつて進化を遂げた生き物なんだ。だから仮想世界内でも彼らの進化のために病気が必要。そうですか西園さん？ 現代社会の人間は抵抗力が強いから死なない感染症だ。でも彼らは栄養状態が悪く免疫力が低い。せめて同定できてよかった。未知の病原菌ほど怖いもんじゃない。

でも駄目だ、ロイも言つてたけど、彼らもう感染してる。飲み水が共通の食べ物から感染したんだ。湖の水を直に飲んでたっぽい。

濾過ぐらいすればいいんだけど、そういったことも何も知らないみたいだ。腹の中に何匹か寄生虫も飼ってるかもしれないな。だからせめて火を使って加熱してほしかったのに……。

現実世界みたいに万能薬は無理でも、せめて抗生物質が必要だ。本当にそれだけで何とかなる。現代なら一瞬で解決する病気なんだ。でも抗生物質を調達するすべがないから困ってる。

インフォメーションボードに「緊急！」のアナウンスが出てから、メニュー画面が赤く変化した。ここまで赤に拘ってんのかよ、どんだけ赤なんだよ、もういいよ赤井、じゃなくて赤いのは。

住民全滅、九十九時間前。

まさに緊急事態だ。何か情報は増えてないか、私は必死に画面上

を縦横斜めに目を配る。すると、画面上には小さなボタンで「呼出してやつが出現していた。

これ、押す？
押しちゃう？

核爆発ボタンとかじゃないと分かってたら、私じゃなくても誰でも百パー押すよ。というわけで私はイントロクイズ並みに早押ししましたよ、押すしかない。

すると画面の中に、さらにウィンドウが出現する。これも赤い枠がついてた。

もついいよマジでそういうディテイルはイラつとくるよ。

切り替わった画面の向こうに、こちらを覗く西園さんの顔があった。ぼーっとしてたのか、頬杖などついている。西園さんは髪の毛をおろし、眼鏡に黒スーツ。西園さああん！！二か月ぶり！会いたかったー！ 鬼担当官だけ一瞬で酷い仕打ちを忘れて……私は人恋しくなつて画面に喰らいつく。

西園さんは嫌な顔をしてひょいと身をのけぞらせた。

アップは無理でしたかすみません。つか、私ってあなた好みのイケメングラフィックなんじゃないの？

イケメンじゃないんですか、違いましたかすみません調子に乗りすぎました。

『どうしました、赤井さん。まだ二時間もたっていないですよ』

そりゃ、そっちはやつとランチタイムが終わった頃でしょうよ。でもこちらはランチタイムもなく断食しながら二か月が経過しましたよ！

ランチ何食べてきたんですか？ 私の大好物のもんじゃだったら

ぶつ殺しますよ。それに見りゃわかるっしょ、こちらの住民は早くも全滅しかかっているんですよ！

『赤井さん……あなたコール（呼出）を押しましたね』

コールは「緊急！」画面が出たら使えるらしい。

『あなただけですよ、アガルタに適應できていないのは
え！？』

皆コール使っていないの！？ まさか適應できちゃってるの？

『青井さんと白井さん、適應できてるんですか？ どうやって？』

『詳細を教えることはできません。ですがこれだけは教えて差し上げます。アガルタ第二十八管区 構築士への信賴率は100%、住民は10名、全員健康です』

白井さんのことだ。白井さんすげー！

どうやったの！？ で？ で？ 青井さんは？

『アガルタ第二十九管区。構築士への信賴率は同じく100%、住民は15名。住民の健康はすこぶる良好です』

住民増えてる ……！！

住民が増えてるもんなの！？ 十人じゃなくて？ そうか環境がよければ増えるのか。

青井さん、まさか超優秀！ 敬語もできてない、社会人としてもどうかってなチャラチャラした青井さんに、完敗の様相を呈してる！ 同期の中で私一番差をつけられてる！ 意気込みが違うのかな 適当に受験した私以外は皆、すげーやりたかった仕事なんだもんなあ……。

『一方あなたは信賴率0%、住民は9名、全員栄養不良、全員病原

体に感染中です。あなたが自力で同定しましたので答えを明かしますが、見立て通りVTECに感染しています』

改めて突き付けられた。私の度量のなさ。

『はい……』

わかっている、私のせいです。

私が彼らの健康を省みなかったからいけないんです。あんなに私に会いたがっててくれたのに、彼らを見捨て無視して引きこもって養蚕とか綿花栽培とかやってたからいけないんです。今では全員にそっぽ向かれてるのも私のせいです。

『やり直せばいいじゃないですか』

『やり直す？』

西園さんは黒ぶちメガネを直し、そっけなく言った。

『心機一転、もう一度二か月前からやりなおせばいい、住民が死ぬまで構わず気絶しててください。頭を強くぶつければ半日は気絶できますよ。気絶しながら彼らが死ぬまで待つていけば、二か月前と同じ状態になります。住民は全員入れ替わりますが、どうせ彼らには信頼を得られなかったのですから』

彼女は相変わらず美人だ……でも、冷血だ。

『どうせなら、素民たちも新しい方がいいでしょう？』

それって。メグも死ぬってことだな……全員死んでいなくなるのか、間接的に殺すってことか。

そんな、あんまりだ。

「ほかに、何か情報はありますか。彼らを死なせたくないんです！」

「何でこの人は冷たいんだ……。」

現実世界の人間なのに、本物の人間なのに。彼女は仮想空間内に入ったことがないから分からないのかな。彼女にとってはただのプログラムなんだろうけど、間違いなくこの世界で、心があつて生きてるんだよ……いくらでも代わりがいるみたいに言わないでくれ。

「緊急事態にはできることが増えますよ、ボードのメニュー画面を随時確認してみてください」

西園さんは私が素民に同情して落ち込んでいるのを意外そうに見ていたが、やがて付け足すようにそう言った。

「お願いします。抗生物質だけをいただけませんか？ それで何とかしてみせます」

「……できませんね。万能の力を持つあなたに、本来できないことはいはずです」

私の必死の懇願は、鬼畜担当官の心には届かなかった。

「私にはあなたが苦痛を受けたくないだけにしか見えませんよ」

「凶星なのかな……メグを死なせたくないとか、本当は建前で。」

苦痛から自分の身を守りたいだけ？ そんな気がしてきた。

「民を見捨てた罰を受けてください。あなたの民と運命を共にするのです」

自分で志望しておいて、軽い気持ちで何十万倍もの倍率を勝ち抜いて他の志望者を蹴落として構築士になって、

そして役割を果たせない私……最悪だな。

『私が代わってあげたいぐらいですよ。今すぐにもね』

え？

『私なら民を一人も殺さず、完璧な神様を演じます。失敗したならどんな苦痛でも受けます。だからあなたを見ていると腹立たしい。しかし見ていますよ、それが私の任務ですから』

もしかして……西園さん、構築士になりたかったのかな。……そうだったんだ。

いくら優秀でも、素養がないとなれないんだもんこの仕事。私のいい加減さとやる気のなさは、西園さんに嫌悪感を抱かせている。西園さんの真剣な気持ち蔑ろにして、本当にごめんなさい。

彼女は現実世界から私を見ながら、自分ならもつとこうするのに……、と苛立たしく思ったのかな。彼女がやりたかった憧れの仕事を、私がやってるんだ。

『どうしても助けたいのなら。九人全員から強く信頼されることです。そうすれば民が発病してもあなたは苦痛を受けず、彼らの為に働くことができ、無限の力を揮えます。信頼の力は苦痛を打ち消します、それがアガルタの神なのです』

そう……だったんだ……。

民が苦しんでいても私が強く信頼されていれば、三倍の苦痛にはならないのか。

西園さんありがとう。彼女、すっげーツンデレ。でもいい人だ。

彼女は私を蔑むように見下ろすと、かける言葉もなくなったらしく自ら通信を切った。私は彼女を冷たい罵ったけど、冷たいのは西

園さんじゃない、彼女は私の薄汚い下心を見抜いていたのか。彼女は何人もの構築士の世界創造を見てきたんだ、確かな目を持つてる。こうして現実世界との一回目の通信は絶たれた。

……あと九十九時間。できるだけのことをしよう。

第3話 赤井さんのハイパーコンストラクション

【アガルタ第二十七管区 第63日目 居住者9名 信頼率0%】

西園さんとの通信が切れた後。私は失望と情けなさでorzの形になっていると、私の独り言を訝しんで近づいてきたロイに木杖でつつんと尻をつつかれた。私ロイと草原に二人きりだ。ロイの信頼を得れば、私は構築士としての力を使えるようになる。間に合うかも。西園さんにも、真面目にやっていると見せなきゃな。

話せばわかる、話せばわかるさ。ロイはメグより幼いけど、話せばわかるよね。怖くないよーロイ、怖くないから話を聞いてねー…私はそのととロイに近づく。

ロイは逃げなかった。私が危害を加えないと、彼は分かっている。私はほっとしつつ、ロイに話しかける。

『ロイさん、皆に危険が迫っています。あなたたちの命が危ないのです』

私の腰のあたりの背丈ほどしかないロイにも敬語。子供にも全員に敬語。一応、公務員として仮想世界でも行政サービス中だから。それに、私を監視している西園さんにも悪い。彼女がやりたかったように、完璧にしないと。

「さつきはだれも死なせないって言ってなかった？」

あれ？ ロイくん、小さな見かけによらず賢い。

「あかいかみさまがいるから病気になるんですよ。あなたのせいでしょ」

しかも生意気。速攻言い負かされた二十二歳の私。

三の九乗の苦痛が始まる前、彼らの症状が出る前に何とかしないと。彼らとも意思疎通できなくなるし、私も不死身だけど激痛で絶

対動けない。潜伏期の今対策をうつておくしかないんだ。といつてもロイはもうお腹が痛いって言ってるんだし……我慢してるのかな。

『ロイさん、あなたは死にたくないですか？』

「うん」

半ば誘導尋問のようだったけど、願ったね！？ 私に願ったよね！？ このタイプの感染症には抗生物質なんだ、抗生物質さえあれば助かるんだよ。

よし、抗生物質、カモン！

……こ、コネ　　！

私の手の中には何も現れなかった。ロイと私の間に信頼がないから。ロ先だけで誘導尋問したって、信頼関係ゼロだもんな。当然だ。

「ねえ、どうして助けられなかったの？ メグはあなたのこと、しんじていたよ」

き、キタ　　！！

ロイクンから直球で本題がきました。

ロイは直球で、そして真剣な口調だった。

メグもそうだけど素民たちはみんな、本音だけで生きている。

建前や嘘なんてない。それに対して私は建前の固まりな感じの現代社会人。

誠意なんてあったもんじゃねーな。ロイは涙目で一生懸命私に訴えかける。

「メグはね、ずっとあなたのはなしばかりしてたよ。だからナズが

びょうきになったときも信じてあなたをむかえにいったんだ。なのに、なのにさ。なんで助けてくれなかったの」

あにさまはナズというらしい。実は三倍ルールで動けなくてですね……なんて言い訳は、ロイにはできなかった。ロイの話に黙って耳を傾ける。

「メグはあなたが、しんじることによって力を出せるかみさまなんだっていったよ、ちがうの？」

『そうです』

そうですけど……それはあくまでそういう設定なんです。

私、かっこ悪いな。そうだとか言っつて、そうじゃねーじゃん。国民の血税を四十億以上もガッツリ投入されて世界中から期待されるスーパー公務員だったのに、全然神様らしくできねー。

お笑いコントとかで「こんな神様はいやだ」ってやられる感じ。

表ざたになっただら行政の無駄として事業仕訳されたり、ムノさんの朝スパツ！のコーナーで取り上げられるのも時間の問題。何なら任命権者の大臣も西園さんも頭かかえるレベル。

とにかく演技しなきゃいけないんだ……。

演技力ゼロだけどこれは演技だ。私のキャラ設定は、怖くなくて絶対怒らなくて友達感覚で付き合える神様にしようかと思うんだ。

だって話しかけてもらえないと困るよ。親しみやすくしとかないとそう決めたからには完璧にこなさなきゃならなくて、私はこの世界で本名を名乗ることも、本当は人間なんだって主張することもできない。グラフィック上で顔も姿も違うから、人間だなんて素民たちは誰も信じてくれない。失敗したらリセットされるし。

……この世界の住民の初期状態では、構築士が世話をしてあげないと病気にかかって亡くなるみたいだ。その代わり彼らは神様の存在を信じていて、私のことを神様だって最初から認めてくれてた。思えば最初は彼ら全員、好意的に受け入れてくれてたんだ。でも裏切られたりすると話は別。私は一番大事な時期に、私は変なこだわりで引きこもってた。

私は彼らをこの土地に住んでる原住民だと決めつけて、この土地で長い間暮らしてきたもんだと思ってた。私の助けなしで彼らを長期間放置するとどうなるか、想像を巡らせることもせず。

彼らは私が召喚された日に仮想世界で生まれたばかりの命だったんだ……。

二ヶ月間、生きるすべも分からないまま小さな果実の採集だけで食いつないで。ただ救いを求めながら。だからあんなに私に会いたいって言ってたんだよ。メグは強く言わなかったけど、実状はそうだったんだ。

だからメグは毎日私に会いにきてたんだ。

そんな生活してたらカロリー足りねえし、タンパク質も栄養も微量元素もカルシウムも足りてねえよ……防寒もできてないし、すぐ病気になるよ。

青井さんや白井さんは医療関係者だったのかもしれないけど、少なくとも彼らが自力では生きていけないと判断し、色々尽くして食べさせてあげたり温かくしてあげてたんだろうな。衛生状態にも気を付け、感染症も管理して。それで彼らは素民全員にますます信頼してもらって。私のとこと正反対だよ。

彼らが次の世代につながり、素民も増えて信頼の力も一層強くなって青井さんはもっと強くなり、青井さんの世界は逞しく発展して

いくんだ。白井さんもそう。

彼らの世界では誰も死んでないから死亡者ログも見なくてよかつただろうし、信頼の力によって支えられて、何かあったとしても苦痛は打ち消されてる。

ごめんな、みんな……ごめんな、ナズ。

私は悔悟しながらロイを見つめる。ロイもそんな私を悲しげに見ていた。

「メグはあなたのことをしんじじてたのに、来てくれなかった。ナズはメグがあなたをつれて来るのをしんじながら、くるしんで死んだんだ。ひどいよね」

それはひどいな。

ロイ、口調は幼いけど主張は理路整然としてる。

「メグは好きだったんだよ、あなたのこと。あなたは誰からも信じられなくなったら、どうなるの？」

『あなたたちを守るための力が使えません』

しかも君たち素民は九十九時間で全滅する。

私はなすすべなく、力を使えず対抗策が打てない……そりゃ、神通力が使えなくても色々方法を尽くすつもりだ。どうすつかな、抗生物質使えなかったら。今から土を練って火を起こし、土器を焼いて飲み水を滅菌して、皆が下痢や出血を始めた場合の生理食塩水でも作つとく。グルコースの代わりに、果汁も絞つとくよ。

岩塩はありそうだし、脱水症状だけでも防ぎながら、下痢によって大腸菌が体から出ていくのを待つしかない。

明日か明後日で何人か死ぬかもしれない、もしかしたら生き残ってくれるかもしれない。

それでビタミン豊富な食事を作って無理にでも食べてもらい、抵抗力と栄養をつけてもらおう。……きつと治るよ。抵抗されても押さえつけて強引に食べてもらおう、君たちの為なら、全員相手でも負けはしないよ。

栄養状態がよければ治るんだ、この病気は。
なんてなことを頭の中で考えてたら……

「なさけないやつだな、あかいかみさま。じゃあ、おれがしんじてやるよ」

え？ 何でこのタイミングで信じてくれるの？

嬉しいけど、複雑な気分。ロイ、本当は私のこと憎いんだ。信じただ方が少しでも皆の得になるかもしれないからそう言ってる。この年で裏読みして計算できてる。賢いなこの子。

「でもそのまえに、なぐる」

……そうですね、気持ちがおさまりませんもんね。

いいですとも！ 思う存分殴ってください。

ととさまもそうだったけど、素民たちは感情表現がストレートなんだ。私が弟をこんな感じで亡くしたら、こんな激怒できるんだろうか。弟の死は悲しいだろうけれど、薄っぺらな対応をしまいそうだ。

現代人の家族の希薄さと、彼らの絆の強さを比較した。彼らは私たちが忘れているものを思い出させてくれる。

殴られるために膝をついてロイの目線の高さにまでかがんだ。

そして少年の顔を見つめ、頷く。できるだけ優しい顔でね……鬼みたいな顔してるのかもしれないけど。

さあ、やってくれ。私も償いたい。右の頬を打たれたら左の頬を

差し出すのがテンプレな神様みたいだし、ってか私さつき既に往復でやられてたし。いいよ、何発でもいいよ。

少しでも気が晴れるならそれでいいんだ。それより君の小さな握り拳をいためないように殴るんだよ。骨粗鬆症だろうし、骨折するかもしれないからね。何より、相手を殴るときはグローブとかしないと自分も痛いんだよ。君の拳を潰す痛みを、君には味わってほしくない。

ロイは小さなこぶしを振り上げて、私を思い切り睨み付け、ぶるぶると震わせて

躊躇って、でも……………殴らなかつたんだ。

『殴ってください』

ロイ、さあ自分の拳を大事にしつつ的確に殴ってくれ。遠慮があるわけじゃないと思うけど、早く殴れと促す。DMな人みただけど殴られないことには話が進まない。

「おしえて……………どうして、たすけてくれなかったの。おれ、なぐらないから」

ロイが涙ぐんで悲しそうだったので、どうしようと悩んだ拳句、正直に言うことにした。ロイは知りたがってるんだ。真実を。理由にもならないけど、言うよ。

『ロイさん、私の体はあなたたちの苦痛を、三倍の強さで受け止めます。ナズさんの苦しみは相当なものでした、ナズさんの苦痛が私にも流れ込んできて、動けなくなって辿りつかなかった……………情けないことに』

「さんばい？」

ロイは泣きながら、私に尋ねる。ごめん難しかった、倍数の概念がないのに。

どれだけ痛かったかを説明するのも私的にすげーかつこ悪い。私は死ななかつたが、ナズは死んだ。ナズは仮想空間での人生を終えたんだ、大事な一生をたつた二ヶ月で。対し私は苦痛だけで済んだ、比べるべくもないよ。

それでも賢いロイは、私がナズの苦しみをナズより多く受けていたと分かってくれたようだ。

「ナズの痛みが、かみさまにいつてたの？ ナズよりもっと？」

『ええ……、でも全て私の責任です。ナズさんには本当に申し訳ないことをしました』

ロイは私に抱きついてきた。何で？

私、君たちを見捨てた最低の人間だよ。なのに死なないんだよ、ナズは死んだのに。君の気持ちかわからないよ。

「そうだったのか……ナズのいたみを、かみさまがやわらせてくれたんだね」

いや何か誤解してるけど、ナズの苦痛、私和らげてません。

私が勝手に別の場所で三倍苦しんで自爆してただけだ。でもそこでロイが私を殴らなかつた理由が分かった。ナズはロイが忘れられないほど、苦み抜いて死んだんだな。それでロイは私に同情してくれてる。あれ以上に痛かつたのかって訊いて。

よしよしって、赤い頭を撫でられてる。

それやるの逆だよ普通、私がそれを君にやってあげたいよ。

ロイは結局私を殴らないまま、念じてくれた。

信頼の力を施してくれた。温かいな……、温かくて優しい。
この世界で唯一、心地よいと私が感じるもの。それがこの信頼の
力だ。

『ロイさん、ありがとうございます』

何だかみなぎってきました！

そこで大慌てでボードを呼び出すと、

【アガルタ第二十七管区 第63日目 居住者9名 信頼率11%】

十一パーセントの信頼率になってる。九人で百分率だから、ロイ、
なにげに百パーセントの信頼くれてる！ でもメグの方が強い。ロ
イが幼いからかな？ いいんだ、力が強くて弱くても。ありがと
うロイ、嬉しいよ。

メグのときほどじゃないけど、ロイの信頼に支えられた神通力（
てか人通力？）が私の体に蘇り、彼は私に一度きりのチャンスをく
れた。

『力が湧いてきましたよ！』

「たすけてあいかみさま……、ホントはみんな、ナズみたいに死
にたくない」

ロイの口から切ない本音が出た。彼は怖いんだ。私は彼の不安を
拭うように、抱きしめてあげる。メグの時もそうだったけど、私が
抱いて”祝福”してあげると素民たちは安心するようだ。チュート
リアルにも積極的にやれって書いてある。

メグ曰く私は癒しのオーラ持つてるっぽい、それが祝福って行為

の恵みなんだ。

彼らのこと、少しは癒してあげられるのかな。苦痛をぬぐってあげたり、不安を和らげさせてあげたり。ロイも私が抱擁してあげると少し落ち着いた。

ロイがくれた力を有意義に使わないと。もう二度と失敗は許されない。

片手でロイを抱きながら西園さんが言ったようにボードを見ると、インフォメーションボードに項目が増えていた。

そのひとつが迅速超分子構築。ハイパーモリキュラーコンストラクション

なん……だと……？

そんなことできるの？ やっていいの！？

このチート的な機能、前はなかったじゃん。

緊急事態だから特別に？ 超太っ腹。化学構造を入力すると直接分子を構築できるらしい。ひゃっほい！ 小躍りしたい。

念願の抗生物質を作ろう！

学生するとき無駄に応用薬学とかとってたから、間違いなく構造式だけは覚えてるよ。薬学のテストのとき丸暗記しといてよかった。創れるのは数グラムだけって設定みただけだね。ロイひとりからの力で作れるのはこれだけ。足りるかな。もしかすると、もう一人ぐらいに信じてもらわないと足りないかもな。

つべこべ言わず用意しよう。

「どう？ たすけてくれる？」

ロイ、すぎるような目で尋ねてくる。その信頼に応えないと。

『大丈夫ですよ。助けます』

私はロイに微笑みかけた。久しぶりにすがすがしく笑えた気がする。信頼されるっていいな。優しさをくれてありがとう、私を受け入れてくれてありがとう。

死なないけど、死ぬほど嬉しい。

コンストラクト

構築モードを展開。私の意識は暗闇の中に落ち、赤い3Dグリッドの中にいた。いかにも仮想世界の構築士って感じだな。ロイには見えてないみたいだし。どうやるのこれ。念じたら分子呼び出せるのかな。化学式書けばいい？ 両方やってみよう。

両手でやりたいけどロイが私の片手を離さない。振り払うのも可哀そうだし、片手でやるか。ロイ、いい子だ。メグもいい子なんだけど、いつか分かってもらえるかな。

『炭素18、水素20、フッ素1、窒素3、酸素4……』

必要な材料を念じてみる。

いいかいロイ、化学式を書くときにはね。まず材料となる分子数を思い出すんだよ。それを化学的に矛盾がないように組み立てるんだ。……ロイには聞こえてないけど誰かに説明したい気分。

するとテニスボールほどの分子模型がポコポコとグリッド上に出てきた。炭素はおなじみの黒、水素は白、酸素赤って具合に色分けされててわかりやすい。分子式じゃなくて分子モデルのパターンだ。一つずつ指でちゃんと触ると元素を模したボールが宙に浮かぶ。要領が分かったので片手でよいしょ、よいしょと組み合わせる。分子

量370の、構造的には五角形の五員環と六角形の六員環の組み合わせ。

これはニューキノロンでグループの抗菌剤で、大腸菌ほか雑菌には大抵効くんだ。二重の変異にまで耐えられて、耐性菌も出にくいようになってる。抗生物質は色々あるけど、私のおススメ。幼い子でも量を落とせば何とかなる。この薬の何がいいって経口、つまり注射じゃなくて口から飲んでいいってことだけど、経口での摂取が可能なんだ。副作用が多少出てもそんなこと言っちゃられない。……何か私、薬のセールスマンみたいになってきたな。とりあえず今は、彼らを死から救う強い抗生物質が必要。

『水素結合』

と言うと分子同士が結合してくれた。話のわかるやつら、ってか分子らだ。

『共有結合』

結合方式にもいろいろあるんだよ、ロイ。って聞いてないな。私が構築に没頭していると、ロイが時々私の腕を引っ張ったりした。大丈夫だよ、妄想中とかじゃないよ、ちゃんと仕事してるから大丈夫だよ私。

できた。

多分これでいい。ミスはないか？ 分子数に矛盾はない？

この構造は化学的に安定？ 何度も何度も見直す。この薬に彼らの命がかかってるんだ。何度見直したってしすぎることはない。

……あつてる。

「行け」っ！ いや、「来い」かな？ もうどっちでもいいや行つてこい！

マテリアライズ
物質化！

そして私の手の中に現れた数グラムの貴重な白い粉。地味。地味。地味。だけど、大事な命綱。風で飛んでいかないよう、蚕用のクワの葉を薬包紙に見立てて大切に包む。念入りにね。

押すなよ、いま背中押したら薬がこぼれるから絶対後ろから押すなよ！？

この絶対押しなくなる前振りでも押さないんだなロイ。いい子だ。薬は三分割にした。一回より、二、三回に分けて飲んだほうが抗生物質は効くんだよ。

なので分割しとくよ。

『できました、これがあなたがたのお薬です』
「おくすりって、それをのんだらたすかる？ そっだよねあかいかみさま？」

ロイは嬉しそう。表情が輝いた、抜けた前歯が間抜けでかわいいうまくいけば、症状が出る前に薬が効いて何とかなる。すぐ飲んでもらえば、まだ重症化してないから少量でいいんだ。皆にいきわたる。

『助かりますよ、先ほど、私は誰も死なせない、助けると約束したではないですか』

私、ここにきて調子のいいセリフ。

さっきまでのへこたれぶりはどこへやら。でもほっとしたんだ。

『その約束は嘘ではありませんよ』

私に任せなさい、と言わんばかりにつこり笑って安心させてあげる。決まったよ。決まっちゃった。

見てましたか？ 完璧な演技でしたよね西園さん。
演技が古臭いですかそうですか。

ロイ、私を見て「わー！」って顔してる。
どん引きの「わー……」、「じゃないと思うけどそこは自信がない。

「これにつめて、みんなに一つずつ食べてもらおうよ。おれ、バレないようにやるよ」

ロイは彼らの大好物の果実に薬を詰めると言った。確かに飲み水よりそっちの方が怪しまれないかも。薬だけど、身内に一服盛ろうとするこの末恐ろしさ。

水を滅菌する手間も省けるな。果実や野菜の中って、普通は消毒しなくてもきれいなんだ、熟れることはあっても、熟れる前から中から腐っていくことって殆どないだろ？ だからこの場合滅菌水イラネ、これ豆知識な。だからすぐ皆に薬が配れる。てかすげー………ロイって子供なのにメチャクチャ頭の回転が早い子だな、賢いし。

一時間後、どうなったかと心臓バクバクいわせながら墓穴の前で待つ私に、ロイが駆け寄ってきた。

「みんな、たべてくれたよ！ あと、かみさまにありがとう言いたいからこっち来てほしいって。おれ、いままでのことぜんぶ話したんだよ！」

ロイの言葉と同時にインフォメーションボードが緊急画面から通常画面になった。

住民全滅の危機を、間一髪で防ぐことができたんだ。
ロイと西園さんの助けがあつて！

『それはよかつた、ハンカチ落としでもしますか』

明るくそう言いながら、心の片隅にナズの犠牲を思った。彼には辛いばかりの短い人生だったよな。あとで皆で埋葬してあげよう。いつか私が万能のチートになったら、何とかしてナズを蘇らせてあげよう。この犠牲は私の責任だ、責任とるから待っていてな、ナズ。その為にもっと強くなれるよう精進して頑張るよ。

私は素民たちの許しを得て、草原をわたり彼らのもとに向かう。
そのとき雲間に一瞬メッセージが浮かんだんだ。

【まだ私を失望させないでくださいね 西園】

はは……、皮肉たっぷりなのをありがとう西園さん。さつき失望したって言ったけど、あなたもいい人だな。助けてくれてありがとう。

見ていてくださいよ、鬼畜メガネ……いや、ツンデレ西園担当官！
新米構築士 赤井（仮名）は心を入れ替えて、このアガルタで真面目に勤務してみせますよ！

そんな暑苦しいノリで意気込み。

んー……でも私が空を飛べるようになるのは、いつのことか。

第4話 赤井さん、構築士になる

【アガルタ第二十七管区 8ヶ月と5日目 居住者10名 信頼率100%】

『ここまですべて、負荷テストだったのです』

インフォメーションボードが急に立ち上がったから何事かと思えば西園さんのドアップ。

一方私は神様として、現在素民たちに必死に行政サービス中。目を回すほど忙しいんです。ところで何ですか負荷テストって。

『極限の苦痛とストレスを与えたとき、あなたがどのような思考を持ち、行動をとるかのテストです』

動物実験的なあれですか！ よく考えたらモルモットより酷くね？ だって誰かが死ぬほどのMAXの苦痛の三倍苦痛って現実世界ではありえんでしょ。恨みがましいな。もうあれは終わったし私が悪かった。

居住者10名になってるのは、ハク（男性・推定23歳）さんの嫁、ユイ（女性・推定20歳）さんが妊娠したから。ユイさんが私に信頼の力をくれているので、お腹のベビーもまとめて100%の信頼率になってる。なので私は今絶好調で体調もいい。カモやる気もみなぎってる。

『……ところで今日は西園さんから何の御用です？』

西園さんが私を呼んだの、そっぴや初めてだ。

私はいえ、取り込み中。簡素な掘立小屋の中でメグとロイに

算数を、ととさま（本名バル）に測量法を教えただげてる。メグより年下のカイって女の子もいるけど、この子は勉強嫌い。料理とか家事とか教えてる。火打石の使い方がうまくなった。

メグとロイは二人とも賢くて、メグは上手に農業やるし、ロイは工作が得意。勉強もよくできて、ぐいぐい四則演算も覚える。スポンジみたい知識を吸収してすげーよ、今日びこんな勉強する子いないよ、私の子供時代とは正反対。彼らは日々の労働より勉強が楽しいんだって。ロイはようやく三倍という言葉の意味がわかって、その日はまた泣きながら私の頭を撫でてくれた、優しい子だ。

バルさんは真剣に木杵を組んで私が与えた問題を解いてる、難しいよねごめんね。他の人らにも個別に課題を与えた、ユイさんは編み物が得意になった。皆の服作ってくれてる。ハクさんは赤ちゃんが生まれるからユイさんのために新居建ててる。

私は素手で重い木や石を運んで来たり（人間の体力じゃ運べないからね）建築の基礎を教えただけど、あくまで建築物のデザインは素民任せ。私はその通りに作ってあげる。明らかに構造が間違ってるも私はその通りに作る。構造がダメだからバランス悪くて崩れる。

残念だったね、次頑張つてねと優しく励ます。

するとまたハクさんは頑張つてデザインする。身重のユイさんの為だから頑張れる。試行錯誤すればいいんだ、時間はあるんだ。建築術はハクさんに任せた。

かかさま（本名はマチな）は養蚕に夢中。私なんかよりきめ細かい絹糸を作り、料理もできる。火は苦手みたいけどそこはカイが補えばいい。もう一人いた、ヤスさんだ。「犯人はヤス」の元ネタとかじゃない。ヤスさんには狩りを教えた。彼は一番体力があつてマッチョだ。顎も割れてる。武器がないのでどうするかと思つて材

料を揃えて様子見たら、石を磨いて木の枝と組み合わせで銚もどきを作った。

最近は銚での狩りも上手くなって、一人では運べない程の大きさの、毛のない動物を狩る。捕まえたなら彼はその場で火を焚いて狼煙を上げるので、私はそれを目印にそこに行つて、獲物を運んで帰つてあげる。数百キロとかあるけど私は全然平気。信頼の力があるから、片手で持てる。ヤスさんの捕まえた良質なタンパク質が皆のお腹を満たし体力をつけてくれる。いかにも旧石器時代つて感じ。

でも彼らのポテンシャルは凄く高い。彼らはこの世界の始祖となるべき人たちで、私が指導してヒントをあげれば何でもモノにできた。

そんなこんなで軌道に乗り始めた原始生活。

ロイとメグは突然宙に向かって独り言をはじめた私に驚いていた。

そうですね、鬼畜担当官からの天啓がきましたよ。

西園さんが映ってるインフォメーションボード、君たちには見えてないからな。……待ってね、ツンデレ担当官の西園さんから入電だ。そんなこと言つてないけど。

私は彼らから距離を取り、問題を解いておくようにと課題を出した。すぐ解いちゃうんだらうね、そしたら外で遊んでいいよ。バルさんも休憩していいよ。

『はい、どうぞ』

『私たちとて、生身の人間がそんな状態で千年も仮想空間内で耐えられるとは考えておりません』

あれ、なにこの流れ。もしかして私、空気読めてない？

話が違つぞ。彼女、鬼畜担当官じゃ……。

『私は試用期間であなたの覚悟を引出し、構築士の心構えを説いたのです。今後、コールドは何度使っても宜しく、私は二十四時間あなたのコールドに応じます。そして苦痛の倍数は一倍、素民の等身大の苦痛をあなたの身に受けます』

苦痛は三倍から一倍に減るってことですね。それ重要、すげー重要だ。

つまり今までのは何だったの？ 設定難度間違えてたとか。既にもうアガルタ生活八か月目ですよ。生活は少しずつ楽になってきたけど、最初のあれは虐待だと思えます。肉体的にも精神的にもほとほとまいりましたよ。

『あれは虐待でした、私ものたち苦しむ赤井さんをモニタごしに見るのは本当に辛かったです』
どの口が言ってるの、どの口が。

聞き間違いかもしれないからもう一回言って、もう一回、さあさあもう一回。

『ヴァーチャルとはいえ、痛かったですか？』

西園さん、黒ぶちメガネずらしてハンカチで目頭拭いて涙ぐんでる。

なになに、どういうこと？ 何で今更同情してくれてんの遅くない？ あのとき鬼だったじゃん！ 同情のかけらもなかったじゃん、それどころか罵倒してたじゃん。忘れちゃいませんよあのときのこと。

なにこれ、今更ツンデレの、デレの部分？

西園さん急に何考えてるのかわかんないよ。

ついていけないから、マジ困るよそういうの。私が愛想笑いを浮

かべて

『私は死ぬほど痛かったですけど』

頭の中が疑問だらけになったとき……まさか負荷テストが終わったから？

みたいなきことを思った。負荷テストってあれだよ、例えばこの装置がどれだけの最大電圧に耐えられるかみたいなの。私、もしかしてそのテストやられてたんだ……。

普通そついうのって人間にやらないでしょ？ 私人間なので機械扱いしないでもらえますか。私だって精神が壊れることありますよ。三の九乗の苦痛とか死んでましたよ確実に。何とか回避できましたけど。それをあなた受けるって言いましたよね、民と運命を共にしるってあなた言っていましたよ。

『とりあえず、何でルールが突然変わったんですか？』

『試用期間が終わったのです』

あるんじゃない、研修期間。まさか今から本番ですとか言われてリセットされたりしない？

『あなたがこの仕事を向いているか向いていないか、この先続けるか続けないか。見極めるための試用期間が先ほど終わりました。合格です。あなたは千年耐久できるだけの精神力がある』

アガルタに入って、私は八ヶ月……西園さんにとってはまる一日だ、夕方五時のサイレンが鳴ってる頃。

続けるも続けないも、この仕事絶対に辞められないんじゃないかなかったですか？

十年間、私は凶神としてここに基本的人権もなく絶対監禁なんじ

やないですか？ しかもサーバーが落ちたら私たちが仮想空間内で死ぬみたいなことってませんか？ 国家ぐるみで逃さないように鬼畜設定やられるんですよね。そうだって言っていましたよね？

『え……この仕事、辞められないんじゃない？』

まさか全部、ウソ？ またまたご冗談を。

あれ？ 西園さん、それまさか伊達メガネだったんだ。鬼畜教官キヤラはネタ？ 相当な演技派女優だよ。演技力を私にも分けてほしいよ、ずっと演技しないといけないんだから。

『辞められない仕事など、法治国家の日本にはありません』

で、ですよー！

正論です。ごもつともです。法律で職業を選ぶことは自由と明記されていますもんね、法に触れますもんね、辞められないなんて人権問題ですもんね。ほっとしましたよ。

で？ どういうことなんですか？

『あなたはこの仕事をいつでも途中で辞められる。でも何年も構築が進んで途中で辞められるのは非常に困るんです。こちらら税金を投入して真剣に施行している大型プロジェクトです。リセットとなると初期化費用がかさみます、それこそ行政の無駄遣いです』

そりゃそうだ。途中で投げるなら最初からやらない方がいいですよ。そんな構築士も無責任ですよ。

『赤井さん。今より三か月後、最終的な意思確認をします。それまでにごうするか、よく考えて決めてください』

彼女にとっては三時間後か。私は三か月後、時間があるけど、先が長すぎてうんとも何とも言えない。てことは西園さんには八時？勤務時間すぎてるけど大丈夫？ 手当つくの？ 働いたらお手当もらってくださいね。

『辞表を出す場合に限り、あなたは現実世界に戻れます』

東京に戻るのか。

……東京か……現実世界。

近代化したビル群に、衣食住そろって娯楽もあり。清潔な水も食料も欲しいがまま、酒もあるし、もんじゃ焼きもある（これ重要）。私はここで国民、あるいは世界中の皆様のために誰もが入りたくなるパラダイスを創ってるつもりだけど、東京の方が断然パラダイスすぎる。もうアガルタに東京移植すればいいじゃん。わざわざ石器時代以下から始めずにさ！

こっちは仮想世界で今日や明日生きること必死な民たちに行政サービス。私、本当は人間なのにさ。私の肉体は日本にいるのに基本的人権のきの字もない。

外、出たいな。何か急に出たくなってきた。

あ、メグがこっち見てる！

すげー見てる、不安そう。でも見てても私は出たいんだよ外に。

外に出たら……何すっかな。春だし友達とばーっと花見にでも行こうか、東京の夜桜が懐かしいよ。

何もかも忘れて。

『では、考えておいてくださいね』

西園さんは通信を切るうとした。メグが見てるから、気を使ってくれてる？ 彼女、鬼畜担当官なんかじゃなく本当は気配りできる人なんだ。私は通信を切るうとする彼女を呼び止めた。

『一つ聞かせてもらっても？』

『何でしょうか』

『西園さん、もしかして構築士になりたかったんですか？』

聞いちゃったよ。絶対そうでしょ。西園さんは眉ひとつ動かさなかった。

『いいえ』

え？ いいえなの？ 代わりたいつて言ってたじゃん。あれも嘘？ ちょっとこめかみに青筋立ってたし、迫真の演技だったじゃん。

だから女性って信用ならねーんだよ嘘ばっかついてさ。しかも上手いんだわ！ 全然気づかねーよ騙されても裏切られても……元カノの話はもういいか。そんな女性ばっかじゃないって分かっているよ。例えばメグだ。

彼女は正直だ、そして純情だ。西園さんとは違ってね。

『私にはあなたの代役は務まりません。人間が千年も生きて神様を演じ続けるなど、本来不可能なんです』

このお世辞も口先だけ？ なんて疑ってしまう……。

確かに私もそう思います無理ゲーですよこれ。てか何でそれを私に聞くし。だったら百年ぐらいつつ交代にして、十人ぐらいで一つの世界の構築やればいいんじゃないでしょうか。ローテーション制とかにして。百年ぼっきりの年収四億でも応募者が群がりますよ。

どうして思いつかなかつたんですかその案。私たちに千年もやらせないでくださいよ。どうせあなた十年以内に退職するでしょ、結婚とかしてさ。……これセクハラですか。

『でも、あなたにはそれができている』

『何で早くもそう思われるんです？ 私はまだ入省一日目でしょう、そちらの時間的には』

私もちよい立腹。勝手に決めつけて、何でわかるんだよ。向いてるとか向いてないとかさ。

『あなたは普通の人間ではありません』

いえいえいえ私、現実では普通の人間ですから。

『赤井さん。あなたには酷いことをしてしまったけれど、私は心よりあなたを尊敬しています。元気に生きて帰って、人間に戻って人生を全うしてほしい』

尊敬しますって……なに。

分かってるでしょ私だつて人間に戻りたいですよ。もんじゃ焼き食べたいしドライブしたいし、ビール飲みたいって話なんですよ。今は食欲ないのが悔しいけど、気分は春の宴会したいんですよ。こっちは宴会どころじゃない。色々尽力してますが食料供給も衛生管理も住居建築もぎりぎりなんです。皆の協力を得て、私が教育して力を貸してやっとなんです。逃げ出したいですよ。

でもアガルタから逃げて、投げ出すのは違うってな気がする。

だつてリセットなんですよ？

せつかくメグやロイや皆にも信頼してもらって、自分的にはようやく頑張ろうかって思ってたところなんです。辞めるってなったら

彼らを殺して、新しい構築士を入れるんでしょ？ 帰りたいけどそれで現実に戻ったって、全然達成感ないですよ。一生猛烈な後悔に襲われますよ。

『辞めませんよ』

私は言ってしまった。あまり何も考えず。

西園さん、何だか複雑な表情してら。

『ではあなたをずっと見守り続けましょう。私の担当は、あなただけなんです』

私はあまり崇高な志を持ってこのチャレンジに挑もうとしてないし、ゆるーくやりますよ。文明が進歩すると私も楽になるでしょう。今だけですよきついのは。それにまだ、ナズを蘇らせるって約束もあるんです。

最低でもそこまではやめません。約束ですからね。

ところで今までの西園さんの態度、何だったんだ。

鬼畜担当官を演じてたってこと？ 私が神様の演技してるみたいに？ ずりーよ……私、本気にしてたのにさ。私はそんな悶々とした気持ちをぐっところえて

『これからよろしくお願ひしますね、西園担当官』

って真面目な顔して言ったら、何と彼女、急にデレた！ これは想定外です。

『誠心誠意お仕えます。赤の神様』

つまりあなた私を神様に仕立てたいだけでしょ。私の職業は構築

士で、そつちの世界では神様じゃないんですよ。現実世界の人間と話してるときぐらい普通に人間として扱って下さいよ。なのに神様神様って……神様フエチってな新ジャンル、マニアックすぎてついていけないよ。そんな神様が好きなら、もうリアルに巫女とかシスターでもやってよ毎日祈りを捧げてさ。人間としてみてくださいよ西園さん。

なんか西園さんの期待、てか崇拜が重いなあ……。

メグやロイのそれとは種類が違うよ。私がちよつとむつつりと閉口してたら……

『も、申し訳ありませんっ。そんなつもりでは』

あれ？ でも見間違ひかな。よく見りやすげーかわいい。女性が顔真つ赤にして涙目でデレてくれてるのに、モニタの中からどんな対応すればいいのかわからない。

現実世界でならムラつとくるんだけど、私は去勢され煩惱もないから全然そういうの分かんないな。

現実世界なら衝動的に抱き寄せてキスとかもしたい気がするけど、物理的に私二次元にいるから無理。なんてこつた酷いですよ西園さん。

でもあなたの信愛の情はちよびつと伝わった気がする。

そこは演技じゃなく本気ですよね？ 演技だったら怒りますよ！

そして私は少しだけ、西園さんを好きになれたんだ……。
勿論人間としてだよ。

『……そんな、誠心誠意尽くしてもらわなくても。私も仕事してるだけなので』

間が悪くて、二人とも照れてどう返せばいいのかわからない。と

りあえず西園さんも体調管理しつかりして、健康を害さないよう。私この世界では不死身でも彼女は現実世界にいて、不死身じゃないんだ。過労死したり倒れたりもする。西園さんと会いたいけど、私はなるだけ我慢しなきゃ。彼女は生身の人間なんだから。

『あまり私を見過ぎないで、構わないのでカレンダー通りに休んでください。九時から五時まで、時々ちよろつと様子見にきてもらえばいいですから。何かあればコールも使いますし、一人でやりますよ』

そうは言うものの、彼女が普通に睡眠をとるだけで私は一年間とか普通に孤独になのかな。寂しいけど、つきつきりで私を見る西園さんの健康も凄く心配です。特にあなた女性だし。なのに西園さんは強情っぱり。

『休みなど必要ありません、私はたった十年でも、あなたは千年その中ですから』

崇拜しちゃってるなあ。その気持ちは嬉しいけど。十年もモニタ画面に張り付いてたら過労死で、そっちの方が廃人どころか無理ゲーになるからやめてほしい。俺、西園さんにできるだけ担当してほしいし……って、ちよつと地が出たな。

私、現実世界での一人称は俺です。実に普通だ。

TPOに合わせて一人称は使い分けますよ、今は公人ですしね。

『小さなことでも何でも相談に乗ります。頼りにしてくださいね』
まあ、それはとてもありがたい。

でも以前にアガルタの構築士と何かあったのかな、彼女。彼氏が構築士になっちゃったとか、単に私の身の上に同情してくれてのかな。

やっぱり神様フェチ？ 恋しちゃってる顔してるけど、私、現実世界ではフツメンですよ？ いいのかそれでも。グラフィックで補正かかってない？

私は何かモニタごしに彼女の涙ぐんだ顔を見るのが嫌で、おどけて適当に話題を切り替えた。彼女、こつち来てくれたら癒してあげるのがなあ。祝福したげるよ。癒されるのに。

そうそう、力をつけたっばい私には更に強い癒しの力が備わった。祝福するだけで傷ついた心のある程度癒したり、怪我や傷を癒したり。失恋の痛みとかも治せますよ。結構、私できるようになります。皆からの信頼の力も強まったし。最後ちよつと自慢になりましたか、すみません。

そーらーを……まだ自由に飛べません。早く飛びたい。
で、気になることといえば。

『私の肉体と私のリアルな家族、そちらで達者にしています？』
『あなたの肉体は万全の管理で保存溶液中にあります、ステータスは正常です。私が抜かりなく見ているので安心してください。訃報などは来ておりません。ご家族もお元気です』

両親も弟も健在か、ならひと安心。てことは西園さん私の素颜見た？ 見てるよね。フツメンだったっしょ。培養液の中の全裸状態の私を管理してくれてるんだよね、下もばつちり見られてら。まあいいや、お互い仕事だし恥ずかしくもない。

鬼畜かと思ってたけど、彼女、すっかりしてる。こういう場面ではその性格は心強い。試用期間が終わってキャラ変わったな。こんな感じの西園さんがサポートしてくれるんなら、何とか頑張れそう
だ。

彼女の私への信仰ちよつと重いけど。何で急にデレてくれたんだ

る。何か私惚れるようなことした？ ニコポスキルとか持ってませんよ私、仮想世界では皆慕ってくれますけど。現実世界で何かあったっばいな。

『それと、今後用いる仮名をあなたがご自由に決めてください。色をベースとした名前にして下さい。それがこの管区の決まりなので』

え、名前、自分で決めていいの？

試用期間終わったから芸名自分でつけてもいいってこと？

嬉しいけど、何にしよう。

自分でつけるとうっかり紅蓮とか業火とか、イタイのつけちゃいそうだしな。絶対厨二病ネームつける自信がある。赤井ってよく考えたらシンプルで覚えやすいよな。しかも最初からメグたちは「あかいかみさま」と言ってる、長いから「アカイでいいですよ」と言っても、やっぱ「あかいかみさま」って言うってくる。

彼らなりの私への尊敬の気持ちなんだ。こっちは西園さんが私に向ける信仰と違って重くない。信頼だからね、人間的な関係。

だったら、私はどんな厨二ネームに改名しても相変わらず「あいかみさま」ってなる。ならもう赤井でいいよ。メグ達のいう「あかい」は私の毛の色から名づけられてぶっちゃけ形容詞なんだけど、名前も兼ねてるから便利だ。

『千年名乗る名ですよ、真剣に考えてください』

いや、てかあなたが言う？ 私に赤井って名前つけたのあなたです。目出し帽の色で安易に名前つけたのあなたですよ。でも赤井ってシンプルだから、逆に飽きがこなくていいよ。

『赤井にします』

『下の名前は？』

『赤井だけでいいです。民に覚えてもらいやすいので』

西園さんは不満そうだったけど、記録媒体に「赤井」と書いてモ二タにかざして見せてくれた。これが今度こそ、自分で選んだ私の名になったよ。もう引き返せないな。何で西園さん、ちよつと優しくなった気がする。

『あと、何かご希望はありますか？ 何でも調達しますよ』

『裾が短くて丈夫で動きやすい服が欲しいです。できればGパンとTシャツ的な』

私は調子にのっぺお願いしてみた。

何でも調達してくれるんでしょ？

『それはだめです。そのコスチュームで暫くの間はやってください』
私は神様というイメージ商売を呪った。スカート、つてか神様服の裾がめちやくちや長いから子供に踏まれてよく転ぶんだよ。何でこんな裾が長いんだよ。転びまくってこと？ それとも早く力をつけて宙に浮けてこと？ しかもこの服以外、着れないっばい。

裾の短い絹の衣装を素民に作ってもらっても、着てもすぐ朽ちてボロボロになる。私のオーラにやられて穴があく。千切ったり切ったりしようとしても裾も切れない。何だよこの謎素材は。裾は最近はロイにわざと踏まれてる気がする。いじめられてるのかな。

西園さん、私を落としたり持ち上げたり忙しいな。

ほんつと読めないよなー、彼女だけは。

でも、彼女と一緒になら何とかやっていけそうな気がするよ。

第2章 第1話 赤井さんとメグの誕生日

イエーイ！ 国民の皆様、みてるー！？

日本国納税者の皆様お久しぶりです、アガルタ第二十七管区 甲種一級構築士の赤井です。

お元気でしたか？ 思えば早いもので、こちらの世界では八年が経ちました。

いきなりですが、私の最近の悩みを聞いてくれますか？ 構築士の勤務実態をお話します。とりあえず見てくださいこれ。私の普段の仕事風景から。

「抱かせてもらっていいの、あかいかみさま」

『はい……どうぞ抱いてください』

はいそこでVTR止めて！ 聞いた？ どう考えてもおかしいっしょこの会話。

でもこれが私の日常。

抱かれるのも仕事の一部。私は子供は自ら抱擁するけど、大人相手のときは手を後ろに組んで少し愛想よくして抱かれるのを待つことにしている。女だけじゃなくて男にも抱かれるよ、すげーきつく抱かれる。私は抵抗しないし彼らのなすがまま、嫌がらないし慈悲深く微笑んであげるよ。

でも本当は超微妙。

何の話かって？

変な意味じゃなくてさ、抱かれるといっても色恋沙汰の話じゃない。

抱擁、つてか民に授ける祝福の方法だよ。

私たち構築士は、老若男女問わず素民たちを祝福してあげないといけないのは前述の通り。私の神通力を抱擁で彼らの体に返して彼らを癒し、私が彼らの信頼の力を受け取る。それで私は強い神となり、構築のエネルギー源となる。

民全員に対する祝福は構築士の義務。そう、義務なんだよ。

人口が増えると祝福も大変になるけど、その頃には直接抱かなくとも大気と同化して力を回収し、大気を介して与えるらしいよ。

でも……目指すはそこ。

私の民とのスキンシップはほどほどに、早くその段階に行きたくなかった。

半年前ぐらいから、私が大人を抱擁すると男女問わず興奮するようになってしまった。やらしい意味の興奮じゃない、何かテンション高くて暴れてどうしようもない感じで困る。強くなった神通力もるもろに惑わされて感電しちゃう感じだとか。

一体どうやって祝福しよう、ハグしないと祝福できないのに……と悩んでたところ、抱かれると西園さん。神通力が彼らに一気に流れるのがダメなわけで、彼らが私を抱けば彼らが必要なだけ癒しの力を受け取るんだって。

でもってこれが結構つらい。抱くのも抱かれるのも同じじゃん？何が嫌なのと思うでしょ？

全然違う。私が軽く優しく抱擁するときと違って皆が私を抱きしめて離してくんない。

一人五秒と言っても言うことききやしない。

彼らは祝福を受けると、私に対して恋愛感情が生じるようになってしまった。これも半年前ぐらいから。三角関係とか1:5とか1:10とかそんな生ヌルいもんじゃない。私1に対して素民全員、男女の別なく。

ハーレムは男の夢、逆ハーレムも女子の夢。人間時代にはそう思ってたけど、性欲ないからどっちにも萌えられない。男にも女にも

どう？ 神様役やってみたい？

性的な意味では悲しいことに誰にも興味がない。人間的な意味では男性にも女性にも子供にもすこぶる興味がある。性欲はなくても愛情はある、人間愛の気持ち。私という存在はその塊みたいな存在

だから私は今、大人の男女が怖い。女性はキスしてくるし、屈強な男性にぎゅーっなんてやられると肋骨全部折れそう、てか既に折れた。

神様は死にませんが、心も体も傷つきはします。原始時代の人の腕力で時々アバラ折られる。

私、気は優しく力持ちだけど神体って普通の人くらいの強度しかない。骨を折られたり思いっきり首絞められたりもしたけど、仏心で許しました、赤井が顔面真っ青になりながら何事もなかったかのように笑顔で許しましたよ。

今のは赤井が青くつてところが面白くてですね……誰も笑ってないねスべったね。

てか私一応男性型の神だったからいいようなものの、白井さんとかこの状況どうしてんだ？ あ、白井さんは試用期間を終えて白棕しむくさんに改名した。随分昔の話だ。上品にまとまった名前だけど、結婚願望強いのかな、そんな名前つけるってことはつまり白無垢着たいんだよね絶対。古風な女性なんだろう。顔も知らないけど。ぜひ

現実に戻ったら婚活頑張ってほしい。その頃には大金持ちだから、男性も群がってくるよ。あと、青井さんは蒼雲そうじゆんさんになった。

二人ともやらかしちゃった感じだ。

私も折角だから厨二ネームつければよかったのかな。

で、白棕さん女性だから危なくない？ 全員から追いつけ回される大人気の女神様だよ。セクハラとか大丈夫なのかって西園さんに訊いたら、彼女の世界は私んどこみたいにはなっていないらしい。彼女のところは文明が進んで律令国家もどきにまで発展してる。なら一安心か。私んどこだけ何でだよ、行儀悪いようちの民……育て方を間違えたな。

相変わらず私は自分の顔を知らない。

気になったから水鏡や黒曜石っぽいつるつるの岩石に映そうとしたけど、私のオーラに反射して見えなかった。もう忙しくて自分の顔も姿も髪型もどうでもよくなってきた。

髪も切つてないのにずっと同じ髪型だ、ズラ的な何かなのか。たまには変えたいけど。服もずっと同じだし着替えることもできない。パンツ？ 最初からパンツもトランクスもはいてない。

ずっと股がすーすーするけどアレがないからもういいよ、ブラブラのやつが。今となっては懐かしい。あれいじってみたいよ、国民の皆さんはいつもいじってるの？ セクハラですねすみません。

相変わらず、私は不思議と穢れない。服はいつも純白。

衣は汚れても漂白されたみたいになる謎素材、現実にあつたら絶対NASAが目をつけてる。穢れないんだろうけど、せめてと思つて体ぐらい毎日洗う。衣も謎素材で何で洗っていいのか分からないし、襟首にメイドインジャパンみたいなタグもついてないけど、ホントはドライクリーニングとか指定なのかも。西園さんも見てるし、

不本意だけど皆にこれでもかと抱かれる身だし感染症予防のため。不潔にしときたくない。

最低限の、社会人の身だしなみってやつ。

何の話だっけ。脱線しすぎた。

お前の悩みはどうでもいいから素民たちのここ数年の話が聞きたい？ ですよー

ちょっと待ってよ、あとでじっくり話します。

もう脱線しまくりだから本題入ろうか。前置きが長いのも話がまとまらないのも私の欠点。

三行でまとめろ？ 無理。

一言でいうと私の力が強くなってきたから。それだけ民をひきつける誘引力も強くなってきたってことだ。素民たち、私を見ると半端なく恋してる。カリスマ性って恋愛と紙一重なのかな。

てか私にばかり恋愛感情を向けられるのは非常に困る。だって、マジ不毛。私生殖能力ないし神なんだから異性としてノーカウント。ちゃんと素民の男女間でカップリングして結婚してもらわないと、次の世代につながらない。二十七管区の発展も危ういよ。私のため全員が巫女になったり出家されたら困るんだよ。ところで近親交配大丈夫なの？ って皆さん思ってるでしょ。だって始祖は十人だったんだよ？

でもこれは問題なかった。ある一定人数と生活水準に達することに民が勝手に増える。どばつと増えず、追加って感じ。どっかからやってきてこの集落に家族ぐるみでたどり着く。素体の状態だね。いま思えば試用期間中に十五人になってた蒼雲さんとは生活水準が違った二ヶ月で一定の規定に達して最初の追加があったんだ、赤

ちゃんが五人も生まれてたわけじゃない。だって二ヶ月で五人ベビ
ーなんて無理じゃん。

蒼雲さんやつぱできる男だったんだ。チャラいけど。一回会って
みたいな。同期会したいよ。

私の集落に辿り着く素民たちは子供は全裸、大人は枯草のコスチ
ュームでやってくる。受け入れの時は、放浪している素民を見つけ
た人が我先にとダッシュで彼らに衣を着せに行く。

だから彼等を受け入れて彼等と結婚してもらってたら血は濃くな
らない。

よく考えてあるシステムだよアガルタって。そんなわけで私の民
たちには大いに恋愛してほしい。結婚してくれないと次の追加もな
くなっちゃうよ。誰だって新しい出会いほしいでしょ？

もう半年もカップル成立も結婚式もないってまずいよさすがに。

私いつだつてご祝儀用意してるのに。皆欲しがってたじゃない。
私特製の丈夫なお鍋。あれあげるから、結婚してよ。

私以外の対象者で頼むよ。どうするかなあ……。

ああ、そうそう。

【アガルタ第二十七管区 八年目 居住者403名 信頼率100
%】

これが今の二十七管区の状況だよ。私も皆も頑張ってるっしょ。
文明はあまり進んでないけど、弥生時代は確実に突破してる。衣食
住はもちろんのこと、ハクさんのおかげで建築技術も発達してきた。
メグを中心に農業に畜産もはじめたよ。灌漑設備も今やっているとこ。

これ、私はヒントをあげたり手伝ってるだけで、別にこうしろと言ったり指示したわけじゃない。彼らが自分の手で文明を進めてるんだ。

だから微妙に日本や世界史的な文明とは違ってきてる。住居も何か高床式で三角形でかわいいよ。三角形で丸みを帯びてるのもある。土器の形もこれまで見たことない。皆はトックリみたいな土器が好きだ。誰かが染料を見つけて、服もカラフルになった。思い思いの色んな色着てる。紫と黄色のシマシマがこの時代のトレンドみたいだよ。ちよつとどぎついいよね。

イネじゃないけど、主食も決まった。何かペンペン草みたいなやつ。ペンペン草の花の部分が実になってうまいらしい。私は味見したことない。食べ物食べれないし。でも皆が私に何か食べさせようとしてくれる。食べられねーよ、けつの穴もないんだから。気持ちだけは嬉しいよ。

あと、名前。メグやロイやハクやバル、なんて感じで始祖は二字の人ばかりだったけど、四百人もいたら組み合わせ的にかぶるよね。なので今は三文字の人も四文字の人もいるよ。私のリアルな弟の名前、健太ってんだけど、ケンタって名前が出てきてびびった。日本的なものも海外的なものも混じってる。ケンタッキー的なあれかもしれないけど、なんかケンタには愛着がわいた。そのうち家族ごとに姓ができるかもしれない。

統治者はいない。私を中心にまとまってるから、白棕さんとこみたいリーダーがいなのが玉にきず。ロイをそのつもりで育ててるから、彼がリーダーとしてこの集落を導いてくれることを期待してるよ。蒼雲さんとはどこまで進んだんだろうなあ……。

とにかくさつき言った男女問わず彼ら全員、私の嫁になりたがってる。流石に身の危険を感じてきた。私の住まいの洞窟に毎日これだけの人数が押しかけてくる。私は常に彼らが傷つかない程度の強い結界を張って対応するも、結界もいつ決壊するかわかんない。

……これもスベったか。ヨクスベールとか飲んでねえよ！ オモロクナル送ってくれよ誰か。センスがズレてるって言われても、今お笑いどんなのが流行ってるんだよ新ギャグ教えてほしいよ。あまり変わってないか。現実世界ではそんな時間たってないし。こっちの一カ月が現実の一時間だから、現実世界の一日で仮想空間では二年いくつてことだと思ってたけど、それはマックスの速さで進めた場合。

監視する人が夜中は対応できないってことで、監視する人の都合に合わせて私の世界では適当に時間が止められてる。中にいる分にはいつ時間が止められるのか分からない。監視する人によってはもっと時間を遅くする人もいる。さらに文明が進んだらゆっくりにしないと目が行き届かない。だから構築が終わると普通の時間の流れになるんだ、よくわかった。あとはサーバーの情報処理量つても問題もあるね。

西園さんの仕事は構築士補佐っていうらしい。補佐ってか監視員だよ。

西園さんに聞いたら、外では五月だつて言ってた。なら私も五月病か。

私もへとへとだ。祝福ももうまともにできる状態じゃない。強力な結界を張り続けているので、ゴリゴリ体力も神通力も削られる。祝福しなくても皆の思いが私の体に流れてくるからゼロにはならないけど疲れる。洞窟引越して断崖絶壁にでも住もうかと思案中。

そっぴい私、素民の為に合コンパーティーもやったんだよ。大失

敗でしたけどね。

私も結構頑張ったんだよ、何か湖の見えるロケーションにカフェみたいなセツト作ってキャンドルもどきでムードよくライトアップ。料理だつてとっておきの材料でフルコースで作ってさ、神通力で花火もどきも打ち上げてさ。そこで合コンだよ。絶対何組が成立するつしよ雰囲気いいし。お持ち帰りもありつしよ。

なのに私のディナーショーみたいになつてた。

何で皆お互い見てくれねーの。目の前には若い異性がいるのにだよ、もうこれは明らかに異常だよ。段々ひどくなってきたよ。西園さん何か打つ手はないんでしょうか？

とにかく皆がおかしい。メグもメグでこの一連の妙な現象に困ってた。なんだかんだいって私は一番メグやロイと仲がいい。だつて小さい時から知ってるし邪念もない、彼らは最初に私に力をくれた。私は彼らが好きだから彼らの家に通っちゃう。それで、私がメグやロイと楽しく話していると僻まれたり、やっかみ言われたり、とりもち役を頼まれたりするんだつてさ。

私の姿がトラブルとなるなら、もう素民たちに見えないほうがいいんだろうか。それでここ最近は何に結界張って引きこもってるんだ。大丈夫、前みたいなことにはならない。ちゃんと皆には昼間は皆に会いに行ったり手伝ったりしてるよ、あくまでこれは夜の話。そんな悩みを抱えていたら

「あかいかみさまあ……」

夜中、メグがしょげて洞窟に入ってきた。

何でかメグとロイは私の結界を抜けて入ってこれる。始祖は何か特別ななんか、よくわかんない。

こんな夜中に眠れないみたいだ。今日も何か言われたんかなあ。

メグは十七歳ぐらいの外見になってる。

TVに出てるそこらのアイドルには負けないほど超かわいくなっちゃってる。髪もストレートの黒髪、目はぱっちり二重、唇がちよっとぽってりしてエロい。服は今日は黄色のひざ丈のワンピース着てる。身長は百五十五センチぐらいかな。この時代の人としてはちよっと身長が高い。もうロリコンどもがとは言わせない。ロリコン「ども」ってあなた……私は一人身ですよ複数形は間違ってる。昔からかわいかったけど、今はもっとかわいい。私も彼女の成長は嬉しい。胸もこの時代の子にしては大きいよ、形もいいしぷりつとしてる。てことは、この土地の食生活が豊かになってきたって目安なんだ。

目視ではかったらDだった、間違いない。不適切発言でしたかごめんなさい。

『どうしましたか、メグさん。困ったことがありましたか』

白々しく訊いてみるけど、分かってるよ今日君に何があったか。私、相手の心が少し読めるようになったから。祝福を毎日やりまくって骨を折られながら涙目で抱かれまくった結果がこれだ。最近はまだ祝福もまともにできてねーけど。本当は皆を抱いてあげたい、抱かれるんじゃない。以前の私と比べると、皆の信頼の力っていうより諸々、信仰の力、邪悪な力も加わって超パワーアップしてる、いろんなもんが私の中に習合してきた。いい加減普通の状態に戻さないで、私も民もかわいそう。

こんな善じゃなかったんだけど、私の口が少し悪くなったもそのせいか。

……いや私の地の性格ですなすみません。

そのうち神っていうより魔神とか邪神になりそう。昔のスペック

とは訳が違うよ。万能ではないけど、着実に少しずつ近づきつつある。少々の天災からは皆を守ってあげたりもできるようになった。こないだなんて、洪水になったので川の流れを止めたりもしたよ。作物の実りを豊かにしたり、干ばつになったら雨を降らせてあげたりね。空も少し飛べるようになった、数メートル浮く程度。まだ自由には飛べない。

いやそんなことを考えてる場合じゃない。メグの体は温かくて心地よ。

「あかいかみさま、祝福してもらっていい？ ……痛いよう……」
彼女は心も、体も痛いと言っている。ひどい中傷を言われたみたいだ。私は彼女がいとおしくてたまらなくなる。やらしくないって人間愛の気持ちだ。

『よいですよ、メグさん。よく来てくれました』
メグたちだけは私が抱擁するようにしてる。メグは私に抱かれても平気だ、皆のようにビリビリならない。昔からの長い間に少しずつ築かれた信頼関係だから。メグは私の腕の中で、遠慮がちに私に甘えてくる。何でそんな遠慮するの、もっと甘えてよ寂しいじゃん。でもこれがいけなかった。私に抱擁されているところを以前から誰かに隠し見られて、言いふらされたんだ。メグは今日も、色々言われてたくさん泣いた。誰だよそんな小さいこと言うやつ、女子高のイジメかよ。女子高行つたことないから知らないけど。やつぱ皆おかしい、私のオーラが邪悪になって皆を狂わせてるのか。

メグは皆に何か言われるのが怖くて、夜中になるまで私に会いに来ることができなかった。でも躊躇いながらも来てくれた。メグ、君はいつでもここにきていいんだよ。私は癒しの力も半端なくなってる。ありつたけの力でメグを癒しながら、私も心地のよい彼女の力を受ける。

私はどんな力より信頼の力を受けるのが一番心地よくて、メグの力は信頼に満ちていて透き通ってる。ミネラルウォーターと濁った水の違いぐらい違う。私も癒されるし、もっと貪欲に欲しくなる。ロイの力も温かくて優しく好きだよ、でもメグのは別格。

つまり皆の中でも強い信頼の力をくれるのは相変わらずメグとロイなんだ。そしてメグは私のことを愛してくれてる。心を読めるかわかるよ、彼女は私を心から信頼し敬愛してくれている。他の皆とは違う愛し方、全然下心も邪心もなし。

そっぴやロイはやっかまれても絡まれても相手をぶっ飛ばす。腕力もあるしケンカも私が仕込んだから強い。彼も頑張ったからな。でもメグは女の子だからケンカもできないしぶっ飛ばせない。ロイが守ってくれてるみたいだけど、いつも守れるわけじゃない。この集落の農業はメグを中心にやってるようなもの。私が信頼して彼女に任せてる、またそれが皆は気に入らないみたいだ。もうメグとロイ、YOUたちくつついちゃいなよお似合いのカップルだよ。って思ったこともある。メグを守ってあげてよロイ。でもメグはロイより私のことが好きなんだ。

メグ、今日は特に辛かったみたいだ。皆の僻みから私がドーンと守ってあげられればいいんだけど、私がドーンとしゃしゃり出ていくとまたトラブルが大きくなる。てか私が襲われる。こういうのは難しい。

私はこの時間が一番幸せだ。メグ、いいにおい。いつものように軽くではなく少しきつく抱擁する。メグは私に抱きしめられてか細く息をはいた。緊張してるみたいだ、何で？ 私の腕力は強いけど、痛くはしてないよね？ まさか痛いのか？ 力加減間違えてる？ …メグ、やっぱり今日は何か違うよ。

「かみさまあ……ここにいていいですか」

彼女はまた私の名を呼ぶと、私の胸の中でまた泣いた。メグは傷ついてばかりだ。すぐ皆の為に尽くしてくれてるのに、始祖だからやっかまれる。ごめんね、なんか君ばかり辛い思いさせて。少しでも癒されてほしいと思って、私は彼女にありったけの祝福を与える。癒してあげられるまで。

『何度でも来てください、私は歓迎します。あなたにはいつでも来てほしい、私たちは最初から一緒でしたからね』

私がこの世界で心地よい、もつと欲しいと思えるのは、ぶっちゃけあなたの力とロイの力だけです。

「特別じゃない、私……私たまたまあいかみさまに、皆よりたくさん力をたくさんあげられる。でもかみさまにとって私は大勢の中の一人で、皆もかみさまのこと大好きなのに……私だけこんなことしてもらっちゃいけない。ここに来るのは、これで最後にします」

メグ、えぐえぐと泣きながらそう言った。え？　ちよつと何？　そんなに思いつめてたの？

もう来ないってそんな……そんな言わないでよ、私もすげー辛いよ。私はメグを、「信頼の力」をくれるガソリンスタンドみたいに思ってるわけじゃないよ。君の力は心地いいけど、私たちの絆はそんなじゃない。君は最初に私を信じてくれて、そして一番愛してくれている。私も君のことが大好きだ。でも、彼女は私が彼女を信頼してると思ってる。違うよ、違うんだメグ。何か変な話になっちゃってるよ。

『メグさん……きてください』

どうすれば私が彼女を信頼していると分かってもらえるのだろう。

答えが出ないまま、私は彼女を立たせ、洞窟の奥に連れてゆく。足元気をつけてね、後光で照らしてあげてるけど下をよく見るんだよ。いや、だから少女を人目のないところに連れ込んでなんちゃらしないですって！ 国民のみなさん下世話な妄想やめてくださいよ真剣にやってるのに。私はこれでも公務中なんです。

メグは泣きながらついてくる。洞窟の奥は、前は行き止まりだったよね。でも私が穴をあけて、洞窟の向こうに出られるようにしたんだ。

『さあ、先に進んで下さい』

私は洞窟の出口に彼女を導いた。

「？」

メグは少し怯えてる。でも外を見ると……夜の暗闇の中に、一面の花畑だ。色とりどりの蛍光を放つ花の咲く薬草園なんだ。ここは私が薬を開発してる秘密の箱庭。外からは洞窟の壁に覆われてみえないだろ？

薔薇に似た形で、色とりどりの輝く花が咲く。私が薬を創るには合成しかないから皆に薬がいきわたらなくなる、なので薬草の遺伝子組み換えをやってみたんだ。香り立つ花を手折って、メグに大きな輝く花束をつくってプレゼント。明日はきみの誕生日なんだ、まあ始祖全員の誕生日でもあり私が神になった日でもあるけど。というか私たちが最初に出会った日だよ。

『メグさん。あなたが私に力をくれるように、私もあなただけに信頼の証を残しておきます』

私は花束を持ったまま立ちつくすメグを、今度はそつと祝福した。今度は優しくね。もういい加減呼び捨てで呼んでもいいのかな。さんづけってよそよそしいよね。でも皆にはさんづけしてるからメグにだけ特別ってのはだめだ。

『私の真の名は桔平きっぺいといます。覚えておいてください、あなたの心の中でだけ』

そつだよ、初耳だろ？

君らはいかいかみさまって言うてるけど、私の本名はなんちゃら桔平っていうんだ、実に普通っしょ。苗字は言わないけど、下は教えてあげるよ。桔平なんて全国に腐るほどいるし言ったからって特定されないっしょ。

今日は幸い、西園さんも休みでない。だからモニタの前には誰もいないし、誰にも聞かれてないよ。でもそれはアガルタの禁を破ってる。私とメグとの間だけの秘密だ。

「キツペー？」

私は首をかしげながら反復するメグの唇を、しっ、と指でおさえた。

『私の真の名です。私が信頼するあなただけに教えましたが、誰にも内緒ですよ（てかバレたらクビ）』

メグは花束持って嬉しそうだった。キツペイ、キツペイと言って笑ってたよ。よかったね笑顔が戻って。君が私を信じているように、私も君を信じているんだよ。

名前教えるなんて超リスキーだけど上の苗字教えてねーし少しでも気が晴れたなら、私もそれでいい。メグを信じてる。大好きだよ。

私にはメグが一番だ。

なーんて思ってたなら、次の月、西園さんにきつく怒られた。

博多通りもんの菓子箱がモニタの前にある。お昼休みですか。

『構築士が素民に現実世界での名を明かすとはどういうことですか』
なんてこった、ログ漁ったのかよ。どんだけ仕事熱心なんだよ、

膨大な量のログだ。そうだよ、わざわざ民に教える用の仮名まで作っただもんな。赤井っていう。

反省していると……。

『桔平さん』

西園さんがそう呼んだ。なぜに本名で呼ぶ？

『……………はい？』

私は凄く間をあけて答えた。何だよ、何で本名で呼ぶんだよ。赤井でいいよもう。

『私もあなたの祝福を受けたくくなりました……………あなたに癒してもらいたい』

二次元から一体どうしろと。

『現実世界に出られたら、やりましようか？ でも軽い抱擁で何の力も出せないですよ』

私がふざけると、彼女はまたデレた。

『はい、お願いします。楽しみにしています、できれば私もメグのように毎日やってもらいたいです』

こら！ またデレる。絶対からかってるだろ。

私とそのモニタから出てこないと思って。恋愛育成ゲームみたいに思っていないか私のこと。どれだけフラグ立てたって、ヘヴン状態とかやりませんよここはヘヴンですけど。いつか私がチートになったら、呪いながら画面から出てくるかもしれないよ。

そしたらどうするんですか。

んー。

これ、何かのフラグなのかな。でも私はメグがいい。問題山積みだな。

私は一級構築士ではあっても、一級フラグ建築士ではないはずだ。

第2章 第2話 赤井さんの怯えとロイの備え

【アガルタ第二十七管区 八年目 居住者403名 信頼率100%】

ヒーハー！

国民の皆様こんにちはは、ちゃんと納税してますか？
納税してくださいね国民の義務ですから。

私の目下の課題は、住民の総ヤンデレ化を元に戻すこと。こういう状態をヤンデレっていうらしいよ。要は彼らに与えた私の神通力が大きすぎるからいけないんだ。そこで西園さんに相談。

『私、祝福の方法を変えた方がいいでしょうか。でも抱擁や大気を介して以外の祝福方法ってあるんですか？』

西園さんに改めて確認してみた。こういうときは基本に立ち返ろう。何回も確認してみたけど抱擁しろって書いてあるよねチュートリアルには、方法は間違ってるはず。抱擁の意味もあってるよね？ 要するにハグだ。もっとレベルアップすれば大気を介して云々みたいだけそれはまだできないから抱擁しかないんだ。

『違う方法もあるようですよ』

それすげー見たい。で、西園さんが教えてくれたのは千年王国。

千年王国といえば、キリスト教の管区だ。

最初に開設された管区で、キリストがいる。勿論誰か構築士がキリスト役で頑張って演技してる、涙ぐましい努力だよ。

千年王国って世界最大のサーバー持ってるから、それだけエリア

もでかい。西側諸国が予算を重点的につけてるから仕方がない。

さすがに構築時には構築士が創世時から三人も投入されて協力して創造したらしい。こっちは二千年かけたっていつてたな。父と子と聖霊役の三人だ。三人かよ！ 私だけで退職金あわせて五十億以上なのに、本当に金かかっているエリアだよ。

そんな苦勞の甲斐あつてか、プロモ見せてもらったらすげー綺麗な世界。さすがだよ二千年かけて三人でやったんだもん。当然、父役と聖霊役の人は現実空間出て殺されかけた。何で構築士って名譽職なのに今年度から構築士の素性を明かさないことにしたのかわつてと、たぶんこれ。構築士に対するアンチがいるから、誰がどのエリア担当なのか明かせないばかりでなく、もう構築士の身元も内緒にしようってことになった。

あくまでも構築士はプログラマ的な存在だと思われてる。てか私もそう思ってた。

構築士の仕事を終わるとステップアップして維持士になれる。もういいよ構築士だけで、何千年仮想世界に居座る気だよあんたら。

千年王国のキリスト先輩とか、どうやって祝福してんの？ あの人のそ全能に近いチートだから大気を介してか……二千年以上も仮想空間にいる神レベルの維持士だもん。一回会ってみたいよ。でも何かヒントになるかな彼の仕事ぶりを見せてもらったら。

構築中の他管区エリアを私が覗くのはカンニングになるから見せてもらえないけど、開設されて情報公開されているエリアは問題ないらしい。千年王国は日本のサーバーからも見える。

千年王国はウォーリーを探さなきゃいけない難度の人口密集地だけど、どこにキリスト先輩がいるのかは分かる、だって輝いているもん。

出たー！ キリスト先輩だ。先輩は透き通った川のほとりで民からの礼拝を受けてる。白衣着て茨の冠かぶってる。びっくりするほ

どテンプレ、ってかおなじみのコスチュームだ。私のコスチュームと同じ制服なのに何でこの人はこんなに神々しいの？ まさに雲の上の敏腕維持士。憧れちゃうな。

キリスト先輩、さすが世界トップレベルの維持士だよ。なんか民の礼拝の仕方も行儀いいよ、祝福受けるのに一列に並んで明らかに悪人っぽいスミ入った居住者もキリスト先輩に膝まづいてるよ。私の民みたいに行儀悪くない。うちは逆だ私が膝まづいて骨折られる。天と地の差とはこのこと。

あれ？ キリスト先輩、民の頭の上に手を乗せて少し祈るようなしぐさ。

目を閉じただけでも慈悲深い顔してんな。で、終わり。あっさりしてる。ハグはしないの？

『今のが祝福です？』

『そのようですね。この維持士は大気を介しての祝福もできますが、信念あって民との触れ合いを大切にしています』

スキンシップ重視かよ。どんだけファンサービス精神旺盛なんだよキリスト先輩マジかっこいいっすよ……でも何でハグしないの？
そうか！

要は接地面積だったんだ。私の神体と民の体をべとつとくっつけて抱擁するからいけなかった。また、私がべとつと抱かれるのもあまり状況は変わってない。力が強くなってきたら身体の一部が触れる程度でよかったんだよ。早速やってみよう。

『大きなヒントをもらいましたよ。ありがとう西園さん』

『赤井さん』

西園さん、いつものように要件が終わっても私との通信を切らな

い。なに、また私のことガン見してんの？ またフラグ立てようとしてんの？ 私の体そんなにフラグ刺す面積ねーよ。

やるんなら現実世界に戻ってからフラグ刺してよ。あれ？ でも
すげー真剣な顔。どうしたの？

まさか結婚とかで退職するんですか？

デスクの上のダイエットドリンク、まさかウエディングドレスへ
向けてダイエット頑張ってるなんてことないですよね！？ これも
セクハラか……。

『気を付けてください』

『何のことです？』

私が民に襲われないようにってことですか？ あと出生率を上げる
ことも課題だ。てかそれしかないよ今の悩みは。

『もうすぐ第一区画が解放されます』

『第一区画って何です？』

『私はあなたに話せないことがたくさんある。でも備えて下さいと
申し上げることはできません。あなたの力はあるレベルに達し民の生
活も安定しました、それが区画解放の目安です』

例えば旧石器時代から、皆で頑張ってきたんだ。たった八年で弥
生時代以上には発展してると思うし、民の生活レベルも改善してる。
栄養状態もいいし病気で死亡率も減少中。医療も私が全面的にバ
ックアップしてる。私と民との関係はともかく、民の生活は安定し
てるのは間違いない。それが私と民との信頼関係を深めている。ち
よつと今はヤンデレしてるけど、キリスト先輩と同じ祝福の方法に
切り替えれば何とかいけそう。

『第一区画が何かって正体は言えないんですか？』

私も西園さんと同じしかめつらになる。

こえーよ第一区画って何だよ。

『文明の発展のために、人類が繰り返してきたこと。それがアガルタの中でも繰り返し返されます』

……！

西園さん、あなたクイズ問題の出し方が下手。
すぐピンとききましたよ。

『戦争ですか？ 無理です』

西園さんが口を開く前に、お断り。てかお断りだよこーいうのは話が進む前にお断り！ NOと言えない日本人じゃないよ私はどんなときでもNOと言える日本神だ。二の句も継がないうちにお断り。

『無理でも始まります。そーいう決まりなんです』

そんな……今度こそ詰みだよ。

だって私の民はすげー平和主義。狩り用のやつ以外、武器もろくに持ってないよ。ケンカしても素手だし、ケンカしたいときは一対一の素手でやれって私が言った。ケンカのルールも決めてる。相手をやっつけすぎないように、一回ダウンしたら終わり。そしたらそれほど怪我しないからさ。

というわけで武術の訓練なんてしてないし武器もない。集落も要塞みだいにガチガチに作ってない。てか集落に垣根がない。

だから彼らは攻め込まれても絶対戦えない。戦う気もないだろうし……。

『何が原因で戦争が始まるんです？』

戦争の火種つていつたら領土問題とか資源問題とか色々原因があるよね。第一区画つてどこに何人誰がいるのかわかんないけど、戦争になる前に色々段階があるっしょ？ 交渉の余地もあるよね。だったら私は全力で交渉するよ。口下手だし交渉術とかあんま得意じゃないけど、私の民を守る為なら何でもやるよ。

なんなら第一区画の民が困つてるとかなら彼らのためにできることはする、私の力も貸してあげるよ。何とかなるよねきっと。

『回避してみせますよ』

『赤井さん、これは回避することは難しい戦争です。何故なら、第一区画の民はあなたを憎んでいる』

てか私、憎まれることしましたっけ。

してないしてない、第一区画の民つて人らと未だに面識ないし！ まずどこにあるの第一区画つて！ それっぽい場所全然見えなかつたよ。でも私の世界は平坦だ……平坦つてことは、果てまで見てこない限りどこに誰が住んでるかなんてわかんない。私ら以外にも人がいたのか？ 知らなかったよ教えといてよそういうのは。

急に現れたのかもしれないな。私と民が一定の条件をクリアしたから投入された……。私は浮けるけど自由に飛べないし、偵察つても限度がある。

私を憎むつて……全然原因ないじゃん。でもそういう設定で攻めてくるんですか？

これもアガルタの鬼畜仕様の一環なんですか？

『やめてください。区画解放しないでください。見ての通り私たち、のほほんと平和に暮らしてきたんです』

西園さんにやめてと言っても、あまり意味はないと分かってる。
そうという仕様なんだ。

拜啓、異世界の白棕さん、蒼雲さん、どうやって切り抜けてます？

いや白棕さんとはわかってたのかな。文明を進めるためには戦争が不可欠だから、いつかこういう状況になるって。だって律令制までいってるなら徴兵して軍隊も作れるよね。集落も堅牢なつくりになってるのかも。蒼雲さんとはどうなってるのか想像もつかない。チャラいけどあの人敏腕すぎるよ。皆すげーよ見通しよすぎだよ。私は民たちとキャツキャウフフしてただけかよ情けない。

防衛の観点がかけてたよ。西園さん、これからどんなステップで何が起るのか全部知ってるけど私には言えないんだろうな……彼女、私に言えない秘密がたくさんあるって言ったもんな。彼女も辛いだろうな、これを告げるの。

『どんな争いも平和へ導き治めるのが構築士の手腕です。そして他の二人の構築士はこの争いを治めました』

すげー……もう戦争も終わったんだ二人の世界では。当然勝ってるよねこれ。

でもどうやって勝ったの？ やっぱ最初から軍隊持ってたの？
でも戦わせたくない。戦争そのものを始めたくない。

私は西園さんとの通信を終え、洞窟の中でありとあらゆる打開策を思案した。私軍事ものとか戦記とか全然読んでないよ。三国志はかじった程度。まずいよどうすればいいんだ。

考えて考えて一昼夜。夜中の十二時ごろ。
境界を破って入ってくる民がいる。メグじゃない。メグならすぐ分かる。

「赤井様、今日はいかがなされましたか」

燃え盛るトーチを手に携え、現れたのは浅黒い肌の爽やかな長身のイケメン。そうです、彼はあのロイです。十六歳ぐらいになりました。髪もややロン毛だし、体つきもいいので風体がプロサーファーみたいだけど顔は日本人顔じゃない、外人顔でハリウッドスターなみに整ってる。

なんだよこの世界イケメン美少女ばっかかよ。まあそうですよね、私たちグラフィックですからね、わざわざブサメンにする理由もない。服は上半身は何も着てなくて国民の女性の皆様が好きそうな細マッチョ、下半身はゆったりしたズボンみたいなのはいてる。そうそう、ロイってバルとマチから生まれた設定じゃなく、メグとも血のつながりはなかったみたいだ。成長して顔立ちが彼らの系統と違ったので分かった。メグは日本人顔してるしね。

ロイは始祖たちの中でもずば抜けて賢い、つかぶつちぎりが一番賢い。メグも頭のいい子だけど、メグより断然賢いよ。昔はそんなに差がなかったけど、成長するにつれて差がついた。だから私は彼を将来統治者にしたいんだ。彼だけは私を赤井様と呼ぶ。「あかいかみさま」みたいな抽象的な名前じゃない。彼は賢いのでちゃんと形容詞と名詞の区別がついてるし、何でか赤井って漢字も書ける。自然科学も私から何とか覚えたがる。こないだ私が物質構築のためにこつそりメモしてた化学式をコソコソ覚えようとしてたよ……油断も隙もあったもんじゃない。神の秘蹟を暴こうとしているつもりなんだ。まあ神の秘蹟っても単に科学なんだけど、彼には魔法みた

いに見えてる。

ダメだよロイ、この世界で日本語や英語書いちゃ……パクリだからやっちゃダメ。数学は教えてあげたけど、さすがに現実世界の言語はダメだ。メグもある程度色々分かってるんだけど、メグのあれは甘えてるからわざと。

ロイは心配して様子を見に来てくれたんだ、今日は私が皆の前に全く姿を見せなかったから。彼は私が万能の神ではないと気づいている。体調を崩すことはないけど、何か精神的にまいってるのかと心配して来てくれたんだ。

もっと考えようかと思ったけど、もうロイが来たので決めた。

『ロイさん、大事なお話があります』

言っとかないとな。

戦争が始まるってこと。君は戦争って知らないだろ？ 人間が幾千年となく繰り返してきた不毛で醜い争いのことだよ。君たち素民は純粹だ、でもそれじゃきつとダメなんだ。人類の歴史は戦争の歴史で、それで数々の発明が生まれた。悲しいことだけど、これは事実なんだよ。

だからアガルタは現実世界のそれと同じように、戦争をなぞらえる。君たちは傷つくかもしれない。

「はい。何なりとお伺いします」

彼は私に敬意を払って膝まづく。

完全な服従の姿勢だ。敬語ができるし行儀もよくなったよこの子。

『私は近いうち、この場所を去ろうと思うのです』

「……ご冗談、ですよね？」

ロイは膝まづいたまま、ぎよっとしている。そうだろうね、私が去るなんて思いもよらなかっただろうね。無責任な言葉だし、私は最初君たちと会った時、ずっと傍にいて誓ったから。ロイはその誓いを覚えているよね。

でもそれは仕方がないんだ、君たちを見捨てるつもりはないよ。また笑顔でいつか会えるように、私はここを去るんだ。

彼は冗談ではないと察したんだろうか。

私をどこにも行かせるまいと、立ち上がって私の腕にしがみついていた。私の腕をぎゅっと握りしめる。……腕力が強いな、ロイ。頼もしいよ。その腕とその頭脳で皆を守ってあげるんだよ。

「どこにも行かないください。俺たちはどうすればいいんですか」
『……ロイさん、あなたは強く逞しい青年となりましたね』

私も辛くなってきた、ロイを抱擁して祝福を与える。ロイも私が祝福しても大丈夫だ。ロイの体はがっちりしてるよ、頼もしい。重い剣を握ることはできそうだけど、君には剣術を教えていなかった。そうすべきではないと思っていただけ、後悔している。

「あなたにはかないません」

ロイははつきりと私に言った。ありがとう、私を認めてくれて。

前述の通りこの集落は平和で武器もなく、戦争ができるような状態じゃない。第一区画の解放、てか第一区画どこにあるんだよそれ……が避けられないなら、もう降伏あるのみだ。私だけが敵地に入

りこの身を差し出そうと思う。いいよ私はどうなっても、神様なんだからそういうもんだよ。自己犠牲の精神でキリスト先輩に続くことにするよ。

思えばその為に、ここ最近、私は民を狂わせるまでに力を蓄えていたのかもしれない。構築士が第一区画の解放時に民を率いて神通力を揮い、彼らを守りながら彼らを戦争に誘い戦わせることができるように。そういうシステムなんだ。民は私への思慕の思いをここ半年、いつそう強くしている。出生率が下がったのもそれかもしれない。戦争が始まるから……私が彼らを戦争に駆り立てても、たぶん全員がついてくる。総玉砕になっても、彼らは私を信じて命を散らす。誰も怯えはしないだろう。神兵とはこのことだ。

でも私は戦争はしたくない。

こちらが剣を見せれば、血が流れるのは避けられないんだ。アガルタの世界ではそれを望まれているのだろうけど、私は絶対に戦わない。たとえ敵地で君たちから得られる信頼の力を失っても、囚われて虐待を受け続けたとしても、私はそれでも不死身だ。

それに民を惑わす私がこの地を去れば、彼らも正気を取り戻す。昔みたいに温厚で優しい民に戻ってくれる。

私は本当は生身の人間だけど、最大負荷試験はクリアしてるし、大丈夫だよきつと耐えられる。

俘虜となっても死ぬことはない。でも戦争が起これば君たちは大勢死ぬ。大事な命を散らす。

だからそれは避けたいんだ。

私の先の見通しが甘かったせいで、まだ戦いの備えはできていない。

今、この集落を全滅させるわけにはいかないんだ。

『あなたはこの八年間、よく学びよく鍛えました。そして真に強く賢くなりました。もう私が去っても安心です。そして私が去ったあと、ひとつだけお願いがあります』

ロイはふるふると首を左右に振っている。行かないでくれと、言葉にもならず涙目で懇願している。ロイ、ごめんね。君ばかりに押しつけて。でも君は強い、強くなったんだ。大人になったんだよ。

『ナズさんが亡くなった日。あなたは私を殴ろうとして、拳を振り上げたけれど……私を殴らなかつた。あなたは憎き相手を前にしても、どんな極限状況でも、きつと振り上げた拳を下ろすことができず、賢き人間です』

『そのときと同じように』

そして私は彼をきつく、そして厳しく抱擁した。いつも私が彼らに与える力は癒しだよ。でもこのときは彼の身体にありつただけの力を送りこんだんだ。

私の神通力を、何の力にも変換しないで力任せに送りこんだ。神通力が強すぎて、ロイは激痛に苛まれる。

「ぐ……あああ！ や、やめて下さいっ……！」

ロイの絶叫が至近距離から聞こえる。命の危険を感じたのか、私を振り払おうと抵抗を始めたね。君の腕力は強い、でも無駄だ。私は神だよ、どれだけ抵抗しても君をねじ伏せて服従させる。君は人間だからかないっこないんだ。

「あ、赤井様あ………」

ロイの声がかすれてもう悲鳴に近い。わかってる……痛いんだよ

ね、でも耐えられないほどにはしていない。君は人間だから癒しの力に変換されていない私の力を無理にねじ込まれると激痛を伴うはずだ。でも私はやめない。まだやるよ、やめてくれと言われても心を鬼にして何回でもやる。どうか逃げないで耐えてくれ、強い力には強い痛みを伴うんだ。

「くっ……！ も……もうっ……やめ……ゆるし……」

『だめですやめませんよ、もう少し耐えてください』

君の許可も得なかったけど、私は今、君の体に神通力を限界まで含ませているんだ。初めての試みだけど、神の加護を授けている。

誰かを傷つけるためではなく、民を守るための力に代えるために。

『……痛いのは分かっています』

ロイの体が痙攣し、神通力のスパークが見える。限界か……本当はもっと与えておきたいけど、もう彼の体が耐えられない。長い時間苦しめてしまった、ロイの肉体が遂に悲鳴を上げ、意識を失いこっと切れそうになる。もうやめよう、私も正気に戻るんだ。正気 فقط、冷静ではない。

これ以上やるとロイが死んでしまう。手加減をしなければ。

精神的苦痛とショックで死ぬことがある。私はその三倍を経験したけれど、私はこの世界では人間ではない。ロイはまだ十六歳、この世界では大人として扱われていても、まだ幼い。もうやめよう。そこで私はようやく手をとめた。ロイはショックで放心状態だ。気絶寸前だった……尊敬し、長年尽くしてきた神に理由もなく虐待されたのだから。

悪いことをしてしまったね……いたわるように、私の純白の上着を彼に着せかけて抱きかかえる。私の上着は長くて白いストールみたいなものだ。君は力仕事をするからいつも上着を着ないけど、これを私の印として与えよう。

神の衣を、神が与える以外に力づくで剥ぐことはできない。
よって君がこれを纏うかぎり、私が直接加護を授けた証となる。

君が民に向けて語る言葉は、私の言葉として受け止められるだろう。

民が不安になったら、私の代わりに君が祝福をしてあげるといい。少しは癒しの力も授けたつもりだ……。君の体には苦痛と引き換えにそれだけの神通力を含ませた。

「……ロイさん、聞こえますか。よく耐えてくれました」

私はロイの頭に手を置いて優しく撫でてあげる。今与えているのは癒しの力だ。私の一貫性のない行動に、ロイは理解が及ばない。

「……ど、どうして……こんな、俺が何か……お、お許してください」

ロイは混乱して、ひどく傷つけられたという顔をした。自分が何か悪いことをしたのかと尋ねている。それでも一縷の希望を込めて信頼を込めた眼差しで私を見つめる。私は彼に優しく接してきた、虐待されたのは初めてだ。理由を求めている、彼は論理的な思考ができる青年だ。答えを聞くまでは、裏切られたという顔はしていない。何か理由があるのなら、頼むから教えてくれという顔だ。彼は私をなお信頼してくれているんだ、あの時と同じように。

「何があっても誰も憎まないで、振り上げた拳を下ろしてください。相手を傷つけようとすれば、あなたの拳も傷つくのです」

「か、神様……お、俺にはあなたの御心が図りかねます」

彼は私を畏れている。普段親しくしていた私が嘘のようだろうね。でもここは甘えさせるわけにはいかない。

「いまに分かります。ロイさん。大変な苦痛とともに、あなたに私

の力を授けました、あなたは私の神通力の一部が使えるようになるでしょう。神通力は本来神が行使するべき力で、相手を傷つけることもできません。ですがそれは私が許しません。大切な四百三名の私の民……彼らを守るための力です。そして今日をもって、彼らを』

『あなたの手に委ねます』

そうだよ、ロイ。

君がリーダーになるんだ。民を正しく導いてくれ。君をそのつもりで育ててきた、私の民を守り私の声を民に届けられるのは、君しかない。拳を交えず、私が与えたその力で皆で守ってくれ。

そして私は集落を去った。

第2章 第3話 赤井さんが格蘭ダ入り

やあ、ようこそバーボンハウスへ。

国民の皆様、まずはお手元のバーボンはサービスだから飲んでゆっくりしてほしい。バーボンがないって？ ならお手持ちのコーラでも飲んでよ。コーラもないなら麦茶でもいいよ。パソコン立ち上げるなりバーボンをモニタに吹いちゃったと思うけど、あなたがお使いのモニタは正常です。さあ、話を聞こうか。

いきなりグロ見せて反省してる。自重してモザイクかけときゃよかったよ。嫌だったら自分でモザイクでもかけといてね、手動モザイクだからよろしく。でも私はそれどこじゃない、手も足も出ねーとはこのこと。

……マジ動けねーし。

私的には完璧に詰んでっからねこの状態は。
それに何かして気を紛らわせてないと激痛で死にそう。

冒頭の語りがウザいって？ 話の雰囲気ぶち壊しだからやめろ？
あの前回のロイに対する神々しくも慈悲深い（自分で言うな？）
赤井はなんだったのかって？ あれはあれ、これはこれだよ。少しでも話が辛気臭くならないように国民の皆様へのサービスのつもりなんですよ。親しみやすい厚生労働省アピッとかないと事業仕訳されっしょ。

え、お前のナレーションそのものが事業仕訳されるべき？ 勘弁してよ。

さて……真面目にやるか。

どこまで言ってたっけ、第一区画の件だよ。私が今どうなってるかも含め、順を追って説明していくよ。

西園さんのいう第一区画、どこにあるんだろうと毎日空から探してみたら、私の集落はさんで湖の向こうにあった。距離にして十キロぐらい向こう。すげー近い。私の目は別に節穴だったわけじゃない。第一区画の城壁が岩肌と同じ色して同化して分からなかったんだ。すげーよ天然の迷彩色だよ。外からの見た目は頑丈な城塞のみだ、こつちから見える城壁の長辺は三百メートルほどある。でさえ、高さは三十メートルほど。内部どうなってるかわかんねーし、まずは偵察だ。

西園さんのいう第一区画ってこつちの世界ではグランダっていうらしいんだけど、最初に私の集落に攻め込んでくる予定の地区がこらしい。この石壁作るっていったら相当な技術だよ。高度な建築技術の痕跡がある。文明レベルはマヤ文明ぐらい余裕でいってるな。マヤ文明っていつだっけ？ 七〜八世紀だっけ。

飛翔術使って城壁をひらりと飛び越え、城壁の上から下を覗く。あれだな、城壁の中には区画化された住居群。でも碁盤の目状ではなく、迷路みたいに複雑に入り組んでいる。こんな入り組んでいたら、門を破られたとしても一気に本丸（？）に攻め込まれることはないな。外敵からの守りに強そうだ。誰だよ為政者頭よすぎるよ。

私のところに民は木造建築で弥生時代ちよいすぎたぐらいですが何か？ 高床式の三角の家を建ててきやつきゃ喜んで住んでる。かわいっしょ。

……。

やっぱり木造建築が一番だよね温かくて地震にも強いし！

……。

……嘘ですうちの文明って明らかにここより遅れてます。どう見てもうちの民たちと三丁四世紀分は差をつけられてる。何だよこの差は、こんな技術力ある要塞都市もどきがこんな湖はさんですげー至近距離にいたんだよ。今まで攻め込まれなくてよかった。あ、だからまだ「解放」されてなかったのか。これからは「解放」状態に入るからいつ攻め込んできてもおかしくないってことだな。

戦争なんてやったって負けるに決まってる。住居部分の舗装路に武装した民が二人一組で数組うるついでるよ。街中をパトロールしてるみたい。舗装もできんのかよあんたらすげーな……漆喰の技術もありそうだし。ロードローラーなんてなさそうなのに。匠の技かよすげーよ。

ん？　つかこの二人組どうみても兵士です。

現代では些細なことだけど、区画わけしてパトロールを分担してるっぽい。きつとこの分だと兵士間の統率も誰かがとってる。服装は私んとこの民とあまり変わらない。お揃いの黒いフードつき貫頭衣きてら、制服かよ。でも彼らが手に持つてる武器もどき……金属じゃん。うちんとこみたいに石器メインじゃない。あれ何の金属なんだよ……うちにはねーよ鉄とか。

実際、私も鉄とか銅的な何かがないとさすがに困ると思い、集落周辺で鉱脈を捜していた。

私の構築士権限で物質構築はできるけど、質量の大きな物質は難しい。だから鉱物は必然的に単位体積あたりの質量でかくなるし、

構築するつても原子のコピペを延々と繰り返さないといけないからやる気が削がれる。

私は地層解析まではできない。

頼むよドップラーエコーみたいなやらせてよマジで……材料ないと構築も難しいそれがダメならボーリング（地質調査）でもすればいいよね、鉱物だけじゃなく天然ガスとか油田とか温泉とかいろいろ掘れるかもしれないし、地下資源で私の民も豊かになれるよ……。

よく考えたらボーリングするための金属管もなかった。

ダウジング的なものはやってきれいな水脈はいくつか見つけたけど、民の人口を維持してゆくために鉱物資源開発は急務だった。せめてそれだけでもやってから集落を去ればよかったよな私……。けど、いつ第一区画に攻め込まれるかわからないって時だからそんなのは後だ。

目指すは鉄がとれる鉄鉱石的なあれなんだけど、まあこのさい何でもいい。金銀銅炭鉱なんでもいいよもう、何か使えそうなものなら……。そんなわけで私はロイたちにも手広く鉱脈を探してもらっていた……。まあ結局見つからなかったけど。こんな近くに資源があったんだな。

現実世界でもそうだなんな、資源はある国とない国で偏ってる。

そこで持たざる者として私があったことといえば、岩石に微量に含まれる銅に似た元素を元素組替で抽出してそれを砕いて集めて金属くずにし、熱かけて溶かしてそれをガンガン鍛えて皆に鍋やら

刃物やらつくつてあげてた。地味だし地道。特別なとき、冠婚葬祭時に皆におすそわけ。皆喜んでくれてた。

私の技を盗もうとロイは何も言わずずっと見てたけど、私は黙々とやってただけで彼に金属精錬の方法を教えてあげていない。

私の造り方は神様のな邪道だからロイには真似できないし、ちやんとした製鉄法、製鋼法は安定した金属供給が確保できてから教えてあげようと思っていた。

ここは私の集落と違って鉱物資源が豊富なんだ。

……交易とかできたら一発で問題解決なんだけどな。

交易か、楽しそうだなー。

うちの集落の売りは綿織物、絹織物に多種多様な穀物だ。手作りの民芸品なんかもカラフルでかわいいのに。黒ばかり着てる味気ない感じのコスチュームの第一区画民もきつと気に入ってくれるよ……。

でもそれは私の妄想だ。

彼らは何故か私を憎んでいて、私の集落に攻め込もうとしてくるって設定なんだ。それは私が手を打たない限りどうやっても覆せない。とにかく目先の問題を解決しないことには。うまくいけば彼らを懐柔し和平へ持ち込み、交渉が失敗すれば私がこの身を捕虜として差し出そう。それで私の集落は助かる。

てかあの片手剣もどきの金属何使ってるの？

何の素材でできてんのあの金属？ 気になる。

私は飛翔したまま白衣を空にバタバタとはためかせ、青い空をくり抜くように大きく長方形を描き、慣れた所作でインフォメーション

ンボードを呼び出す。私はアガルタのあらゆる物質の材質を、インフォメーションボード内に捉えることで材料解析することができるんだ。現代社会だったら至って普通だけど、この世界では神ならではこのこと。

別に自慢じゃないって、どや顔なんかしてないって。

ボードのタッチパネルに指先で触れ、右時計回りに大きく回す。右回転でズーム、左回転でズームアウトね。よし、片手剣もどきの金属部分をボード内にキャプチャしてトリミング。

『アナライズ迅速材料解析』

インフォメーションボードには生データがずらりと出てきた。といても化学的構造が3D変換されてボードに転送される。私は大抵のものは分子構造を見ればそれが何か、どういう性質を持っているかわかる。

ボードの中で演算が終わり、データが美しくまとまった。原子および分子構造式とともに、初めて見る蛍光色のグラフがババババと積層状に出現する。ウィンドウズのポップアップ画面がババババって立ち上がる感じに似ている。あんな感じ。

そのうちの一つに私は目をみはる、平衡状態図とラベルされた図形が出現したからだ。これが出るってことは単一元素ではなく、そして適当に混ぜて造ったのではなく計画的に造られた合金状態にあるということなんだろうか。

幸い、読み方はわかる。

普通はこういうの、鉄鋼業関係の人しかやらないと思うんだけど、私は科学全般が好きすぎでいろんな分野をかじりすぎた。ある種厨二病患者だったのかもしれないけど、大学でも勉強だけは半端なく

してきたよ。理系分野全般に限りな……私は大学時代では理学部生物学科だったけど、別にバイオテクノロジーしかできないとかじゃない。でもそれがこの世界では役立つてる。

逆に神様のなファンタジー能力に慣れなくて困る。

私は神聖結界みたいな張れたり民を癒したり雨を降らせてあげたり炎を出したり川の流れを止めたり、人の心を読めたり色々できるようになったけど、その原理どうなってんだ？とか考えると夜も眠れない。まあ寝ないんだけど。寝ないし食わないのに何でこんな力があるんだよ、エネルギー収支的におかしいだろとか、信頼の力って何だよ何キロワットで熱量どれだけで仕事量どれだけなんだよ、みたいな。

斥力がどうちゃら重力子が、まさかM理論がなんちゃらとかD-ブレーンの高次元世界がどうちゃらとか、カラビヤウ空間でブレインマシンインターフェイスがNASAの陰謀でCERNの素粒子物理学がどうか、仮想空間でもプロトン衝突でエネルギーがどんだけ……とかぐるぐる考えだす。まあ仮想空間中だからそういうプログラムなんだと思いついで力を使ってるけど。個神的には凄く嫌だ。物理学的に理解できない力は使いたくない。

全部詳しく数式出してほしい。そのうち出てくるのかな？只今の結果は何キロワットで何ボルトのなんちゃら……ってデータ。そのうち出てくるよねきつと。

自分語りはともかく、インフォメーションボードが科学仕様なのは嬉しい。濃度が横軸、温度が縦軸。液相、固相の比率をみてゆるゆる覚えただけど、これはFe-C状態図ってやつに似てる。Feが鉄で、Cが炭素だよ皆さん思い出してくれた？

現実世界の場合は、鉄を主軸とする合金の状態図なんだ。
あくまでこれは、アガルタでの状態図。現実世界のそれとは微妙に違う。

彼らが持つてるのは鉄じゃなく、アガルタで採掘された金属だ。解析してもFeの原子的特徴が出てこないからわかるよ。……原子量的、電子軌道、スピン状態は見たことのない元素だけど、これは合金で強度も大したもの。単一の鉱物だけではなく、強度を上げる。この時代の人たちにしては信じられない技術力だ。

私の民は合金どころか金属も作れやしない。

こんな文明に太刀打ちできるわけない。うちには「太刀打ち」の「太刀」すらねーって話だよ。集落ごと焼き討ちに遭ったら木造なんて一発じゃん、皆、泣きながら裸足で逃げ出すよ。戦争なんてできるわけない。

とりあえず第一区画内にこそつと降りたち、どうしようかと思案してたら、背中に冷たいものが当たった。

やめてよ今それどこじゃない。振り払おうとして二度見。

後ろから見張りっぱいのに襲われてその謎刃物をつきつけられる。やっべー！

今まで集落の中で民に崇められて神様扱いされてのほほんとしてたから気づかなかったけど、私の姿ってマジ目立つのな。そりゃそうだ、現実世界で渋谷とかでも超目立つレベルだ。髪だけなら何ともなくとも、瞳もセットで赤いんだもん。少しは変装でもしてくるべきだったよ。見つかると思うに私が人間でないってばれた。

赤い髪に赤い瞳って私こと「赤の神」しかいないらしいし、よく考えりゃ私後光放ちまくりじゃん。ケバケバなのかピカピカなのか

キラキラなのか知らないけど。この第一区画で白衣着てるのなんて私しかないし、色々輝いてるよ最初にメグも言ってたわ。何で暗い場所なんか隠れたんだよ逆に目立ちまくりだよ。

つか私の芸名は赤井だ。本名はなんちゃら桔平だ。

べ、べつにあんたになんか名前教えてあげるつもりないけど、せめて赤井って芸名ぐらいちゃんと覚えてよねっ！ てな感じでツンデレしてみても意味なかった。いややってませんよそんなのキャラ設定にないから。私ってすげー温厚で丁寧で慈悲深い神って設定に自分でしてるから。構築士としての査定をよくして給料に反映させるためになんだけど。

はいはいバカですよ私は捕まりましたよ、もっと好きだけ罵るがいいよ。

で、私が今どうなってるかは次回な。

第2章 第3話 赤井さんが格蘭ダ入り（後書き）

*次回から残酷（流血）描写あります

第2章 第4話 赤井さんのもとへ、想いは風に乗って

愛想よく降伏し鎖で（鎖まであるんだよ贅沢だよ）これでもかときつく全身を縛られながら、少しずつ兵士の心を読んだおかげで、何でこの地で私が憎まれてるか何となく分かった。

私はこの第一区画の民にとって凶悪な邪神らしいんだ。

何その信仰。ねえそれ誰が決めた？

何かの新興宗教？

やめようよそういうの、こっちは大迷惑してるんだよ。

しかも私に虐められたロイだっていい迷惑だったよ……。

まず私何かしたっけ？ ねえ私が君たちに何かした？

何かしてたら謝りますよ光の速さで謝りますよ、スライディング土下座なり謝罪しますよ。

でも無駄だった。

城塞都市グラランダには既に統治者がいて、邪神信仰を悪い意味でうまく利用してる。統治者が巫力で邪神を退けてるからグラランダは平和なんだ、てな具合の恐怖政治をやらかしてる。彼らのいう邪神の特徴はまさしく私の姿そのもの、業火のような緋色の髪と真紅の瞳……人々の血を啜り朱に染まった。それを統治者の一族が退けてきた、みたいな神話がもともともある。

なにそれすげーこわい。

だから私のこのルックスは現実世界での目出し帽の色が由来なんだってば……なんて言える雰囲気じゃない。

そんな伝説の邪神がグラランダに乗り込んで来たらそりゃ戦々恐々だよ。うん気持ちはわかる。

でも私は単にのほほんと和睦を申し出にきたんだけど。

兵士に引つ立てられながら背中ごしに読心術をかけ続ける。統治者のスオウっていうのは女王だ。よくわからんけどスオウさん頼むよ、何で私を邪心、じゃなかった邪神にするんだよ。邪心なんて一かけらもねーよ、私って人間愛の塊じゃん。どんな人間にも慈悲を与えるアガペーの塊ってやつ。話せばわかる、話せばわかるよスオウさん。

そう思ってたけど、前述の理由で邪神は悪だと信じ込んでるから話を通じそうにないかも。私は兵士二人組に連れられて女王の間へ。背を蹴られて乱暴に突きだされたけれど、仏心で許したよ。今のは神だけど仏心がつてのが面白く……もういいよ解説しないよ。

で、私は鎖で縛られたまま女王の前に突き出された。石造りの暗い部屋に燭台が無数にある。どっかの占いの館みたいだ。呪術的な祭壇もあるし、何か動物の生贄も備えてある。いかにも古代の祭祀をやっちゃってる感じ。

暗い部屋だったけど、私は照明にもなります便利でしょ。すげー明るくしたげたよ、ほら私の顔よく見えるっしょ。別に鬼みたいな怖い顔してないっしょ？

よく私の姿を見てよ、邪神じゃないんだから怖くないよ。

いや、別にその気になれば神通力で鎖なんてぶつちぎるし全員とやっただって負ける気なんてしないけど、とりあえず大人しくしとくよ、争うつもりないし。

「なんじ汝が邪神か」

リアルに相手のこと汝なんじって呼ぶ人に初めて会ったよ、そりゃごく一部の秋葉系はそうなのかもしれないけど。「わらわ」とか「拙者」とか「余」とか「麻呂」とか語尾が「にゃん」とか「ぴょん」とか今更なのかもしれないけど、私はそんな友達いたことないから色んな意味でこえーよ。

そういう妙な言葉って二次元の中……あ、ここは二次元だ。

スオウって人、まだ話し合っていないけど雰囲気もうおかしい私への憎しみに滾っちゃってる。黒いフード目深にかぶって口元しか見えないけど、そのヤバさは何となくわかる。背も高く威圧感がある。油断してはいけない気がする。彼らは私の民とは違う、その性質もスベックも未知数なんだ。巫女王ってやつなのかな。とにかくすげー雰囲気冷たい。私のこと憎んでるって、話す前からビシビシ伝わってくる。

でも怯まず交渉だ。

『違います。過去に邪神と名乗った覚えもなければ、またそう評される行為をした覚えもありません』

何と言ってもきかないよね。

伝説の邪神と同じ格好してるっばいしこうまで思い込み激しい集団は。私がマインドコントロール的な力を持つてればよかったけど、生憎そういう能力はない。そのうち身に付くのもかもしれないけど、まだそういう段階にはないんだ。だから根気よく話して説得するしかない。

「わざわざ何をしにきた、災厄をもたらしに来たというのか」

『私は邪神ではありません。括目してよく見てください、何を怯えているのですか』

もう私を憎んでいる原因は何となくわかったんだけど。あとは誤解を解くことだ。私は邪神じゃないし悪いことはしませんよ〜って信じてもらうしかない。

「余を愚弄する気か！」

一人称は「余」かよ、予想を裏切らず秋葉系だよ。彼女が合図をすると、臣下が剣を抜きおどり掛かった。

私は彼女の合図とともに指一本動かさず眼力だけで強力な神聖結界を張る。

オーロラのような境界面が同心円状に二層、私の周囲に展開される。君らのアングルからは外側の赤い結界が見えるよね、外側のは心理結界、内側の白のは物理結界だ。

絶対に敵意をもって踏み込んだめだよ、外側のやつは戦意喪失するぐらいで済む、でも内側のやつは折角きたえた剣も木端微塵になるし君たち自身も痛い目みるよ。

彼らは私に斬りかかろうとしては結界にトラップされ、それ以上は一步も踏み込めなかった。なんちゃらホイホイみたいだな、心理結界に踏み込むと動けなくなるんだよ。

さて、私はまだ鎖もぶつちぎってない。

後ろ手にされ鎖でガチガチに縛り上げられたままだ。でも私の周囲は後光を受けて煌々と輝き、私が神たる所以を見せつける。こつちも伊達に八年も神様やってるわけじゃないんだよ。ただの人間相手に指先一本もいらぬ。

襲い掛かっちゃいけない相手だって、もうわかったよね？ だか

ら話し合いをしよう。

「正体見せたな、邪神めが！」

邪神の本領発揮、そんな風に見えてるんだろうか。怯えているのがビシビシ伝わってくるよ。悪いね……ロイにありったけの神通力を授けて力衰えても、まだこの程度はわけもない。鎖を千切らなくても君たちを傷つけず動きを止め続けることができるんだ。俯き加減に、優しくも厳かに諭す。少し威圧感を出すとするよ。

『私は争いを望まず、あなたがたを傷つけません。拳を交えることなく、話し合えばわかりあえます』

極限にまで緊張した彼らを金縛りから解放し、真っ直ぐな視線で私は彼女、スオウを見据える。兵士たちは戦意喪失しその場に崩れ落ち、ガタガタと歯の音があわず腰が抜けている。話せばわかるよ、つか話し合いましたよ。私の民にだけじゃなく、君たちにも優しくするつもりだよ、不公平はいけない。信頼してくれば神通力で国を富ませ、君たちを災害もろから守ってあげるよ。少し人数が多くなっても私は平気だ、皆で仲良くやろうよ。

「滅びよ邪神！」

口元をひきつらせたスオウが私に掌底を繰り出すと、私の体は弾き飛ばされていた。私は空中で瞳を見開き鎖をぶつちぎると、白衣の裾をさばいて天井に足場を取る。鎖が木端微塵に千切れ、床に煩わしい音を立ててぶちまけられた。

今のは何だ……?!

たくりあげたフードの下、彼女の細い右腕に、彼女は橙色の炎を

まわりつかせている。つっても別に腕が大炎上とかしてるわけじゃない。彼女が宙を薙ぐと熱風が吹きすさぶ。何だこれ？ でも彼女は人間だし神通力なんて使えるわけがない。これが巫女王の巫力ふりよくってやつなのか？

彼女は顔を覆っていたフードを取り払い、その姿を顕にした。気迫が違う。彼女はその身にオーラを迸らせている。流れるような長い金髪をはらりと散らせ、凜とした青い瞳の少女。

…… 黒衣を纏い冷酷な…… 彼女はメグと同じ年頃の少女だった。

思考回路が止まりそうになったとき、彼女は床を強く蹴り跳び上がると、恐れもせず私の間に飛び込んできた。ちょ……君、物理結界で吹き飛ばよ！？ 私は思わず彼女を庇おうとしたがその必要はなく、私の二層の結界をすり抜け…… 私は燃え盛るその拳によってしたたかに腹部を殴られ床へと墮とされ、すかさず彼女が放った四本の鉄杭によって四肢を石畳に縫い付けられた。身の危険を感じた時。彼女は私の腹部を力任せに蹴りつけ踏み躪る。すぐに身を起こそうとするも、それは不可能だった。

何で？ 力が入らない。

ありえない…… 手首に穿たれた鉄杭が抜けない。

私の腕力で抜けないわけがない。まさかこれは…… 神通力を奪う杭なんだ……。

「口ほどにもなかったな、邪神めが」

彼女は私の頬に唾を吐きかけると、部下に命じ取り寄せた伝説の宝剣を抜く…… それを私の腹部に突き立てた。驚愕すらも置き去りにされ、私はひたすら赤い瞳を見開くばかり。

何が起こっている？ 今！

『ぐ……！？』

彼女、一体何者なんだ……ただの人間じゃない。

邪神に憎しみをぶつけるこの黒衣の少女は何者なんだ？

……そういうわけで。

その後意識を飛ばし、気づけばこうなってたんだ。私としたことが油断した、情けない。

どうしてこうなった。

私は城壁に両手足を縫い付けられ、更に腹部にはとどめのように剛剣を穿ちこまれている。私は高い城壁の門に……文字通り磔にされている。神は死なないので牢に入れてもいつ破られるとも知れないとなると、こうやって皆の見えるところに吊るすのが一番って話なのか。頭いいなあのスオウって子。彼女は残虐だ……私はこの世界にきてからというもの、これほど生々しい人間の憎しみをぶつけられたことがない。

インフォメーションボードも呼び出せない。

ずっとここから降りられない可能性もあるんだろうか？

手首に神通力を奪う杭を打たれてるので一切行動不可。脚にも遠慮なく何本か鉄杭みたいなのが穿たれている。構築士の奥の手であるコンストラクトも使えない。

助けはこない。西園さんは監視してるだけで、この世界に介入できない。ハイパーコンストラクトは仮想空間中で手を使わず誰にも邪魔されず構築ができるが、今は私の緊急事態ではあって民の緊急

事態ではない。

構築士としての能力も使えなかったんだ。

高い城壁に磔にされ、邪神をさらしものにする。少女の姿をした残酷な巫女王スオウ。彼女、あの若さで驚異的な巫力(?)を持つていた。この地に伝わる邪神伝説は本物なのかもしれない、それで代々の王たちは邪神を滅ぼすために己を鍛え巫力を磨き上げてきたんだ。

何だよその設定、なんかその呪力に長けた代々の王たちもすげー可哀そうだよ。

いもしない邪神の為にそんな事になって……。

まあでも巫女王の彼女のにはやっと報われたのかな？

見事伝説の邪神をやっつけたんだから積年の重圧からも解放される頃だよ、英雄ってか聖女だよ、メグと殆ど年が変わらないっぽいのに。その日は祭りの太鼓の音が聞こえてた。

宴会でもしてたのかな。

彼女にはよかったけど、……私は散々だ。

ここは彼女の支配地……私の民からの信頼の力は流れてこない。力が出せないよ……死なないということ以外、ただの人間と変わらないんだ。

雨ざらしにもなり。

日干しになり。

容赦なく嵐が私を打ちつけ体力を奪ってゆく。ここは敵国だ。たっぷりと蓄えていた神通力も徐々に失い……そして私の体は遂に人間と変わらなくなった。

傷口から少しずつ血も流れてゆき、城壁に赤黒いしみをつくっている。

神通力を鉄杭に奪われ動けなくても、私は不死身だ。
こんなに辛くて痛くても絶対に死ねないんだ。我慢しないと。

まだ一か月。泣き言を吐いてはいけない。

キリスト先輩、お元気ですか？ 神として磔もやったことないなんて、まだまだひよつこですよね……あなたみたいに十回百回と数こなしていかないといけませんよね。徐々に経験詰んでいこうと思いますよ……でも最初は辛い。最大負荷は知ってるけどここまで持続的だとさすがに辛い。

こんな筈じゃなかった。

……痛い……でもだめだ、辛い顔はできない。

これ、本当に仕事？

この世界はヴァーチャルで、本当にこれは構築士の仕事？

ただの悪夢だ……。

私がいけなかった。

私が見通しが甘くて、私の民は戦える状態なんかじゃなかった。

手足に腹、局所だけが痛むわけじゃない。磔って呼吸困難になるんだよ、これ豆（知識）な。両腕をぴんと張って磔の状態になったら、横隔膜が動かせないんだよ。息が殆どできていない。神通力があつたときは何とかなってたけど……。

そして私の身には私に対する憎しみだけが集められ……

私は「信頼の力」で神通力を行使する神なんだ、「憎しみの力」は私を痛めつけ消耗させる。

ロイ、メグ……今どうしている？

黙って君たちのもとを去った私のことなどもう忘れて、正気に戻った素民たちと穏やかに暮らしているのかな。そういえばケンタに妹ができるんだったよね、もう生まれてる頃だ。ヤスさん、前腰が痛いって言ってたけど悪化してないかな。癒してあげられてないから心配だ。カイは彼氏、できたのかな、いつも相談に乗ってあげてたけど、そろそろできるといいね。ロイはうまく皆をまとめていだろうか。メグ、シク口菜の収穫の時期だよ。今年はどんな感じになったんだろう。

辛くなるたび、皆と過ごした八年間の思い出で耐え忍ぶ。

強がってはみても、本当は苦しいんだよ……。

でも君たちは私を捜してはいけない。ここに来てはだめだ。彼らの憎しみは未だに私に向けられ続けている。私がここにいる限り、戦争は起こるまい。

私がどうなっているのか君たちは知らないだろうけど、知ったとしても賢い君たちなら分かる筈だ。何事もなかったかのように暮らしてくれ。

たとえ私の居場所を知っても、動いてはダメだ。

今は絶対にぐっとこらえるんだ。間違っても頭に血が上って私が与えた神通力を無駄撃ちなんかするんじゃない。数年ももたず消費してしまう。その拳をふりあげてはだめだ。私はずっとここで磔にされたまま、何年でも待っていていられるから。……何十年単位は無理だ、それまでには助けにきてほしい、でも私は暫くは耐えられるから、その機を待つんだ。

そして君は民を率い歴史の歩みを進め、豊かで強い集落を造り上げなければならない。

今は絶対に、拳を振り上げてはだめだ。

ああ、そういえば一つだけいいことがある。

ここはとても見晴らしがいいんだ。だから君たちの集落が遠くに見える。私はここからずっと見守っている、君たちの幸せを願っているよ。私の加護は届かなくても。

二ヶ月が経った。

湖の向こうに、君たちの集落から立ち上る煙が見える。あの煙はこれまででは見えなかった。君たちはこのところ一日も欠かさず、ずっと強い火力で何かを燃やし続けている。昼夜問わず。今日も皆元気にしているんだね、何よりだ。

薄々気づいていたけど、その煙の色……普通の燃料ではそんな色にはならない。

……君たちはもう鉱脈を見つけ、炎によって精錬し、金属を手に入れようとしているんだな。ロイ、私の技術を盗み見て化学式もこっそり学んでいたから、賢い君にはどうすればいいのか理論が分かっている。

本当に頼もしいよ。

そして半年が経った。

……憎しみの力を受け続けた私はもう、日中ほとんど意識がない。逆にそれがありがたかったりする。死なないけど、こうしてずっと生と死の狭間を彷徨うのだろうか。日が落ちてグランダの民からの憎しみの力が弱まると、夜は少し意識が戻る。相変わらず苦しい。

霞む視界で正面を見ると、いつもと同じ暗闇の風景に思わぬ色彩が加わっていた。それは私が大好きな宇宙の星座か、あるいは懐か

しい東京の街灯の群れのよう。遂に幻覚を見るまでになったのだからか。

でも私は気づいたんだ。

あの方角には私の民の集落があつて……。湖のほとり一面に、私がメグの誕生日にあげた薬草が植えられている。だからあんなに明るく、煌々と水面が蛍光色に輝いているんだ。メグはきっと花束から種を取り、そして湖畔に植えて育てていたんだ。あの薬草の栽培は難しい、それに育て方も教えていなかつた筈だ。でもメグにはそれができる、長い経験に基づいた確かな技術だ。

でもメグ、私があげた花束は確か青と黄色の蛍光の方が多かつたよね。

何だつて君はそんなに赤い花ばかり植えてるんだ。

「早くかえつてきて、あかいかみさま」

風に乗って、メグの声が聞こえた気がした。

第2章 第5話 赤井さんの復活とグラランダの少女

一年が経とうとしていた。

私はもう、夜間も昼間も殆ど意識がない。

時々悪夢を見てハツとして起きるけど、特に景色も代わり映えがないから、基本的に瞳を閉じて日々を過ごす。半年の間で変わったことといえば、私の集落が太い木の柵で囲われた。いいぞロイ、君は私にはなかった国防の観念がある。指導者を君にして、本当によかった。私がないから素民たちの「追加」はないのだろうけれど、それでも敵意のある素民たちが来たらどうしようと考えついたらんだね。そうだよ、集落を柵で囲って関を設けるのが正しい防衛だ。堀を掘つてもいいよ、でもそれだと橋をかけられて攻め込まれる。メグの育てる蛍光に輝く薬花の絨毯が、徐々にその面積を広げてゆくのも嬉しかった。彼女、最初は私の名を呼ぶように赤ばかり育てていたけれど、やがて色とりどりの花畑となった。

幻想的な蛍光の薬花畑は、昼間は見えない。

夜になると煌々と現れるそれは、私と君たちを繋ぐ見えない絆の証のようでもある。

メグ、君は気づいたんだな。

赤い花は痛み止め、

青い花は解熱鎮痛薬

黄色のは病気の予防薬。

白いのは抗ウイルス・細菌薬だ。

色によつて効果が違う。私はそのように薬花を造つた。

遺伝子組み換え生物を扱つて掛け合わせるときには、必ず色が異なるものを選ぶべきなんだ。例えばAの遺伝子を持つ白い花とBの遺伝子を持つ白い花を掛け合わせても、A Bの遺伝子を持っているかどうかかわかないだろう？ だから赤い花にAの遺伝子を、白い花にBの遺伝子を組み込んでいれば、両方の遺伝子の性質を持つ花を選ぶにはピンクの花を選べばいいと分かるよね？

基礎的な遺伝の法則だ。例外はもちろんあるけど。動物だって同じ、白い個体と黒い個体を掛け合わせたら黒いブチが出て、両方の性質を受け継いでいるのがわかる。

私のように詳細な遺伝子解析ができないこの時代でも、経験的にわかることだ。

だから私は君達に手渡すために単色ではなく色とりどりの薬花を作っていた。

わざとカラフルにしていたのは、私や君たちの目を楽しませるためなんかじゃない。

私はそのうち全てを掛け合わせて万能薬を作ろうとしていたけれど、君はすぐに青と赤をかけあわせて紫の花を作った。きつと偶然ではないよね。

そして今は少し薄い紫のやつを植えだした。

白い花をかけあわせたんだ。三種を統合したのか。

うまく組み合わせができたようだよ。

実は色だけではなく香りも変えてあるんだよ、だから二種類の遺伝子がその薬花には組み込まれている。

私が言わなくても気付いているよね。

最近君が育てはじめたオレンジのと薄緑のやつは、一体何の効果

があるんだろう？

君の薬草栽培技能と知識は既にかつての私のそれを追い越しつつあり、薬剤師として集落の皆の医療を支え始めたのかもしれない。君は為政者としてのロイの右腕になってくれてに違いない。

君たちの成長が眩しいよ。

幸いなことに、ここから見る朝焼けはきれいだ。

私は朝焼けと夕焼けの空が好き。

意識を失っていても、地平線から昇る朝の陽を浴びると眩しくて少し目を開く。

東京では朝焼けに燃える空を見ながら、よく川辺をジョギングをしたりしたもんだ。懐かしいな。

お気に入りの音楽をかけながら、気持ちのいいもんだよ。そういえばマリさんが弦楽器を作っていた。あれはどんな音色を奏でたんだろう？

私は夜、メグが慈しみ育む薬花畑を見て今日は何が咲いたかを確認し彼女の成長を喜び、朝焼けとなるまでは眠るようになっている。

ある夜……それはよく晴れた真夜中のことだった。

私の浅い眠りは、唐突に妨げられた。

闇の中からガサゴソと物音が聞こえる。

「ま、ま、まだ生きてる？」

震える少女の声が、すぐ近くから聞こえた。

『……………？』

驚いて声のする方を見れば、はしごが私から数メートル離れた隣にかかり、それを少女がえっちらおっちら、登ってきていた。長い木の梯子が、私の隣にかけられている。闇夜に目をこらすと、梯子につかまっていたのは黒衣の少女。

十歳程度かな、茶色い髪を肩まで伸ばしている。顔立ちはまだ幼い。黒衣はこのグラウンドではテンプレみただけど、裾がボロボロに破れている。もしかして家が貧しい子なのかな。

私は彼女と面識がない。梯子から落ちないように気を付けてほしだけれど、彼女は震えながら私を見ている。

そういえばここ一か月というものの、私は体力温存の為に碌になつたまま殆ど動かなかつた。エネルギーを消費しないためには、何であれ動かないのが一番だ。死なないにしてもこれほど意識が落ちては困る、何があってもいいように思考能力だけは残しておきたい。たいして賢くもないが、私の頭脳だけが今は私の唯一のとりえ、そう思っていたから。

微動だにしない私を下から見上げていて、死んだのではと思いき味本位で昇ってきたのだろうか。友達とふざけあって、肝試しでもしてたの？

理由は分からずとも、私は何も言わず無言で彼女を見つめる。

こちら暇だし彼女に興味はあるけど、あれこれ質問する体力がない。

「じ、邪神……まだ生きてんだ」

彼女は緊張で今にも梯子から落ちそうだ。私は急に彼女が気の毒になつて視線を外した。

『一度その梯子を降りて、気持ちを落ち着けてから来てください』
「……え？」

私は本当に久々に声を出した。使う必要なんてなかったから、自分でも驚くほど声が違う。喉が枯れてうまく話せないんだ。誰かの顔をこれほど近くで見るとも久しぶり。声が掠れていて聞き取りづらいたろう。少し声を張って、再度彼女に忠告しておく。せっかく苦労して昇ってきたのに、彼女が落ちてしまうのは忍びない。

だから一回降りるといい。

『心を落ちつけていないと、落ちてしまいますよ』

高い城壁を上るのに、まあ現代人だったら分かると思うけど、重い木の梯子をかけてはいけないよね。梯子をかけても上端を固定すればいいけど、さもなくばバランスを少し崩せば傾いて落ちてしまうから。縄梯子を使うかロープをかけて登ったほうがこの場合は安全なんだ。

彼女は私の忠告に従い一度梯子を降りたあと、スーハ スーハと下で深呼吸をして、今度はその梯子をより私の近くにかけてそりそりと登ってきた。辿り着いた彼女は、彼女の手が届く距離にいる。一方、私の手は自由にならない、相変わらず磔になっている。

ちょっと派手な昆虫標本みたいだよ。まあ私の神体は標本にする価値がある、せめて野ざらしでなく、もったきれいに飾ってほしいかな、直射日光の当たらない涼しい場所で展示会でもやればよかったのに。皆が見に来てくれたら少しずつ彼等を説得していった。スオウは本当に頭がいいな。見せしめに民の前に私を掲げることは必要だが、民心を惑わす私と彼等を直接接触させてはいけないと計算済みだ。

彼女は至近距離から、じとつとした視線を投げかけてくる。いつまでも話しかけてくる様子がないので、尋ねてみた。

『どうしましたか』

とはいえ、こんな夜中に一体何の用だ？

私これでも就寝中でした。体力消耗したくないし、手短にたのむよ。

彼女は恐る恐る指を伸ばし、私の腕をつんつんとつついた。んー、別につついてもいいけど、何がしたいの？ 邪神の腕にタッチしてこいつて罰ゲーム？ それは結構シビアな罰ゲームだね可哀そうに。そういう肝試しならよそでやってよ、もっと墓場とか霊が出そうで怖そうなど色々あるっしょ。

「邪神って、何でまだ悪いことしないの？」

『悪いことなんてしませんよ』

冷やかしなら勘弁してくれ。

話だけでも消耗するんだから……それに動けないんだよここから。

「邪神って、病気を治せる力持つてる？」

『……昔はできました。でも今は無理です』

邪神に興味深々だなこの子。

西園さんの神様フェチ的な、邪神フェチかよ。またまた新ジャンルだ、ついていけない。読心術ができれば何考えてるか分かるけど、生憎私は力が出なくて人間と何も変わらない、頭の回転だって超低速。ミッション車だったら一速だっていってない状況だ。燃費も悪い。

「今は無理？ いったつたらできるの？ 今すぐは病気治せないの？」

『どこかに病気を患った人がいるのですか？』

そりゃグラランダにも病気で苦しんでいる人はたくさんいるだろう、死にそうな人もいるだろうし。それは私の責任ではない、人生とはそういうものだ。

人は生まれ、必ず死ぬるもの。

それが自然の摂理であつて、仮想空間の中でもそう。いつか私が万能の神になれば素民たちを死から解放できるかもしれないけれど、それは正しい方向性ではない。私は私の責任で最初に命を散らせてしまったナズ以外に、蘇らせるべき素民を知らない。

「私のお母さん、お腹がずっと痛くてお腹が壊れてる。水みたいに下していて……顔が茶色っぽくて変になつてる。頭も痛いって。ねえ、邪神は私のお母さんを助けられる？」

ん？

それって黄疸のことか？ この子、さつきから必死だな。んな高いところに梯子かけて登つてきて邪神、いや邪神じゃねーけど……と話そうとしてるんだもんな。ある意味勇者だよ。梯子だってこんな長いのあるわけない、この子の手作りなのかも。運んでくるのも立てかけるのも大変だつたらうに。

『お母さんの体は熱いですか？ そして尿は出ますか？』

ここまで登つてきた彼女の勇氣に免じて、億劫ではあつたが一応尋ねてみる。

症状だけ聞けば、私は何となく思い当たるふしがある。

「おしつこ茶色い。体もすごく熱い」

『ごはんは食べられますか？』

高度数十メートルで問診中です私。なにやってんだ。

でも久しぶりだ、こうやって誰かに頼られて相談されている感じ。私が集落にいた頃には普通だったけれど、多少でも必要とされるって嬉しいことだよ。

「食べられない。食べてもすぐ吐く」

『ここ最近、お母さんに傷があったことがありますか？』

「うん、手を切ったことがある」

うーん、ウイルス性肝炎の急性期なのかな。

肝炎ってA、B、Cとあるけどどのタイプかな……なんか怪我したことあるっていうし聞いているとB型っぽいな。メグのとこの白い薬花を煎じて飲めばすぐ治りそうだけど、てか一発で治る。そこに行ってもらってこいってのが確かかもしれないけど、この子の足でロイの集落に行こうとしても絶対迷うし数日では辿りつかない気がする。

ウイルス性肝炎は急性期は数か月、基本的に安静にしていたら慢性化して症状が落ち着くんだ。でもたまに劇症化する人もいるし死ぬこともある。この時代の人のことだから、栄養状態によっては容体がどうなるかわからないな。食事がとれないと言っているし体力もなかるうし。

「お母さん、このまま死ぬの？」

彼女は声が震えている、私が「死ぬ」と言ったら梯子から落ちてしまうかもしれない。

『普通は死にませんが、体力次第です。私にはわかりません』

残念ながらそれは神にもわからない。運がよほど悪くない限り生きのびると思うけど、本当にこればかりは体力次第だ。そしてその

後、もれなく慢性肝炎になって肝臓癌になりやすくなる。

「邪神のくせに分からないの?!」

つつかかってくるなあ……。くせに」って何だよ邪神じゃねーよ。それに邪神にどんだけ熱い期待寄せてんだよ。そんな頼らないでよ邪神とか言うんだったら。グランダにはグランダの神、つか崇拜対象がいる。天空神ギメノなんちゃらって言ってたな、寿限無ほど長くはないけどすげー長い名前だったから忘れた。あいつに頼めばいいじゃん邪神なんかにお願いにこなくても。

でもそれ天空神じゃねーし偽物だよ。

毎日祈ってたのかもしれないけど、ご利益がなかったんだろうな。そりゃそうだ、本物の神って私だけなのな。

西園さんも言ってたけど、二十七管区の神は私一人、つか一柱だけだ。

いや、別に他にいてもいいよ。むしろたくさんいてくれた方が私だって助かるよ。そんなにいるなら構築手伝ってほしいよね。……なので天空神とやらの偽伝説はしょーもないウソ。あくまで迷信。小さな子が本気で祈ってるのに、まったく罪深いエセ宗教だな。

その天空神なんちゃらがスオウの一族の祖だとされていて、お決まりの天孫降臨ってやつ。なので私は邪神扱いでこのありさま。こは一応否定しとかないと。

『私は邪神ではありません』

「?!」

『私は”邪”のつかないほうの神です』

信じてくれないかもしれないけど、邪心なんて一かけらもないよ。この世界に入った時、私の中の濁ったものは溶けてなくなった。

人間だった昔は邪念も邪心もあったと思うけど、建前以外には人間愛の気持ちしかない。

「え!?!」

え!?! じゃないよ……カルト教団の洗脳から正気に戻った人って皆こんな反応なのかな。すげーびっくりしてら。そうですね、私は構築士、以前はこの世界でのほほんと神様役をやっていました。まあ、それも少し前の話だけどね。今は単なる干物だ。煮ても焼いても食えないぶん、干物より悪いかもしんない。

「お腹に剣が刺さってるよ?!」

「そうですね」

グロを子供に見せたくないけど、抜けないんだからどうしようもない。この剛剣も手首の杭と同じ素材で、私の神通力を相殺し憎しみの力を集めて送り込んでくる。

「動けたらお母さん助けてくれる?」

「……それだけではできません」

私が神通力使えるようになるまでの条件って色々縛りがあるんだ。最初は右も左も分からないまま苦勞してたもんな。

ところで実質的に私はここから動けない。例えばこの子に運よくここから逃がしてもらったとしても、そしたらスオウさん邪神が逃げたとか言いだして周辺の土地に侵攻しそう。つか彼女なら絶対やる。

それでロイたちの集落を見つけたら……どうなるかもう考えまい。

「どうすればいいの!?!」

『どつて……』

私はロイたちの集落が力をつけるまで、ここで晒し者になつてつもりだから助けはいらさないけど、考えてみればこの子の母親にも罪はない。こんな必死に頼んでるなら、助けてあげたい気持ちはある。

「なんでもするよ！ だから助けて！ 邪神じゃないって信じるから！ 何でもするから！」

その言葉、本当？ ……普通信用できないつしよ皆からは邪神だつて言われてるのに君だけだよ、ちよつと変わつてる。でも……彼女はその証明するかのように私に抱きついてきた。藁にもすがる、まさに邪神にも縋る思いなんだ。

ドクン。

……私の中に、忘れかけていた熱い力が蘇る。

異国の地、敵国にて。私の民ではないたった一人の少女から施された温かで切ない願いを受け取った。彼女は磔にされたままの私を、助けてと言いながらあらんかぎり抱きしめる。

そんなに頑張つたら梯子から落ちてしまいやしないか。

『力が……戻ってきましたよ……。左右どちらかの手の杭を抜いてもらえますか』

鉄杭を抜こうとする彼女が落ちないか心配だったが、彼女の服の裾を私の上腕にきつく結わえさせた。命綱のかわりだ、落ちてもいいように。私の両手首に穿たれた錆びかけた鉄杭は岩肌へ深々と埋め込まれている。彼女の腕力で抜くのは難しいだろう。

少しずつ、少しずつ頑張ってくれ。

朝が来る前に。

彼女の爪が割れ、指先を血が伝いはじめた。痛むだろう、しかし君は弱音もはかず諦めず少しづつ抜いてゆく。お母さんの命がかかっているんだ、そう思えばきつと頑張れるよ。

いいぞその調子、もう少しだ。

てかこの鉄杭の素材って何？ すげーよ、神通力を相殺する素材だよ、何か呪力みたいな力が結晶化されてる感じ。だからこの子の手も傷ついている。

解析かけてみたいけど、何なのか気になる。

そして彼女は三十分ほど奮闘の末、彼女は鉄杭を抜き遂げた。

すぽんと抜けた杭を持ったままバランスを崩し梯子から落ちそうになった彼女を、自由になり解放された私の右腕が抱きとめ、梯子につかまらせる。

そして私は、自ら左手首の杭を引き抜いた。

約一年ぶりに、私の両手は自由を取り戻した。神経が固まってピリピリと痺れるが、動かないことはない。彼女はそんな私に期待と恐怖の入り混じった視線を投げかけ、私は彼女の不安を受け止める。そうだよ、邪神なら解放されたと同時に君を殺すだろうからね。

答えをだそう。私は邪神ではない。

彼女を安心させるように彼女を腕の中に抱く、久しぶりの抱擁だ、懐かしくて温かい。祝福し、ほんの少しばかりの癒しの力を彼女の体に返す。彼女の呼吸が少し落ち着いていた。私の集落の民でなくとも、癒してあげられるようだ。

「邪神ではなかったんだね……」

『私はただの神です』

彼女は安心して微笑んだように見えた。私の指先はすべらかに空を切り、スクエアを閉じる。

構築士のコンソールパネル、インフォメーションボードを呼び出す。出やがったな、暗闇の中にあらわれた白銀のボードだ。

眩しい……やけに輝いて見えた。

さあ、久しぶりに加速構築ラピッドコンストラクトといきましょうか。君の信頼の力に報いよう。

化学式はC₁₂H₁₅N₅O₃、分子量 277、
IUPAC名は、2-Amino-9-(1S,3R,4S)-4-hydroxy-3-(hydroxymethyl)-2-methylidene-cyclopentyl-6,9-dihydro-3H-purin-6-one

君のお母さんのB型肝炎の薬、これからすぐに創ってあげるよ。よかったね、勇気を出してここにやってきて。

第2章 第6話 赤井さんの行動開始と西園さんの鬼畜っぷり

通常構築と加速構築っての何が違うかっていうと、通常構築は緊急性のない構築。加速構築は緊急性のある構築だ。ハイパーコンストラクトはもう二度とお目にかかりたくない、あれは住民全員死亡フラグがたつた場合のみ。

加速構築は誰かの命がかかっていて、「助けて」という言葉と願いが引き金となって可能となる。

彼女が助けてって言うてくれたから加速構築ができるんだ。この構築方法は通常構築の三倍の速さまでできる。通常の三倍の速さで動ける赤い彗星のなんちゃらとかじゃない。いや、「三倍の速さで構築できる赤井」まではあってるな。

で、この薬の特徴は、ウイルスの逆転写酵素を阻害することにある。

もう特許期間切れてるだろうけど、製薬会社が特許とってつから一応薬の名前は伏せるよ。仮想空間中だから大目に見てくれるだろうけど、私が勝手に合成しちゃうのは本当は違法。

特許料払わないと。

あ、でもIUPAC法（国際化学命名法）での名前を言ったから、内緒にしても意味ないかも。

逆転写酵素ぎゃくてんしゃこうそっていうのはあれだ。

普通人間は人体の設計図であるDNAからRNAを転写、つまりコピーを取って、それをタンパク質へと翻訳する。でも一部のウイルスなんかはRNAからDNAを合成しやがる。その過程を逆転写っていうんだよ。人間は逆転写のできる酵素なんて持ってないから別にそれを阻害したって人間に害はないよね。そういうメカニズム

の薬なんだ。

全ての薬には、その薬の効果を発揮する原理（薬理）がある。この場合、ウイルスを殺す方法ではない、逆転写酵素を阻害してるだけだから。ウイルスの増殖を阻害するって方法だ。

だから薬は飲み続けないといけない。

久しぶりに薬のセールスマンみたいだ。

この一年、脳が錆びついてたけど、この子に信頼の力をもらって蘇ってきたよ。

これも経口で飲める薬だよ。つか私は経口以外の薬には手を出したくない。まだこの時代はあらゆる面で清潔ではないから、針刺し事故とかもう即感染症につながる。最悪、エイズとかに一発で感染しちゃう、ミイラ取りがミイラなんて生ぬるいもんじゃない。即死につながる。

B型肝炎には、インターフェロン治療も一緒にやったほうがいい。でもそのインターフェロンはタンパク質なんだ。私がいつも造る薬が低分子ならば、タンパク質やDNAなんてのは高分子、超高分子ってな分類に入る。めちゃくちゃ分子量でかくて、構造も複雑。コピペなんかじゃ無理。構造だつてさすがの私も覚えてられるわけではない、覚えられてたら有史以来の天才だし、現実世界でも神様やつてる。なんなら立候補するし！

冗談はともかく。

その領域に踏み込むには、遺伝子データベースとクローニング技術が必要なんだ。学生時代はクローニングなんて朝飯前だったよ。大腸菌の中に遺伝子を組み込んで、大腸菌にタンパク質を大量合成させるって方法があるから、それでインターフェロンを抽出すればいい。でもこの世界ではまだそういうのは無理。そのうちインフォ

メイションボードにバイオデータベースが追加されればできるけど、まだない。で、私は低分子の薬ばかり作ってる。あり合わせで対応してるんだよ。

皆さんの愛妻弁当と一緒に。昨日のおかずのありあわせが入ってるっしょ？

え？ 違いますかそうですか。なかなかママですなあなた方。

『できましたよ』

「ほんと!？」

彼女、私にぎゅーっと抱きつく。ますます信頼を強めてくれる。くすぐりたいじゃないか。こやつめ、ハハハ。今のはネタです。誰も笑ってないね。まあいいや。

加速構築で難なく合成を終え、あとは数量の問題。つまり処方量だよね。薬は処方量を間違えると副作用やらで大変なことになるよ、適当ではいけない。でも量りなんてない。で、皆さんはどうする？ 高校の化学思い出してね。てか皆さんが構築士になっても結構いるんな事できるもんだよ。

ん？ そもそも薬の構造式しらねー？

ダメか、皆様が構築士になったらすぐ詰むか。

そう、分子量から正確に質量を弾き出す。ちゃんと計算すれば質量はもう細か過ぎるほど完璧に正確に出る。ヒント言わないから高校生のみんなは自分でやってみてよ復習だ。で、私は四回分の処方量にしておいた。偶数倍つてところが大事。

『四回分のお薬を出しておきますね』

薬局かよ。赤井薬局だよ。現実世界でも普通にありそうだよな。

「どつやって4回分に分けるの？」

『全部水にとかして、小さな升で半分に分けます。そしてそれをさらに半分に分けます。それが一回分ですよ』

秤や量りがなくても大丈夫だよ。このグランダには升があるんだ。なんか下で役人みたいなのが穀物の税徴収してたから知ってる。大、中、小の三種あるみたい。量りがないから升ではかって、お母さんに飲ませてあげてよ。よかったね助かるよ。

私は両手は自由になるものの、下半身礫になって血を流しながら彼女に処方の仕方を教えてあげる。こんな格好で算数の勉強おしえただげる。なにやってんだ私、流血しながら頑張りすぎだろ。

「ありがとう、……神様！」

そうそう、私は邪神ではなくただの神だよ。ようやく分かってくれたね。

インフォメーションボードを閉じようとする、おやまあ、「入電！」という赤井、じゃなくて赤い文字が出現している。百パー西園さんからだよこれ。私は受話ボタンを押し、通話状態に入る。勿論目の前の少女には西園さんの声は聴こえない。

『赤井さん！！ 大丈夫ですか！』

やあ西園さん、一年ぶりですね。あなた顔をパンパンにはらして号泣しながら見てたんですね。鼻水やら涙やらをかんだティッシュの山がデスクの上に無数に……彼女の方から連絡は取れないんだ、私がインフォメーションボードを呼び出さない限り、西園さんは入電しても私を呼べない。

『お久しぶりですね、西園さん。見ての通り、ほうほうの体ですが』
『赤井さん……あなたという方は……何故”リタイア”を宣言しな』

かったです！ 私はリタイアを宣言してほしいとずっと祈りながら見守り続けていました』

うん、分かってますよそうでしたね。

日本国憲法下での基本的な人権保護の観点において、構築士はインフォメーションボードを呼び出さなくても急に辞職したり現実空間に一時的に避難することができましたよね。

だってインフォメーションボードって長方形描かないと呼び出せないのに、手錠とかかけられたら速攻詰むからね。でもそれには”リタイア”と天に向かって叫ばなければ成立しなかったんだ。私はリタイアを宣言しなかった。リタイアするとリセットされるし。そこで西園さんは仮想空間から私を助け出すことができなかつたというわけだ。

『負け惜しみのように聞こえるでしょうが、一応、これでも計画通りなんです』

第一区画は解放されているが、ロイの集落はまだ無事だ。それが何より。

ロイたちの健在は夜になるたび現れる薬花畑や力強く立ち昇る炎にあらわれている。彼らが全滅してしまっていれば私は失意のうちにリタイアを叫んでいたに違いないけれども、彼らはずっと頑張っているんだ。

彼らの幸せを願い彼らとの思い出を呼び起こせば、それを心の支えに頑張れた。

『それより、私はあなたに感謝していますよ』

チュートリアル

その六 構築士は、リタイアを宣言した場合に限りアガルタから脱出できる。

その七 構築士補佐官は状況に応じて構築士を解任できる

『そんなにモニタの前で泣きはらしても、あなたは私を助けなかった。さすがは西園担当官、あなたが鬼畜伊達メガネでよかった』

ありがとう西園さん。

あなたは私がこんな状況でも「諦めていない」と分かっていたんですね。だから号泣しながらも、助けたり辞めさせなかった。彼女にはその権限はあったのに。ただ泣きながら見守り続けた。

私が日干しになり雨ざらしになり降雪に凍え日々衰弱し、力衰え血を流し、皆の憎しみを受けながら干物のように動かなくなっただけの様子を……あなたはぐっところえて傍観してくれたんだ。

『それ、誉めているの？ けなしているの？』

誉めているんですよ。

『とにかく、私はまだ大丈夫です』

にしても、そろそろ空が白んできたな……私の大好きな朝焼けがやってくる。私はとにかく一度通信を切った。また夜にコソコソ隠れて行動するしかない。

『何をぶつぶつ言っていたの、神様？』

少女が私の独り言に首をかしげている。そうだったね、君は話が聞こえないからおいてきぼりだったね。

『そろそろ帰ってください、ここに來たと分かれば大変です』

鶏もどきの鳴き声が聞こえる、朝だ。

誰か人が来るかもしれない、兵士だとまずい。早くこの子を帰らせないと、罰せられて酷い目に遭う。私はもともと穿たれていた謎素材の鉄杭を懐にしまい、それによく似たレプリカをコンストラクトで二本造り上げた。

ばれないようにすりかえところ。

私は左手首を先ほどと同じようにレプリカの杭で穿ち、城壁に縫い付けた。大量の鮮血があふれ出る。すげー痛いけど、呪力がないからタダの杭。全然いける、耐えられるよ。

私はもう一本のレプリカを彼女に、ほいと手渡した。

『これで私の手首をその壁に穿ってください。血が出てもしっかり、外れないようにきちんと穿ってくださいね』

これはレプリカだから大丈夫だよ。また夜になれば自分で抜ける。でも少女は左右に首を振る。

「やだ……やだやだやだ！」

駄々をこねだした。

困ったね、こんな状態になった子供は厄介だよ。

『お願いします。我慢してやってください。やらないとバレてしまいます』

こんな小さい子に自分の手首穿たせるとか、レーティングに引っかかるってかPG12じゃん、てか本当に酷だよ。でも私の手は二本しかないから、自分で両方縫い付けるのは無理。

君がやってくれないと、すぐに見張りにバレて大変なことになる。

「神様、だつてそんなことしたら痛いよ……」

彼女はぐすんぐすんと泣き出した。

君は優しい子だな。急にいとおしくなつて、私は彼女の頭を撫でてあげる。でももう私的には杭の一本ぐらい今更だよ、一本増えたって全然痛みは変わらないよ。この状態見てよ、もう既に体に七本も刺さってるんだよ。こんなにブスブスやられてるから今更すぎるよ。私人間ダーツじゃねーけどその状態に近い。もうブルで五十点

かブルズアイの百点で高得点目指してがつんと刺してよ。ダメ？
無理？ 無理か！。

私の容姿は人間と何も変わらない。人外のルックスしてたらどこが何かわかんないからざくつと刺してくれたかもしれないけど、人間の姿してるから刺せないんだね。

「一緒に降りよう!? ねえ！」

彼女は必死に訴えかける。

『降りたい気持ちはありますが、故あってもう少しここにいますと思えます』

動くにしても、もつと色々と情報を集めてからだ。夜になれば自分で杭を抜いてインフォメーションボードが呼び出せる。夜になったら呪いの鉄杭のアナライズをしよう、何か行動するにしてもそれから。情報を集めなければ動けない。

『私を助けると思って、絶対にその杭を穿って帰ってください』

大丈夫、ピアスみたいに大きな穴があいてるだろ。だからそこに通してくれば力を込めなくても自然に貫けるよ。

「やだやだ！」

彼女は鼻水も涙もだーだー流して首をふる。

『わかりました、ではここまで自分でやります』

私は杭を口にくわえて噛むと、自らで右手首に杭を通す。針通しのようにうまくやったので、それほど出血はない。あまり彼女に血を見せたくなかった。

『さあ、あとはその壁に押し込むだけです』

彼女は大泣きしながら私の手首のレプリカを壁の穴に押し込む。私の手首をもとのように壁に縫い付けると、彼女は最後にダメ押しのように抱きついた。うーん、信頼して慕ってくれてるなあ。ごめんね、グロ見せて。

今、私に信頼の力をくれるのは君だけだ。
たった一人ぶん。でも本当に嬉しいよ。

『よくやってくれましたね。よろしければ、あなたの名前を聞かせてください。覚えておきたいのです』

「私はナオだよ！ 神様は神様なの？」

『私は赤井といいます』

私の芸名、どうせ形容詞だと思ってるんだろ？ 「私は赤いです」と聞こえてるんだらうね。

「ねえ、赤い神様……絶対、絶対助けにくるから！」

ほらやっぱり。まあいいよ、何とでも呼んでよ。

『あなたはもう、二度とここに来てはなりませんよ』

一年もずっと詰んでたけど、君が勇気を出してここに来てくれたおかげで今後自分で何とかかなりそうだ。その気になりや杭も剛剣も抜いて降りられるし、私はもう大丈夫だよ心配いらない。

「絶対助けに来るから！」

まだいつてら。

彼女は何度も私に約束すると、来たときと同じように、そろりそろりと梯子を下りていった。

私は目を細める。ああ、今日の朝焼けは特別にきれい。

空が赤く燃えて、何もかもうまくいきそうな気がしてきた。

その日の夕方……磔の邪神を演じ続ける私の体に、新たな信頼の力が流れ込んできた。

ん？ 思い当たるふしがないけどこれ、誰の分？

ナオ以外に、二人分ぐらい加わってる。君のお母さんと、お父さんのぶん？

病気のお母さんに、私の創ってあげた薬が効いたのかな？

また少し、嬉しくなった。

第2章 第7話 赤井さんの疎外感と責任の重さ

ナオが私を救ってくれた日の夜の事。

私はグラランダの兵士さんの見張りの目を盗み、レプリカの杭を抜いてインフォメーションボードを呼び、呪いの鉄杭をアナライズ。

そしたら目玉飛び出た！

いやいや出てないです、あくまでも比喻ね分かってよ。出てないけど戦慄した。

何で驚いたって、呪いの鉄杭のアナライズしても金属的な特性は普通。一年前に私が言ってたあの素材。グラランダの兵士のデフォルトで持ってた片手剣に使われてる合金、あれと同じ素材だった。絶対物性的に特徴あると思ってたけど、何も出てこなかった。何で？本当に呪力で魔改造されてるの？ って考えてたら急に怖くなった。

神様やってるのにオカルト怖いとか情けない……。でも怖いもんは怖い。

何？ あのスオウって人の力の源。ありえんでしょ人間が炎出すとか。大道芸で火吹きおじさんとかいるけど、大道芸じゃなくて手から普通に炎出してたよね？ 私はいいよ、私は出すからね炎でも雷でも風雪でもATフィールドでも超電磁砲でも。そこは神だからガンガン出していいんだよ。私のことは棚にあげてねチートなんだから。

でも素民がそれやると私が怖い。神通力的な何か、てか私と同じタイプの力はロイ以外使えないんだよ？ だって私が神通力与えた

のロイだけだもん。しかもロイだって縛りかけといた。防御に特化して攻撃的なのは使えないようにしといたよ、だってロイが俺様統治者になっちゃったら困るっしょ。

ん？ 国民の皆様はそういうの好き？ ロイが周辺諸国に侵攻して戦国無双しながら天下布武でヒヤッハーする展開。

だめだよ、ロイは優しくていい子なんだから人を傷つけないよ。何の話だっけ？

とにかくロイと私以外に勝手にやったら特許使用料いただくよマジで。使ったたびにいただくよ？ ツイッターとかで「やりてー」とか言っただけでいただくから覚悟しといてよ。

もう一年前のことになるけど、そういえばスオウって私の結界に踏み込んできてたよね。今更その話題だけどちよつと付き合っつてよ。

あれさ、私何気にほわつと結界展開してたけど、物理結界って凄まじいのよ？

自分で威力説明するのすげー女々しいしかっこ悪いけど、誰も気付いてないから自分で説明するわ。

あれフリーズドライの凍結粉碎も真つ青の威力。

襲い掛かってきても微粒子にまで粉碎されんよ？

一分子の侵入も許さない。力学ベクトル、熱量の侵入も超アグレッシブに無効化するのよ。

結界張ってるとき、物理結界の内部は真空にしてる。私は平気、真空でも水中でも何年息止めても神様は窒息なんてしない。え？ 磔になってたとき息してたじゃん、苦しいつて言ってたじゃん、って？ あれは神通力がゼロになってただけだから例外ね。

物理結界は周囲の環境を隔絶するから、攻撃方法をあれこれ開発しなくても、結界一層持つただけで私って実質無敵だと思っつた。

どう考えても無敵っしょ、ためしに何でも獲物持ってかかってこいよマジで。

けど不意打ちはやめてね、結界張ってないとすぐやられるから。そう考えると案外よえーな。

最初は自分の身を守るため、飛び道具対策で開発した物理結界だけだったけど、誰かが間違えて踏み込んで来たら危なすぎると思っただけで心理結界も作って二重にしている。こんな鬼畜チート仕様の結界だけど、たとえ敵であっても相手を殺したくないって気持ちはある。だって気の毒だ。

素民たちって仮想空間でしか生きられないのに、限られた尊い命を奪いたくない。

だから誰かが襲い掛かってきても心理結界でトラップされて、身の素民は私に指一本触れられない。なのにスオウは二層とも突破して私に攻撃を加えていたよな。物理結界破ってたから窒息もしなかったんだろう。

ありえない。でもありえないことをやられちゃってる。

まずいよな……スオウの力の正体を知らないと今度こそ詰む。

何かすげーやな予感がするよ。ということで、ボードを呼び出して西園さんに相談。

『西園さん、スオウって何で神通力もどきを使えるんです？ あの力の源ってなんですか？』

『あれは神通力と同種の力ですよ』

西園さん、あなた今日はモニタの前にキャラメルポップコーンとコーラですか。私が四苦八苦してるのを、映画見るみたいに高みの見物してたんですか？ 映画化するなら「全米が泣いた」タグでも

つけといてくださいね。興行収入はちゃんと私の口座に振り込んで下さいよ。

てか今、何て言いました？
神通力と同じって？

『二十七管区の神って私しかいませんよね？ 西園さんそう言いましたよね？』

『甲種一級構築士はこの世界の管理者です。あなたはこの世界で神様としての役目を果たし、民から慕われるスーパースターです。ですが……』

『そうでない役もあるんですか？』
だよな。

映画にしても作品を作るのって主役だけじゃ成り立たないもんな。もしかして、生身の人間スタッフと仮想世界で会えるの、楽しみにしてる場合じゃないのかもしれない。

『……悪役とか脇役やってる人、いるんですか？ その人たちが二十七管区に投入されたとか』
私はぴんときた。

だってスオウのあの力って素民的にありえんでしょ。何か神がかり的な力だったよあれ。

『赤井さん。あなたが最初にこの世界に降臨したとき既に世界が完成していました。それを不思議に思いませんでしたか？』

やっぱし？ 気付いてたよ、私最初にそれツッコんだよね？

天地開闢からやるべきなのかと思ってたって。そうそう、最初から世界ができてました。誰か作ってくれてたのか。あれ他の構築士の人らが準備してくれてたってこと？

で、舞台整えて主役の私を待ってたってこと？

『他の構築士の方が、まさか何年か前からここに入っていたんですか？』

『一番任期が長い人は、五百年前から入っています』

もう入ってるの！？ てか五百年前から！？

マジで！ 五百年も前から入ってるんすか大先輩じゃないすか！ 私しか生身の人間がいないって嘆いてたの、アホみたいじゃないですか。

その人って現実世界で四〜五年ぐらい入ってるんだろっな。

そろそろ現実が恋しい頃だよ絶対、早く家に帰りたいよな……：そ
う思うと不憫でもある。分かりますよ諸先輩方、その辛〜いお気持ち。

『その人たちがそれぞれ第一区画とか第二区画とか既に作って私が来るのを待ってるってことですか？』

『お察しの通りです』

西園さんはストローでコーラを喉に流し込む。ダイエットコーラですか。

じゃ、私とその管区を解放するとその人のアガルタでの仕事は終わって晴れて現実世界に出られるのか。それでアガリってことなら私に早く来てほしいだろうよ。てかすげー首を長くして待ってるよね。

すみませんね！ 私ときたらまだ四百人ぐらいの集落で八年もちんたらちんたら、キャツキャウフフやってて。

あ……それに私は八年目じゃなく九年目だ。なお悪い。

一年間もロイに集落任せてニートっぽく磔やっただけど、「何やってんだ早くこつち来いよ！ 神のくせに何サボってんだよ！ 税金返納しろ！ 俺の管区はよ解放しろ！」みたいな色んなこと思われてるのかなあ……こんなに口は悪くないか。

まあ確実に悪口言われてるでしょうよ。
へこむー。

『えーと。……何人投入されてるんですか？』

千年王国ほどじゃないけど、国家プロジェクトだから金かかってるよなあ。

アガルタへの入居者が増えると失業率が減るんだ、莫大な雇用をうむ。それに年金の支払い額も削減できるよね。こんなこと公務員が言っちゃだめか。

とにかく大幅な国家予算の無駄削減につながる。だから国も必死に構築士の尻をたたく。アガルタって日本だけで数兆円のプロジェクトだけど、その費用対効果はすげーでかい。

『それは申し上げられません。国外のフリーランスの方々も半数、厚生労働省所管の構築士が半数。海外の構築士もいます』

構築士ってのは

甲種一級〜二級、

乙種一級〜三級、

丙種一級〜三級、

丁種なんて六級まである。

海外ではプロジェクトが終わるごとに全員解雇だからフリーランスも大量にいる。海外では甲種とか言わずランク制になってる。私と同じ立場の構築士のランクをハイロードっていうらしい。よく考

えりゃロードって神様のことだよな。訳すと”至高なる神”ってことだ。我ながらかつけー。

海外では各ランクには役職名がついてる。確かアシスタントとかサポーターとかメデイエーターとか、キーパーとかそういう役職があった気がする。名前と仕事の関係がわかりやすいよね。日本もそういうのにしてほしい。甲乙丙丁じゃ意味わからん。

私が甲種一級でハイロード。

一番格上の神様役をやってる。ほかの人らはどんな役やってるの？ 一人ずつ入ってたとしても相当な人数だよな。バックアップしてくれる人もいそうだけど、絶対悪役も引き立て役もその他もろもろいそうだよな……。そっか、もう入ってたのか。

『みんな私みたいに赤系の容姿で芸名も持ってるんですか？』
『容姿にまでは反映されていませんが、仮名ですぐわかります』

うーん？

色にまつわる名前がついてんのかな。てか他の構築士、そんなに投入されてたのかよ！ スーパースター役（自分で言うな？）の甲種構築士ってか神様役がこんな体たらくで申し訳ない。

ところでその構築士の人って、まさかスオウのこと？ スオウ、金髪碧眼だったよね。すげー力持ってたし。海外の構築士？

スオウってもしかして蘇芳って変換するんかな。

あ！ 私はアホだ。私がアホ。アホは私。

蘇芳って赤色のことじゃん。日本古来の赤色のことなんだ。まんま構築士じゃん。私一回死んだ方がいいなアホだから。

『スオウが構築士なんですか？』

『いいえ彼女は素民です。基本的に悪役を演じている構築士は、表舞台には出てきません』

ハズレ？

違うのか。他の人らは裏方に徹してるってことか、苦労してそうだな。私って思えば本当に主役なのな、今更ひしひしとその実感を噛みしめるよ。

悪役なんてやりたくねーだろーな。私は絶対嫌だ。民を導いて崇められて救えば神様扱いで感謝だつてもらえるし自分も気分がいいけど、そういう裏方の、特に悪役なんて報われない仕事だよ。

にしても結構ヒントくれてるなあ西園さん。

私のこと心配してるんだろうね、うつかりしてたら一年も黙って苦痛を耐え忍んで磔になるようなアホだし。磔の元祖、キリスト先輩のオマー・ジユなんて二千年早いですよ。

しかも一年もやるなんて背伸びし過ぎでしたよね、キリスト先輩は世界一の維持士だからこそですもんね。

『で、あの呪力もどきは……』

私がロイにしたことと同じことを、他の構築士がスオウにしたってことなのか？ スオウのバックにいる構築士ってのは悪役なんか。邪悪な力を捻じ込んだ、みたいな？

だったら邪悪な力を持たされてるスオウもちょっと気の毒になってきた。

『とにかく物語を進めてください。皆があなたの光臨を待っているのです。赤の神様』

『本当にどうも申し訳ありませんでした』

ごめんなさい。

私以下の甲乙丙丁種構築士の皆様方。タラタラ構築やって。心なしか、あなたたちの舌打ちがきこえてきそうです。先輩方が早く現実に戻ってメシウマできるように私、明日から本気出します。

『早く外に出たいですもんね、その人たちだって』

『……彼らは八時間交代のシフト制勤務です。現実世界にも出られませんよ』

あれ、なにこの疎外感。

外に出られない監禁状態って私ひとり、てか一柱だけ？

週休二日祝日ありで、仮想空間で働き、現実世界に戻って、電車に揺られて毎日家に帰ってメシウマしてるの？ ジャイアンツ観戦とかサッカー観戦なんてしながら枝豆食ってるの？

風呂入ってビール飲んでテレビみてうだうだして、温かい布団でぐっすり寝てるの？

『私だって……私だって外に出てメシウマしたいですよ。もんじゃ食べたいて話なんですよ。もんじゃなんて西園さんはすぐ食べられるでしょ？』

「はい、昨日。とてもおいしかったです」

おいおいおいおい！

ちよっとは気をつかおうよ……

神様キャラとしては許されない殺意が一瞬だけ湧いてしまったよ。

第2章 第8話 赤井さんの交渉と西園さんの慈悲

『……というか何で私、食べられないんです？』

回をまたいでも、まだ西園さんともんじゃの話やってます私。もういい加減諦めれ？ 諦めきれねー！

どんだけもんじゃ好きなんだ私、ええ大好きですよ。現実世界いたところは週三で食べに行ってますよ！ 三食もんじゃでも全然いけたクチなんですよ！

私の胃や消化管は、きつとまだ腹の中にあるんだろうけど、日が一泊することなくて退屈してるに違いない。働いたら負けかな、どうせ食べ物こないしね……八八。なんてなやさぐれ状態になる。胃と腸とで話し合って「もう粘液出すの無駄だからやめよう」とか諦めてるかもしんない。確かに食べる必要ないし食欲も湧かないけどさ、せめて食の楽しみぐらい残してほしかった。

皆さんだつて九年も食べられなかったら発狂しそうじゃない？ 広い世界にはずっと断食してる人がいるから別になんとも思わない？ びっくり人間の方は食べたくない人だから別ですって。はいはいすみませんね私が意志薄弱で。何で私食べ物が食べられないようにされてるんです？ 神様が食事しちゃダメなわけ？ 神社にお供えとかって普通じゃん。由緒正しいリアルな日本の神様らだつてお供え物召しあがってるでしょうに。

『神様は慈悲深くきよらかで、死の穢れを寄せ付けず、一切の殺生をしないものです』

西園さん、しゃあしゃあとポップコーンを食いながら仰る。もぐ

もぐしてる。殺生するなって理由だったの？ 限度があるっしょ。修行僧でも精進料理食うじゃん。普通に歩くだけで草とか踏んで殺生してるし。

肉系魚系じゃなくても何でもいいんですよ、ベジタブルでも芋系や穀物でいいから何か食べさせてくださいよー、精進料理でも切り干し大根とかでも私にとってはごちそうですよ。お腹すかないけど気持ちはすげー食べたいんですよ。久しぶりに咀嚼だってしたいんですよ、あなたが今やってる、モグモグとゴツクンのコンボを私の顎が求めてるんですよ。

気持ちよく連続コンボ決めさせてくださいよ。

『辛い気持ちはよくわかります。ですが赤井さん、いえ赤の神様。あなたは二十七管区という世界のうつつしみなんです。構築が終了する前にあなたが去ると世界が崩壊するんです。それでも、もんじや焼きのために外に出たいのですか？』

西園さん、だから私は人間なんですって。

何で衣食住はおるか性別性欲排泄まで生理的欲求をとりあげるの？ …… 誰が得するのそれ、神様フェチのあなたが得するんです？ 人間離れしてる私を見て興奮するんですか？ いくら西園さんの期待にこたえようとしても、完全な神様になんてなれませんか。

私だって結構苦労してたんですよ。

素民に地や本音をぶちまけたことなんて一度もありません。私は一年前まで少ない語彙を振り絞って、何か大事な局面では民心を惹きつけるよう徹夜で文章なんかも練って、深イイ話ならぬ深イイ天啓授けたりしてたんですよ。

理系人間が文系的な頭の使い方したら疲れますよ……せめて食生

活ぐらいさー。

『ごめんなさいね。私がそちらに行けたら、あなたをお慰めできたの』

あまりに私がゴネるからか、西園さんが急にデレでした。

それ、すげーオタクっぽく聞こえるからね。モニタの向こうに行きたいとか俺の嫁がモニタから出てこないとか、オタクとか腐女子の発想だかね？

一体どうやってお慰めしてくれるわけ？

そりゃ、伝統的に神様を慰めるっていったらあれだよ、神輿担いでくれたり雅楽や神楽や舞い踊りに祈祷？ 別にいいよそういうのは私あんま嬉しくない。

私が外に出ると即世界崩壊、ってまじかよ。でもアガルタって、ゆくゆくは死後の人間が実際に住む仮想世界なんだよ……彼らは死んでいるから何十年も何百年何千年も外に出ることはない。だったら、長年アガルタに住むと人間の精神がどうなるかの人体実験はやっぱし必要だよな。

まあデータ取るのも大事ですよ、よくわかります。

『わかりましたよ……』

私が腹を括りつつあると……西園さん、ダテメガネをはずして私をまじまじ見てくる。てか何でまだダテメガネかけてんの？ キヤラづくり？

ん？ なに？ 西園さんがダテメガネを外す時って、スーパーデレタイムだからね。私に感情移入するときに見せる、西園さんの癖なんだ。普段の五割増しですげー色っぽくなる。口も半びらきで

唇ぼよつとしてエロい……本人気付いてないっばいけど。そんなことされても全然俺得じゃないですよ、そんな色仕掛けしてもさ。

肝心なこと忘れてませんか？ 私、男じゃないし二次元にいますよ？
せめて性別だけでも戻してくれたら両想いになれるかもしれないよ？
んよ？

『……………赤井さん』

しつとりと絡みつくようなエロい視線を向けてくるので、私もじろりと無言で西園さんを見る。あ、今気づいたけど西園さん、前髪切りましたね。自分で切らないで、美容院に行ってくださいよ失敗してるのバれてますよ。何か前髪斜めになっちゃってますよ？ って……指摘したら絶対ふて腐れる。女性に前髪短いとかメイクのこと言っちゃ嫌われますよね。

まあ西園さんはもともと美人ですから、少々前髪斜めでもコケテイッシュな雰囲気でもいいんですけど。

で、何ですか？

『基本的人権保護の観点において、あなたがもんじゃを食べたがっているとおに伝えておきます。アガルタに入ると生理的・心理的欲求は消えるものなので、食事がしたいとの希望があったのは初めてですが、伝えるだけは伝えておきましょう。とにかく残り九百年以上も、欲求不満のままでは精神衛生上よろしくありません』

ん？

んん？

んんん！？

西園さん、あなたが今日は光り輝く天使に見えますが！

おかしいな私の目の錯覚ですかね？

それから「赤井構築士がもんじゃ食べたがってます」って報告書に書かずにせめて労働環境の改善を求めています、ぐらいにオブラートにしてくださいよ大人な表現でお願いしますよ、私の立場ないですから。

……すみません西園さん。私ときたら。アガルタの神なのに煩惱抜けずまだ食い意地張ってて。

あれ、そういえば。

『神様がう　こしても大丈夫です？　やっぱまずいですかねえ……』
食べたら出す、これ基本ですよね。

国民の皆様は快適なお通じを心掛けてくださいね。

『だめです。神様は絶対に排便、排尿してはなりません』

さすがはイメージ商売。　んこしないようプログラムを作り変えますとのこと。

やっぱりアイドルはうん　しちゃダメみたいです。まあでも、食べ物食べても全部消化できるようにしてくれるってことだよね？

では期待して、もんじゃ焼く鉄板とコテ作って正座で待っていいのかな？　べ、別に私のためなんかじゃなく民にも……いえ主に私の為です、すみません。

『上には伝えておきますが、あなたはそんなことを考えている場合ではありませんよ。その惨状を客観的に見てください。磔になってるんですよあなたは』

そうでした……逃避しすぎた。
はい、ごもつとも。

現実逃避してましたけどそんな場合じゃないです。食べ物につられて、浮かれてる場合じゃない。私の胃袋にはもんじゃ入れるスペースどころか、呪いの剣みたいなのが刺さって流血してる。もんじゃ食えない……どうすればいいんだ。……もんじゃのことはひとまず頭からどっかやれよ私。

西園さんのヒントをもとに、スオウのバツクには確実にほかの構築士がいて考えてスオウ対策を考えないと。私はとりあえず、脚に刺さっているスオウ特製の呪いの鉄杭を一本ずつレプリカに変えて本物を懐に忍ばせる。

この最後に残った剛剣はどうすりやいいわけ？

これだけはレプリカに変えられない。だってすりかえてもこんなデカイ剛剣どこに隠すのよ。貫通してるし、どれだけの長さが私の腹の下に埋まってるのかわかんないけど、絶対隠しきれない。下に放り投げりゃ私の腹に刺さってるのが偽物だってバレる……真つ直ぐぶん投げて湖の底に沈めときゃいいの？

私はグラランダの城壁に礫になってるけど、数百メートル先には湖面が見える。反対側にはロイの集落がある、あのすげーでかい湖。もしかしたら琵琶湖くらいあるかな。投げたら届くかな、とも思っただけど、槍投げ選手とかじゃねーからそんな何百メートルも剣を投げるって無理。

できるかもしれないけど、一年も礫になってた身だから絶対投げてもコントロールがやばい。

昔の四百人分の「信頼の力」があったころならできてたけど、今は「信頼の力」もたった三人分しかない。ナオと、ナオの父ちゃん

母ちゃんのぶん。「たった」とか言ったけど、少ないなんて思っていない。信頼されるということそのものが嬉しい。だってここ敵地なんだよ？ アウェイなのに信頼してくれる人が一人でもいると頑張れる。

球場満員の阪神ファンの中にジヤイアンツファンがたった三人でジヤイアンツ応援してるようなもんよ？ もう命がけの応援だ、場合によっては血を見ることになるよ。

剣を投げるのはやめとく。湖まで届かなくて、湖のほとりとかでデートしてるカップルの脳天に「サクツ！」なんて刺さったらもう目も当てられない。とんだデートのお邪魔でした、って謝罪したってしきれない。

明日何があるか分かんないから今日中に全部レプリカにすりかえたかったけど、しゃーないからこの剣だけは刺しところか……。

てなことを考えていたら。

木々の間の茂みをかきわけ、ガサゴソと複数の足音がこちらに近づいてくる様子。

ん？ 誰？

私は暗闇に目を凝らす。杭をレプリカにすり替えているし信頼の力もあるので夜間視力も戻ってきました。遠くからだけとよく見える。

何あれ。

ナオを先頭に、誰かゾロゾロとついてきてるけど。なんか皆八チマキみたなの巻いてやる気満々。日本と似てるなー気合いの入れ方が。

ナオの後ろから、九人の大人が梯子持っついてきてる。

ナオの家族か親戚？ ナオが私の姿をみとめると、嬉しそうに城

壁の下に駆け寄ってきた。

「助けにきたよ！ 神様！！」

助けにきた、じゃね

！！！！

昨日あれほどもう二度と絶対来るなって言ったのにナオのおバカ

！！

何でわざわざ目立つように大人数でやってくるの！ そんなに大人数できたら……。

第一区画管理してた甲乙丙丁どれかの構築士の人、あなたの民を何でこんなにアホばかりに育てたんですか。酷いですよ何で私の足引っ張るんですかここまで上手くやってきたのに……あれ？ もしかして悪役の構築士さん、こういう地味な嫌がらせの方法で私を追い詰めようとしてる？

その中の年配の男の人が私の前に歩み出てきた。この人だけ黒い貫頭衣着てない。グレーの着てる。特別な役職の人？ 髭をたくわえた、やせこけて頭を丸刈りにしてる人だ。丸刈りってこの時代にもあるんだな。

ナオのお父さんかと思ったけど、違うみたい。ナオのお父さんはナオの隣にいてナオの手を握ってる人だ、グレーの服の人より若そう、多分二十代だよね。あれ……でもこのグレーの服の人なんか調子悪そう。なんか瞼とか腫れてるよ、大丈夫？

よく見りゃ、皆少しずつ調子が悪そうだ。熱が出てそんな人もいる。

まさかナオってば、ご近所の病人ばっかし連れてきたの？ 寝かせといてあげてよしんどいんだからさ！ 私そんなにたくさん構築で薬つくってあげられないのよ。赤井薬局じゃないって言ってるで

しょ！ とか焦ってたら

「邪神さま、私はこのグラランダのしがない薬師です。グラランダには疫病がはやり、民草は病に苦しみ命を落としております。私はなすべなく、邪神さまのお慈悲を賜りたく伺いました」

……ここそんなに病気が多いの？

城壁に礫られてるから中のこと分からなかったよ、聞こえねし。

そして私は、何故彼らグラランダの民から強い憎しみの力が私に継続的に流れてきていたのか分かった。そうだ……私がそれらの疫病をもたらしていたかと思っていたのか。だからより一層憎しみを強めていたんだな……そう考えるとこの民かわいそう。うちの集落は医療関係は万全。感染症も全然出なくなってる。

もしかしてスオウもそういう理由で私を憎んでるのかな？ 私が全ての元凶みたいにして……。

私が色々考えて黙っていると彼が近くに寄ってきた。

「お願いします、ご慈悲を！」

縋りつくような顔をするので、とにかく声を落として口をひらく。

『薬師よ、グラランダには流行り病があるのですか』

知らなかったよ。ごめんよ気づかなくて呑気にニートってて。

私、いっぱいいっぱいだっただから……。

「はい、あなたがこのグラランダにおいてになる随分前から。あなた

が磔になってからでも百以上もの墓が増えています。スオウ様が日々加持祈祷をなされど、一向によき兆しはみえず。民草は病に喘いでおります」

『祈祷で病が治るものではありません。大規模な消毒と防疫が必要です』

神様がこういうのもなんだけど、祈るだけで病気が治るなら病院いらさないよね。それに結構難しいよなー感染症管理って。人数増えると特に難しい。感染症予防は消毒や隔離やつたって限度がある。現代では防疫って言わず感染症予防っていうんだけど、感染症そのものが何か分かってないみたいだからもう防疫って言葉をつかうよ。国民の皆様は覚えといてね、防疫っていったら植物防疫のことをさすかんね。うっかり使ったらダメですからね。

「ぼうえきとは……。それにあのお薬は一体……」

薬師のおじさん、興味津々だな。やっぱこの時代の人でも、知的好奇心ってあるんだよね。メグもロイもそうだった。この人は教えればグイグイついてこれそうな人だな。

『防疫とは、疫病を断つための手段を事前に講じることです。疫病は人から人へ、主に排泄物や疫病にかかった人との直接の接触によって拡大をしてゆきます。その経路を完全に遮断するということです。また、早急に清潔な環境の構築も必要となります。まずは共同の飲み水を浄化し、排泄物を決められた場所に廃棄しなければなりません』

ちょっと違うけど感染症って言葉とウイルスや細菌って概念分かってくれないだろうし根っこはそれでいいからそう覚えてよ。

おじさん、もう何か目からうるこって感じで「はわーっ！」て顔

してる。そうだよ、邪神パワーで治せるんです、って説明されるよ。合理的で同意できるっしょ？ 邪神だって全部が全部助けてはあげられない。自立してくれないとき。

何に気をつければいいかを覚えておけば、感染症なんて怖くねーよ。YOU感染症管理やつてみなよ、正しい知識があれば人数多くても管理できるよ。で、うちの集落と交易しちやいなよ。正直うちの集落誰も病気にならないから、メグもあの花作りすぎて処分に困ってる頃だと思っんだ。

なんならLED照明の代わりにしてロマンティックイルミネーションとかやりだしてるかもしんない。そしてYOUたちの鉱物資源と交換しようよ。物々交換だよ、そしたらお互い豊かになるでしょ？

「素晴らしい……あなたのその聡きお智慧と御力をお貸しいただけませんか」

おじさん、感服してる。

『そのつもりでいます』

そのつもりですけど……今はやめて。色々と真剣に考えてたところだから。主にもんじゃの事か。もんじゃ以外の事も考えてたよ、だからその梯子をここに掛けて昇ってこないでマジで。明日ぐらいにはきちん対策打ってあげるから今はやめて。

「やはりあなたは邪神ではなく神様だったのですね。ナオがあなたにお薬をいただいたと。それを飲んだ妻がけろりとよくなり、あなたの無実を確信しました」

ナオのお父さんが一步前に出てきて平伏する。もうやめてよそういうの、五体投地的な派手な礼拝は今はやめて自立っから。

「神様ー！　そこから降ろしてあげるから待っててね！　今いくよ！　今助けてあげるよ！」

いや、だからやめてよそういうの。自分で降りれるからいいよ。私高い木に登って降りれなくなってナーナー泣いてる猫とか断崖絶壁に取り残されたガケツプチ犬とかじゃないから。私一応神だから気をつかってくれなくていいから。

「頑張つてー！　いますぐ助けるからねー！！」
そして何故にそんな、ナオは周囲に聞いてくださいといわんばかりの大声で叫ぶのよ。

そんな大声出して見つかりたいの？
見張りの兵士に見つかりたいの！？

HUC外伝1 ロイの覚醒と赤い神の面影（前編）（前書き）

昨日の夜、これを読みたいとの依頼を受けて、今日アップ。マジで通常の三倍の速さで書けるハイパーライティングの技能が身についたのか・・・。

古代人の一人称なので若干たどたどしい表現がありますがそれはわざとですのでご了承ください。

HUC外伝1 ロイの覚醒と赤い神の面影（前編）

俺たちは生まれてからずっと、
生きることに必死だった。

少しでも気を抜けば、死の足音が近づいてくる気がする。
メグが果物を捜す道すがら、草原で見つけた赤の青年。
彼に出会うまでは。

あの日、メグが白い衣を纏って帰ってきた……俺たちが見たこと
もない、温かくて白い衣を着て。皆、目を見張った。その日からと
いうものメグは彼のもとに通い、必ず食糧となる果物を持って帰っ
てきた。俺たちはメグの果物を皆で分けて、あとは自分たちでとっ
てきたそれぞれの果物で、空腹をこらえて食いつないでいた。
メグが急に、彼を「あかいかみさま」だと言いだした。
彼はもうすぐ俺たちを助けしてくれると言っている、って。

俺たちは「あかいかみさま」と早く会いたいとメグに言ったけれ
ど、姿を見せなかった。そして結局……苦しみ抜いて死んだナズを
助けてくれなかった。

ナズが死んだ日に、彼はようやく姿を見せた。

……俺たちは頭にきていたから、バルは彼を何度も殴ったけど、
殴っても俺たちはナズのようになって死ぬんだと分かっていた。俺
も彼のことが憎かったけれど、彼と話をしなければと声をかけた。

話を聞いたら……彼がナズの苦しみを代わりに受けていたと分か
った。彼は皆の苦しみを吸収して癒してくれるんだそうだ。彼はナ
ズが死んだ原因がはつきりと分かっている、どうすれば俺たちが死

なないかを知っていた。そして、今度は約束通り俺たちを救ってくれた。

彼は本物の神様だった、皆がそう信じた。

それが最初の出会いだ。

彼と出会ってより、彼は離れず傍にいて俺たちを守ってくれている。彼は信頼の力を神通力に変え俺たちを救い、俺たちの苦痛もその身に受ける。辛い時もいつも身代わりになってくれる。

彼は呆れるほどお人好しで、だれひとり分け隔てなく優しく、愛情深い神様だ。

俺は彼より優しく、そして強い人間を、一人も知らない。

そして皆は誤解してるみたいだけど、彼の本当の名前はきつとアカイ、神様が使う文字でいうと「赤井」って書くみたいだ。名前はちゃんと呼んであげなきゃな、間違っていたら気の毒だ。

俺とメグは日々、朝から晩まで彼に学んだ。

日々の労働と比べたら、学ぶことは楽しかった。メグは時々甘えてサボっていたけれど、俺は彼の全ての智を学ぼうとして、くらいについて学んだ。彼が俺に教えてくれることのほかに、彼が実際にやっていることも何とか覚えようとした。彼は何でも知っていて、何でもできる。彼は時々俺たちの知らない文字を書くけれど、あそこにも多分、この世界の本質が書かれている。隠れて解読して俺も実際に使おうとしてたら、警戒されてしまった。神様の力の秘密を知られたくないのか。

彼はまた、時々独り言をよく言った。

俺たちには見えないけれど、誰かと話しているみたいだった。

彼が皆に目を配ってあらゆることを教えてくれたおかげで、集落には家が建ち、畑ができ、大きな動物が獲れるようになり、火が使えるようになって、次々と人が流れ着き、赤子も増えてゆく。俺もメグもカイも成長して、暮らしは楽になり安全になり、そしてあまり誰も死ななくなった。

その代わりに、彼はずっと眠らず休まず働き通していた。彼は疲れないから、ずっと働いている。俺たちは少しずつ成長しても、彼は同じ姿のまま変わらない。同じ洞窟に住み、休む間もなく働いて力を蓄えて、俺たちを守ってくれている。

彼は集落の男の誰より背が高く、赤い髪と瞳をして身体が暗闇で見ると輝いている。誰もが見とれてしまうほどきれいだ。俺も皆も彼のことが大好きだ。一人一人に言葉をかけてくれて、声は人間のそれとは違う、頭の中にじわりと響いてくる感じ。

誰かが傷ついたり不安になったら、抱擁して俺たちを癒してくれ。俺もメグも彼の癒しを受けると元気になる。白くなめらかな長い衣を纏い、やはり白い布を肩に巻いて、裾を引き摺って歩く。俺は一回彼を怒らせたくてよく裾を踏んだけれど、彼は結局一度も怒らなかった。

神様はずっと同じ姿だったけれど、皆の信頼の力に支えられて強くなっていた。強くなった力は自分のために使わず、畑に雨を降らせたり、火災を鎮めたり、川の流れを止め、病を癒し……俺たちの為に全て還してくれた。彼はずっと、俺たちのことばかり考えてくれている。

神様は不変にして、永遠なるもの。でも彼はどこから来て、そし

てどこへ行くんだらう？

彼の真意を知りたくて何度も問答を重ねたけれど、彼の心を知ることはできなかった。

そして、何の目的で俺たちを守り続けてくれるのかということも。

彼の心など何一つわからないまま、俺とメグは大人になった。

神様は変わらない。

月が丸く明るくてきれいだった夜、初めて彼と出会った草原で神様と夜空を見上げた。

空には無数の星が瞬いていて、神様は懐かしそうに星を見上げた。彼は空から来たんだと言った。空に帰りたかったのかな。

あの星が何故輝くのか、太陽と月がどうして空にあるのか、その時彼に色々と尋ねても、どうしても教えてくれなかった。星空の果てには何かあるのだろうといつも不思議だった。俺は地上のことで彼が教えてくれたことはほぼ学び終えつつあったけれども、宙そらのこととはわからない。

彼は全てを知っているようだった。

ふと不安になって、俺たちはいつか歳をとって死んでいくのかと、神様に尋ねた。彼は、「人は必ず死ぬものです」と真摯に答えた。死んだら俺たちはどこに行き、あなたはどこから来てどこへ行くのかと尋ねると、それは私にも分からないと、寂しそうに笑った。

その代わり俺たちが死んで身体はなくなっても魂はいつか巡ってまた会えるかもしれないと言っていた。死んでも終わりじゃないのか。俺たちは生まれたときから死ぬことに怯え続けていたけれど、それを聞いてあまり怖くなくなった。

あなたはこの世界を創ったのか、と尋ねると、

私はこれから世界を創り上げようとしているのです、と月を見ながら穏やかな口調で答えた。

彼はそのために、ここにいるんだ。

ようやく、彼が俺たちと一緒にいてくれる理由がわかった。

俺はもともと身寄りがない。

バルは俺を自分の子供のように思ってくれたみたいだけど、どうしても遠慮はある。だから俺は神様を本当の親のように思っていたし、神様もそう思っていていいと言ってくれた。バルの家族と一緒に住み続けるのは悪いから、大人になると自立しようと思って自分の家を建てた。一人だから、神様と一緒に暮らせるように大きな家を建てたけど、彼はどうしてか洞窟で暮らすと断わった。あんな居心地の悪く、冷たくて暗い洞窟で暮らすって……。

俺も孤独だけど、神様はもつと孤独だ。

いつか彼が疲れてしまわないか。

人が多くなつて、彼はますます力をつけた。皆も彼のことが大好きだから彼を見境なく追いかけてまわす。彼は相変わらず誰にも優しくなかったけど、四百人もの人全員を抱擁することに疲れているみたいだった。骨も何回か折られたみたいだ、そんなことするなんて信じられない。どうして彼を傷つけるんだ。そしてどうして彼は我慢して耐えているのかな。

彼が辛いなら、俺は別に祝福をやってもらわなくてもいい。

そう思っ行って行かなかったら、俺が行かなくても、わざわざ俺の家に来てやってくれた。俺は嬉しかった。

メグは神様と一番仲がよかったので、皆がやつかんでメグをいじめていた。

俺はできるだけ腕力にものをいわせてメグを守ってあげてたけど、

神様はそのことで悩んでいるみたいだった。

そして今日、遂に神様は洞窟の中から出てこられなかった。夜になっても洞窟は静まりかえっている。俺は彼が洞窟に張っている結界を抜けられる。皆が心配そうに洞窟の前で待っていた。俺は皆に、もう神様を追いかけまわすのはやめてくれ、彼だって疲れるだろう！ と本音をぶつけた。皆反省してしゅんとして、わかったと言った。俺が様子を見て出てくるまで、皆は洞窟の前で待ってるつもりだと言ったけど俺は無理やり皆を家に帰した。

結界を破り、冷たい洞窟に入った。

神様の住む洞窟は、それほど広くはない。内部には水脈があつて、乾いたなめらかな大きな岩が連なっていた。中に明りはなく暗いけど、彼の体は輝いているので彼は別に火をひつようとしない。彼は寝ないし食べないから、寝床や食器、生活用品なんて洞窟の中にはなかった。彼は自分の白い衣以外には何一つ自分のものを持っていない。冷たい石の上に敷物もしくず座って、夜はいつも洞窟で皆のために仕事をしてくれている。どうして自分のことは考えず、俺たちのことばかり考えてくれるんだろう。

俺は火を持って踏み入ってゆくと、神様はこちらに背中を見せて座っている。いつもは仕事をしているけど、今日は手を動かしていない。いつになく真剣な考えごとをしてるみたいだ。皆やメグのことで悩んでいるのかな。

俺は持ってきた火をそこに置いて、彼を呼んだ。俺の声に気づいて立ち上がった彼はいつになく悲しそうだ。

『ロイさん、大事なお話があります』

俺はその、大事な話というのがあまりよくないものと気づいた。

彼は洞窟に一日こもって何を考えたのだろう、俺は彼から色々学んだけど、どれだけ学んでも彼の頭脳には追いつかない。そして俺は彼のように強くなりたくて色々やって自分を鍛えてきたけど、やっぱり彼の強さにはかなわない。人間の俺なんか、神様である彼の心は知れないんだ。

俺は彼のもとに寄り膝をつく。普通に立って話を聞いてもいいんだろうし彼もそうしていいって言ってくれたこともあるけど、俺が彼をどれだけ尊敬して慕っているか分かってほしくて膝まづくんだ。人間が神様の話を聞くときは、同じ視線ではいけない。俺たちは出会ったときから対等ではないから。

なぜなら彼はこの世界を創り上げようとしている神様で、俺たちはただ彼の意味によって生かされているにすぎない。彼は決して奢らないけど、本当は偉大な存在なんだ。だから尊敬している。

『私は近いうち、この場所を去ろうと思うのです』

俺の中で、最も恐れていたことが起こった。

そんな……ずっと一緒にいてくれるって思っていた。彼の負担は大きかったんだ。彼の身体はいくら不死身だといっても、心まで疲れないわけがない。神様は遂にこの集落を去ると決意した。

神様の決意を、たぶん人間には止められない。

俺は立ち上がって彼にすがりついた。絶対に離すものか、彼の力にはかなわないとわかっていても、呆れられて気が変わるまでしがみついてやる。そう思って。

俺は無意識に、そして力任せに彼の腕をつかんでいた。俺の力が強いことを、神様は喜んでくれた。

『……ロイさん、あなたは強く逞しい青年となりましたね』

どんなに彼に近づこうとしても、俺は彼にはかなわない。その思いを素直に彼に伝えると、彼は困ったような顔つきをして俺を抱擁してくれた。彼の抱擁は昔から温かくて心地がいい、彼の神体はよい香りがして清らかだ。肉体労働をして汗と泥にまみれた俺は汚れていて汗の臭いがするかもしれないけれど、少しも嫌がらずに抱いてくれる。どんなときでも抱きしめて俺たちの不安をぬぐい去ってくれる、それが彼の癒しの力なんだ。そして俺は直接、彼に信頼の力を返す。いつもどおりに。

俺はいつもは祝福されると嬉しくなるけど……、嬉しいけど今日は嬉しくない。

これが俺に与える、彼からの最後の祝福になるのだろうか。そのつもりなんだ。

いやだ、そんなのは絶対にいやだ……。もう皆に気を遣わなくていいから、俺は一生祝福されなくても我慢するから、お願いだからここにいてほしいんだ。

あなたがいるだけで、俺たちは生きて行ける。

あなたがいないと、俺たちはきつと生きていけない。

神様、どうか俺たち人間を見捨てないでくれ。

『ナズさんが亡くなった日。あなたは私を殴ろうとして、拳を振り上げたけれど……私を殴らなかった。あなたは憎き相手を前にしても、どんな極限状況でも、振り上げた拳を下ろすことができる賢き人間です』

俺は首を横に振りながら、彼の顔を見つめる。人間のそれではない、赤い髪と瞳が至近距離で見上げるときれいだ。しかしあなたは間違っている。俺が彼を殴らなかつたのは賢かつたからじゃない。

あなたは頬を差し出したけれど、俺は怯えてあなたを殴れなかった。

買いかぶりすぎだ。俺はそんなに賢い人間じゃない。

『そのときと同じように』

そして俺の全身に、かつて経験したことのない苦痛が襲いかかった。この苦痛はどこからきている。俺はすぐに、彼がこの激痛を俺の体に流し込んで与えているのだと気付いた。耐えられず、情けない悲鳴が俺の口から漏れる。

助けてくれ、神様。

どうしてこんなことをするんだ、俺が何かあなたの御心にそむくようなことをしたというのか。俺はずっとあなたに従ってきた、あなたの意に沿うように。

何か理由があるならすぐに教えてくれ、理由もなしには耐えられない。

一度苦痛が緩んだかと思えば、さらにたえがたい苦痛が流し込まれる。最初と比べ、段々と時間が長く大きなものになってゆく。段階的に、痛みに俺の体を慣らしているんだ、もう俺の意識はなくなりそうだ。気絶すればいいのに、彼が何かしているのか気絶することもできない。

『……痛いのは分かっています』

彼は厳しくそう言い、なおも俺の体を離してくれない。

何故こんなに痛いことをするんだ。何が慈悲深い神様だったあなたをそうさせている、彼の口調は感情的ではないけれど、きつともう正気ではない。色々なことがありすぎて、狂ってしまったんだ……。ああ、どうして俺たちは気づいてあげなかったんだろう。不死身だけど彼の心はもう、ボロボロだったんだ。だからこんなに狂っ

てしまった。俺たちのせいだ。

もがいてももがいても、人間の力では神様の腕力にはかなわない。ずっと忘れかけていた、死の恐怖がよみがえった。

俺の周囲には彼の力の进りが見える。神通力の全てが俺の中に苦痛として流れてくる。神様の力を直に受けて、人間がたえられるわけがない。俺の視界が真っ白になり意識が遠のきそうになったとき、彼は遂に手を止めた。俺の様子を、見ていたのか……。

永遠にも続くかと思われた苦痛は終わり……静寂が洞窟の中に戻った。

本当に長い時間だった。随分苦しめられていた気がする。目の前が白くなって、視界が戻らなくて何も見えない。俺は彼の腕で抱きかかえられ、岩肌に横たえられる。これから何をされるのか、俺は恐怖で身を竦める。彼と二人きりで、怖いなんて思ったことがなかった。俺は過去の思い出にしがみつく。あの日、一緒に星空を見上げた、優しかった神様、あの彼はどこに行ってしまったのだろう。

『……ロイさん、聞こえますか。よく耐えてくれました』

彼の声はよく聞こえている。

彼はおもむろに、俺の頭を撫でてくれていた。今度は強い癒しの力を込めて……。何故、傷つけたあとに癒すんだ。あなたの心がわからない。視力が戻ってくる……。目の前には神様の顔があつて、彼は今まで見たことのないほど辛そうな顔をしていた。神様は俺を苦しめて、何がしたかったんだ。

『……今日をもって、彼らを』

彼は……俺に何か言っているが、一体何を言っているんだ？

理解がついていかない。すごく大事な話をしてくれてるような気がするのに、頭がそれを拒否している。

『あなたの手に委ねます』

俺は彼の言葉を聞きながら、その言葉から逃れるように眠りへと落ちていた。

意識が戻った。

目を覚ますと、暗闇の中に光の筋がもれている。俺が持ってきていた火は消え……ああ、朝になってしまったんだ。はっとして起き上がろうとすると、俺の上半身には神様がいつも肩にかけて巻いている衣が、しつかりと俺の体に何重にも巻きつけられて着せられていた。俺は嫌な予感がして彼の衣を着たまま、不安で胸をいっばいにしながら洞窟の中に彼の姿を捜した。もぬけのからだ。もともと荷物なんてひとつもなかったけど、彼はここにはいない。

皆が呼びとめて俺の話の話を聞こうとしたけど、俺はそれどころじゃない。集落じゆうを駆けまわって、集落の外も畑も、全部くまなく彼を捜してまわった。どれだけ走り続けても、俺の息はあがらなかつた、疲れもしなかつた。身体が軽くなっている気がする。それを不思議に思う余裕すらもなかつた。

陽が高くなって昼を過ぎた頃には皆も異変を察して、ざわざわと集落の中心に集まり始めた。

神様がいなくなつたと聞いた皆は、ショックを受けてて立ち直れなかつた。

話を聞いただけで気絶してしまった人もいた。

集落全員、大人から子供まで、四百人での大捜索を行ったが、誰

も神様を見つけることはできなかった。

刻一刻、夕暮れは近づいてくる。

陽が落ちてしまえば、今日は月も出ないから視界が悪くなって草原で方向感覚を失って迷う。俺はもつと草原の果てまで捜したかった、追いつくとは思わなけれど、今追いかけなければ彼はどんどん遠ざかってゆく。もう陽は落ちて真っ暗になっていたけれど、メグは泣きながら走って草原に捜しに行こうとした。

俺も一緒に行こうとして、あることに気づいてそれを止めた。

たとえ草原の果てまで探しに行ったとしても、それは無駄だということに気付いたからだ。夜の草原には、群れを成して襲ってくる肉食の獣、エドがいる。いつもは集落と草原全体に神様の神通力が及んでいたからエドの群れは遠ざけられていたけれど、俺はエドの遠吠えをすぐ近くにきいた。それに神様は空を飛べる。人間の足で追いつくはずがないんだ。

「メグ、やめよう。エドの群れがすぐ近くにいる。それにエドがいるってことは、神様はもう近くにはいない」

「あかいかみさま、どこに行ったの……ロイ。明日にはかえってくるかな？」

メグ、お前はそう言うけど、お前にも分かっているはずだ。

彼は本当に、もう本当に遠くへ行ってしまわれたんだよ。

俺たちを置いて行ってしまわれたんだ……。

「ロイ、その服、あかいかみさまの」

俺が着ている彼の衣は、淡く白い光をたたえていた。それが心強くもあり、かえって切なくもある。メグは色んな感情がこみ上げて

きたみたいで、顔をくしゃくしゃにすると、俺に抱きついてきてわんわん泣いた。

ごめんな、メグ。

俺はこれを着ていても、お前の大好きな神様じゃない。でもこれを俺は神様に着せられたから、彼が戻ってくるまで着ていないといけない気がする。

集落の中心に皆が集まって、火を囲んで皆がうなだれた。夜の導きとなるこの温かい炎も、彼が教えてくれたもの。

あのと看みたいだ。ナズが死んだ日。

弱い人間たちばかり何もできず、ただ寄り添って。

彼は俺たちを見捨てて行かれたんだ。泣いていた皆も泣き疲れて、徐々にざわめきは消え、木を火にくべる音ばかりが聞こえてくる。自然と俺に注目が集まった。最後に彼と会ったのは俺だって、皆知っているから。四百人分の視線を向けられ注目を浴び、皆が俺の言葉を待っていたけど、俺は何も言えなかった。

分からなかったんだ。彼が俺にどうしてあんな苦痛を与え……何をさせたかったのか。

彼は俺に、集落の皆のことを任せると言ったけれど、俺は皆の心をまとめられない。

彼のようにはなれない。

「ロイ。話してくれ。一体、神様に何があったんだ。最後に何を話したんだ」

バルがそう言ったときだった……

「え、エドの大群だあああ……！ こっちに来るぞ……！」

「エイラとカヤが襲われたぞ　　！！」

集落の見張りをしてくれていたヤスの悲鳴が聞こえた。

ああ……なんとということだ。

神様の守りがなくなっただから、普段から俺たちのことを狙っていたエドが大挙してやってきたんだ。

神様。

どうしてあなたはいなくなってしまったんですか。あなたの民が今、エドの大群の前になすすべもなく命を散らそうとしている。どうして俺たちを見捨てたんですか。

「うわあ　ん！」

子供たちの泣き声が俺の胸を引き裂きそうさ。皆は恐れおののき、われ先にと逃げて家々に入り固く扉を閉ざす。そんなことをしてもダメだ……四足の巨大肉食獣、エドは鋭い牙と丈夫な顎を持ち、木を登り力が強い。木造の家ごと破壊され、小さな子供から食い尽くされる。

誰が彼らを守れるんだ。

この集落の中に、エドと戦ったものは一人もいない。狩りの名人のヤスも、エドを狩るのは避けている。エドは群れで行動し、一頭を殺すと集団で報復にくる賢い獣だ。

俺は走って家に帰り、銛を取った。本当は恐ろしくて、逃げ出しかたくて腕が震えている……それでも、戦うしかない。集落の安全を預かった俺が、絶対に一人でも多く、皆を守るしかないんだ。

俺は夜の草原に雄叫びをあげながら銛を持って飛び出していった。

エドの大群の中に真正面から突っ込む。

まず確実に一頭だ、頭部を的確に狙う。この鉾は重く刃も短い、肉を切ることに向いていない。少しでもその構造を長くもたせるには急所一点を突くしかない。つまり頭部だ。ヤスも俺が突撃したの で突っ込んできて、俺の援護をしてくれている、集落から何人か鉾を手に、男たちが出てきて走ってきた。でもヤスはこここのところ、投げるタイプの軽量化した刃物を使っていた。エドの皮膚は厚く、軽い刃物は通らない。それに近接戦の距離感がつかめず、エドに鉾をはじかれて無防備になった。

「ヤス！」

エドの群れは数十頭。俺は傷だらけになりながら、そのうち頭部、目、喉を突いて三頭を殺した。丸腰になったヤスを援護しようとしたところで、後ろから襲い掛かってきたエドに倒され脇腹に噛みつかれた。

激痛が俺の体に迸る。

だめだ、このまま意識が落ちてもう死ぬかもしれない……せめてもう一匹、振り上げた。脇腹から勢いよく、血が流れはじめ。傷は深い。

「ロイ！ ヤス！」

若い男たちが決死の覚悟で武器を手に走ってきたが、彼らは普段は農耕や釣り、建築など戦いには無縁の労働をしていて、体を鍛えていた俺や狩りをしてきたヤス以上に戦い慣れていない。俺たちと同じ運命をたどるかもしれない。ダメだ、戻れ！ ここに来てはいけない。

でも……集落はどうなる。

何もない場所にせっかく俺たちが長い時間をかけて作り上げてきた、俺の大好きな集落。そして大好きな皆の運命はこれからどうなるんだ。

神様。

助けてくれ、やっぱりだめだ。

俺たちにはあなたがいないとダメなんだ。どうしてあなたは俺に苦しみだけを残して、遠くへ行つてしまわれたんだ。これまであなたの行動に、理由のないことなど一つもなかった。エドの動きが、やけにゆっくりに見える。ああ、もうこれはいよいよ死ぬかもしれない。ほんの僅かな間に何ができるか、俺は必死に神様の言葉を思い出す。何か、彼は教えてくれなかったか。大事なことを……。

俺を傷つけたあと、彼は俺を岩肌寝かせ、何か言っていた。俺は聞こえていたけれど、あのときは彼の心が分からなくて、傷つけられたことが信じられなくて、にわかには理解できなかった。もう一度思い出す。彼の言葉を。

『大変な苦痛とともに、あなたに私の力を授けました。

あなたは私の神通力の一部が使えるようになるでしょう』

消えようとしていた記憶が……蘇ってきた。

『大切な四百三名の私の民……彼らを守るための力です』

俺の体のどこに、そんな力が秘められているんだろう。

彼は苦痛と引き換えに、神通力を授けてくれたとは言わなかったか。

全身の力を振り絞り、もう一度立ち上がろうと試みる。彼は拳をふりかざしてはいけなかったのに、俺は見境なくエドを殺していた。俺が間違っていたんだ。

これを手放すと無防備だ、でも俺は勇気を出して銚を手ばなし、無防備になって瞳を閉じ強く願う。そう、彼がたった一つも武器を持たなかったように。彼の力を受け継いだというのなら、絶対に誰かを傷つけてはいけないんだ。

エド、これ以上俺たちを傷つけないでくれ。集落を襲わないでくれ。

守りたいんだ、皆を。その代り、お前たちも絶対に傷つけない。

今にも襲い掛かろうとするエドの群れの前に、ゆっくりと右の手をかざす。放たれた強い願いは雨雲を呼び、雷鳴を轟かせる。局所的に轟轟と渦巻く嵐が発生し、天と地を結ぶ雷の壁が一直線に人と獣との境界線を分かつ。

雷を嫌うエドたちの群れはそれを見るや、ギャンギャンと怯えた声で鳴きながら、一頭残らず、尻尾をまるめて逃げていった。

長い時間が経っていた。

降りしきる雨に打たれ、傷ついたものも、銚を手放して腰を抜かしたのも、そこにいる男たち全員が無言だった。俺は天を仰ぎ恵みの雨を全身に浴びながら、この空が、彼の去った場所に必ず繋がっていると感じた。

俺の涙と流した血は冷たい雨と混ざって、大地にかえってゆく。

「ロイ……その衣は……神様の」
ヤスが気づいた。

「……大丈夫だ、皆。神様はまだ俺たちを見捨てていない」

そう答えるので、もう精いっぱいだった。

彼の代わりに、彼から与えられた力で俺が皆を守るべきなんだ。
俺はよつちやく理解した。

HUC外伝1 ロイの覚醒と赤い神の面影（前編）（後書き）

赤井『全米が泣いた、と…』

西園『全米泣いてませんよ。変なタグつけないでください』

赤井『全アガルタが泣いた、と』

HUC外伝1 ロイの覚醒と赤い神の面影（中編）

『0というのは1の前の数字で、何も無いということですよ』

俺が子供だったころ。

神様が俺とメグ、そして皆にも数の数え方を教えてくれた。

だから俺はゼロというものが何なのかを知っている。

1の前に数があるなんて、俺はその日は理解ができなかった。物体があるかないか、1か、1じゃない状態。「1の前」という状態に、神様は名前があるのだといった。俺の中にゼロという概念が生まれ、無という概念も同時に生まれた。

ゼロという数字を使いはじめから、驚くほど物事は明確に、正しく導きだせるようになっていった。

同じものを10ずつに束ねて考えると、数が数えやすくなった。

俺たちは数を知ることによって、長い縄を持ちださなくても、正確に長さや距離をはかることができた。それからというもの、ハクさんは同じ形の家を間違えることなくたくさん建てることができ、皆がそれぞれの家に住んで快適に暮らせるようになった。

俺たちは神様が教えてくれる数字に着想を得て、皆の間で共通の記号を一つずつ決めていった。記号の組み合わせを土に描いて、簡単な情報のやり取りができるようになった。もっとたくさんの情報をやり取りできるようにしたかったから、神様に数字以外の記号を教えてほしいと言ったけど、神様はほかの記号を教えてはくれなかった。

『私が教えることはたやすいですが、あなたたちが考えることが大切なのです』

彼はいつもお決まりのようにそう言った。

全てを知っていたのだらうけれど、彼が教えてくれることは限られていた。

あの頃、俺たちは皆で食事を分け合って食べていた。

皆はいつ食事を食べたらいいいのか分からなくて、皆がマチとカイに、食事はまだかと何度も聞いて、マチとカイもうんざりしていた。神様は、日が一番高く昇ったときに、食事をすると決めればいいですと言った。

でも俺たちはいつ、日が高くなってるのか分からない。ずっと太陽を見ているわけにもいかない。

俺は集落の真ん中にカイが立てていた木の杭の下に伸びる影が、一日の間にゆっくりと変化することに気づいた。俺は、影がここに来た時に食事にしたらいいと皆に提案した。俺の案は受け入れられ、皆の食事をいつにすればいいのか分かるようになったから、マチとカイに食事がいつなのか尋ねる者はいなくなった。そして影と光の関係を利用した、皆の間での決まりごとは増えていった。

その後、メグが神様と一緒に皆が食べるぶんの畑を作り始めた。

メグはまだ小さかったから、重い水を運ぶのが大変そうだった。

彼女は最初は土器に入れて水を運んでいたけれど、何回も運ばないと畑に水がいきわたらない。彼女は途中で、畑の隣を流れている川の水を畑の方に流せばいいんじゃないかって思いついて、神様にそう言っていた。

神様はすぐにメグの言った通りにしてくれた。木の板で川の水の流れを導いて、メグの畑に送り込んでくれた。メグはたくさん水が流れてきたので、飛びあがって喜んだ。

『あなたが考えたものですから、あなたが名前をつけてください』

新しいことを発見するたび、発見した人が発見した物事に自分の好きな名前をつけていいと神様は言った。

本当は、その正しい呼び名を知っているみたいだったけれど。ときどきぼろっと、何か変な言葉を言っていた。例えばメグが神様にお願いで作ってもらった水の通り道、たぶん神様の言葉でいうと「水路」ってやつなんだ。メグは張り切って、ナサラって名前つけた。

神様は最初からどうすれば全ての物事が最善になるのか知っている。

でも俺たちが考えることが大切だと思っているようで、全ては教えてくれない。メグは重い水を何回も運ばなくてもよくなったけど、いつも畑に水が流れていると、折角の作物が水浸しになって腐りはじめた。

メグが困っていたみたいだから、俺は、水路、いやナサラの入り口に仕切りをつければ水の流れを止められるんじゃないかって言ったら、神様は喜んで仕切りを作ってくれた。

でも彼はこの方法も知ってたんだと思う。わざと知らないふりをして、誰かが気づくのを待っている。

『もう思いついたのですか！』

彼はそう言って嬉しそうだった。その言葉を聞いたとき、俺はやっぱりそうだったんだと確信したんだ。彼はあらゆることを知っているのに、俺たちが自分で答えを出すのを待っているんだと。だから俺は、神様が自分でやっていることは、それが何であれ全て覚えようとした。

きつとそれは、俺たちが絶対に考えつかない「最善の答え」で、覚えていれば必ずいつか役に立つものなんだ。それが分かっていたから。

そうしているうちに、彼から盗んだ俺の知識は、俺が原理を理解できるものも理解できないものも、どんどん膨れ上がっていった。役立つものも、役立たないものもきつとあるけど、俺にはどれが役立つのか分からないから、その時はとにかく彼の知識を盗んで詰め込むだけ詰め込んだ。

そうしておいてよかったと、今では思っている。

全てを知っていた神様が去って、俺たちの集落にはもう、俺に答えを教えてくださいる人は誰もいない。

皆が俺に色んな事を聞くようになって、教えられる側から、教える側に回らなければいけないと分かった。彼が俺にそうしてくれたように、俺は子供たちを集めて俺の知る限りの知識を伝えることにした。情報をやりとりするための記号、神様のいう「文字」を教え、数の概念を教え、作物を育てる方法をメグが教え、建築をハクさんが、測量をバルが、料理を皆が協力して、子供たちに彼らの知りうる限りの知識を伝えはじめた。

神様。あなたが俺たちに残してくれた知識は、俺たちだけのものなんかじゃない。独り占めにしてはいけないんだ。あなたが教えてくれた全てが、弱い人間である俺たちがこの世界を生き抜くために必要なもの。いつか俺が死んでたとえ神様が帰って来なくても、この集落の皆が生きていけるようにしておかないといけない。

俺や皆が得た知識は、あなたがいなくても受け継いでゆくべきものなんだ。

メグは、彼がいなくなる前にもつと彼から学んでおけばよかったと言った。

皆同じようなことを言っていた。もつと、彼にいろいろと聞いて学んでおけばよかった。俺は、俺が皆のぶんまで学んでおいたから心配しなくていいと言った。皆は俺にありがとうと言ってくれた。

しばらくすると、俺が教えている子供たちが、神様のことを忘れられなくて、彼の衣を着ている俺に「祝福してくれ」と言って甘えてくるようになった。俺は嬉しかったけど、俺は神様ではないから断るべきだと思った。

けれど神様はどんなお願いをしても絶対に断ったことがない。俺はそのことを思い出して、気は進まなかったけれど祝福をしてあげることにした。

俺の体がくさかったら皆がっかりすると思った。

だって神様の体はともいいにおいがして、皆がそれを覚えているから。俺もいつもきれいな水で身体を清めるようにして、いいにおいにはできなかったけどせめてにおわなくした。そして子供たちを抱擁してあげるようにした。

優しく抱いてあげると、俺は彼らに癒しの力を返してあげることができた。かつての神様の何十分の一かでないけれど、彼らは癒されたと言って心を落ち着け、それほどひどくない怪我なら癒せるようにもなっていた。皆を癒すと神通力が体から出ていくかと心配していたけど、神通力は祝福をしても減らなかった。

俺も安心して、子供たちに何度も祝福してあげた。

俺もメグも、ゼロという概念と、加算減算、乗算に除算、微分に積分、数列に行列の方法を知っている。だから彼が俺に与えてくれた神通力は、絶対に無限のものではないということも知っているん

だ。際限なく使えば、水がめの水を使いつくすようにゼロになってしまう。

俺はできるだけ長く、この大切な力が長持ちするようにするしかない。

確かに神通力による雷や炎の攻撃はエドを退け、皆を守ることができる。皆は俺の神通力で守ってもらえると思って安心して見ただけど、何かあるたびにむやみやたら神通力を使っていると、すぐに使い尽くす。

エドや他の獣がやってきても、神通力を使わなくても追い払えるようにしないといけない。もっと丈夫な銛やエドと戦ったための道具が必要なんだ。

俺たちが使っている、すぐに壊れる石と木の銛ではなくて。

俺は、時々神様が皆の幸せを祝うためにくれた丈夫な「金属」という素材で銛を造ればいいと気付いていた。神様の造った「金属」の鍋や道具は丈夫で、絶対に壊れない。金属の刃を磨くと石の刃より鋭くなり、切れ味がよく何でも切れる。

でも神様は料理をしたりするための小さな刃や、鍋や小物しかくれなかった。金属を造るための材料が十分でないから大きなものは造れないんだと言っていた。神様の力で少量の金属を出すことはできるけど、もっと大きなものを造るためには、鉱脈を見つけないければいけないって……。

神様がいなくなってしまう前から、俺も神様も、実はずっと金属の材料となる鉱脈を探していた。

俺はここにきて鉱脈を見つけることの大事さがよくわかったんだ。そうとなると、俺は毎日山や川、草原を朝日が昇ってから日が暮れるまで歩き回って、神様が言っていた鉱脈を探してまわった。そして何日も何日も探してようやく、赤茶色の岩がたくさんある場所を

見つけた。神様が言っていたのは、これかもしれない。

俺は懐から、束ねた薄い木の皮を取り出し、それを注意深く読んで赤茶色の岩と見比べた。

色々なことを忘れないように木の皮に記しておいて、本当によかったと思っただ。

これを持っていなくなったら、俺は色々なことを忘れて、あやふやになって今も分からなくなっていたかもしれない。でもこの木の皮に記された記憶はこれを記したときそのまま、ずっと変わらない。俺が覚えていなくても、こいつが覚えてくれている。

どうして俺がこの木の皮を持っているか。それは神様の言葉を記すためだった。

俺は以前、神様が神通力を使って金属を造る様子を傍でじつと見ていて、神様が時々砂地に描く不思議な記号を丸暗記しようとしていた。それがこの金属の造り方を記しているのだと、分かっていたから。なぜなら、その記号の羅列の中には+という文字と という記号を含んでいた。

そう、加算の+と、方向を示す なんだ。

何かと何かを加えると、何かになるという式なんだ。そこまでは俺にもわかっていた。だから数式のように計算して、神様はその金属を間違えることなく造ることができる。結果を予測しながら、彼は金属を造っているんだ。俺は数学は得意だったから、見た目が数学に似ているその式は、読み方と意味さえ分かれば絶対に理解できると思っていた。

でも神様は、俺がその記号を覚えようとしていることに気づいて、記号が記された砂面をかき混ぜて消してしまった。その文字の読み方を教えてほしいと正直な気持ちを言うと、それはできないと断っ

た。昔からずっと、神様が俺たちに教えてくれることにはかなりの制限がかかっていた。これもその一つなんだ……。

俺は思い余って、どうして数学は教えてくれたのに他のことは教えてくれないのかと聞くと、物事の真理を教えることはできるけれど、神様が使う文字を人に教えてはいけないからだと言った。

それを聞いてから二日ぐらい俺は悩んで、あれをどうにかして教えてもらえないかと考えた。

そして思いついたんだ。

俺は川辺に佇んで皆が釣りをしているのを見ていた神様の前に勢いよく膝をつく、砂地にいくつかの新しい記号を描き始めた。神様はそれを少し上の視線からじっと見ていた。俺は考えてきた全部の記号を砂に書いて、何も言わず見守ってくれていた神様を見上げた。神様の赤い瞳がまんまるになっていた。

「人間が使うための記号を考えてきました。神様の文字を使ってはいけないなら、これを使って理ことわりを教えてください」

彼はあつげにとられた顔をしていたけれど、暫くして、わかりましたと言って俺のひらめきを喜んでくれた。

そして俺が考えてきた記号の周りに、一つずつ、小さなテン・をつけていったんだ。

最初の記号には一つ、次の記号には二つ……俺は二十個考えてきたから、最後の記号には二十個つけるのかと思っただけど、神様はある一定の数になると、外に点を書き加え始めた。何か規則があるみたいだ。俺はわくわくしてそれを見ていた。規則性が分からないから、数学とは少し違う。

『あなたの考えた記号を元素といい、私がつけたこの点は元素の持つ電子といます。電子を一つだけ持っているのが、これです』

彼はすつと最初の記号に指をさす。

そして、八番目の記号を砂地に描き、一番目の記号を少し下げ、左右に一つずつぶらさげた。

『この組み合わせとこの配置が、あなたがいつも飲んでいる、水を示します』

俺はまた一つ、世界の真理が彼の口から明らかになってゆくのを感じていた。

電子の配置や、電子の振る舞い、原子や元素の性質……彼は熱心に俺に教えてくれたけれど、ずつと彼の話を聞いていると、俺はなんだか頭がこんがらがってきた。

途中からお話が分からなくなりました。

恐る恐る白状すると、神様は砂に書いていた記号をすべてかき混ぜて消した。ああ……何で消してしまったんだ……。俺が落胆しているところ……。

『ここから先はきつと、今までのようにあなたの頭の中には詰め込めません』

はつきりとそう言われて、俺はショックだった。教えても無駄だと、見切りをつけられたような……。

でもそうなのかもしれない。どれだけ背伸びをしてもやっぱり俺は神様のように賢くないし、これほど情報が多いと暗記してずっと記憶をとどめておくことも難しい。理解がついていかないってことなんだ……神様はもう教えてくれないってことなのか。と、うなだれていると。

神様は俺を励ますように、にっこりとほほ笑んだ。

『これからはあなたの頭の外に、記憶を出すときよいですよ』

俺はすぐに彼の意図に気づいて、どうすれば彼の言葉と教えてくれたことを残せるかを考えた。考えて翌日、俺はなめらかな木の皮と、木の皮を傷つけるための小石を持って彼のもとにいった。彼はそれを見て、俺をとてほめてくれた。

俺の記憶を外に出して、持ち運ぶことができるようになった。その方法はやがて、皆も真似するようになって、それまで土に描いてすぐ消えていた情報が消えなくなり、皆の間で木の皮のやり取りも始まって情報をお互いに伝え合うことができるようになった。

最初の木の皮には、その日に学んだ元素周期というものが残された。来る日も来る日も、彼のもとで何枚もの木の皮に、俺は彼から学んだ化学式とういものを神様の使う言葉でなく俺たち人間の言葉で刻み続けた。俺は金属を造るために必要な元素、もしくはその性質を丁寧に学び、そして家に戻って木の皮で復習して、やがて少しずつ理解できるようになっていった。

そのときの経験が生きて、神様が言っていた鉋脈がどんなものか。そこにあるものが何なのか、俺は大まかな見当をつけられる。緊張しながら手で触ると、手に色とにおいがつく。これは俺の手の脂と金属が反応してできる、独特のにおい。俺はこのにおいを知っている。神様が一番欲しがっていた金属の原材料なんだ。

ゆっくりと天を仰いだ。

神様。この恵みを感謝します。

これは俺が二十六番目に考えた記号を含む遷移元素で、熱をかけ

て融けはじめの温度が普通の元素より高い。赤茶色になっているのは、八番目の元素と強く結びついているから。炎で熱をかけ、八番目の元素をはがしてこれを溶かし不純物を取り除けば、原子番号二十六番の金属が得られるはずなんだ。

この金属原子は立方体形の構造をとる。溶かした直後はきつと構造的に隙間だらけだろうけど、結晶体の空隙をなくすことによって強度が得られるんだ。

熱をかけたあとに叩いたりして圧力をかけてもいい、それだと低温ですむ。もう一度高温の熱をかけて追い出してもいい、とにかく結合間の空隙を外に追い出せばいいんだ。俺は集落の男たちを呼んで、赤茶色の鉱物を皆で少しずつ運んで集落に帰った。皆、何に使うんだろうとって首をかしげていたけど、とにかく運んでくれと俺は運んでもらった。

俺は集落の外に岩を集めて組み合わせ、赤茶色の金属のもとを溶かすための炉を造った。高い温度をかけて溶かさなければいけない俺の神通力の炎の温度は、木を燃やして立ち上る炎のそれよりも高くないはずだ。金属を造るときに、何故神通力の炎を使うのかと俺が尋ねると、神様はそう言っていた。神通力を使えば、とにかく高熱がかけられる。そして風を起こして新鮮な空気を送り続ければ、八番の元素を媒介として燃焼は続くはずだ。

どうしたらいい、これは神通力の無駄遣いにならないか。
木材を燃やした方が節約になるんじゃないか。

俺はそうも思ったが、神様が木を燃やさず神通力で炎を起こしていたので、やっぱり最初は彼の真似を試みることにした。それが最善の答えだと知っているから。

皆がそろそろと集まってきた、何をするのかと炉のまわりを囲んだ。

俺は神通力を込めて炎を起こし、燃え盛る炎を炉の中に入れ、鉦石をあぶる。

もうもうと煙が上がリ、そして煙は天高く立ち上ってゆく。

メグが眩しそつに空を仰いで、あかいかみさまに届いているかなと言っていた。

HUC外伝1 メグの赤い花と赤い神の面影（後編）（前書き）

ロイばかりずるい！ということでもグが外伝を書きたいそうです。
（メグ視点なので文章がたどたどしく拙いのは仕様です、ご了承ください
ださい）Special Thanks！ 化学考証：？ 晃さま。
ありがとうございます。間違っていたら教えてください。

HUC外伝1 メグの赤い花と赤い神の面影（後編）

ロイは私より年下の男の子。

お父さんもお母さんも兄妹もいない、一人ぼっちの子だった。

昔は小さくやせっぽちで、ロイは身寄りがないからいつも私たちの家族と一緒にだった。でもやっぱり本当の家族じゃないから、ロイは私たちの家族に悪いと思ったのか、ロイは何かあるたびに遠慮してた。

たとえばわざと自分の分を少なくして、あまりたくさん食べ物を食べなかったり、かかさまにも甘えず寂しそうに一人でよく遊んだり。気を遣わなくていいのに、って私はいつもロイに言っただけど、ロイは賢いから、気を遣ってなんてないよ、って真顔で嘘ついてた。

ある日、草原に食べ物をさがしに行っていた私が、あかい眼と髪の毛をして、白い服を着た人を見つけた。それがあいかみさま。空から落ちてきたんだって言ってた。落ちてきたんなら空に帰らないの？ って聞いたたら、飛べないんだって言って困って顔をしてた。

それからというもの、私はあいかみさまが住む洞窟に毎日通った。

かみさまはすごく物知りで、なにもないところから何かを創り出せる、すごい力を持っていた。でも、誰かがかみさまを信じてあげないと力が出ないんだって。

強くて弱い、不思議な存在。

かみさまの体は温かい。抱いてもらうと色々な不安が消えて心が落ち着く感じ。私はかみさまに優しく抱いてもらうのが好きで、よ

くやつてもらった。そのたび、私はかみさまに信頼の力を返していたみたい。それがかみさまの力の源なんだって。私たちは足りないものをお互いに補い合っていた。

私はかみさまに早く集落の皆と会ってもらいたかったけど、かみさまはあにさまが死ぬまで、皆に会ってくれなかった。

あにさまが死んだ日、私はかみさまのことが大嫌いになった。

だつてかみさまは、あにさまを絶対に助けられたはずなんだ。

皆で集まつて、もうかみさまのことは信用しないしあてにもしな
いって決めただけど、ロイだけはそれでいいのかって言ってた。だつ
てその時には、皆のお腹がいたくなつてきていたから。あにさまも
最初お腹が痛いつていつていたから、すごく嫌な予感がした。

私たちにも死が近づいていると分かってた。

あにさまと同じようになって、死んでしまうのは嫌だ。

……死ぬのは怖いつて、ロイだけはそう言ってた。

ロイはひとりでかみさまのところに行つて話をして、何故か果物
を持って帰つてきて私たちに一個ずつ配った。私たちは何も気づか
ずに食べたけど、その中にはかみさまがつくつたお薬が入つていた
んだ。ロイとあいかみさまのおかげでお腹痛いのが治つて、その
結果集落の全員が助かった。

ロイはそのとき、かみさまがあにさまを助けられなかった理由は、
あにさまより強い痛みが流れていたからだ。と教えてくれた。

それを聞いて皆は、それじゃ仕方がなかったと思つた。

だつてあにさまは、痛くて痛くて体が動なくなつていたから……

かみさまも草原を歩けたわけがない。かみさまは何度も何度も私たちに謝ったから、仕方ないよと言ってあげた。でもそのことをずっと気にしていて、いつかもっと力をつけたらできることが増えて私たちをもっと助けられるかもしれないって言った。

そのために強くなりたいて。

私はもう一度、かみさまを信じようと思った。

そして私たちはあいかみさまと、一緒に暮らしはじめるようになった。

ロイはかみさまのことを本当の家族のように思ってたみたい。かみさまになついて甘えて、嬉しそうだった。ロイがやっとな心を許せる人ができて、私も嬉しかった。ロイは私と仲がよかったけど、あんなに嬉しそうな顔は見たことがなかった。

そのうち私たちはあいかみさまから、勉強を教えてもらうことになった。私たちのかしこさは最初は同じだったけれど、ロイはみんなよりたくさん勉強して、そのうちあいかみさまは、分からなくなつて首をかしげている私たちよりロイにたくさん勉強を教えるようになった。

ロイはほんの少しずつ誰よりも多くの努力を繰り返しているうちに、集落の誰よりもかしくなった。私は植物を育てたりするのが得意だったから、かみさまに農業を教えてもらった。他の皆も、それぞれ違うことをかみさまから教えてもらっていた。そしてそれぞれの得意分野ができた。

ロイはたくさん食べて体を鍛えて、昔のようにやせっぽちではなくなつて大きくなった。やっぱり、ロイは昔、私たちに遠慮して食べ物をあまり食べなかったんだと分かった。

私たちが大人になるころには、集落は豊かになって人も増えてきた。

でも、それは突然のこと。

あかいかみさまが集落からいなくなった。

その日、ロイがあかいかみさまの衣を着て、かみさまの住んでいた洞窟から出てきた。

かみさまから集落のことを託されたって……。ロイはかみさまの神通力も受け継いで、勇敢にもエドの群れに一人でつつこんでいて、エドを雷で追い払った。その力を見て、これからはロイがいなくなったかみさまの代わりになるんだと、皆がそう思った。

皆はかみさまに置いて行かれたのが悲しくて、忘れられなくてたくさん泣いた。私も泣いたけど、なんとなく、いつかこんな日が来るような気がしてた。

なぜなら以前、私はかみさまと仲がよかったから、それが原因で皆に色々ひどいことを言われて辛くなって、あかいかみさまの洞窟に行つて祝福してもらった。私が泣いていたから、あかいかみさまは私を元気づけようとして、見たこともない、暗闇の中で光を放つ花束をくれた。

かみさまの本当の名前を教えてもらったのは、そのときのこと。私のことを信頼している証に、私だけに教えてあげるって。

かみさまの本当の名は、キッペイっていうんだって。

自分で名前をつけたのかって聞いたら、自分じゃなくて、かみさまが元いた世界にいるお父さんとお母さんにつけてもらったんだって。本当はかみさまはひとりじゃなくて、かみさまたちの世界に家族や友達がいたみたいだった。

空から落ちてきたかみさま。

突然皆から引きはがされて、空から落とされたのかな。昼間の空も夜空も、空を見上げるのが好きで、早く空が飛びたいといっていた。そんなに見上げて、空に帰りたいの？ ってきいたら、いつか帰りたいって。

私は空に帰らないでほしいと思ったけれど、言えなかった。

だって、家族と離ればなれになってたら絶対に会いたいが決まっている。

私とかみさまが出会ったころ、かみさまは力が弱くて誰にも信頼されていなくて、空も飛べなかった。でも長い時間をかけて皆に信頼されて力をもらってかみさまは強くなって、その頃には高く空を飛べるようになっていた。

だからもう、もしかしたら

お別れのとかが近づいているのかもしれないと思っていた。

かみさまのあとを任された今のロイは、集落の誰より賢くて強くて力がある。かみさまがロイを特別手をかけて育てて、ロイもかみさまの期待に応えようと努力したから。皆がロイを頼りにしはじめた。

ロイもかみさまのことが忘れられなくて最初はくじけそうだったみたいだけど、自分がすっかりしなきゃって皆をまとめはじめた。

ロイは何日も歩いて探して赤茶色の岩をとってきて、集落の外で金属っていうものを造り始めた。最初にできたものはボロボロにな

って壊れやすかったけど、ロイは工夫して、赤茶色の岩を溶かしたものと色んなものを混ぜて丈夫になるように試してた。

ロイは最初、神通力の炎を使っていたけれど、それじゃ神通力が勿体ないからって、木材を燃やした。でもすぐたくさんの木材を燃やさなければ赤茶色の岩を溶かすための熱がかからないって気づいて、また数日いなくなっただかと思うと、今度は固くて真っ黒い石をごろごろと持って帰ってきた。

なんか六番目の元素が固まりになって崖に埋まってる場所を見つけたから削って持ってきたって言うた。六番目の元素って言われなくても私たちにはさっぱり分からなかったけど、ロイが木の皮に描いていたかみさまの言葉を思い出しているみたいだった。

黒い石は火をつけると、真っ赤になってよく燃えた。私たちは何で石が燃えるのかわからなかった。ロイは、本当はこれを使わなくてもこれの二倍の熱量が出て、よく燃える黒い液体があるんだけど、と言ってた。ロイはそれが燃えることを確かめると、なぜか先に蒸し焼きの窯を造って、その黒い岩を蒸し焼きにした。

なんか十六番目の元素が邪魔なんだって。もうロイがやっていることに、私たちの理解はついていけない。

蒸し焼きのあとの黒い岩は、少し薄い黒色になって穴がたくさんあいてパサパサになっていた。ロイはそれを細かく砕いて赤茶色の岩と混ぜて火を入れると、またパサパサの石は燃えはじめた。いい具合に反応したみたいで、丈夫な塊ができた。ロイは塊を持って、ほっとした顔をしていた。

そのあと、たまたま誰かがロイの蒸し焼き窯で木を蒸し焼きにした。すると、木はいつもの燃えカスみたいに白くならず、真っ黒になっただけだった。ロイはそれも同じ色をしているから六番目の元素かもしれないと気づいて、燃える石と同じようにやってみたら同じようにできた。

でもロイは、どこかの崖にたくさんあった、黒い燃える石を使うことにしてみた。木は家の材料にもなるし、皆がたくさん使わなければならぬから。だから木を全部切り倒して皆を困らせたくない、って言った。

ロイは賢い子だと思った。

次にロイは、エドが集落を襲ってこないよう、集落に沿って木で囲いを造ったほうが良いと言った。せつかくだから、エド以外の何が来てもいいように丈夫な囲いを造ろう、とも言っていた。皆はロイの意見は正しいと言って、私もロイの言うとおりだと思った。

「木を伐り出し、それを集落に沿って立てて集落をかこもう。神様が戻るまで、俺たちの集落を守るんだ」

もうエドに襲われたくないから、あんな怖い思いは二度としたくない。

皆の思いは一つになった。

ロイは先頭に立って伐採し、木を運んだ。とても重いけれど、ロイの体にはかみさまの力が宿っている。皆より多くの荷物を負うことができ、皆よりたくさん距離を歩くことができた。

でもその力を与えられたときのことを聞くと、痛くて気絶しそうだったって言った。痛かったけど、我慢してもっともらっておけばよかったな、なんてロイは言っていたけど。ロイの痛みと引き換えに与えられた強い力のおかげで木はたくさん集まって、皆が感謝した。

何日もかけて集落の周囲に、立派な囲いをつくった。

皆で協力したから、皆とても仲がよくなって打ち解けあい、何でも話せるようになった。男の人たちが柵をつくっている間、集落で

は私たち女の人もロイたちのためにご飯を作って、それで私は他の女の人たちと仲よくなり、それからもういじめられなくなった。

困いはできたけど、でもまだロイはエドのことが心配だった。

するとヤスさんが、いつも狩りをするときに落とす穴を掘るのを利用して、それでさらに周りをかこつてみたら安全じゃないかって思いついた。

皆とてもいい案だと思ったので、柵の外を落とし穴で囲った。

そしてエドはもう、今度こそ集落には入ってこれなくなった。私たちは時々落とし穴に落ちるエドをみつけて、弱るのを待って皆で食べた。誰も狩ったことがなかったから知らなかったけど、エドの肉は焼いて食べるととてもおいしかった。

ロイにはばかりまかせつきりにしてられない。私も何か皆の為にしなければ、と焦る。

でも私にできることって、作物を作ることや、食べられる小さな動物の世話をして飼うぐらい。そういうことは皆もできるようになってきたし……どうしよう。私には取り柄がない。

悩んでたら、あることを思い出した。

私はそこで皆の邪魔にならないように小さな畑をつくり、ある種を植えてみた。種はやがて芽を出し、すすく日光を浴びながら育つて、見たことのない大きなつぼみがついた。そして私は夜、家を抜け出してこっそりと、畑に通つてつぼみの様子を見るようになった。

早く咲かないかな。

今日もまだかな？

つぼみはなかなか開いてくれなかった。

しゃがみこんで、じつとつばみとがまんくらべ。

明日には咲くのかな、少しつばみが緩んできてる。

この花は、きつと夜に咲くんだ……そう思ってた。長い時間つばみを見てたら……。

「メグ、どうしたんだ。今日の昼間に、たっぷり水をやったばかりじゃないか。夜更かしをせずしっかり寝て明日にすればいい」

急に後ろから呼ばれて、背筋がひゃつとした。

夢中になってみてたから足音も聞こえなかつたけど、私の背後にロイがいた。そつと近づいてきたみたい。ロイの体はかみさまからもらった神通力で少し光ってる。かみさまみたいだな……。私はじわつとくる熱いものをおさえて、明るく笑いかける。

「ロイも寝ないと、明日疲れちゃうよ」

私はロイのことも心配だった。だってロイはみんなのために、夜も見回りをしてくれてるみたいだから。ロイは神通力が使えるから普通の人にとっては危険なことをすすんでやってくれる。これもその一つ、ロイは皆のことが心配なんだ……。昔、あいかみさまが皆を心配して守ってくれたように。

「俺は神様の力をもらってるから、あまり疲れないんだ」

「でもロイは人間だから、心は疲れてるよ？ 頑張りすぎて心が疲れて、かみさまみたいはどこかに行っちゃったら……」

いなくなってしまうたら、私は悲しくて今度こそどうすればいいのかわからない。

ロイがこの集落の中心になっているから、皆も絶対悲しむよ。そんな私の思いは、ロイに通じたみたいだ。

「ありがとう、心配してくれて。じゃあ俺はもう休む、メグも一緒

に帰ろう」

ロイは見回り、私はつぼみの観察をやめて、それぞれの家に帰ることにした。

帰り道の途中で、ロイはあの花は何なのかって聞いてきた。きれいに咲くまでは誰にも内緒にしておくつもりだったけど、ロイにだつたら私は何でも話せる。

あいかみさまはロイに力を授けてくれたけど、私もかみさまからもらってるものがあつたんだ。

「かみさまがね、私に夜になると輝く花をくれたんだ。かみさまが住んでいた洞窟の奥にはその花がたくさん植えてあるの。私は種を取って、そしてこっちに植えてる」

「知らなかった。洞窟の奥に何か広い場所があつただなんて」

ロイは知らなかった。そうだよ、わたしとかみさまの秘密だったから。

でもきつとかみさまは、この花をみんなのために使っていていって言うってくれるよ。

だから種を植えてみたんだ。

「その花は夜になると光って、とてもきれいなんだ。今はもう全部花が終わって実になってしまったけど。種を植えて、また咲けばいいなと思って」

そう、手入れをしてくれる人を失ったあの洞窟の奥の花園。花が全部枯れてしまっても、私は全ての種を取っていた。

「どんなふうに咲くんだった？」

ロイはわくわくしている。夜に光る花なんて、賢いロイにも全然

想像がつかないよね。でも私はそれを見てる。本当にきれいで、天のお星さまのように輝くんだよ。早く見せてあげたいな。

「そのうち、咲くと思うから咲いたら一緒に見よう。夜になると咲くんだ……だから私は夜に畑を見に来てたの。そしてね……多分だけど、赤い花は、痛みを和らげてくれる」

あかいかみさまが私たちを癒してくれていたみたいに、痛みを取ってくれる花。

そうだと分かっていた。ロイはそれを聞いて歩みを止めた。

「何でそんなことがわかるんだ？」

「あかいかみさまは、その光る花が何かの薬にもなるって言った。それが何の薬なのか分からなくて……だから一体どんな効き目を持っているのか、私がつずつ調べていこうと思ってるんだ。私がかみさまからもらった全部の花を、花びらと茎と葉をそれぞれ分けて粉にして、種も色ごとに分けて持つてる。赤い花の効果だけはわかってるんだ」

「相変わらずすごいな、メグは！」

ロイが私をほめてくれた。そんなことないよ、何でもできるロイに比べたら私なんて全然だめだよ。って言いたかったけど、ロイが本当に驚いて感心してるみたいだったから、心からそう思ってくれてるんだ……だからありがとうって言うっておいた。

ロイは賢いから先に頭で考えてから色々やってみるけど、全てが考えて分かるものばかりじゃない。例えば、この実は食べられるのかどうなのか、というような問題。それは誰かが食べてみないと分からない。最初に食べる人が必要なんだよ。考えて分かることはかりじゃない、やってみないと分からないこともある。

だから私は何でもやってみるつもりでいるけど、私は向こう見ずだから、

かみさまには心配されたことがある。

『メグさん、あなたがやってみようとするのがいつも安全であるとは限らないですよ。よく考えて、行動をしてください』

だからかみさまが言いたかったことは

つまり、その実が毒だったら死ぬってこと。

でも他の人は、その実は食べちゃいけないなかったんだって分かる。

誰かの死と引き換えに得られたその情報は知識となって、ずっと後に受け継がれてゆくんだと思う。

かみさまはその花を薬だと言ってたから決して毒ではないと思うけれど、薬の効果を調べるのは、この花をもらった私の役目なんだ。私はそう思っていた。

私が私の体をつかってそれが何の薬なのか、全部調べてみよう。

もし何かを間違えて私が死んでしまったら、それをやっちゃいけないって皆がわかる。

でもすべての薬の効果がわかったら……ロイがいつか神通力を失っても、皆の病気を癒せるようになるから。やるだけの価値はあると思うんだ。

「昨日、たまたまコケてすりむいたから、何かわかるかと思って粉を傷口に塗ってみたの。そしたら、傷は治らなかつたけど、痛みが嘘のようになくなった。私は赤い花を使ったけど、他にも青と白と黄色がある。だからもしそれらの中に傷や病気を癒すような効果を

持つものがあつたら、ロイは神通力を使って癒さなくてよくなる。そしたらロイの負担も減るかなって思つて」

「それはとても重要なことだ。皆が助かる。でも他の花の効果調べるには、絶対にメグの体をつかわずに俺の体をつかつてやってくれ」

ロイは私の肩に両手をおいて、諭すように真剣にそう言った。

「大丈夫だよ、私が少しずつ調べるよ。気を付けてやるから」

「やめてくれ、メグ。俺は神通力がある、でもメグはただの人間なんだ。だから俺の体の方が、メグより丈夫だ。それに調べ方を間違えて死んでしまったら、お前のほかに誰がその薬の効果を調べて、上手に花を育てることができる？」

もしかしてロイは私の心、読めているのかな。

私がしようとしていることを全部見通してるみたい。ロイ、優しいな。

「でも、ロイは皆にとって必要だから」

「メグのことも必要だ。俺が必要なんだ」

ありがとう、ロイ。とても嬉しい、でも気持ちだけで十分だよ。

私が全部調べるから。

そう言おうと思つたら……。

「できるかぎり俺の体を使って、あとは落とし穴に落ちたエドや他の動物にもそれを飲ませて試してみよう。傷薬なら動物の傷も治るはずだ。人間に効くなら、動物にだって効くに決まっている」

やっぱりロイは賢かった。他の動物を使う、その発想はなかった。

私たちが待ちに待つたその夜。

かみさまからもらって私が育てた赤い花のつぼみは、夕暮れ時からいつせいに咲き乱れ、月に向かってしゃんと茎を伸ばして精いっぱい背伸びをした。闇夜に輝く、赤い光を放つ花が私の小さな畑一面に咲いた。

咲き誇った薬花を、ロイも一緒に見てくれて、すごく喜んでくれた。私も嬉しい……どうなるかと心配だったけど、ちゃんと花が咲いた。もうこの花は、私は次からも同じように咲かせられる。育てる方法は分かった、そして種を植えてから咲くまでの期間もわかった。

あとは他の花の薬の効果の一つずつ確かめるだけだ。

「あかいかみさま、お空から見てくれてるかな？」

私たちは天を仰いだ。

澄み切った夜空に、月が出ている。かみさまに花束をもらったあの日と同じ……月の光を受けて、輝く赤い花が夜風にそよそよと揺れている。ざわざわと風の音が聞こえた。

「いつかかえってきてくれるよ。この赤い光の目印を見つけて」

ロイはあかいかみさまにかえってきてほしいみたいだ。

でもロイは知らないけど、かみさまにはかえるべき場所とかえりを待っている家族がいる。かみさまはこの空の向こうにかえって、そして本当の家族や友達と出会えたのかな。あかいかみさまがひとりぼっちじゃなくなって、皆にあえて空の向こうにかえれたなら、私はそれでも嬉しい。

暗くて冷たい洞窟の中で暮らしていたあかいかみさま。私たちに隠れて、よく独り言を言っていた。独り言を言っているときは、私たちのことなど見えていないみたいだった。

たったひとりでこの世界に落ちてきて、本当は寂しいし心細いんだろうなっていつも思ってたから。

でもね……。ほんとは

「帰ってきてくれたらいいな」

私たちとかみさまを繋ぐ絆は、まだ赤い光でつながっている。

かみさまのいない季節を、残された私たちはしっかりと歩んでゆく。

ロイはエドに負けない、硬くて丈夫な”二十六番目”の金属の銚を造り、若い男の人たちに一本ずつあげていた。私は私の日々の仕事をこなしながら、薬の効果を自分で試したり、ロイに試してもらったり他の獣に試してもらったりして、少しずつ調べていた。たくさんさんのことを私たちの体を使って調べたけれど、私たちも動物たちもまだ誰も、死んでない。

誰も傷つけなかったかみさまの優しさを、ひしひしと感じている。

赤い花は痛み止め、これは最初からわかってた。とてもよく効く。青い花を煎じて飲むと、熱がさがって息が楽になる。

黄色の花の効果はよくわからない。でもそれを煎じて飲んだ私は、なんだかずっと体の調子がいい。

白い花は、傷口が腫れたり膿が出たときや、お腹が痛くなったときに効く気がする。ロイは、これは私たちが最初にかかってかみさまに癒してもらった病気に効くやつなんじゃないかって言ってた。皆の間で広まってゆく病気にきくやつ。

私は赤い花と青い花をかけあわせたら痛みがとまって熱が下がる

花になるのかと思つてやつてみたら、赤と青と紫の花ができた。そして思つた通り、紫の花は両方の効果を持つていた。その組み合わせでできた全部を数えてみたら、赤：紫：青 \parallel 1：2：1に近い比率になつていた。何か法則があるのかもしれない。私とロイは数学が得意だつたから、色々な数式をたてて考えながら、次の代の花が育つのを待つている。

私は紫の花の種をとつた。

この大切な種を次につなげよう。

ある日、集落の堀にメスのエドの子供が落ちて骨が折れていたの
で、私はなんだか可哀そうになつてこつそりと手当して育ててみた。
隠そうと思つても、エドの子供はすぐに大きくなる。あつという間
に私の背丈を追い越した。皆は怖がつたけど、小さいときから育て
たから大丈夫だつた。ロイもいるし……。

私はそのエドの子に、アイつて名前をつけた。

アイはもともとおとなしくて、私にも皆にもとてもなつてくれ
た。

アイがおとなしいので、アイを集落の中で飼つてもいいつてこと
になつて、私が責任をもつて柵の中に入れて面倒をみはじめた。ア
イは体が大きくて、とても速く遠くまで走る。私はアイの背に乗つ
て、遠くまで連れていつてもらつた。一人では危ないけれど、アイ
はエド。

鋭い爪を持ち、牙をもつてるからたいいの動物はびっくりして
アイを見ると逃げていく。アイはおとなしくていい子なだけけど、
そんなこと他の動物は知らない。

もつと遠くに行けば、もしかしたら新しい作物にできそうな植物
があるかも。そう思つて、私は新たな作物との出会いが楽しみでど
んどん遠くまで出かけていつた。

そして私はアイとともに、湖に沿って行動範囲を広げていった。いくつかおいしい植物も発見して、ロイの興味のあるような鉱物も見つけて、集落に持ち帰った。ロイも皆もとて喜んでくれて、いつも私がおみやげを持ち帰るのを楽しみに待っていてくれた。

でも、その日の私はちょっと遠くにまで行きすぎてしまった。アイと森の中を走っていると、段々と陽がくれてくる。アイは夜でもよく見える目を持っているけれど、ちょっと方向が分からなくなるかもしれない。ひたすら湖に沿って走ればいつかは集落に着くから、迷うことはないんだけど……そろそろ引き返そうかと思っていると、真っ黒な服を着た、女の子が森の中で何かを探していた。

私はエドに乗っていたから、女の子は私に気づいて悲鳴を上げて逃げた。でも女の子は持っていた大切な袋を投げ出してしまっている。私はアイの背から飛び降りてそれを拾うと、女の子を追いかけた。

「まって！ まって！ 怖くないから待って！」

女の子は一生懸命走ったけど、すぐに走りつかれて、へたつとへたりこんでいた。

「はい、これ忘れものだよ。ごめんね、脅かしたりして」

私は本当に驚いた。私たちが住んでいる集落以外の場所で、誰かに遭うとは思わなかったから。そしていつも私たちの集落に流れ着く人とはちょっと違う。着ている服も何か違う。彼女は黒い服を着ていて、私は紫と黄色のしましまのやつ。

「お姉ちゃん、グランダのひとじゃないの？」

「グランダって、何？」

訊いてみた。女の子の言葉は私たちの言葉と同じ。通じるけれど、何を言っているのかわからない。

「グランダっていうのは、私の国のこと」

「くに？ 集落じゃなくて？ 疑問は膨らむばかり。」

「私はね、湖の向こうの集落から来たんだ。あなたはどこに住んでいるの？」

「グランダの他の、国があるの？」

女の子の口が、ぽかんとあいた。すごく驚いてるみたい。多分私と同じ驚きなんだろうと思う。私は集落に帰ったら、このことを話さないよ！

湖の向こうに、人が住んでる。しかもたくさんの人が……皆びつくりするよ。

「そこに行きたい！ 助けて！ みんな赤い邪神に病気にされて殺されちゃうー！」

女の子は私の服にひしつとしがみついた。女の子とは思えないほど力がこもっていて、その話が嘘じゃないって、私にはすぐに分かった。その子の頭を撫でてあげながら、女の子が言った言葉を繰り返してみる。

「あかい、じゃしん？」

「グランダの皆を病気にして殺してしまうの！ 悪い神様なの！」

私のところにいたのはとても優しくていいかみさまだったけど、この子が暮らしているところにいるのは、悪いかみさまなんだ……。病気にして殺してしまう？ なんだか可哀そうになってきた。何とかして助けてあげたい……。

「どんな病気にして、殺してしまうの？」

「わからない、とにかくみんながバタバタと死んでいく……！」
みんなが、死ぬ……何の病気なんだろう。

私の頭の中に、すぐにあの白い花のことが思い浮かんだ。

「もしかしたらその病気、治してあげられるかもしれない。私たちの集落にはね、皆がかかってゆく病気を治してくれる薬になる花があるんだ……だからそれをすりつぶして飲めば」

こんなときのために、私は薬花を栽培していたのかもしれない。あいかみさまはこの日のために、もしかしたらあの花束をくれたのかもしれない。集落の皆を助けるだけじゃなく、困った人は皆助けなくてはいけないんだ。

「病気が、治るかもしれないの？」

「私たちの集落には、あいかみさまがいたんだ。赤い髪の毛と瞳の、やさしいかみさま。いいかみさまがくれた薬だから、多分その悪いかみさまの病気に勝てるよ」

「赤い髪と瞳の？」
彼女はぎよつとした顔で、肩をこわばらせた。どうしてそんな顔をするの？

人間ばなれしてちょっとびっくりする色だけど、私は大好き。会えば分かるよ。

もう懐かしいけれど、あのきれいな色は、鮮やかに覚えている。

「そうだよ、だからあいかみさまっていうんだよ」

「私のところの邪神と同じ姿だ……なんで……？」

名前を聞くと、その女の子の名前は、ナオといった。

第2章 第9話 赤井さんの光臨と白い花の行方

イエーイ！ 国民の皆様お久しぶり！ 何か私のナレーション中断してましたね。えーと、どこまで話したっけ？

ナオが見張りに見つかるフラグをビンビンに立ててくれたときだっけ。

あ、それは大丈夫だった。

あんなに大きな声出してたのに、とりあえず見つからなかった。なんでかって、兵士が見回りサボってる。兵士としてそれはどうなんだと思ってたら、薬師のおじさんの話によると、兵士だって家には病気の妻と子供。こっそり夜警抜け出して家に帰って看病してるみたい。

話を聞くとさすがに泣ける。今すぐ助けあげたいよ、嫌じゃなけりゃ祝福してあげたいよそれで大抵癒えるからさ。何でここそんなに病気が多いの？ 早く何とかした方がいいよ。何の感染症なの？

『詳しく教えてください。その病を患っている人はどれだけいて、どんな症状を訴えていますか』

城壁に梯子をかけてナオのお父さんが昇ってこようとした。

いや、いいから。登ってきたら危ないから。って思ったけど皆が梯子を下支えしてくれてる。

『ここに来てはいけません。あなたが咎めを受けます』

いくらダメだって言っても絶対登ってきそうだけど、私は一応上から声をかける。

「妻を助けていただいたのです、私はどうなろうと構いません。神

様、いま降ろして差し上げます。なにとぞ、私たちの非礼をお許しください」

うーん……仕方ないから降りようか。何かこの人たち決死の覚悟ってかやる気満々だし。どうせ明日ぐらいには降りるつもりだったけど、「降りてください」「いえ降りません」って押し問答やってたら余計目立つ。スオウ対策も何も立ててないけど、朝までに考えればいい。

追いつ返すのも、気の毒になってきた。だって邪神解放してるの見つかったら絶対あなたらスオウから処罰されるじゃん、勇気を出して登ってきてくれた気持ちはすげー嬉しいよ。

「神様、今からあなたの体に刺さっている杭を抜いていきます。痛むかとは思いますが、こらえてください」

ん？ 自分で抜こうかと思ってたけど、抜いてくれるの？
彼はレプリカの杭に手をかけ、一本ずつ引き抜いてゆく。一本引き抜くたびにすげー血が出るし尋常じゃないほど痛い。ちよ………何で抜じったような抜き方するわけ！？ もつと優しくやってよ………
と思ったけど、私って無駄に腕力あるからレプリカを壁にめりこむように深く刺してみたいだ。人間が無理に抜こうとすると、変に力がかかって大流血する。

絶対自分でやった方がうまく抜けそうだし出血も少量で済むけど、ナオのお父さん超頑張ってる。それにきつと………人に抜いてもらうことに意味がある。

過ちを認め、長きにわたり憎しみ虐げていた神を、人間の手で解放することに。

神から一方的に与えられる救いではなく、人間が強く救いを求めることに。

そのために勇気を持って行動する。そこにはきつと意義がある。

……というわけで耐える。

「長い間、神様をこんな場所で苦しめ続けて、私たちは許されないことをしました。それに私たちの無知によって邪神の汚名を着せてしまい……」

別に恨みには思っていないし事情は大体わかってたけど、私は黙って聞いていた。そういやナオって、何でここまで登ってきたんだっけ？ 西園さんじゃあるまいし、邪神フェチってわけでもなさそうだった。

普通興味本位でわざわざ梯子まで手作りして登ってこないよね。思いつきにしても本気すぎるよ。そんな疑問を抱いていると……

「数日前、娘が森で大きな獣に乗った見知らぬ若い女に会ったというのです。その女は、見慣れぬ衣を着て、夜に輝く白い花を使えば私たちの病を癒せるかもしれないと言ったそうです」

な、なんだってー！？ 夜に輝く白い花だって？

すげー心当たりある。メグが育ててる、抗菌・抗ウイルス作用を持つ花？ てかあれじゃん。あそこに生えてんよ、湖の対岸にわっさー！ って生えてるやつだよ……ほら夜でも光ってるでしょ？ と、私が遠い目をする……。

なかった。

それは全部刈られて、ぽっかりとその区画だけ消えていた。

薬花畑から白い花がなくなっていた。私、今日どうして気づかな

かったんだろ。きちんと見てなかったよ。他の色は全部あるのに、白だけなくなってる。昨日はあったから今日の昼に刈ったのかな、こらまた大規模に刈ったもんだね。私、西園さんともんじやの話とかしてる場合じゃなかった。

『その女性は、黄色と紫の衣を着ていませんか？』

トレンドが変わってたらあれだけど、一年前まで集落の女の子はみんなそれ着てたよね。あのサイケデリックな配色がすげーウケてた。この時代、何が流行るかわかんない。うちの集落の誰かがこんな遠くまで遊びに来てたってことはないよね？

「そうです！ まさに。黄色と紫の縦じまの衣で！」

あー……黄色と紫のしましまのやつか。縦じまの、トレンドいなやつだ。

確定しちゃった。完璧にうちの集落の誰かだ。遠出し過ぎだろ。誰だよ！？ そりゃ直線距離10kmぐらいだけど湖のほとり通ってきたら20kmとか余裕であんぞ？！

マイカー、いやマイ獣？

に乗ってドライブがてらツーリングに来ちゃった人誰！？

「その女性がいた場所には、赤い髪と瞳をした温厚な神様が住んでいたと言っていました。ですが、暫く前に急にいなくなってしまうた。そしてその神様が民に授けて薬になる白い花を、病に苦しむグランダの民にいきわたるように揃えて、必ず届けにくると言っていたのだそうです」

……誰か知らないけどボランティア精神旺盛すぎるようちの民。

ていつか届けに来ないでよ、折角私が磔になつてスオウの気をひいて集落への侵攻を食い止めてたのに意味ねーじゃん。白い花持ってノコノコやってきたら。

「そして、その女性が言った、”よい神様が失踪した時期”と、あなたがここに来た時期がどうやら一致していたようなのです。もしかしてと希望を持って、梯子をかけて登ってきたら……”という訳です」

え、そうだったの？

ナオつて邪神フェチとか肝試しで登ってきたんじゃなかったんだ。こんな離れた地で私の民と会うなんてすげー偶然。その話を聞いたナオは、白い花が届くのも待ちきれずに梯子作つて登ってきたんだな……。だつていつになるかわかんねーもんな、白いの待ってたらお母さんの病状も危篤に近い感じだったんだろっし。

「あなたがその”よい神様”だと、ナオは言うのですが……あなたはその神様ですね？」

お父さん、至近距離で私の顔ガン見してる。息がかかりそうなほど近いよ、そんなまじまじ見ないでよ熱い視線で。ここで違います邪神ですとか言ったら怖がつて梯子から落ちてしまふかもしれない。お父さんは私が肯定するまで、私の腹の剛剣を抜こうともしない。もしかしたら人違いかもしれねーもんな、邪神解放しちゃったらシヤレになんねーもん。

最終確認してる。

「私があなたがたにとってよい神なのか悪い神なのか、私にはわかりません。ですが一年前まで、紫と黄色の服を好んで着る民のいる集落で彼らと共に暮らしていたことは事実です。彼女の容姿が詳し

く分かりますか？』

「黒髪に黒い瞳の、若い女だったそうです」

ん？ それってメグじゃね？ あんまないよ黒髪に黒い瞳って日本人顔ってメグとマチ（メグの母ちゃん）だけだ。バルはちよつと顔立ちが違うんだよな！。マチは遠出するようなちゃんちゃん母ちゃんじゃないし。てか獣が苦手だった。

だったらメグじゃん。

てことはなに？ メグが白い花を収穫していまからグランダに持ってこようとしてるってこと？

メグのおバカ ……！！

今日収穫したってことは、明日荷物用意して出発ってことだよな？ 今頃きゃっきゃと弁当作ってる頃？ てことは絶対、ロイも来るよね。だってあの子力持ちだし神通力持ってるから警護的な役割で。

メグだけに花の運搬任せるなんてことはしない。

やべえよ……超やべえじゃん。

対処法間違えたらうちの集落全員即死フラグじゃんこれ。メグの慈善と奉仕の心が集落を壊滅に追いやってしまうよ。

それにメグ、君は見通しが甘い。私も君と同じように十中八九グランダの流行り病って感染症だと思うけど、感染症確定ってわけじゃないよ？

他にも色々あるからね、皆がバタバタと死んでゆく病気って。具体的に何？ って言われるとすぐには思いつかないけど、例えば栄

養状態悪くて死んでる可能性とかもあるしね？ あとで死亡者口グ見て遣伝子発現から死因特定するけどさ。

絶対これで効くから飲んでみて！　なんて目星つけて意気揚々と白いの持ってきてスオウに献上して、効きませんでしたってことになりでもしたら……。

メグ、ロイ、君たち偽薬で民心をたぶらかしたってことで確実に首チョンパだ。

スオウは私の腹を問答無用で串刺しにして城壁に野ざらしにするような非情な女王なのよ？

しかもあんだだけ大規模に刈ったって事は

二人じゃ運びきれないから集落の皆で運んでくるよね。

そんな状態でグラнда入り。……民が未知の病気で死にゆく最悪の状況で、スオウは天空神なんちゃらかんちゃらへの祈祷の効果もなく機嫌悪いだろうし。

今日の朝、向こうの集落にいつもの煙が上がらなかつたら……。皆でそっち出発してるってことだよな？　白い花をわんさかお届けにやってきてるってことだよな？

交通手段何で来るつもり？　まさかそのデカイ獣に乗ってきたら……うちの集落で人が乗れるほどの獣って絶対エドってやつだと思っけど、そいつ超速いから半日で到着しちゃう。ピクニックがてら皆で徒歩できてよ頼むよ！　そしたら君らが来る前に私が何とかするよ。

そんな遠くから皆で花キューピッドしなくていいから！

とにかく、呑気に磔やってる場合じゃない。すぐ降りて何とかし

ないと。

『彼女はメグという名です』

私は急に気が急いで符丁を合わせた。彼女の名を知っていることは、私が彼らと暮らしていた証となる。

「ナオは彼女の名がメグだったと言っていました。間違いありません。あなたはよい神様です、どうかお許しください、私たちはあなたがいよいよ神様だと知らなかったのです」

お父さんは涙を流しながら私の腹の剣を抜くべく、柄に手をかけた。

その時……。

「そこ！ 何をしてる！」

突如として現れた数人の兵士が片手剣を持ってダツシユでこちらへ突進してくる。やっべー！ サボってる兵士ばかりじゃない、真面目に働いてる兵士もいたんだ！ そりゃそうだ！

「逃げるー！！」

下で見ていたグラランダ民たちは一目散に逃げようとするも、そうはさせじと兵士が走りながら角笛を吹く。大勢の夜警の兵士団が剣を抜き全力疾走で集まってきた。増えた！

まずいよこれ、まずいつて！ 斬りかかる気満々じゃん！

それに今逃げていった人ら全員病気にたじゃん……すぐ追いつかれるよ。と思ったら捕まって引つ立てられて戻ってきた。足の遅いナオと痩せた女性が二人の兵士に最初に捕まった。捕まるのはえーよ必死で逃げよ。

……ん？ もう全員捕まったの？ まあ無理ですよ、そんな全力疾走で病人が逃げられるわけない。全力疾走できるなら病人じゃ

ないですもんね。

まずいよこの展開。

梯子の下にも兵士が湧き出るように集まってきた、梯子の上に乗っているナオのお父さんごと梯子を倒しはじめた。殺す気か？！

お父さんはバランスを崩して、梯子に乗ったままぐらりと傾いてゆく。悲鳴を上げるお父さん。私は慌てて既に自由になっている両腕で彼を抱きかかえた。その瞬間、梯子は大きく押し倒され、お父さんは私の腕にしがみついて一命を取り留める。しかし大人二人分の荷重が私の腹にかかり、鮮血が噴き出す。

「何を企んでいた！ 言えっ！ 邪神を解放しようとしていたな！」

「びええええ！ ごめんなざいいい！」

下ではナオが首裏に剣を突き付けられ号泣している。女性は細い体を容赦なく蹴り倒され、後ろ手にされ歯を食いしばっている。そんな蹴らないで！ 女子供の方々には優しくしたげてよ！

「異端者め！ 生かしてはおけん！」

「殺せ、邪教徒は死刑と決まっている」

二人の兵士がすらりと片手剣を抜く。月夜を受け輝く白刃が、今にも振り下ろされようとしていた。てか、自国民の女子供をそんな躊躇なく殺す

！？

「ナオ

！」

私の腕の中にいるお父さんが両手で空をかきながら愛娘のピンチに半狂乱になつてる。ああ、お父さんちよつと暴れないで私の腹から血が出る！

兵士の人ら、もっと国民の命を大切にしようよ、何でそんな速攻殺そうとすんの！

フェミニズムとか子供の人權とか色々あるんだよ人權団体が怒鳴りこんで……なんて言ってるんじゃない。高見の見物してる場合じゃない。

どーっこい……せえええい！

私は呪いの剣の柄を逆手に握り、腹部から鈍い音をさせつつ抜き出す。堰き止められていた血流が再還流。出口へと噴き出す。分かっちゃいたけど大出血、白衣は真っ赤に染まり、返り血を浴びて見た目は完全に凶悪な邪神みたいだよねこれ。そして無言で我慢してるけど死にそうなほど痛い、痛いけど信賴の力が若干増えるから多少相殺してくれてる筈。微々たるものですが。

この際、死なない私の身なんてどうだっていいよ！

『しっかり捕まっけてください』

お父さんに短く忠告し、私は剣を抜き遂げると、城壁を蹴ってお父さんを抱えたまま飛翔態勢に入る。よかった、ブランクあるから墜落するかと思っただけど辛うじて飛べたよ。ふらふらしてるけど、信賴の力があるから飛べるんだ。

ノーコンでないことを願いながら手首のスナップきかせ剛剣を軽く下へ放り投げる。空を切り回転しながら飛んで行った剛剣が、ナオと女性の首をまさに落とそうとしていた二人の兵士の頸椎へ同時にクリーンヒット。すげー音がした。

悪いけど急所狙ってるかね。彼らの意識を確実にかつ安全にぶっ飛ばす。ありったけ神通力も込めといたから暫く起きられないだろ。大丈夫、片刃だったから切れてない……いわゆる

安心せい、峰うちじゃ！

これ一回言ってみたかった。いや、言っていないよそんなふざけてない。私は無言で峰打ちやってる。

「誰だ!？」

残りの兵士たちが一斉にこちらを見上げた。

誰だっチミは! ってか?!

誰だっチミはと聞かれたら、教えてあげるが世の情け。

『如何なる理由があろうと、人間が人間の命を奪ってはなりません』

一陣の風が吹き通る。

夜空高くから舞い降り、後光を纏い光を満たせ。

群れ集う兵士たちはただ愕然と、剣を向けることも退くこともできず眩さゆえに目を細め、震えながら神威を見上げ……。

「じ、邪神の降臨だあああああ!！」

「邪神の封印が解けたあああああ! うわああ!！」

「うわああ! ス、スオウ様をお呼びしろ!！」

そうです!

わたすが変なおじさ……じゃなくて第二十七管区の甲種一級構築士です。

『邪神ではありません。私は赤井といいます、ただの神です』

私は兵士の頭をひらりと飛び越え静かに地に降り立つと、抱えていたお父さんを着地させ、ナオと女性を庇い前が出る。ナオは私の腰にしがみつき肩を震わせていた。彼女ら以外の捕まった大人たち

も神の光臨に圧倒されている。すげー威圧感あるからね私。

大丈夫だよ、私はもう油断しないし負けない。

君たちを守り抜く。視線を落とし二人の肩に手を添え、祝福を与え癒しの力を施すとともに、彼らの信頼を受け取る。呼吸をするように静かに受け渡しされる熱い波動……この手ごたえ。

『善き人々よ。あなたがたの信頼と勇氣に報います』

そつだよ。たとえあなたがたの女王、スオウが見捨てても私は見捨てない。

信頼には報いるし、私の民でもよその民でも絶対見捨てないからね私は。ナズを失ったときに決めたんだ。もう誰も不幸にはさせないって。

さてと、ニートやっててblankあるし絶対スオウも出てくるだろうけど全力で頑張るっきゃない。

『願わくば、私を信じてください』

ありがとう……。

十人分の信頼の力、しかと受け取った。

第2章 第10話 赤井さんと少女キララの恐怖

あつという間に集ってきた夜警の兵士たちに重畳に囲まれ、じりじりと間合いを詰められる。私は私の傍にナオとナオの父親と女性を寄せて庇いつつ、凜と彼らを見据え睨みあいが続く。

私は一歩も譲らず、彼らは仕掛けてこようとしない。

幸いなことに、彼らは邪神との直接対決に怖気づいている。

私が持てる全ては異国の民の十人分の信頼の力。

そして未だ半信半疑のまま私に預けられた彼らの命の重み。

原点にかえろう。

彼らの祈りと願いによって私の神体に生じた神通力は、大まかに熱力学変換できる。一人何ジュールなのかわからない。個人差もある。でも多分エネルギー量は明確だ。インフォメーションボードに出てないだけで私はそのつもりで使ってる。

十人分の信頼の力で私ができることは少ない。

神通力をいかに扱い彼らを守り、抜刀した兵士らを懐柔すべきか。戦いはできるだけ回避したかった。

まず一年前までの私のお気に入りだった二層の神聖結界、つまり物理結界と心理結界はエネルギー不足で展開できない。あれは常に潤沢な四百人分の信頼の力があってこそその神業^{かみわざ}。

電撃は一瞬でこの周囲の兵士たちを感電させられ、安全に意識を

飛ばせるし誰も殺さなくて済む平和的解決法だけど、エネルギーが勿体ない。だって電撃一発ごとに最低でも1GキガジュールJぐらい神通力をすり減らすんだ。ピカツ！ゴロゴロ！という一般的な落雷が1.5GJくらいだよ、節約しての電撃でも一発1Gは絶対いく。

二発も落としたり十人分の神通力なんてすぐ底尽く。そのうえ敵味方の別なく感電するので、折角私を信頼してくれた人たちから顰蹙もの。神通力は底ついてても一日待てば回復するけど、スオウやほかの兵士らが出てきたら一巻の終わり。慎重に使わないと。

ん？ 何すか国民の皆様そのじとーつとした白い目は。肉弾戦やれって？

神様は素民を殺生しちゃいけないですよ？ うっかり殺しちゃったらどうするの。

死の穢れを纏っちゃダメとか慈悲かけるとか理不尽な理由で、虫一匹殺生できないわけです、虫いねーけど。だから最低でも数百人分は神通力がないと肉弾戦なんて無理。一方的展開ってかフルボッコ。せめて武器、ってか盾的なものが欲しいけど私は素手。

縛りプレイもいとこだよどうすっかな。

普通にやれば私一人がスプラッタ……超不公平じゃね？

というわけで肉弾戦を避けたい私は人差し指をすつと掲げ天を示すとそのまま頭上で大きく円を二周分描く。いや別にブーメランストリートしてるわけじゃない。

よしいくよ！

ゴッ！ と熱波と眩く白い光条が闇の中に迸る。

私たちの周囲にいた兵士たちは風圧によって吹き飛ばされた。

私とナオとお父さん、そして女性の周囲に、ループ状の半径八メ

「トール、高さ五メートルの青白い障壁がひとつ。兵士らに捕まっ
てひっ立てられ、一か所に集められていた病人たちの周囲にももうひ
とつの炎の輪が出現する。炎のバリアだ。」

「うわあああ！！ 邪神が炎を出した　　！！」

「何だこれは！ 白い炎だ　　！」

兵士さんたち、上へ下への慌てよう。よほど驚いたのか、整然と
していた隊列が大きく乱れる。

「油断するな！」

私が選んだのは火炎。熱エネルギーだ。

この場合は電撃より断然火炎。派手に燃やし続けて燃焼熱は1G
J以上、電撃とエネルギー消費量変わらねーじゃん、と思われがち
だけど、燃料を通常構築で創り、着火さえすれば神通力いらない。
だから私は点火のために最小着火エネルギー、10 ミリジュール mJを削った
だけ。え？ 飛び道具があつたら炎で障壁張つても意味ねーよつて
？ 大丈夫だよ一応弓的な飛び道具は持つてないみたいだ。と油断
してたら

頭に血が上つた兵士の一人が私に狙いすまして鋭い刃の大剣を投
げつけた。

強行突破かよ！ その手があつたよ。

残念。私の火炎は普通の炎じゃない、青白いでしょ？ 君たち青
白いからって温度低そうだなーなんて思ったら命取りだ。青白い炎
は赤い炎より温度高いから。

だから炎の壁を通つた瞬間に剣は泡立ち、黒煙を纏い溶けて真っ
赤に焼けた金属塊になる。私の火炎は完全無欠の炎の盾となる。何
を投げようがこの炎の障壁、原型をとどめはしない。

それよりいいものを投げてくれたね。

私はナオの近くにゴツンと転がってきた燃え盛る金属塊をひよいと素手でつかみ、にぎにぎと粘土のように握りしめる。別にやせ我慢してないし熱くない。私が出した神炎だから別に火傷しないんだ。何だよ炎は炎だろ、何が普通の炎と違うんだよ物性的に何が違うんだよとか神炎しんえんとか名前からしてすげー気持ち悪いけど、もうそういうシステムだから気にしたら負け。

ちなみに雷も同じです。

神雷しんらいだと私はビリビリしない。普通の雷に当たるとビリビリ感電するけど。納得いかねーけど仕方ない。

「うわあつ！ 何をしてるんだ！」

「お、お前が余計なことをしたせいで！」

兵士さんたち、あちゃーっ！ やっちまったって顔してる。そっち側からすれば大失敗だ。

私に剣投げた人に至っては、皆から責められて殴られ蹴られてもう目も当てらんない。邪神にまずいもの渡しちゃったね。私は何気なくにぎにぎしてるだけに見えて実は再構築リコンストラクトかけてる。還元して私の神通力通して強度上げながらにぎにぎしてっから。硬度パネっすよまじで、いわば神器です。

「水だああ！ 貯水甕の水持ってこい！」

「邪神が何か企んでるぞ！ 早く炎の壁を破れ！！！」

ん？ 水持つてくるの？ 障壁の中に攻撃が届かないとなると火事には水で消火だよね当然か。

張り切って、大人一人分の背丈ぐらいある黒々とした水甕が運ばれてきた。そういや城壁の外で雨水を貯めてた防火用貯水甕だ。グランダ民は防災意識が高いんだなーと思って上から感心して見てた

つけ。三個ぐらい運ばれてきた。さすがに重くて持てないから木の台車で。台車まであるのかよすげー文明レベルだよ。コロの部分は木でできてる。しっかし進んでるな！。

「神様……こわいよう……火が消えちゃうよう！」

ナオが私の腰のあたりに顔を埋めながらプルプル震えてる。さつきから腰がくすぐったいと思ったたらナオがいたんだった。あんまりしがみつくと私血みどろだから君も血塗れになるよ、って言ったけどどしがみついて離しやしない。

まあ普通は消火するだろうね、あれだけの水量があれば。

「怖がらずよく見ていてください」

私がそう言うと、私の言葉を信じたのかナオは恐る恐る振り向いた。

大きな桶で水を汲んで、数人がかかえてきて神炎の壁に力任せに浴びせかける。炎の中に大量の水が……でもジュッと音がして白い蒸気が夜空に立ち上るだけ。炎に触れる前に水が蒸発して水蒸気になり、月夜に湯けむりが上がる温泉情緒。何かのどかだ。

「見てナオさん、虹ですよ」

きれいっしょ？

神通力でループ状の虹が現れるようにしといてあげたよ大サービスだ。ほんわか癒されて兵士さんらも剣をおさめてくれる……わけない。

「手を休めるな！ 浴びせかける！」

頑張つてるとこそすまないけど、これ絶対に消火しないんだ。
残念だったね、私の炎は私の神通力が果てるか私が消えろと念じ
るまで消えない。

『神が点した炎を、人が消すことはできません。よって……』

いったん区切って接続詞使うのは演出のため。

私も効果的なセリフ回しとか狙うようになってしまったよ。アド
リブ役者歴九年目だ。

『この守りは絶対です』

ナオがほわーって顔して、お父さんはありがたやありがたやと手
を擦り合わせて祈っている。私の演技は古臭いらしいけど大事な場
面ではバシっときめないよね。

で、それまで半信半疑、六十パーセント程度だった十人分の信頼
の力が私の奇蹟を目の当たりにしたことによって強まり百パーセン
トへ。

これを狙ってたつてもある。私は人間の信頼によって力の加減
から強さから全て左右される神だから、信頼を引き出すためしよ
うもない小技を使ったりする。

とにかく。

ありがとう皆、皆のおかげでますますみなぎってきたよ。

さて、炎の障壁を前衛に、身を守るための武器でも作るとする。
武器っていつても防具ね。神様の持ち物といえば杖つしよ、水戸の
ご老侯様のスタンスだよ。あ、黄門様は杖の中に剣仕込んでたよあ

れバリバリ武器だったよ怖ろしい天下の副将軍だねあの人は……くわばらくわばら、つるかめつるかめ。

柔らかくなつた金属をびよんと縦に伸ばす。そば打ち職人みたいだな。びよんと伸ばした金属棒の端を握り、さらに縄跳びするみたいに大きく円を描いて回す。ほら遠心力で伸びた。それを二つ折にしてさらに伸ばし、冷やせば鉄棒。てか杖のつもり。どうにか身の丈ほどの杖ができた。めっちゃ堅いやつ。直線じゃなくてちよつとカーブしてるのは初心者ですからご愛嬌。

『ここから動かないでくださいね』

私の腰にしがみついて人間腰巾着化してるナオを優しく引き剥がし、私は神炎に焼かれながら障壁の外に出る。焼けるように見えるけど、神炎の壁を通り抜けても私は燃えない。

「出てきたぞ！ とっ！ 突撃だ　！！」

それを見た兵士の一人が剣を振りかぶって突撃してきた。屈強そうな身体をした大柄な男、炎に突撃とかよほど腕に自信があるんだろう。あれ、でもこの人が一人で突撃しても誰も続かないよ？　ちよつと立場ないな、ワッペンつけた帽子かぶって小隊長っぽいのにでも障壁に近付くと炎が彼の服に引火して火ダルマとなる。

「ぎゃー熱い　！　助けてくれー！」

彼はウターンダッシュで水甕の中に飛び込んだ。ぼしゃーんと大きな水しぶきが上がる。火傷しなかったかと心配していると。飛び込んだ兵士がずぶ濡れになって水甕から顔を出した。ぴゅーっと水を吹く。コントみたいだね。無事みたいだ、よかった。小隊長的に立場はないだろうけど。

今ので分かっただらうね。

私は燃えないけど人間は燃えるから勘違いして炎障壁内に踏み込んできちゃだめだよ。炎にも温度の違いがあるんだ。この炎は君らが起こせる普通の炎より断然温度が高いからね。

今、構築モードで酸素アセチレン炎の障壁つくってっから。

アセチレンガスは $\text{HC}\equiv\text{CH}$ 、三重結合を持っているアルキンだ。IUPAC名でエチン(Ethyne)というところかな。

三重結合を持つ炭素化合物には全て「-yne」という名前がつく決まりになってる。溶接用ガスバーナーの燃料だよ。

通常構築で大量にアセチレンガスを削ってぶちまけると大爆発するから、爆発濃度(2.5 vol%)に達しないように毎秒ごとの生成量と生成領域を厳密にループ状に設定してやってるんだ。それで素民たちからは神炎の障壁に見えるし、持続的な燃焼になっている。

これは通常構築のオートメイションモードでやってる。通常構築は今の十人分の神通力の状態だと同時に三種類までかけられる。昔は二十とか三十同時にかけられたけど今はできない。だから「アセチレン生成」と「大気含有酸素の抽出」で二枠使ってる。残り一枠炎には酸化炎と還元炎つてのがあって、酸素によく触れている酸化炎の方が温度が高く、白か青みがかってる。炭素系の物体を燃やして生じる酸化炎はせいぜい八百度から千度。

酸素アセチレン炎は三千度、そして私の神通力含ませてるからもつと温度が高い。しかも私、なにげに炎の壁の周囲に燃焼圏、つまり酸素シールド作って燃やしてる。大気中の酸素を束にして集めてぶち込んでる。だから障壁の内部にいる人はエアシールドになって熱を感じていないんだ。

簡単そうにみえるけど、やってることは結構複雑だよ。私も久々の活躍だから張り切ってる。

さて、真面目に殺陣タテでもやりますかね。殺しませんけど。

『彼らに手出しは無用のこと。そして最初に言っておきますが、私はあなた方を傷つけません』

私と闘ったって意味ないってわかってよ。

どうせ武勲の一つにもならないよ。

『ですが私は決して負けません。それを心得たうえで、勇気あるものはかかってきなさい』

「ほざけ邪神がっ！ 一斉攻撃だー！」

雄たけびを上げながら一斉攻撃の号令がでた。私に向かって兵士たちが押し寄せてくる。軍靴の地鳴りがする。怒号が響き渡り、圧倒的多数で襲いかかってきた。私は杖に電流を通じ、最初に突撃してきた一番槍、剣を上段から振り落としてきた兵士の人の剣にちよいと触れる。

「ぎゃああああー!!」

一番乗りの兵士はスパークし大電流に感電。崩れ落ちたけど、痛みは殆ど感じてないはずだ。

「何だ！ 今のは?!」

私は驚き戸惑う彼らに、杖を長く持ち円を描くようにさらりとターンして彼らの無防備な腹部を優しく薙いでゆく、すると面白いように人々が感電して崩れ落ち人垣をつくる。後ろから続いて攻め込んで来ようとも、剣と杖が触れ合った瞬間に勝負は決まる。

私の体も帯電してるから、斬りかかったって無駄。触れても感電

するだけ。となると皆、何が起こっているのか分からず闇雲には襲い掛かってこなくなつた。

「何が起こっているんだ！」

「邪神は何をしているんだ！ 触れただけで殺されるぞー！」

倒れた兵士が死んでいないか、誰かが確認してる。皆殺しにされたかと思ってるんだろうね。死んでない死んでない、人聞きわるいな。

「息はある！」

そうですね殺してないもん。普通に電流流してるだけっすよ。君たち皮の鎧も着てない無防備だからちよろいっすよ。でも言えない。それに……

「なっ！ 剣が吸い寄せられて……」

私の神杖（命名：赤井）は金属の剣や武器を絡め取るよ。

一見直線の棒に見えるかもしれないけど、物性的に磁性を帯びやすいように鉄棒を二つ折りにして繋げてループ状にしていたから。杖の中心に直線状の空洞があるっしょ。大電流を金属に流し込むとが磁性を帯び、金属が吸いつけられるんだ。一本ずつ空中で受け取り足で踏みつけて獲物を奪う。トリモチみたいだね。

武器を失い戦意を喪失し後ずさる、残り十名ほどの兵士たち……。打つ手なし、そんな状況にもみえたとき。

決るように放たれた殺気に、私が貫かれそうだった。

背後、私の真裏から炎槍が信じられない速度で飛んできた。私はいち早く気付き、大きく跳び下がるとともに神杖で叩き落とす。やべーよ串刺しになって燃えるところだったよ。普通の炎では私燃えちゃうからね。焼き鳥状態になる。焼き鳥食べたいけどそれどこじ

やない。

このスピード、この火力……人間業じゃない。ということは

「遂に蘇っぴりおったか……赤き邪神めが！」

ゴウンと重い城門があき、数十名の臣下とともに黒衣を纏ったスオウが姿を見せた。彼女は裾の長い黒いフード付きコートを着て、全身に数珠のようなアクセサリーをつけている。戦闘服とかじゃない。

相変わらず動きにくそうなコスチューム。夜警の兵士たちに呼ばれたみたいだ。兵士さんたち真夜中に女の子起こさないであげてよ頼むから。でも今日はフードをかぶっていない。素顔が見えた。

スオウは迷いのない足取りで、私にずんずんと接近してくる。真っ赤に燃え盛る一振りの片手剣を携えて。私も両手を下ろして彼女を待ち受ける。

彼女は遂に私の前に立った。

その距離、僅かに二メートル。近い。私の間合いに完全に入っている。私も彼女の間合いに入っている。

だが彼女は襲いかかるうとはしない。恐らくそれが無駄だとわかってるから。

私を強いまなざしで見据える。青い、美しい彼女の瞳が私の瞳を射抜く。

彼女の顔がよく見える。一年前と比べて少し大人っぽくなったな、美人だよ。

でも……随分痩せたね。そして目の下に濃いクマができてるよ。体調も何だか悪そうだ。大丈夫？

『キララさん』

私の呼びかけに、彼女は眉根を寄せた。

「何だと……余はスオウだ」

名前、本当は違うよね。今は神通力があって君が近くにきて心を読めるからわかるよ。蘇芳ではなく、この子の本当の名前はキララっていうんだ。かわいらしい名前だな。雲母って書いてキララって読むけど、まさかそういう由来なんかね。

とにかく彼女は、今度は私に何か伝えたいことがあるらしい。私をやっつけたって死なないってもう分かっている。炎を纏った細身の剣を固く握りしめているけれど、まだ斬りかかってこない。

『あなたの神は、あなたを救ってはくれないのですか』

天空神ギメノグレアヌス・ハリエルマ・ガルカトス・イルベラ・ラクエマンティス？ でしたっけね。忘れたとかいったけど、実は覚えてるよ。

彼女の顔色が変わった。彼女の信仰する神を悪く言われたらそりゃ怒るよね。でも気付いてくれ、それ神じゃないんだ。ただのまやかしなんだよ。人に痛みを押し付ける神なんて馬鹿げてる、それは紛いものだ。

『あなたは対象を強く呪うことによって巫力を発揮できるようですが、しかし呪うたび、あなたの心が傷ついてゆくのがわかります。この一年。あなたは随分辛い思いをしていましたね』

君が笑顔を忘れてしまったのはいつからだろう。

キララ、君はもうずっと笑っていないみたいだ。

紛いものの天空神をこそ唯一神と仰ぎ、物心ついた幼い頃から邪神を滅ぼすべく修練を積まされ、憎しみと怒りを力に変える修業。

壮絶なものだったんだな。彼女の心と身体が傷ついても傷ついて、周囲や彼女の一族は彼女に過剰な期待をかけ苦痛を強いた。壊れてゆく彼女の心をかえりみず、それと引き換えに彼女は強い巫力を得て、民の信頼を得て国を治める巫女王ふじょうめいとなった。彼女は彼女の心を映すように、石造りの強い国を創り、城門を堅く閉ざした。彼女の心を閉ざすかのように。

そして今。彼女は、再び蘇った伝説の邪神の前に立っている。彼女の心を満たすのは、純然たる恐怖と絶望だ。彼女は心の底から、私を怯えている。こんなに怖くとも、彼女が退くことはできないんだ。彼女は邪神を退ける一族の末裔だから。役割を果たさなければならなかったんだ。

どれほど怖くて、彼女の心が震えていても。

『もう、これ以上傷つかなくてよいのですよ』

第2章 第11話 赤井さんと天空神ギメノなんちゃら

「黙れ……黙れ黙れ邪神が！ 心を見透かし、余をたぶらかす気が！」

若き巫女王スオウ、本名キララの胸中を斟酌すれば、精一杯強がつて私に敵意剥き出しにしてるけど、それは邪神への恐怖心の裏返し。

『キララさん。この国の民は病苦に喘いでいます、あなたは彼らを救いたいと願っている』

読心術による看破で、彼女は本当は誰も憎まない心優しい少女だと知った。となるともう、彼女が何を言おうが、敵に怯えて尻尾まいてキャンキャン吠えている仔犬にしか見えなくなつたわけで……愛おしくてたまらなくなる。彼女を縛りつける苦しみから解放し、笑顔を取り戻してあげたい。

私は神としてこの世界に入ってから、大抵のことは耐え忍んで赦し、水に流せるようになった。神様らしく振る舞えるよう、感情をコントロールされてるんだろう。

だから現実世界では絶対偽善だろうと疑われるようなことも、私としては誠意を持って大真面目にやってる。彼女が一年も私を磔にしたことも不思議と赦せるし、彼女に同情し、救いたいと思うのは本心からなんだ。内心腹立つてるけど仕事だから仕方なく優等生の演技してる、って訳じゃない。本当に恨んでない。

本心を偽つたまま演技できるほどには、できた人間じゃないしね。

「そ……それは汝が起こしているのである。汝を滅ぼしさえすれば……！」

彼女は両手で炎の剣を私に向けて構えた。彼女の巫力によって燃される炎は紅い。概算して千度未満。火影に浮かび上がる彼女の上気した頬。緊張が高まる。

『無駄だと言っておきますよ。何故なら、私は邪神ではありませんし不死身なんです』

私は火で炙ろうが窒息させようが首を刎ねようが、絶対に死なないらしい。生首状態になっても生きていられるのかって西園さんに聞いたら、どうやら生きていられるらしい。八つ裂きでも問題なし、ほっとけば最も大きな肉片から身体が再生してくるって。プラナリアかよ。痛みはあるらしいですけど。

『それはこの一年で、よく分かったでしょう』

白衣だった衣は自らの神血で朱に染まり赤い衣となり、腹の傷からはとめどなく血液が流れ続ける。まさに伝説の邪神そのままの姿。そして私の全身に今も残る、貫通した杭の痕……おこがましくもキリスト先輩になぞらえると、聖痕とでもいうのかな。

それらは私が不死身であるという証であり神であるという徴となる。治癒術は心得ているけど、自分の傷は治癒できないんだ。自分の為に力を使つてはいけない、という構築士としての第一番目のルールに縛られている。

「忌まわしき邪神め！ 滅ぼしてくれ！」

キララは手持ちの剣に更に炎を絡ませ、やがて刃は炎によって加熱され真っ赤に焼成される。

一瞬で決着をつけることもできるけれど、ある程度は戦わないと

な。私は彼女が感電しないよう、持っていた神杖の電流を遮断。私自身が帯びている電荷も杖を通じアースとして地に還す。

「ゆくぞ！」

黒いコートを脱ぎ捨て、編み上げの皮のサンダルで強く地を蹴り、彼女が飛びかかってくると同時に私は杖を構えたままステップバック、彼女が目算していた踏み込みの歩数を狂わせ、下段から振り上げられた炎剣を頑強な金属の杖の腹で受け止め、するりと力学ベクトルを変え受け流す。ギャギャギャと音を立てて、炎の刃が火の粉を散らしながら神杖の上を滑ってゆく。

キララは私の膝を踏み跳び上がって、宙返りをうち空に舞う。

高い！ 四メートルは跳んでるな、人間離れしてる。彼女の跳躍力は彼女の巫力によってアシストされ、常人より数段強化されているようだ。彼女が何か呪文を唱え空中で剣を大きく振り抜けば、きらきらと無数の火の粉が幻想的に舞い散り、それらは数十もの拳大の凝集塊を成し、私を追尾するように上空から猛スピードで降り掛かる。

まるで夜空を貫く流星群のよう。

火の粉に追尾能がついてるなんて想定外だよ。おそらく彼女の巫力によって炎の挙動の全てがコントロールされている。

これを迎え撃つべく、私は大きく息を吸い、ふうつと流星群目がけて息を吹いた。神通力を込めて吹いた神の息吹は、加減次第でその風にも暴風となる。炎の塊は神風によって鎮火され、ポトポトとただの礫となって私の周囲に猛烈な勢いで降り注いできた。

炎の守りを失った彼女は剣を逆手に構え、私を垂直に断とうと真上から急降下する。まっ逆さまの姿勢から、彼女は優位なポジションで掌底を繰り出し、限りなく呪力に近い衝撃波を私に浴びせかける。

私の脳天から叩きつけるように放たれた、ありつただけの憎しみの力。細く華奢な少女の体のどこに蓄えられていたんだ、これほどの力が。衝撃に圧されぐっと私の腰がしなり、憎しみによって神通力が相殺される。彼女の巫力、もはや呪力に近いその歪な信仰の力は、邪神を滅ぼさんとする決意と覚悟は、かくも強靱だった。

そして私のすぐ目の前に迫った、彼女の剣先。彼女の太刀筋を見切り、咄嗟に杖に電流を通じ彼女の手になんと触れる。電流使うつもりなかったけど大人げなかったよ、彼女のスピードが速すぎて余裕がなくてついやってしまった。瞬間的に流れた電流によって彼女の全身は痙攣し、どさりと受け身の態勢をとれないまま地に叩きつけられる。

「ぐ……うっ」

彼女は地に平たく這いつくばるが、痛みに震える身体をもたげて剣を持ち、未だ私への抵抗の意思を明らかにしている。手首を挫いてしまったみたいだ。

「す、スオウ様」

「スオウ様あ……」

口々に彼女の名を呼ぶ兵士たちの声。その声にこたえるかのようにな、彼女は気力を振り絞り、剣を地に突き立て、よろよると立ち上がる。

私は彼女の全身にくまなく目を凝らす。神通力を持っている状態で集中すると、私は人の体の中が少し透けて見える。だから骨がどうなっているのかも透視できた。骨折はしていないが、大腿骨にも罅が入ったみたいだ。

女王でありながら、彼女の栄養状態はあまりよくない。これ以上激しい戦闘が継続すると確実に疲労骨折を起こしてしまう。大腿骨折は激痛だ、その苦痛を味わわせたくない。兵士たちの期待を背負いたった一人で私に挑むその孤高なる姿は、けなげで美しく、そして哀れだ。

天空神の加護を受けたグランダの強き女王と、災厄をもたらす赤き邪神の戦いの行方。人ならざるもの同士の一騎打ちを目の当たりにし、兵士らも手だしせず固唾を呑んで見守っている。私は彼女が立ち上がるのを無言で見守りながら、左手でインフォメーションボードを呼びだす。そして先ほど、私を信頼してくれた十人の人々のうち数人をターゲットにしてアナライズをかけていた生データを収集し、ざっと目を通す。

白銀のボードは人間には見えていない。

そして私は手放しても情報を確認できるよう、ボードを待機状態スタンバイにしておいた。待機状態にしておく、指を離しても約十分間はそのまま私の周囲にボードがふよふよと浮遊してくれる。

「スオウ様！ もうおやめ下さい！」

掠れた声で彼女の名を呼んだのは、神炎の障壁内にいる薬師のおじさんだ。

「その方は、本当に邪神ではないんです！」

たまりかねて、私を弁護してくれている。でも彼が守ろうとしているのは、私ではなく彼女の方なのかもしれない。彼らの女王様が神に挑み、傷つき、無残に敗れる姿を彼らも見たくはないんだ。だって、彼女は女王様だけどもまだ幼い少女なんだ。

少女が一人で頑張ってる、それを大人たちはただ見守るだけ。痛々しくて見てられない。

「控えろっ！ 惑わされるな、この邪神は絶対に滅ぼさねばならぬのだ。こやつを滅ぼさぬ限り、グランダの復興はない！」

彼女は薬師のおじさんを怒鳴りつけ、気迫で黙らせた。すごい剣幕だ。

そうか。キララ、君はどうしても私を滅ぼしたいのか。

君の思いはよくわかった。

私は無抵抗となるべく杖を捨てた。そして後ろに手を組む。

これで心置きなく斬りかかってこれるだろう。さあ、君の憎しみの全てを私にぶつけてこい。

「うわあああ！」

彼女は燃える剣を両手で握りしめ突っ込んで、私の胸に深々と突き立てる。肉が焦げ、奥の奥にまで穿たれる熱い衝撃、私は顔を歪めながらも息を止め無言で彼女の鬱屈した思いを受け止める。狙いが的確だな、人間なら心臓があるあたりにドンピシャだ。彼女は眼を見開くと、剣を抜き、もう一度今度は喉のあたりに突き刺す。さらにもう一度。私が死ぬまで、めった刺しにする気だ。剣で傷口を焼き切っているから、あまり血は出ない。それでも返り血はしこたま浴びている。

「死ぬ！　死ぬえっ！　滅びよ！」

剣を握る彼女の手は震え、一突き一突きに迷いがみられる。頬に返り血を浴びながら、彼女は私を滅ぼそうと何度も貫いた、私の肉を裂く嫌な手ごたえは彼女の手伝わっている。相手を傷つけるときは、自分も傷つき、あるいは殺されるかもしれないという覚悟を決めるべきだ。

彼女は覚悟を決めてこの場に臨んでいる。

私と刺し違えて死ぬ覚悟を。

だから私は彼女の全てを受け止める。

一年前には分からなかった彼女の心のうち。

でも今は私が目を逸らさず君を見ているから分かる。見えるよ

”怖い、怖い、怖い、どうしようまだ死なない”

”嫌だ、死にたくない、でもやらなきゃ皆が……皆の為にやるん

だ”

悲痛な思いだ。だから彼女は私を傷つけ、どんな手を使っても殺さなければならぬんだ。

今となつてはもう遅いけれど、グラランダに来る前に、行き当たりばつたりじゃなく色々と考えて計画を練つて、君を怯えさせずに話を聞いてもらう方法を考えればよかった。彼女の城に突然乗り込んで彼女の目の前に現れた伝説の赤い邪神。幼い頃から何度も何度も聞かされていた極悪凶猛な邪神伝説……彼女も民を守ろうと必死なんだ。

私を封じ続け民を救うため、彼女はこの一年間、毎日のように私を呪い天空神への祈祷を繰り返した。そのたびに君は心を傷つけ、氣力を振り絞り、呪いの力を私に送っていた。

私に呪いをかけるための儀式……君の体をひどく傷つけるみたいだね。

君の身を削り、私を苦しめた強い呪い。

そして君が守ろうとした民の裏切りによつて、破られた封印。

熱い刃物で刺し貫かれたまま、私は彼女が愛おしくなつて手を回し、きつく抱きしめる。抱擁すると彼女と私の体の間に隙間がなくなり炎が酸素を消費して消火できて一石二鳥だ。話を聞いてもらうには、動きを封じるしかないよね。君が私の懐に飛び込んでくれたから、動きを封じられる。

『捕まえましたよ。どのみち動けないでしょうからそのまま、私の話を聞いてください』

私が彼女に流し込む癒しの力を彼女は感じていて、私が彼女を癒

そうとしていることも分かっている筈だ。でも強い拒絶の意思を感じる。すぐにでも大腿骨に入った罫と手首の捻挫を癒してあげたいんだ。でも私の癒しの力は、彼女の体に入っていない。弾かれる。むぎゅーとなって私の腕の中から彼女の声が漏れる。

「……………うつつ……………やめろっ！ 穢らわしいっ！」

やめろですか。生理的に受け付けませんか、私血まみれですし汚いすすみませんね。でもそのまま話を聞いてね。

「すっ！ スオウ様 ……！」

周囲の兵士たちがうるたえて私に槍を突き付けようとするも、彼女が人質に取られている状態なので迂闊に手を出せない。あ、そうかこの子今人質状態なんだ。これは逆に好都合。

「あなたが気づいたように、私はあなたの心が読める。そして今確かめたように、私は死なない。少しはこちらの話を聞いてもらいますよ」

「してくれ……………」

彼女は私の胸の中でもがきながら何か言いかけた。ん？ フゴフゴ言ってるけど息苦しくはしてないでしょ？ 窒息とかさせてないよ、きつくは抱いてるけど。

「貴様あ！ スオウ様に何をする！」

兵士の人らが何かがなりたててるけど、とりあえず今は無視。

「……………どうしましたか」

抱擁を少し緩め、私は彼女の話聞くために彼女に穏やかに問いかける。君、私の話聞く気ゼロだね。まあいいよ、先に話を聞いてあげるよ。すると彼女は切々と、私に訴えかけたよ。

「赤の邪神よ、もう……………やめてくれ。どうしてこの国をばかり祟る

んだ！ 民に死を齎し、疫病を流行らせ恐怖に陥れ、散々われらを苦しめ続けただろう、これ以上まだ何を望むんだ、もう祟らないでくれ……頼む、民を苦しめないでくれ」

んー、なんか急に大人しく、というかしおらしくなったな。こんな至近距離で捕まって、私はちょっと力を入れるだけで彼女をひねり殺せる。確実に殺されると思ってるみたいだ。観念しちゃったのかな。別にそんな酷いことするつもりないし、女の子には優しくするつもりなだけだ。伝わってない。

『この国の災いを、私が齎していると思っっているようですが、それは違います』

「何が違うものか。生贄が必要だというのならくれてやる、この身を喰らえ、喰い殺せ！ だからもう、祟るのをやめてくれ」

なんかキララが私の生贄になるって言いだした。握りしめていた剣を手放し、私に抱かれたまま服を脱ぐために片手で帯を解きだした。何かじゃらじゃらと数珠みたいなのつけてるけどそれも引きちぎるように全部外してる。

てかそもそも食えって何？ 私へのあてつけ？ 私、一切食べられなくされてんのよ。食べられるなら食人するよりもまずもんじゃ食べたいって話なのよ。違う意味で食べちゃえばいいって？ 何それこの子を襲ってあんなことやこんなことしちゃえ、ってこと？

忘れてたけどこの子、すげー艶めかしい。白人顔で金髪の色白さんだし肌がピンク色にほてってら。顔真っ赤にして……私に食べられるために全部脱ぐつもり？ 何この超展開、こらこら国民の皆様身を乗り出さないで。多分その黒いビーズでできた帯をもう一本帯解いたら全裸になっちゃう。私は泣きながら片手で帯を解く彼女の手首をとった。そんなことしないでいいよ、君って女王様なのに皆の前で屈辱だし生きてままだ私に食べられるなんて、考えただけでも

怖いでしょ。

彼女、目じりに涙をぶらさげたまま私を上目使いに見上げる。彼女の身長は百六十センチぐらいかな。私がたぶん百八十ぐらいあるので結構身長差ある。

睨んでるつもりだろうけど、そんな青い透き通った瞳で私を見てもかわいいだけだ。

「余では不満なのか。卑しい邪神めっ！ こっ、この身は穢れてはおらんぞ」

彼女、なんだか焦って私に食べてくれと猛アピール。何でこの世界ツンデレばつかなのよマジで。天空神なんちゃらに仕える由緒正しき巫女王ふじよつおうだから生まれてこのかた清らかな身体のままらしいよ。かといって「そうかそうか初いやつめ、ゲへへ……！ では久々に若い女子の体を堪能するかヒヤヒヤヒヤ……！ まずはここからフヒヒヒ！」とかおかしいでしょ、そんなん邪神すぎるでしょ。

私は由緒正しい神様ですから外道しない。

『私に身を捧げてまで民を守りたいと、あなたが民を思う優しい心はよく伝わりました』

で、結局何もしない。はいはいがっかりがっかり。

「何が望みだ……なんでもするからっ！ 食われてもいいから、もう祟らないでくれえっ……」

彼女は私が祟りを起こしているかと思っっているみたいだ。私の血を吸った白衣をぎゅっと握りしめて、プライドも捨ててもう懇願している。そっぴや私ってグランダでは人を貪り喰らう邪神って設定なんだっけ。なにそれこわい、自分でも怖いよ。

『キララさん』

「余はスオウだ！」

「私はスオウなる者ではなく、真実のあなたに話しかけています。もう一度呼びます、キララさん」

本名で返事するまで呼び続けるよ。

「……あ、ああっ！ 何だっ！」

彼女は耳まで赤くなって顔を私の胸に埋めながら、遂に返事をした。強がって女王様口調でも、声は年頃の女の子だ。ちよっと裏返ってる。何で？ 本名呼ばれるとそんな恥ずかしいの？

「これは私の祟りではありません。邪神でないと証明するためには、この国の災いを取り除くのが最善の方法です。グランダの民の間に死の病が流行し人々が死んでゆく、その原因を突き止めました」

私はインフォメーションボードを見ながら言い切った。目の前に表示されているのは八人分のステータスデータ。物体だけでなく生きた人間にもアナライズをかけると、ステータスデータというものが表示されるらしい。先ほど西園さんから仕入れたての情報で、それを聞いてすぐ複数人を解析していたので少し時間がかかった。

それが積層状に八人分、赤い枠のついたポップアップ画面で表示され、スタンバイ状態で私の前に漂っている。それに加え、三か所ほどグランダの土壌へのアナライズもかけておいた。そのデータも出来あがってきて表示されている。

先ほどから私は彼女を抱擁し彼女に語りかけながらも、その裏では解析データを読んで疫病の原因の目星をつけていたんだ。

そして突き止めたのは……

『この災いは、人間の手によって齎されたもの』

「な、何だと！」

『これは鉍毒です』

鉍物資源が豊富で、金属精錬技術に長けた国、グラランダ。
グラランダの民を苦しめていたのは感染症ではなく、金属精錬の過程で生じた有害元素、化合物による土壌、水質の大規模汚染、中毒症状。

人々が日に日に衰弱し、足腰が立たず、骨折を繰り返し苦痛に苛まれ抵抗力、免疫力を失い様々な感染症を患い……やがて腎機能障害を起こし死に至る病。ようやく突き止めた。この国の文明が発展していたがゆえに、自らの手で自らを苦しめた。邪神を滅ぼすために鍛え上げてきた金属、それを造る過程で生じたもの。

これは何たる因果か。

いもしない邪神に怯え、備えたが為にこの国はまさに滅びようとしていた。

「ごうごく、だと？」

私は彼女の右手を取り、その細い手首をそつと撫でてあげる。毎日儀式のためにリストカットしてたんだよこの子、惨いよ。呪いがかかるときに彼女の血を使ってみたんだ。痛かったらどうね……傷あとかできてすげー生々しい。かわいそうに、化膿もしてる。ちゃんと手当しないと。

『いくつもの傷跡には、あなたの民を思う心が込められています。民の為なれば、その炎も消せる筈です』

癒しの力を込めて撫でてあげると、傷口は塞がりもとの彼女の皮膚が取り戻される。彼女、信じられないといったように私の顔を見る。

『鉱毒とは、金属精錬を行う際に土壌、水源に流出した毒物のことです。ただちに、金属精錬をやめてください。それによって全てを取り戻せます。民の尊い命も、そして……あなたの笑顔も』

「……！」

キララ、口がぽかんとあいた。信じられないだろうね、でもこれは本当なんだ。

一刻も早く汚染の拡大を止めなければいけない。そして土壌、水源の浄化を始めなければならぬ。今すぐに！

カドミウム汚染を食い止めなくては。

『赤い邪神に惑わされおったか、蘇芳！』

ふと、正面から低い男の声がした。声の感じからするに、若い男だ。声のする方を見ると、高い城壁の上から誰かが下を見下ろしている。全身黒い装束を着た男、黒い一枚布を何重にも身体に巻いて、顔も覆われている。キララの着ていたコスチュームと同じような、じゃらじゃらと銀の鎖のような装飾具を付けている。黒い布に覆われて表情すら見えない。あれ……でも何か様子がおかしい。

私と同じように後光つばい光を放ってる、それが暗闇でもはっきり見える。コロナのように。

この人、本当に人間か？

「て………天空神さまっ！」

キララは謎の人物を見るなり、急に全身が震えだした。え？あれが天空神なんちゃら？ 実在するの？ 正体暴くべしと私は読心術をかけるも、読心術がキャンセルされる。硬い壁に遮られて心が読めない感じ。何で？ インフォメーションボードを繰り返り、手早く情報収集。アナライズをかけようかと思いきや、画面が通常時と変

わってる！ なにこれ画面真っ赤っ赤じゃん。久しぶりすぎるよ真っ赤とか非常事態になってんじゃん！

その謎人物にアナライズかける前に勝手に情報が呼び出されてきた。

うわーなんか出た。

```
【constructor status】(構築士情報)
stage - name(役名)      : Brilliant(Ca
nada/ID:CAN214)
class/occupation(クラス/職種) : rank3/villan
mind gap(心理層)       : 8
physical gap(物理層)   : 3
abs . power(絶対力量)  : 121245 pts .
LOS(滞在日数)         : 43821 days
active believer(有効信徒数) : 1251
total believer(全信徒数)  : 1440
```

って表示が出た

！

ぎゃ ! 悪い予感がする、ってかもう悪い予感しかしね

！

この人が天空神ギメノグレアヌス・ハリエルマ・ガルカトス・イルベラ・ラクエマンティス役の人！？

紛いものとか偽物じゃなくて構築士じゃん！

カナダの構築士じゃん！

えーとランク3ってことは日本じゃ乙種一級構築士にあたる。

ニラヒ villanってのは、つまり悪役のことだ。外国人だから表示

が全部英語だったけど、英語まだ習ってない学生の皆様のために私

が(カツコ)で一応和訳つけといてあげたよ。子供から大人まで、親しみやすい厚生労働省めざしてますからよろしく。こんな誰でも読めるとか言わないでよささやかな心配りだよ。って！ そんなささやかな心配りやってる場合じゃない。

何？ ブリリアントって、色関係ない名前だけどそんな芸名ありなの？

ブリちゃん？ 男だからブリくんか？ 鰯^{ブリ}君……まさか出世魚的な狙いがあつてそんな名前にしてるわけでもないだろうし。はいはいスべつたねすみませんねちよつとテンパってるからね私。まさか甲種が色関係で乙種以下はほかの名前の付け方があるのかな。

悪役といえば普通は派手にやられて、主役をカツコよく引き立ててくれるもんだよね！

でもブリ君って海外フリーランスだから主役のことなんて気にせず悪役としてすげーガツガツ仕事するかも。次の移籍やポーナスのことも考えて、派手に悪役として活躍して評価員にアピールとか考えちゃってる？ 主役を瀕死のところまで追いつめて手ごわい憎まれ役を演出……なんて考えてたらやべーな。

すんなりザコ敵っぽくやられたらデキる悪役アピールできないだろうし。

心を掴むキメ台詞の一つ、辞世の句の一つでも考えてるよね絶対。その為にキララにリスカさせたり鉋毒で苦しめたり民の命を奪ったり病氣蔓延させたりして百二十年間も悪役の役作りしてきたんだろっし。

あれ？ 西園さん、悪役の構築士は表舞台に出てきませんって言いませんか？ たっけ話が違いますよ

そしてブリ君何でこのタイミングで出てくるの頼むよ空気読んでよマジで！

まさか私と戦う気満々だったりする？

第2章 第12話 赤井さんとやってはいけないオマージユ

「天空神ギメノグレアヌス・ハリエルマ・ガルカトス・イルベラ・ラクエマンティス様のご来臨だ
！」

兵士たちは天空神の降臨に恐れおののき、身体を投げ出し平伏する。

カナダ在籍の悪役乙種一級構築士（ランク3）。
その名もブリリアント。

今日も白み始めた空が眩い。暁の陽が、私の背後から差し込み闇の構築士ブリリアントの姿を暴きだす。キララの記憶を読むに、天空神は普段からキララに天啓を授けてはいたが、姿を見せたのは初めてみたいだ。

私が二十七管区九年目で向こうが百二十年目だから向こうが断然先輩か。しかも先輩、私と戦う気満々？ 悪役の構築士は黒子に徹するって話なのに登場しちゃったよ。衣装は真っ黒で確かに黒子みたいですけど。何か演出狙ってんの？ 私が先輩をカッコよくやつければ、ストーリー的にも画的にも双方にオイシイ感じになり先輩もやつと第一区画の構築終わってアガリですよ。

要するに血沸き肉踊る死闘を演じた末、スポーツマンシップに則って先輩を（先輩の活躍が目立つように配慮しつつ）倒せてことなんだよね？

だがちょっと待ってほしい。

素民相手ならともかく、私は戦える状態じゃない。

先輩的には双方に構築士としての特殊能力、私は神だから神通力でそっちは悪役だから呪力とか魔力を使いまくっての大迫力弾幕アクションバトルをご希望？ 先輩も飛べるみたいだし。

でも私はといえばキララにザックザクの滅多刺しにされた直後。幾分信頼の力で痛みが相殺されてるから我慢できてるけど、相当消耗してる。戦ったら一秒以内で負ける。それじゃ先輩の描くシナリオできないじゃん。せめて数日、私が回復したり立て直す時間欲しかったですよ先輩。

それに先輩のステータス凄すぎ。もしかして今なら私のステータスもチエックできるんかな。普段はこの画面出てこねーから今のうちチエックしとかないと。

真つ赤なパネルをピコピコ適当にいじってたら偶然出てきた。

【構築士情報】

役名 : 赤井 (J A P A N / I D : J P N 2 1 4)

クラス / 職種 : 甲種一級構築士 / ハイロード 主神

心理層 : 0

物理層 : 1

絶対力量 : 1 6 2 1 2 ポイント

滞在日数 : 3 3 4 6 日

有効信徒数 : 1 0 名

総信徒数 : 4 2 1 名

私は日本神だから日本語だ。ここ日本のサーバーですからね。やっぱ私って先輩のステータスより圧倒的にしょぼい。てかザコい。そもそも先輩が持つてる心理層、私持つてないじゃん。総信徒数って私の集落の皆も併せての数かな？ あ、グランダの人らと差し引きすると、なにげにこの一年で赤ちゃん八人も生まれてる！ めでたーな私がいなくなったら皆正気に戻って恋愛してくれたんだね！ そうときたらお祝いの品造らないとな……って今それどこじゃない。

心理層って読心術がキャンセルされるのと関係ありそう。あれ持ってたら読心術に対する防衛とかできるわけ？ てかさー、お互いに読心術かけられたら念話みたいに打ち合わせできるってのに……私がかこうするから適当にやられたふりしといて、とか。じゃあことう体ていでいきましようか！ みたく綿密に相談できるのにー。心の壁？ マインドキヤップ心理層解除してくださいよー先輩。

遠くから目配せしてみたつもりだけど、先輩は無反応。

全然協力するつもりなさそうだな。

自分の演出を考えてるから、私との意思疎通は断固拒否ってことね。

さすが欧米人構築士だよ協調性ゼロだ。もつと仲良くしようよ頼みますよ、折角この世界で出会えた生身の間人同士さあ……先輩だって第一区画ですーっと神様役に解放されるの待ってて暇だった頃でしょ？

とか思っても、もしかすると悪役の人ってアガルタ内では、邪心の塊みたいにされてんのかな。私はその逆だ。人間愛の塊みたになってる。だとしたら善と悪、水と油、神と悪魔だ。

話なんて通じるわけないよ。

それはそれですげーな。よく考えたら先輩って私みたいにアガルタ内監禁勤務じゃなくて九時から五時の割り切り勤務だよ。なのにそんな悪役状態で現実戻って、社会生活に支障ないんかな。現実と仮想の区別つかなくなっって犯罪起こしまくって逮捕になったら労災だ。

こんなに邪悪そうなのに家に帰ったらいいパパだったりして？

” パパー！ パパのお仕事ってどんなお仕事ー！？ こうちくしつて天国をつくるお仕事なんでしょー？ 皆から感謝される立派なお仕事なんでしょー？”

とか娘に聞かれて

”そ、そうともさ……！”

ってな感じで視線を逸らしたりしてたら泣けてくる。いや、娘さん。パパのお仕事は悪役ですけど皆の為になる大事なお仕事なんです！ 悪役がないと構築進まないからとても貢献してもらってるんです！ って弁護したくなる。先輩と一杯ひっかけて悪役としての苦労話とか聞きたくなる。スーパー妄想タイムだ私、早く現実戻らないと。

現実つてもヴァーチャルですけど。

……ここまで全部、先輩に読心術で見破られてたりして。

そついや私は心理層ねーもんな無防備だったよ。うわダッセ！

あ、先輩がキララに何か呼びかけた。

『蘇芳、汝は邪神に降伏の意をみせたな。あまつさえ汝の肉体を邪神に捧げると。しかと聞いたが』

「そつ……それはっ！」

私の腕の中のキララが弁解しようにも、一部始終を見られていたと知り悔しそうに口を閉ざす。彼女の血の気がひき、手が冷たくなってガタガタと震えている。天空神の巫女でありながら勝手に邪神の生贄になるだなんて、彼女の的には取り返しのつかないこと言っちゃったよね。

『我を裏切った汝が罪は死を以てあがなえ』

先輩がそんなこと言いだした。ちょ、本気！？ そんな些細な理由で少女に死刑宣告。先輩、ちょっと役にハマりすぎ！ やりすぎですよ命まで奪わなくなつていいでしょ！ 私は殺生禁止だけど悪役の人って殺生OKなのか？ むしろ残酷に殺しまくるのが仕事、ぐらいの勢いかもしれないな。悪役だもんね、人殺しを躊躇してたら悪役じゃねーよ。

「はっ……ははあっ！」

キララ、天空神の神託だと思って真に受けちゃってる。私が彼女を手放したら下に転がってる剣を取り上げて速攻自殺しちゃいそう。長年洗脳されてるから絶対自殺する。カルトって怖っ！若い身空で命粗末にしちゃダメだよ。私の腕の中でもごもごもがいているけど、自殺するって分かってるのに私が手放すわけない。

臣下の人たちも、平身低頭だったのに女王様のピンチで思わず体起こしてざわめいて慌ててるみたいだけど、誰もキララを庇おうとしない。天空神の怒りをかいたくないもん。気持ちはわかるけど、皆の為に私と戦ってこんなことになったキララにそれはないよ。薄情だよ臣下なのにな……

「離せ邪神。聞いただろう、天空神さまのご命令だ。これから余が命をもって購うつ……」

とつとつ追い詰められたキララは決死の覚悟だ。

『それであなたの民が救われると思いますか』

私は思わず彼女に尋ねてしまったけれど。まやかしの天空神に彼らは斯くも依存していたと知った。

そうだったな。ロイだって私が集落を離れると言った時すげー抵抗してたし、私がいないと生きていけないとまで言ってたからな。どうやら今は集落をまとめて立派にやっつてるみたいだけど。

この時代の人々にとって、神との距離は近い。その近さがグラナダでは逆に脅威となり、彼らの人生にかかわるほどの悪影響を及ぼしている。キララは天空神に切腹を申しつけられて、この世の終わりのように思っているみたいだ。十代の少女とは思えない、魂が抜けて生気のない顔。現実世界でそんな顔してる子、一人として見たことがないよ。

「天空神さまに見捨てられたら……グラランダが滅びる」
うわごとのように、キララは私の腕の中で震えている。私は彼女に最も近い距離から、彼の心に呼びかけた。

「滅びませんよ。たとえあなたの神が見捨てても、私が決して見捨てませんから」

傍から聞くと、嘘くさいかもしれない。でもこれは私の本心だ。チュートリアルによると、甲種一級構築士は絶対善であり、救いを求めるものたちの最後の砦であるべきだと説かれている。私もそうなるうと努めている。

だからといって私は自然的な人々の営みを曲げるつもりはない。自然死を迎える人を延命する必要はないと思うし、平和な社会であつても集団のうち一定数の人々は病死、事故死、不慮の死を遂げるものだという認識はある。その人たちまで救うと言ったら偽善だ、私は彼らを救わない。でもこのグラランダで起こっていることは決して”自然な”人々の営みではない。

まやかしの神への信仰によって屈折し疲弊した、蝕まれ明日を生きる希望を失った人々。

グラランダに未来などない。

人も、国も……この場所には何も残らない。

だから私は、彼らの未来のためにこそ力を貸し、救うんだ。

「……！」

思いがけない人物からの一言に驚いて、キララが動揺というか脱力したのがわかる。

何ともいえない眼差しで、私の赤い瞳を見つめた。

戸惑い、疑い、否定、……そしてほんの少しだけの期待がないまぜになつて。

光を失ったはずの彼女の瞳は、天空神ではなく私を映していた。

『誰も救わず傷つけるだけの神なら、もう見限ってはとうですか』

だいたいさー。人間は本来神がついていなくても生きていけるし、命を預けるまで依存しなくてもいいんだよ。ロイとこの集落を見てごらんよ（見えねーけど）、逞しくやつてるじゃない。だからって私を信じてくれっていう論調は自重しとくけど、少なくとも先輩を信仰したって何の恩恵も受けないことは明白だ、君も気付きはじめているよね。

キララは声のトーンを落とし、私にだけ聞こえるように話しかけてきた。

「赤い邪神よ。さつき、この国の災いは”コウドク”だ、と言っていたな。汝の祟りではなく」

『ええ』

ん？ 先輩の話じゃなくてこっちの話を通じてくれるの？ まだ私の話なんて半信半疑なんだろうけど、思い当たるふしというか信憑性と言うか、心に引つかかるものはあつたんだろう。だって鉋毒は祈祷じゃ癒せないし、治療方法は唯一私を殺すことだけって思ってたのに私は死なないわけだし。先輩は代案を提示してくれないわ死ねというわ、手詰まり感半端ない。未成年にこの状況は酷だ。

というわけで私の話に聞く耳を持つてくれたみたい。

「天空神さまは、ご存じだったのだろうか。天空神さまが、邪神を滅ぼすための剣を鍛えろと仰ったから……」

当たってるかどうか自信ないけど、グランダで何が起こったか力マかけてみようか。

『死者が多いのは金属精錬を行っている地区、およびその地区を流れる川の下流域ではありませんか。骨折するものが多く、該当地区で生まれた子供は皮膚が黒ずんでいませんか？』

「何故そんなことがわかる！」

「おや、凶星だったみたいだね。別に心を読んだわけじゃない。現実世界では鉋毒なんて前時代的なものだから、鉋毒の患者を見たことはないけど。教科書的にはそうだ、なにげなく覚えておいてよかった。」

『それがこの鉋毒の特徴だからです』

正確に言っと、カドミウムの慢性中毒症状なんだ。

「……まさか、まさか余がこの手で民を死に至らしめ、苦しめ続けていたというのか」

「まあ、ぶっちゃけそういうことになるね。鉋毒は公害であり人災なんですよ。でも君に罪はない、その点はよく分かっている。君の行動も先輩の悪役的演出のうちだ。全て先輩の計略通りに事が運んでいて、君はどうしようもなかった。君は先輩の忠実な駒として、悪の手先として動かされていただけなんだよ。それを今、知ってしまったね。」

君が信じていた存在に、君は裏切られた。でもまだ絶望しなくていいよ、私が助けるから。」

「……死んで詫びずばなるまい」

彼女の声は乾いて掠れている。私はキララの心を看破するため、彼女の顔を覗き込んでうかがう。彼女は本気だろうか。

『天空神にですか？』

「グラランダの民へ、だ。この国を治める立場にありながら、民を苦しめ続けていたなど……王でもなければ、もはや生きる価値もない」
彼女は責任を重く感じている。私は咄嗟にこんなことを言った。

『価値ならあります。忘れていませんか、あなたは私の生贄です』

今更だけど、私は生贄いりませんなんて言っていないよね。だからって欲しいとも言っていないけど。でしたら暗黙の了解で生贄契約は

成立してるよね。覚えているよね？

「はあっ？ 何を言い出すんだ」

キララ、素っ頓狂な声をあげる。まああれは言葉のあやですよ、わかってるよ。でも私はそこに執着してネチネチいやらしく責め立てるからね。

『生贄』として私に身を捧げたなら、勝手に死ぬこと罷りなりません。生きて生贄の役目を果たしてもらいます』

柄にもないことを、命令口調で言ってみました。だって死んだら生贄じゃないよ。君が自分に価値がないって言うなら、もう私の生贄として生きてもらう。それなら勝手に死ねないでしょ？ 具体的に生贄の役目って何って言われると困るけど、今は君の死へのタナトスを止められるなら何とでも言うよ。

「まだ、間に合うのだろうか。汝は民を救えるのか」

『約束します』

言質を取られてる気がするけど、まあいいよ。裏切るつもりはないからその約束をしっかりと覚えておいで。

「余は汝を傷つけたが……それでも許されるのか」

傷つけたとか控えめなもんじゃなかったよね？ 君って私を殺す気満々だったつしょ。一年間の磔刑 滅多刺しのコンボをやらかしてくれたよね。ほぼ君一人のおかげでこの話がグロ注意ってかPG 12になってしまったよ。でも

『あなたが悔いるならば、私は全てを赦しますよ』

君が私にしたことは、記憶からは消さない。でも罪を憎んで人を憎まず、水に流すよ。神様が恨みがましくてはいけなからね。

「ならば……汝が邪神であっても、我らを救う神を信じる」

キララ、私に身を寄せ、そっと目を閉じた。長い睫、金髪が私の腕にかかりふわりとゆれる。ガチガチに固まっていた彼女の体が、

緊張を和らげ少し柔らかくなった。心を許してくれたみたいだ。すると……目の前に出ていた私のステータスデータが明滅し

有効信徒数 : 65名 (extra +55)

増えた !? しかもエクストラですげー水増しされてる！もしかして……キララ、君が私を信じてくれてるってこと？ キララさんパネっす！ 血みどろで傷が痛むから感受性鈍ってて誰が誰の力かよくわかんねーけど、君の力が私に流れてきているような気がする。そっか、彼女は憎しみの力を巫力に変えられるんだっけ。もしその人間離れた力が私への信頼に変わったら……君もメグやロイのように、普通の素民より余計に力を送ることができると。君が与えてくれる力は、普通の素民の五十五倍もある。あれ、心なしか傷が癒えてきた気がするぞ。いや間違いない、君の巫力、というか癒しの力のおかげで流血が止まったよ。

『キララさん……私を信じてくれてるんですね。ありがとうございます』
「う、うるさい邪神めっ！」

素直に認めないのか。とことんツンデレだな。でも先輩のステータス、有効信徒数からマイナス55になってる。だからキララ、君が先輩に預けていた信頼、ってか信頼じゃなくて歪な信仰の力が私に信頼の力となってまるまる移植されたんだ。なんか嬉しい。仲良くなつた記念に(？)名前を覚えてもらってもいいよね。

『折角生贄になってくれたので、名前ぐらい覚えてください。私はアカイと言います』

「黙れアカイめっ！ 慣れ慣れしい！」

おー、名前呼んでくれた。このこの！ 反抗的だけどかわいいじやん。

『私があなを離しても、自殺しませんね？』

彼女、ばつが悪そうに首を縦に小さく振る。

そうか。では私も君を信じるよ。

私は注意深く彼女の体を解放した。彼女は後ずさるが、刃物を拾おうとはしない。

交換条件だ。私は神杖を取り上げ、握り締めて通電した。電力は十分、バチバチと音をたてる。さらに私の神体にも紫電のオーラを纏う。コンストラクトモードは十二枠に増えた。キララの信頼によって私の傷が癒え痛みが和らぎ、神通力が溢れ出す。久しぶりだ、この感じ。皆が預けた信頼の力に私の体が包まれているようだ。キララの信頼の力がこれほど強ければ、物理結界、心理結界も作れそうだ。

ありがとう。君が私を信じてくれる代わりに、私が君たちを救う。

でもあとあと困りそうな約束だな。

実は……簡単なことじゃないんだよ。カドミウム中毒って基本的に治せない。金属精錬を止めて精錬所からの煤煙を断ち土壌や水を浄化してこれ以上の被害を食い止めることはできるけど、今中毒になってる人を癒すのは、万能薬がないと難しい。

カドミウム（元素番号48）は金属精錬に伴って排出される重金属なんだ。人体には蓄積性を持ち広範な症状を呈する。慢性的には腹痛、下痢、嘔吐、発熱、肺疾患、腎機能障害、発がんなど……だから見立てが困難だった。

カドミウムは一度人体に入ったら、体外には容易に出てゆかない。中毒には急性と慢性がある。急性だとキレート剤（金属を吸着する薬剤ね）を使った治療法が適応可能だけど、慢性にはこれといった決め手がない。

ステロイド投与や金属と結合するタンパク質を誘導する薬剤を投与し解毒してゆく方法、メタロチオネインメタロチオネインは高発現させると発がん

性もあるから加減が難しいな……でもそれは対症療法であって根本的な治療法ではない。

つまり効果的な治療法はないんだ。

先輩の演出が無理ゲー、ってか鬼畜すぎる……あれだけ崇拜してくれた自国民を皆殺しにする気かよ。する気なんだろうな、第一区画解放ですしクライマックスですし。やっぱこの世界では、不幸なことにブリリアント先輩は邪心の塊っぽくなって。人の心の痛みを知らず、救いの手を差し伸べない悪の構築士に成り果てているみたいだ。

『それが汝の答えか蘇芳！……ならば我が直々に、神罰下すまで』

先輩、憤怒の様相。黒いターバンみたいなので顔がぐるぐる巻きになってるので顔も見えないけど、声が怒りに震え迫真の演技だ。私とキララが遣り取りする間、闘いを仕掛けずに待っていてくれたんだな。でも演技と思って高くくつてると絶対こてんぱんにやられる。「中の人」のこととか演出とか考えずに、敵意剥き出しの邪悪な天空神だと考えてないと。

先輩は正面の城壁を蹴って飛翔し、私たちの頭上を大きく弧を描いて飛び越え、何故か湖の上で止まった。湖の上三十メートルぐらいを静かに滞空しこちらを振り向いた。飛翔の姿勢がきれいだ、空中なのにピタリと静止できてる。鳥人間コンテストぶつちぎり一位だよ先輩。私が飛ぶときは先輩みたいにきれいにはいかない、へ口へ口飛んでへっぴり腰だカッコ悪いよ。乙種とはいえさすがベテラン構築士、バランスも安定してんなー。私の知らないスキルも色々持ってそうだなー。ところで私、先輩に勝てるんだろうか。

うん？ 湖の上で何するつもり？ 何考えてんのか全然予測できねー。

先輩は黒いコスチュームの下からすらりと、テニスボール大の紫に輝く宝玉を出した。何だろう、それで占いでもする……わけねーよな。……なんかすげー紫の球が光ってる。長寿命で明るいと好評のLED電球の五倍くらい光ってる！

「天空神様、それはっ！ それだけはおやめくださいっ！」

キララはそれが何か知っているみたいだ。あの紫の球って相当やバイものなの？ ちょっとキララに聞きたいけど教えてくれなくていいよ怖いから。アナライズをかけても情報出ない。やべーな、何よあれ。とりあえず私は皆に避難誘導。

『全ての民を城門の内に避難させ、門を閉ざしてください！』

先輩、神と魔の最終決戦ここで始めるつもり？ 満場一致で「よそでやれ！」って言われるよ。

もつと場所選んで下さいよー、せめて湖の上で空中戦やりましょうよ。この湖って一応琵琶湖ほどの広さがある、ちょっとはみ出さかもしれないけど地上でやるよか随分まし。衝撃波や電撃、火炎やその他撃ちまくっても水面が衝撃を吸収してくれるよね。先輩もそのつもりなんかな、水面上ですけど、構築士二人で水入らずでバトルやりましょうよ。

ここが私VS先輩のバトルフィールドになったら、グランダは壊滅ってかひとたまりもねーな。兵士たちも退散してるし、逃がしてももう襲われないだろう。私はアセチレンの神炎の障壁を解除し、病人たちを解放する。兵士たちはわれ先にと逃げて、周囲にいない。『あなたがたも早く逃げて！ できるだけ遠くへ逃げるのですよ』

彼らも大慌てで、兵士たちとともに走り去ってゆく。私も神杖を手に地を蹴り空に舞い上がる、湖面上に先輩と百メートルぐらい距離をとって対峙した。へっぴり腰で。

「神様　！」

ナオが私を呼んでる。心配してくれなくていいから、危ないから早く逃げなさい。ナオはまだ私に何か言いかけていたが、お父さん

に抱き上げられて連れられていった。これで皆城の中に入った……
かと思いきや、キララが残ってた！

『キララさんも城の中に入ってください！』

「何を言う、余は残るぞ！」

『あなたは私の生贄なんですから言うことを聞きなさい！』

振り返って叫んでいると、先輩が光る紫の球を湖に投げ入れた。

ぎゃー、何かしらんけど入浴剤じゃないし入れないでそれ！ 直後、ゴボっと水面に大きな水しぶきが上がる。投げ入れたのは小さな球だったのに水飛沫が大きすぎる。球が沈んだあたりは沸き立ったようにブクブクと大きな泡が底面から浮かんでくる。ポコポコ具合が九州の別府地獄めぐりの温泉みたいだよ。そして数メートルの水冠の水飛沫が上がった。ちょっとウォータークラウンってレベルじゃねーぞこれ！ 滝を逆さにひっくり返したような、水の壁が柱になってる感じだ。なにこれ！ 何なのこれ！

え？ うそだろ……湖の水面が段々と上昇してきてね？

よく見ると湖面が毎秒数十センチのスピードで上昇をはじめている、このまま上昇するとどうなるの？ 物理的に考えれば溢れるよね。溢れちゃうよ！ 先輩なんてことしてくれたんですか！ マジ？ ねえこれマジでやってる？！

先輩グラنداを洪水にして自国民を流す気ですか？ まさかノアの民の集落も水没じゃん！

ぬわあああああ！ やめてえええええ！！！！

私まだ皆のために避難用の箱舟作ってねーからー！！！！

第2章 第13話 赤井さんと乙種構築士ブリリアント

この琵琶湖ほどの大きさの湖は、私の集落では「カラナの広い水たまり」と呼ばれていた。なんとまあ拙い名前の付け方だよ。これ水たまりじゃねーよ「広い水たまり」湖」なの。とは思ってたけど湖って言葉知らないんだし私が湖ですよ、って言うのも何か違う気がするのでブサイクな名づけ方でもご愛嬌。

グランダではサブレマ湖っていうれっきとした名前があるみたいだけど、私の民の肩を持ってカラナ湖って呼び名にしくよ。上空から見ると、きれいな楕円状になってた。いかにも人工的な、ゴルフ場の池を巨大にした感じだな。天然ではありえないほどラウンド型してる。

湖はのほりは粘土質で湿地帯になってる場所もあれば、ピンピンした草の紫色の綿毛のガマっぽい花が咲く植物が生い茂ってる場所も、白い砂浜の地帯もある。

で、グランダに面した湖は遠浅の砂浜になってる。岩や崖とかで囲まれてるわけじゃないから、自然の堤防もクソもない。湖面から水が溢れたらそのままビッグウェーブでグランダごと水没確定。どっかに水流を逃がせるところはないのか……と考えても、カラナ湖は傾斜のある山地帯から二本の川がそそぎ、十メートルほどの川幅の一本の川が下流に出ている。高地には私の民の集落が……うちの集落にもそろそろ名前ほしいな。

ほしいのは集落名じゃないよ地名だよ、国名とか集落名にしちゃうと変に皆がナシヨナリズムや神民思想持ちちゃって周囲の国と戦争したり好戦的になるといけないから。国境とか垣根をつくりたくない、皆仲良く、和気藹々（わきあいあい）とグローバル化してほ

しいからね。というわけで、地方の民、みたいな呼称がほしいんです切実に。

国民の皆様から地名を公募することにしますので詳細は後で……ってこんな緊急時にネット公募やってる場合じゃない。ナレーション途中で話脱線させるのやめろって西園さんから怒られたばかりだったよ。

とにかく高地には私の民の集落があり、低地にはグラндаが位置する。上流と下流の標高差は十メートルもない。下流側の川はゆっくりした流れだから、多少川から水は逃がせるけど、そんな流量追いつかないほど水面が上昇してきてる。対岸のうちの民の集落も危ういけど、まず下流のグラндаから水が溢れるってことになる。グラндаでは一本の川を取水水路から城内に採水して、飲料水やら工業用水やら計画的に使ってるっぽい。そういう用水路が充実してたから飲み水が鉍毒に汚染されるのも早かったんだけど。

『全ての水門を閉ざし、水路を切り替えなさい！　すぐに洪水がきますよ！』

私は振り返って叫んだので、門番の人が慌てて城壁に備え付けられていた水門を閉ざしはじめた。邪神の言うことでも聞いてくれるな、だって門閉ざさないと明らかにヤバイもんね。でも門の制御が手動だからめっちゃ遅い。あーもー！　ちんたらやってたら城内に水が入って城の中からブクブクなっちゃうよ！

私は左手をかざし、力加減を間違えないよう衝撃波を六発放つ。衝撃波つても空気の塊みたいなやつだ。全ての水門の門の開閉をコントロールする滑車にヒットし鎖が切れ、門の制御が壊れてガシャンガシャンと鋼鉄の水門が閉ざされた。嚴重すぎるぐらい嚴重に閉ざされたよ。

城門の上で三十人ぐらいの兵士らが右往左往してる。

門番の兵士たちもそこでボサつとせず逃げなさい！ 城門は高いし、グラランダは城壁都市みたく城壁にびっちり囲まれてるからすぐに水没はしない。高台があればそこに避難すればいいんだけど、このあたりにはあいにく高台がない。城門を閉めて漏れてくる水を土嚢とか積んで防いでれば暫く時間稼ぎできそうだ。

でもそれも長持ちしない。城壁はやがて水圧に勝てなくなり決壊する。どうする！？ 私は物理結界を張れるけど、グラランダを覆い尽くすほどの結界を張っても意味ないし。仮にこつち側だけ守れたとしても、私の集落どうすんのよ水没じゃん。湖の対岸、両方の人々を守るにはどうすればいいのよ。

というわけで私は先輩に猛抗議。全て先輩のせいですからねこの状況は。

『何ということ……逃げ道を全て潰し、洪水で皆殺しにするつもりですか。あなたを信頼してくれている人々を！』

てか、グラランダ洪水にしようとしてるってグラランダの民に分かったら、それまで先輩に預けられていた先輩への信頼って失われるんじゃない？ いや、まだ千二百人ぐらい有効信徒いるけどさ。現に、多分兵士たちだと思っけどステータスデータ見ると、先輩の手持ちの有効信徒が少しづつ減ってるよ？先輩の魔力だか呪力だかも減るけど、いいのそれで？

『それがどうした。我は水面を上昇させているに過ぎん』

先輩、何食わぬ顔。顔見えねーけどさ鬼畜すぎるよ。そういや今なら二人きりだよ。これほど遠い距離だともう民には私らの話聞こえてねーから、ちよつと一旦演技やめましようよ、演出の打ち合わせしましょうよ。先輩だつてせっかく構築した第一区画水没したら未練残るでしょ？私の民の集落だつて沈めたくないんですよ。お願いしますよ、読心術で私の考え読めてるでしょ？私は全裸で心をさらけ出してるとのに卑怯ですよ先輩。

『いや、八方塞りにはしていない』
『!?!?』

先輩、ぼそりと私にそう言った。え？先輩、今私にそう言ったんだよね？声のトーンが違う。さっきまでの悪役っぽい凄みが無い、てか優しい。あ、こっちが先輩の地声なんだな。これ演技じゃないよね素だよね、私にヒントくれてるんだよね。先輩からは私へ読心術がかけられるんだっけ。何か逃げ道残してくれてるの？わかんねー！どこに逃げ道あるんだよ。と思つてたら先輩が心理層を解除してくれてるのがわかった。

はじめましてブリリアント先輩、私はハイロードの赤井と申します。と、心の中で挨拶。で、ど、どこに逃げ道を？おそろおそろ先輩に読心術で看破をかけると……

”契約に反するので教えられない。私もこれがぎりぎりだ。ランク3の構築士がハイロードと会話することはありえないが、君が新米で何もわかっていないので教えている。ボードを見なさい赤井君。水面が溢れるまで時間がないぞ”

あ、先輩の心の中あっさり読めた。すげーよ筒抜け状態だよ。二十七管区は日本のサーバーで日本語が標準なので、先輩も英語圏の人だから英語使うんだろうけど、ダイヴしたときから日本語での思考回路に矯正されて自動翻訳つけられてるっばいな。なので私たちの念話は日本語で通じる。

『グランダを奪いにきたか邪神よ！そうはさせんぞ、滅してくれ
る！』

先輩、なんか肉声では適当にそんなこと言ってごまかしてる。

構築中にアガルタで起こったことは、全て厚生労働省に過去ログとられて保管されてるんだっけ。だからひそひそ話をしても無駄。先輩が私を助けたりしたらばっちり記録が残って先輩は悪役に徹することができなかつたってことで給料削減、次の移籍話も白紙撤回。

なので念話が精一杯なんだ。あまり両者が睨み合つたまま沈黙していると不自然だから、長時間念話しまくるのもまずいな。西園さんから監視係にバレちゃう。

も、もしかして通常は黒子に徹してなきゃいけない先輩がわざわざ姿見せて出張ってきたのって……私がダメすぎて見ていられなかつた、ってこと？

ブリリアント先輩、すげーいい人じゃん。違うか、回りまわって自分の給料や将来のためか。先輩が急に協力的になつたよ。私を湖面上に誘い出したのも、素民に聞かれないう話がしたかつたから？ 私は先輩が普通に話しかけてきてくれたので、嬉しくて顔面がニヤニヤする。

”こら、にやけるな。顔戻せ”

すみません、つい嬉しくて。あー、こんなことになるから悪役は表舞台に出てこないのか。神と魔がキャツキャウフフで馴れ合つてたんじゃ演技にもリアリティが欠けるし、感情移入して同情したりすると思いい切り戦えない。悪役には憎しみや怒りをぶつけないといけないのに、これじゃ憎めなくなる。私は口元に手をやり、にやけた口元を戻し緊張感を取り戻す。数分前の先輩に対する怒りの気持ちを取り戻さないと。

”もしかして先輩を倒せば湖の水位上昇止まります？”

それと分かれば時間制限バトルってことで派手に戦ってバトルに集中しますよ。今ならキララの力もあるし戦えそうだ。キララは城壁の上ののぼってこつち見てるな。

”いや、止まらない。まずそちらを何とかしろ”

え　！　止まらないんすか！　それ困ったな、それ以上はヒントなしかよ。

”その後は、できる限り時間をかけて戦い、私を粉碎して殺せ。そろそろ念話を打ち切るぞ”

粉碎して殺せ、か……さすが悪役、割り切ってんなー。

乙種になるにはDM要素必須なのかな。どのくらい派手に滅殺していいんだろ、私が殺生禁止なのはアガルタの素民に対してであつて、先輩は殺してもいいんだろうな。殺さないと先輩ログアウトできないんだよね。でもやつぱやりすぎると先輩も痛いよね？　あんま痛くないようにしたげたいけど……。

”絶対に手心を加えるなよ、私に苦痛はない、迷わず殺せ。それに私も全力でいくぞ”

そうなんすか先輩苦痛ないんすか。私だけですかこんなに痛い思いしてるの……じゃあ思い切りやらせてもらいますよ。そのほうが先輩のためにもなりますよね、先輩も本気でくるんでしょうし手心加えてる場合じゃありませんよね、返り討ちにあつ。あ、そういえば。

先輩、最近現実世界でもんじゃ焼きつてジャパニーズフード食べました？

ひとつだけ答えてくださいよお願いします。

”ん？　嫁が作ってくれたから今朝自宅で食べた。それが何か”

おっしやああああ！　ふざけんなよこの野郎今朝食ってきただど？　俺はもう九年も食つてねーし嫁もいないつってんだろ！　おい……お前は俺を怒らせた……謝罪するなら今のうちだ。俺の殺意

ゲージがマックスに達してしまっただぜ！ あ……やべー。なんちゃら桔平としての地が出たよ、神様キャラに戻さないよ。

先輩、呆れ顔。顔見えねーけど多分呆れてる。あーあーそうだろうよ、私のもんじゃに対する情熱、てか執着を知らないから今朝食ってきたと言えるんだろうよ。

もんじゃへの情熱だけで「情熱大陸（百年以上続く長寿番組です）」出れるぐらいアツイもの持つてるんだよ！

『私はあなたを許しませんよ……絶対に許さない！』

もんじゃ的な意味でね。あ、あとグラランダを公害汚染してキララやナオたちを苦しめた罪もあったよね覚えてますよそっちのこともよし、先輩への怒りの気持ち再補充。

でもちよつと待った、先輩とバトる前に水位上昇を止めないと。

先輩の言うようにインフォメーションパネルを注視。

うん？ やっぱ案の定出てました、住民全滅フラグが。メニュー画面はこんな感じ。いや、実際はこんなシンプルじゃなくてももっと赤井、じゃなくてどぎつい最大フォントで真っ赤。

第二十七管区住民全滅まであと

00:08:52

構築士情報

構築ツール

超迅速分子構築（1） / 通常構築（12） / 加速構築（10）

解析ツール

生体解析（1435） / 死亡者解析（314）

各種補助ツール

地形調査 / 地下探査 / 迅速計算

あれ、住民全滅までたった八分しか猶予ないじゃん、ちょ！ 短いよもつと猶予くださいよ前は九十九時間くれたじゃん。そしてハイパソコンストラクトも出てる、いよいよやべーなこれ。でもハイパソコンストラクトって今使っても意味ねー。

あと各種補助ツールって何　！？　もうどこから突っ込んでいいのやら。地形調査はいいよ上空から見てるからよく分かってる……でも見ておこうか、ということで一応解析かける。そういやこのグランダの地下構造ってどうなってんの？　でかい空洞があれば水位が上がっても湖の底抜けば水がひくよ、空洞あるのかな？　それに賭けるしかない。

ちょっと地層を真面目に調べようか。水が逃がせそうな場所あれば全神通力を使って湖の底ぶち抜くしかない。湖がなくなったらメグもロイも、釣り好きならうちの集落の太公望たちもがっかりだろうけど今はそれしか方法ない、てか私のしよばい頭脳じゃ思いつかん。釣りごろ釣られごろとか言ってる場合じゃない。

私はタッチパネルで地下探査を選択、すると地形調査画面の横にサブメニュー画面には電気探査って項目が出た。何か色々モード聞いってきてるけど時間ないからスタンダードでいいよ早くやってよ！　てなわけでポチっとな。ポップアップが開き、目の前を忙しなく生口グの数字が流れ解析画面に切り替わる。

うん、これは水平電気探査って方法だ。

地下の地層がどうなってるのかを調べるときに使うんだよ。

地層探査には色んな方法がある、それこそ原始的には鉄管でボーリング、非破壊的なものは他に電磁探査もある。地質調査ってか空洞調査、無線のないこの時代で使えるのは電気探査って方法しかない。だから選択肢は一つな。測定点は二極法電極配置って配置で、

台形の測定領域に一定距離ごとに電極をぶち込んで電位測定してる、と仮定してやってってくれてるみたいだ。

勝手にそういう全自動計測をしてくれてるっぽい。そしてデータが統合され……出た。比抵抗断面図ってやつが。地層ごとにカラフルに色分けされて、地層が輪切りにされて七層ぐらいに積層になってんじゃん。

すると……あつたよ空洞が。オレンジ色に見える分布は空洞だ、でけー。二百三十メートル下に細長い空洞がある！ こりゃもうぶち抜くしかねー。

ああつ、でももうカラナ湖の水が溢れて湖の外に十センチぐらい溢れ始めてる。城門は閉ざされてるけど、湖から流れ出した水が城壁にザパン、ザパンと波うちはじめる。そっぴや空が曇り、雲行きあやしくなってきた、風が出てきたな。ついてねーな、こんな時に嵐が来るのかよ。風が出ると波が高くなっちゃうよ。

若干慌てながら、出来上がってきた地形解析画面もチェック。

「アカイ　！　水が！」

なんかキララが城壁から私に声援を送ってる。声援じゃないな悲鳴だ。ちよっ待ってね、今なんとかするよ。

私は神杖を水平に携え、体内からありったけの神通力を搾り出し集中力を高める。

一時凌ぎというか防波堤程度にしかないけど、湖に沿って物理結界を張っておくよ。でもカラナ湖の一周って数十キロあって神通力の消耗半端ないけど、正確に地形に沿って結界を張る。私の結界が水圧に耐える限り、水は結界の内側に溜まり続けるだろう。そっぴやって時間を稼ぎながら、私は湖の底に潜って水を抜く。抜けるかな、岩盤厚そうだけど。でもやるしかない。

集中すると、湖岸に白いボールが立ち上り、湖水がせき止められはじめた。よし……何とかうまくいきそうだ。湖底に素もぐりして抜いてくるか。先輩も待つてくれるみたいだ。

で、私が湖面に飛び込むべく急降下しようとしたとき……雲間から一筋の閃光が迸った。耳を劈く轟音とともに先輩の頭上に一直線に落下する。

うわ！ 先輩に直撃だ！

眩しい、目が潰れそうだ。普通の雷より電力でかい、多分2GWぐらい出てる。

あ……先輩は感電し意識を失い、湖面に引き寄せられてゆく。私たちは自ら生じる神雷には耐性があっても、それ以外の事象によつてのダメージには勝てない。にしても落雷が二発、至近距離において金属の杖を握っていた私は無事で先輩だけ落雷。

先輩は何も持っていない、素手だった。不自然でしょ常識的に考えて、当たるならまず私でしょ。

私は灰色に重く垂れさがる空を見上げ、合理的理由をさがす。直後、青年の声が聞こえた。

「赤井様 」！

この声……。

私は驚愕し大きく目を見開く。振り向き、湖岸に視線を落とすと、獅子にも似た巨大な橙色の肉食獣、エドが天に向かって咆哮を上げている。

「ああ……あなたたちは」

エドの背に乗っているのは……黄色と紫のしましまのストライプ

のワンピースを着た少女メグ！

そして彼女の後ろで彼女がエドから落ちないように支えているのは、精悍な顔つきの青年、ロイだ。エドのお尻に二袋の布袋を積んで紐でくりつけてる。中身はきつとあの白い花だ、花束の状態で持ってくると思っていたからまさか二人で来るとは思わなかったけど、花卉だけ積んで軽量化して持ってきたら最小限の荷物で済む。

ああ……そうか、先輩を襲ったあの落雷は君の仕業だったのか。

ロイ、君が渾身の神通力を使って敵霊いかづちを落としてくれたのか。コントロールもばっちりだ、神通力を使いこなせるようになったんだね。ロイは金属の銚を携えてエドから飛び降りた。いやそれもう銚なんてちゃんなものじゃない、刃も研ぎ澄まされてピカピカだ。強度もありそうだよ、それは立派な槍だよロイ。君が集落の皆を守るために一生懸命鍛えたんだね。いっぱい褒めてあげたいよロイ、メグ。

「あかいかみさまあ　　！」

メグの声が聞こえる。そして彼女と彼の強い思いが流れ込む。私は愚かしくも一年前には気づいていなかった。

かくも強かったか。

君たちが私に与えてくれた思い、信頼と愛情は。私が溺れてしま
いそうだ。

始祖、はじめりの人よ。最初の私の民であり、かけがえのない最
初の十人よ。

その中でも最も私と絆の深い、メグとロイ。

会いたかった、君たちに。ただ、ひたすらに会いたかった。

君たちもまた、そうであったように。

第2章 第13話 赤井さんと乙種構築士ブリリアント（後書き）

【第1回公募のお知らせ】

というわけで作中で言っていたように、赤井さんの集落の地名を国民の皆様から公募します。シンプルで異世界っぽいのがいいなと赤井さんが申しております。

募集内容? : 赤井さんの集落のある地名

赤井「よろしくお願いしますよー、私名付けのセンスとか皆無なんですよー。何かインパクトがコンパクトにまとまった地名がほしいんですよー」

よろしくお願いいたします。九月いっぱい募集して、いくつか集まれば抽選のうえ（抽選の様子は情報公開します、公的機関ですので）決定いたします。選にもれても他の地名やらそのほか作中で大事に使わせていただきます。ふるってご応募ください。

（追記）筆者からもドサクサ紛れにこそっと・・・

募集内容? : 次に登場するキャラの名前、男女各1名ずつ

第2章 第14話 赤井さんとブリ先輩のはじめての共同作業

熱い眼差しで、米粒ほどの大きさの彼らを見つめる。懐かしいな。私と彼らとの距離は遠くとも、意識を朦朧とさせながら湖の対岸を見つめていたあの日々を思えば近すぎるほどだ。これは実に一年ぶりの再会となる。

メグとロイがグラランダに乗り込んで来たならキララに処刑されるかもしれないと懸念してたけど、元気な姿を見れば素直に嬉しい。

「あかいかみさまあ　！　メグだよお　！　返事をして！」
彼女は何度も私の名を呼んだ。距離は遠くとも、彼女の姿はよく見える。

この再会が彼女にとっての現実で、私がここにいることを、声に出して確かめるように。

メグ。君は急に大人っぽくなった……髪も伸びて色っぽいよ。私に甘えていた、泣き虫の女の子ではないんだろうね。害獣である肉食獣エドを怖じることなく巧みに操り、垢抜けて凛々しくなったな。私が去ったあと、二人は多くの試練を乗り越えたようだ。慮るに、集落には何度となくエドの襲来があったんだね。集落の周りに柵ができたのは、近い未来への国防の為ではなく、現に被害の出ている害獣対策だったのか。そうとは知らず、のほほんとただ君たちの集落を対岸から見ただけの私を許してくれ。

『聞こえていますよ、メグさん！』

私がこたえると、メグの心が激しく震えたのが遠くからでも分かった。

ロイは既にリーダーの風格が出ている。以前から責任感が強く好

奇心旺盛で頼もしい子だったけど、彼が集落を導き守ってくれていたみたいだ。神通力も彼の身に十分残してある、節約して計画的に使ってたのか。つくづく君の見通しのよさには感心する。

夜明けから幾許と経っていない。

彼らは夜明け前から何時間とエドを走らせてグランダに来たようだ……。ナオの情報を頼りに、グランダの邪神が私かもしれないとの期待を胸に。病に苦しむグランダの民への土産もしっかり携えて「かみさま！ 今から力を送るねー！」

メグが叫ぶ。彼女との邂逅によって、突き上げるような信頼の力が神体に流れ込む。乾いた身体は彼女の力を求め、彼女が私に浸されてゆく。メグ一人から預けられた神通力は実に九十八人分。

つて……マジ！？

「俺のもどうか受け取ってください、赤井様！」

ロイは声を震わせていた。感極まって泣かないように我慢してるみたいだ。ロイの信頼も強い、彼の信頼は七十二人分ほどある。ありがと、今は感謝の気持ちしかないよ。彼らの力によって私の全身の傷がみるみる癒され、傷跡ばかりか苦痛も消えた。

こんなにもらっているの？ まだ私に信頼をくれるの？

私は彼らの力をわがもののように受け止め、与ってはならない。

今一度思い起こす、私が彼らに何をしたかを。私は彼らに何も告げず集落を去り、ロイの肉体を傷つけ、メグの心を踏みにじったんだ。あれほど私を慕ってくれていた彼らを簡単に見捨てて。彼らを守る為と言いながら、一年もの間彼らを不安にさせ裏切っていた。彼らのことを「私の民」であると思ってきたけれど、彼らは私を憎んでいてもおかしくなかった。まだ、私は彼らの神として、彼らは

私の民でいてくれるのだろうか。この信頼の力は、受け取ってよいものだろうか。

そんな呵責が込み上げる。しかしそんな葛藤をよそに、
甲種一級構築士”赤井”のステータスデータは変化し、私は驚愕する。

有効信徒数 : 65名 (extra + 55) 238名
(extra + 219)

ありがとう……って、増！ え！ す！ ぎ！

だって十六人（うち三人は寝返った兵士の人ね）しか信頼してくれてる人いないのにどんだけだよ。メグとロイとキララだけでこんなに増えちゃだめでしょ。ヤミ金業界の年利も真つ青の利率だ。私としてはすごくありがたいけどさ。私が以前から「なんとなく」他の素民より強いと思っていたメグとロイの力。改めて数字として見るとなんとなく、どこじゃないぶっ飛びぶり。始祖つてすげーんだな。こうまで凄いと何か意味があるのかと詮索してしまう。始祖とアガルタの神の間にある因縁を。今度西園さんに聞いてみよう、全て終わったら。

彼らに対する様々な葛藤と後悔、顔向けできない気持ちはあれど、折角預けてくれた信頼はひとまず預かっておくことにする。彼らを抱擁し、せめて祝福で癒しを返してあげたいけどそれもあとだ。カウントダウンによると七分後に住民全滅になってる。

急がないと！

『ありがとうメグさん、ロイさん！』

七分後に洪水で二十七管区の私の民が全滅するのが必定だというのなら、やはり湖底をぶち抜くほかない。私は十二杵ある構築モ一

ドの三棒を使い、あるものの合成を予約オーダーしておいた。予約構築ってできるんだよ、炊飯器みたいだね。

「赤井様、何かお手伝いできますか!? 俺も共に戦います!」

エドからひらりと格好よく飛び降りたワイルドなイケメン、ロイが湖岸を裸足で走ってきて、葦もどきを手でかきわけ、腰まで水に浸りながら私を呼ぶ。槍を握り締め、一緒に先輩と戦おうとしてくれてるけど、私ら空中戦だから参加は無理だ。

君っていわゆる現人神あらひとがみ化してるけど、やっぱり人間だから飛べないし潜れない。地上で槍振り回しても滑稽なだけ。いや、それはそれで私が萌えるけど。

「ここは大丈夫です。グランダには病に苦しむ民が数多いです。あなたがたの育てたその白い花を煎じ、城内の病んだ人々に飲ませてあげてください」

するとエドに乗ったメグがそれを聞き、困った顔をして叫んだ。声を枯らして。そんな頑張ってる思い切り叫ばなくても聞こえてるよ、私って地獄耳です。でも彼女の真剣な気持ちに胸をうたれる。

「どうしようー! あかいかみさまー! 持ってきたのは白い花じゃないのー! 白と黄色の間のやつー!」

クリーム色だったのあれ!? 新薬じゃん、ばつちこい! えーと、黄色のは病気の予防薬、具体的には免疫力増強効果のある遺伝子群やビタミン合成遺伝子群を組み込んでる。この花一つで一日分のビタミン! みたいなふれこみで売れそうなやつ。白いの抗ウイルス・細菌薬、消炎鎮痛効果がある。

そのハイブリッドってことは……機序は詳細に語りたいけど長くなりそうなので自重。

早い話が免疫力を高め、ビタミンを補い痛みをとってくれるって

こと。カドミウム中毒は炎症性症状もガンガンに出る。だから根本的な治療にはならないけど、ひとまず有効かもしれないな。

『それはよく効きます、是非とも飲ませてあげてください』

「わかったー！ 気をつけてね、あかいかみさま！」

メグが口元をおさえ、涙ぐみながら頷く。

ほら、君はまたすぐ泣く。

やっぱり甘えんぼの泣き虫は健在だ。一年経つても変わらない、彼女の弱点を見つけて私はほっとしてみたり。でも今日は泣いていいよ……私も本当は泣きたいんだよ。待ち焦がれていた再会を果たしたんだから。

閉ざされたグランダの城壁は高いけれど、エドはジャンプ力もあり爪も鋭いから、足場があれば城壁を登って城内に入れる。

『キララさん、彼らは私の民です。城内に受け入れてあげてください』

女王様のキララに、話を通しておかないと。城に侵入しても「曲者じゃー！ 出あえ出あえ！」されちゃ困る。キララ、城壁の上から手で大きく円をつくった。それOKなことだよね？ 世界には、首肯がNOでかぶりをふるのがYESな文化があるから困る。ブルガリアだっけ。インド人も首を左右に振ってYESだ。ましてや異国の民だし、逆の意味だったら泣く、ロイメグが泣く。

「アイ！ ロイを乗せてっ！」

エドに乗ってロイを迎えに来たメグが、そのまま彼を乗せて城壁に向かって走り去った。湖岸をパカラツパカラツて走り去っていったよ、絵ヅラがまんま暴れん坊將軍だな。美男美女の相乗りで、映画みたいにサマになってる。

『頼みましたよ……二人とも』

万が一だけど、私が湖底を抜くの失敗したら、城壁に漏れがあった場合数時間以内に床上浸水になる。城内の寝たきり病人をどこかへ避難させなきゃならなくなる。だから病人には薬花を飲ませて体調を少しでも改善してもらいたい。必ず全員、生き残ってくれ。全員生還のための可能性と確率は、少しでも上げておく。

さあ私も急がないと。

既に境界内を海抜（湖抜？）五メートルほど水が溜まってきている。住民全滅カウントダウンを改めて見ると、デッドラインが十五分後に延長されてるな。私が物理結界で堰き止めてるからだ。

私は先輩が投入した水晶球もどきを包囲して、湖面からじゃなく湖底から立て板を立てるように結界を張ってる。水が結界の下から溢れてグランダ水没してブクブクなるといけないからね。

てか先輩どこ行った？

そついや湖に落ちて沈んだまま浮かんでこない。泡も出てこないよ。息止めしてるなら息止めチャンピオンだ。

先輩は私との派手なバトルをご希望だったし、信頼の力も満タンだったからロイの神雷一撃でダウンしたと思えないけど、先輩は湖の中にわざと沈んでくれる。この隙に湖の水抜けてことだよね？ すみませんねロイメグとダベってモタついて。

水中で感電しないよう神杖と神体の帯電を解き、頭から湖に飛び込んで素潜りだ。もともと私、水泳は得意じゃない。現実世界ではクロールで五十メートル泳げるぐらい。今は神様ですからただけ無呼吸で潜ろうと平気ですけど、クロールの息継ぎって難しいよね？ ん？ 難しくない？ 泳げないの私だけでしたか恥ずかしいな。スイミングスクールでも行っときゃよかったよ。

……水は冷たく透き通っているけれど、嵐が来るからそのうち視界が悪くなるだろう。

インフォメーションボードは水中表示対応だ、さすがだね。水温十五度つて出てる。

透明度は高い、数十メートルの視界は確保できてる。海溝みたい
に深く、雲間から差し込む光芒は微かに湖面にも届いて、水は翡翠
色に輝き幻想的だ。空を飛んでいるような錯覚を覚える。イタリア・
カプリ島の青の洞窟だっけ、あそこの中にいるみたいだ。

そうだ、湖底を底抜けにする前に、先輩が投入した文字通りの「
水増しの水晶球」を破壊しとかないとね。解析によると、カラナ湖
は一周九十キロぐらいあるらしい。そんなにでけーのに対岸まで直
線距離十キロとか、水深が深いのもあるけど、グランダと私の民の
集落って実はお互い辺縁部に位置してたみたい。てなると、水量減
らせば干潟っぽく陸続きになって、後々仲良くできそうだな。

カラナ湖の総容積は百十億トン、ちなみに琵琶湖が二百億トンだ。
一方、私が貯水槽にしようとしている地下空洞の容積は有限だ。計
算すると、二十億トン入るか入らないか……つまりカラナ湖の総容
積の三十パーセント以上溢れさせちゃだめだ。湖底ぶち抜けば水位
下がってひとまず住民全滅は回避できても、グランダは床上浸水に
なる。

こんなこともあろうかと、うちの集落は高床式でばっちりだよ！

さあさあ、グランダの人らもこれを機に防災も兼ねて高床式へと
マイホーム建て替えようぜ！……とか言ってる場合じゃない。私
は水深の浅いうちに鼓膜が破れないよう耳の空気を抜く。水増し水
晶玉は下を見回すと、あっさり見つかった。だって昏い水中ですげ
ー紫色にテカテカ光ってるんだもん、ライトアップしすぎでしょ。

先輩、絶対隠す気ゼロだよな。ターゲット発見したし、潜水開始。
慎重にやらないと体が水圧でイカれる。知ってると思いますけど、私の神体って人間並みの強度しかないからね。

ブラックバスもどきの夥しい魚群をかきわけつつ、ゆっくりと素潜ること二分半、ようやく湖底が見えてきた……砂地になつてるのがよく分かる。水深は九十メートル……全方位から襲い掛かる水圧で、気を抜くと水圧で殺されそう。神通力で何とか体の内側から押し返してる感じ。体中がひどく痛むけど湖底まで辿り着き、水増し水晶玉を拾う。こいつだよ。

神杖を振りかぶり、湖底に向けて叩き割るようになると、あっけなく真つ二つに割れた。スイカ割りかよ。アメジスト色の輝きを放っていた宝玉の光は消灯。

インフォメーションボードによれば、水位上昇が止まったと同時に赤フォントのカウンタダウンが止まるも、緊急時画面は消えていない。

早く底を抜かないと私の神通力が尽き物理結界が破れ、カウンタダウンも再び動き出すって意味だ。

私は素潜りしたまま（泳ぎ下手だから）湖底を走ったり、ぴよんこら飛び跳ねたりしながら、予測ポイント、湖のほぼ真ん中へと近づく。このすぐ下に空洞があるって話だよ。

神杖でぶち抜けばいいんですけど……ですけど、その瞬間私も空洞の中に吸い込まれるしどうしよう。かといって気弾放つても地盤硬いし出力不足。私の足で蹴り抜くなんてもつてのほか、私がむなしく骨折するだけ。

どうすっかな……。何気なく周囲を見渡すと、五メートル×八メートルほどの大岩が湖底に不自然に鎮座していた。何か黒々しくて、そこそこ重そうなやつ。

いや、ここ砂地ですから不自然でしょ。明らかに周囲の環境と色が違うじゃん。映画のハリボテのセットみたいだよ。しかもゴロンと丸っこいし、私がギリ丁度良く持てるサイズ。持ち上げる為に便利な窪みもつけてある。ブリリアント先輩、まさかこれ……準備しといてくれました？

泣けた。

先輩がキララを苛めたり色々悪役演技しつつ、こんな重い岩をえつちら運んでそつと置いてくれたかと思うと泣けた。先輩には色々とお膳立てしてもらってるっぽい。縁の下の力持ちだよ。すみません何から何まで。無知で行き当たりばったりな私のために……。

西園さんに頼んで、今年の夏にはブリ先輩の自宅にお中元贈ってもらおう。そういや私、先輩のこと殺しちゃう設定だから、送るべきはお香典なのかもしれない。ダメか、不謹慎極まりないか。お中元にしよう。

やっぱり夏はそうめんだよね。つるつとおいしいよね。アイスコーヒーセットも捨てがたい。よそごとを考えながら、私はリコンストラクト（再構築）モードを開き、水の分解かけつつ炭素やら水中の窒素やら取り込んで、拳大の空気の塊を湖底近くに創出する。気泡は私の神通力によって湖底にトラップされ、水面に昇ってゆかずその場に留まり続ける。気泡はブルブルしてる、上に行きたそうだけど行かせない。

気泡の中に手を突っ込み、先ほど予約構築かけたいた、ある有機化合物を物質化し気泡の真ん中にセット。

「そこ動くなよお前！ 動いたらぶつ殺すぞ！」と、きつく念じておく。黒い結晶の化合物は凍結状態で、気泡の中にコロンとおさまっている。かわいい奴だ。

……実はかわいくないブツなんですけどね！

化合物入り気泡を底砂の三点に一・五メートル間隔ぐらいでピラミッド状に設置。別に魔法陣つくったりUFO呼ばうってわけじゃない。これでよし。

あとはこれを目印に岩を投下して湖底をぶち抜くばかり。不自然に岩肌に刻まれた窪みに手を差し入れ、大岩を力任せに持ち上げる。腰が抜けそうなほど重いけど、湖の底を抜く為には重くないと意味がない。今うまいこと言ったつも……はいはいスベリましたよ。ふんばって重量挙げのように腰に力を入れると、持ち上げられそう。常識的に考えて数十トンはあるっぽいけど、何トンか気にしたらへこたれそうだから敢えて情報収集しない。

『ぐ……ああああ!!』

怠けていた筋肉という筋肉が悲鳴を上げるのも構わず、全身から神通力を絞り出して力を乗せる。水面へ向け両手を突き上げると、水圧の抵抗と岩の自重に打ち勝ち、大岩は遂に浮揚する。湖底から十メートルほど浮いたところで、私は勢いよく湖底を蹴り急浮上する道すがら、ありったけの力を込め岩石を下へと蹴り落した。スピードと私の神通力を乗せて数十倍にまで重くなった岩が湖底に達する前に、私は湖面へと全力で避難開始。急な浮上で水圧変化に体が慣れず頭痛がするけれど、水面を突き破り、水しぶきを散らしながら空に舞う。

思い切り肺に大気を吸い込むと、嵐のにおいがした。

風はさらに荒れ、神雷ではない自然の雷もゴロゴロ鳴っている。風雲急を告げている。

さあどうだ、どうなる？ うまくいくのか。私が叩き落とした大岩は確かに十分重いけれど、加速度と自重を合わせても三層にもなる湖底の硬い岩盤や地層を貫通するにはまだ軽いかもしれない。祈

るような気持ちでインフォメーションボードを見守る。大岩が湖底に到達するまでの時間が表示されている。到達まで、あとコンマ数秒。

『発破！』

私が成功への願いを込めて叫ぶと、やや遅れてズシン！と湖底からくぐもった爆発音と地鳴りがした。

強風により湖面には既にさざ波が立っていたけれど、大岩の直撃と同時に生じた強い衝撃と大きく波飛沫が立つのを観測する。私の足元に大波が立ち、波は伝播し物理結界でせき止められる。インフォメーションボードを見ると、震源をキャッチしている。うん、岩は私が狙った場所にピンポイントで直撃していた。そして、湖底に構築し予めセッティングしていた三点のターゲットに見事命中したみたいだ。

そう、私がせっせと湖底にセットしていたブツはニトログリセリン（爆薬）の結晶体だったんだ。少しでも衝撃を加えると大爆発するあれだ。そして衝撃は確実に加わり、大岩のヒットよってベクトルは地下に向……いてくれるといいな。

あれ、でもちよつと変だ。ボードの情報によると衝突予測時間と衝突時間が一秒ずれる。

何でだろ、何か気持ち悪いけどまあいいや。

轟音と大振動が起こったため民を驚かせてしまったかもしれないけど、緊急時だし多少のことは仕方がない。

あれ？ ん？ 魚が魚群ごとすげー浮いてきた。

水面の魚たちに衝撃波がヒットして、ぶかーって大量に浮いてきたよ。

……お魚さんたちマジごめん。

生物環境保護の観点が抜けてたな、こうなるの忘れてたよ。でもごく一部の範囲にとどまった。よかったよ、まだ破壊神にはなりたくない。衝突予測地点から空気がボコボコと大量に出てくる。空気がこれだけ出てくるってことは、爆薬と岩が地層をぶち抜き、空洞に達したってこと……だよな。

巨大な気泡が猛烈な勢いで上がってくると同時に、水面には渦潮のようなものができはじめる。少しずつ水が渦の中に吸い込まれているのかもしれない。放っておけば水位が数センチずつ徐々に下がってゆくだろう。頼むよ……湖面を溢れて境界内に溜まった分だけでも地下空洞に溜まってくれたら、湖は元通りの水位を保てる筈なんだ。うまくいってくれ。

穴があくほど水面をガン見してたら、黒い大きな塊がぷかーっと浮いてきた。

黒衣を纏ったブリリアント先輩がお魚たちに混じって浮いてきた！
何で？

先輩、もしかして衝撃波をもろに喰らった？ 何か怪我してるっばい。水中に先輩のものと思いき血がじわりと滲み出てる。

だ、大丈夫ですか先輩？ 何でそんな発破現場に近づいたんですか？ せめて「安全＋第一」のヘルメットかぶってから近づいてくださいよ。発破フェチとかついていけませんよ先輩、水面を大の字になって漂いながら先輩が私に一言。

”狙いが外れてたぞ、赤井君。このノーコンめ。神が聞いて呆れるぞ”

えー……、つと？ さっきの衝突予測時間と実際の衝突時間との一秒の誤差って……もしかして私の狙いが外れてたけど先輩が水中

で軌道修正して、爆薬にぶつけてくれたんすか。

『ど、どうも……すみませんでした』

私は飛翔しながら先輩を見下ろし、思わず素でお辞儀して謝罪してしまいました。高いところからすみませんけど反省してるんです。先輩怪我してるし助け起こして治療してあげたいけど、私と彼は敵対してる設定だからダメ。

やばいなー失態ばかりで先輩に尻拭いさせて。お手数かけましてすみません。痛みはないらしいけど、絶対怒ってるよなー、いや呆れてるのか？

あ、先輩の黒衣がボロボロになってるし顔に巻いたターバンも緩んでちよつと先輩の顔の右半分が見える。はいはい金髪碧眼の美青年でしたよ。自分でブリリアント（輝くって意味だよ）って名前をつけるだけある、なんか神々しいよ。私が神なのに立場ないよ。しかも全然悪役っぽくない童顔だ……だから顔隠してたんかな。

”では、決着をつけるかね”

先輩は水鳥のようにぶかぶか水面に漂っている。全身黒で鵜みたいだな。先輩は早く戦いを始めたがってるけど、私のせいで怪我して体調万全じゃない。折角色々見せ場とか必殺技とか考えてただろうに、ちゃんと予め考えてた演出通りにできるのかな？

できなかつたら私のせいですよね。

お詫びのお中元何贈ろう。

第2章 第14話 赤井さんとブリ先輩のはじめての共同作業（後書き）

活動報告で領土図ジェネレータ様による公正なる地名抽選会を行ったところ、赤井さんの本拠地が「モンジャ」地方に決定いたしました。

腹筋崩壊しても異論は認めない。抽選ですからね・・・orz
ご協力、本当にありがとうございます！

第2章 第15話 赤井さんとグラランダの民の造反

【アガルタ第二十七管区第一区画内 第3346日目 居住者数
1861名 実質信徒数 16名（extra +219）】

インフォメーションボードが通常画面に戻り、久しぶりに現在情報が出てる。

居住者数〃私が解放した区画の人数みたいだね。インフォメーションボードの表示とか仕様もいまいち分からんけど、手探りで進めてくしかない。メグロイのいる私の本拠地が第ゼロ区画だとすると、二区画分の合計人数ってことか。実際に二十七管区に住んでいる素民は第二区画以降もつといるんだろうけど、今は非公開って感じでカウントされてないっぽい。

実質信徒数っていうのは、私に実際に神通力をくれている人たちの人数。私の集落の民たちの分はこの場所までは信頼の力が及ばず、含まれていないみたいだ。

そうこうしているうちに、カラナ湖には巨大な渦潮ができて湖面の水位は少しずつ下がってきた。空洞に水がうまく流れてくれて、あと十五センチメートル程水位が下がればカラナ湖は元通りになる。大丈夫だ、下流には川が出るから、これだけ水位が下がれば段々と川から水が逃げて、もうグラランダが洪水になることはない。

水中発破の衝撃で水面にぶかーっと浮かんでた魚介類がハツと我にかえり、ツイツイと水中に戻ってゆく。よかった死んでなかったよ、気絶してたみたいだ。寝耳に水な水中発破でギョギョとしただろうね、魚だけに。

魚さんらも渦潮に飲み込まれず避難してよ。

できれば無事に生き延びて、釣り好きの太公望たちに釣られてほ

しいからさ。

ブリリアント先輩は大漁、いや大量の魚介類たちの中で水鳥みたいに水面に浮かんでるけど、先輩もぼさつとせず早く起きた方がいいですよ。天然の巨大洗濯機のパワフル水流に飲み込まれますよ！……いや別に飲み込まれてくれてもいいですけど。

先輩はやおら起き上がり、私と同じ高度に浮揚する。水も滴るいい男だコノヤロー。飛翔の姿勢はピシつとして模範的だけど、なんか流血してますし私は心苦しいです先輩。

『よくも民をたぶらかし、毒気を撒き散らしおったな！ その邪悪なる魂、一片と残さず滅ぼしてくれろ！』

”はじめよう、そしてお別れだ”

先輩は声を張って、本音と建て前を同時に話す離れ業をこなしつつ悪役演技継続中。

私もだけど、先輩も二重カギカツコで喋ってるな。私たちの声、特に現実世界の人の声は直接相手の心に働きかける感じで伝わるんだ。二重カギカツコの人は基本現実世界の人だ。肉声とは異なる独特の感じが、民たちにとっては神秘的に聞こえてる。

私たちの二重カギカツコの声は恐らく無線電波のようなもんで、音波みたいに距離に依存して減衰しない。必要があれば、数百メートル離れたグラランダの人らにも会話の内容を伝えることができる。「離れてるからどーせ聞こえないだろう」って手を抜いたり、演技を怠るわけにはいかない。

わかりました、心苦しいですが戦いましょうか。

てなわけで私も、副音声つき二重カギカツコのセリフで演技再開。

『民を欺き裏切ったのはあなたの方です！ グランダで病に苦しむ

人々に、あなたは手を差し伸べなかった。その力があつたのに！
ならば私が彼らを救います』

”悪役って大変ですね、今までのご苦労が偲ばれますよ”

正直、手取り足取りブリ先輩に教えてもらいたかった。打ち解けて仲良くしなかったですよ。でも仕事ですから仲良くできない。悪役って大変でしょうけど、せめて現実世界のプライベートでは気分転換してくださいね。

『汝の毒に冒された民はもはや助からん、わが手で清めてやらざるまい！』

”なに、この仕事が無事に終われば次はランク2になれる。私はそれでいい”

何すかそれ！

先輩ランクアップするの？ 悪役採用じゃなかったんですか。私は最初からランク1の神様でしたけど。私、監禁勤務ですから全然アガルタのシステムわかんねーけど、ランク1以下の採用ではその役を無事にやり遂げたら昇進するってことすか。

『清める……？ どういう意味ですか。まさか……！』

”私は最初から甲種一級のハイロードなんですが、昇進があるんです？”

じゃあ先輩もいつかランク1にもなれるってことですか？ てかランク2って何の職種？ ……眉間に皺寄せて迫真の演技やりながら水面下ではのほほんと世間話してます私ら。混乱させるような会話してすみません。

『死をもつてな……』

”ランク2はアポストロさ、一般構築士はランク2どまりだよ”

『死をもつて!? そんなことは絶対に許しませんよ!』

先輩の悪役的挑発に適当に応じながらも、感心する私。一般構築士と一般じゃない構築士があるんですか知らなかったよ。私らって一般じゃない構築士の方なんですネ? アガルタシステム、てんで意味不明。でもアポストロフって天使とか使徒のことだ。悪役の次は天使役か……次は白翼背負って飛ぶんすか先輩!

ちよつとイタいけど絶対似合いますよ先輩美男ですし。先輩の人生って波乱万丈だなー。次こそ娘さんに自慢できますね! 「パパ素敵ーカツコいいー!」「ハハハどうだー! パパは天使だぞー!」ってな行くだりができますよね! よかつたじゃないですか!

”何言ってるんだ、私に子供はいないよ”

すみません妄想がすぎましたか。私は身元を明かすことができませんので連絡先交換もできませんが、またいつか、東京の街で巡り会えたらと思いますよ。

”そうだな……また、いつかな”

百二十年間、悪役でありながらも、たった一人で第一区画を発売させ守って下さってありがとうございます。第一区画が解放されたら、私の集落との急速な文化融合が図られ、文明が飛躍的に進むでしょう。助かりました、心の底から感謝しています、長い間お疲れ様でした。先輩のクランクアウト、いやログアウトのお祝いに行きたい。

積年のご苦勞を労うべく、せめてものはなむけ饞はなむけに先輩が最後を綺麗に散れるように尽力します。

『ほう、許さなければどうするといふのだ』

”バカ丁寧な神様だな、赤井君は”

ん？ けなしてるんですか褒めてるんですか？

『今こそ永久とこしえの命を授き神国へと導かん！』

あ、うつかりしてたら水面下で念話してるうちに先輩のキメ台詞が。なにになに？ 要約すると私の毒気から民を救うためにはグラランダの民全員を殺して神の国に連れて行くって感じ？ 滅茶苦茶な俺様理論だな先輩。それが天空神ギメノなんちゃらのキャラ設定なのか。

『我が神炎によって魂を清められし者は、我が命を受けん』
とか言っちゃってる。

というわけで先輩はグラランダの城壁に向け両手を突き出すと、問答無用で無数の火炎弾を放った。ロケットランチャーみたいに先輩の両手から火炎のミサイルみたいなのが飛んでった！ しかも私の物理結界を内側から貫通しての無差別絨毯爆撃。やや遅れて、被弾した城壁から爆音と黒煙が上がる。

何するんですか先輩！ 思わぬところから直撃くらって、城壁の上になっていた兵士の人たちが天空神のご乱心に大慌てだ。何人か火だるまになって熱さに耐えられず、もんどりうって貯水甕に飛び込む。

長い年月をかけ立派に築き上げた城壁も爆撃によって一瞬にして蜂の巣だ、先輩が城壁を築けとキララに命じたんだらうに、あんまりな仕打ちだよ。グラランダの堅固な守りも丸裸にされてはたまらない。城壁の上には泣きそうな顔をしたキララの姿も見える。

天空神こそが災いを齎していた邪神だったと、キララは今や確信を得つつある。厚く信仰していた天空神からの理不尽な火炎攻撃を受けては信仰心も挫かれるというもの。希望を絶たれ城壁に立ち尽

くす。神炎で焼かれ死んだ者は永遠の命を受け天国に行けるなんて言われても、誰が炎の中に身を投げるものか。

彼らは死後の平安を望んでなんていない。

生きたいんだ。この世界、この仮想死後世界アガルタで。

私は仮想の存在である素民たちの生に対する、いたいけなまでに強い執念を知っている。

「おやめください！ 天空神様！」

「ひいっ！ お許しを！」

兵士が泣き叫び懇願しても、先輩の爆撃は続く。それどころか高笑いをあげ、

『我が民は幸いである！ 救済の日は来れり！』

とか言いながら無差別爆撃中。女も子供も見境なしみたいだ、悪役に徹しすぎだよ。ちよつと乱射しすぎです先輩。

『なんてことをしたんです！』

てなわけで私は神杖に電流を通じ、火炎弾乱射中の先輩に真横から急襲をかける。受け身の態勢を取る様子がないので遠慮なく先輩の腰のあたりを狙い、最大電圧をかけつつフルスイングでドライバースョット。先輩の体がつの字に曲がり、一直線にグラランダの方に飛んでいった。

フアー！ とか言ってる場合じゃない。ミスショットだよ。

ショットする方向間違えた！ 私のミスショットでグラランダの方向に突進していった先輩。慌てて後を追う私。

先輩は吹っ飛ばされながらも、振り向きざまに私に火炎弾を散弾のように放ってくる。何だこれ、マリオカート……じゃなくて障害物競走かよ。私は飛翔で先輩を追いながら神風を起こし火炎弾の軌道を逸らす。やられっぱなしでは癪なので、気圧が不安定になった

雨雲から次々と垂直に電撃を落とし、先輩に逆襲をかける。グラ
ダからは天と地を繋ぐ太い電撃が目を射んばかりの眩さで、美しい
光の並木道のように立ち並んで見えるだろう。水面を走る湖面全体
が光の湖のようだ。どうすか先輩、ド派手演出っしょ？

何発かは先輩に直撃した。下手な鉄砲でも数撃てば当たるもんだ。

とか得意げに電撃を落しまくって水面をはつと見ると、お魚さん
たちが魚群ごとぶかーって浮いて……。

さつき反省したばっかなのに、一度ならず二度までもマジごめん
もう私、魚介類たちの間では破壊神として名を馳せちゃうかもし
んない。

あとでお詫びの気持ちを込めて、カラナ湖の水質浄化とか周辺の
緑化とかお子さん（稚魚）たちの養殖と放流とか積極的にやります
から許してください。

一方、グランダの城壁周辺では懸命の消火活動が始まっている。で
も前述の通り、構築士が灯した炎ってのは夕チが悪くて人間には消
火できない。先輩の炎も同じだ。なんなら消そうとすればするほど
延焼する。高々と黒煙が立ち上り、グランダの民たちの悲鳴が聞こ
える。

キララも最前線に立って防火用の水甕を持って来いだの、建物を
壊して延焼を食い止めるだのと兵士の人たちに命令を飛ばしたり、
彼女自身も巫力で何とかならないか試みてる。けど、やっぱり徒労
に終わる。キララは巫力で多少炎を操ることはできても、先輩の大
火炎の前には成すすべもない。

しかも先輩の思いのままに火力が遠隔操作されている。たちまち
のうちに炎は広がり、ついにはキララと護衛の三人の兵士の人たち
が炎と煙に巻かれ、その場に蹲った。

彼らグランダの民たちが失意に満ち抛り所を失ったとき。

火の海の中に取り残されたキララや兵士たちを助けるため、一人の青年が炎の中に飛び込んできた。青年の登場と同時に、白い半透明の壁が幅数百メートルにもわたってベールのようにグランダを守り、先輩の火炎弾は弾き返される。

城壁一面に当座の物理結界が展開された。それは頼もしくもあり、壮麗な光景でもあった。そっか、物理結界って内側からの耐久性は弱いけど、外側からのベクトルには強いんだっけ。

「ここはお任せください！」

そっぴやいたよ！

人の身でありながら先輩の邪悪な力に立ち向うことができる人間が！

『ロイさん！』

そう、ロイだ！ 彼が雄たけびとともに神通力を通じた槍で炎の舌を薙いでゆくと、たやすく鎮火する。私の力を受け継いだ人間なら、同じ性質を持つ炎を手なづけることも容易い。

ん？ ところで何でロイが神でもないのに物理結界が張れるのかって？ 神通力の出し惜しみをしなければロイにも結界張れるよ、猛烈な勢いで神通力消費しますけどね。この一年間はケチケチ使ってたみたいだけど、ピンチだからロイも神通力を湯水のように使ってる。さらに彼は先輩の火炎攻撃を防いだばかりでなく、神通力を込めた熱い空気弾を天に放った。音速を超えて空気弾を打ち上げたため、パンと大きな炸裂音が鳴る。あれだ、運動会の空砲みたい。雨雲を刺激し、局地的な集中豪雨を降らせるつもりだ。しっかし手慣れてるなー、構築士顔負けだよ。

モコモコと上空十キロにも達する積乱雲を地上から器用に成型し、雨の降らせ方も分かっている。多分降水の原理も分かっているんだろうね。ロイは私の秘蔵っ子ですから、文武両道デキる超人だ。インフオメーションボードも持ってないのにすげーよ。局所的集中豪雨が猛烈な勢いで降りそそぎ、グランダの城壁沿いの大火災をたちどころに鎮める。

人ならざるものの力を孕んだ雨は、邪悪なる炎にも打ち勝つ。雨はスコールのように降ったかと思えば、ぱたりと降りやんだ。

「ロイさん、見事です！」

ロイは古代人なのに、今や理論的思考能力もあつて体力もあるし度胸もある、有能すぎる助っ人。私とロイの関係は、神と人間といった他人行儀なものでもなく親子関係に近く、ロイの父親のつもりだ。だって彼はもともと身よりがなかつたし、彼が本音を言つて甘えられる存在は私だけだったし、私も彼を人一倍愛情をかけて育てた。

とはいえ、ずっとお互い敬語ですし彼は私に膝まづいてましたけどね。十分よそよそしいか……仲いいとか思つてるのは私だけかも。

ところで頼りにしていた城壁が敢え無く陥落したグランダの一般市民の反応はというと、爆撃によってできた風穴から顔を出して悲鳴を上げている。先輩がグランダに炎を放った瞬間を目撃したからだ。そう、天空神がグランダの民を裏切ったその瞬間を。そして同時に、ロイがグランダを救済した、その一部始終を見届けた。

「信じられない！ 天空神様がグランダを……」

「邪神は洪水から我らを守り、さらに邪神の使いもグランダを炎から守ってくれたぞ！」

「なぜ天空神様が我々を滅ぼそうとしている！ 滅びを呼ぶ邪神からグランダを守ってくださる筈では！」

「救済して下さるといったって……それが死後では意味がない。我々はまだ、死して天国になど召されたくない！これは違う……伝説とは真逆だ！」

混乱した民たちの怒号が飛び交い、彼らも何が起こったのかと野次馬気分で城壁のあたりに押し寄せきて情報が錯綜している。そして彼らはロイに質問を浴びせる。

「おい、邪神の手先！ どういうことなんだ！」

「あれはグラランダに災いをもたらし、人の肉を食み生き血を啜る邪神ではないのか!？」

奇跡を見せた異国の青年。彼は邪神の手先呼ばわりされても気を悪くしない。狼狽した兵士たちに対し槍を握ったまま無造作に長髪をかきあげ、落ち着いた様子で一言。

「彼は邪神ではない、よい神様だ。もし邪神がいるのだとすれば人違いだろう。俺たちは幼いころからずっと神様によくしてもらった」
「なんかロイがさりげなく私をフォローしてくれてる。ええ子や……」

『さあ来い！ 邪神よ!』

慣性のままに飛ばされていた先輩はグラランダの上空で急ブレーキをかけ、私を待ち構えていた。

下にグラランダがあるのにその上空で神々のバトルをやるつもりか……犠牲者が出そうだ。

「う、上だああ!！」

「逃げる！」

先輩と私が真上に来たので、城内に避難してた人々は大慌てだ。下を見ると、ロイが具合の悪そうなキララに肩を貸して立たせてあげていた。二人ともまんま外人俳優。なんかゴールデン洋画劇場の

アクション映画とかで見たことある絵ヅラだな。そしてそんなキララに伝達係の兵士の人が何か報告してる。

「スオウ様、ご命令どおり邪神の使いが持参した薬花を病人に飲ませたのですが……」

「どうなつた!？」

キララはずっと彼女の民のことを憂いていたから、心配だろうね。だって彼女、民のために心も身体も傷ついてきたから。

「そ、それが信じられないことに！ 痛みが和らいだと申ししております」

あのクリーム色のやつは消炎鎮痛効果があるからね。でもちよつと即効性すぎるだろと思つてたら、どうやらロイが神通力含ませていたみたいだ。

ロイ、グッジョブGJ。

神通力を込めることによって、さらに炎症症状を緩和させることができています。そして兵士が指差す先には、クリーム色の薬花を皆に配ってあげているメグの姿があつた。メグの周りには人垣ができ、われ先に薬花を手に入れようと小競り合いが起きている。花を受け取り苦痛が和らいだ人々はメグに懇ろにお礼を述べている。

「本当にありがとうございます!」

「もう苦しくないのです！ 天空神さまでも癒せなかつたものが！」
メグの手でグラランダに齎された薬の効果は、病苦に喘ぐ人々によつてただちに確かめられた。

『その女を、民を惑わす邪神の使いを殺せ』

先輩は突然、彼らにメグを殺せと命じた。メグの慈善事業が気に食わない様子だ。メグの周囲に群がっていた民衆は互いに顔を見合わせているが、幸い、先輩の命令に従う者はいない。そう、メグは彼らの恩人なんだ。どうして病の苦しみを和らげてもらった恩人を

手にかけられる？

大勢に囲まれたメグはくるりと周囲の人々の顔を見渡すと、何か意を決するように小さくひとつ頷き、凜とした表情で先輩を見上げた。黒衣のグランダの民の中に、紫と黄色のストライプの少女。隠れたとしても目立つが、彼女は逃げも隠れもしない。

「私は邪神の使いなんかじゃない……あかいかみさまは、邪神なんかじゃないよ！」

いつになく強い口調で、メグはきっぱりと言い放った。内気でシヤイで泣き虫で、自己主張の苦手だったメグ。でも私の汚名を濯ぐために、声を張って精一杯弁護をしてきている。先輩に楯突くことよって、身に危険が及ぶことも省みず。ちよっと感動しました私。

「その女性の言う通りだ！ 天空神ギメノグレアヌス」

メグを庇うように、一人の男性がメグの前に立つ。ナオのお父さんだ。グランダの民が天空神に物申すのはやっぱり怖いんだろう。声は勇ましくとも、手がブルブル震えている。それでもお父さんは勇気を振り絞り、思いのたけを先輩にぶつける。

「赤い神様は満身創痍であらせながらも妻を救ってくださいました、異国から来たこの若い二人もそうだ。スオウ様もあなたを信じてずっと従ってきた。私たちもだ。なのに、あなたはスオウ様に死を命じ……そしてグランダの民には死して永遠の命を？ ふざけるな！

私はもうあなたを信じない！」

大きく息を吸って、お父さんは一気呵成に言葉を続ける。

「私たちが生きたいのは、来世ではなく現世だ！ グランダに死をもたらずあなたこそが邪神ではないか！」

苦しみぬいた彼という一人の民の、魂の咆哮。お父さんは言い切つて肩で息をしている、口が過ぎたのは承知のうえだ。それでも彼は面と向かって天空神を謗った。当然、報復を受ける事も覚悟のう

えで。

『邪神の毒気が全身に回ってしまったようだな。哀れな男よ』

先輩は冷たくそう言うと、お父さんにすつと指先を向けた。

『危ない！ 逃げてっ！』

お父さんを守ろうと私が急降下し、ロイが上空に結界を張ろうとした頃には既に手遅れだった。先輩が上空から炎の矢で、ナオのお父さんの右胸をストンと射た。何の躊躇もなく。

「あ……赤い神様は私たちの信頼に”報いて”下さった、でもこれがあなたの”報い”なのか」

黒い貫頭衣の裏から鮮血が勢いよく飛び散る。捨て台詞を吐きながら、お父さんがよろけてぐらりと崩れる。

炎の矢が彼の体を貫通し、お父さんの右肺を貫いたのを、私は確かに見ていた。ストロボ写真のように、私の瞳はお父さんに起こった出来事の一部始終を克明に捉えている。

「お父さああん　！」

次に、聞こえてきたのはナオの悲鳴。私は民衆の中にふわりと降り立ち、地に沈もうとしていたお父さんを優しく抱きとめる。肺に穴をあけられて、お父さんの右胸に耳を当てるとヒューヒューと聞こえる。直径三センチぐらいの穴があいてるよ大変だ。左肺があるから直ちに呼吸困難にはならないけど、彼は痛みでのた打ち回っている。

「ぐああああっ！」

絶叫を間近に聞きつつ、お父さんの貫頭衣を剥ぎ取り、直ちに応急処置を開始。

「あかいかみさま！　これを使ってっ！」

メグが木綿の赤い小袋を私にパスしてきた。赤い巾着の中に入っていたのは……赤い薬花。痛み止めだ、ナイスメグ！　すげー助か

る。用意がいいな。

『助かります、メグさん』

とりあえずお父さんに赤い花を噛ませると痛みが和らいで大人しくなり、治療しやすくなった。先輩は一応手加減して攻撃してくれてたみたいだね、だって殺すつもりなら左胸を射てるでしょ。

傷口はやはり右肺を貫通している。こんな風に肺に穴が開いて外の空気に曝された状態を気胸ききょうというんだけど、肺の内部ってのは外気圧より低いから、肺の中に空気が吸い込まれていく。気胸になると息苦しくてたまらない、私は神通力を癒しの力に変換し、まず彼の背の創傷を閉じる。

『息を止めて』

私はそう言うと彼の右胸の傷口に口づけをし、思い切り傷口から肺の中の空気やら血液やらを吸い出すと同時に治療術をかける。本当は感染症予防のために私の口の中消毒してからやりたいけど、神様は穢れないらしいから多分清潔だ。

治療法間違ってるかもしれないけど、胸腔きょうくうドレナージのつもり。普通は清潔な医療用チューブとかでゆっくりと肺の空気抜くんだらうけど、今はそんなこと言ってられない。治療術によって傷口が塞がるにつれ、お父さんの息の音は何とか元に戻った。

私の口の中もお父さんの血でいっぱいだ、おえー気持ち悪い。と、地に血を吐き捨てた頃には、大きなどよめきが起こっていた。

「奇跡だ……邪神が男を癒したぞ……」

「絶対に助からぬと思ったが、蘇よみがえらせたぞー！」

「邪神が我らを救ってくれるのか」

ざわざわとざわめく民衆たちの声が聞こえていた。戸惑いと、そして大きな期待が私に、吸い寄せられるように集まってくるのを感じる。一粒ずつの、ほんの僅かな水滴が集まるように。

やがてそれらは大きなうねりとなって！

「あ、ああ赤の神様、こんなとるに足らぬ私のために。か、かたじけのうございます、ゴホ、ゴホッ」

『ああつ、まだ喋ってはいけませんよ』

お父さん、私にお礼を言うのを忘れない。分かったからちよつと黙っててね。まだ肺にいくらか血が残ってるし噎せるんだから。無茶しすぎだよ。

「この方は、邪神ではなかったのかもしれない」

誰かがぼつりとそう言った。

「そうだ、そうだ！」

あ、あれ？ なにこの空気？ 奇跡を目撃したグランダの民から寄せられはじめた熱い思いを私は肌で感じ取っていた。力が漲ってくる。その力の正体は、生への渴望とも言うべきか。インフォメーションボードを見ると、先輩の有効信徒数が私に少しずつ流れ込んでくる。

私のいた現実世界には寿命なんてあつてないようなものだったし、死んでも記憶だけでアガルタに入れるから、命を惜しむということを知らなかった。何となく人生を消費していた。生きているか死んでいるかも分からないような顔をして。

でもアガルタでの出会いは一期一会、どんな別れも辛い。

この仕事に就いて得た糧は、現実世界では絶対に得られない。

等身大の己が命を燃やし尽くそうとしている、彼らの姿が眩い。

よって必然的に。静かなる造反は起こっていた。

いや、私はお父さんの傷を癒したただけなんですけど、先輩の非情さが引き立ってすげー効果的な演出になっちゃってる。先輩、完璧に計算づくだな。つまり先輩はわざとグランダの民を攻撃して、先

輩の手持ちの有効信徒を削ってくれてる。

グラランダの民が先輩に寄せていた信頼をゼロに近づけようとしてるんだ。グラランダの上空で戦おうとしているのもナオのお父さんを傷つけたのも、グラランダの人々に天空神ギメノなんちゃらこそが邪神だったと気付かせるための演出。最も手っ取り早く、そして強い信頼がある状態で私に信徒を引き継ぐ方法。

そして実際に、邪神からグラランダを救ってくれと、祈るような気持ちでグラランダの民が私に信頼を預け始めている。

先輩……極悪だけいい人すぎる。何から何までありがとございます、心の中で感謝していると、先輩が私に一言。

”なあに。ログアウト（旅立ち）には身軽なほうがいいのさ”

どこまでも渋い男っすねえ。童顔のくせに。

第2章 第15話 赤井さんとグランダの民の造反（後書き）

感電してプカーっとなった魚介類たちは、スタッフがあとでおいしくいただきました。

第2章 第16話 赤井さんとスーパーセルとロイの激昂

【アガルタ第二十七管区第一区画内 第3346日目 居住者数
1861名 実質信徒数 351名】

私がナオのお父さん（本名クレイ）の負傷を癒してあげたので、グランダの人たちは私を徐々に信頼してくれている。これって先輩の粋な演出のおかげなんですけど、私の有効信徒数がうなぎのぼりです。やり口が老練で手練れてる。まさか先輩の中身って脂の乗り切った四十代とか？ 私は行き当たりばったりですので、すげー助かります。

グランダの街の上空から私たちを見下ろしていた先輩、嵐によって不安定になった空に両手を高らかに掲げた。そうかと思えば、分厚い雲に向けてズドンと熱い大気の渦を穿ちこむ。

一見、ロイがさつき雨雲を呼んだのと同じ方法に見えるけど、やっぱり熟練構築士がやると威力が違う。先輩が空にぶっ放した空気の容積は、何十トンかありそうだ。雲に鉛直方向の大穴があいてドーナツ状、台風の目みたいになってる。

何が起こるのかとインフォメーションボードを注視していると、先輩の投じた一撃で周辺の気圧が急激に降下してゆく。……もう十ヘクトパスカルも下がっちゃった。局所的低気圧の生成か。さすがは先輩、低気圧生成なんて私にもロイにもできない高等テクです。グランダの存亡を脅かす天災の前触れ、壊滅的な被害を与えそうな予感がしますよ……。

「雲の渦がこっちに近づいてくる！ 嵐がくるぞ！」

誰かが怯えて叫んでいる。平静を装いつつ内心慌てる私と、大声で喚き散らすグランダの民を、先輩はお手並み拝見とばかり悠然と

見下ろしている。

グラランダの街の中にある軽い物質から順に、暴風にさらわれ吹き飛ばされてゆく。最初は土埃が巻き上げられ、やがて小石がピシピシと肌につかって痛い。目に埃が入って泣きべそをかく民も続出。子供は天変地異の連続にギャーギャー大泣きだ。遂には小さな礫なども空へと巻き込まれ、危険極まりない暴風域を成している。雨も強くなってきたし、雲が段々と垂れ下がってくる。激しい落雷を伴う豪雨となりそう。私は横殴りの雨に打たれながら、どうしたものかと不安そうなグラランダの人々に警戒警報発令。

『暴風雨が強まっています。飛来する礫に気を付けながら各自家に戻り、戸締りをして絶対に家から出ないでください！』

台風が来た日の引率の先生みただよ。

対流層の分厚い雨雲が、先輩の強い上昇気流で刺激されますます活性化してやがる。巨大マツシユルムみたいなキノコ雲がもくもく成長中。

デカっ！ デカいなんてもんじゃない！ あまりの大きさに全貌はわからんけど、情報によると直径十五キロ、高さ十キロぐらいあるみたい。しかもマツシユルムがゆっくりと水平方向に大回転してますけど……何かこの雲、変すよ先輩！

インフォメーションボードを手元に引き寄せ、超巨大積乱雲にアナライズ開始。解析して三秒ほどすると、^{スーパーセル}Super cellの文字がでんと出ました。

スーパーセルってなんぞ　　！？

名前からしてもうヤバイ。雲のラスボスみたいなやつすか。

あいにく私、気象学は門外漢。現実世界では世界気象管理機構（

WWO)の気象管理士たちによって世界気象はマイルドに管理されているから、嵐や台風、異常気象には全然なじみがないし、気象による災害なんてもう過去の産物。旧世紀の衝撃映像特集とかで見たことあるぐらい。中学校の道徳の時間でそういうの習ったよ、当時の人々の不便な暮らしと災害による被害に、当時は大変だったんだなーと思いを馳せたりしたっけ。そっぴや感想文も書かされた。

でもここは森羅万象、自然の力が荒ぶる原始時代。自然の猛威に私一人では立ち向かえないけど、知識と諸解析ツールがあるだけましか。で、先輩のスーパーセルは小規模低気圧を伴う巨大積乱雲でメソサイクロンす、って結果になってる。

もう既にわからんけどそれって積乱雲のバケモノって解釈でいいんだよね？ 解析画面にはスーパーセルが起こす、上から吹き降ろす暴風の風速値も出ている。風速、九十メートル……百メートルに達してる。ちょ……何すかこの風速、台風も裸足で逃げ出すって！ マツシユルム型の雲の底が渦を巻きながらグラランダに向けて漏斗状に徐々に垂れ下がってくる。どわーこっち来ないで！

これ、垂れ下がってくる漏斗状のマツシユルム雲が地上と繋がったら巨大竜巻みたいじゃね？ まさかこれ竜巻雲なんですか？！

北アメリカ大陸っていうと昔は竜巻のメツカでしたもんね！

言われてみれば先輩カナダ人ですし、郷土を思い出してやりたくなる気持ちはわかります。

でも手加減しましょうよ！ だって二十一世紀くらいの高度な建築技術で建てた家ですら吹っ飛ぶ威力なのにグラランダなんて絶対壊滅ですよ。竜巻に家ごと巻き込まれるとか……オズの魔法使いじゃないんだし家屋も住民もオーバー・ザ・レインボーとかやめてくだ

さいよ！ 素民たち脚遅いし竜巻から避難できませんので、先輩がご希望してる旧世紀の衝撃映像百連発みたいなスリル映像撮れませんって！

「アカイの言うとおり避難して、絶対に家から出るな！」

「スオウ様、あなた様もお逃げください！」

キララも民たちに命令してるけど、グランダの民たちはキララの言うことをよく聞くみたいだ。驚いたよ、だって天空神のことは裏切っても、キララにはまだ親愛の念を抱いているわけだから。彼女が民たちのためにどれだけ心をくだいていたか、つてのを皆知っているんだろうね。泣ける話だ。民たちの代弁者の女王様って意識があるみたいだ。

というわけでグランダの民たちはキララの言うことをきいて各々の家に大慌てで避難し、私は目下現実逃避中。大混雑の末、干潟の汐がひくように人々が家に逃げ帰ってゆき、その場にはメグ、ロイ、キララと及び腰になった数人の兵士たち、ナオとナオのお父さんが残っている。

『ナオさん、クレイさん、キララさん。あなたたちもどこか安全な場所に隠れて。メグさん、ロイさんもどこか民家に入れてもらって』

メグロイは家に避難できないから、ナオのお父さんともでもいい。彼らも家の中に入れてあげてくれませんか。でもキララは聞く耳持っていないしロイもメグも避難する気ゼロ。特にロイに至っては「もう守られるだけの子供じゃないやい！」とでも言いたげな顔してる。二人とも背伸びしたいお年頃か。同い年っぽいしな。スーパーセルを目の当たりにしたロイが表情を引き締め、雲底を見上げ私に判断を仰ぐ。

「不吉な雲ですね。いかがなさいます、赤井様だけの力でこの嵐を鎮められますか」

『力は及びませんが、やるしかありません』

って言うてたら。うお！ 背後からいきなり誰かひしつと抱き着いてきた。びくつとしたけど、振り向かなくても誰が抱き着いてきたのかわかる。この温かな力の波動、メグだ。

「あかいかみさま。私、まだ力をあげられてる？」

私の背越しに、メグの体温と彼女の信頼の力が浸透してくる。彼女、私の腰にしがみついてぎゅつとしてくる。力が足りないと言ったもんだから、律義に信頼の力を私の神体に直接伝えてくれてるみたいだよ。嬉しいよありがとうね。そりゃ、空気を介して間接的に力を送るより接触して伝えてもらった方が力は伝わるに決まってる。メグは素直だな。

『ええ。メグさん、あなたの力を感じていますよ』

「私がかみさまにしてあげられること、これだけだけど。どうか無事で皆を守ってって、心を込めて祈っているんだけど、伝わっているかな」

彼女と別れて一年経っても、メグには相変わらず邪心がない。いい子なんだけど、ちょっと純粹すぎて心配になるぐらいだよ、誰かに騙されたり裏切られたりしなけばいいんだけど。本当に打算のない子だから、心配になるのは親心だ。もつとしたかに生きていいんだよ、と言いたくなる。ぶきつちよだから、できないんだろうけどね。

メグの心の主成分って良心と相手を思いやる心なのな。

それが私にとってすげー心地いいの。

「お、俺も！」

ロイも負けじと正面から抱きついてきた。万力みたいに前後から

の抱擁で人間サンドイッチだ。私すげー幸せだけど、先輩が攻撃仕掛けてきたら無防備極まりない。勿論離れますよ、でもあと五秒だけね、五秒だけ！

「何を呑気に遊んでいる！」

んで、三人でイチャついてたらキララに怒られました。

キララはいつの間にか弓と矢筒を背負って長剣も二、三本腰に下げてる。完全武装してるつもりなんだろうけど、何かどっか抜けてません？ グランダの民は鎧を着るって発想ないのか。まず急所守るつしょ！ キララは遂に先輩を見限るのかな、先輩に弓引こうとするなんて相当根性あるよ。

「彼らが私に強い力をくれているのですよ。あなたこそ何をするつもりですか」

「天空神様を止める。差し違えてもだ」

そうでしょうね、装備からしてそうでしょうよ。キララに刺激されたロイも戦闘に志願する。

「赤井様、俺も一緒に戦います。あなたは俺たちの集落にいた頃のように万全ではありません」

ロイは私の状態を分かって、心配してくれてる。でも戦い以外のことで手伝ってよ、私と先輩は一戦やり合うにしても段取りつてものがあるからさ。

「あなた方は他のことで手を貸してください。キララさんは精錬所の全ての炉の火を落としてください、あと、燃料を水底に沈めて」

先輩との戦闘によって、もしくは竜巻によって精錬所が破壊されればグラランダが確実に火の海になる。グラランダは城壁に囲まれているから、きつと風が内部で回って火災があつという間に広がると思うんだ。その際に、溶炉が壊れたりしてまた出火すると被害が拡大するから、明らかに燃えそうなものは全て水に浸けて延焼を食い止め

てほしい。

彼女は為政者だから精錬所と高炉がどこにあるって分かっている。炎の扱いも心得てるからキララが適任だ。

『そしてロイさんはここで物理結界を展開し、建物の被害を最小限に食い止めてください』

「承知いたしました、赤井様」

ロイは聞き分けがいい。

「私は？ 私も何か少しでも手伝いたいです」

私の背中から遠慮がちなメグの声が聞こえた。メグも何かしたいみたいだ。メグには、キララをエドに乗せて金属精錬所に送ってあげて、そのあとは重病人の介抱をお願いしますと言いつけた。メグも嬉しそう、「はいっ！」と返事がいい。

ところが肝心のキララは不服のようだ。

「待てアカイ、そんな雑事はどうでもいい。余も残って共に戦うぞ」

「あかいかみさまの言うとおりにしよう？ 早く！」

メグはつべこべ言うキララの手を引いてエドの背に引き上げてようとしても、キララは抵抗する。

「ええい、その男！ 汝が炉の火を消しに行けばよからう！」

「ええっ！ 私がですか？」

ナオを負ぶって、おろおろと私たちを遠巻きに見守っていたクレイさん（ナオのお父さん）にキララの指名が飛び火した。

「早く、誰でもいいから急ごう！」

結局メグとキララはすったもんだした拳句、キララではなく急に無茶ぶりされたクレイさんとナオをエドに乗せた。メグもひらりとエドに飛び乗る。キララが乗っていなかったので、ロイが無理やりキララをエドの尻に乗せた。

ロイがエドの尻をパンと叩くと、エドは「ガオー」とか吠え唸りながら勢いよく路地へと走り去って行く。なんか虎の声に似てたな、あの謎動物。エドはでかいから、四人乗ってもびくともしない。オレンジの皮膚してるし、そのうち私特製の毛生え薬でモッフモフでシマシマなオレンジの毛が生えるようにしてあげるとしよう。あとでね、あとで実験材料としてゲノム改変で魔改造してあげるからね……フヒヒ。とか一人でマッドサイエンティストごっこやってる場合じゃない。

「赤井様、ところであの奇妙な雲はどうして風を巻き上げるのですか？」

『上空と地上との間の温度差によって気圧の差が生じ、上昇気流が起こります』

ロイを私の身体から引き離しながら答えた。

彼、また隙あらばと私にしがみついてました。変な意味じゃなくて私に神通力をくれようとしてるんだろうけど、女の子のメグに抱きつかれるのは平気でも、ロイはなんかガタイのいいガチムチ青年だから真正面から何度も抱きつかれると無理。男女差別ごめんね。ロイは私が素っ気ないのでちょっと寂しそう。それはとにかく。

「温度差？ ……温度差であるようになりますか。気体は溶液と同じ振る舞いをするのでしたよね」

ロイはぶつぶつと温度差という言葉を繰り返した。

ん？ 流体力学が気になるお年頃？ そっぴいやロイも17歳だ、現実世界では高2だよな。ロイ、物理学も好きなんだろうけど、あまり教えてあげていなかった。だってアガルタ二十七管区って現実世界の物理学通用しないみたいだ。彼は得た知識はすぐ応用しようとするから、下手に教えて間違ってたら恨まれそう。

ロイのことはともかく、先輩を止めないと。

『ここはあなたに任せます。ですが決して無理をしないように』

「承知しました。赤井様、せめてこれをお使いください。こちらの方が切れ味も鋭い」

ロイは彼の自慢の槍を私に手渡そうとする。槍は鉛色で三メートルほどの長い金属の柄、刃渡り五十センチ、幅六センチほどの木の葉型の長い刃物がついてる。これスピアっていう西洋槍に似てる、スピアって中世ちよつと前ぐらいの槍じゃなかったっけ？　ロイ個人の知識・技術レベルは中世に進んじやったみたい。もつと未来の地層からこの槍が発掘されたらオーパーツとか言われちゃうレベルだ。

皆はちんたら弥生時代やってんのに出木杉君だよ。

『ロイさん、私は相手に刃物を向けるつもりはありません』

これ、私のポリシー。神様は武器持ちませんよ、平和主義者ですからね。

「では、絶対に負けないと約束していただけますか？」

彼は真顔でそんなことを言いだした。ロイが私を試すような言葉を投げかけたの初めてだ。私は面食らって返事ができなかつた。そこでロイはすかさず

「確約できないなら、強がらずこれをお持ち下さい。あなたならわかるはず。まず折れません」

『確かにそのようですね、でも何と言われても私は武器を持ちませんよ。それに私は死にませんしね、大丈夫ですよ』

だって、先輩が負けてくれるっていう八百長シナリオですから。槍とか持たなくても全然楽勝。それに先輩を切り刻んで空から血の雨が降ってきててもグロくて困るでしょ。

てな感じで、ロイを安心させるようにほわつと彼に微笑んでたら

……

「いい加減にしてください！ 何を生ぬるいことを仰っているんです！」

……ロイに舌打ちされ、声を荒らげられた。ぎゃーロイがいきなり切れた！ この子キレる子だったっけ！？ 初めてだよ。今更ロイが反抗期だよ！

「たとえ不死身でも、万全を期して臨まなければ敗れる確率が高まる。死せずとも負ければあなたもグラウンドも俺たちの集落も窮地に追いやられる。あの者の力は強い、俺にも分かるほどに。あなたが敗北したら、この世界はどうなるのです。あなたの自己満足とくだらないこだわりの為に、勝機をむざむざ捨てるつもりですか！ そこから何が得られるというのです、俺は利点を見いだせない。したがって、あなたに敗北は許されません」

ちょ……何て隙のない論破。そこまで言う？

ブラウンの瞳が闘争心剥き出しで怖いよロイ。エドと戦いすぎて好戦的になったのかな、外見もですけど、マッチョですしワイルドすぎでしょ。それに何で私が君に怒られないといけないのよ。鼻たれ小僧だった君が今や私に説教ですか。あまりの剣幕にたじろいでいたら、駄目押しのようにきつく言われた。皮肉とか言う子だったっけ？ ひねくれたのかな。

「そんなに軽かったのですか？ あなたの思いは。挫かれてどうするんです。あなたはこの世界を創りあげてゆく神様で、そのための強い志があるのでしょうか。ならば負けしないでください、俺はあなたが負けた姿など見たくない。手段を択んでいる場合ですか！ ここまで終わりにしないでください」

でも……その棘のある言葉は全て、私を心配してのことだとわかった。

思いを込めた言葉はそれと相応の、質量を持っているのだろうか。一言一言が胸に重く響く。ロイは以前の、私の言葉を忘れていなかった。確か私はロイに、この世界を創り上げてゆくつもりだと言ったんだっけ。あのくだりを覚えてみたい。そして私の拓く未来へ私と共に歩みたいと願うけなげな心が見える。私あくまでも仕事だから構築やつてるわけで、強い志もへつたくれもなかったんだけど。言えるわけではない。

「世界を創りあげてを、諦めないでほしいんです」

正義の神様やつてる私の中身がすげー適当な人間だって知ったら、幻滅だろうね。その時私が彼に対して懐いたのは、焦燥感だったのかもしれない。この胸騒ぎは、初めて彼にライバル心を懐いた証拠なのかな。きつとそうだ。

私たちが出会ったとき、彼はうんと子供だった。ずっと子供扱いしてかわいがって、下に見ていたロイだけれど、彼はもう清濁を併せ呑むことができる大人になったんだ。そう遠くないうちに彼は心身ともに成熟し、二十二歳の私の心を追い越してゆくのだろうと分かった。

そして彼は私の人生とすれ違ってゆく。

彼らは仮想の中に生き、そして仮想の世界に死ぬ。現実の世界がどのようなに在るのかも知らずして。

私と彼の間の精神面の差はもう感じられず、純粹なだけの少年で

はない。もう、彼を子ども扱いしてはいけないんだ。彼らは人工知性であり仮想世界の住人であつても、体も心も成長してゆく。現実世界の人間が彼らの信頼を得ようとする為には、一歩先を歩もうとする強い意志と。たゆまぬ努力を必要とするんだ。

ふと、私は怖くなった。

私は神様として、いつまで彼らを失望させずに演技を続けられるんだろう。演技ではなく本物の神様になるぐらいの意気込みでやつても、一体どこまでやれる？

今のままではいけない。私もまた、変わってゆかないといけない。

私はこれから先輩と戦うけれど、八百長で必ず勝つと分かっている精神的に余裕がある。でもロイは事情を知らない。この違いは私と彼との間で際立っている。私がアガルタに入ってから九年、文明を進めようと焦るあまり彼らの能力向上を課題としてきた。でも私が自己研鑽したかというそうではない。

『ごめんなさい、私が間違っていました』

思い知ったよ。

素民を成長させるばかりでなく、私自身も成長してゆかなきゃいけないってことを。何故なら私の中身は完全なる神様じゃない、不完全な人間だから。

『考えを改め、全力で挑みます。ロイさん』

心を入れ替えてやりますよ。あべこべな気がするけど、私を叱ってくれてありがとう。私は神杖をロイに与え、代わりに彼の心のもった槍を受け取る。

「申し訳ありません。あなたに”間違っていた”なんて言わせてし

まって。人間が神様を謝らせてしまつて。あなたにはもつと自信を持ってもらいたい」

ロイは私の無謬性^{むびめうせい}を信じているみたいだ。神様の判断は完璧で間違わないつていうあれですよ。私、判断間違えまくりですしアホですし失敗しまくりますけどロイの前ではもう弱音吐けないな。ロイの先をゆく人間にならなきゃな。

彼の槍、ずっしりと重厚で密度が高く、丁寧に鍛えてある。手に吸いつくような握り心地、申し分なし。ひやりとして神通力が淀みなく流れる、伝導性もばつちり。素材解析すると、炭化タンタルなんてレアメタルが入ってるし。さらにチタンコーティングして摩耗防いでる？

ちよ……オーバーツもいいところ。ロイのくせに生意気だよ。

『これだけ強靱な槍を、よくぞ鍛えましたね』

いっぱい褒めてあげたいよ。でもロイは実利主義者だ。

「あなたから学んだことあなたの神通力を用いて応用したまです、俺の力ではありませんよ」

謙遜しないで褒めさせてよ。

てかこんな硬い槍、私なんて構築モード使わないと作れないレベルなのにすげー作品だよ。きれいに使って、後で返してあげないと。あれ……なんか上から影が差ってきて暗くなってきた。なんか風もすげー轟々とうるさい。何が起こったのかな……って上空を見上げたら。

日本国民の皆様大変です、先輩がいません！

代わりに先輩がいたスペースには、蝙蝠みたいな黒い羽根の生えた爬虫類系モンスターがグラウンドに覆いかぶさるように飛んでる。そのルックス、黒い竜に似てるような似てないような。

全身を黒い鱗で覆われ、ぴんとした二本のトサカのついた頭部には黒光りする大きなクチバシ、両腕はなく飛膜状の翼がある。翼手よくしゅっていうんだっけ。あれだ、蝙蝠に鱗を生やして大きくして頭を鳥に挿げ替えた感じ。でけえ！ 翼開長二十メートルぐらいある！それがバツバツバツ羽ばたいてる！ 羽ばたくたびにスーパーセルからの風が強くなってないか！？

架空生物？ 違うな、架空生物とかドラゴンって感じじゃない、鳥に近い。実際に三畳紀とか白亜紀にいた翼竜（鳥の祖先となった空飛ぶ巨大爬虫類です）的な何かを意識しちゃってる。それ先輩の召喚獣とかですか！？ 先輩って構築士兼召喚士だったんですか！？ って思っても先輩いない。

まさかと思つてアナライズをかけると、構築士ブリリアント（翼竜形態）って出る。

出た
！！

先輩、待ちくたびれて恐竜もどきに変身しちゃったんですか！？

大変お待たせしました、お願いですので人型に戻ってください！

第2章 第17話 ハロー・グッバイ、ハロー・アゲイン

待つて待つて、作戦タイム！ 全然意味分らん。ベテラン構築士になれば変身能力が身につくのか、それとも悪役だけなのか。先輩だけずりつすよ！ 私は別に変身できたり巨大化したりしない。巨大怪獣と巨大ヒーローのくだりできません！ やべー！ ちんたら戦わずヒト形態のときに決着つければよかったよ！！ と思つても後の祭り。

翼竜形態の先輩、大きく口を開いたかと思えば、右から左に一直線に薙ぐように火を噴いた！

火炎で言つても、火力半端ない。巨大火炎放射器が火力マックスでやらかしちゃつてる感じ。一息吹きかけただけで城壁と石造りの家が数軒、溶け落ちてあとかたもないよこえー！

ドラゴンが火を噴くのはお約束だ。先輩もゴジラ的なアレがやりたかったに違いない。私は内心ちびりながら、ただちに防火壁となる物理結界を縦横に数十メートルずつ展開するも、先輩は第二撃目を放つてくる。物理結界も熱にやられて蒸発しはじめた。駄目だ、剥がれて、大火力の火炎がこちらに噴き込んでくる。

「手伝います！」

ロイが絶叫し、私の結界を補強し裏打ちするように強固な物理結界を張つてくれる。ロイの補助のおかげで何とか耐久してるけど、更にもう一撃きたらもうヤバイ。

防御に徹してはだめだ。まずは攻撃の起点となっている先輩自身を叩かないと。

私は民家の軒先に落ちていた麻袋を拾うと、加速構築モードを立ち上げ、構築十二棒のうち三棒を使って白い粉末6キログラムを麻

袋の中に大量構築。

これ、消火剤のつもり、人体に触れてもあまり危険性のないやつ。水だけでは消火しないレベルの強烈な大火災に見舞われることが予想される、念のため消火剤をロイに渡しておく。

「ロイさん、これは消火剤です。誰か人を呼んで散布してもらうか、あなたが神通力で巻き上げて火災に直接投入してください」

「わかりました、この化合物の構造式は何ですか？」

ロイは物性を知りたいから構造を聞いてくる。えーと、ロイに化合物を説明するときって、結構面倒だ。だって彼、化学式じゃなくて元素番号で覚えてるから。

「11-1-6-8(3)(NaHCO₃:炭酸水素ナトリウム)です」

国民の皆様は重曹というに分かりますかね。

「11の元素の正電荷原子が燃焼反応を抑制するのですか」

「そういうことです」

話が早くて助かる。正電荷原子っていうのはロイが翻訳したイオンのこと。私は彼に消火剤を預けるとロイの槍を携え、神通力という燃料を満タンにってもらって暴風吹き荒れる空に舞い上がる。

既にスーパーセルから竜巻が形成される最終過程にあり、風圧半端ない。そのうえでの先輩の容赦ない火炎攻撃。新鮮な酸素が供給されて、風の煽りをうけて火力が増す。火炎も竜巻も同時に何とかしないとどっちもグラнда壊滅級だ。私はうまく飛べずきりもみになるけど、先輩は吹き付ける風をコントロールして、うまく飛翔できてる。

先輩がグラндаに再度火炎を吐こうとしていたので、そうはさせじと私はへるへる飛びながら、先輩の大口の前に立ちはだかる。球

形の結界を発動し、翼竜形態の先輩の頭部をヘルメットの要領で球体結界内に閉じ込め密封する。あれだ、頭部だけ結界に覆われている感じだよ。更に構築枠一枠を使い、結界内にトリニトロトルエン（TNT爆薬の主成分）を少量合成し投入。

このトリニトロトルエンは熱や衝撃、摩擦へ感受性を持つ爆薬なんだ。だからこれで火炎は吐けまい。別に先輩の頭を爆薬で吹っ飛ばそうとしてるわけじゃないよ。そんなえげつないことはしてない。火炎、衝撃、電撃などの攻撃を封じただけ。先輩もこれはヤバそうだと思いますよね、頭が爆発するからね。

火炎吐いても爆薬に引火し爆発するか、仮に先輩が爆発に耐えたとしても結界内の酸素を爆発により一瞬で消費して、火炎は二度と吐けなくなる。酸素濃度が低すぎて燃焼反応が起こらないからね。でもこれで十二枠のうち十枠を使ってしまった。

あ、ちなみに一度構築枠を使ってしまうと三十分ぐらい枠がクローズドの状態になって使えなくなる。

ちなみに私が三十分以内に使用した構築枠の内訳は以下の通り。

- 3 枠 ニトログリセリン（湖底での発破のとき） / オープンまで残り8分
- 1 枠 水分解と空気再構築（同上） / オープンまで残り8分
- 5 枠 炭酸水素ナトリウム（消火剤として） / オープンまで29分
- 1 枠 トリニトロトルエン（先輩の火炎封じ） / オープンまで29分

これで私の構築枠は残り二枠となった。あと八分後には四枠、計六枠使えるようになる。ちよつと気前よく枠を使いすぎたな。同時に、私も火炎と電氣的攻撃の手を封じられた。引火したら困るし。

「赤井様！ 雲が！」

耳に微かにロイの声が聞こえてきたので下を見ると、地上から吹き上げる上昇気流は火炎によってますますその勢いを増し、スーパーセルから漏斗状に垂れ下がってきた雲が遂に地上とつながった。直径は二百メートルほどの、巨大竜巻の完成だ。

竜巻が発する音は凄惨だ、爆撃機で集中爆撃されているような感じの轟音。猛威をふるう竜巻によって、グランダの北端に位置する森が最初に直撃を受けた。青々と茂っていた木々がメキメキとなぎ倒され、大量の木枝や土砂などが、黒雲垂れ下がる荒れ果てた空へと巻き上げられてゆく。

そして……竜巻は非常に緩慢なペースで、グランダの中心部めがけ移動をはじめた。グランダの石造りの民家には各戸にグランダの民が避難し息を釐めて閉じこもっている、グランダの中心部に竜巻が移動すれば、家屋が破壊され住民たちが瓦礫の下に生き埋めとなり、甚大な被害と大量の死者を出すだろう。

私はこれを阻止すべく、ロイの槍を構え先輩に斬りかかる。槍のリーチが長いので、先輩の飛膜に簡単に刃先が届いた。私は力任せに槍を振り抜き、先輩の腕を断とうとするも、手ごたえはびくともせず、ガツンと弾かれる。先輩の表皮は硬い鱗に覆われ、神槍ともいえる鋭利な刃でもかすり傷一つつかない。

先輩はハヤブサも顔負けの俊敏な動きで滑空し、太く逞しい脚で私を攻撃してくる。爪先が刃物みたいに鋭利で、一撃でも攻撃を受けると腕が痺れる。しかも飛膜のついた腕でリアットみたいに首を狙ってくる。あぶねー！ 喰らってたら首骨折だよ。私先輩みたいに上手く飛べないから、攻撃を避け続けるだけで精一杯。どうやって攻勢に転じればいいんだ……？

先輩、もうちょっとガード緩くしてくれませんか？

と心の中で苦情を訴えても、先輩は返事してくれない。先輩、もしも？ お返事お願いします？

待てど暮らせど、応答なし。既に不毛すぎる超高速ドッグファイトが約二十分近く続いている。先輩を攻撃しても文字通り刃がたたないし、私もさすがに飛びまわっていたのでバテてきた。電撃でも落とせばいいんだけどさ、先輩の頭がパーンてなっちゃうしそれは卑怯だしさ……。

とにかく翼竜形態になった先輩とは意思疎通ができないみたいだ。変身すると思惟能力も人の心も失うのかな？ 看破かけても、人間らしい心の反応がなくなってる。先輩、心までモンスターと成り果てている。

え！ 先輩が再び口を開いた。まさか！ ちょ……！

閃光が迸り、次の瞬間には爆音。

先輩の頭部から無味乾燥な炸裂音がした。

うっわー！ 私は放心状態。

グラウンドに向けられたら危険極まりない火炎の抑止力のつもりだったのに先輩が炎吐いて自爆しちゃったよ！ 先輩の頭部は私の結界によって密封されているから、TNT火薬の爆発の威力はそのまま先輩の脳を襲う。密封状態での爆発の威力は凄まじい。

先輩のクチバシが割れ、硬い鱗が剥がれ流血し視力を失い……多分聴力もなくなってるよね？ ごめんなさい先輩。何か見るに堪えない姿になってます。私は居た堪れなくなつて結界を解除してあげた。痛みはないんだろうけど、先輩は「ギャース！」ってグラウンド中にこだまするほど大きな、掠れた悲鳴をあげている。すげー痛々しい。大丈夫ですか先輩、まだ戦えますか？

人間的知性がなくなってるから、考えもなく火炎吐いちゃったのか。

すみません私そこまで気が回りませんでした。

先輩はふらふらと飛翔しているけど、羽ばたく元気もないみたいだ。当然だよ、頭やられたら神経焼け焦げて飛翔できなくなるに決まってる。

私、こんな汚い手で先輩に勝ちたくないです。だって先輩、私を助ける為に色々やってくれたのに、私はといえばその恩を仇で返すようなもの。

先輩、このアガルタ第一区画で私が来るのを待ちながら百二十年間も一人で構築頑張ってくださったのに、ファイナーレに最悪な内容でログアウトしてほしくないです。先輩の怪我を癒して、正々堂々ともう一度仕切りなおすか？ あるいは卑怯だけどこのまま決着をつけるか……早く先輩を倒して竜巻を何とかしないとグランダが壊滅する。

なんか空がますます暗くなってきた、一体どうなるの？！ 陽がすげー翳って、夜みたいになってる。こんなときに日食でも起こってるのか？ とは思ったけど、雲が分厚すぎて上で何が起こっているのかわからない。先輩が何かしてるんですかね。

色々と悶々と考えてたら、遂に力尽きて先輩の体軸が傾き、真っ逆さまになって地上へと落ちて行った。ああ、もう限界だったんだ。

かろうじてグランダの市街部は外して墜落してくれてるみたいだけど、下では黒い煙が上がってる！ あの煙は金属精錬所が真下にあるって目印！ 私は垂直落下で追いかけるも、間にあわず先輩が先に墜落してしまった。

地響きを立て、小規模地震が起こり、何らかの作業場と思しき建

物が数棟倒壊した。先輩は煉瓦づくりの精錬所の屋根に風穴をあけて突き破り、炉の真横に翼竜形態のまま仰向けに墜落していた。地面が深く陥没して、墜落の衝撃を物語っている。落下の衝撃は、先輩の重い体をさらに痛めつけたことだろう。

小さなプール状の冷却水槽の横、先輩の左翼は煮えたぎる炉の炎に接触し引火し、炎に包まれて翼の先がめらめらと焼かれていた。私もそうだけど、構築士は自らの神通力で炎を扱えても、自然に発火した炎には焼かれてしまう。だから火炎をそつなく扱える先輩も、溶炉の炎に焼かれちゃうんだ。

私は何ともいえない気持ちになりながらふわりと着地し、先輩に歩み寄る。どうしよう、火を消してあげて先輩の怪我の手当をすべきか……。

先輩はびくりとも動かない……でもまだ息はある。数分もすれば、その身は炎に包まれて焼かれるだろう。先輩、グランダの民から集めていた信頼の力も私に横流しされてるし、傷は自力では癒えない。気絶してるみたいだし、もうとてもじゃないけど戦える状態じゃない。

どうしよう。

「やめてあいかみさま！ 殺さないで！」

背後から、メグの悲鳴が聞こえた。金属製錬所はグランダ内に数か所ある。メグはキララ、クレイさんと共に精錬所の火を落して回ってくれたようだ。そしてここが彼らの辿りついた最後の精錬所、間に合わなかったけど、幸い炉は壊れていない。私が先輩に止めを刺そうとしているように見えてるみたいだ。どう見てもそう見えちゃうよね。

エドから飛び降り、メグは私に近づいてきた。どうしようか……。私が返事に困って俯いていると、メグは先輩に駆け寄り、両手を

広げて私の前に立ちはだかった。

「かみさま言つてたじゃない。悪人なんていない、それは心の迷いなんだつて。悪い事をしたら心から反省して、良いことをして償えばいいんだつて。だから邪神なんていない、ギメノさんは今は悪い神様かもしれないけど、でも殺すなんてあんまりだよ！ そんなのあかいかみさまらしくない」

先輩を庇うメグ。確かに言いましたけど……それは人間に対してです。悪役構築士に対してはちよつと例外でしてね。

「メグさん……」

じつとりと視線を絡め、互いの気持ちを確かめあうように見つめあう私とメグ。メグの瞳から頬を伝った、一筋の涙。メグは返事のない私に失望したように悲しげな顔を向けると、先輩に近づき赤と白の薬花を必死になって翼竜姿の先輩の口の中に詰めている。残り少ない薬花を使って、先輩を癒そうとしているのか。キララと、クレイさんもエドから降りてメグの行動を無言で見守っている。

ナオもいる……そして地震に驚いた周辺住民も数十名、おっかなびっくり野次馬に駆けつけ人垣を作つて騒然としている。

「ギメノさん、早く起きて！ 大事な翼が燃えちゃうよ！」

メグは先輩に呼びかけながら、ざらざらと黒い鱗に覆われた体をさすつてあげている。本気なのかメグ……。でもメグは人食い肉食獣エドに懐かれるような子だ、この行動も気まぐれではないだろうし本心からのものだろう。

グランダの民もわらわらと精錬所の中に入って来た。

「なんだこれは！」

「これが、この忌まわしい怪物が天空神様の正体だったのか！」

「私たちはこんなバケモノの言うなりに操られていたというのか！」

先輩のルックス、化け物然としているからグランダの民たちも怯えて近づいてこないけど、外野でやあやあ言ってる。でもグランダの民を病で苦しめ、街を破壊しようとした先輩に報復とばかり、精錬所にあつた近くのガラクタを先輩に投げつける者もいる。恨みつらみもあるだろうね、元凶が分かった今となつては。

「やめて、やめて皆！」

メグは手を左右に振って先輩を庇っている。先輩の味方はこの場でたった一人、メグだけだ。

私は複雑な気分になる、一体どうすればいい？先輩を助けるべきなのか。それともこのままログアウトさせてあげるべきなのか。先輩が気絶していて意思を確認できない以上、私も判断がつかない。情けないことに、放心状態だったんだ。

すると……

「さあ今のうちです！弱っているうちに、奴にとどめを刺してください！スオウ様。我々はもう、偽神に騙されてはいけないのです」

「お願いします、あれの息の音を止めてください」

野次馬の誰かがキララに進言した。長年天空神に仕えてきた巫女王だから、とどめは彼女の手でと望む声が大きくなってゆく。皆、無責任なもんだよね。でもキララは……

「ああ、言われなくともそのつもりだ。終わりにせずばなるまい、この災厄を」

キララは民衆の声にこたえるようにすらりと抜刀、一步一步、精錬所の石畳を踏みしめ、先輩へと歩みを進める。彼女の気持ちを確かめ、天空神への信仰を断ちきるかのように。先輩の片翼はもう、付け根まで炎に包まれている。

先端の方は骨まで溶けて……。ああ、こうなつたらもう私の力では癒せない。腕の付け根を断って翼を切り落とし延命させても、先

輩は片翼の翼竜となる。それは多分先輩の本望ではない、だって天空神と名乗っていたぐらいなんだから。飛べない状態では、納得いかないよね。

ならばキララの手で殺された方が、先輩は幸せなのだろうか。もう私にはわからない。

そのとき……先輩の口が僅かに開いた。そして徐にその巨大なクチバシで、先輩の口の中を覗き込んで薬花をさらに奥まで詰め込もうとしていたメグの頭をガブリと飲み込む。

「なっ！」

先輩、脳をやられて狂ったのか！？ いや違う！ 口の中に薬草を詰め込もうとメグが入ってきたから、訳も分からぬまま反射的に飲み込もうとしているのかもしれない。

「い、いけない！」

メグは腰のあたりまで先輩のクチバシに飲み込まれ、脚をバタバタさせている。まさか我を失い、反射的にメグを丸呑みにするつもりか！ 私が駆け出し、神槍に熱を通わせ先輩の頸部を断とうとしたとき。

全てが終わっていた。先輩の頭部は真っ二つに断たれ、断首された頭部はメグごと製錬所の石畳の上に落ちる。

決着をつけたのは、天空神を葬ったのはキララだった。

キララが私より先に二本の長剣に炎を纏わせ、先輩の首を断ったんだ。

彼女はこと切れた先輩の胴体に、炎を放つ。天空神ギメノグレア又すが、二度とこの地で復活しないように。憎しみを含ませてキララの火炎、その扱い方は先輩が彼女に教えたもの。

「今日をもって……我らは自由だ！」

鮮やかな緋色の火炎に黒い体を焦がされ、やがて先輩の体は白い光を放ち始めた。

光の花弁が舞い散るように、ぱあつと飛び散って霧消する。

「あ、あう……」

先輩が昇華されたあとには、先輩の唾液で上半身がベトベトになったメグが床の上に転がっていた。手をついて、身をもたげている。何とか無事だったみたいだ。私はほつと胸をなでおろすとともに意識の戻ったメグを助け起こし、五体満足であることと無事であることを確認する。奇蹟的に、怪我はなかったみたいだ。メグはえぐえぐと泣いていた。先輩の体を燃やしていた炎も、ロイから受け取って誰かが持ってきてくれた重曹が散布され、迅速に消火される。

「あかいかみさま……ギメノさんが。私、ギメノさんを助けられなかった」

『メグさん、あなたのせいではない。全て私の力不足です』

私とメグとの間に何ともいえない、気まずい空気が流れていたなら。「大丈夫ですか!？」

ロイが息を切らせながら精錬所に駆け込んできた。応援にきてくれたみたいだ、一足遅かったけどここまで走ってきたのか。結構遠かったと思うのにロイは脚が速いな。

「で、どうなりました! もう終わりましたか!？」

ロイは先輩の最期を見ていないけれど、決着がついたということは何となく悟ったみたいだ。あ、そうだ。終わってない! そういやまだ終わってないよ。グランダに迫っている竜巻の進路をずらしてグランダ壊滅の危機を救わないと!

『いえ、終わっていません!』

私は慌てて先輩があけた精錬所の風穴から空にびよーんと飛び出

してゆくと、ない。竜巻はどこにもなく、薄くなった雲が漂っているだけ。

ん？ あれ、何で？ 先輩が斃されたから竜巻も消えたの？ それともロイが何かした？

『どういうことですか、ロイさん。何が起こりましたか』

ひゆるひゆると製錬所の中に戻ってロイに尋ねると、ロイが少し照れくさそうに事情を打ち明けた。

「あ、あの嵐の渦なら俺が消滅させておきましたよ」

なんと、ロイが竜巻を消滅させたとのこと。ま、マジですか！

どうやってやったの？ 進路外すぐらいが精一杯で、あんなクソでかいスーパーセルを消滅させるなんてできるわけない。ロイの身体に残っていた神通力はそこまでの馬力、なかつた筈だし。理由が分からず、私がきよとんとしていると。

「ほら、あなたがヒントをくださったおかげです。上昇気流が大地と天との温度差によって生じるものなら。上昇気流が生じないよう、太陽からの熱エネルギー供給を断つべきだと考えました、そこで高い位置に雲を起し陽を陰らせ……あとはお察しの通りです。うまくいってよかつた」

なるほど、それでさっき空が暗くなったんだな。

ロイの頭が冴えまくりだ。要するに彼が何をしたかかってと、積乱雲より高層の雲を操って太陽光が積乱雲に当たらないようにしたわけだ。竜巻のエネルギー源を断つたってわけ。てか高度10キロのスーパーセル巨大積乱雲より高度の高い雲で太陽を隠せるほど厚みの出るやつって何よ？ 濃密雲のうみつんってやつ？ スーパーセルのてっぺんの、成層圏にはみ出した雲を干切って伸ばして太陽隠したんかな。もはやロイが何をしたのかさっぱりわからん。

そついやどんな巨大積乱雲でも夜になると消滅するんだよ。それは太陽が沈んで空が冷え、地上と空の温度差がなくなるから。それと同じこと、ロイはやっちゃってみたいだ。でもちよつと竜巻を消滅させるには時間が速すぎだよ。だつて空の温度が冷えてくるっていったらそれなりに時間がかかるでしょ。それにあとはお察しの通りって言つたつて……まさか神通力使つて対流層を冷却とかしたんかな。構築士でもないのに冷媒どこから持つてきたのよ？ 疑問はつきない。……まあでもやつたんだよね。その証拠に、ロイは神通力を使い果たしてる。それだけの仕事量だと、ゼロになつてもおかしくないよ。

やり過ぎ感半端ない、どうやったのか後学の為に見ときたかつたよ。

とにかくすげーよ、ダイナミックすぎて脱帽だよその案。褒めてあげようとしたら、ロイは悔しそうな顔をしてる。何が悔しいの上出来だよ？ 私その案思いつかなかつたし。

「ですが今度こそ、俺が赤井様から預かつた神通力はからっぽになつてしまいました。大切に使つていたのに……もう皆を守れなくなる」

なんだそんなことか。責任感が強いな、ロイは。

『いいえロイさん。ここまでよくぞ頑張つてくれました。あなた方が私を許して下さるなら、これからは私がある方を守りますよ』
私はロイに、結局一度もろくに使わなかつた槍を返してあげる。

これは君が持つにふさわしいよ、私なんかじゃなく。ロイは私に恭しくひざまづき、神杖を丁寧に両手で返してくれた。敬意払いすぎだよ、もつと普通に返してよ。

同様に、ロイは私が加護を授けた証として上半身に巻いていた純白のストールも私の肩にかけてくれた。もともと私の持ち物だつたやつ。一年間、重い責任を負わせてしまつたけれど、君も神通力を

ゼロにまで使い果たし、神の衣も返して普通の人間に戻った。ロイは荷が下りてほっとした顔をしている。

「あのう……」

キララがもじもじと、私に何か話しかけたそうにしている。分かっているよ。先輩の代わりに君たちのことも私が加護しますよ。何とも段取り悪く不甲斐ないヘタレ神様ですけど、それでよければ喜んで行政サービスしますよ。グランダと私の集落で千八百人ぐらいになるけど、少々人数増えても私は全然かまわないよ。というわけで営業スマイルで応じる。

『グランダも加護しますよ。あなた方が望むなら』

精錬所の外にますます膨れ上がっていたグランダの民から、どつと歓声が上がった。万雷の拍手と喜びの音がこだまするなか。私は肩を落とすメグを慰め、ロイをこれでもかと褒めて、人ごみと喧噪を抜け、再びグランダの空に舞った。

先ほどの悪夢のような空模様とは違って、上空の風は優しい。平坦な地平線を見ると、穏やかに紅く燃える夕焼けの空。

誰もいない場所でインフォメーションボードを再起動すると、通常画面に戻っている。

「ごめんなさい、ブリリアント先輩。そして……さようなら。」

私は未熟で考えなしの行き当たりばったりだったばかりに。陰ながら私を全力で助けて下さったあなたに、私ときたら少しも恩返しができなかつたみたいです。すぐに西園さんと話をすることもできるけど、夕暮れの風で涼んで、気持ちを落ち着けてからにするよ。

空中で体操座りのように体を丸めて暫く空の広さを感じていた。地平線の向こうには、一番星が見える。そしてふとインフォメーションボードを見ると。

左下には、点滅する白いフォントが浮かび上がっていた。

【第一区画解放。乙種構築士ブリリアントがログアウトしました。

……確認】

はい、確認しました。

先輩がアガルタの世界から現実の世界へ還っていった瞬間を、この双眸に焼きつけました。仮想世界からのログアウト。それは私にとって、九百九十一年もの未来のイベント。

私はこの世界に残り、先輩の遺志を受け継いでゆく。先輩が残してくれた民と進んだ文明、そして強い信頼の力を、確かに預かりました。

その気はなかったんですが、結果的に卑怯な手を使って申し訳ありません。それだけが心残りだ。これからはもっと正々堂々と、胸を張って戦えるように頑張ろう。先輩にはすごく悪いこととしてしまつたし。

確認、のボタンを押したら。 。
引き続きポップアップウィンドウが出てきた。

【 オファーが1件あります 】

うん？ どういうことですかコレ？ 意味もわからずエンターボタンを押す。続いてメッセージが出てきた。

【ランク2 エトワール(Canada/ID:CAN214)が

あなたの使徒を志望しています。エトワールを召喚しますか？
質問の下に、三つの選択肢がある。

【召喚する】 【召喚しない】 【保留する】

エトワールさんて誰？ てか何で構築士IDがブリリアント先輩と一緒なんだろ。確かブリリアントって仮名なんですよ。私も赤井って仮名ですし。構築士はランクが変わったら、名前も変わるんだろうか……？

てことはブリリアント先輩、……まさか！ 私の使徒になつてくれるってことですか！？

先輩、もう一度会えるんですか。この世界で！

先輩の移籍先、ここに決めてくれたんすか！ どうして、先輩に散々な仕打ちをしてしまった私のところに……。じわりと目頭が熱くなり、なんか鼻水がでてきた。先輩、ログアウトしてまだ一時間も経ってないけどな。二十七管区の時間は連続しているけれど、もしかしたらログアウトの直後、二十七管区の時間が止められて、先輩の昇進とか移籍先とか、西園さんを含めた話し合いで色々決まったのかも。それで、厚労省に戻って手続諸々を済ませ査定も終わって……。

先輩がもう一度、この世界に舞い降りてくる！

今度は私の天使役として、敵役じゃなくて頼もしい味方役として来てくれるんだ！

私は高鳴る胸と興奮を抑えつけ、鼻水をすすりあげながら、震える指で選択肢を選ぶ。

召喚……する！

甲種二級構築士（ランク2）、エトワールさんを召喚します！

第2章 第17話 ハロー・グッバイ、ハロー・アゲイン（後書き）

第二章終了です。

書きたい放題、随分長引いてしまいましたが、お付き合いいただきありがとうございます。

ランク3構築士ブリリアントは無事仕事を終え昇進し、ランク2エトワール（公募からいただいた名前より、エトワールを人名として最初に使用させていただきました。他の名前も、徐々に使わせていただきます！）として赤井さんの使徒（天使役の人です）になつてくれるようです。

それではまた、三章からもよろしくお願いいたします！

10/26 追記：拍手より考証いただいたので、ロイが竜巻を消滅させたくだりを微妙に修正。ありがとうございます！

第3章 第1話 赤井さんとゆかいなモンジャの民たち

> i 2 3 0 9 5 — 2 4 9 6 <

快晴の空のもと、四百人あまりの熱い視線が私に注がれている。

集落の広場に集まった大人に子供、私をぐるりと360度取り囲んで、赤ちゃんに至るまで全員出席での集いが催されている。弁当と飲み物は持参でね、ランチオン集会だよ。

いつしんに私の顔を見つめる集落の民をぐるりと見渡し、私は高らかに宣言。

『モンジャにしました!』

告知は爽やかに。

間違っても爆笑しちゃいけない。一秒後には爆笑しそうなんですけど。

集落代表のロイとグランダの女王キララの和睦によって、グランダと私の集落との交流が図られることになったと皆に伝えたら、こちらの地方にも地名があった方がいいと誰かが言い出した。

で、地方名を決めるにあたって、四百人から一案ずつ出ても候補が出過ぎて揉めるから、集落の代表のロイにスパッと決めてくれとの意見。で、ロイは「神様にご加護をいただいている土地なので、やはり神様に決めてもらいたいです」とか言っつて丸投げの末、私に土地命名権が発生。

そんでもって、モンジャになりましたと伝えただけです。

以前から真顔でモンジャと言う練習をしまくった甲斐もあって、爆笑せずに伝えられたよ。

「ジャンモ？」

首を傾げながら復唱する、何でそんな間違え方すんのケンタ。ケンタは12歳ぐらいになつてた。刈り上げヘアで頭がツンツンだ。やんちゃ盛りつて感じだけど、去年生まれただばかりの妹をおんぶ紐でおんぶして、両親の手伝いをして子守を頑張ってるみたい。意外とお兄ちゃんらしい一面もある。

「モンジャって？」

最前列で体育座りをしてみよんみよんと左右に揺れているメグは眉間に皺を寄せている。同じく最前列のロイは律義に正座をして、何か木の皮のメモ用紙に書きつけてる。集会の議事録ですか。盗み見ると、カタカナでモンジャって書いてある。何でカタカナわかるのよチミ。とにかく一同騒然。

「ジャの部分が言にくいですけど」

「モン……ジャ？」

あーあー発音がおかしいしなんか混乱してる、メグの横に座ってるのはカイか。カイはメグの妹な。少し見ない間にまた美人になつたな、料理が得意な子。日本人顔のメグとちよつと顔立ちは違うけど、白人風の美少女だ。亜麻色の髪を長く伸ばしている。カイは混乱してるみたいだけど、拗音ようおんつてうちの集落にはなかった発想なんだよなー。あ、や、ゆ、よとかそついうの。

まあこれを機に言語のバリエーションが増えてくれればいいよね。

「あの一、ぜひとも由来を教えてくださいませんか」

ヤスさんも困惑顔。ヤスさん、以前よりガチムチになって髭が濃くなりましたね。なんか眉毛も繋がってるし、剃ってほしいけど刃物で顔が切れたらいけないから言えないな。

モンジャってのは国民の皆様から公募した名前の抽選で決まった

わけです。

もんじゃ焼きの由来はあれですよ、昔はもんじゃを焼くときに鉄板に文字を書いて子供に教えていたんだ。なので文字焼きが訛ってもんじゃ焼き、らしいよ。江戸っ子の友達から聞いた話だ。私がしつこくモンジャモンジャ言いまくってたから、誰かが地名募集の際に、モンジャで応募してくれたみたいなんだ。

でも民たちはそんな理由で納得するわけないし。

てなわけで一応、それっぽい由来を考えてきたんです私。

『私の故郷の言葉で、”万物の基本”と言う意味です』

どうよこれ。B級グルメの基本、イロハのイ的な意味では間違っていないっしょ。

広島代表お好み焼きとか大阪代表たこ焼き、焼きそばなんかメジやない。発祥はもんじゃが先ですからね。明治時代発祥、起源は江戸時代にも遡る。他のB級グルメなんて歴史が浅いよ。え？ 異論があるならかってこいよマジで私が相手になるよ！

でもB・1グランプリ（B級グルメの祭典、百年以上続く過酷な大会です）ではお手柔らかにね、ここ数十年モンジャ優勝してないから。

てなわけで全てのご当地B級グルメはもんじゃにつながると言っても過言ではない。……過言か。過言なのは分かってる、てか東京以外のご当地の皆様からフルボッコにされる。

そういや私、もんじゃの肩持ってるわりに神奈川県民なんです。

でも、由来を聞いて民たちの反応は良好。まんざらでもないご様子。むしろ大喜び。

「それは素晴らしい名前です」

「モンジャ地方の住民として誇りに思います！」

皆が感心してどよめきが起こってる。心苦しいけど仕方がないよね。というわけでブリリアント先輩のログアウト、第一区画解放から一週間が経過しての集会中です。

私の集落へ一年ぶりの帰郷を果たして三日目。現在のステータスはというと。

【アガルタ第二十七管区 第3352日目 居住者数 1891名
信頼率 95%】

まあ5%ぐらいの人はまだギメノさんを信仰してたり、ギメノさんの信仰を捨てたからと言ってはい次と私へ宗旨替えができないみたいだ。私のことを信じてくれない人はそれでいいと思うよ、信教の自由ってあるし、保証されるべきだよな。私はその人たちにも平等にサービスするだけ。

皆とは一年ぶりの再会だったので帰郷したときは緊張したけれど私の帰還を本当に喜んでくれた。第一区画解放まではヤンデレしていた皆も正気に戻っていて、翌日には一年ぶりに祝福を受けるために行儀よく長蛇の列ができたりした。

久しぶりに抱擁してあげると皆嬉しそうだったよ、抱かれるんじゃないくて。久しぶりすぎて感動して泣いてる人もいたな、神様冥利に尽きるよ。ロイも希望者には祝福してあげてみたいけど、やつぱり癒しの力は断然私の方が強い。ヤスさんの腰も一発で治ったみたい。私も久しぶりに祝福ができて嬉しかった。以前のように神通力に感電して民が暴れる兆候も治ってたし、区画解放直前にああなるみたいだ。

逆に言うと今後第二区画が解放される頃になったらそれが目安になるってことだね。そして私が集落に戻ったから、また素民の”追

加”がはじまった。昨日だけで人口が十人増えたよ、相変わらず素体だったけど皆温かく迎え入れて、ハクさんたちが張りきって追加された素民たちのために十軒ぐらい家を建ててくれる。建て売りのみいだね、いや売ってないよ無償で提供してるけど。ハクさん、久しぶりに会ったら棟梁みたいに貫禄が出てて弟子が二十人ぐらい増えてた。

そついやハクさんはグレーの長髪を布で縛って束ねてる三十二歳の男性、顔立ちは浅黒くて彫が深くて鼻が高い、ラテン系だよ。外人顔つていてもロイとはちよつと違う系統だ、ハクさんは結構真面目だし冗談とか言わない。いわば陽気じゃないラテン系、ラテン系の長所殺してる気もしないでもない。

ユイさんは茶髪でインド系っぽい顔立ちだ、これがまた超絶美人！^{めづかし} 目力ヤバイよインド系は。編み物の得意なユイさんは白いリブ編みのニットみたいな着て暖かそう。毛糸的なものを私が用意してあげたら、ユイさんは皆にセーター作ってくれそうだな。やつぱ猫的なやつとか、羊やアルパカ的なモフモフの調達は急務だ。

で、今日の議事はそれだけじゃない。

『また私は、しばしの間このモンジャの集落を留守にしようと思います』

今後は行き先を事前に報告することにするよ。じゃないと皆が心配するから。ロイに怒られたんだ、どこに行ってもいいけど、行き先と滞在期間を報告してくれって。そしたら私がどこに行っても皆が安心して待てるから文句は言わないですって。でも……

「ええ　　！！　やめてー！」

「戻ってきたばかりなのに、すぐまた去るなんて酷いですあかいかみさま！」

「行かないください！ 私たちを置いてどこに行かれるんですか！」
行き先を伝えておこうと思ったんだけど、一同大ブーイング。何だよ行き先伝えても結局文句言っじゃん。でも気持ちだけは嬉しいよ。

私がいなくてもロイを中心に立派にやってた集落だけど、やっぱり私の加護がないと心細いみたいだ。

「すぐに戻ります。病に喘ぎ、助けを求めている異国の民が私を待っているのです」

数日だけモンジャの集落に滞在して、私はグランダにとんぼ返りし、復興を手伝うつもりだと彼らには伝えた。

だって、グランダは私とブリ先輩との戦闘によって壊滅状態にあるわけだし、竜巻の被害も公害病の件も何とかしないとイケない。ロイとメグも私に付き添ってグランダに入り、暫く手伝うと言ってくれた。すると……

「じゃあ、仕方ないです。困ってる人がいるなら……」

「仕方ないよなあ。モンジャの民は元氣だし、病んでいる民がいるなら。あかいかみさまがそちらをご心配なさるのもわかる」

若干拗ねつつも、モンジャ集落の民は心根が優しく聞きわけがいい。一斉に諦めモードになった。何だか申し訳なく思っていたら。

「では私たちもその、グランダなる土地の復興を手伝います！ 手伝うついでに、暫くそちらに滞在して進んだ建築技術を学びたいです！」

「サチも行くー！」

グランダへのプチ留学を希望したのはハクさん。ハクさんは妻のユイさんの理解もあるみたい。

んー。なんか私がいけない間に皆、向学心が強くなっちゃったのかな。

学べる機会があればとことん学ぼうと思ってるんだよねきつと。ロイの影響もあるのかもしれないけど、私がひよっこりいなくなっても対応できるように努力してるみたい。けなげの一言に尽きるよ。

ユイさんの娘、サチももう八歳か。サチはお父さん子だったから、ハクさんも単身赴任とはいかない。サチの顔はユイさん似で茶髪的美少女、手足の長いところはハクさん似だ。サチは両親ともが始祖なので、普通の素民とはちよつと違ったりする。血が濃いのかな。何が違っかつと、西園さんの声が聞こえるみたいだ。俗にいう第六感でやつ？ 私と西園さんの会話を盗み聞きしてユイさんにチクつてたりした。

まあ子供ですから「何言ってるのこの子は……ほほほ」とかユイさんに流されてたけど。そのうち成長してから西園さんとの会話を盗み聞きやられると困るな。靈感(?) あるみたいだしな！。

というわけで、ハクさん一家とその弟子たち十名、ロイメグに私という遣格蘭ダ使節団ご一行の結団式とあいなってモンジャ集落の集会は無事散会。

集会が終わって皆がそれぞれの仕事に戻ると、メグがててと私のもとに駆け寄ってきた。

「あかいかみさま……何年も前から言おうと思っていたんだけど、やつぱり言います」

『どうしました?』

何? 告白? 告白はまずいよ今はやめて?

「ちよつと失礼します」

メグは私の肩にかかっているストールをとり、それを私の腰に巻きつけてきつく結ぶ。で、着物のおはしよりをつくる要領でたくし上げて紐で締めた。

「これで動きやすい、です?」

「!?!」

あれ? これすごくいいじゃん! いい塩梅。帯にしろってことだったの!? てかこれ、帯だったのな! ストールじゃなくて。腰で縛るとすげーしっくりくる。裾も短く調節できてぴちつと止まり、引きずらないし動きやすい! 何でメグ教えてくれなかったの。恨みがましい目でメグを見ていると……

「だってロイが、たぶんあれは何か裾を上げない理由があるから指摘しちゃダメだって。でも私、特に理由があるみたいに見えなかったし……」

「……それ、もっと早く教えてほしかったです。結構不便をいたしましたものだから」

「え、気付かなかったんですか?」

メグはくすくすっと笑った。メグ、そしてロイ、私を買いかぶりすぎだよ。

「あいかみさまでもうつかりしてるところとか、人間っぽいところがあるんだなあつて。私たち、かみさまのこと完璧な存在だと思っていたから」

「私、あなたたちとそんなに思考回路は変わりませんよ」

多少、君たちより知識はあると思いますけど。でも私の長所つてそれだけでしかない。脳みそも普通ですし、IQとかで勝負してもロイに負けそう。ロイメグの知的スペックつてすげー高い。

にしてもわざと教えずに裾を踏んで何か意味があるのか確かめるとか酷いよ、教えてよそういうことは! 私がアホなだけか。すみませんね八つ当たりして。口をとがらせていると……メグはほへーってな顔をしていた。天然だなこの子。そういうところが可愛いんですけど。

「いえいえ、私もロイもあいかみさまにはかないません。でも。またかみさまのこと、好きになったですよ」

もじもじしながらメグが一言。今の発言で素民五人ぐらいが嫉妬の表情で振り返ったよ。またメグにライバルが増えたけど、無自覚なんかな？ 皆が見てる前で私のこと好きだとか言っちゃだめだよ。私もメグのことは大好きですけど。メグは恥ずかしそうに、またててと走って去った。グランダ滞在のために、荷物をつくらなきゃって言って。

その夜。

皆が私の住まいの洞窟の前に夜這いしてきてたから、身の危険を感じてそっと洞窟から引き返し、ひとり草原に出て夜風に当たる。草原の中心部にいれば、夜は誰も出てこないし人目にもつかない。私の加護があるからもうエドなんて来ないけど、やっぱりこの時代の人は暗闇が怖いみたいだ。素民の皆に囲まれまくってたから、西園さんとの通信の時間が確保できなかったよ。

インフォメーションボードを立ち上げ、西園さんに定時連絡。

『第一区画解放後の処理が大変そうですね、赤井さん。人数も増えましたし』

西園さん、頬杖をつきながら私のこと見てる。西園さんはスケジュール帳を開きながらずっと、あまり美味しくなさそうにパスタを啜る。西園さん、モニタの前で食事とかどれだけモニタ張り付いてるんだよ……仕事しすぎですよ。

ところで西園さん、今日はたらこスープパスタですか。カップ麺ばっか食べてないで、外食でもいいですから少しは野菜も食べて下

さいね、美容に悪いですよ。あ、コールスローも食べてたんですか。

『災害の爪痕は大きいですが、尽力はしていますが』

『ご心配なく。エトワールさんが手伝ってくれますよ、彼はベテランで敏腕なので新神の赤井さんでも安心です』

そうでしょうね、ベテランばかったもんな。下積み時代も長そうでしたし、私も頼りにさせてもらいたいですよ。

『エトワールさんと私って、神と天使という関係になるんです？』

『そのとおりです。赤井さんは神様ですから、天使には毅然とした態度で接していいんですよ。エトワールさんもそこは心得て演じてくれるわけですよ』

うーん。そういう役柄だと分かってもできないなー。

私理系ですし雑学王でもないし宗教とか全然勉強してないから、神と天使の関係ってどんなのか分かんのです。基本的には神様の言うことを民に伝えて、神様の代わりに奇跡を起こすのが天使ですよ。ね？ 違う？ 国民の皆様教えてくださいよ不勉強なんですから。

要するにパシリ、ってな認識でよかった筈だ。でも私、先輩をパシらせるとかできないっすよ。いえいえ私がやります先輩は座って休んでて下さい、とか、俺がコーラ買ってきます！ になりそうですよ。コーラないけど。

『で、エトワール先輩の就任ロケイン日はいつです？』

でもやっぱり私はブリリアント先輩、改めエトワール先輩の再降臨を心待ちにしていた。彼は甲種二級といっても経験値が違うから、構築士として私よりぶっちぎりでスキルが高いんだよね。彼は私とは違う構築ツールが使えるみたいなんだ。結構難しいスキル使えるらしくて、私はまだできないやつみたい。

ぜひそういうの教えてほしいよね。あと、私にも早く現実世界の相棒が欲しい。やっぱり演技してると疲れるよ、たまには愚痴も聞いてもらいたいし、現実世界のこととか世間話もしたい。

西園さん、エトワール（本名ジェレミー・シャックス：Jeremy Shanks）先輩のプロフィールを私のインフォメーションボードに送ってくれていた。しっかり目を通してください、だってさ。立場的には私の部下になる人だからね、きちんと読み込まなきゃ。神様役以外の構築士のプロフィールは公表してもいいみたいだ。

にしても先輩の芸名、プリリアント（輝く）の次はエトワール（星）ですか。うん、いいよ。いい名前だと思う。いいんだけどさ、ナルシスト臭がするのは気のせいですかね？

若干ナル（シスト）なんでしょねきつと。

先輩、プロフィールを見ると現実世界では医者だったらしいよ。失業内科医。この世界では内科医があぶれて就職難だ、だって万能薬が普及してからはもう医者は外科医や整形外科、脳外科しかないよね、コンビ二で万能薬飲めば治るわけだし。怪我とかしない限り病院も行かないよ。

だから内科系や看護系職は軒並み失業者続出。外科に転科できればいいんだけど、内科医から外科医って結構ハードル高いみたい、手術できないし。そーいや歯科も倒産が相次いだな、だって虫歯・歯槽膿漏予防歯磨きが開発されたから誰も虫歯にならない、行くとしても噛み合わせの問題程度だよ。

そんで先輩も医師失職の煽りをくらってか、構築士になって四年目らしい。先輩の中身は二十九歳らしい。日本人嫁持ちですしマイ

ホームも考えてる頃でしょうし働き盛りだ。

ともかく。現実世界では冷や飯食ってる医師の先輩でも、仮想空間に来てくれるとすげー助かる。鉅毒とかの対処法とかも分かるんですよねきつと？ 西園さん、コールスローを食べながら一言。マヨネーズが口についてますよ。

『あ、ログインは今日ですね。そちらの時間では今夜ですよ！ もうすぐログインすることになってますね』

それから三時間あまり。私は草原に寝そべって一人、模造の宇宙を見上げる。人工的な投影であるので、プラネタリウムそのものだ。

社会人天文サークルに所属していた私は、もともと星を見上げるのが好き。

東京の空は星がよく見えなかったけど、ここから見る星はずっと鮮やかだ。アガルタの星は地上に真っ直ぐ光を届けるけれど、瞬かない。何光年もの彼方から届いた光、というような宇宙のロマンはないな。それでもアガルタに月と星を置いてくれた開発者の方々に感謝したいよ。監禁されている私にも見上げる空と大気があるってこと自体、すごく癒されてるんだ。

二十七管区の星々は左から右に流れるばかりで、現実世界の北極星のように同心円状に回ってない。でも規則的に異なる星座を映している。やはりこの世界は平坦で、地球のように球体をしていないということにはわかった。

グランダの城壁から礫になった私が毎夜見上げた夜空。私はすることもなく暇だったから、いくつか目立った星々に名を付けた。あれは私が最初に名付けた星座、コテ座だ。モンジャ焼きのコテに似てるでしょ。日没後一時間すると天頂に見える星座だ。

草原の草が頬に触れながら、風にあたり寝そべって空に目をこらしている。不意に空がボツと明るくなった。

天頂から炎が立ち上ったかと思うと、長く青い尾を引いて流れ星と同時に待機させていたインフォメーションボードが明滅。

【甲種二級構築士 エトワール（Canada / ID：CAN214）がログインしました。……確認】

私は慌てて跳ね起き、確認ボタンを押す。

エトワール先輩のログインの瞬間。すげーきれいだ、写真撮りたいくらいだよ。流星の大気圏突入みたいだな。記憶がないけど、私もあんな風にログインしてきたのかな。いきなり空が明るくなったら、民は驚いてしまうよね。それがまた神々しい演出だったりする。

本当に星エトワールみたいですよ先輩、輝いてます！

長い尾を引いていた星は光を失い……そしてふわりと私の目の前に舞い降りたのは。

本当に天使でした。

甲種二級構築士、エトワール先輩です。あいも変わらず、金髪碧眼の童顔。でも今日は顔を布で隠したりしてない、堂々と顔出しです。純白の衣を纏い、金色の帯を締めて長いローブ着てる。私がつるんとした白いワンピースだけど、彼の衣装はもつと整っててキリスト教の司祭服みたい。何だよそっち着させてよ私にも、こっちの方が粗末じゃなかよ。で、お約束の純白の大きな翼を背負ってる、長い翼はきれいに羽づくろいされて、自在に動くみたいだ。見とれましたよ私。

美しすぎる天使じゃね？

なんかよくTVで取り上げられてる、美しすぎるシリーズに追加されそうなほど美しいんですけど。百パー私が引き立て役になりそう。天使なんだから私を引き立ててよ……と思えど空しい話。

前は男らしかったと思うんだけど、去勢されたのかな、中性的な美形になってる。

『ようこそお越しくださいました、エトワール先輩。これからよろしく願います。美しい翼ですね、純白がまぶしいです』

まずは後輩の私が挨拶。挨拶は社会人の基本ですよね。

『やあ赤井君、また会えたね。今度はエトワールとして君と一緒に仕事ができて嬉しいよ。ちなみにこの翼、カラーバリエーションが12色あるんだ。飽きたら他の色にするよ』

先輩、ぴろんと翼を持って嬉しそう。カラーバリエーション12色?! 着せ替え携帯みたいですね、気分に合わせて好きな色をチョイスできるわけですか。いいなー楽しそう。私の後光もカラーチェンジできたらいいのに。いやいや、そんなことは今どうでもいいから

『先日は私、先輩に申し訳ないことをしてしまいました。卑怯な方法で先輩をログアウトさせてしまい……どうしてこんな失態を犯した私のところに再び来てくださったのかと、不思議に思っています』
ずっと心に引っかかってたから、当然謝罪します。許してもらえとは思わないけど、謝らないと気が済まないんだ。

『ああ、あれはいいよ。私も昇進できたし、目的は果たせた』

先輩、につこりとほほ笑む。全然恨みがましくないのな。竹を割ったような性格で助かる。何か先輩に後光が差して体が輝いてるんだけど、私より神々しくないかこれ？

『ここに来た理由だけど。君へのオファー、一件しかなかったら？』

え、はい。エトワール先輩だけでしたけどそれが何か。もっと何件もオファー来るもんなんですか？ 私が『はい』と神妙な面持ちで頷くと

『君のエリアは構築が遅れているから、天使役の甲種構築士たちに人気がなくてね。誰も手を挙げなかったので、君には使徒がつかない予定だった。でも公害汚染をした地区を残してきたし、君一人では対処法も分からず苦労するだろうと不憫になってね。私は既に移籍先が決っていたのだけれど、それを蹴って君のエリアにオファーを出したのさ』

ここ来てくれたのは私のことが好きとかグラランダの民が心配とかじゃなくて、お情けだったんですか！先輩、人気のない私のエリアに進んで来てくれるとか……どんだけいい人なんですか！

てか私のところ、そんなに遅れてるの？ ちよつと深刻に受け止めないとな。でもその割には西園さん、あまり私にはっぱかけないな。焦らせちゃいけないと思ってるのかな。何にしても、エトワール先輩にはお世話になることこの上ない。先輩は少し表情を引き締め、片手を差し出す。ハンデのある地区に来ちゃったということで、先輩も色々と覚悟のうえの様子。

『とにかく構築を進めよう、寄り道をしすぎて遅れをとっているぞ。私も最大限に力を貸すから』

私も両手で先輩の手を握る。

甲種一級構築士と甲種二級構築士の間で、固い握手が交わされた。

『本当にお世話になります。先輩、今年のお中元の品、送りたいん

ですが何がいいです？』

『うーん。お中元の心配をしている場合ではないと思うぞ？』

先輩は呆れながらの苦笑。ごもつともでした。えーと、仕事の話。仕事の話ね。ちよつと真面目な話しないと怒られるな。

『鉋毒の対処法、教えていただけますか。私にはお手上げなんです。正直、私が聞きたいのはそこ。私の持てる対処能力の限界を超えている。鉋毒におかされた民をどうやって治療すればいいのかわかないよ。万能薬を完成させるにも数年はかかる。その間にグラランダの病んだ民をどうすればいいんだ。』

『ああ、それは大丈夫だよ。私は生体構築バイオコンストラクトを使えるからね。有害元素スナッチだけを生体から略取することができのさ』

いたずらっぽく笑った。生体構築ってまさか、生物個体を構築するってことですか！？

てかもうそれ、私なんかより神じゃね？

第3章 第2話 赤井さんと、始祖たちの謎

エトワール先輩は実に普通にモンジャ集落に受け入れられてました。

私の民曰く、あかいかみさまの天使さまなら大歓迎です、だって。うちの民はあいも変わらず友好的。警戒心のけの字もなし。

エトワール先輩、美しすぎる天使ですし男女問わず子供にも大人気でした。

悪役だったときと違って先輩も素民の皆と友好的に接することができて嬉しそう。はいはいやっぱりイケメン美青年がいいんですか素民の皆さんもそうですよ、私より先輩の方が人気出たらどうすればいいのよ、傷心のあまり放浪に出ちゃうよ？ と体育座りで遠巻きにすねていたら、『面倒くさい神様だなあ赤井君は』と、エトワール先輩が私に鏡（インフォメーションボードを改造したもの）を見せてくれた。

私がアガルタに入って九年目。初めて自分の顔を見たわけだけど、先輩と同レベル、いやそれ以上の超絶美形でした。なんか自分で言うのもどうかと思うけど完璧。赤毛で赤い瞳のぱっちり二重、鼻筋が通って肌つるつる、ほくろの一つもなし。直視できないほど神がかった美形グラフィックだ。驚いて思わず全身でエビ反りになって鏡からのけぞってしまった。この顔のまま現実戻らせてもらえませんか？ ダメですな却下すか。

で、鏡を見せてもらって密かに気をよくしていた私はともかくエトワール先輩、お察しの通り、子供にも懐かれまくって翼は滅茶苦茶引っ張られてました。何本か大事な白い羽根も抜かれてたな、いつか全部抜かれて翼が手羽先状態にならないか先輩？ あ、そした

ら新しいカラーバリエーションの翼が配給されるのか。いつか全色
コンプできたらいいですね。

手羽先といえば名古屋の世界の山ちゃん……て、B級グルメの話
はもういいか。

でも先輩、天使になっていいこと尽くしてわけでもないらしい。
ギメノさんを演じていた時とは勝手が違う。

区画解放前（ハイロードへの区画譲渡前ってことね）って、甲種
一級構築士ではない構築士がその区画と民を預かって執政するらし
いんだけど、先輩はベテランだったから、大気を介してグランダの
民の、邪神（私のことね）に対する恐怖心やら信仰の力を集めてそ
のエネルギーを元手に構築の仕事やってた。

ちなみにハイロード以外は別に民からの信頼の力じゃなくても、
民の信仰の力やら邪念やらでも力の源にできるらしいよ。だから先
輩、グランダで敢えて恐怖政治やってたわけだ。それは私に民を引
き渡す準備でもあったんだけど。事実が明らかになったら一気に先
輩が信用を失うようなやり方。元内科医らしからぬ医療倫理から外
れた外道でも、手段としては巧いと感じたりもした。

一方、ハイロードの力の源は厳密で、信頼の力以外にはエネルギー
源にできないみたい。ハイロードと他の構築士たちの格差づけと
いうか、神としての聖性、公正さ、慈愛の心を維持させるための縛
りなんだろう。ハイロードが邪神になっちゃったら困るしね。あ、
それから今日先輩から聞いたんだけど、神通力の源、信頼の力や信
仰によって生じるエネルギーの正体ってアガルタ内ではアトモスフ
エア（Atmosphere）っていうらしい。

和訳すると大気圏とか雰囲気とかそんな感じだったけ。
要するに素民の思いの籠ったエネルギーを私たち構築士はプラズ

マ圈のように自身の周囲にまとい、そこから小出しに力を引き出し
ては奇蹟を起こし構築を進める。神様のアトモスフィアだけは純粹
で特別だから神通力と呼んでいいらしいけど、他の構築士も共用で
きる一般的な用語ではアトモスフィアっていうらしい。だから先輩
も私のサポートの仕事をする為に、方法はどうであれアトモスフイ
アを回収しないとイケない。

先輩は今はギメノさん役じゃないから邪悪な信仰の力（これもア
トモスフィアなんだよね、純度と質は悪いらしいけど）はエトワー
ル先輩に流れてこない。構築士としての力が使えないので困るとの
こと。

私が民から一括で、信頼の力をベースとした純度の高いアトモス
フィアを回収して先輩に分け与えるか、先輩自身が直接民たちを抱
擁することによって私の代理者としてアトモスフィアを民から回収
するかの二案が浮上。

お互いの仕事に差し支えないよう、民からのアトモスフィアを
私と先輩で分配しないと。なんか扶養家族ができたみたいだ、責
任を感じるよ。

てなわけで、先輩が直接祝福して民からアトモスフィアを回収し
てくださいってことにした。私の神体を介しての間接供給だとロス
が多そうだ。多少私に流れ込む神通力が減って先輩に流れても、人
数が多すぎて全員に祝福するの大変だし分担にした。先輩には是非
とも構築士としての力を遺憾なく発揮してほしい。アトモスフィア
不足で力が使えないとか申し訳なさすぎ。

それに私が一括で回収するって話だと、新たに増えた民を含め老
若男女総勢千八百人も抱かなきゃいけないくて、さらに先輩とも男同
士で延々とハグしあわないといけないところだった。

そんなの無理、精神的に削られる。

西園さんは喜ぶ構図かもしれないけど私がげっそりしちゃおう。話し合いの末、私が千人、先輩が八百人の祝福を担当。ってな比率になった。

一応、大気を介しての祝福方法も聞いてみたんだけど、『無理無理、赤井君にはまだ絶対に無理』と敢え無く却下で教えてもらえなかった。

結局私もまだまだひよっこ神様。

しかも他の凶神たちと比べても底辺レベルの落ちこぼれ。わずか八年で原始時代から弥生時代後期ぐらいまで進めたって私の民すごくね？ と調子に乗ってた時期が私にもありました。井の中の蛙とはこのこと、恥ずかしすぎる。他の構築士のペースが異常に速かったみたいだ、相対評価だから周囲がデキると辛いよ。エトワール先輩がお情けで私に付けてくれなかったら、まだ一人たらたらと構築して他エリアとの差を広げるところだった。

二十七管区に入ってる構築士の人たちに迷惑かけないように早く進めないかね。

ところで私たちはというと洞窟に結界を張って引きこもり、談笑中。色々先輩に教えてもらわないといけないことが山積みだ。まずはロイメグやハクさんとちとグラランダに行って先輩の十八番おはこの生体構築ストラクトのスナッチってモードで民からカドミウムを解毒してもらおう予定。先輩も、自分で鉍毒汚染しちゃったから責任を持って彼らを癒してあげたいみたいだ。

『その生体構築ってやつ、私いつ頃できるようになります？』
何かと便利そうですね、早く使えるようになりたいんです。そのモード使えたらチートだ。万能薬なんてなくても、どんな病気でも

基本的には治してあげられるようになるよね。先輩、あぐらをかきながら腕組み。

『いや、何もしなければ永遠にできないよ。仮想空間とはいえ生体構築は人体の組成をいじる先進医療行為だからね、一般神がほいほいやつていいもんじゃない。医師免許か薬剤師免許がなければ生体構築はできないんだ』

『じゃあ私、ずっとできないんですか』

医師免許も薬剤師免許も持ってませんよ。持ってるっていつても危険物取扱者の資格ぐらいです。

『まあ、持つておいて損はないと思うし医師免許も薬剤師免許も両方とつてみたらどう？ 仮想空間で執務する凶神や構築士への福利厚生というか優遇政策で、アガルタ内からありとあらゆる国家資格試験を受けられるからね。独学で勉強して仮想実習をやれば医師免許ぐらい取れる筈さ』

先輩、そう言つて頭を掻きながら大あくび。昨日は徹夜で妻と自宅で4Dシューティングゲームをやつたので眠たいんだそうだ。どんな日本人妻だよ、ゲーマー夫妻かよ。そんなツツコミを心の中に入れてつ。そんな簡単に医師免許とか取れるわけなくね？

『そんなあ……私、先輩みたいに頭よくないし取れるわけないです』

『いくら君がアホでも、十年も勉強すれば何とかなるだろ？ 十浪でも二十浪でもすればいつかは取れるさ。私なんかはフリーランスだし契約が切れたときや突然の解雇なんかに備えて、構築中に日本での弁護士や公認会計士資格も取得しておいたよ。医師国家試験を受験するつもりがあるなら、試験に出そうなヤマぐらひは教えてあげるよ』

あ、そうか。時間なら腐るほどあるんだつたよ。なにセログアウトまで千年あるんだよ、いかにアホでもそれだけ時間かけて勉強す

れば医者にはなれるのかも。

にしても資格ホルダーっすね先輩。でもそんな弁護士資格とか持つてるのに構築士やってるってことはこの仕事が一番稼ぎがいいんでしょね。私も先輩に教えてもらって勉強してみようかなあ。第一区画解放が終わって、私はインフォメーションボード上で電子図書を限定的に参照できるようになったしな。その中には医学書も充実していたから、手があいたときに少しずつ勉強はできそう。

うーん。でも、勉強とかしてる場合なのかな。第二区画解放に向けた準備とかしないといけないんじゃないか……。

『第二区画ってどこにあって、いつ解放になるんです？』

『いや、どこにあるかは知らんよ。時期はまだまだ先だろう』

えー、二十七管区に百二十年もいた先輩ですら知らないんですか？ 普通は知ってる筈だよな。だって先輩、リアルで他区画の構築士と雑談とかしてるんじゃないでしょうし。守秘義務があるから、どんな区画なのか私には明かせないんだよな。私だけハブられてるんだよね。

『ただ……第二区画の構築士にこないだ小田急線で会ったとき、赤井君の希望だと聞いてMofu-Mofuモフモフなものを作っておいたと言っていたな。君のやる気が出るようになって。ところでMofu-Mofuってなんだ？』

え！？ 何それ嬉しい！

モフモフ作ってくれたんですか！ てかどういふ状況でモフモフ作ることがあるのよ？ 出来損ないの私を励ます為に作ってくれたんすか。第二区画の構築士さんありがとう……！ 悪役なのかもしれないけど、基本的な職場環境だったんだな。エトワール先輩だって金属精錬とか高度な建築技術をグラウンドに根付かせてくれてたし。

『モフモフってのは多分毛のある動物ってことです。羊とか猫とか犬とかそんな感じの!』

そういやメグの乗ってたアイっていうメスのエドをモフモフの獣にすべく、メグの同意を得て私は毛生え薬をアイのエサに盛ってみた。そりゃ、アイの同意は得てないけどね。なんか秋深まって寒そうにしてたし喜んでくれるはずだ。気に入らなければ脱毛薬を飲ませればいいだけだし。少しずつオレンジと白のシマシマの毛が生えてくる筈なんだけど……アイもモフモフになって冬支度が間に合えばいいな。そして私が心行くまでモフモフする。

エトワール先輩、合点がいったかのようにほんと手を打ち合わせた。さつきから見てるけど、さすが欧米人構築士はジェスチャーが大げさだよな。それが親しみやすいつちゃ親しみやすんだけどさ。『ああ……なるほど。赤井君がモフモフ好きだと聞いて、張り切って作ったみたいだよ。バイオコンストラクトを使ったんだろうな。羊やリヤマ、アルパカみたいに毛の取れる動物だと嬉しいね』

先輩、分かってらっしゃる!

『私たちもついに羊毛もどきのセーターが着られるわけですね!』

『私たちはこのコスチュームだろ。着たってすぐ朽ちるぞ』

先輩は煌びやかな衣装着てますけど、私のコスチュームって九年も着たきりですし、簡素なデザインの白ワンピースもいい加減飽きました。その前に下着はかせろって話なんですよ。

そんなこんなして先輩や民たちとまったりと久々の日常を過ごしつつ。グラндаへ出発する前日の夕方、ロイが民たちと戯れる私とエトワール先輩の前に来てきて土下座。

「赤井様、明日のことですが」

『どうしましたロイさん、出立の準備はできましたか?』

「直前まで考えたんですが、やはり俺、集落に残りたいんです」

ロイ、ばつが悪そうにドタキャン。そりゃーロイは賢いし力持ち

だし手伝ってくれたら助かるけど、本人が乗り気じゃないなら残ってくれていい。ロイもやつと肩の荷が下りて普通の人間に戻ってのんびりしたいところだろうし。ハクさんたちも来てくれるしエトワール先輩もいるから大丈夫だよ。

『それは構いません。あなたの意思に任せます』

「一時のこととはいえ俺に赤井様、そして天使のエトワール様が揃って集落を去るとなると、集落の安全が心配だったんです」

そっか。第二区画はまだ解放されないらしいし、すっかり油断してたな。そうだよ三人ともグランダに行ったら集落に万が一のことがあっても誰も対応できないよ。感心だなー、ロイは国防の意識がある。

「俺もグランダの復興は手伝いたいです。でも、集落（むらた）のことが気になります。そこで赤井様。あなたがいない間、再び神通力を預かってよろしいですか」

ダメダメ、平和なときにロイに力をあげられない。だって痛いもんあれ。まさかロイ、マゾじゃないよね。あの時の苦痛でマゾに目覚めちゃったわけじゃないよね？

『神通力の授与は苦痛を伴います。私はあなたに苦痛を与えたくありません。何か困ったことがあれば、モンジャの地から狼煙をあげてください、対岸から見てすぐに駆けつけますよ』

「ほんの少しでいいんです。雷を一度だけ呼べる程度の神通力で、食い下がるロイを、エトワール先輩は興味深そうに見下ろしてる。

『それっぽちの力で何をするのですか。ロイさん、私は確かに頼りない守り神です。黙って集落を去り、長い間あなたに全てを託して戻らなかつた……。でも少しは信用してください。狼煙が上がれば、今度こそ必ず戻ります』

私がいるのに信用ならないとか、ちょっと情けないよ。もっと頼

りにしてよ、自立してくれるのは嬉しい、嬉しいんだけどさ。……でもこうやって少しずつ人間が賢くなつて自然の脅威に対する力をつけて、なすすべなく祈るばかりの神話の時代を脱出してゆくんดารうな……過去、私たちの歴史がそうだったように。ロイは私が教えた智を以て民を導いてゆくんだらう。

神である私はいつか、この世界で誰からも必要とされなくなるんだらうな。

そして真に人間の時代がやってくる。

そうなつたときに構築士は、誰にも見送られずひっそりとログアウトするのかもしれない。

私の構築してゆく世界が完成し、私の手を離れる。それは人が神を忘れるときなんだ。彼らの進歩を嬉しく思う反面、未来のことに思いを馳せるとちよつと寂しくなつた。

どうしようか、また痛い思いをさせたくないし。と私が悩んで俯いていると。

「赤井様が御心みこころをいためる必要はありません。雷を一度呼べるだけの神通力があれば、俺は自らに雷を落として力を増幅させることができる。何事もなければ神通力は使いませんし、有事に備えて少しでいいんです」

ロイ、恐ろしい子だ。

自分に雷を落として充電チャージとかどんだけだよ！ 無限蓄電法じゃねそれ？ 何度も落雷を自分に落とせばエネルギー供給だよ。私も今度アトモスフィア不足でピンチになったらやってみよう。

『わかりました。あなたはますます賢き青年となりましたね。私も誇らしいです』

というわけで私はロイを軽く抱擁し、きつちり1・5GJほどの

神通力を与えました。

ロイ、痛いとも痒いとも言わなかったな。別に痛くなかったんだろ。ロイは私に懇ろに礼を述べ、肩をぐるぐる回して首をコキコキ鳴らしながら家に戻っていった。後ろ姿がワイルドすぎだ。

『さすがというべきか。恐るべし、というべきか』

エトワール先輩、ロイの背を見送りながら驚いてた。そうでしょう、うちの秘蔵っ子で集落のリーダーですから。あの子の成長ぶりには、時々ぞつとすることがありますよ。

先輩、腕組みをしながら一人で頷いて感心してる。で、次の一言を私は聞き逃しませんでした。

『彼はずば抜けているね。さすがは、フォレスター教授の御子息だ』

『え？ フォレスター教授……って？』

私が驚けば

『え？』

先輩もびっくり。あ、先輩すごく気まずそう。口を滑らせちゃったって顔した。何か守秘義務のある重大極秘情報を漏れいしちゃったんですか！？

『赤井君、君は担当官から本当に何も聞かされていないのか？』

うん？ どういう意味？ 聞かされてないからこういうリアクシヨンなんです私。

『存じません。何か知ってるなら教えてください』

できるだけ早めにね。情報は小出しにしないで下さいよ共有しましょうよ。と、ウザいぐらい先輩に付きまとって尋ねまくってた。フォレスター教授って誰？ この業界で有名な人？ ご子息ってどういうこと？ ロイ、確か身よりがなかった筈じゃ……別エリアにフォレスター教授っていう素民のお父さんいるとか？ で、ロイだけこのエリアに出されたとか？ その情報ロイすげー喜ぶじゃん、天涯孤独じゃなくなるよ！

『しかし担当官が言わないのなら……』

先輩、お茶を濁そうとしてる。

そんなあ……、私にも教えてくださいよ！ と、せがんでみてもダメでした。

『彼ら始祖はただのA・Iではない、とだけ言っておく』

やっと聞き出した情報はそれだけ。何だよちつともわかんねーよ、確かにメグやロイの能力の高さやら私に対する信頼の力のチートっぷりは素民たちとは一線を画していたよ。どう特別なのか先輩は口を割りませんでした。でもさ……先輩どんどんボロ出してるけど。文脈から考えるとさ……

『ロイってまさか、A・Iじゃなく人間だったり……とか？ なーんてこと、あるわけないか！』

『お！ 五時だ赤井君。さーて退勤の時間だ、今日の晩飯は何かなつと。じゃあな、お疲れ様。また明日』

先輩、ちらりとご自分の胸元を見てジュワツチって空に羽ばたいて現実世界に帰って行った。いやいや何で胸元みたのよ、別に先輩の胸にカラータイマーとかついてなかったでしょ。不自然ですよこんな時間に退勤とか、さっきログインしたばっかじゃん。

すげー動揺してたけど、先輩って隠し事下手だな。

ねえねえねえねえ、本当にロイメグって人間なの？！ 知らなかつたよまずいでしょそういうこと予め教えてくれないと。そもそも素民はA・I。だってパンフに書いてあったじゃん。A・Iだと思って接するのは生身の人間だと思って接するのじゃ全然違うじゃん、アガルタ利用者（死者）だったらこんな原始時代に放置せずサービス拡充させないと厚労省にクレーム入るでしょ。

……ゴクリ。

ま、まさか素民全員厚労省の職員ですってオチはないよね？ 生身の人間が幼少時代から九年間も原始人の演技してました、とかな
いよね！？ ないよね ！？ メグも実はベテラン構築士で、
現実世界では子持ち主婦だったとかじゃないよね ？

先輩、気になるから早く出勤してきてください！ てか先輩の次の出勤時間っていつよ？ 一ヶ月先とかだったりして。真昼間だったけど洞窟に戻って西園さん呼び出そうとするも、西園さん、不在ですって。西園さん……あなた訊かれたくなくて通信切りましたね？ 生殺しにされた気分の私がゴロンゴロンと転げまわって悶絶しているよ。

「かみさま、かみさま！ 大丈夫ですか！」
肩を思い切りゆっさゆっさと揺さぶられた。

メグが洞窟の中にやってきて、心配そうに私を揺さぶってる。私が猛ダツシュで洞窟に戻ったからどうしたのかと後をつけてきたのな。私が昼間っぱらから洞窟に引きこもるのって珍しい。単に人目を避けて西園さんと通信をしようとしてただけなんですけど。

「あかいかみさま、大丈夫ですか？ どこか痛いんですか？」

『め、メグさん』

これは恥ずかしい。どこも痛くありませんけど違う意味では痛い、てかイタタです。

……私は真剣な顔をしてじっとメグの顔を見る。

私、そっぴや彼女の心読めるんだよね。でもメグはメグだよ、中身構築士とかないでしょ、演技したって心の中までは隠せないよね。演技とかじゃない。ずっとメグのままだ。ロイだってそう、彼の中身を少年の頃から知ってるんだ。彼らは仮想世界アガルタの生命体なんだよ、現実世界のそれではない。

メグ、私の両手を取ってじっと見ている。どうしたの？

「まだ傷跡があります。手と脚とおなか、やっぱり痛いんですね？」

あー、キララにやられた手首の呪いの杭のあとか。傷は癒えたけど、痕は残っちゃったんだよ。……いやいやいや、それとこれとは関係ないです。私が悶絶していたのはですね。これは先輩の謎の言葉が気になって悶絶してただけでしてね。メグ、仰向けになった私のお腹に手をあてて優しくさすってくれてる。

いや、だからお腹痛くないよ？

私、虚弱体質とかじゃありませんしお腹壊したりしませんし大丈夫です。

「かみさま、私たちを守るために長い間外の壁にほったらかされて、はりつけになってたってグランダの人から聞きました。たくさん血を流して傷つけられて、弱ってしまっただけ。そのときの傷がまだ、治っていないで痛むんですね。こうして時々痛むんですね」

『メグさん、これは違うんですよ』

全くもって勘違いなんです、とほほ笑むもメグは信じてくれない。するとメグ、自分で織った黄色の温かそうな布を私のお腹にふわりとかけてくれた。布団のつもりなのかな、すげーあったかい。

「私、かみさまがいつかお空に帰るまで、これからはずっとかみさまの傍にいいですか？ かみさまのことが心配です。かみさまは優しいから、皆の為に黙ってたくさん傷ついて……本当は辛いのに隠そうとして。その苦しみを、私が少しでも近くで癒してあげられたらって。皆よりかみさまに力をあげられる、だから私、一緒にいてもいいですか？」

私、仰向けになって寝かしつけられたまま赤い瞳をぱちくり。で

もメグはじんわりと目に涙を溜めて……溢れだしそんな感情は、多分これ私に対する愛情です。嬉しいんだけどさ。メグの顔があっけにとられてる私の上に来てはらりと彼女の髪の毛が私の頬にかかり……気が付いたら、唇にちゅっ、てされてました。メグが私にキスしてきたことなんて初めてだ、当然ですけど。そんなませた子じゃなかったわけ。かといってセクハラになるから、私も昔からそういうスキンシップは極力避けてきたわけですよ。

キスっていつでも、そーいや他の女性には第一区画前のヤンデレしてたときにしこたまやられてたな。現実世界での女性とのキスとはなんか違う、メグのはもっと初々しい感じ。メグも照れてるけど、私も何か目のやり場がなくて、恥ずかしくて赤面。今は赤井が赤面とところが面白く……面白くないようすればいいのこの状況。じっと見つめられてますます目が泳ぐ。

どゆこと、どゆこと!?

ひよんなことから、てかむしる勘違いでメグから告白。

メグは素民、A・I・だ。二次元の住民だし私は男性でもないんだから恋愛なんてもつてのほか。でももし先輩の言うことが私の読み通りだったとしてメグの中の人が構築士だったりしたら……。

「大好きです、あかいかみさま。傍にいさせてください」

切なげな声で、涙で潤んだ黒目を伏せがちに私にそう言ってくれるメグ。

これ、普通に人間同士の職場恋愛、ってことでアリなんですかね？

メグ、一体君は人間なのA・I・なの？

393

第3章 第3話 赤井さんが人間だったころ

私が人間、なんちゃら桔平だった頃。

それはアガルタにログインし凶神となる前の話だ。

大学時代を通じ、私は硬式テニスサークルと天文サークルをかけたもちしてた。

私の出身大は酪農や獣医学部なんかに力を入れてる……え？ 北大かつて？ えーと……。

あーもうばれたね……私完璧に身バレしちゃったね。西園さんに怒られるな、てか私が危険なのか。ログアウトしたらすぐ刺されちやう、定年退職したら速攻引越すことにするよ。年齢と名前と出身大と出身県と出身学部うっかり言っちゃったし。でもそこは大人な対応でお願いしますよ国民の皆様、特定とかしないでくださいよ。

北大同窓生のみなさんも卒アル出して某掲示板とかで個人情報晒さないでくださいってば……自意識過剰か。でも卒アルはやめて！ 卒アル出すぐらいならすぐ本名乗って顔出しすつから先に厚労省にアポとってよ！ あの頃私の髪型ひどかったからさ、若気の至りってやつです。あ、今はロン毛だ、更に酷い。今はいいんだよ超絶美形グラフィックなんだし。

まあともかく。北海道大学なんですけど、北海道の夜空って星がきれいに見えるんだ。都会の夜空とはわけが違うよ、天文観測（観望会）にはうってつけ。すばる第二天文台とか、郊外に出かけたりして観望会をやってた。

天文研は大学附属施設の高感度望遠鏡も利用していたから、新入

生勧誘のために春の観望会を企画してた。彼女とはそこで知り合ったんだ。

サークルメンバーはもちろん、多くの学生たちが観望会に来てくれてたな。土星とコルカロリ（獵犬座）を見たんだっけ。

私はホットドッグとかフライドポテトを作っては手渡す作業に明け暮れてた。サークル勧誘って言ったらやっぱ食べ物付きでしょ？

その中の学生の一人が彼女、名前は伏せるけど獣医学部二年で私も理学部生物学科二年。彼女はひとりで観望会に来ていたんだ。初対面だったけど同年の同級生だって分かって、急に打ち解けて……。

私は天文について熱く語り星座や宇宙についての蒞蓄をいつもの調子で冗長に説明してたけど、彼女は興味を持って聴いてくれてた。時々私に投げかけてくる質問が的確で、頭のいい子だなと思ったよ。私の好みのタイプで、凜とした小柄で華奢な透明感のある美人だ。目も大きくてぱっちり、まつ毛も長かったな。鼻筋も通って顔はちよつとメグに似てる気がしないでもない、メグの方がかわいいけど。指先のきれいな子だったよ。

観望会は二時間ほどで終わり、何人か入部希望者もゲット。ほくほく顔で私やサークルメンバーが片づけやらしてたら、彼女も片づけを手伝ってくれ、私の話をまだ聞きたいって言ってさ。逆ナンだったのかな？ いやそういう雰囲気じゃなかったよ。単に彼女、宇宙や星が好きだったんだよね。

というわけで私は食事に誘われ、駅の近くにあるもんじゃ焼き屋へ。東京出身の彼女、東京が恋しくて急にもんじゃが食べたくなったらしい。

その頃、私はもんじゃなんて食べたことなかったから焼き方を含め全然勝手が分からなくて、彼女に食べ方から何から指南を受けた。彼女の作ってくれたもんじゃがまた、おいしかったのなんのつてさ。彼女への興味もあって、モンジャに補正かかってたのかな。それ以来すっかり私はもんじゃにはまっってしまったて、……つまり彼女にもめり込んでしまったんだよね。

翌月にはもう付き合ってた。

星のよく見える丘でお互いに好きだっって照れながら言い合ってた。今となつてはしょっぺー思い出だ。国民の皆様は過去の恋話を大公開してるのが痛々しくて恥ずかしい。まあ私こと赤井が痛いのは今更だよね。

私と彼女は二人で天体観測に出かけたりしながら二年半の歲月、喧嘩もなく仲睦まじく、お互いを刺激しあい高めあいながら付き合ってた。楽しかったな。牧場で馬に乗って遠乗りしたり、ドライブして郊外の草原でテント張って朝まで星を見てたり、宇宙論などの議論になったり、将来を語り合ったり。

彼女と一緒にシャッターを開きっぱなしにして冷却CCDカメラをバルブ撮影で撮った天体写真、彼女のお気に入りだった。北極星を中心に同心円状に光の渦が取り巻いて、星の軌跡が綺麗に映ったやつ。あれを大きく引き延ばしてポスターにしたのが、まだ私の実家の部屋に飾ってあるな。

二人で一緒になる約束もした。私はバイト代で買った、ティファニーのシルバーリングを彼女にプレゼントしたっけ。彼女と一緒になろうね。ずっと一緒にいるから」なんて言ってくれた。舞い上がってたな、私。

恋愛ももちろん、私達は学業をおろそかにはしなかった。二人ともあくせくと頑張っていたよ。彼女は獣医への道を志し北海道中を

飛び回り農場での実習にあけくれ、そして私は異様なまでに科学全般に没頭し……今思えば、頭のいい、小生意気な彼女に負けたくないかったのかな。何か一つだけでも彼女に勝る取り柄が欲しかった、まあそれが私の場合、科学だったんだよね。大して雑学と変わらなレベルだけど。私も実験などに励みながら忙しい大学生活を送ってたっけ。

でも、私達が四回生になって暫くして……。

彼女が失踪した。

私にも友達にも知らせず、急に休学届を出してアメリカのマサチューセッツに旅立ってしまったらしいんだ。電話にもメールにも連絡しても繋がらず、行方も知れなくて。彼女の東京の実家にも行ってみただけでもぬけの殻で、随分前から空家だった。何でマサチューセッツなんだろうと勘繰れば、彼女の元彼、MIT（マサチューセッツ工科大）の学生だった話を彼女の親友から聞いた。

そっか。

元彼のことを忘れられなくて追いかけて行ったのな。写真も見せてもらったけど、爽やかなイケメン。頭もよさそうで、優しそうな。全然私なんてかなわないや。そう分かるともう、何かどうでもよくなった。あんなに時間を共有し愛し合ってたと思ってたのは私だけか。

その後はちよつと荒れた。一人酒を飲んだり、サークルの集いにも顔を出さなかったり。すっかり呆けてしまつて就職活動も全社面接落ちという体たらく。覇気のないリクルーターって面接官には分かるらしいよ、ただでさえ就職難だったのに私ったら本当にアホだった。就活中の皆様気を付けてね。結局、普通の会社受かるより何千倍も難しい（自分で言うな？）甲種一級構築士にはなれたんだけど

ど、精神的にはどん底だったなーあの頃は。
それほど好きだったんだよ。彼女のこと。

それ以来、私は彼女の姿を見ていない。日本にも戻ってきてないみたいだ。大学も卒業してないって友達に聞いた。頑張つて勉強してた獣医の夢も諦めたんだろうな。何か悲しくなった。

彼女が全てを捨てて失踪、てか元彼と駆け落ち？

割とよくある話なのかな？

でも私は彼女を赦せなかった。

裏切られた思いだった。一言「別れたい、元彼が忘れられない」
つて言えば終わる話だったのに。別れを告げられたら私も辛いけど受け入れて前に進むことができた。私たちは別れる機会さえ失った。何もかも捨てて、彼女の将来も過去も、私の彼女への想いも裏切つて失踪したなんて……それでよかったのか？ 君は本当に。

完全に女性不信に陥ったな。その後は二、三人綺麗な子に告白されて付き合つてすぐ別れた。遊びとかそんなじゃなく、彼女らとも誠実に付き合ったよ。いい娘たちだったけど、でもやっぱり彼女とは違う。私が結局本気になれなかったんだ。別れ際にはひっぱたかれたりしたな。当然ですけど。

その後はアガルタに降臨し神様となった。

性別を超えた人間愛の塊みたいな存在になった私は精神安定化され煩惱も消され、精神的にも人格的にも安定している。私が人間性を失ったことについては、厚労省の処置に多少感謝してもいる。彼女に対する煮え切らない思いも煩惱も消えたんだ。ずっと忘れられなかったのに。けど、彼女は何故私に黙って去ったんだらうと、アガルタにいても時折思い出すことがある、恨みがましい意味ではな

くて。人間の性質を、そして感情を理解したくてね。というところからいいけど、やっぱりまだ未練あるのかな。

真つ暗な洞窟の中で一人で暇にしていると特にそう思う。

他人を信じる心、人間同士の信頼の尊さ、強さ。

本能や愛憎、感情に引き摺られ判断を狂わせる弱さ。

私はこの世界に来て、両極端な人々の性質を見守ってきた。

神様になった身でかつての人間としての私を客観的にみると、やっぱりお互いに不完全で弱かったんだろうな。って結論に落ち着いた。不完全で弱い、それが人間という生き物、そうでなければそれは人間ではなく、生の営みから外れる。この私のように。

人の愛情は移ろい、悲しみも年月に浚われて消える。

私が現実世界での彼女と同じように、いやそれ以上に愛し、私を愛し続けてくれた大切な人。そのメグからの告白だ。嬉しくなかったかと言われれば嘘になる。

でもメグ、君は私の何を見ているの？

私は神様で、人間ではないと君たちに言ったけれど。本当はその逆。

私は人間で、神様ではない。

この物腰やわらかな性格は演技上のものであって地の性格ではなく、金銭報酬と引き換えに私は自らを偽り嘘をつき、君たちを騙しながらアガルタの世界に存在する神だ。君が好きなのは私の少なくとも、桔平の部分ではない。君は「きつぺい」という名のあかいかみさま」としての私が好きなんだよね。

私は私の本来の人格である桔平の部分を、一度だって君の前で曝

け出したことはないよ。

だから告白を受け入れるわけにはいかなかった。君の誠意に応えるためにも。怖かったんだ、本当の自分を君にみせることが。

メグ、君がA・Iであるなら私に恋心を懐くのは不毛だ。人間でもなく、この世のものでもなく、男性ですらない私を好きになつたつて決して報われない。何故なら人間は人間同士で互いに愛し合い、命を育み次世代を担ってゆく生き物だから。命の営みから外れた神様は、恋愛対象ではないんだよ。

君が人間だというのなら、私は君の告白を受け入れてもいいのかもしれない。でも私たちはまだ、そういう段階にはないよね。このグラフィック仮面を脱ぎ捨てるまでは、本当の意味で私たちはお互いを見ていない。

だから、どちらにしてもNOだ。

はつきりと告げようとしたけど……メグの想いはもっと不器用で拙かった。

「あなたの傍にいたいんです。それ以上は何も望みません。いつか私の命が尽きるか、かみさまが空に帰る日まで、一緒にいられればそれでいいんです。その時まで……」

メグの口調は、現実世界のことなど知らない様子。外の世界に連れて行ってくれとも天国で会おうとも言わない。西園さんの目が気になって現実世界の人間だと言えないと仮定しても、その気になれば現実世界の隠語などいくらでもある筈だ。それを言わないってことは……。

やはりメグはA・Iなのか。私は迷いの中で、訥々と語りだした。

「私はこの世界の守り神であって、あなた方の幸せを願うものです。私に捉われては、あなたが幸福になれません」

仰向けになつたまま、至近距離のメグを見つめ肩に手を置いて慰める。メグは悲しそうに表情を曇らせていた。

メグ。私と君の間には強い絆がある、でも私の歩む道に有限の命を持つ君は絶対についてくることができないんだ……。メグもそれを悟っていたんだろうか、しょんぼりと肩をすぼめ、私のお腹のあたりにしおれて頬を乗せた。涙混じりの声で、悔しそうに呟く。

「もっとあとがよかったです」

メグは小声で、私の腹の上で本音を漏らす。

あとつて何？ 辛抱強く続きを待っているよ、

「もっと、私はあとの時代に生まれたかったです。……最初ではなくて。あいかみさまの造り上げる世界を見届けられる、最後の時代に生まれたかった」

背筋が凍りつき、全身の毛穴が締まった気がした。

彼女の言葉を思い出した。北海道の十月は肌寒い。あの日、彼女と私はスキの生い茂る郊外の川辺に寝そべり、虫たちの鳴き声をBGMに、二人で毛布を分け合つて夜空を見上げていた。皆既月食の日だったんだ。翳りゆく月、同時に現れる満天の星空。私達は星空のもと、とめどなく話をしていて、未来のことに思いを馳せた。人々は太古の昔からリレーのように子から孫へと世代を受け継いでゆく。現代人は恵まれている、寿命すらもなくなつただなんて。でもこの世界は、いつまでも私たちのものではなく新たな世代のものだ。私達は必ず死ななくてはならない。私の感想に、彼女は同意してくれなかった。

”でも……私はこの時代に生まれるより、もっと未来に生まれたかった”

彼女は私と分かった毛布にくるまりながら、頬を紅潮させほうつと白い息を吐いた。白い息だ。

”そう？ 俺はこの時代でよかったと思ってるよ、俺らはまだ地球にいて空は青く地球は狭い。十分じゃないか”

ほどよい進化段階と、未だ清浄な地球環境。美しい地球。

現代社会に生まれてよかったと私は思っていた。死することはすなわち、永遠に続くアガルタでの生の始まりでもある。アガルタがある限り私たちは死を恐れない。すると彼女は、思い出したようにこう言った。

”ねえ桔平くん。例えば仮想死後世界アガルタで生まれ死に怯える生命体は、その世界の外を知りたいと思うのかな。私達の現実世界を、あたかも神々の世界のように思うのかな”

私達の科学はこの二世紀で飛躍的な進化を遂げた。高度に発達した都市は、陸上、海上、空の上を問わず建設され、私達はどこにでも根を下ろし、はびこり、どこでも産声を上げることができる。

地球上のみならず、宇宙への進出も続いている。かなり制限された暮らしではあるものの、宇宙空間で長期間生活できるようにもなった。私達は、至る所に命を撒き散らす。

でも未だ、私達は太陽系の中を飛び回るだけの小さな生命体に過ぎない。宇宙の外に何かあるのかを知らない。太陽系を抜けヘリオポーズ境界面を越え、人類の造り上げたもののうち最遠を往くボイジャー2号が到達したのは、宇宙の広さに比べればほんの僅かな距離に過ぎない。まるで入れ子構造になった模造の世界のように、私たちはアガルタのような場所に閉じ込められているのだろうか。彼女の疑問は哲学的であり、そして形而上学的でもあった。

この世界のアンカーに生まれかけた。

連綿と続いてきて、これからも続いてゆくであろう命のリレー。私達を守り育てた世界がどんな完成形を迎え、宇宙の外には何があったのかを見届けたかった、と彼女は言った。

やっぱり勝てない、見えない神様には。そうも言った。

鮮やかにフラッシュバックする過去。私は人のそれではない赤い瞳を見開き、ざわつく心を抑えつけながらメグの言葉の裏に彼女の残響を聞いた。切々とつづられる、メグの願いは続いている。

メグも彼女と同じ気持ちなのかな。

A・I・なの……彼女と同じように、未来に思いを馳せることができるんだ。メグの感情が豊かになり、彼女の自己哲学は同年代の現実世界の人間と同レベルにある。君がそんなに知恵をつけ、心を知ってしまったら。

別れが名残惜しくなるじゃないか。

「私はすぐに終わる命だけど、ここで死にたくありませんでした。あかいかみさまの世界がどんなになるのか知りたかったんです」

何だろう、この胸騒ぎは。

メグ、私もだ。

君とお別れしたくない。

第3章 第4話 赤井さんとラウル兄妹と治験について

メグの告白への返事、私は結局曖昧にしてしまったのかな。

「付き合つて」と言われたわけでもなく、私の傍にいさせてと言っているだけなのに『駄目です』と断るのもまたおかしな話。私はメグに、もう黙って集落を去ったり消えたりはしないから心配しないでくださいと言うと、メグは安堵したみたいだ。その日はそれで話が終わった。やんわりと、はぐらかした形だ。ごめんねメグ。私が煮え切らない、優柔不断な男で。

翌早朝。

グランダの復興を手伝うため、私、メグ、ハクさんにユイさんにサチ、そしてハクさんの弟子十人は旅立ちのときを迎えていた。

集落の人たちが皆の為に弁当を用意してくれ、ロイには何度も「危険なことはいしないで無事に帰ってきて下さい」と念押しされ、日の出とともにグランダへ出発。以前ロイメグはアイに乗って最短時間でグランダに乗り込んできたけど、今日は人数が多いのでアイの背のタクシーも定員オーバー。他に交通手段もないので、では徒歩でまったり行きましよう、ということに。

アイの背に薬草や食糧などの荷物を載せ、私たち一行は森の中を湖に沿ってグランダを徒歩で目指す。毛生え薬を飲んだアイは、少しオレンジ色と白のシマシマの産毛が生えてきたな。モフモフ化が楽しみだ。本人は迷惑かもしれないけど。

エトワール先輩がまだ出勤してないけど、先輩は翼があるし飛べるから適当にグランダで合流してくれるだろう。てことで、彼がいなくてもあまり気にしてない。

モンジャの地を出発して二時間も経たないうち、まだ幼いサチが森の木の根に足を取られたり、木の実を拾って歩いたり皮のサンダルが足に合わず靴擦れができて痛いとかぐずり、行程が遅れた。メグが気を遣ってアイの背にサチを乗せようとしてもサチがアイを怖がる。仕方がないのでハクさんがサチを背負ってはみたものの今後はハクさんが疲れて遅れる。

結局私がサチを負ぶってあげた。私は皆の先頭に立ってインフォメーションボードで地形図をもとに最短ルートをとりながら、岩や小枝のある危険な森の中を裸足で歩く。そういや私、西園さんからサンダルも靴も支給されてなかったし足場の悪いところではいつも足の裏を切って怪我してたな。すぐ治りますけど。もともと支給されたのは白衣と帯だけ、下着もなし。私の部下のエトワール先輩は金のサンダル履いて豪華な衣装着てるのに不公平だよ。靴擦れっても、履物があるだけましなんだよサチ？

サチは私の背に揺られ、どうやら退屈してきたらしく、

「サチがかみさまをかわいくしてあげるねー」

とか言いながら私の赤い毛で三つ編み作ってはほどこいたりしてたな。どうせなら私の髪じゃなく編み物でも編んでよサチ。母親のユイさんも私の髪が三つ編みになったり解かれたりするのを申し訳ないと思ったらしく、サチに黄色と紫の糸を渡すと、手際よく黄色と紫のストライプの帽子もどきを作っていた。さすが編み物上手なユイさんの娘、寸暇を惜しんで編み物ですか。

「あかいかみさまの、お帽子できた！」

サチは出来上がった帽子を私の頭にかぶせてくれたけど、赤髪の私に黄色と紫の帽子って、警戒色すぎるでしょ。クマ避けですか？

『ありがとうサチさん。気持ちだけいただいております』

とお断り。帽子かぶってもボロボロに朽ちますからね。

「えー……あげるよう。じゃ、えとわあるさまの帽子には？」

エトワール先輩の発音、素民たちには難しいみたいだ。

『私も彼も、人のものを着ることができないのですよ』

素民から構築士には貢物一切NG。どういう理由なんだろうね、このルール。素民がこぞって絢爛豪華な衣服とか構築士にプレゼントすると争いのもとになるから？ 無償で行政サービスしろって意味もあるのかな。

「ふーん……そっか残念」

ほんと優しくサチの頭に帽子を乗せて返したら、サチは残念そうな顔をしていた。折角作ってくれたのにごめんね、受け取れなくて。

時折休憩を入れつつ、歌を歌ったりぺんぺん草の実のおこわと果物の弁当を皆で広げたりなどしながら湖畔のトレッキングは続く。

皆、慣れない遠足でうっすら汗ばんできたので湖での行水も行程に入ってる。というわけで昼過ぎには湖畔のビーチで休憩。

男性らは汗を流すついでに腰布一丁で泳いだ。メグもサチも水ニミたいなの着に着替えて気持ちよさそうに水泳。サチも犬かきでスイスイ泳いでるな。ユイさんが眠たそうにしていたので『サチさんのことは私が見ていますよ』と言って寝かせてあげた。ユイさん、朝早くから皆のお弁当作って疲れたんだろう。ハクさんも安心して仮眠をとった。

この湖、うちの集落ではカラナ湖と呼び、グラндаではサブレマ湖って呼ばれてたけど呼び方を統一しようという話になり、ロイとキララが例によって私に湖の名前を決めてくれと丸投げしたので、カラナと響きが似てるカルーアと名付けておいた。なので今はカルーア湖だ。そうですね、カルーアミルクのカルーアです。モンジャって地名が付いたときに私の中で色々吹っ切れた結果だ。他にもテキーラ、マティーニ、ウォッカって名前を考えてたけどカルーアになった。

エトワール先輩が悪役時代に洪水を起こそうとしたおかげで一時はどうなるかと思つたカルーア湖だけど、今は透明度も回復してきて水位も安定し、元の姿を取り戻しはじめている。私の落雷で湖の生態系を壊滅させたかと思いきや、小魚が群れを成し泳いでいるのを見つけてほつとしたもんだ。今後は私も環境保全やら水質浄化に努めることにする。

カルーア湖は風が強くて少し白波が立っていたから、泳ぎやすいよう神通力で風を和らげ凪ぎの状態にしてあげた。湖面は太陽の光を受けて鏡面のように穏やかだ。私も多少泳ぎたい気持ちはあるけど、誰かが溺れないように湖のほとりの岩に腰かけて皆を見守る。夏場のプール監視員みたいだ。透明度が高い湖だから、誰が溺れていても陸からすぐわかるよ。

「あまり遠くに行つてはなりませんよ」。急に深くなりますからね
「はい」、と皆は水中から手を振つて私の注意に感じる。返事がいい。

皆、泳ぎも上手くなったよね。以前は水に入るなりブクブクと溺れてたのに。集落全体のカナヅチ率もだいぶ下がった。私は漁をするヤスさんが溺れないよう泳ぎを教えたけど、その後ヤスさんが皆に水泳を広めたのか、男性らは適当にアレンジして泳いでるな。メグも平泳ぎもどきだ、脚がバタ足になつてるけど。サチだけ犬かき。サチが時々あつぷあつぷして水を飲んでいたので、メグがサチに泳ぎを教えてあげてた。メグは長女だから、昔から面倒見がよかつたんだよね。

メグもサチも水着薄いから、湖面からちゃぽんと上体を出すと胸のラインはつきり見える。私はたとえメグがポロリしても欲情しな

いけど……でも野郎どもからガン見されてるよメグ？ スケスケ水着は刺激強すぎるよ、股間抑えてる人もいるけどどうすんの。湖から上がれない人たち早く煩惱を抑えてくださいね、脚がつって溺れる前に。と、私は男性特有の生理事情を懐かしく思い出しながら同情しつつ。

建築士ハクさんの弟子たち十名、大工さんたちの年齢層は十五歳〜二十五歳までと幅広い。棟梁は三十二歳で陽気じゃない真面目なラテン系のハクさん@就寝中。えーと、大工さんたち十人を一度に紹介すると皆様混乱するだろうから、少しずつ紹介していこうか。

この世界って美男美女しかないから、普通に建築家とその妻子、大工集団なのに俳優女優集団なんじゃないかってほど眉目秀麗。太った人とか寸胴な子とか一切ない。しかも彼ら、美男美女だって自覚がない。この世界ではそれがテンプレだからね。

ひょっとして普段から見慣れている美男子より現実世界でのフツメンの方がアガルタではモテるのかな。現実世界の非モテの人たちには朗報かも。

まずはラウル兄妹。

ハクさんの筆頭弟子が最年長、二十五歳のラウルさん。ラウルさんはこの世界では珍しく銀髪碧眼の厨二病的美男子ルックス。存在自体が厨二設定な私が言うなって感じだね。

また無駄に美男すぎる大工さんだよ。ラウルさんは女性の皆さんの好きそうな逆三角形体型。背もこの時代の人にしては高く、175cmぐらい。線が細いので非力なのかと思いきや、重そうな木材を片腕で軽々と運ぶ力持ち、そのギャップがたまらないのか女性に人気だ。あと、低いハスキーボイスなところも人気の理由かな。

野郎ばっかしの大工集団……と思いきや一人女性がいる。

その子がラウルさんの妹（推定十八歳）のヒノで、お兄さんと同じく銀髪碧眼の美女だ。この集落でショートボブって珍しい。黄色の布で髪の毛をターバンみたいにぎっくり巻いてお洒落な感じ、芸術家肌っていうのかな。左上腕に唐草模様みたいな刺青入ってる、勿論ファッションでね。石のネックレスもデザインが凝ってる。服もうちの集落で流行ってるストライプのテンプレワンピじゃなく、上半身はタイトな黄色と白のストライプのチューブトップ。下はゆつたりな白い巻きスカート。

チューブトップとか……服が十世紀ほど先進的すぎませんか？
彼女は塗装担当で左官業もこなす有能な女大工さん。力仕事はしないけど、内装で能力を発揮するタイプ。

彼女は泳げないみたいで、私の隣に座って見学だ。うちの集落の裏山で採れる甘い木の葉をくっちゃくっちゃ、ガムがわりに噛んでる。ヤンキー座りで。なんとも強烈な個性の持ち主だ。彼女、集落で唯一私にタメ口なんだよね。別にいいですけど。

「まーた兄さん、メグのことばっか見てる」

妹がくすくす笑いながら兄貴を冷やかす。そうなんですか。やっぱりラウルさんはメグにご執心なんですか。私が興味のないふりをして相槌を打っていると

「メグは昔っから、無防備なんだよねえ。兄さんなんてほら、あんなにメグのこと見てるのにさ。ちっとも気づかないの」

私、これまで触れたことなかったけどメグは集落の男性陣からモテモテでした。何回かプロポーズもされてたしな。メグは適当にはぐらかしてたみたいだけど。特にラウルさんはメグにぞっこんで、二回ほど求婚してた。ラウルさんすごいよ一度断られてもめげないそのガッツ、私も見習いたいぐらいだよ。

あー……思い出した。そういえば私、集落の皆がヤンデレ化してるときにラウルさんに肋骨折られたことあるんだよ。ラウルさんてばそんなに私のことが好き……だったのか、メグを巡っての恋敵ってことでわざと折られたのか？

どういうつもりだったんだろ？ 今となってはラウルさんをはじめ集落の皆のヤンデレ化は治ってるし、彼らの記憶ももう曖昧だから真相は分からない。もし私を恋敵だと思ってるならその心配はありませんよ、私は誰とも恋愛できませんからね。

ラウルさんは（私が骨を折られたことを除けば）漢気溢れてるし気配りできて素敵な人だ。太鼓判を押すよ。メグとは年離れてるけどお似合いの二人だよ、YOUたちくつついちゃいなよ。ラウルさんとメグが結婚しても私は心から祝福できるし、メグも私なんかに拘ってるよりその方が幸せだよな。

でもメグの方がさ……。
需要と供給のミスマッチとはこのこと。うまく素民同士で恋愛してくれればいいんだけど。

うん？ 私はそれでいいのかって？

いいんですよ。メグはA・I・なんだろうし絶対に結ばれない。メグの幸せを考えれば当然のこと。家庭を持って優しいお母さんになって、健やかに子供を育んでほしいと思うのは親心だよ。そんなことを考えながらヒノに

『メグさんは相変わらず、男性に人気ですね』
とか振ってみると

「かみさまって人の心が読めるんだって？ 本当かい？」

ヒノがじーっと私のこと見てる。銀のまつ毛のついた青い瞳がきれいだ。ヒノは見た目通り、言葉づかいが雄々しいです。

『ええ』

「人間のこと見てたら、面白くて仕方ないだろう？ 誰が誰を好き

で……つてのが全部分かるんならさ。ねえかみさま、あたしの好きな人を当ててみてよ？ わっかるっかな？」

と、ちよつと小馬鹿にしたように私を挑発。いいのかなそんな生意気な態度取つても。私本当に心読めますし容赦なく当てますけど恥ずかしいのはヒノの方ですよ？

『ロイさんですね。彼は凛々しく頼もしい青年になりました』

「ちよ！ 違うっ……たら！」

私も大人げなく挑発に乗る。水遊びをする皆に視線を向けたまましれつとヒノの想い人を当てると、彼女、顔を真っ赤にして私の口を塞いだ。あ、口だけじゃなくて首絞めた。ちよ、絞めないで首を！ 兄は骨折るし妹は首絞めるし、兄妹揃って私に殺意が感じられるよ！ ぐえー苦しい。ゲホゲホと嘔せてたら、我に返って手を放してくれた。態度が分かりやすいなー、ヒノは。

「う、ごめんっ」

神様の首を絞めるなんていい度胸ですよまったく。

『違いましたか。それは申し訳ありませんでした』

何だよ、当ててみるっつていうから当てたのに。違わないでしょ、正直に言いなさい。

「ん……違うっつていうか……違わないっつていうか」

返事に困って唸ってる。もじもじしたら。微笑ましいよ。

ロイのこと大好きなんだ、この子。この子に限らないけど、ロイメグって異性からずげーモテる。特にロイ、同性の私でもカッコいい、私が女だったら付き合いたいと思うぐらいだしさ。メグの美少女具合ときたら、殆どの若い男たちが彼女の顔を直視できないほどだ。メグって顔もかわいいけど、ほへーっとしてたり、きよとんと小首を傾げたり、相手の言うことを小声で繰り返したり、さりげなく色んなこと手伝ってくれたり、いちいち小動物っぽい仕草がまた、男心をくすぐるんだよ（多分ね。私、今は男心がよくわからんけど）

。で、二人ともあまりに異性からモテすぎて同性から嫉妬されるパターン。

加えて始祖だし、私が二人と特に仲良くしてるからなおさら嫉妬される感じ。二人に対する素民たちからのやつかみは、以前住民総ヤンデレ化した時ほどではないけれど、やっぱり多少はある。

「違うないっていうか、違うっていうかー」
「まだやってら。かわいいなー、ヒノ。」

ロイときたら女の子より科学やら集落の自治やらに興味があるみたいで全然色気がない。ヒノも告白の方法とかタイミングとか、ライバルとの競争なんかで色々頭を悩ませてるんでしょ？ 私は少しだけ意地悪く、ヒノを追い詰める。

『違うないということは好きなのですね、ロイさんのこと』

「だ、だ、誰にも言わないで、ね？」

ヒノったら照れてる照れてる。

『ええ、秘密にしておきます』

言動は男っぽくてもそういう本心を隠せないところ、女の子なんだな。彼女がほてった顔を隠すように私にひしっと抱きついてきたのでよしと頭を撫でて祝福してあげた。猫系だこの子、ツンツンしてても、近くにすり寄ってくる甘いタイプ。別にメグやロイだけじゃなくて、私は誰でも平等に抱きますよ。誰でも抱くとかやらしいな私。

ロイと両想いになれるといいね、どうなるか分からないけど。彼女の男勝りなところって、ワイルドなロイに多少影響されてるふしがあるからな。私、個神的に、ロイには姉さん女房が似合うと思うんだ。

「じゃあ、ロイには好きな人っている？ 誰かは言わないでいいか

ら

彼女、私の腕の中で顔を伏せたまま体をこわばらせて尋ねる。ロイの本心を知るのが怖いみたいだ。でも……聞きたくなるのは女心なのかな。

『今はいいようですよ』

「よかったです」

ヒノはへなへなと脱力した。ん？ よかったのか？ ロイは何となくメグのことが好きって気持ちはあるみたいだけど、今はメグより他のことに夢中だ。なかなかうまくいかないもんだねー。と油断したら

「じゃー、かみさまの好きな人はメグ？ あかいかみさまっていつも優しいけど、メグを見るときは特に優しい目をしてるよ？」

鋭いなー、よく見てる。皆と同じように接しているつもりでも、違いが出ているのかな。私も素民たちには平等かつ公平な態度をとるよう心掛けないと。メグロイに皺寄せがいくし、職務にも差し支えるし。

『メグさんだけでなく、みなさんのことが大好きですよ』

私は無難に、模範解答にしておいた。

「メグー、サチーこっち来いよー」

ラウルさんはラウルさんでメグたちを呼ぶと

「あたしもやるー！」

ヒノも手を振って立ち上がり、兄貴のもとに走って行った。皆が砂浜でヤシの実っぽい果物を放り投げてビーチバレーみたいなことやって遊んでいた。平和だなー。と、私が彼女を見送り一人砂浜に寝そべってほんわかしてたら……。

私の頭上にぬっと黒い影が差す。視線を上げれば先輩のご出勤だ。

でも様子がおかしい、エトワール先輩、白翼の天使じゃなくなってる！

『どうしたんですか先輩その羽根の色は！ 西園さんにやられたんですか！？』

先輩の自慢の白翼が真っ黒になってました。まさにカラスの濡れ羽色。これはこれでダークな感じで素敵ですけど、先輩は不機嫌なのか仏頂面。

何？ 日替わりで翼をカラーチェンジ、ってわけでもなさそうだし。先輩、ギメノさんときコスチュームから何から全部真っ黒だったからも真っ黒は飽きたって言ってたのにどうしたの？

先輩、どかりと砂浜に胡坐をかいて座り、疲れきって顎が出て、さらっさらの金髪頭をばりばりとかく。苛立ってますねー。出勤してきたばっかなのにもう疲れてる、上層部にこっぴどり絞られたみたいだ。大変でしたね、滋養強壮ドリンクでも作りましょうか？ っ
ても……先輩も勤務中は飲食禁止なのか。

『赤井君。ギリシヤ神話で、” 役立たずの白いカラス ” はどうなっ
たかね？』

『えーと、アポロンの怒りがかって罰として羽根を真っ黒にされて
黒いカラスになったわけですけれども』

それで翼を黒くされたんですか先輩。何というウイットに富んだ
嫌がらせだよ厚労省上層部。ナルシストの先輩が一番こたえる懲罰
ですよ。

『ナルシストっておいこら……言わせておけば』
先輩に睨まれた。

『すみませんすみません！』

心読まれてましたか、油断も隙もあつたもんじゃねーな。でも先
輩、よくぞご無事で！ 先輩フリーランスですし、クビでもおかし
くなかったですよ。素民がただのA・I・じゃないってという情報

を漏えいしちゃったからクビが飛びそうだったんですよね。真相が
すげー気になるけど訊かない方がいいですね。

『西園よりもつと上の連中に延々と詰められた。5%減給されたく
え、別管区に飛ばされそうになったよ。流石に懲りた』

敵罰じゃないですかそれ！ 別管区に飛ばされそうになったつて
のによく戻ってきてくれましたよ！ 逆に言うとそれほど漏らすと
まずい情報だったってことか？ 気になる。始祖がただのA・I・
じゃないってという情報、すげー気になる。情報は気になるけど、先
輩がいなくなったら元も子もない。私一人で構築を進められるわけ
がないよ。だからもう訊きませんよ。ちなみに、先輩の黒翼は罰と
して一週間そのままにいる、とのこと。おいたわしや。

『先輩、もう私絶対にアガルタの秘密にかかわること何も訊きませ
んから！ もう口を滑らせないで、頼みますからここにいてくださ
い！』

私は跳び起きて土下座で先輩に懇願。何この構図。神様が天使に
土下座、ビーチバレーしてた皆が見てヒソヒソしてるけどなりふり
構ってられませんよ。なんなら先輩が減給された分、私の給料で補
填してもらっていいですから。

『そんなに私にいてほしいのかね』

先輩、腕組みをして私をチラ見。やらしいな！。何その流し目で
思わせぶりな視線、セクシーですね先輩。その通りですよ、だって
私の管区不人気なんでしょ？ 他の構築士は誰も来てくれないし私
完全に独りぼっちで構築遅れますよ。先輩のこと頼りにしてるん
ですよこつ見えて。

でもどうして私だけそういう重大情報を悉く教しらえてもらえないん
でしょうか。何か理由があるなら教えてほしいですよ、一人だけ力

ヤの外って酷いですよ。

『もう私からは一切、あの件について口を割ることはしないよ』

『そうしてください。これからは私も先輩に尋ねません』

私がいじけて、正座でしゅんとしています。

”なーんてな。最初から念話で話せばよかったな。ただし赤井君、リアクションは一切禁止だぞ”

先輩の念話が聞こえてきた。

私は一瞬ビクッと肩が震えてしまったけど、リアクション禁止と言われたので頂垂れたまま。

『ご迷惑をおかけしましたね、先輩』

とか言って適当にごまかしてみる。

”この管区は高次脳機能障害にまつわる臨床試験の治験下におかれている。神様役の君は重大な役割を果たしているんだ”

治験でどういうことですか？ 臨床試験で治験されているのは誰よ？

私？ それとも……誰なのかわかりません、誰ですか。

えーと、人数は一人？ 二人？ 何人？

第3章 第5話 赤井さんと、黒鳥の湖

私と二人きりだと先輩風を吹かせるエトワール先輩ですが、素民の前で私と話すときは猫かぶってます。天使役の演技中は、終始敬語で私を色々手伝ってくれてる。なのでさっきまでは私がサチを背負って森を歩いていただけ、今は先輩がサチを引き受けてくれてる。

先輩はそういう役どころだ。

天使って、神様の使いつていう意味だよ。だから先輩も私に使われて（サポートして）こそその天使であってそれが先輩の仕事。先輩後輩の間柄なんだけど、あべこべだな。思えば年功序列制って古き良き日本の文化だよ。私は先輩に対して非常に申し訳ない気持ちになりつつも、インフォメーションボードで進路を取ってざくざくと歩みを進める。

サチはエトワール先輩の黒い翼をいじり倒してた。

先輩は意に介しない、といった顔をしていても内心迷惑そう。

「神様、少しお尋ねしたいのですが」

先輩、恭しく、遠慮がちに私に話しかける。

猫かぶってる時はおっとりとした上品な口調なんです。私と同じく監視員に査定されてますからね、先輩もニコニコと演技ですよ。でも先輩気づいてますか？ 演技とはいえ、その笑顔危険ですよ、ユイさんがちよつとくらつときてるじゃん。不倫とかやめてくださいよ、先輩にはリアルに日本人妻が、ユイさんにはハクさんという素敵な夫がいるんですからね。

ちなみに先輩の監視員は西園さんではなくて黒澤さん。ちよつと前に先輩のインフォメーションボードを見せてもらったら、赤いサングラスをかけ赤い水玉のネクタイをして黒いスーツを着た髭の立

派な細身のナイスミドルが葉巻ふかしながらモニタ見てた。

健康志向なこのご時世、葉巻吸う人って珍しい。形から入るタイプだなこの人。私が眉間に皺を寄せて彼をじーっと見てたら『よう、頑張れよ新神！ 期待してるぜい！』とか激励してくれた。私は適当に『はい、頑張ります』と言っておいたけど、何で監視員が髭もじやのオッサンなのよ。

よくモチベ維持できてましたねエトワール先輩。

贅沢言わせてもらうと、男性じゃなく女性監視員に見守ってほしいよね。逆もしかり、白棕さんなら若い美青年担当官にさ。私ら性別ないですけど、多少テンション違うと思うんだよ。職務に対する意欲向上にもつながるよ。

黒澤さんが誰に似てるかって百人に訊いたら百人とも板垣退助だつて言うだろうな。

お髭が立派でしたよ。似てるっていつでも髭の部分だ、顔の半分髭でしたし。つか髭しか似てねーな、だってサングラスかけてるし顔よくわかんねーよ。

とりあえず挨拶して、お髭のことを褒めといたら照れて気をよくしてたけど、黒澤さんをおだてても、先輩の減給は是正されないみたいだ。仕方ないので私の給料で補填しといてくださいって黒澤さんに申し出たら、そういうのは認められないって。

『おめえさんは気にしなくていいんだぜえ？ エトワールの失態なんだからよう。テメエの尻はテメエで拭えってんだ。こーの、すつとこどつこいめ』

がっはは、と豪快に笑い、大量の煙を吹きながら黒澤さんはそう言っていました。こっ、なんていうか、べらんめえ調で話す人とか初めて見たよ。絶滅危種ですか？ 昔のニツカツ映画を意識してんのかな。名前つながりで世界のクロサワ映画に影響受けちゃったとかそういう線はないでしょうね。さしもの先輩も黒澤さんにはたじ

たじ、といったご様子。

『するってえと何かい？ これからエトワールが口を滑らす度におめえさんが身銭を切るってエのかい？ やめときな、すっつてんてんになっちまうぜい？』

何か黒澤さんと話すと私もどつと疲れたので、『そうですか。よく分かりました』と引き下がった。先輩への補償が認められないなら現実世界に出たら個神的に色々お礼をするからいいよ。それはそうと先輩、お願いですから黒澤さんのべらんめえ口調うつらないでくださいな。

黒澤さんは二十七管区の、甲種二級以下の五人もの構築士の監視員をやってるらしい。人数が多すぎて黒澤さんの目が行き届かないから、担当する構築士たちの仕事内容も”ざつと見”らしい。私だけですか、西園さんにモニタ前で張りつかれてマンツーマン監視なのは。ある意味役得ですね。神様役は厚労省に重用されて、何から何までサポートして見守ってもらえてるみたいだ。私も心強い。

千年も生身の人間を監禁状態にするんだしね、精神病になったり精神的後遺症が出ないように気を使ってもらってる。

他の目的もあるみたいですけど。治験がどうか言ってたしな。もしかして治験されてるのって素民じゃなくて私？ 治験OKですって同意書書いた覚えありませんけど。それから黒澤さんの後ろをすーっと歩いて横切って行った人がモニタ越しに見えた。見えたのは首から下だけだよ、青のネクタイでグレーのストライプの入った黒いスーツ、スリムな人だったな。

その首から下だけの人、二十七管区プロジェクトマネージャーの伊藤 嘉秋さんて人らしい。事実上、現実世界側から二十七管区全ての構築士、構築士補佐たちを束ねるトップだ。伊藤プロマネって

呼ばれてる。

アガルタに入って九年目。西園さんのモニタの背後には一度も映ったりしなかったからそんな人がいたなんて知らなかったよ。伊藤プロマネが、私らが勤務中に飲食していいか（モンジャ食べていいか）どうか決める偉い人なんですかね？ って聞いたらそうだって黒澤さん。ちよ！ 伊藤プロマネー！ モニタ（こつち）見てくださいー！ 赤井から大事なお話があるんですー！ と呼び止めたかったけど、私は西園さん以外とは話せないらしい。なるほど……首から下しか見えなかったけど、今後は伊藤プロマネのご機嫌を取ればいいわけなのか。お中元の贈り先が増えたよ。

また話が脱線した。何の話だったけ？

『神様、私の話を聞いていらっしやいますか？』

先輩が私を呼んでたんだ。

『すみません、少し考え事をしていました。どうしましたかエトワールさん』

先輩に対する言葉遣いは、先輩は部下だから命令口調でいって言うてくれたんだけど、何となく丁寧語にしている。

『旅程は二日とのことですが子供もいますし、徒歩では皆さんも大変でしょう』

大変ですけど、だからといって他に交通手段ないですし。

「大丈夫だよえとわあるさま、皆、そんなに疲れてないよ！」

満場一致で君が言うなだよサチ。

歩かずに先輩に背負ってもらって楽しってる君が言っちゃダメですよ？ 私は苦笑しながら

『そうですね、ですのでゆっくりと休憩を挟みつつ往こうと思いますよ』

遠足気分で、まったり行けばいいじゃない。

『ではひとつ、私が一肌脱ぎましょう』

と行って先輩、気合を入れて腕まくり。どうしたんですか先輩。先輩が一肌脱いで全裸とかになったら西園さんが喜ぶだけ……別に腐女子じゃないのか。失礼しました西園さん。

『すぐに着きますので、私の背に乗ってください』

「サチ、えとわあるさまの背中に乗ってるよー」

そういう意味じゃないよサチ。先輩の変身能力を活用するって意味ですよ。変身して巨大化した先輩の背に乗ってグランダまでひとつ飛び！ ってことですよ。

「どういうことですか？」

ラウルさんは首をかしげてる。

『それは名案です。お願いしますエトワールさん』

でも何に変身するつもり？ ギメノなんちゃらの翼竜形態だったら皆が阿鼻叫喚だ。相当邪悪な姿してたしサチは大泣きすると思うけどあの姿になるわけじゃないですよ？ てか私も怖いよ、翼竜とか乗りたくない。先輩はサチを背から降ろしユイさんに預けると、ふわりと飛翔して湖面に着水。

そして……水の上でインフォメーションボードバイオコンストラクトを操り、生体構築モードを立ち上げてる。先輩、そうやって変身するのか。自分の体を生体構築で魔改造してたんだ。血管や神経系も全部繋ぎ換えてるらしい、確かに、医師じゃないとそういうの分かんないよね。適当にやっても生物として成り立ってないと即死するし。熟練の技だ。何とも危険かつ繊細な技術だよ。

自身への魔改造が進むにつれ先輩の体は白く発光しはじめ。そして先輩の身体は忽然と消えた。湖水にぶかぶかと優雅に佇んでいたのは……全長八メートルぐらいの巨大な黒鳥コクチヨウ！

白鳥じゃないよ黒鳥だよ。形や大きさはまんま白鳥だけど色が黒のやつ。赤いクチバシに褐色の瞳、風切羽根の先つちよはちよびつと白い。凜々しいお姿です。黒鳥コクチヨウってのは白鳥の突然変異とかじゃない。れっきとしたオーストラリアの固有種でハクチヨウ属の仲間だ。

どうでもいいけど、私の脳内でチャ〜 チャラリラチャ〜 と「白鳥の湖」のBGMが再生された。

この場合は違うか、黒鳥の湖か。

素民の皆は手荷物を落してびっくりしてる。アイも怖気づいて尻尾を丸めてる。そりゃそうだよ、鳥とかモフモフの獣がない世界なんだしさ。鳥は初見だ。ぶかぶか浮かんで気持ちよさそうですね先輩、井の頭公園のスワンボートみたいじゃないですか！

”スワンボートっておい赤井君……”

黒鳥姿の先輩がこっちを見て、長い首を「2」の字にした。また心の中読まれてたよ、先輩の堪忍袋の緒、いつか切れるなこりゃ。てか何すかそのリアクション、鳥形態だから怒ってるのか恥らってるのかリアクションが分かんないよ。でも怒ってますよね。てなわけで私は即謝罪。

”すみませんすみません！”

おちよくつてるつもりはないんです！ 美しいですよ先輩！ でもその愛らしさといい、癒しキャラ具合といい……どうみてもスワンボートなんです。翼竜のときとは正反対ですね。

”まあいい、早く乗りなさい。本当は白鳥にしたいところだが、懲戒中なので黒だ”

先輩、懲罰で翼を黒くされてるからハクチヨウになれないんだな。

というわけで先輩の背に乗せてもらう私たち一行。先輩は翼を湖岸に差し伸ばして棧橋の代わりにしてくれた。男性陣からおっかなびっくり先輩の黒い翼の上を歩き背中に乗船。アイものっしのっしと乗船して体を丸めて先輩の背で寝た。女性陣は喜んで先輩の背中で飛び跳ねてる。こらこら、人の……いや、トリの背中では静かに！

そんなこんなで素民と私を乗せ、エトワール号はカルーア湖沖へと出航。私達は先輩の背中の上に背中合わせに座って、ずり落ちないように羽根をつかんでるけど、乗り心地は快適です。サチが先輩の首に自作の赤いマフラーを巻いて蝶ネクタイみたいにした。蝶ネクタイ付きスワンボートとか……私が一人、鳥形態の先輩に胸キュンしてたのは内緒だ。

「おー！ エトワール様、とても速いです！ こんなに速いなら、エトワール様と同じ形のものを作ってみましょう」

ハクさんが感動して、木の皮のメモ用紙に先輩の全体像をスケッチしてる。ハクさんはここ数年、造船にも興味を示してたからな。自作のイカダみたいな作ってたけど、推進力がないから川上から川下に流されるだけだった。しまいにや、紐の強度が足りなくてイカダが分解してバラバラ事件になってたし。最近では上流で伐り出した木材を川に流して運んで建材にしてるみたいだけど。でも先輩のシルエットと同じ船にしたらやっぱりスワンボートができてしま……う。

「ハクさん。しかしエトワールさんと同じ形のものにしても、人力で漕がなければそれは進みませんよ」

と指摘すると、ハクさんが顎を弄りながら唸ってた。

「では長い棒で底をついて進めばいいと思います！」

ハクさんはドヤ顔。

「このカルーアの水たまりはとても深くなり、棒では底に届きませ

んよ」

「えー、そんなんですかー!？」

棒一本で意気揚々と沖合まで行ったら、急に深くなって戻れなくなつて沖で立ち往生しますよ。ハクさんには久しぶりの宿題だ。オールの的なものを思いついてくれればいいんですけど。ハクさんがヒントを下さいというので

『あなたが泳ぐとき、どうやって水中を進むのですか？』

「手でかいて進みます」

『ではその手の役割をするものがあれば推進します。あとでエトワールさんの脚を見せてもらってください。参考になりますよ』

大ヒントだよ。あとはハクさんや大工さんたちで案を練つて考えてね。うちの集落は造船技術だけまだ紀元前レベルだ、帆船的なものを考案してくれたらいいんだけど。釣りがメインだったし湖の向こうに渡ろうなんて発想がなかったからそこは仕方ない。でも湖の対岸のグラндаとの交易で造船技術が発達してくれたらと私は密かに期待している。物資の輸送にも便利ですからね。

「こんな手触り、今まで知らなかったです！ あつたかいのでこゝでずっと寝たいです」

私とハクさんの問答の横で、メグたちはキヤーキヤーはしゃいで感動してる。いわば天然の羽毛布団ですからね、気持ちよくないわけがない。というわけで私もごろんと寝そべる。皆で「川川川川」の字だ。すごく具合がいいです先輩。

「エトワール様、あとでこのふわふわした黒いの、もらつていいかな？ これで掃くと仕事がかどりそうだ」

束ねて羽簾にして使うつもりですかヒノ。コンビニ店員じゃないんだから。あまりむしりすぎないであげてくださいね、先輩だつて北京ダック状態になると辛いと思いますよ？

「ありがとう、エトワールさんのおかげで快適です！」
私って今まで猫や犬的なモフモフばかり追求してきたんだけど、
羽毛という一大ジャンルを忘れてた。鳥様に失礼でしたよ。先輩の
背中、ふわっふわです。スワンボートの硬いベンチなんかメジャーな
いよ先輩の背中の方が断然快適ですよ。だって……

「漕がなくていいですからね！ 楽ちんですよ」

”……。もつと他に言うことはないのかね”

褒めてるんですよ、ベタ褒めてるつもりなんです！ しかも先
輩の羽根、全然鳥くさくないし艶々してて綺麗だし、いい香りがし
ますよ。いい匂いだから皆が寝そべってクンカクンカしてますよ！
柔軟剤とか使ってます？

”しかしスワンボートか。あれは意外といい運動になるよな。先週
妻とこいできたばかりだ”

”……”

二人して何イチャラブな週末を過ごしてるんですか。こっちは彼
女いない歴もうすぐ十年目ですよ。でも先輩、変身しても思考能力
が残ってる。そうか。レベルアップしたんですもんね、トリ頭じゃ
なくてよかったですよ。トリ頭だったらすいと湖を泳いで魚を
ついでむ事しか考えられないですもんね。グラндаに降ろしてくだ
さいと言っても、通じなかつたら困る。

”おいこら、トリ頭で！ どこまで私をおちよくる気だ君は”

”ひー、滅相もないです〜！”

そんななかあいをしつつ先輩のお尻のあたりに座ってた。仕返
しとばかり、プリプリと尾羽をかわいらしく振られて水中に落さ
れました。何とまあ愛嬌のある腰つきだ、鳥フェチ悶絶ですよ。私
は冷や水をかけられましたけど。

「エトワール様ああ、止まってくださいー！ あかいかみさまが落
ちましたー！」

メグが驚いて私に手を伸ばしてくれてるけど

『キュウン、キュウン』

”あ、落ちたかすまん”

先輩が長い首を上にはばして一声鳴いた。黒鳥つてそんな鳴き声なの！？初めて知ったよ！でも先輩、謝罪したけど棒読み。今の絶対わざとでしたよね？

ずぶ濡れになりながら飛翔で追いかけて、落とされてなるものかと今度は先輩の首の付け根のあたりに居座りました。赤い嘴でつかないでくださいよ。先輩の背に乗り、時間にして十五分ほど。

「グランダの岸が見えたー！」

先輩も鳥形態のまま首を伸ばして懐かしそうにグランダを見る。でも先輩が壊滅状態にしてしまったんですね。先輩の悪逆非道な攻撃によって崩れた城壁は数日のうちにすっかり取り払われ、城塞都市グランダは風通しがよくなっていた。オープンで明るい雰囲気だ。前の閉鎖的でどんよりした雰囲気より、垣根をなくしてこっちの方が断然いいよ。

「赤井　　！　待っていたぞー！」

キララがばしゃばしゃと湖に駆け込んできて、大きく手を振って出迎えてくれた。彼女、以前のように黒衣ではなくて白衣を着てる。ギメノさんから改宗して、今は私を信じ私の生贄だって自覚があるみたいだ。赤い私のテーマカラーに困るのでつもりなのか、赤いネックレスを首からかけてる。そういうとこ、けなげだよな。

グランダに近づいてくるスワンボート、いや黒鳥姿の先輩を見て、グランダの皆も岸にわらわらと集まってきてた。私達は上陸して荷

物を降ろし、グラングダの復興を手伝う大工さんたちをその場でグラングダの民に紹介。ハクさんたちの住まいも提供してもらい、好意的に受け入れてもらった。人型に戻った先輩も『初めまして、赤い神様の使いの者です』と挨拶してたけど、どことなく後ろめたさうだったな。でも皆は先輩が元ギメノさんだったなんて知らない。子供たちを中心に懐かれて、過去の悪事もばれずほっとした顔をしてた。

「建物のことはいいので、まず病人を癒して下さい！ 神様のお越しをお待ちしていただきます」

「薬花で体の痛みは取れるのですが、やはり辛いままです。赤い神様、どうかお願いします」

と、皆はさっそく神頼みだ。とはいえ、私は鉋毒に冒された民を救う方法を心得てはいない。ここからの領分は現実世界でも内科医であり生体構築を駆使する先輩の仕事だ。

『私ではなく、今回はエトワールさんがあなた方を癒してくれます』
「家で寝ている病人を、たたき起こしてきましょうか」

誰かがそう尋ねるとエトワール先輩、
『その必要はありません。寝ている病人はそのまま家で寝かせていただきます』

と頼もしい。一軒一軒癒して回るつもりなんでしょうか。でもその心配はなかった。

先輩はインフォメーションボードを起動。私はすぐ横で先輩のボードを見学。メニュー画面の「生体構築バイオコンストラクト」を選び、「奪収スナッチ」モードを選択してる。

メニュー画面内にはポップアップウィンドウが開き、人体の3Dモデリングが回転しながら表示されている。人体のうち、どこか奪収するパーツを選択しろってことだ。これ、もしかして「腕」とか選択したらその人の腕がもげちゃうような恐ろしいモードなんだし

ようか。こわいこわい。

奪収物質：カドミウム

奪収率：100%

と入力し決定ボタンを押すと人体モデリングは消失し、対象選択の段となる。

【 範囲指定 】 / 【 対象指定 】

の二択が出た。先輩は範囲指定を選択し、先輩がふいつと上を見上げるので私もつられて見上げると、グラランダの街を覆うように赤い三次元グリッドが出現していた。メグたちも私たちにつられて見上げてるけど、きよろきよろして見えてないみたいだ。おや、サチだけぎよつとして腰抜かしてる。やっぱあの子は見えてるんだな、靈感が強い子みたいだ。

上空にはX、Y、Z軸と表示がある。一つの格子は五メートル四方だ。彼は指先で空に立方体を描き、^{スナッチ}奪収を行うため適用範囲を絞り込む。細々と設定を終えた先輩はふう、と安堵のため息をつき……

【 実行 】

すつと伸ばした指先で迷いなく実行ボタンを押す。すると一辺数キロの立方体の中にフラッシュが迸り、^{スナッチ}実にあっけなく、何事もなかったかのように奪収は終了。すげー静か。フラッシュも素民たちには見えていないみたいだ。サチだけはフラッシュが眩しかったのか、目をこすっている。一方の素民たちは先輩が何をしたのかわからず、きよとんとしてる。

「な、何か起こりましたか？ 何も見えませんでしたけど」

インフォメーションボードを閉じ、ぽかんとするグラランダの素民たちに先輩は優しく微笑みかける。何気なくふわつと微笑んでるけ

ど、懺悔の表情が見え隠れしてる。『長い間、苦しめてすまなかった』という先輩の心の声が聞こえた気がした。

『この地を蝕んでいた毒を抜き、人々と、そして大地の浄化を終えました。もう、苦しみは去りましたよ』

彼はそんな言葉で締めくくり、鉍毒病におかされた病人の治療とともにグランダ全体の土壌、水源の浄化も一度にやつてのけた。キララは首を傾げながら先輩のことをまじまじ見てたけど、初対面ではない気がしているみたいだ。先輩の正体、バテてはいないようだけど。女の勘つてすごい。

この救済措置をもって、第一区画は本当の意味で解放されたことになる。

甲種二級構築士、エトワール先輩。そしてグランダの民のみなさん。

心機一転、共に新たな歴史を創り上げてゆきましょう。

とか思ってたら……。

異様な視線を感じ、はっと横を見ると、怪しい人と目が合った。

この人どこにいたの？ ぽつと現れた感じだよ、さっきまで私の左隣、誰もいなかったのに……。

私はぽかんと口を開け、しばし謎人物とお見合い。

黒帽子をかぶり、黒いサングラスかけた黒スーツ姿の背の高い人が真横で無言で私のこと見てる。エージェントスミスですか？ 何でここにスーツ着た人がいるのよ、ここマヤ文明あたりの文明レベルなのに。仮想空間中では現実世界のコスチュームは自重……って、この人身体が透けてる。幽霊みたいだ。そしてこの人のシルエット、そしてネクタイのデザイン、見覚えありまくり。思わず声をかけよ

うとしたら、彼は人差し指を立てて、しーっ、と彼の唇にあてた。素民たちには見えてないから声を出さなっこと？

でもこの人ヤバい……直視するにもヤバいくらいの神通力持つてる。彼の放つアトモスファイアっていうか気圧が半端ない……。その力量はきつと私の比、エトワール先輩の比でもない。何千、何万人分ぐらいの神通力を秘めてる。私が神様だとしたら彼は何だ、界王様あたり？ 中ボス以上は確実にいつてる。いや、界王神様かもしれない。

まさか私がモンジャモンジャ言ってたから、真面目にやれとお灸をすえに来たとか　！？

えーと、お初にお目にかかります。私赤井ですけど

あなた様はもしや、てか120%確信がありますけど、伊藤 嘉いとう かつら
秋プロマネですよよしあきね？

第3章 第6話 赤井さん、評価されるの巻（前編）

突如二十七管区に降臨した伊藤プロマネ、先ほどからずっと私の左横に至近距離に張り付いている。正確には私の左横で幽霊のように浮遊して監視中。時々、メグのことを嘗め回すように見えました。彼は半透明で素民たちには見えていないから、私らも伊藤プロマネがいないかのように演技してるけど……。

メグのことをやらしい目つきで見ないでよプロマネ……。違うか、普通に観察してるのか。

でも気になる。

私の仕事に対するプロマネの評価やら何やら一切合財気になる。てなわけで民に対する態度もよそ行きになってしまふ。

「どうして緊張しているんですか、あかいかみさま？」

とメグに訊かれたけど、私それどこじゃない。

『き、緊張なんてするわけじゃないじゃないですか』

不覚にも声が裏返った。メグは「そうですか？」と一言述べて、押し黙った。

思い余って伊藤プロマネと念話も試みようにも、彼が心理層を展マインドギャップ開してて胸中は知れず。怒られるなり要件を話すなり、煮るなり焼くなりされてスッキリさせたいのに、私もエトワール先輩もグラランダの素民に囲まれて話ができる雰囲気でもなく。

エトワール先輩も表面上は平静を取り繕い、力仕事に明け暮れたリグラランダの民たちをよしよしと抱擁して祝福してあげてた。ギメノさんのときと違って、笑顔が爽やかで優しい。童顔ですし、子供

にも人気。でも終始立派な黒翼がしおれた大根葉のようにしゅんとなっていましたけどね。先輩、プロマネの前でちびってるんですか？先輩の感情が無意識に翼に反映しちゃうとか、仔犬のしっぽ的な愛嬌がありますね。と、私がまた密かに先輩に萌えていたのは内緒だ。

ハクさんをはじめ大工集団はすぐに地元の石工さんや大工さんたちと合流し、簡単な自己紹介の後、グランダ復興の手伝いに取り掛かった。ハクさんを先頭にグランダ独自の石造りの建築技術に圧倒されながらも、手際よく瓦礫となった建物を壊したり、木製の家具を作ってあげたりと、その熱心な働きぶりにグランダの民から感謝されてた。

うちの大工集団は仕事が丁寧で遊び心がある。グランダには内装に外装の文化がなかったから、ヒノも石造りの各家に木製の赤いおしゃれな表札を作ってあげたりしてた。ワイヤーフレームと木彫りの表札を組み合わせたりにして、センスがずば抜けてる。ちよっと前衛的すぎないか？

背後霊化しているプロマネにセンサーを張りつつ、私はというとハクさんたちに建築の仕事を任せ、被災した皆を慰問していた。エトワール先輩がグランダ全域に奪収スネッチをかけたから、元病人たちも回復して床から起きてぴんしゃんしてる。路地を小躍りしたりスキップしながら去っていくのが見えて、さすがにどうかと思った。先輩が何か治療プログラムでも頒布したのかな、回復しすぎ。

途中立ち寄ったナオの家で、メグとユイさんたち女性陣がクレイさんにお茶っぽい赤茶けた飲み物とお茶菓子をふるまわれた。なんかおはぎみたいな黒いハンバーグ大の団子。これが甘くておいしかったらしい。いいなー、私も試食したい。

「なんですかこれ！ どうやって甘くしたんですか！」
メグは必死の形相でナオのお母さんを質問責めにするわ、サチは
「じゃんじゃんおかわりするわ、ユイさんも「あらあら、食いしん坊
さんね」とサチをたしなめつつ、三個目に手が伸びてる。

「これは甘い穀物なんだ、粉にして団子にするんだよ」
とクレイさん。甘味ってモンジャ集落にはないから、メグたちは
軽いカルチャーショックを受けてる。そういうお互いの気に入った
品物、物々交換なりルール決めて取引するとよいですよと提案する
と、メグは甘い穀物の種と引き換えに、お手製のカラフルな小物入
れ一個をクレイさんと交換してた。そして小物入れは右から左へと
ナオの手に。うんうん、その調子。そのうち交易が始まってくれれ
ばめっけもの。

途中で丸刈りな薬師のおじさんにも再会した。おじさんは私達一
行にぺこりとお辞儀。

「赤い神様、そのせつはお世話になりました」

『お元氣そうで何よりです』

彼も白い作務衣みたいな服に衣替えして達者な様子。

「不安が去ったからか、おかげで髪も生えてきました」

丸刈りにしてたのは、ストレスで脱毛してたからか。ほんのりと
薄く毛が生え始めてた。そういう事情だったんですか。早く元通り
になるといいですね、と言うとハゲ頭を撫で、愛想笑いを浮かべる。
薬師さんはメグに纏わりついて、熱心に薬花の栽培方法と煎じ薬
の作り方を聞いてた。グラランダにもいくつか病気に効く薬草がある
らしいから、メグと共同開発で漢方薬的な新薬が作れるかもしれない。

エトワール先輩と手分けして全ての家々を回り、祝福ついでに慰問を終える頃には日も暮れて、辺りはすっかり暗くなっていた。一軒十分ぐらいのペースだったけど、結構時間がかかったもんだ。するとキララが気を遣って

「城に部屋と食事を用意している、今日はもう休んでくれ」

ということとで私達は彼女の城へ。キララの城内に入ると、伊藤さんは消えていた。定時あたりですか。私と先輩は顔を見合わせて、助かったとばかりにハイタッチ。

「何をしているんだ？ 何かのまじないなのか？」

キララは不思議がってる。さて、宗旨替えしたキララですが、以前よりもますます美人になりました。彼女は憑き物が落ちたように活き活きとしていて、メイクも衣装も怖くない。ましてや頬がこけたりにクマとかつくってない。清潔感あふれて、現実世界で見かける女の子と同じようにゆるふわな雰囲気になってきてる。へヴィメタ調の衣装じゃなく、ナチュラル系でいい感じ。

親しみやすくなって、グラランダの民たちにもますます人気出ると思うよ。

何で彼女が劇的ビフォーアフターになったかというのと、私こと赤い神がグラランダに新たな教えを広め、彼女らが律儀に守ってるから。モーセさんの十戒ばりに赤井の十戒を定めてみたから。ゆるーい教えだから、一つ二つ忘れて十戒が八戒になっても六戒になっても構わない。

教えてっていうと物々しいけど、内容は単に生活標語。

朝晩のお祈りとかお供えものとか一切いらさないから、要約すると『早寝早起き、よく食べよく寝て適度に運動し、沐浴し歯をみがき、元気なあいさつと笑顔、ありがとうの心を忘れずに』みたいな脱力

系の教えを広めといた。皆あつげにとられてたけど、復唱して覚えてたな。

とにかく皆さん、よく教えを守ってくださいねと言い残してグラランダを去ったんだけど、グラランダの民は揃いも揃って真面目な国民性だから、功を奏したみたい。そんな彼女は鉋毒の出ない金属精錬方法を教えてほしいと言うので、そういうことはエトワール先輩が詳しいからと丸投げ。先輩は気まずそうにしてたけど、渋々了解してくれた。

『ところでキララさん』

「ん？」

城内の回廊を先導するキララが行燈を手に振り返った。グラランダの行燈は植物油をおたま状の金属の燭で燃やしてるだけ。シンプルだけど、意外に明るい。

『あなたは随分変わりましたね。以前と比べてとても丁寧な印象を受けます。その装束も清潔感があつて、私は好きですよ』

私への敵意が抜けて人称も”余”から”私”に人称を変更し、言葉づかいが少しきれいになったんだよねこの子。秋葉系から現実世界に帰還してくれたんです。他にも彼女の手作りのネックレスの出来栄えやら諸々褒めると、彼女は軽くパニックになつてた。彼女、辛い思い出ばかりで褒められた経験がない。するとあのツンツンだったキララの口からこんな言葉が。

「そ、それは私が汝の生贄であるから……す、少しは祭神に敬意を払わないといけないかと思つてのことだ。べ、別に汝の好みに合わせるつもりなど……」

「あかいかみさまー、イケニエつてなんですか??」

メグの無邪気なツッコミが容赦なく飛んでいた。生贄になれと言つてはみたものの、色々面倒だしよく考えたら公務員の不祥事もい

いところ。というわけで私は保身も兼ねてキララとの生贄関係を解消。

『先日はあのようでしたが、もともと生贄にするつもりもありませんでした。どうか自由に、あなたらしくしてください』

こうして私達はただの素民と神様という平凡な関係に戻った。キララが少し名残惜しそうだったけど何でだろう？ 嬉しいでしょ自由になれるんだから。A・I・とはいえ乙女心は分からない。

キララの城は灰色の石を積み重ね建てられた三階建て。立方体型だけど中庭があつて、分かりやすく言うところの字型をしてる。ビルや会館なんかに見えないこともない。城全体で小学校の運動場ぐらいの広さ。中庭もあるし、一般的な城のイメージからすると小ぢんまりしてる。私たちは三階の、彼女が用意してくれた居室に通された。廊下に行燈を持って居並んだ侍従たちが深々と頭を下げて歓迎してくれた。

「部屋は好きに使ってくれ。侍従と侍女を一部屋に一人ずつつけておいた。えーと、赤井とエトワールの部屋だが……」

キララは彼女なりに神様という存在を敬った結果なのか

「他の者は部屋を用意するが、赤井を祭壇に祀って、皆で祈祷すればいいのか？ 香の好みは？ 供え物は何がいい？」

とか真顔で聞いてきたから、私も真顔で

『お香も祈祷もお供えもいりませんから私たちも普通の部屋でいいです』

とお断り。あの占いの館みたいな祭壇に祀らないでよ、偶像的扱でなく人間的扱いでいいです。

そんなこんなで、部屋割りには私とエトワール先輩、メグとヒノ、ハクさん一家、大工さんたち三人ずつ三部屋つてな感じ。それぞれ十二畳ほどで、壁も厚く六角形の木の出窓があり、窓はバルコニー

に繋がってる。室内には四角い石机と円柱状の石の椅子が二脚。寝床は一段高い石のベッドに厚手の敷布と、大きな白い布袋に枯葉を詰め、温かそうな掛け布団が用意されてた。

キララが机の上に伏せてあつた拳大のハンドベルを鳴らすと、私たちの部屋つき侍従のフリーくんがちよこちよこ小走りでやつてきた。推定十二歳の少年侍従だ、まだあどけなさも残る。彼は典雅な礼と共に、緊張しながらご挨拶。

「神様、天使様。何か御用がありましたら、何なりとおいらに申し付けてください。精一杯おつとめます」

黒髪の短髪と黒い瞳の彼、グラランダでは珍しく日本人顔してる。白いシャツに白いチョッキのような侍従服を着て下は黒い短パン、額に白いハチマキしてる。目がくりくりで、眉毛シャキーン。雰囲気丁稚^{ていぢ}っぽくて可愛いよ。

『こちらこそよろしく、フリーさん。お世話になりますね』

「えへへ、おいら、頑張ります！」

完璧に丁稚キャラだなこの子。キララが部屋を出て行った後もフリーくんが戸口近くで張り切つて御用待ちしてるから、部屋に戻つて休んでていいですよ。と言つたら「御用のときは呼んで下さい」と言い残し、しよげて出て行った。仕事奪つて悪いことしちやつたかな。まさか給料は歩合とかチップ制だったりして。

『待つて、お願いがあります！』

慌てて呼び止め、筆記用具を貸してくださいというところへいっつ！」と猛ダッシュで筆記用具を取りに行つてくれた。グラランダのメモ用紙は羊皮紙っぽい皮の紙。獣皮紙っていうんだっけこれ。ホルスタイン的なブチのある動物の皮だったのかな、薄いオレンジの水玉模様なのはご愛嬌。筆記具は棒状の黒鉛と粘土を練り合わせ焼成した塊を布で巻き、それを金属の筒の中に入れてさらにリボン状

の布で包んだもの。芯の部分がちびたら、布を解いて芯を出してまた布で固定して使えばいいわけだ。

つかこれ、シャーペンの原型じゃね？ 文明進めすぎですよ先輩。

『何言ってるんだ赤井君、構築士が百二十年も入っている区画でこのくらい進んでなくてどうする』

そういうもんですか。こうやって先輩たちが区画ごとに文明を進めてくれるから、文明進めたりする場面で私の出番であまりないのかな。それより民とのふれあいや、この区画のカラーづくりを大事にした方がいいのかも。私は被災している区画の状況と、グラウンドの地図、被災者の様子、民からの要望などを忘れないよう簡単にメモしておいた。

何か隣の部屋から食べ物のいい匂いが漂ってきた。他の部屋では晩御飯のようです。突撃！ 隣の晩御飯したいけど、指くわえてみるのもメグたち気を遣うし。

というわけで私ら、食事しないから風呂入って寝るだけだ。城には浴場があったから夜中にも入るとして、久しぶりに仮眠でもとることにする。ベッドは十分広いけど各部屋に一つずつしかない。私も先輩と一緒にベッドで寝るのか……西園さん大喜びの構図だなまあいいよ。先輩の大きな翼がふわふわで温かそうだから敷き羽毛布団がわりに使わせてもらおうよ。そんな妄想に浸っていると。

『おい赤井君』

『すみませんすみません何ですか？』

先輩に凄まれるととりあえず謝る癖がついてしまった。

『今、失礼なことを考えていなかったか？』

『すみませんすみません考えてないです！』

エトワール先輩にぎろりと睨まれました。童顔だから別に睨んで

もこわくないですよ先輩。

『謝るのか否定するのかどっちかにしろ、まったく君というやつは……』

私が（素なんですけど）ボケて先輩に睨まれる、ここまで様式美と化しつつあります。

私たちは一つのベッドで布団を分け合い背中合わせで横になり、ベッドの広さの問題で、先輩は結局私に翼を敷かれる羽目になった。先輩はむすつとしたり、そのあたりのかけあいは適当に、話題は自然と伊藤プロマネの件に。あの人、構築士でもないのに半透明状態でアガルタに入れるのな。プロジェクト責任者となるとそのくらい当たり前なのかな。すげーアトモスフィア持ってたけど、あの人アガルタ入って構築進めた方がはかどるんじゃない？ とか何とか軽く叩いて話したら、エトワール先輩の相槌がぶつつり止まった。寝たんですか先輩？

『……先輩、聞いてます？』

不審に思った私が振り向くと……伊藤プロマネが椅子に座って腕組みをして私たちの話を聞いてました。ぎゃーいつの間になっていたんすかプロマネ！ ドアをノックぐらいしてくださいよ、神出鬼没だよ。悪口言っていないです、別に悪口とか言っていないですってー！

『エトワール、あなたは現実世界に出て今日中に始末書を提出しなさい』

ひー！ エトワール先輩も一緒にいてプロマネの話を聞いてくださいよー！ とはいえ、先輩はそそくさと出窓をまたぐ。親指立てて”グッドラック！”ってな爽やかな表情で退出していったけど、どういふこと？

跳び起きた私は伊藤さんと密室に二人きり。伊藤さんがふいつと

扉の方を見遣れば、パチンと金属の門が下る。ご、ご、ご用件は何でしょうか。伊藤さんに着席を促されたのでガチガチに緊張したまま、ちよこんと椅子の端に座る。

伊藤さんは鍵をかけてリラックスモードなのか、何故か背広の前ボタンをあげ、ネクタイを取り、胸元のシャツを第二ボタンまであけてセクシーな雰囲気。若干胸毛見えてるけどいいのか？ サングラスと帽子を取った伊藤さん、もっと歳いつてるかと思いきや、三十代前半ぐらいの人でした。黒澤さんの上司なのに、断然若いかな。

目は一重で切れ長だけど大きく、彫が深くて口や鼻も全部のパーツがデカい感じで顔にパンチがある。髪型はホスト崩れのような肩ぐらいの茶髪のロン毛が帽子の中からさらりと出てきた。毛先を遊ばせてちよいカールさせた髪型、セットに時間かけてそう。

よく見りや眉毛も整えて細い。耳に銀のピアスつけてる。落ち着かない雰囲気だなー、公務員としてどうなんだこれ。グラフィックではなく多分現実世界そのままの姿だ、私やエトワール先輩ほど整った顔じゃない。それにしちゃ美青年ですけどね。あ、美中年か。

あなたその歳でロン毛で若づくりしすぎでしょ……。私もややくせのついた柔らかい赤いロン毛ですけど……。私と伊藤プロマネのルックス、どことなく似てる。まさか私のグラフィック、伊藤プロマネの趣味だったの？ やめてよ自己投影とか、なんか急に恥ずかしくなってきた。

『はじめまして赤井さん。私は伊藤 嘉秋。二十七管区プロジェクトマネージャーです』

恰好はラフになってるけど、口調は温和で丁寧でした。プロマネ

はカードサイズのデジタル名刺を私に手渡す。すると私が手を伸ばすまでもなく、私のインフォメーションボードが勝手に立ち上がり、名刺入れというフォルダにぺろりと格納された。私、名刺持ってませんけど名刺交換しなくて大丈夫ですかね。

『わ、わ、私は赤井と申します』

『あなたの自己紹介は結構ですよ。あまり時間ありませんので、単刀直入にお尋ねしたいことがあります。あなたが食事をしたいと言っていると西園に聞きましたが、本当でしょうか。もう一点、エトワールから素民に関する噂を耳にしましたか？』

『……………!!』

これはかなーり分が悪い。よくてけん責、ほぼ間違いなく減給かもしんない。先輩が口を滑らせた程度で五パーセントも減給されるわけだし……………。何て言い訳しよう。

『……………でも、えーと……………そのー、何と申しますか』

『ということは、構築マニュアルへは完全にアクセスできなかったわけですね？』

え？　へ？　構築マニュアルって何ぞ？　私の目が真ん丸になった。

第3章 第6話 赤井さん、評価されるの巻（後編）

『自身の能力も構築の目安も分からないなか、ノウハウがなければ構築を進められるわけがありません。ですので、構築士は構築マニュアルが構築士の記憶プログラムの中に抱き合わせてインストールされています。あなたの記憶をアガルタで再生したとき、あなたの記憶に添付されている筈の構築マニュアルが破損してアクセス不可になっていました。また、仮想空間内生理適応プログラムの数十のセクタが破損していると判明しました。あなたがもんじゃ焼きを食べたいと思うのはそのためです』

な、なんだってー!？

破損だらけじゃないですか私の記憶！ バグチェックぐらいやっ
といて下さいよ。しょっぱなバグとか見つかってこの先千年も大丈夫
なんですか？ まあリアルな私の記憶のバックアップは取ってある
みたいだから生脳に戻るときにバグが持ち込まれることはないっ
て話ですけど。

あれ、よく考えたら……西園さん、何で伊藤プロマネがモンジャ
の件を知ってるの……？ まさか、『赤井構築士がモンジャ食べた
がってます』って上層部に言っちゃったんすか、やめて下さいよ赤
っ恥かいたじゃないですか。今のは赤井が赤っ恥というところが面
白く……はいはい面白くないですよ。でも後の祭り。そして赤井は
赤面。

『ですから、マニュアルを参照している白棕、蒼雲の構築があなた
より効率的なのは当然です』

マニュアル見てたのあの人ら!? ずっりー！ 一瞬でも二人の

ことを凄いと思ってしまった気持ちをどうしてくれるの。てか何で私だけ構築マニユアルが破損してるの。西園さん、私がマニユアル見れてないって絶対気づいてたでしょ。報告してよそういうバグは西園さんのツンデレのツンの部分かよ。鬼畜伊達メガネキャラはお腹いっぱいですよ。

『そのバグは直していただけるのですよね。構築マニユアルも参照させてもらえれば私も仕事がかどりますし』

上司の前では下手に出つつも、要望はしっかり出しとかないと。

『そこは敢えて、直さずにこのままいきたいと思います』

ちよ、おかしいでしょ！ 敢えて直さないとか、鬼畜すぎですよプロマネ！ バグは面倒くさがらずに直して下さいよ！ 困りますよ構築マニユアルがないと。どんだん後れを取るじゃないですか。

『問題はありません。バグという壊れていると思われがちですが、あなたの記憶は壊れてなどいません。実際のところ、あなたの記憶は殆どモディファイのない状態でアガルタ内に入ったのです』

つまり、私こと桔平の地の性格に近い状態でアガルタに入ったってことみたいだ。

ほとんど人格調整を行わない状態で（自分的には結構人格調整されてると思ってたけど）神様を演じるのって、普通は相当なストレスになるらしい。でも私は元タストレス耐性があったってどうか、神様キャラとして適応できてたみたいです。

信じられないけど、「そうなんです！」伊藤さんに断言されれば、「そうなんですか！」と言うしかない。私の脳波とか脳の使い方で、世界一の維持士、キリスト先輩やブツダ先輩にパターンが似て

るってことで採用時には鳴り物入りだったらしいよ。同列に並べられるとかすげー名誉なことだけど、マジかよ。それで私だけ凡才なのに構築士になれたのな。脳波一点買いとかがだったら嫌だな。

マニユアルを参照できなかったと発覚してから、何回か緊急検討会議が行われたようだ。構築士委員会で丁々発止、数か月やりあった結果（ちなみに今は九月になってるらしい）、赤井構築士にはマニユアルを見せない方がいいという結論に落ち着いたんだそうだ。

落ち着かないでよそこに！

苦勞するのは私ですし、遅れるのは二十七管区ですよ！

いいんですか伊藤さん、構築が進まなくて責任とるのもトップのあなたでしょ！？

『その不具合も勝因の一つだったとの見解です』

勝因って、私何かに勝ちましたっけ？

エトワール先輩に勝ったのは勝ったうちにはいりませんよね、八百長試合でしたし。

『あなたはご自身を過小評価しておられるようですが、とんでもない思い違いです』

何を仰る伊藤さん。今日エイプリルフルとかじゃないですよ。いやエイプリルフルは確実に過ぎてる、外は九月とか言ってるし。叩いて伸びる性格じゃないからって褒め倒す作戦に出たってわけですね？

『あなたは世界初の偉業を成し遂げつつあるのです』

その後私が首を捻りながら伊藤さんの話を聞いて分かったことを

以下にまとめると。

厚生労働省は、事故などで重度の高次脳機能障害を患った患者さんの認知機能をアガルタ内で治療、回復させるという”仮想下りハブリテーション”に力を入れてきたとのこと。治療対象の患者さんは、以下の条件を満たした人が選ばれるらしい。現実世界での治療が不可能かつ、生存、生命維持が困難なほどの脳機能障害があつて、さらに事故前に”けんしん 献心”の意思を明確に表明している人だ。

献心というのは、献体の心バージョンだと思つていい。自分が不慮の事故で死んだ、もしくは回復不能なほどの傷害を負った場合に、医学の進歩のためにその人の記憶（心）をアガルタ内や脳科学実験に利用しても構わないという意味表明。医療の進歩に記憶をあるいはそのコピー捧げるつてことだ。

というのは、人類長寿命化が進んだ現代社会。肉体の疾患、事故後遺症などの治療法は研究され尽くしても、いかにせん心や記憶などの精神科分野の治療が追いついていない。だって人間の記憶って複雑だよ、その神経ネットワークだって物理的に操作できる代物じゃない。記憶を少しいじることはできても、壊れた脳領域を人工的に穴埋めできるもんでもない。

最近では精神医学の発展のために献心のニーズが高まっている。献心の意思を表明するのは簡単で、コンビニとかに献心意思表示カードつてカードがあるから、財布に入れて持ち歩けばいい。カード所持者の記憶が何らかの事故などで破損してしまったとき、その人の人格をデジタル化し医学的研究対象にしてもいいですつて意思表示だ。

献心意思表示カードを持つてる人って珍しい。

私？ 私は持つてない。持つてる人は精神科分野の医療関係者や

らじゃないのかな。相当できた人だ。医学のためとはいえ、心を実験や分析に利用されるなんて誰でも嫌なもんだ。皆様だつて持つてないでしょ、臓器提供意思カードも、献心カードも。

まだ肉体が生存していて、なおかつ献心の意思のあつた高次脳機能障害の患者の破損した意識コピーを治療のためにアガルタに入れ、仮想環境下で認知機能の回復や自我の修復を行い、治療が終わつたら脳に記憶を戻すつてという試みは、アガルタの全ての管区内で試験的に行われていたらしい。

治療に失敗してもそこは仕方ない。一応、記憶が壊れた初期状態のバックアップは取つてあるし、治療せず記憶が破損したまま現実世界で目が覚めない脳機能不全、あるいは停止状態よりずっといいでもこれまで仮想化リハビリテーション治療に成功した症例は一例もなく、治療方針の転換が求められていた。症状の軽い人は現実世界で治療すればいいわけだから、重症の人を仮想下で治療するつて本当に難しいことみたいだ。

この治験の内容は、ハイロードの構築士には知らされているものらしいけど、私だけ例の構築マニユアルの破損のおかげで、その事実を知らなかった。

白棕さん、蒼雲さんはそれぞれ精神科、脳外科医。私だけ毛色が違つ一般神。

構築マニユアル持ちの医師二人を尻目に、マニユアルを持たない私だけが、もたもた、のろのろと、それなりに構築を進めながら一人の患者の認知機能を回復させ、仮想下リハビリテーション治療に成功したと。

これは世界に例のない偉業なんだと伊藤プロマネは仰る。近々、厚生労働省の成果としてプレスリリースをする予定だと鼻息も荒い。

そういう医学的な利用法があると分かれれば、厚労省の予算をつけてもらう口実にもなりそうだし。当の私は、誰かを治療した覚えもありませんけれども。私が深くかかわってきた素民の中でそれっぽいと言えば……。

メグとロイのことですか？ と尋ねると、
メグだそうです。

『彼女の自我も認知機能も事故によって絶望的なまでに損傷していましたが、あなたと関わりを持つ中で自我が回復し、人間性も取り戻されてきました』

私は現実世界の一人の女性の心を救ったらしい。

伊藤さんは脚組していた脚をもとに戻し、立ち上がって私に深々と頭を下げた。

私はというと、情報が処理できず放心状態だ。

『この一例は人類の医療の未来に大きな可能性を開きました。ありがとうございます、赤井さん』

たっぷりと九年を費やして私が回復させることができたのは、今のところメグ一人だけだそう。何をどうやって治療したのかわからないけど、メグを人間のように愛情かけてかわいがってきたからな、私。その気持ちに、偽りはなかったよ。

メグは人間。そうだったのか。

治療対象者は、既に二十七管区内に複数名入っていて、経過は概ね良好とのこと。メグがたまたま回復が早かっただけで、他にも回復の見込みがありそうな患者は複数いるらしい。治療中のデリケートな時期に、私が患者と素民との扱いに差をつけてはいけなから、誰が治療中なのかは教えてくれませんでしたけどね。私、メグロイ

にだけでなく、わりと皆に平等に接してきたもんな。
てことは、素民の中にもまだ人間の患者さんがいるってことだ。

今回の成功を受け、早急に治療ガイドラインを作るため、症例数を増やすべく二十七管区には他エリアより多くの患者さんが投入されるかもしれない、とのこと。私の仕事の何がよかったのかを分析してるらしい。二十七管区プロマネとしても鼻が高いそうで……。

『今回の成功を、誇りに思ってください。アガルタを福祉施設として利用するばかりでなく、医療施設として国民生活に役立てられるとあなたが実証したのです。以後、あなたにはマニュアルを渡さないことと引き換えに、このエリアはどれだけ構築が遅れても構いません。全ての責任は私が負います』

文明レベルが一定水準に達しなくてもいいの？ そんなんでエリア開設できるわけ？ せつかく千年もかけて構築するのに開設されなくてお蔵入りとか嫌だよ私。

内心そんなことを思っていると、伊藤さんはにこつと微笑んだ。
キラースマイルですね伊藤さん。

『それは構いません。電気、ガス、水道もないゆったりした環境で自給自足のスローライフを楽しみたいという入居者も、きつと思えますよ。欲張り過ぎてはいけない、他にも代わりがきく一般的なエリア構築は蒼雲、白棕に任せて、あなたはあなたにしかできない仕事をしてください。そちらの方がよほど価値があります』

そういわれればそうか……。だって千年王国なんて二千年もかけてあの文明レベルなんだもんな。そのぶん美しい世界だけど。文明進めりゃいいってもんでもないのか。目的に応じたエリア運営をしるってことなのか。それで私は今後どうすればいいんだろう？ 他

の患者の治療に邁進すればいいってこと？ でも私、皆との絆を大切にしてきただけで、何か治療らしいことをした覚えもないんだけどな。何がなんだか、もうわけがわからない。

『それに、千年といっても、実際には千年ではありません』

嘘だろ……だってカウントダウンクロックは確実に千年＋アルファ時間になってますよ？ 気休めやめてくださいよ！

『ある程度構築が進み民の生活が安定してきて、祝福も大気を介して自然にできるようになったら、あなたは数十年〜数百年の長い眠りにつけばよいのです。トラブルがあれば民の祈りにこたえて随時目覚めて対処すればよいだけです。だいたい、神様というのはいつも起きているものではないでしょう』

えー！ そんなんありなんですか！ もしかして構築って、マニユアルに沿ってやれば本当はそれほど辛いものじゃないのかな……主観時間千年だと思ってたけど、眠ってる時間が長いなら楽ぢゃん。ちなみに、蒼雲さんは大気を介しての祝福方法を習得し、一回目の眠りに入ったとのこと。そっか、九月だもんな。外の人に時間を長い間止められなければもう数十年は経ってる頃だよ。

『話は戻りますが、メグの心はもう十分に安定しています。彼女の実年齢は二十二歳なので、アガルタ内で二十二歳になったら現実世界の肉体に戻そうと考えています。その後は保存されている現実世界での記憶と自我を統合し、現実世界でのリハビリを開始します。あなたのおかげで社会復帰できそうですよ。彼女のご家族も、あなたに大変感謝しておられます』

『肉体に記憶を戻すということは、それはアガルタ内での死を意味しますか？ 彼女は二十二歳で亡くなるということですか？』

伊藤さんは直接の答えを避けた代わりに、ふわりと髪をかきあげて視線を伏せた。

『大丈夫、眠るように息をひきとってもらったつもりです。苦痛はありません』

メグは死ぬのか、それとも生まれ変わるのか。

メグは現実世界の人間だから、死ぬと言うよりは長い夢から元の生活に戻るんだ。そして彼女の新たな人生が始まる。でも、どうしてだろう。それを今生のお別れのように感じるのは。

『メグとしての記憶はどうなります』

『自我の安定化のために必要であったプログラムですので、肉体に戻る際にも一緒にインストールします。しかし、現実世界での彼女の自我が安定化するとともに、メグの人格は自然と消えてゆくでしょう。現実に戻れば彼女はアガルタ内でのことを、夢であるかのようには認識しています。メグとしての記憶も少しはあるかと思いますが、夢の中の出来事をいつまでも憶えておく人間は、あまりいないでしょう』

ひとりぼっちで異世界に投げ出されたメグに、恐怖はあるだろう。メグの意識が段々と薄くなつて、やがて消えてゆく心細さはあるだろう。しかしメグを基本人格とし添え木として力強く蘇る、治療を受け回復した彼女本来の人格。帰還が待ち望まれているのは、メグではなく、彼女だ。

メグは死に、別の誰かが助かる。

メグの死と引き換えに現実世界で誰かが目覚め、現実の社会で明るい未来へと歩み始める。彼女の回復を待っている家族もいるだろう、現に治療の成果を喜んでいるという家族はいるみたいだ。アガ

ルタでの出来事も、私と彼女の間の絆も、長い夢の中でのことではない。

それでいいんだ。きっとそれが正しい。

メグは泣きながら、もつと後に生まれたかった、私の築き上げる世界の完成形が見たかったと言ったけれど、このエリアが開設されれば現実世界で生を終えた、メグ入りの誰かさんが再びこのエリアに戻ってくることもできるじゃないか。もしたらメグの願いも叶えられる。私の築く世界の姿を見せてあげられるよ。

メグとしての記憶は、殆どなくなった上でのことだけれど。

私が落ち込みまくっていると、伊藤さんは私の肩にぽんと手を置いて優しく声をかけた。頼れる上司って感じだな、伊藤さん。信頼できそうだけど……。

『情がうつったのはよく分かります、あなたは彼女に本気で愛情を注いできたのですから。ですが彼女は現実世界の人間であって仮想世界の人間ではなく、現実世界に戻るのが最善の方法です。わかりますね。だから、治療の成果と彼女の回復を喜んでください』

私は現実世界側の人間だから、仮想空間の彼女の命よりも現実世界の誰かさんを助ける方が大切だ。何故ならメグは、現実には存在しない命なんだから。

二十二歳のメグに現実世界からお迎えが来たとき。

私はいつてらっしゃいと言って、精いっぱい思い出と共に送り出してあげよう。

『……はい』

『これは私からの心づけです』

伊藤さんは彼のインフォメーションボードからある画像を選択すると、私の座る石の机にアツアツの鉄板が現れ、伊藤さんは出来上がったモンジャ焼きを私の前に差し出し、箸とはがし（ヘラ）をコトリと石の机に置いた。もんじゃスペシャルだ。エビ、イカ、天かすに明太子、そば、もちも入ってる。すぐ食べられるように、もう焼けた状態のものだ。鉄板の上で焼けたソースの匂いが香ばしい、湯気がほかほかと充満し、懐かしすぎて涙が出てくる。でもこみ上げてくるこの感情は、もんじゃ恋しさのためじゃないような気がする。

『召し上がってください。ご希望通り、食べられるようにしておきました。楽しみにしていたのでしょう』

『……胸がいつぱいで』

あんなに待望していたもんじゃ焼きなのに。

どうしてだろう。手を付ける気になれない。極端に言えば、メグを伊藤さんに売るような気がして……。手をつけないでいると、伊藤さんが”はがし”を私の手に手渡し、中ジョッキに入った生ビールを添えてくれた。しゅわしゅわと炭酸が弾ける音がする。これには堪えられない。

『誰でも別れは辛いものです。しかしそれを乗り越えてこそ、構築士は一人前になるのですよ』

結局、伊藤さんに強くすすめられてもんじゃ焼きをごちそうになった。情けないことに、私は仮想世界でも変わらぬもんじゃのおいしさに完敗したんだ。いそいそともんじゃ焼きをはがし、口に詰め込み味わって噛みしめる。一口噛むごとに、旨みが口中にふわっと広がり、食感もリアリティ満点に再現してもらって、とろっとしたモンジャ焼きのタネ、キャベツのしゃきしゃきとした感じも、エビのプリプリした歯ごたえ、ソースの焦げ目など、全てが懐かしい。

伊藤さんの粹な計らいで、一時的に食べ物飲み込めるようにしてもらった。伊藤さんは終始私に生体構築をかけていた。さすがはプロマネ。神である私の体も彼のボードの中で手玉に取ってる。温かいそれが胃袋に落ちてゆく幸福。伊藤さんは私が食事をする姿を興味深そうに見ている、生ビールのおかわりをそいでくれた。ビールを飲むと、忘れかけていたのどごし、ぷはーっと息を吐く。普段は食べられないが、これからは伊藤さんがアガルタを来訪した際には内緒で食べさせてあげようと約束してくれた。

伊藤さんの私に対する期待がちよっぴり重い。

私の実績(?)を評価して、私の自主性を尊重してくれてるんだって。そんなに期待されたって、メグ一例ぼつきりかもしれませんですよ？

食事をしながら、ロイも人間なのかって聞いたたら、ロイはA・Iだそうだ。彼はまた別の目的で稼働しているプログラム。非常に重要な別のプロジェクトに携わっています、ってさ……。フォレスト教授のことも聞いたかったけど、こちらはまだ話してくれないみたい。

そのプロジェクトの全貌、教えてくれるのはいつだろう。今回、プロマネが私に治験の件を白状したのだった、エトワール先輩がうつかり口滑らせちゃったからだだな。私がエトワール先輩から余計なことを聞いたり気が散らないように、直接説明してしまおうってことみたい。エトワール先輩には感謝しなきゃな。

ロイ、ありえないほど優秀だもんな。彼も何か、無意識に現実世界の人の役に立つようなプロジェクトに携わってるのかな。そういえば、メグの兄のナズはどうなったんだろう。私の不始末で、ナズの心は助からなかったんだらうか。メグの兄さまの設定だから、メ

グと関わりの深い人なのかな。食事を終えて、満腹感こそないけれど私は満足してごちそうさまと手を合わせ、伊藤さんに訊いてみた。

『ナズも人間でした。メグとどのような間柄かは分かりません。ただ、彼らは同じ日に事故に遭って脳機能を著しく損傷し、彼もまた献心カードを持っていたので治験患者に選ばれました。私が聞いている情報はそれだけです』

何故か、胸が締め付けられたように感じた。親子、兄弟、友人、恋人、夫婦……どんな関係だったんだろう。そうか、メグの意識の入った誰かさんが現実世界で目覚めても、ナズの現実の体は目覚めないままなんだ。メグと縁の深い大切な人が目覚めない……悲しむだろうな。

『ナズの記憶は相変わらず破損したままです。彼の新たな自我のコアは来年度の構築士の元で治療の為にもう一度再生されるでしょう』

来年……、それに失敗する可能性もあるってことだ。むしろ失敗する可能性の方が高い。どうやってメグを治療したのかさっぱりわからないけど、なにせ私しか治療実績がないんだ。日本で唯一、世界でも一例のみ。責任は重い……でもこの仕事は、絶対に私がやらなければいけないような気がする。

『ナズの自我は、もう一度私の管区で迎えさせて下さい。お願いします！』

メグを一人で現実世界に送り出さたくないという親心ですか。と伊藤さんは微笑む。

そうなのかもしれない。

私はアガルタから十年間外に出られない囚神だ。現実世界で目覚めたメグの記憶が孤独ではないように。メグの大切な人と一緒に目

覚めるように。そう願うのは、親心というより、私のわがままだ。本当は現実世界にまで付き添って見送ってあげたいけれど、私の職務上許されない。

ナズとメグ、二人を現実世界に無事に送り届けること。

そのために私は全力を尽くそうと思った。

『では、ナズを頼みますよ。赤井さん。ナズの実年齢は二十四歳です』

ということは、ナズは中学生ぐらいの姿だったから、うまく治療ができれば十年とちょっとで亡くなって現実世界に戻れるということだ。アガルタ内での十年間なんて、現実世界の数か月程度。治療を始めるなら今すぐがいい、まだ間に合う。メグの記憶が消える前に、現実世界に出たナズに会わせてあげられる！

伊藤さんに後ろを指を差されて振り返ると、先ほどまで私と先輩の寝ていたベッドに横たわり、すやすやと寝息をたてる、十二歳のナズの姿があった。苦しんでいる様子はない。

『おかえりなさい、ナズさん』

私はナズに、私の衣を着せかけてあげた。もう一度、振り出しに戻って全てをやり直そう。

今度は明確な意思と目的を持って、私なりのペースで構築を進めながら、ナズの心としっかり向かい合うんだ。

第3章 第7話 赤井さんと、遠雷

伊藤さんが二十七管区を去って翌日。

やっとモニタの前に出てきてくれた西園さんに、私は不満を漏らしていたところでした。あんまりですよ、マニュアルの不具合のことで教えてくれなかったなんて。長々とぶーたれてると。

『わざと教えなかったのですよ』

五分丈の白ニット姿の西園さんはしゃあしゃあと仰る。外はもう九月。さらさらストレートの髪が肩まで伸びて、顎のラインがすっきり痩せてますね西園さん。ライトブラウンの秋用メイクとゴールドのシャドーが季節感を感じさせる。西園さんは黒ぶち眼鏡を拭き拭きしてツンとすましてらっしゃる。開き直らないで下さいよ西園さん。謝罪の意味はないんですか。ないみたいですねすみません、……って、何で私が謝ってるんだ。

『いつから気付いていたんですか』

『ログインした瞬間からです。マニュアルへのアクセス履歴がありませんでしたので、すぐに分かりました』

おーいー！ 何でその時点ですぐ上に報告してくれなかったー！ 不祥事隠しとか隠べい工作とか姑息なことやめましようよ。結果オーライじゃないですよ。と抗議すると、彼女は慚然としつつも重い口を開く。

『というのは、二十七管区はすぐにリセットされるだろうと思ったからです』

ログイン時の不具合のせいで、私がマニュアルを参照してないと西園さんは気付いていた。マニュアルなしで構築を進めるのは不可

能と判断を下し、他の構築士たちが構築している区画を保存しつつリセットしようと企てた。この方法ではハイロードがログアウトすると宣言するか（リタイア）、住民全滅を待つ必要がある。ということ、西園さんは私にリタイア宣言させようとあれこれ画策したんだそうだ。

嫌がらせその一、チュートリアル改竄。

本来、チュートリアルは構築マニュアルの中に記載されているものであつてインフォメーションボード上にあるものではない。でも西園さんは急遽チュートリアルを作つてインフォメーションボードの中に仕込んでおいた。……本物のチュートリアルを改変した偽チュートリアルをね。

だから、苦痛三倍ルールは西園さんによつて挿入された項目だったんだ。確かに、意味わからん鬼畜設定だよね。構築士の勤務意欲をそぐだけだよそんなの。

嫌がらせその二、千年監禁地獄。

カウントダウンクロックの千年という数字を私に見せて説明を怠れば、私が『そんなに仮想世界に入るなんて聞いてないよ』と怯んでリタイアを宣言するかと考えたらしい。実際は伊藤さんの教えてくれた方法で、眠つてはちよいちよい起きて仕事してまた寝ればいいんだから千年じゃないんだけど、何も知らない私は、千年は千年の期間と思ひ込む。

これらの嫌がらせに加え、私の素民に対するケアが行き届かなかったことでVTECに感染しはじめナズが犠牲となつた。ナズは治療中の患者さんだったけど、バックアップコピーがとつてあるから、仮想世界で苦しみ抜いて死んでも、記憶を現実の脳に戻さない限り

においては、非人道的でもなければ法的に問題もない。そして西園さんは偽チユートリアルの条文に則って（実際は三倍ではないにしろ）私に激痛を与え、言葉攻めをしつつリタイア発言の誘導を狙ったらしいんだ。

でも西園さんの誤算は、私が相当にしぶとかったということだ。

私はヴァーチャルの彼らの命を守るため、我が身かわいさもあって、リタイアを宣言をしなかったばかりか、瀕死の状態だった住民の危機をマニュアルなしで回避しちゃった。その後は主観時間千年を根性で生き延びようと決意を新たにしていたわけだ。想像以上に凶太かった私をどうしてくれようと西園さんが頭を悩ませていたところ、住民全滅フラグ事件の後、メグの精神に少し回復の兆しが見えたらしい。

西園さんはあれこれ思案した末、どうせリセットするのだし、私にマニュアルなしで好き勝手やらせたらどうなるかと経過観察に入ったらしい。もしかして西園さんがデレたり時々私に熱いまなざしを向けてたのも、世界初の治療成果に寄せる期待のまなざしだったのかな。はいはいがっかりがっかり。

そして上司の伊藤さんに報告しないまま、今に至り全てが発覚……。

報告義務を怠った西園さんの責任は重大だ。厚労省の服務規定違反を犯してまで。あなたのキャリアにも傷が付きましたよね……？ どうしてそんなことしたんです？ と問うと。

『赤井さん、私はあなたに非人道的なことをしてしまいました。でも、あなたが他の構築士とは違うと見込んだことだったのです』

西園さんって、絶対に自分の非を認めないタイプだな。強情っぽいってか、こういうときはお高くとまったキャリア官僚って感じ。いつもはそうじゃないんだけど。……大体、見込みが出てきたのは途中からでしょ？ それまでリタイア宣言引き出して辞めさせようと画策してたくせに。

『はあ……そうですか』

もういいですよ、念願のもんじゃも食べられましたし、伊藤さんの助け舟のおかげでぐっと構築も楽になりそうですし。私がげんなりしていると、『お話は以上ですか？』とツーンとして尋ねるので、『以上ですけ……』と言い終わらないうちにブチツと通信途絶。西園さん、ツンとデレの差が激しすぎてついていけないよ。普段はかわいいところあるんだけど機嫌を損ねるとタチが悪い。私も補佐官の西園さんとはうまくやってきたいし喧嘩したくないんだけどな。

西園さんの開き直った態度に多少腹をたてつつ、私は気持ちを切り替えてナズの介抱にも勤しむ。

先輩と共に詳しく解析をかけて調べたけど、ナズの体調に異変はなかった。

ナズの身長は160cmほど。鼻も高くなく、彫もあまり深くない。日本人と外人のハーフのような顔つきをしてる。メグに似て丸顔でかわいい。メグは純日本人顔だけど、バルさん似とみた。栗毛色の短髪は、毛先がカールしててそこは外人っぽい。瞳は黒で色白、痩せてるから虚弱体質っぽい。しっかり食べて、ロイみたいに逞しくならないとね。

あの子もガリガリだったけどあんなにマツチヨになったんだ。

彼には感染症で死ぬ直前の記憶があったのかひどく怯えていたから、私は暫くナズにつきつきりだった。彼の意識が清明になると、

私の顔を見るなり彼は嬉しそうにこう言った。

「あかいかみさま、来てくれたんだ……メグの言ったとおりだ。僕、しんじていたよ」

ナズは九年前の記憶のままなんだ。あれから九年も経ってしまいました。ナズの時間は止まったまま。違うんだよナズ。あの日、私は君の元に辿りつくことができなかつたんだ。だから君は死んでしまった。全て私のせいだ、許してとは言えない。でも、まだだ。まだ終わらない。もう一度やり直すつもりなんだ。

『ごめんなさいナズさん。随分遅くなつて、お待たせしてしまいましたね』

きつく抱擁してそう言うと、彼はようやく落ち着いて眠りにつき、それと同時に彼が私に信頼の力を預けてくれたのが分かった。まる一日経つて、ナズの緊張がとけてきた頃、メグと会いたいかと聞く与会いたがったので、九年ぶりの兄妹の対面が実現。

メグはナズを見て混乱していたけど、私が常々、いつかナズを蘇らせてあげたいと言っていたから「約束を守ってくれたんですね……！」と感激してくれた。そして

「あにさまぁ！ おかえりなさい　！」

メグはナズの年齢を追い越して大人になつてたけど、メグはやっぱりあにさまと呼んで抱き合つて泣いた。二人とも、私に最大限の感謝をしてくれた。お礼なんていらないよ。むしろごめんよ。

私は昼夜を問わずナズに目を配り、彼にとびきりの祝福を欠かさないようにしつつも、時間が許す限りメグと一緒に行動してもらつた。ナズもメグに手取り足取り教えてもらつて文化的生活に少しずつ慣れてほしいし、兄妹でつもる話もあるだろう。

でもナズは小さくてもお兄ちゃんだった。体格も知識も、妹に負けたままでは情けないし悔しいもんだ。だからといってメグには教わりたくない。兄としてのプライドがある。私にも弟がいるからよく分かるよ。

「あかいかみさま、僕にもメグみたいにたくさんおしえてください」

ナズが、自発的に学びたいと申し出てきた。ナズのいじらしさに負け、子供好きの私は大歓迎。小さな頭をすべすべと撫でながら『ええ、どれだけでもお教えしますよ』

幸い、グランダには筆記具もあることだし私はナズと相部屋だったので個人授業を開始。……の筈が、三日目にはフリー君が門前の小僧、習わぬ勉強を暗い廊下に這いつくばって私の話を盗み聞きしながら一生懸命筆写してたから、ついでに彼もナズの隣に座らせ、生徒は二人に。彼はハチマキ絞め直して嬉しそうに私の授業に参加してた。そっぴやフリー君、ナズと同じ年だ。

彼らはすぐに打ちとけて友達になった。親元を離れて奉公しているフリー君も、ふざけあえる同年代の友達ができて嬉しそう。そのうちサチの席も増え、城内学級の生徒数は三人に。フリー君は幼くして奉公に出され殆ど勉強していないので、三人の学習レベルはほぼ同じで助かる。そんなこんなしてるうち……

【アガルタ第二十七管区 第3376日目 居住者数 1901名
信頼率 96%】

あつという間に数週間が経ちました。エトワール先輩は謹慎期間が終わり白翼の天使に戻りご満悦。すっかり木々の枯れ葉も落ち、二十七管区もグランダの人々も冬の装いに。カレンダーがあるとすれば十一月下旬ぐらいだ。何か半纏みたいな綿入りの上下を着て、

色とりどりの幅広マフラーを頭からすっぽりかぶって首に巻いてもこもこしてる。うちの集落では今頃、家の周りに菰こもを巻いてこもこもしてる頃だろう。

エトワール先輩が祝福と連絡がてら週二でうちの集落の様子を見てきてくれるけど、特に不都合はしていないみたいだ。ロイは後進の教育に腐心し、ヤスさんは冬に備えてつるつとした獣たちの肉の燻製を作り、狩りの指導に忙しい。

二十七管区の冬は、意外と厳しい。

十二月から二月までの間、一週間に三日は氷点下を切る。降雪も最高八十センチと容赦ない仕様。十分な防寒なしでの生存は厳しく、うちの集落でもインフルエンザのようなものがひと冬に二度ほど流行る。私がいたときは徹底してたから死者こそ出なかったものの、素民だけでは最初の冬を乗り切るのも厳しかっただろう。

最近では皆の病気への予防意識も栄養状態もよくなり万全の備えとなったからか、私が礫れきになっていた去年もメグの薬のおかげで死者は出なかつたけど、グランダでも冬の間じゅうかんに流感で数十人が亡くなるみたいだ。私の庇護下にあるからには是非とも、今年からは死者ゼロ、ついでに風邪もゼロを目指したい。

うちの集落では例年、寒さ厳しいながらにゆく年々の冬を楽しんでもいた。

冬場はカルーア湖のモンジャ集落近辺は凍結してるから、短い木の板を履いて子供達はスケートもどきに興じたり、氷に穴をあけてワカサギ釣りみたいなこともできる。私はかまくらを造ってあげたりもしてたな。かまくらの中で、皆で鍋をして冷凍ミカンのフルーツ食べてたのはいい思い出だ。

冬の訪れを前に、グランダの復興も急ピッチで進められてる。

冬場は雪で工事ができなくなるからね。迅速な復興のために、やはり金属製造技術は欠かせない。

エトワール先輩と私はキララたちに鉱毒の出ない金属精錬法のためのヒントを与え、グランダ中の職人さんたちとうちの大工集団が一堂に会し綿密な検討を重ねていた。その様子を私と先輩はそつと見守る。構築士は素民たちにヒントを出しても、直接の方法を教え、てあげることはできない。こうなると、ロイを連れてこなかった事が悔やまれる。彼は化学反応の原理が分かっているので、対策を打ち出すことなど朝飯前だ。ロイがいないながら、皆でない知恵を絞った。

やっぱりロイに意見を聞こうか、と誰かが提案しても、ラウルさんが首を縦に振らない。負けん気の強い性格のうえに、恋敵にいいところもつていかれたくない気持ちはあるみたいだ。いい傾向だね、創意工夫、お互いに切磋琢磨してくれば技術の向上にも繋がるよ。

鉱毒つつても、精錬の過程は別にまずくなかった。

グランダには鉄鉱石鉱床のほかに三つの大鉱床があり、金、銀、鉄、銅、鉛、スズ、亜鉛、タングステンなどを坑道掘りで採掘している。グランダの精錬法は反射炉式（18〜19世紀レベル）、あつちやく、先輩文明進めすぎじゃね？ うちの集落はまだ帆船も作れないレベルだったのに、文明格差半端ねーな。

鉄の精錬にはそれでOKなんだけど、銅や亜鉛の場合にはカドミウムなどの重金属や有害物質が高確率で混ざってるから、問題は廃棄物の処理方法にある。

ハクさんはロイの金属精錬法を少しかじっていたけど、あくまで

かじってる程度で詳細はわからない。そこで彼はラウルさんに内緒でこつそりとロイに手紙をしたため、エトワール先輩に預けた。角がたたないようにね。伝書鳩かよ先輩、いいようにあしらわれてますね。手紙の返事は翌日に戻ってきた（エトワール先輩の人力で）。ロイは快く、彼が実際にモンジャ集落で行っているエコな産廃処理方法を簡潔に図解してくれてた。

精錬の過程で排出される排水の濾過槽・沈殿槽を設けて、そこにあるものを加えろって書いてある。どうするつもりだろう、と私がハラハラドキドキしていると、沈殿槽に26番目の元素の粉を加えるとの指示。つまり鉄粉（Fe）だ。

鉄の還元・共沈作用を利用して、カドミウムだけでなく亜鉛、銅、ニッケルイオンなどの有害物質まで一括処理できる、鉄粉法を思いついちゃってた。A・I・なのに応用力高すぎ。明治時代でも石灰法やってたつてのに、ロイときたら……。鉄大好きっ子かよ、鉄ヲタだなあの子。

汚泥には熱処理を行うべし。重金属類は高熱をかけることによつて安定化するから、それを埋め立て、できればセメントみたいに接着剤で固めて処分しろと書いてある。処分場の近くには、雑草を植え有害物質を植物の中に蓄積させ、定期的に焼き払えとのこと。

汚泥の焼却や精錬の過程で生じた排煙は脱硫装置を通して大気に返すこと。脱硫装置内部には海水（なければ石灰水）を満たしておき、そこに硫黄酸化物（SO_x）を含む排ガスをくぐらせる。すると有毒成分は海水にトラップされ、排煙はクリーンに。さすがにそこまで話が進むと先輩も白い目をして私を睨んでた。

『おい赤井君。この時代の人間には、思いつかないと思うんだが』⁵。

と、棒読みで先輩が言うので私は視線をそらしながら

『お、教えてませんよ！ いやーさすが！ ロイさんすごい！』
と、オーバーリアクションで誤魔化した。いや、そんな処分方法なんてさっぱり教えてないよ。でも原理はみっちり教えちゃってるから責任は感じている。

その方法でもう毒は出ませんか？ と職人さんたちが私たちに聞いてきたから、私とエトワール先輩は『問題ないはずですよ』と頷くと、彼らは安心して処理施設の建造にとりかかった。お互いの文化を学び補い合って、イノベーションしてくれたいよ。

そんな日々を過ごすうち。

私とナズは城の中庭の落ち葉を掃いた後、ブナもどきの木の下でたき火をしてたところだった。ナズはたき火が温かいので、木によりかかってうつらうつらしてたから、彼を見守りがたら、私は白とオレンジのシマシマなモフモフに仕上がったアイにじゃれつかれる。まさに至福のときだ。

「が〜うが〜うが〜、わ〜うば〜うわ〜」

『よ〜しよ〜しよ〜、よ〜しよ〜しよ〜しよ〜』

アイと私は組んずほぐれつ、ゴロゴロと転げまわってじゃれあっている。何だこの絵面、アニメルレテオAVだよ。頬が緩みっぱなしで素民たちには見せられない。アイの首にもサチ特製の赤いマフラーが巻かれている。アイに限らず動物たちは神様という存在を本能的に知っていて、群れのボスのように思っている。だから私の存在を卑近に感じている限り、肉食獣エドでも借りてきた猫のように大人しくなった。アイは特に、私にかまってほしがるし。

『いつもかわいいですね〜アイさんは』

モフモフがじゃれついてきたら私はもう辛抱たまらん、頬ずりしたりして思う存分モフモフする。アイは耳を倒してぺろぺろ舐めた

り、時々オレンジの肉球で頬に強烈な猫パンチをしてくる。ははは、鼻血出たけど気にしないよ。いや待てよ？ これは苛められてるのか。

『駄目ですよアイさん、猫パンチは危険ですのでやめてください』
鼻血を拭きながらアイに敬語で言い聞かせていると、長いフサフサ尻尾に喉のあたりをラリアットされた。OH……NO、こいつはとびきり効いたぜ。嫌われてるのかな、と多少落ち込んでいると。
「わっ！！」

という掛け声とともに、私はびくつと飛びあがった。飛びあがって五メートルほど浮いちゃった。びっくりしすぎだよ恥ずかしい。メグに背中を叩かれて後ろから脅かされました。

『め、メグさんでしたか。急におどかさないでくださいよ、びっくりしたじゃないですか』
「あれー、何か焼いてるんですかー？ おいしそうな匂いがしますよー」

メグがナズにかけ布をかけてあげて、私の隣にちょこんと座りすんすん鼻を鳴らしながらたき火の炎を見守る。アイはメグの膝の上に大きな顎を乗せて、メグに頭を撫でてもらってた。

『ナズさんに食べてもらおうと思っていたのですが、寝ているので先に食べてもよいですよ』

「あにさまはお昼寝かあ」

メグはちよつとつまらなそう。

『ずっと起きていると、ナズさんは疲れてしまいますからね』

ナズは他の素民たちと比べても特に病弱だった。現実世界でも、メグより重症の患者さんなのかな。時折喘息発作のようなものを起こすので、私もナズの就寝中は気を抜けない。少しずつだ、焦ってはいけない。徐々にナズの体調を整えてゆくほかない。それが現実

世界での精神の回復に密接にかかわっているのだから。ナズはにやむにやむ言ってる。

『夢でもみてるのでしょうかね』

あ、そういえば。

なんとなく、気付いてしまいました。人間とA・Iの見分け方。

現実世界の人間は夢を見ます！

何とも単純な見分け方ですけど。

A・Iは就寝中、プログラムが待機状態になってるだけで情報を処理してるわけじゃない。でも人間の脳って就寝中も働いているから、夢を見る。事実、メグとナズは夢を見ていた。夢を見てもすぐ忘れる人もいるよね、と思って統計を取るためにグラランダの民数十人に訊いてみたけど、誰も夢を見ていない様子。グラランダ民だけ夢を見ないなんて、どう考えても不自然じゃね？

てことは夢を見てると分かった時点で人間確定かもしんない。モンジャ民では、ヒノとサチが夢らしきものを見たことがあるって言った。やっぱし……君ら振り返ると現代っ子っぽかったよね。私？ 私も夢を見るよ人間だし。

最近見た夢は、日光江戸村に行って忍者のコスプレしてたら忍者屋敷の井戸から異世界召喚され、川を流されて死にかけてたところを着流し姿の外人風の人に助けられ、紆余曲折の末、気付いたら和風な国を造って統治してたってやつ。夢の中でまで内政してるとか完璧に職業病だよね。余談だけど、その夢を見た直後、何故か「赤井仕事しろ」ってクレームが厚労省に大量に寄せられてたらしいけど全くもって意味不明。え？ お前の夢とか興味ない？ すみませんね。

私の夢はともかく、どんな夢を見たのってナズとメグに聞いてみると……これが興味深い。夢を見ている間、断片的に現実世界のことを思い出している。絵を描いてもらうと、ナズが車の絵みたいなのを描いた。メグはもつと明瞭に街並みを描ける。動物は描けるかって聞いたら、馬と牛っぽいのを描いた。これにはびっくりだ！ 私の癒しの力を受けて仮想世界で自給自足でのんびり暮らすうちに、夢をみて記憶を整理したり、少しずつ意識が修復され、統合されるのかも。

だってメグはサチと遊んでいるとき、「サツちゃんの歌」を断片的に口ずさんでたレベルだよ。メグの無意識下で、記憶やら自我が戻ってきてるんだ。メグは他の患者さんに先駆けて、現実世界に戻る準備を整えつつあるんだね。

送り出す私としては嬉しくもあり、寂しくもある。

夢の話になって、メグは、夢がだんだんとリアルになってくるので戸惑っているみたい。

「私の夢、最近だんだんと鮮やかになってきています。現実と区別がつかなくらいに。何だか、少し怖くて」

『どうしてですか？ それは悪い夢なのですか？』

私は真面目な顔でむっくりと身を起こすと、アイも起き上がり私と同じ角度で首を傾げてる。

「怖い夢じゃないんです。でも夢を見ている間は、現実がまるで夢のような気がしてくるから……どちらが私のいる世界なのか、夢の中ではわからなくなるんです」

彼女が悩んでいるようだったので、私はフォローを入れておく。

『大丈夫ですよメグさん、そこは私の元いた世界に似ています』

「えっ？ 本当ですか！？ かみさまのいた世界なら、夢の中を冒険してみたいです！」

すると彼女はぱつと表情を輝かせ、楽しそうに食いついてきた。そうだね、そこは君が帰る世界だ。そして私が十年後に帰るべき世界でもある。怖い世界じゃないんだよ。

『冒険しすぎて、迷子にならないように気を付けてくださいね』
「んー、迷子になったらかみさまの国で一番高い建物に昇って、お迎えが来るまでじっとして待っています」

一番高い建物って、新東京タワー展望台（高さ1192m）のこと？

新東京タワーは、旧東京タワーの老朽化に伴い十年前に建てられた日本一の高さを誇る建築物だ。いや、旧東京スカイツリーを利用した軌道エレベータ中央連絡橋は別ね、あれ建造物のうちに入らねーし宇宙周回軌道まで行くからね。だから待ち合わせ場所は新東京タワー展望台ってことになるのか。でも、私が迎えに行けるとしても十年後だよメグ？ ずっと待ってるわけにもいかないでしょ。それに現実世界に出たらメグの記憶は段々なくなっていくんだから、そんなに長い間覚えておける訳ないよ。

じっとして待ってるってお腹すくし……係員の人に警察に連れて行かれちゃいそうだな。

そうこう話していたら、ナズが丁度良く目を覚ました。私は中庭の掃除ついでに木の実拾いをしていたフリーくんを呼んで、火箸でガサゴソとたき火の中をまさぐる。神通力の炎でこんがり焼き色をついた焼きイモもどきが出てきたので、少しふーふーとさまし、布に巻いて一本ずつ手渡したげた。私の分はありません。

「いただきますー！」
私を除く三人が焼き芋もどきにかぶりつこうとしたとき……。

遠くから　僅かに雷鳴が聞こえた。メグははつとして耳を澄ます。

私たちは顔を見合わせ、落雷のあった方角をいま一度注視する。カルーア湖を挟んで対岸の方角……。混乱している間もなく、再び空が閃めいた。二度、三度……。空と地を結ぶ、雷の対地放電、その狙いは一点に集中している。正確無比だ、自然現象ではない。雷柱は自然放電ではありえないほど、とてつもなく太く明るい。神通力で起こしている放電現象だと、私にもメグにもひと目で分かる。

嫌な予感を払拭するように、絞り出すようにメグが彼の名を呼んだ。

「ロイ!？」

一点に集中する落雷、その意味を知るメグは血相を変えて立ち上がる。

何事もなければ神通力は使いませんし、有事に備えて少しでいいんです

ロイが神通力を蓄積チャージしているんだ。

ロイ?　君に、集落に何があつた!?

落雷を見るや否や、城外にいたエトワール先輩が私の元にすつ飛んできて喚いた。

『赤井君、大変だ!　北東を見る、コピーサークルだ!』

モンジャの上空百メートルほどに、半径百メートルほどの、のっぺりとした黒い円盤状の影が漂っている。

先輩はインフォメーションボードを立ち上げて、外部への緊急連絡を図る。SOSだ!

モンジャから立ち上る黒い煙が見えた。モンジャの集落が危険だという合図の、黒い狼煙だ!　それは助けを求める、届かない彼の叫び声を代弁するもの。

狼煙が上がれば、すぐに駆けつけます。

私はロイとの約束を思い出す。そこで何があつたんだ、ロイ!?
『私も行きます!』

必ず約束を守らなければ。危険があればすぐに戻ると誓つたんだ。でも、先輩は飛び出してゆこうとする私を押しとどめ、モンジャに戻ることを許してくれなかった。

『駄目だ。ハイロードに大事があれば二十七管区がリセットされるんだぞ。私が対処する、君はここに残り民を守れ!』

『何が起こっているんです? コピーサークルとは! 第二区画が遂に解放されたんですか?』

先輩は私の質問に一つも答えず、白翼で風を切り急上昇し、音速を超えベイパートレイルをたなびかせモンジャへと飛んで行った。すげー、アナライズかけてたら最高速マツハ1.5つて出てる。目にもとまらぬ速さ。先輩、あんなに速く飛べたの知らなかったよ。

私は留守番を命じられ右往左往しつつも、とりあえず先輩の言いつけ通りグラнда民だけでも守ろうとグラндаを覆い尽くす立方形の白い物理結界壁を展開。何が起こっているのかわからない中で、気休めかもしれないけど対策を打たないよりはましだ。メグとナズは異変を察し、焼き芋もどきを放り出してアイにしがみつきモンジャの空を見上げてる。

「あかいかみさま! モンジャのみんなが!」

メグの悲鳴に応え、先輩はあつという間にモンジャ上空に到着し黒いコピーフィールドの下に青いシート状のレイヤーを出現させた。投網を打つように上空を青いレイヤーが覆い尽くしてゆく。なにこ

のすごい技！先輩が何か黒い円盤からモンジャを守る為に防壁を張ってるっぽい。ベテラン構築士、エトワール先輩の本領発揮……つか作用領域広すぎだ、二十七管区全域じゃね？！

何、何が起るの？そんな全域カバーして守らなきゃいけないほどの黒い穴って、相当やばい何かなの？！

私は手に汗握り、何とか先輩を手伝いたい衝動に駆られながらも余計なことをすれば取り返しがつかないことになると思像できる。無力感に苛まれつつインフォメーションボードを注視している……。

【甲種二級構築士 エトワール（Canada/ID：CAN214）が多段攻撃防御システムレイヤ（IPSL）を展開しました】

あ、あれ、何この物々しい雰囲気？先輩、緊張感が違う。なんか本気の防衛じゃない？！これっていつもの出来レースじゃないってこと？

第二区画解放とか構築の仕事とか関係なさそうだ。インフォメーションボードが黒地に赤字となっている。何やら冗談では済まなそうな雰囲気！先輩がインフォメーションボードを通じて現実世界にSOSを送っているけど、仮想世界の時間の流れは滅茶苦茶速いから、どうしてもタイムラグが出てすぐに援軍はこない様子。

【コピープログラムの二十七管区サーバー侵入を検知】

は？今なんて？

【第六ファイアウォール、第二セキュリティシールドが突破されました】

【二十七管区はセーフモードでの稼働に移行します】

と同時に空は真っ暗となり、背景や建物が消失し赤蛍光の三軸グリッドが出現。

メグたちの動きが完全に止まった。グラフィックレベルをダウンし、セーフモードによって情報を保護するためサーバーが自動的にタイムラインを停止してるっぽい。いや、違うか。先輩が何かしてるのか。

【システム修復ポイントを作成】

【迎撃プログラム起動】

インフォメーションボード上を次々と駆け抜けてゆく赤い警報。積層化される赤いポップアップウィンドウ。血の気がひいてゆく。これが尋常ではない事態だということに気付いたからだ。

まさか、これはまさか本気のサイバーテロですか!?

ちょ……プロモではアガルタのセキュリティは万全ですって言う

てたのに　!!

第3章 第8話 二十七管区サイバーテロ経過説明（前編）

日本国民納税者の皆様におかれましては、平素よりアガルタのご利用ありがとうございます。

私アガルタの甲種一級構築士 赤井ですけれど……って、挨拶いからとつととサイバーテロについて釈明しろ？ ですよー。厚生省の情報危機管理はどうなってるのか？ こんな体たらくじゃアガルタ利用を見合わせるってそんな御無体なく、今後一層のお引き立てをお願いします。責任者出てこいと仰っても伊藤プロマネは報告書作成や対応に奔走しているので私が。帰れ？ 帰れませんので私が。

二十七管区の現状も含め、順を追ってお話してまいります。

現在、外時刻では十月十二日水曜日午前十一時。

前回は九月だったのに事後報告で申し訳ありません。あの時は情報が錯綜して私も対応できなかったうえ、他の構築士たちの動向も掴めず実況できなかったのです。状況が呑み込めてきたので、他の構築士たちの報告も総合して釈明したいと思います。

今回はお詫びの意味も込めて、フランクすぎる一人称ナレーションを改め三人称でお話しますよ。前置き長いから早くやれと。

ではでは。

（経過報告と釈明ここから）

仮想死後世界アガルタのシステムについて、軽くおさらいしておくとしよう。

アガルタとは外部ネットワークと論理的に隔絶されている仮想プ

ライブートネットワーク（VPN）であり、現状では人口増加問題に直面する国々を中心とした世界24カ国（最終的には120カ国が参加予定）の参加する国際機関でもある。

アガルタ日本サーバ本体はエリアごとに分散されている。

開設されている第一～第十八管区までは霞ヶ関の厚労省本庁内に未開設で稼働中の十九～三十管区は厚労省地下施設にあり、稼働していない管区やバックアップ用のサーバは、災害などを考慮した上で選定された、厚労省管轄の地下データセンターに存在していた。

厚労省内アガルタサーバへの職員による特権的アクセスは厚労省内の専用量子コンピュータ端末から行われている。構築士はログイン用ブレインインターフェイスによって仮想世界にダイブを行う。

そして日本アガルタサーバと国外サーバとの遣り取りは通信衛星（日本においては準天頂量子通信衛星“むすび”）を利用した、超域広量子多元通信ネットワークにより運営されている。

アガルタへのログイン方式は極秘とされているので詳細は省くが、これも簡単に触れておく。

人間の生脳にある記憶をデコードし複写、量子クローニングでデータを再構成したうえサーバ内に投射し、疑似ニューラルネットワーク（疑似脳）を仮想空間で構成。生脳から複写された情報クラスタを生脳と電氣的にリンクさせれば、生脳における自我の再形成も疑似脳における自我の投影も、記憶の引き出しも、そして人格との疑似脳上でのプログラム（構築士マニュアルなど）との融合も可能であり、その一方でミクスチャーは疑似脳でのみ行われるため、生脳・疑似脳間のアクセスは極めて非侵襲的である。

たとえ疑似脳が破壊されても、生脳に損傷は及ばない。疑似脳を通じてアガルタへのログインを行った人間は、意識が肉体を乖離するという独特の感覚が惹起される。

この疑似脳は神経工学的にはその人の記憶のコピーそのものであり、個人、ともいえるものだ。

生脳と何が違うかと言われると、彼らの記憶が頭蓋骨の代わりにサーバーの番地付けされた領域に格納されているというだけ。ただそれだけにすぎない。アガルタと現実世界を踏み越えるには、余りにか細いボーダーラインが横たわっているのみだ。

個人情報の保護、及び高い秘匿性、サーバーの保全是日本アガルタ運営上の最優先事項である。この点について、アガルタをクラッキングするなどのサイバーテロの困難性について言及しておく。

アガルタに関わる情報（特にログインの方式）国家機密でもあり、アガルタ内の居住者情報は個人のプライバシーに関わるため、情報の遣り取りを行う際には各国ごとに異なる量子鍵配送方式が採用されている。日本ではワンタイムパッド（使い捨て鍵）と呼ばれる暗号方式によって盗聴がすみやかに検知される。仮にアガルタ内から情報を盗まれたとて、部外秘の厚労省内専用プロトコルを用いた復号化処理を行わなければ、何人たりとも有意義な情報として取り出し閲覧することができない。

また、アガルタサーバは強固な攻撃性を持つファイアウォールを実装しており、ブルートフォースアタック（セキュリティホールをつく総当たり攻撃）でのクラックは現代の情報技術においてはまず不可能だと保障されている。

アガルタの個人認証に付随する防犯体制については、高度に複合型生体認証（DNA一塩基多型パターン認証・静脈パターン認証・深部記憶認証）され身元を保証された厚生労働省職員、すなわち構築士補佐官やプロジェクトマネージャーなど特権ユーザーがサーバーに接続し業務を行っている。

サーバーームの警備・防犯体制は言うまでもなく万全であった。国民の個人情報を預かる情報セキュリティが堅牢堅固でなければ、そもそも日本アガルタは開設されなかったことだろう。

ただ、技術的クラッキングに対する防御は盤石であったとしても、ソーシャル・エンジニアリング・ハッキング方式、即ちアガルタサーバーに接続できる厚生労働省職員を脅したり、買収したり、そのように人の心の隙に付け入るやり方での不正アクセスの脅威は排除できなかった。

そこで厚生労働省職員はアガルタ接続前に、精神アルゴリズムの解析が毎度行われる。

脳波をスキャンされ、そのアルゴリズムが不安定化していないか常時チェックされていた。これ以上の防犯対策を講じる必要があるだろうか、いやその必要はない。

厚生労働省の見解はそうだった。

……なのに二十七管区がピンポイントにクラッキングされているから困るというもの。

原因究明と犯人追及はともかく、火事場の火を消すことがトップオーダーである。

構築士エトワールが現実世界へのSOS発信を行った瞬間、二十

七管区はセーフモードでの稼働に切り替えられた。グラフィックベルがダウンしたため背景が消失し、不具合を修正するまでA・Iの演算が停止される。また、アガルタ二十七管区はただちにウィルス増殖を遅延させ現実世界側からの介入を待つべく現実世界時間と同期され、早送り状態から等倍速再生状態に入った。

【セキュリティオペレーターが不正プログラム侵入を確認】

【対策手順四 五に従って二十七管区再生速を現実時間速に同期させました】

セキュリティオペレーターとは伊藤プロジェクトマネージャーのことだ。

不正プログラムの侵入に際して、アガルタの一時停止措置は必ずしも有効ではない。

構築士らもともアガルタの時間を停止させたとして、不正プログラムのみが独立に走るおそれがある。よって構築士が仮想世界で行動できるような再生速、それが一倍速再生だ。

現実世界側から応援が来るまで、仮想空間内の構築士だけで不測の事態に対処しなければならなかった。

赤井をグラランダに残したまま、エトワールがモンジャ集落の上空に参じた頃には、SOSシグナルの発信を受けて二十七管区内に口グインし執務していた甲種以下の数名の構築士が続々と集っていた。職種に応じた色とりどりのコスチュームを身にまとい、かつてのブリリアントのように、黒子のような覆面をしている構築士もいる。白いコスチュームの着用が許されているのは赤井とエトワールだけだ。黒系統の衣装が5名……彼ら黒い装束を着るのは乙種だ。ファントム然とした漆黒の仮面をつけている者もいる。緊急時に役に立つのはせいぜい、実戦経験のある乙種までだ。それ以下の構築士た

ちは支援に回る。

モンジャ集落のA・I及び人間患者のアカウント、グラフィックはセーフモードに移行して停止しているが、黒い円盤状のコピーサークルの下に底なしの大穴が出現している。

喰われてゆく、グラフィック。仮想の空と大地が墨色のサークルに蝕まれてゆく。

このプログラムはアガルタのプログラムをコピーしながらコピー部分をデリートしてゆく、データ移動タイプとみえた。

ロイが槍を手に、コピーサークルに挑みかかろうとした体勢のままマネキンのように凍りついている。モンジャの女性や子供たちは逃げ出しているが、若い男たちは果敢にも前線に出ている。ロイが先頭となって対峙している。彼がしんがりを務め、民を逃がそうとしていたのだと読みとれる。

”ロイ……君の懸念していた通りになってしまった、許してくれ”

エトワールは、得体のしれない敵にも怯まず民を逃がそうとしていたロイの雄姿に胸をうたれながら、密かに謝罪する。ロイが集落を守るために神雷を放ちエトワールらに報せなければ、誰も気付かなかった束の間の異変だ。

『何をボヤボヤしているんだエトワール！』

ややもすると彼を誇らんばかりに、構築士たちは苛立ちを露わにする。

『甲種構築士は新任のエトワールだけか！』

『すまん諸兄がた、赤井君の他には私だけだ』

少なからず悪びれた口調でエトワールが応じる。アガルタ内部か

らプログラムを書き換える特権を持つのは、赤井、エトワールら甲種構築士のみであり、両名ともに新任という間の悪さ。赤井に至ってはマニュアルを持たないので有事に際してはものの役にも立たず、エトワールの権限も限られている。

いかなる場合にも、知識と経験だけがものをいう職場でだ。

『何で特権のある構築士がこの管区には二人しかいないんだ！ 上級権限を持つ赤井がマニュアル持ってないというのに……』

下位の構築士たちの間では、杜撰な危機管理体制に対する不満が滲む。各区画で個別に執務していた彼らは、何名の構築士がどのような役回りでログインしているのかを知らされていなかった。

『ぐぐだ言っても仕方ないだろう！ この管区だけは絶対にリセットさせるわけにはいかん』

さもなくば、赤井の成し遂げた世界初の仮想下りハビリテーション治療実績がふいとなる。手探り状態で人一倍も二倍も苦勞し成果を出した、赤井の業績を世に知らしめたい、彼らの心は一つだった。彼を陰ながら補佐する全ての構築士たちの言葉に熱が入る。

『我々の任務はハイロードと二十七管区を守り抜くまで！ 露払いは任せるエトワール』

『そうでしたな』

悪役である乙種構築士三名がインフォメーションボード上に映り込んだグラフィックから、一斉にクリスタル製の刀身を持つ両手剣を実体化して抜刀する。タイミングを合わせ、狙い定めて大剣を振り抜けば、挟みうちで消去コマンドを乗せた真空刃がサークルを*の字に切り刻む。

攻撃をもろに受けたサークルがぐらりと歪み、鮮やかな切り口でショートケーキ状に解離する。効果ありとみるや、彼らは息を合わせ第二撃、第三撃と手を休めない。

即興の三重奏を奏でる。

『不正プログラム破壊！ 吹き飛ばせ！』

『いったか！』

様々なポジションから、固唾を呑んで見守るそれぞれの立場の構築士たち。しかし黒円のコピーサークルは散り散りになってもすぐに会合し、何度試みても、トプンと円盤状に戻るのである。彼らの懸命の攻撃はわずか数分間、コピーサークルの増殖を足止めするにとどまった。コピーサークルは隔離・破壊コマンドをも無効化し、堰を切ったかのように拡大の一途を辿りはじめた。

ベテラン構築士勢もこれにはたまらず反射的に跳び下がる。

下手に触れば、彼らのアバターも無事では済まない。

『駄目だ、特権のない我々のコードでは対象を破壊できない！ 急げエトワール！』

祈り叫ぶ、彼らが暗に希求してやまないのは……

『了解。アイムール（Aymur）、及びヤグルシ（Yagrush）を起動する』

起動準備を整えたエトワールが表情を引き締めた。

悪役として荒事をそつなくこなしてきた彼であっても甲種としては新任、緊張が迸る。

力強く宣告し、インフォメーションボード内より身の丈ほどの二本の白杖を引き抜く。ウガリット神話に登場する神器に由来し、アイムールは撃退を、ヤグルシは追放を意味する攻撃的アンチウィルスである。

神器と呼ばれるからには神である赤井が起動すべきなのだが、彼と同格の甲種構築士であるエトワールが代行する。逆手に取った二

本の杖を滑らせ虚空に光跡を刻みつければ、抽出された不良領域が浮かび上がり明滅を繰り返す。

『攻撃対象領域を指定』

結界でアンチウイルスプログラムの適用範囲を絞り、エトワールが杖先で実行用の暗号列を結ぶと、白光の半透明グリッドの立方内に捕捉する。

『実行せよ』

胸元で交えた両の杖を×字に組めば、深黒晦冥にして凶悪たる闇を、エトワールの結界が擦じ切り押しつぶそうとする。彼の立ち上げた光格子は金切り音をあげ、暫し拮抗する。不正プログラムがアンチウイルスによって不安定化し、切り崩されては修復される、インフォメーションボード内で解析された、情報量（qubit）の増減が著しい。

しかしその修復速度がじりじりと詰められ、アンチウイルスを凌駕したとき、競り勝ったのは不正プログラムであった。大きく内側にひずんでいたエトワールの結界が徐々に押し戻され外側にしなり、臨界に達しプログラムはデータ屑へ、パラパラと分解されて二十七管区ベースグリッド上のデブリとなり散った。

『何てことだ、アンチウイルスでも……相当に悪質なブツだぞ』

【360秒後、特権アカウントがログインします。カウントダウン開始】

アンチウイルス無効化をうけて危機感を覚えた現実世界側のアカウントが、直接対応するというサインが発せられた。誰が応援に来

るとは知らないが、現実世界の人間が直ちに緊急ログインできるわけではない。

まず生理置換液の入った水槽に全身を浸し、絶妙なバランスで構成されたダイヴ用ラインと生体神経接続し、パーソナルファイルを読み込み、補正し、ブレインデコーディング（脳暗号パターン解析）が開始され疑似脳と連絡、仮想世界に同調させるまで数分間を要する。

それまでに、二十七管区がもつのか。
構築士達の間、沈鬱な空気が淀みつつあったそのとき。

グリッド上に二重円に似た転送陣が光投影され、円の中央に”焼”という赤文字が浮かび上がる。仮想空間内に天上から巨大な判が押印されたかのようだ。

『おお、あれは！』
【デバッグアカウント・強羅大文字焼、信楽焼　　が二十七管区にログインしました】

インフォメーションが流れ、左胸に”焼”というロゴの刻まれた黒いツナギの二人組が出現する。

『焼人だ！　もう来てくれたのか！』

通称”焼人”^{やきびと}と呼ばれる彼らは、アガルタ内にシフト制で常駐するバグ駆除専門のサポートアカウントであり、ウイルス対策アカウントではない。現実世界側から干渉できない細かなバグをすみやかに発見ならびに駆除し、現実世界側に経過や処理を報告するのが仕事だ。　が多いほど上級アカウントであるという内規がある。

が、現実としてウイルスはバグを突いて作成されるケースが大半であり、焼人達は緊急時にコードを改変することも職務とされる。ファーストエイドとして、彼ら焼人が遣わされた。

強羅大文字焼ビュウリ が男性、信楽焼 が女性のアカウントの筈だがどちらがどちらなのかは体格で判断するほかない。何故なら彼らは、黒い目出し帽とゴーグル、ラバーの防毒マスクを装着し素顔が見えないのだ。

『なんとまあ、日本アガルタ初の不祥事だね。不正プログラムの侵入って、一体どこから入ったんだ。して、信楽焼の姐御。火力はいかほど？ 焼きすぎると構築士さんらに輦蹙をかう』

熱で揺らぐノイズを纏わりつかせ、鈍色をした火炎放射器のグラフィックを攻撃対象に向け上下にくゆらせながら、強羅大文字焼が口早に伺いを立てる。

『しかし最大火力を推奨しますよ。強羅大文字焼、生半可な火力では焼き尽くせないかもしれません』

細身の体で肩打ち式のロケットランチャーを担ぐ信楽焼は沈着冷静だ。コピーサークルの構成を分析した結果、手加減しようとしていた強羅大文字焼に油断をするなど言い渡す。強羅大文字焼は火炎放射器のノズルを構える手を、ふと止めた。信楽焼が処理に持てあます様子を、彼は初めて目にしたからだ。彼はゴーグルを下ろした。『最大火力って本気ですか、姐御』

ちなみにバグを“焼く”というのは当初独立行政法人として発足した日本アガルタ開発者の遊び心から生まれた言葉で、バグ駆除とコード修正をイメージ化した厚労省内のスラングだったりする。

『して、そのところは？』
真意を問おうとする強羅大文字焼。

『おい、待て今なんてった！？』
かたや、最大火力でと聞いたエトワールも信楽焼に問う。そう、

焼人の炎が敵性を絞り込めなかつたり炎がコピーサークルに弾かれるようなことにでもなれば、モンジャ集落で接続されている全ての人間患者のアカウントにも誤爆する危険性があるのだ。

『待て待て、最大火力だと?! 民を焼き打ちにするつもりか!』
寡黙なエトワールがいつになく大声で吼えた。

一見、悪役時代にグラндаの城壁も民も遠慮なく焼き払ったことなど柵に上げているかに見えるが、その実、ハイロードの担当する区画以外の区画には生身の人間はいなかったからこそその壺行だった。ところがモンジャの集落はハイロードの区画なので生身の人間が入っている。文字通り身を削る苦勞の末に、赤井が治療を施した生身の民。彼らもろとも焼き焦がすつもりなのか。

『二十七管区全体に被害が及ぶのとどちらがいいのです。A・Iをいくら焼いたところで構いますまい。それともここは人間のいるハイロードの区画なのですか? ハイロードがないようですが』
『ここはハイロードの起点区画だ。話せば長くなる事情があつてなそれを指摘されると耳の痛いエトワールであつた。構築士マニユアルを持たない赤井は伊藤の判断によって特別待遇に処されているが、特権アカウントを持ちながら不見識な赤井自身が二十七管区の弱点であるとも言えなくもない。』

『この非常時に担当区画を留守にして。何と無能な神だ。尻尾を巻いて逃げだしたのか』
強羅大文字焼が蔑んで小首を傾げる。

『……確かにあんたらから見れば無能かもしれない。だが、私からすれば見所がないわけでもなくてね!』

エトワールが啖呵を切ると、モンジャ集落の手前に頑強な耐火壁

を構築する。大小の青いブロック状の防護プログラムがレンガ状に堅牢に積層され、文字通りの耐火壁を構築しそれはモンジャ集落領域の盾となる。

『存分に焼き払え！』

『言われなくとも焼却してやるからそこをどいてな、酸欠で失神するぜ。火炎放射開始！』

挑発に応じた強羅大文字焼がノズルを上げて最大火力を放射し、コピーサークルの防御シールド表面を広範囲に焦げ付かせ穿孔する。辺り一面、火の海だ。熱放射がもろに跳ね返ってくる。エトワールが耐火壁の前に物理結界を積み増し、モンジャの民を放射熱から守る。

コピーサークルが焼ける頃あいを待っていた信楽焼が

『弾頭の投射を開始します！』

強羅大文字焼の攻撃に引き続き、信楽焼が続けざまに肩うち式ロケットランチャーから直接照準でミサイルを投射する。高衝撃熱圧力爆弾弾頭は、強羅大文字焼が火炎放射で周囲の酸素を大量消費した後でも爆発・燃焼を引き起こす。命中した瞬間、炸裂音と共に辺りは閃光と煙幕に包まれ、グラフィックが熱に歪み視界は限りなくゼロとなる。

僅かばかりの期待と焦燥感を懐きつつ、成否を待つ構築士らの表情は一樣に険しい。

対流の止まった大気は煙幕のベールを希釈しない。煙塊となってその場に留まり、その拡散は遅々としている。痺れを切らしたエトワールが大きく息を吸い、アトモスフィアを込め息を吹きかければ一陣の旋風となつて黒煙を吹き飛ばす。

煙の晴れ上がった、その座標にコピーサークルは存在しなかった。状況だけ見れば、不正プログラム駆除および焼滅は成功している。

『ものの見事にやってくれたな……！ さすがは焼人の炎だ！』

『よくやったぞ！ 助かった……！』

しかし信楽焼はなおもランチャーを肩に担ぎインフォメーションボードを睨みつけたまま、構築士達からの賞賛を諾しない。着弾の手ごたえがなかったのだ。彼女はふつと顔を上げ、何かに気付き真横を見据えた。つられて視線を向けた構築士たちに動揺が走る。

『あ!?!』

『み、見ろっ！ グリッドが消えてゆく!』

仮想世界の屋台骨、その仮想基盤を示す直線の赤いグリッドが波を打ち、直線上から剥離をはじめめる。

二十七管区のリセットシーケンスの開始を示していた。

第3章 第8話 二十七管区サイバーテロ経過説明（前編）（後書き）

Special Thanks! 情報工学考証、匿名の方。

細やかな考証、ありがとうございます。大変お世話になりました！

赤井 『あれ。モンジャ焼　　さんは？』

そんなアカウントはアガルタにはいません。

修正「大文字焼」 「強羅大文字焼」

第3章 第9話 二十七管区サイバーテロ経過説明（後編）

『何故だ。何故、不正プログラムは処理した！　なのにリセット…
…だと！？』

『誰もリセットの要請は出してない。赤井がリタイアを宣言した
というのか?!』

異例に続く異例。

構築士達はリセットシーケンスの開始を目の当たりにし、戦慄を
禁じ得ない。リセット、それは仮想世界の崩壊を意味する。次に執
るべき対処手順は唯一だ。

総員、退避行動をとるべし。

早急に仮想世界からログアウトを終えなければ、アバターもろと
もリセットに巻き込まれてしまう。アガルタと疑似脳のリンクを切
らなければ！

『いや、私はここに残る。赤井君はそんなやわな男ではないぞ！
信じるんだ、彼を！』

エトワールが彼らを鼓舞するように怒鳴りつけた。彼は知っている
からだ、赤井はこれまで何度でもリタイアすることができた筈だ
つたと。赤井がそれを自らに固く禁じていただけだと。

グランダの城壁に掲げられた彼を、ブリリアントであった彼は一
年にわたってつぶさに観察してきた。何度赤井の心を読み解いても
リタイアの意思は欠片もなかった。それどころか彼は、途切れ途切
れの意識の中で彼の民を想い続けていたのだ。

素民とはA・Iでありプログラムだ。感情移入は危険である。
彼らはいくらでも代わりはきく。人間の患者の治療は必要だが、

身動きすら俣ならぬ中、ただ苦痛を耐え忍ぶなどふざけている。A・Iのために人間が苦しむなど、狂気の沙汰だ。しかし彼は真剣であり、狂つてもいなかった。彼はひたむきに、彼の民との絆を信じていた。

だからエトワールは確信を持ってこう言えたのだ。

あの赤井が、リタイアを宣言する筈がない！

【リセットシーケンスをキャンセルしました】

ガギン、と天空より異音がしてグリッドの剥離が止まった。現実世界側からリセットシーケンスを妨害したのだ。そして立て続けに緊急投影されたのは。

【天御中主神あめのみなかぬしのかみ】

を仮想空間へ実体投影します】

彼らの混乱に割って入るかのごと、壊れゆく仮想世界の空に（権）という文字の入った白光の大判がつかれた。現実世界からのログイン、転送陣だ。

仄暗い仮想世界を燦然と照らす、後光を纏い白衣を着たアバターが投影される。そのログインフォームの美しきはさながら高飛び込み選手が入水してきたかのよう。後光と白衣はハイロードにのみ実装され、その存在の気高さを特徴づけるもの。

『……二十七管区に、主神ハイロードが二柱！？ 神はひと管区に一柱が原則だ』

『な、何なんだ……！？ あのアバターは。見たことがないぞ』

『天御中主神といえば、天照大御神より先代にあたる神道由来の神ではないか？』

そういえば彼は、日本神話の世界から抜け出してきたような古代人然とした白衣を纏っている。首には三連の水晶製の勾玉らしき首飾り。長い直毛の黒髪に意思の強そうな黒瞳のグラフィックは性別不詳、男神型でも女神型でもない。

敵とも味方ともつかぬそれは、遍く構築士らに混乱とともに迎えられるている。彼ら是我先にと謎のアバターに解析をかけ、いち早く結果を得た誰かが悲鳴を上げた。しかし怪しいアバターは悠然として構築士たちに目もくれず、その軌跡にオーロラを引きながら、瞬く間にグランダの方角に飛び去って行った。

『駄目だ、構築士IDが表示されない。正体も分からない！そこに何も存在しないことになっている』

『はあ！？ そんなわけがあるか！』

構築士ID、及びスタツフIDは疑似脳IDに対応する。疑似脳とのアクセスがなければログインができない仕様になっているのだ。特異な接続方法でアガルタにログインしてきたのか。

『あれは本当に厚労省のアバターなのか？！ IDのないアバターなど、見たことも聞いたこともないぞ！ あれも不正プログラムだったとしたら！？』

『くそつ、どういうことなんだ。事情が分からんが追跡しろ！ グランダには赤井神がいる。信楽焼とエトワールはここに残り、セキユリティホールの特定と監視を続けていてくれ』

混乱の度合いを深めつつも、強羅大文字焼、そして数名の構築士が飛び立ち疑惑のアバターの追跡に回る。彼らを見送りモンジャの地に残り、セキユリティホールの特定に乗り出したエトワールに信楽焼が眉根を寄せ、こう漏らした。

『この派手なクラッキングは構築士達さんたちの気を逸らせるための茶番でしかなくて。コピーも真の目的ではなくて。真の目的は、

別にあるのでは？』

エトワールは信楽焼の見解に凍りついたが、心配には及ばなかった。

厚労省の伝家の宝刀にして決して表舞台には出ない影のAvatar、それが天御中主神だ。

構築士IDこそないが、正規のアカウントだ。彼の疑似脳は一般構築士らとは異なる安全な専用領域に格納されている唯一のアカウントであるため、IDなど必要としない。そして構築士IDが割り振られていないのは、構築士の駆るAvatarではないから。

それは二十七管区プロジェクトマネージャー

伊藤 いとう 嘉秋 よしあきが有事の際に駆る、

日本アガルタ最上級の権限を持ったアカウントである。

天御中主神は日本神話における天地開闢の際、宇宙の創造を成した神であるとされている。天御中主神は全知全能の力を持ちながら天地開闢を終えると姿を隠し、幾代かの神代を経て、日本人には最もポピュラーな皇祖神、天照大御神ら三貴子へと高天原の治世をゆだねたという伝承がある。

つまりそれは常態では不可視の神霊なのであった。

何故伊藤プロジェクトマネージャーがチートを地で行くAvatarを所持しているのかという話だが、彼の略歴を鑑みれば至極真つ当であったりする。ついでに少し、伊藤 嘉秋という男の略歴に触れておく。

伊藤 嘉秋は元甲種一級構築士、構築を終え35歳で一度定年退

職して退職後の再雇用組だ。文官策士タイプの人材型キャリア官僚がプロジェクトマネージャーとして任じられるケースが大半という中で、彼はキャリア組でありながら実務経験も豊富である。

彼の構築士としてのキャリアは長く、

18歳から現在に至るまでの歩みは質実にして剛健である。

彼の現役時代はまだ日本アガルタが開設しておらず、海外のエリアが試験的に運用されていた頃。当時北京大学生であった彼は、採用年齢制限のない中国アガルタの構築士候補生として採用された。

そして実時間1年、仮想空間時間にして10年のトレーニングを仮想空間内で受けた後、北京大学卒業資格を仮想空間内で取得し、道教三清が「柱」、太清境（たいせいきよう：中国第八管区）の主神（神仙）、太上老君（たいじょうこうくん）として4000年を費やしての太清境構築に心血を注いだ。

彼の作品である太清境の芸術的なまでの美しさと構築センスが実際に評価され、そのキャリアを買われ厚労省に引き抜かれた。彼は日本アガルタ初の区画構築のパイロット的存在（事前実証実験者）となり、高天原（日本第一管区 / 主神：天照大御神）管区で天照大御神役に大抜擢、現実世界の性別と違う女神役という難しい役どころを見事に務めあげ、第一管区の開設までに多大な貢献を果たした。

引退した伊藤であるが、二十七管区のみならず複数の管区を統監するゼネラル・プロジェクトマネージャーとして後進の育成に腐心している。彼は現実世界側で執務する職員でありながら仮想世界へ実体干渉することを許された、半ば伝説がかったカリスマであった。

エトワールらベテラン構築士勢が一目も二目も置くわけである。しかし現在もなお、アバターを駆っているとは誰も知らなかった。

伊藤が赤井に“全責任を負う”と告げたその真意は、彼がアガルの機構を知り全責任を負う立場と実力を兼ね備えていたからに他ならない。だから彼は誰よりも速く赤井のもとに馳せた。エトワールよりもなお速く。

赤井がいると示された座標に赤井らしき者はおらず……裾丈まである黒いフードに身を包んだ不審なアバターと鉢合わせになった。人が一人入るかというような白い繭を伴い浮揚している。繭の大きさ、膨らみ具合といい、見当は自ずとついた。繭の中に赤井が閉じ込められているようだ。

このアバターが実動者だ、モンジャでの茶番は目昏ましかった。

瞬時に状況を把握した天御中主神は相手アバターの言い分も聞かず攻撃に転じる。

単純に右手を手刀のように用い、素手で侵入者アバターの胸部を貫き通す。

彼が豆腐を砕くかのようにぐしゃりと内腑を掻き混ぜれば、アバターは内部から沸騰、膨張し、穢れた雄たけびを残し雲散霧消する。それが跡形もなく消滅したあとには黒のフードだけが残ったが、それも天御中主神の神通力の前に朽ちてボロボロになる。

大胆不敵にも厚労省を敵に回し、あまつさえ主神を連れ去ろうとした愚か者に天誅を下した後、揚力を失い地に墮ちようとしていた赤井入りの繭をしっかりと受け止めた。

『狙いは赤井さんだったのか。しかし何故』

繭を切り裂くと、気絶した赤井の蒼白な顔がにゅっと出てきた。

天御中主神はひとまず息があることを確認し表情を和らげる。きわどくはあつたが、間に合ったようだ。力づくで誘拐されてしまったら疑似脳が乱され……疑似脳とのリンク解除の手順を間違えれば心と体がバラバラに引きはがされ。二度と現実世界に戻れなくなっていた。

寝袋から全身を引きずり出すようにずりりと引き出してみれば、神体に無数の黒い針が挟じ込まれている。素早く解析をかけると、針の先に麻酔と神格補正プログラムが仕込まれていた。赤井の神格を改変し眠りに落して、どこかに運ぶつもりがあつたらしい。とげぬきのように針を一本抜けば、それは爪楊枝ほどのサイズだ。彼は一本一本抜き捨てる、赤井がおぼろげながら意識を取り戻した。

『……………！！！？』

赤井は後光を放つアバターが至近にいたので驚き、天御中主神を押し退けるようにもがいたが、全身が痺れ動くこともままならない。唇も動かず悲鳴すら出てこない。思考の糸が纏れたまま、ただただ赤い瞳を大きく見開く赤井に、

『驚かせてすみません。私は伊藤ですよ赤井さん、動けないでしようからじつとしててください』

少し落ち着きを取り戻した赤井に、伊藤は彼が襲撃された時の光景を、赤井の記憶から速やかに読み解いていった。

赤井がエトワールの命令通りにグランダを結界で庇護していたら、何者かが赤井の背後から出現。神通力を行使する前に奇襲をかけられ、一瞬のうちに蚕の繭のようなものに閉じ込められた。繭を切り裂こうと中でもがいていると繭の外側から遠慮なくブスブスと針を刺され、成すすべもない。急所を的確に狙われ、猛烈な眠気

に襲われ繭の中で意識を飛ばし、そして今に至る。

「何と情けのない主神がいたものだ、彼も自覚しているようだ。」

” 伊藤さん……も、モンジャとグラндаは？！ 私、どうなったんです。声が出なくて”

『二十七管区は無事ですよ、そしてあなたは麻酔針を打たれました。どうせ嘔み嘔みなので喋らないでください』

” す……すみませんでした”

遅れて続々とやってきた構築士たちに見下ろされ囲まれながら、最後の思念を伝え終わらないうちに彼は再度意識を飛ばした。

赤井の意識が飛んだのを目撃した彼らは憤慨し、殺気立つ。手に攻撃プログラムを携えてぐるりと伊藤を囲んでにじり寄る。槍の切っ先をひやりと首筋に突き付けられながら、伊藤は意に介する様子もなく。

『 貴様……赤井をどうした！？ 言え！ 』

『 私は伊藤ですよみなさん、武器を下ろしなさい。不正プログラムは破壊しました』

ざわめきは消えない。

『 赤井さんは完全に眠ってしまいました……微小なプログラムが針を通して彼のアバターに入り込みました。精神安定剤的なもので有害ではないかと思われませんが万全を期し、復元ポイントまで構築時間を戻しましょう』

『 もう二度と、このようなことがあつてはいけません』

悔しさを滲ませる、構築士たち。それは伊藤も同じだった。赤井が無防備であるならば、もっとセキュリティに万全を期していなければならなかった。

それにしても何故、赤井が狙われたのだろう。
構築士たちに説明する一方で伊藤は自問しながらも、その答えは
臆げながらに見えている。

赤井がログイン時の初期不良のためにマニュアルを参照できない
という情報は、厚労省上層部と二十七管区スタッフ全員に緘口令が
敷かれている。

赤井は最小限にしか人格補正処理が行われずログインした、世界
でも前例のない、人の心を持つ神であるということ。それは伊藤の
考えるに、赤井の長所だ。

しかし同時に、彼は決定的な欠陥も抱えている。彼は日本アガル
タのみならず、世界中で最も無知で脆弱な仮想世界の主神である。
その脆弱性情報を入手した何者かが、赤井に修正プログラム、パッ
チがあてられる前に、怪しからぬ目的のため彼を誘拐しようしたの
だろうか。

目的は神のAvatarなのか。
それとも赤井というプログラムか。

少なくとも前者のみが目的だというのは説明がつかない。例え
ば神のAvatar入手が目的であって赤井の神格が不要であるという
なら、邪魔な赤井の神格を破壊するウイルスプログラムや神経毒プ
ログラムが仕込まれていてもおかしくなかった。どうやら赤井の神
格は無事である。犯人はただ神のAvatarが必要なのではなく、赤
井の神格を保全したまま誘拐したかった、と考えるのが妥当だ。

曲がりなりにも厚生労働省内の堅牢堅固なアガルタサーバ。一国

の政府を相手取って仕掛けた大犯罪だ。日本アガルタ初、欧米のアガルタでも一度たりとも報告例のない不祥事。国際的に暗躍するサイバーテロリスト……などの犯行？ ましてや愉快犯であるわけもない。伊藤にはさっぱりアテがなかった。

ただし、一つだけはつきりしていることがある。

厚労省内に、サイバーテロを手引きした裏切り者、
またはソーシャルエンジニアリング・ハッキングの標的とされた者がいる。

（釈明ここまで）

あえいうえおおお！ かけきくけこかこ！

させしすせ……あ、すみません思わず発声練習しちゃって。

とまあ、こういう顛末でした。ふー、他のスタッフからの情報をもとに慣れない三人称で喋ると疲れるつてものです。その後、伊藤プロマネの迅速な対応のおかげで復元ポイントに戻り、グラフィックレベルも復旧。アガルタ再生速は段階的に元に戻り、素民たちも不正プログラム侵入時の記憶を消され動き始めました。メグたち人間の患者も一人残らず無事です。私は毒針を打たれる前の状態のバッテリーに戻り、他の構築士も何事もなかったかのように持ち場に戻り、伊藤プロマネは不定期に巡回。エトワール先輩はモンジャに常駐することになりました。

ああ、一つ大きく変わったことといえば。

モンジャ集落に隣接する草原には“この木なんの木気になる木”的なビジュアルの幅広で大きな木がよつきりと生えてました。伊藤プロマネがセキュリティホールを大樹のパッチで塞いだんだそ

うで。モンジャ民は大木の出現に驚いたものの、幅広でなめらかな葉を干すとメモ用紙のように使えるので、それなりに好評だった。夏場になれば涼しい木陰を作ってくれるかもしれない。

目下、伊藤プロマネはサイバーテロ対策室を立ち上げ、犯人の洗い出しとセキュリティホール発生の原因究明に全力を投じているとのことです。

うん？ お前あの非常時に何にもしてなかったのな？ そうですよ私恥ずかしい話ですが手も足も出ませんでした、気絶してただけ。それに現場にいなかったから実況できなかったんです。それで今回は三人称なわけでしたね。

我ながらすげーカッコ悪い。

……二十七管区の主神を天御中主神に代わって言われても。いや伊藤さん一応リタイアして構築士としてはご隠居中ですから。今回はのっぴきならない事情で活躍しちゃったわけで。

え？ ナレーションを伊藤さんに代われ？ 国民の皆様そんな殺生な。

でも伊藤さんに“ちょっと非常時用の実戦訓練をしておきましょうね”、と割と真面目な顔で言われました。いかに自由にさせるといっても、私が全くの無能じゃまずいと考え直したご様子。天御中主神直々にご指導いただけるようです。

つか実戦訓練って何？

組み手とかだったらチートな伊藤さんに速攻殺されそう。死にませんけど気分は死にそうです。私もちよつと強くないとな……皆に守られてばかりで僥びない。リセット寸前までいってたって、聞いただけでも鳥肌ものだったよ。

「そういえば私の担当官の西園さんは何をしていたのか、ですか。あーそれ聞いちゃいますか。地雷ですよ今聞かないでください？……でも聞かれたからにはお答えします。」

私の担当官だった西園 沙織さん、十月一日付で退職したそうなんです。サイバーテロが起こったのが十月二日、彼女はアガルタのアカウントを失効していました。

左遷じゃありません、別部署に飛ばされてもいません。

けんもほろろの、懲戒解雇です。

上司に報告を怠り虚偽の報告をしたこと、私に対して数々の虐待紛いの非人道的行為を行ったという背任罪が加算され、精神的虐待といってもアガルタにまつわる不祥事は刑事事件として立件できないので、上層部に報告が届くなり内部規則違反で一発解雇でした。

ですので新たな担当官が決まるまで伊藤プロマネが代わりに私の担当官をされるようです。ここ数年、モニタ越しに良好な関係だったのに最後の最後に喧嘩別れしてしまったのが心残りだ。西園さん、私もう一度会いたいです。そしてあなたの真意を聞きたかったんです。

別にあなたのこと恨んでませんし、そんな怒ってませんよ。九年あなたがいたから私はこの世界でやっていけたんです。西園さんとの最後の通信の日、彼女の任期最終日だったみたいだ。

彼女は私に別れを告げようとして、何か話したいことがあったみたいだけど、私が一気呵成に不満をぶちまけたり捲し立てちゃったから別れを切り出せなかつたみたいで……。

「ごたごたしたけど、私の担当官は西園さんがいいんです。
新しい人じゃなくて。」

「西園さん、あの日あなたは私に何を話そうとしていたんですか？」

第3章 第10話 赤井さんと、青い少女

『赤井さんが脆弱でした』

日本語的におかしいサイバーテロの暫定調査結果を報告してくれたのは、あめのみなかぬし天御中主さん。

日本神話に出てきそうな純白の神様服を着て、頭にはちよこんと金の冠(?)を乗せ、首には三連の勾玉の首飾り、肩に若草色の羽衣らしきもの漂わせ、スカート状の裳をつけてる。唇にはほんのり桜色の紅……っておかしいでしょコレ。伊藤さんどうしちゃったんですか。

そう、今回の天御中主さんは女神様だ……な、何を言っているのか分からないと思うけれど

女装してるとか男の娘とか、そんなんじゃないマジ女神。

天御中主さんは”独り神”という設定で、性別がない。ログインするたびランダムで性別が変わる。

伊藤さん的には、それでいいの？とも聞けず。千年以上も神様やってると、どうでもよくなるのかな。ある意味歌舞伎の女形みたいなもんだけど、神体は完全に女性だ。私、女神様とか至近距離で見たことないし心臓飛び出そうなほど緊張してる。

だって美女すぎだし神々しすぎっつーの？

端正だけどあどけなさの残る御顔立ち、気品溢れる柔らかかなお声、シャンプリームモデルばりに艶やかで長い黒髪、華奢な骨格に、

ブルンと瑞々しく白い肌、たわわなバスト。

思わず、オッパイ、オッパイ、と唱えながら腕ふりをしてしまったよ。私も男だった頃の感覚が多少残ってるのかな。ここにきて遂に私への福利厚生サービス? でも残念、うっかり思い出せば中身は妻子持ちのオッサンだ。

はいはいがっかりがっかり。

そんなことはともかく。私達がどこにいるかというところ、カルーア湖上の神殿にいます。そう、神殿ですよ！ 私も遂に”黄金伝説”ホムも真つ青な、灯りもベッドも家具もない洞窟生活から、憧れの神殿へと拠点を移動。この壮麗な白亜の神殿は、天御中主さんが何かCADっぽい3D構築プログラムで建てて下さった。和、洋、中華風どれと言われても困る感じの建築様式。強いて言えば現代風か。無論素民にはパクれない建築水準で建ててる。

天御中主さんはカルーア湖のご真ん中に神殿を建ててくれてグラウンドとモンジャ側に一本ずつ、参道というか立派な浮橋をつけてくれたので、モンジャの民もグラウンドの民も私の家に遊びに来てくれて、更に浮橋を渡れば、モンジャとグラウンドが迂回せず最短距離で行き来できるようになった。これで交易もスムーズにできそうだね。昼は神殿から外に出てしっかり民にサービスして、夜はここで寝ることに決めた。

神殿は巻貝が浮かんだ感じのフォルム。
私は密かにヤドカリ神殿と名付けてる。

半月形の白い謎材質の屋根が、柔らかなカーブを描いて蓮のように建物を覆ってる。

内部は楕円状の構造で、入口の手前側が大列柱室だ。大理石質の床の上を整然と立ち列んだ高くそびえる石柱が堂々たるもの。天井から様々な表情で差し込む、幾重にも重なる光条が神秘感を演出している。

大柱列室の奥にはどうやら私を祀っているらしい祭壇、更にその奥に私の居室である祭室と至聖所（寝室）があつて、カールア湖の水を引いた水路で囲まれ聖別されている。祭壇には結界の張られた扉。素民は祭壇の横の鐘を鳴らして私を呼ぶって仕様。

で、その24畳ぐらいの祭室内の円卓で私と天御中主さん、エトワール先輩、信楽焼　　さん、強羅大文字焼　　さんも交えて会議中。この祭室は内側から鍵がかつてるから誰も入ってこない、結果で仕切られたプライベートエリアだから声を潜めず話ができる。焼人二人は今後、二十七管区専門スタッフとして、交代勤務でセキユリテイ監視にあたってくれるようだ。心強いよ。何かあったらすぐ来てくれるってさ。

『赤井さん、聞いていますか？　　煩惱まみれのようにですが』
天御中主さんは頬を膨らませ、少し眉を吊り上げて私の名を呼ぶ。

ヤバいマジ可愛い、女神級の可愛さだ。私が図らずも浮かれてたら

『そんな煩惱は信楽焼　　に焼いてもらいましょうかね？』

天御中主さんが右手を振って合図すると、信楽焼さんが手榴弾らしきプログラムを懐から取り出してスタンバイした。

『あら、焼いてよいのです？　　ふふふ、どこを焼かれました？』
『こんななまつ白いの、こんがりキツネ色に焼いちまえよ姐御』

焼人二人、今日は素顔出てる。頬杖付きながら信楽焼をけしかける強羅大文字焼。さんはソフトモヒカンでお洒落だけど三白眼なヤバげな子、二十歳だつてさ。信楽焼さんは茶髪のゆるふわなウエーブでフェミニンな髪型。こっちもこっちで美人だ。信楽焼さん、実年齢二十三歳だつて。かわいいんですけど……手榴弾持つ目がマジだ！

『赤井君が悪い、頭を赤アフロにしてしまえ』

エトワール先輩も面白がってそんなこと言ってる。ちよつとはこっちの肩持ってくださいよ。あなた私の天使（部下）でしょうに、赤アフロってマクドナルドかよ。えーと何の話だっけ、今サイバーテロの話だつたよ。

『す、すみません！ 真面目にやりますので髪の毛焦がさないてください。赤アフロとか面白すぎます！』

私の脆弱性情報がどこから漏れたか、たまたまクラックされたようだ。開設後のサーバーならいざしらず、未開設で厚労省の地下に安置されているサーバーに接続できるのは厚労省内の人間のみ。クラッキングを仕掛けた者がいないか、その日のうちに職員全員を対象とした精神アルゴリズム解析が行われたらしい。しかし結果は、全員シロ。

ログを分析し侵入したアバターの構成を解析したが、不正プログラムが侵入と同時に素民のA・Iをコピーして創り上げた使い捨てアバターであったため、蜥蜴の尻尾切りのように手がかりは途絶え正体掴めず、もどかしさだけが残った。二十七管区スタッフの懸命の活躍により、情報は死守されたが。目的は果たされていないの

で、もう一度仕掛けてくるだろう、との見解で厚労省内は一致している。

『そういえば、西園を調べていませんでした』

天御中主さんが冷淡な口調で呟いたのを、私は聞き逃さない。退職した西園さんが疑われてる。いくら何でも、解雇された腹いせに古巣に迷惑かけないと思いますよ。そんな人じゃないと信じてます。エトワール先輩、焼人二人も渋い顔をする。それぞれ思うところがあるんだろつ。

『西園さんのこと、疑ってるんですね』

『そのように聞こえたなら失言でした』

私がいよいよと俯くと、天御中主さんはひきつれた笑顔で誤魔化す。西園さん恋しさに私がふさぎ込んでしまったら、仕事に響くと思って慌てるみたいだ。厚労省では赤井をゴリゴリ働かせて治療実績を作らないと、という話になっているんだろつし。

ちやほやされても、かえってやり辛い。私の担当官は、少し冷たいぐらいの西園さんが丁度いいよ。

そこで私は思い切って

『西園さんを、私の担当官として復職させてもらえませんか？』

天御中主さんをお願いしても、彼女は首を横に振る。

私に対する間接的な虐待の事実があったからだ。

アガルタの凶神は本来、神格矯正プログラムと疑似脳との融合によって、監禁状態にあっても不安はおるか恐怖も知らず、悩みもな

く心穏やかで、退屈すら感じない超越的な存在なんだ。精神的苦痛を受けない以上、従来は凶神を人間扱いする必要がなかった。もしログイン状態が正常ならば、精神的苦痛を受けていないので人権を考慮する必要がなかったけど、私の神格は殆ど矯正されておらず、基本的人権が発生していた。西園さんが私の不具合に気付いていなければ罪には問われなかったけど、彼女は気付いていた。”極めて悪質”との判断で懲戒解雇処分に処された。

『西園は不具合を知らながらあなたの人権を蔑ろにし、精神的に追い詰めた。当然の処分です。それに気付かなかった我々にも責任があります。申し訳ありませんでした、赤井さん。精神的苦痛に対する補償は手厚くいたしますので』

虐待か……。それは何か違う気がする。確かに思い返せば酷い労働環境だったよ。私は苦行(?)を積んだからといって、当然悟りを啓いたわけでもない……。でも私がリタイアもせず望んでやってきたことだし、素民たちと共に少しずつ成長できていると信じたい。

西園さんは”神”という存在に対して、彼女なりの理想があったんだろう。彼女は私をずっと”赤の神様”と呼んでいたし、”神様らしき人間”ではなくて、”神様”に近づいて欲しかったんだと思う。理想が高くて暴走しちゃっただけで。別に私を虐待しようとか、そんな意図はないと思うよ。だからもう一度、西園さんと信頼関係を築き上げて、西園さんの本音も聞きだしてやり直したいんだ。

手探りでも、私は西園さんとなら進んでゆける。そんな気がするから。私は伊藤さんとの交渉を試みる。

『……以前のようには、いかないかもしれません』

『これからは西園がいなくても私ども一同で、赤井さんを最大限にサポートします。なので、伸び伸びと仕事をしてください』

一つだけ伊藤さんに言いたい事がある。私がもし通常通りに神格矯正プログラムとの融合を果たし、“いっぱしの”囚神として着々と構築をこなしていくだけの存在だったなら、私は誰の心も癒すことができなかっただろう。メグのことも、大勢の中の一人の素民、でしかなかった。

『待遇改善は嬉しいですが、担当官が西園さんだったからこそ、私はやってこれたんです』

私以外のアガルタの囚神は、同情することも、相手の立場になって物事を考えることも、彼ら素民と同じ視線に立つこともできないんだ。博愛らしきものを一方的に与えるだけ。優しく微笑んで……皆さんを愛していますと言って抱擁する、その言葉に心も魂も込められていない。

たしかに神様を演じるだけの役者としては、それでいいのかもしれないよ。

でも私は……心なき役者にはなりたくない。

私の感じるもの全て、演技も全て、心からのものでありたいんだ。プログラムに支配された偽りの感情で彼らに接するのではなくて。そうなって欲しいと望んでいた、西園さんの代わりは誰もできないと思うんだ。

『……西園へ何か言いたいことがあるなら、私が現実世界に戻った時に西園に君の動画メールを出してやるから。もういい加減気分を切り替える、な？ いい加減、未練がましいぞ。赤井君の精神状態

が不安定になると、更なるセキュリティの脅威を生む』

見かねたエトワール先輩、そんな案を持ちかける。でも私は、西園さんと話し合いたいです。そして復職してほしいんです。どうしても、無理なんですか？

すると天御中主さんが大きな息をついて、

『一度決められた西園の処遇は変わりません。が、私が彼女を厚労省に呼んで、モニタ越しにお話しをするぐらいはできます』

『ほ、本当ですか！？』

やった！ ゴネ得だ !

『ただし、彼女に対する過剰な期待は禁物です』

有頂天になった私を厳しい口調で戒めた天御中主さん。上げて落とすこの手際、厚労省のお家芸なのかな。西園さんが私と話したくないと言えば、無理強いはできない。彼女はもう職員ではなく一般人だから。つてことみたい。

『あ、ありがとうございます！』

『ゴネてよかったな、新神くん』

強羅大文字焼くんがぼんと私の肩に腕を置いた。

『……………ええ、はい』

典型的な部下にナメられてる上司の構図だ。焼人は管区とか関係ないからハイロードに遠慮もないし、気楽なもんだよな。話の進展が見えそうになったところで、天御中主さんが咳払い。

『赤井さん。仕事の話に戻りますが、第二区画を開放します。私が個別に特訓をしようと思っていたのですが、第二区画で経験を積んでもらうことにしました』

私の今の實力からするとまだ開放には早いものの、前倒して区画開放するんだってさ。エトワール先輩の言ってた、例のモフモフ区画のことか。区画が開放されるなら、それに向けて準備しないと。国防とグラランダの再建。これから慌しくなりそうだ。

『第二区画の開放はいつですか？』

一年後？ 二年後？

『今日かもしれませんね』

インフォメーションボードを開いてスケジュール帳をチェックし、私に不穏な笑顔を向ける天御中主さん。

『ええーっ！』

『何ですと?!』

私とエトワール先輩は同時に席を立ち上がった。

『困ります、まだ準備ができていません！ せめて数ヶ月待つてください。今攻め込まれても戦えません』

私は必死の訴え。今日とか！ 無理！ 私もエトワール先輩も少なくなるとも一年後と見積もってた。西園さんのこと非道だと言ってる割りに、西園さんより告知遅いじゃん！ 私とエトワール先輩が途方に暮れて顔を見合わせていると。

『まあ身構えず、お二人とも気楽に仕事をして下さい。今回は国防は必要ありません……よつと!』

そう言つて天御中主さんはぽんつと私の背中あたりを叩いた。あれ、背中がじんじんと疼く。服の上から叩かれたのに、皮膚に違和感。何か湿布貼られたみたいな感じ。背中に手を伸ばして貼られているものに触れようとすると、届かない。

『何ですかこれ、肌に何かくつついて?!』

『それは神格を蝕まないパッチ（脆弱性修正プログラム）で、そのうち肌になじんで違和感は消えます。もう赤井さんが二十七管区から誘拐されることはありませんよ』

なるほど、わからん。

『どれどれ?』

私の背を見にきたエトワール先輩。襟首からちろつと中を覗いて

……

『ぶっ!?!?』

あれ、先輩が腹抱えて爆笑してる。ちよ……私背中に何貼られたんですか!? 背中に張り紙されて苛められてる小学生かよ私。そんな笑えるパッチとかお断りです。相当面白いの貼られたんですか私!?

『あ……いやすまん。だつて……』

まだ笑つてら。そんな腹をよじらせて。聞くの怖いけど何貼られ

てたか教えてくださいよ。

『日本アガルタのシンボルマーク。レッドメタリック色の刺青になつとるよ』

伊藤さん〜〜！！　なんてことを〜！

あーもう刺青なんて入れちゃったら銭湯、プール、海水浴場、刺青の人人浴禁止でお断りされる！　違うか、ポイントはそこじゃないか。

折角なら残念な柄じゃなくてカッコいいのにしてくださいよ！！　もつと他になかったんですか！　それって確か厚労省3代目シンボルマークとアガルタの50の管区のネットワークを組み合わせたような、線の細かい幾何学模様だっけ。大輪の花のように見えなくもないデザインだった筈。刺青で！　任侠の人じゃないんだから！

私がおずおず『あの一……デザインやカラーチェンジはできますか？　せめて透明に……』と伺うと、敢え無く却下。

『不可ですよ。今年度版の大変強力なパッチです、赤井さんもこれで神様らしくなれますよ』

えー……今年度版とかどうでもいいからさ。自己主張強すぎっしょ。私は無意識に、新たに伊藤さんから支給されたコスチュームをしっかりと着こんだ。今度のは着丈びつたりで絹っぽい素材の、巻布式で純白な神様服。ストールもあるから防寒十分で気に入ってる、皮のサンダルもようやく支給された。背中見えないように隠さない。でもそのパッチに新機能搭載とか？　使い方は随時インフォメーションボードに表示されるってさ。これでちつとは強くなれたの

かな私？ そんなことより

『ところで第二区画はどこにあるんです？！ どこから攻め込まれてくるんです！？』

『攻め込まれませんし、そんな身構えなくても大丈夫ですよ。どうしても危なくなったら、呼べば助けに行きますから』

ピンチになったら助けしてくれるって、セコムかよ。私、いつの間にかセコムに加入してたみたいです。

『おや……噂をすれば』

天御中主さんは何かの気配を感じたのか、すました顔で席を立つ。すると絶妙なタイミングで

「あかいかみさま　！！　出てきてください大変です！」

カランコロンカラン。

メグの呼び声とともに、呼び鈴がわりの鐘の音が神殿に響き渡る。天御中主さんと焼人二人はドサクサに紛れ消えてしまった。焼人さんは二十七管区内には常駐するみたいだけど。

『何か嫌な予感がしますね』と私が呟くと

『まったくだな』と先輩。

私とエトワール先輩が祭室の扉を開いて応じると、メグとナズがアイの背に乗って神殿に乗り込んできていた。いや別に動物の乗り入れ禁止とか書いてないからいいんですけど。新築の床に足跡が点々とついてる、後で私がいかに雑巾がけしないと。……って、今それどこじゃない。アイの背には三人乗ってる。メグが大慌てで飛び降りてきた。

「あかいかみさま。このひと、空から落ちてきて、怪我をしてるんです！ とりあえず痛み止めの赤い花を噛んでもらいましたけど」

アイの首に凭れ掛かるように乗ってるのは、コバルトブルーなフード付きのセーターを着た若い女性。首には青の石を連ねたネックレスが二連に大きな宝石のイヤリング。青いセーターって……遂に羊的なモフモフ動物現る！ ってか。メグの言うよう、怪我をしているのか白い皮のブーツが血に染まってる。青い紐のついた編み上げのブーツを脱がせると、脚が開放骨折で痛々しいことになってる。息はあるけど意識はない。

「もしかしてかみさまのお友達のかみさまですか？」

違うよ初対面だ。メグは空から落ちてくりや神様が天使って発想なんだろうけど。

『いいえ。ともかくすぐ手当をしましょう』

私は彼女を、お座りをしたアイの背から慎重に下ろす。怪我人の手足はかじかんでいた。凍傷になっているみたいだ。

先輩に任せず、私も真面目に仕事しないとな。神通力を込めて傷口を撫でると骨は接がれ傷は癒える。さらに癒しの力を送るべく抱擁して暫くすると……彼女の呼吸がゼーゼーと荒くなってきた。あれ、祝福が逆効果？

そんな……エトワール先輩は彼女に解析をかけ、迅速診断。

『ん。いけない、血圧低下、ショック症状が出ています。加えて内

臓破裂に全身打撲、落下事故のようですな。ここはやはり私にお任せ下さい、神様は少し離れていて』

傷を癒したただけじゃダメなのか。私の神眼は骨折は分かるけど、内臓まで見えるわけじゃない。私が彼女を敷布の上に横たえて距離を取ると、先輩はバイオコンストラクトを開き、彼女に治療を施すべくボードを操作している。メグとナズからみれば先輩が意味不明な動作をすること数分間。彼女は赤い薬花の効果が切れ、苦しそうに呻いていたけど、徐々に呼吸が安定し、血液量が回復してきた。さすが先輩、大活躍だ。

つかバイオコンストラクトの習得はマストだなーやっぱ。隙を見つけて私も医師国家試験の勉強しないと。メグは先輩が仁王立ちで指先だけちょこまかと動かしているので不安そうに眉を顰めている。こそこそと私に聞いてきた。

「あれは何の動きです？ あかいかみさま、早く治療をしてください」

『今治療中です。彼は治療のためのおまじないをかけているのですよ』

「適当にごまかす私。」

「この人はたすかります？ エトワールさま」
メグとナズが心配そうに私の両サイドに寄り添ってきて正座してエトワール先輩を見上げる。

『ああ、治りそうだよ。神様、仕上げにもう一度祝福して下さい』

『あ、はい』

私は先輩の指示通り、彼女を抱き起こし祝福すると、彼女の頬に赤みが差してきた。いやー、私何も役に立ってないけど、先輩と一緒にで助かった。

『よく連れてきてくれました、メグさん、ナズさん。しかし、空からとはどういうことですか？』

「この人がまだ意識があったとき、あかいかみさまに会いたがってました。ぜひお話を聞いてあげてください」

メグとナズは私に彼女を預けると、陽が暮れてきたのでグラランダに戻っていった。彼女を至聖所のベッドに運んで寝かせ、傍らに腰掛け容態を見守る。青いセーター、温かそうだからそのまま着てもらった。これ何の動物の毛でできてんだろ？ 見たことないよ青いモフとか。

素性が知れないから今日はもうここに泊まってもらう。危険人物だったとしても、ここ密室だから素民には危害が及ばない。先輩は私に彼女の看病を任せ、モンジャとグラランダの夜の巡回へ。彼女が気付いたのは、真夜中のことでした。ベッドから飛び起きた彼女、私と密室に二人きりなので驚いている。まだ意識があやふやなようだ。

「！？ ここは……」

『ここはカルーア湖ですよ。まずは温かいものをどうぞ』

私は鍋にかけておいたシンプルなおかゆをカップにそそいで彼女に食べさせてあげようとするも、彼女は私の顔も見ず、大慌てできよろきよろして、

「待ってください、その前にお祈りを。今日のお祈りがまだです」

あれかな。イスラム教的な、一日何回かお祈りしないといけない宗教の信徒なのかな。彼女は私に構わず床に膝をつき、背筋を伸ばして両手を合わせ、目を閉じて熱心に祈りを捧げてる。お祈り結構長い。もう五分ぐらい熱心にやってる。

彼女の顔がちょうど目の前にきたのでしばし観察。現実世界でいえば、ロシア系の人種なのかな。すげー色白で、頬はピンク。サイドを編み込みにしてる長い髪の毛は銀色、これまたコバルトブルーのビーズっぽい髪飾りつけてお洒落な感じ。おかゆが冷めないよう、神通力で温めてあげてるからいつまでも待てるけど。お祈りの最後、ぶつぶつとこう言ってた。真剣そのものだ。

「……慈悲深き赤の神様、ネストの民をお救いください」

え？ それって誰？ まさか私のこと？

私はカップを両手で握ったまま椅子に座り、お祈りが終わるのを待っている。お祈りを終えた彼女とばかり視線が合った。

「ひっ！」

彼女、背筋がシャキーンってなって硬直してる。正座したまま私の顔からつま先まで眺めてるから、気付いたんだよねきっと。まあまあ寒いからそこに座って、とベッドを指さす。彼女は無言でベッドの上に正座してはまた私を見る。んー、おかゆ渡しても大丈夫かな、すげー緊張してるから今渡したらひっくり返して火傷しそう。

私は何食わぬ顔で、

『今夜はそこでゆっくり休んでください。私がいると眠れないのから出ていきますよ。その前に、あなたはどなたで、どこから来たの

か聞かせて下さいますか』

「わ、わ、私はネストから飛んできましたっ！」

彼女、想い人に告白でもするかのように顔を真っ赤にして言い切った。

『と、飛んできた？』

交通手段、飛行機ってハイテクすぎね！？

第二区画の構築士さん、文明レベル上げすぎちゃった？

読心術で看破すると、これまた本当だった。彼女、動物の皮でできたパラグライダーもどきの飛行体で空を飛んでここに辿りついている。グライダーは操作性に乏しいので気流が乱れて、腰から墜落しちゃったみたいだけど。つか第二区画ってまずどこにあるの。

「身体の軽い私なら風に乗って遠くにまで飛べるので、使者に選ばれました。まだ命があって嬉しい、先ほどの人たちにお礼を言わなくては」

『お礼は明日一緒に言いましょう。それにしても命の危険を冒すまで、どうして飛んだりしたのですか？』

命あつての物種、命に過ぎたる宝なしだよ。無謀すぎるでしょ、アガルタの鳥人間コンテストにでも出るつもりだったのかな。すると彼女は居住まいを正して、歌うように誦じた。

「ネストにはこんな言い伝えがありました。人と大地と獣たちとの絆が失われ、民が滅びのときを迎えるとき。伝説の赤の神様が現れて獣の怒りを鎮め、ネストの民を救ってくださいと。空が色とりどりの光の幕に覆われ、風向きが真逆に変わったら。赤の神様が降臨したしるしだと。それで……」

空に光の幕って天御中主さんの光跡、七色のオーロラのことじゃね？ ログイン後、飛行機雲みたいに伊藤さんが飛んだ後に尾を引くように暫く漂ってるやつ。確かに絶景ってか神秘的。それ私の降臨の証とかじゃないし天御中主さんの降臨の印だし。またグラランダの時みたいに赤い神の伝説で無茶ブリのパターンか。でも今回は邪神じゃなくてよかったよ。

私が心当たりなさそうにきよとんとしてるので、彼女も不安になつてきたらしく……上目づかいで

「あ、あのお。あなたが伝説の”赤い神様”、です？ よね？」

他に赤い神もないし、神自体二十七管区には私しかいないので多分そうだと思います。

「赤の神様はその背中に赤い徴しるしがあー……」
『はい伝説の赤の神とは私のことです！』

私即答。高校生クイズの高校生よりマツハで即答。背中見せろって言われる前に即答。何だよその伝説、パッチあてられるのまで折込済かよ。早く来年度版のパッチにならないかなー、また同じデザインだったら嫌だな。

くっそ。完璧に伊藤さんの手の上で転がされてるな。またしてもそういう体ていでいくわけですか。彼女は感極こまって泣いちゃってる。そりゃ嬉しいよね、ネストの民が何に困ってるのか知らないけど、その降臨を待ち望んでた伝説の神様がおかゆ持って目の前にいるってなったら。危険なパラグライダーもどきで命かけて飛んできた甲斐があつたってもんだね。

こうして藪から棒的に、木に竹を接いだような不自然な空気の中、
第二区画開放。

まあでも慌てず騒がず、先輩と着実に仕事をしていこう。彼女におかゆを渡して食べてもらってる間に、何か新情報がないかインフォメーションボードを立ち上げると。

さっきまでモンジャとグランダしか表示されていなかった地図上にNew!という赤い新着マークが一つ。やっぱし……。

ワールドマップが広がり、視界は良好。

新エリアは、”断崖集落ネスト”。

遂に出た……ネストがどこかつと、グランダの真裏にある。

グランダ鉦山の裏は断崖絶壁で、その先は不浄の地と呼ばれて人が近づかない。断崖の下には一面に広がる広葉樹林で、海に続いている。

そしてグランダの不浄の断崖のわずか1キロ先。ギアナ高地のテーブルマウンテンに似た、標高二千二百メートルの垂直に切り立った台地が聳え立っていた。ネストはその頂にある集落の名みたいだ。樹海に取り囲まれて孤立したそれはグランダの断崖より標高が高く、頂上付近は分厚い霧や雲に覆われているため、グランダ側からはその存在を確認できなかった。現に私も何度も空から辺りを見渡したことがあったけど、雲が濃くて見えなかったし、乱気流に阻まれて広範囲には偵察できなかったんだよ。第二区画が開放状態になって、風向きが変わったって追い風になったってこの子言ってたな。だからグランダまでパラグライダーで飛んでくることのできたのか。

ついでにマップを拡大してみると、台地は横幅十二キロ、縦幅三キロ。でけえ！

西側にはミニチュアのようなネストの集落が見えた。最初に目を引いたのは大きな岩城と風車群。風車つていつても多翼型だ。形からして風車だと思うけど、タービンとかだったらびっくりだ。何かの動力にしているのかな。城を囲むように、数百軒規模の小さな家々。西側には気持ちほど雑木林があり、それを抜ければなだらかに広がる広大な牧場。主要産業は牧畜とみた。牧場の端には、直径五百メートルほどの自然の竪穴。竪穴の中には更に住居部分があり、吊り橋が折り重なるように掛けられている。城下町と竪穴の中合わせて、千人くらい暮らしてるっばい。行ってみないと分かんないけど。

しっかし見事なまでに陸の孤島だなこりゃ……何でこんなところ住んでんの？

でも好き好んでそんな崖っぷちで暮らしてるんだらうし、そういう文化なんだよね。空気は薄いわ冬は寒いわ、水も不便そうだし、作物もあまり育ちそうにないし、衣食住全てに困りそうな土地柄だよ。その豊かそうな森を開墾して、崖下で暮らせばいいんじゃない？ とは思う。なんならグラндаの隣に来てもいいよ、カルーア湖の周辺は比較的温暖湿潤だし、私の加護もあるし暮らしやすいだらう。そこで私はあまり押しつけがましくならないように、

『もしご不便をしているのなら、こちらに引越してきてはいかがですか。グラндаの隣の地を拓けば、いくらか土地はあります』
「そうしたい気持ちはやまやまです。神様どうかお助け下さい。ネストの民は地上に降りることができません。森には恐ろしい怪獣がいて、人を喰らってしまうのです」

『え？』

怪獣……？ なにそれこわい。もしかして今回、モンスターハンターの区画とか？

私が怪獣に喰われそうになったら、セコム来てくれるかな。

来ないか。だから実戦訓練も兼ねてるって伊藤さん言ってたのか。怪獣と戦いながら訓練しろってことなのか。

えーと、どうすっかなー……。

第4章 第1話 赤井さんと、ナズの勇気

> i 2 3 0 9 6 — 2 4 9 6 <

銀髪碧眼の編み込みの少女はミシカと名乗った。

断崖集落ネストの王様の末の娘、……姫様か。十五歳だったさ。

天空に聳える陸の孤島からやって来た……空から女の子が落下とか。風力利用の断崖絶壁集落とかパラグライダーもどきとか、果てには名前が一部かぶってるとか。色々と設定が惜しい。

そこはメーヴェで来てよ！

とつつこんだのは私だけではあるまい。

ミシカの城ではお約束的に、じいや的な臣下やら病気のお父様やらいて姫様とか呼ばれて民から慕われてるに違いない。もしくは雲の中にある天空の城が別荘だったり……違うか、風の谷から離れようか。某ジャパニメーションスタジオのパクリとか、厚労省サーバだから大問題だ。きわどいネタは自重します、……できませんけど、ええ。

ミシカってば銀髪碧眼で何か（人種的に）ラウル兄妹に似てるなーと思つたら、どうやらルーツは同じみたいだ。

うーんと昔、グランダとネストは姉妹都市関係で交流があり、崖も分断してなくて陸続きだったらしい。ところが突如現れた天空神ギメノなんちゃらがグランダとネストの間の岩橋を破壊し、陸の孤島になった。で、ギメノなんちゃらはネストの守り神として厚く信仰されていた”赤の神”を邪神に仕立て上げたんだと、ミシカはさ

めざめ泣く。

その頃から、もともとは温和だった森の獣たちが急に狂暴化し……
ネストの民は森に降りられなくなり、崖上に取り残され崖っぷち
犬状態に。

つかさあ。ここにいんじゃない、S級デストロイヤーがさあ！

私はパトロールを終え、ミシカと私のいる至聖所に戻って来た先輩をジト目で睨み……。

『先輩のせいじゃないですか……何でネストとグランダを分断しちゃったんです、元に戻してくださいよ』

『おいおい私は他管区にまで手を出したりしてないぞ。事実無根もいいところだ、大体私がグランダに着任した時には既に、断崖だったと思うんだが？』

先輩の言い分を聞けば、一切合財先輩の悪行にされちゃったみたいです。

まあ事実無根だとしても、先輩もお互い様ってか人のこといえないよね。

『そういや先輩も私を都合よく邪神に仕立て上げましたっけね』
『いやだからそれは仕事だから……』

「仕事って何のお仕事ですか？」

そういや、ミシカが私と先輩の会話を傍聴してたよ。きよとんとしてストリートな銀髪をさらりとかきあげる仕草が初々しく、リブ編みのセーターの色と同じ、コバルトブルーの瞳がきらきら輝いて可愛い。好奇心旺盛な子みたいだよ、だから率先してぶっ飛んできたんだよね。

『いえいえ、こちらのこと』

先輩はブリリアント時代、人格疑うほど最低最悪の鬼畜野郎だったけど、第二区画の構築士さんもなかなかどうして、性根がひねくれている。女性だっていうけど、サイバーテロで構築士全員が対応に出てきたとき黒衣の女性はいなかった。てことは第二区画は悪役区画じゃないので、多少は気楽に構えていいのかな？ 気を取り直して、

『ミシカさん、私達はどのように手を貸しましょうか？』

「私達はこれまで通りネストで暮らしてゆくつもりです。しかし、森に降りられなければ食糧も物資も水も枯渇し、滅びてしまいます

……」

ミシカたちネストの民が何に困ってるのかっていうと、台地の降水量が少なくなり灌漑用の湧水量も減少、灌漑は揚水で行っているけど、水不足と人口も増え食糧生産が追い付かない。そこでグラランダの地と昔みたいに自由に行き来したり、森に降りて食糧や森林資源その他を確保したいんだと。しかし下には狂暴化した獣（怪獣）が……どんな獣がいるのか知らないけど、森に降りようものなら確実に命を落とすレベルらしい。

グラランダとネストの間に橋をかけるにも全長一キロメートルの橋って無理くさいし、強い風の通り道になってるから少々の強度の吊り橋じゃすぐ壊れる。だから、狂暴化している森の怪獣たちの心を鎮められれば一番手っ取り早い。

『ということとは……』

私に動物の心を鎮めれという話なのかと思いきや、そうじゃなかった。

ネストには”赤の神”の伝説を伝えた自称”精霊さん”がいるんだけど、ギメノなんちゃら（また先輩の名前悪用されてるよ）に森のどこかに封印されちゃった。精霊さんが動物たちの心を鎮めることができるっていうんだけど……赤の神様が精霊さんの封印を解いてくれるっていう伝説なんだ。

「神様は精霊の封印の解き方をご存じなんですよね？　ね？」

「え！　ええ！？　まあ、はい。勿論！」

勿論……知りませんけどね。クエストが煩瑣きわまりないけど……第二区画の人が一生懸命考えた設定だろうし文句言えない。ここは乗っかるしかないだろう。

「で、精霊はどこに封印されているのか分かりますか？」

「え？　それは神様がご存じだと、伝説では……」

「え？　私が？」

無茶ぶりもいいところ。するとミシカが半泣きに
「どうして赤の神様なのに知らないんですかあ……」

あーもう、悲観してウル目になってしよげてるからよしよしと頭を撫でて慰めてあげる。ごめんね私何も知らないんだ。見るからに何も知らなそうな顔してるっしょ？

「で、でも大丈夫ですよ、森を隈なく捜してみることになります。きつと見つかりますよ」

ネストの民、今度から人に物を頼む時は場所ぐらいちゃんと聞いてよね！

女の精霊さんだっていうから、第二区画の構築士さんとみてまず

間違いなさそう。

しっかし、天空神の次に精霊ときたか。

一気に女性構築士の区画らしいメルヘンな設定になったなー。エトワール先輩の殺伐とした感じとは真反対、区画ごとに構築士のカラーが出るんだね。どんな風に封印されてんのか知らないけど、プリティィでキュアキュアな登場の仕方の一つ、キラキラな登場エフェクトのひとつでも考えてる頃だよ。

なんなら蒼き衣を纏いて金色の野に降り立ったりするつもりかもジブリっぽい伝説作ったり演出考えたりして、目いっぱい仕事を楽しんでそうだ。まさにクリエイターって感じだよ。

ともあれクエスト発生とくりゃ、やっつけるっきゃない。

「私たちはまず、森で精霊さんを探せばよいのですか？」

「いえ、まずネストにいらしてください。父が神様とお話しをしたいと申しております、そして民にも祝福をお願いいたします。民はあなたの降臨と祝福を心待ちにしています」

心待ちにしてるから毎日熱心に私にお祈りしてくれてるんだもんね。はいはい、まずはネストに参りましょうか。私と先輩だけで行っていいのかな、その方が話も早いし。と、一応伊藤さんに打診したら、駄目ですと。素民も何名か第二区画に連れて行ってください、ですって。

ですよー、構築士だけで区画解放しても意味ないですもんねー。第一区画では私がしゃしゃり出ていっちゃったけど、住民参加型が基本だよ。んで、ヤドカリ神殿にロイメグ、ナズ、キララ、ラウルさんにヒノ、ハクさんヤスさんら主だった素民（私と比較的絆の強い人ら）たちを集め、ミシカも同席してもらって何人かに話してみたところ……。

「新たな集落が見つかったのですね？ 行きます、私も行きます！ ミシカさんが困っているなら助けてあげたいです！」

「ぼ、僕も一緒に行きたいです！」

メグもナズも行く気満々。うんうん、来てくれると思ってたよ。彼らボランティア精神旺盛だしね。

「俺はここに残ります、モンジャの集落が心配です」

保守的なロイはまたしても留守番を希望……仕方ないか。と諦めかけてたらエトワール先輩がロイを強引に誘った。

「いえ、ロイさんには必ず来てもらいます。集落とグラランダのほうは彼ら、心強い守護者が定期巡回してくれますので」

私達の背後には焼人二人が控えている。現代風なコスチュームを隠すのに、白いケープをかぶっているけどね。

「心配はいらんぞ」と、強羅大文字焼さんが胸を叩けば、

「私達にお任せ下さいな。曲者は骨の髄まで焼き尽くして差し上げます」上品だけど物騒な信楽焼さん。

ロイはちらりと彼らに疑いの眼差しを向けた。強羅大文字焼さんはロイに「あ？ 何か文句あるか」とでも言いたそうにメンチきつてる。この人つてば短気だから仕方ないな。ソフトモヒカンだし、短気なイメージ。ロイはふらりと視線を泳がせたあと私に向き直り、

「赤井様、俺は今日初めて彼らに会いましたが、彼らはあなたの信頼に足る人物ですか？」

強く念押しするように訊ねる。私はたじろぎながらも居住まいを

正し

「信頼できる方々ですよ。腕もたしかです」

って言ったのに、ロイツたら両手をついて席を立つ。そして強羅大文字焼さんを見据えながらつかつかと歩みより、いきなり仕掛けやがった！ 初動を殆ど見せない状態で神槍の柄を繰り出す。まさに神速のスピードで強羅大文字焼さんの足を右膝下から左腰上へと薙ぎ払い転倒させようとす。

ほんの小手調べだ。しかし彼はその軌道を瞬時に見切り、柄が脛を打つ前に悠々と跳び上がり素早く宙返りをうつ。トン、と片足で壁面を蹴って背を向け軽やかに着地するや、ロイは槍を腰の裏に回し、左手、右、左と機敏に持ちかえて重心を素早く移動して踏み込み、彼の背部を突きで狙う。

これにに応じて強羅大文字焼さんはひらりと身を返し、柄を左手で掴み、背後にステップバックして背越しにロイの拳を右手で抑え込み動きを止めた。その身のこなしは慣れたもので、迷いなく飄々としている。火炎放射器で炎をまき散らすだけじゃなく、彼、体術もできるみたいだ。

『なんのつもりだ？』

ロイの拳を逆手で握り、ドスを利かせた声でギリギリと力を込める。動作の起点を潰されてはどうしようもない。

私はおろおろと見守るばかり。信楽焼さんは腰に手を宛がい、目を眇めて高みの見物だ。焼人の身体は熱を持っている、ロイの手が焦げてしまわないか……。

『このまま拳を焼き潰されたいか？ 人間風情に噛みつかれるとは思ってもみなかったがな』

そのつもりなら、望み通りにしようかね。

きゅつと口角をつり上げる強羅大文字焼さん。危険極まりない。

やべー、汚物は消毒だ〜！ って火炎放射されるよロイ、ここはお願いだから退いて！ マジ強いんだからその人ら！ バグ処理専門の厚労省の武闘派ってか精鋭なんだから！

『ロイさん、大文字さん、そこまでです。やめてください!』

私が制止すべく慌てて席を立つと、助太刀無用とロイが片手で私を制した。

そして次の瞬間、ロイは手首を槍ごと内側に返して大文字焼さんの手を振り払うと同時に神炎を奪い、自らの拳に纏わせた。ぎゃー!! この子、遂にヒトサマのアトモスフィアを奪い取りやがった!! 反則紛いつてか、もはや人間じゃねーぞ!!

「人間風情とは聞き捨てなりません」

その紅色の炎を神槍に纏わせれば、ゴウツと一直線に炎の塵気楼が立ち上る。ロイの口調は穏やかだ。物腰柔らかな賢者のようでありながらも、触れがたいほどの獰猛さを兼ね備えている。

『へえ、やりたいのかい。焼人に炎で挑むとはね』

半ばふざけ半分だった大文字焼さんも、アトモスフィアを奪われて目の色が変わった。

お遊びとはいえA・I・に虚仮にされては、焼人のキャリアにケチがつくというもの。

「転換」

ロイは「じ」によ「じ」によと囁き……ピシッと乾いた音とともに槍から大量の放電が。って! どうして電気が出た? おかしいでしょ!

『ロイさん……どうやって』

『いや、神様。それは極めて合理的だ』

まさかロイ、焼人の炎を利用して神槍を導体とし、端と端の熱温度差によるゼーベック効果で(電熱発電)熱から電気を取り出し、

更にその微弱な電流を体内で増幅させて神槍内に再還流させてる、とか？ うつわー…… ドン引きな私とエトワール先輩。だってそんなの教えてない！

『感心したと言いたいところだが、双方とも大人げないぞ。いい加減にしなさい』

見かねたエトワール先輩がポコン、とロイの後頭部を叩いた。結構きつくはたかれて我に返ったのか、冷や水を浴びせられたロイはふつと表情を緩めると行儀よく席に着いた。ロイと強羅大文字焼くんの衝突の原因でもあるミシカは、申し訳なさそうに俯いていた。

「失礼しました。では集落をよろしくお願いします」

彼は引き際をわきまえてる。集落を守ってもらう立場で、気分を害しすぎてはいけない。実力を試された形の強羅大文字焼さんは納得のいかない顔をしていたけど。

「アカイは平和主義者なのに、モンジャの長は好戦的なんだな……アカイがそう仕向けたのか？」

キララが頬杖をついてニヤニヤと分析している。いや、私ロイをそんな肉食系な子に育てた覚えはないよ。私が頼りないから自立心が強くなっちゃったのかもしれないけど。最近ますますパワーアップしてってるな……。

いつか私、ロイに寝首かかれたりしない？ 敵に回したくない子ぶっちぎりNo.1だ。

エトワール先輩は頬杖ついてどこか他人事なキララにも矛先を向け『あなたにも来てもらいますよ、キララさん』

「……何故私が？ グランダの復興もまだ終わっていないのだ、民を置いてはいけん。代わりにいくらか兵を出せばよからう」

キララは不服を顔中に滲ませた顔をしている。そりゃそうだよね、

先輩の話によるとキララってグランダの地から一步も外に出たことないんだって。彼女は民が苦難にあるときも平和なときも、民と共にあるうとする為政者なんだ。見上げたもんだよ。しかしエトワール先輩は勘弁してくれない。

『いいえあなたでなくてはいけません。いち国家、いち集落の指導者たるもの、見聞を広め様々な経験を積んでおきなさい。困いの中の王ではいけない。それは今後の治世においても大きな実を結ぶでしょう』

「……仕方あるまい」

キララは渋々納得。そっか……メグやナズたち人間の患者さんがアガルタを去つても、この仮想世界に残るのは彼らで、世代を継いでアガルタの歴史を造り上げてゆくのも彼らだ。A・I・であるキララやロイにも経験を積んでもらわないといけないから、そうですね先輩？

ネストと人種的に繋がりがありそうなヒノとラウルさんはどうしますかと私が彼らに水を向けると、ヒノの優柔不断っぷりは相変わらずで。

『行くつていうか、行かないつていうか、行かないつていうか行くつていうか』

はいはい行くんでしょ、つてことでヒノとラウルさんも同行が決まった。ものづくりの得意な手先の器用な人が来てくれると、色々とありがたい。てなわけで、ネスト行きは私、エトワール先輩、ロイ、メグ、ナズ、キララ、ヒノ、ラウル、ミシカの九人に決まった。割と少数精鋭な編成だ。ナズがついてこれるか、体力的に心配だけど。

つても皆さん、標高二千メートル以上の断崖絶壁にどうやって行

く？

森をぞろぞろ移動するのも死亡フラグだし、……先輩の鳥形態に乗ってズルするのも伊藤さんの駄目みたい。

私達が頭を悩ませること二週間（長っ！）、思わぬ転機が訪れた。飛ぶ気満々な人らがいました！ それも自力で！

ミシカの齎したパラグライダーもどきに端を発し、グランダでは航空史の夜明けをみている！ どうしてこうなった……

てか前回、気付いた人は気付いたかもしれないけど、ミシカは追い風でグランダに落ちてきたって言ったよね私。でもそれだとパラグライダーじゃねーから。パラグライダーって追い風だと進まねーじゃん（先輩につっこまれて気付いたけど）。

てなわけでミシカが乗ってきたのは、普通に高高度にあるネスト集落から吹き飛ばされ、風にきりもみされながら落ちてきた落下傘状態だったんだ。……そりゃ骨折するし、コントロールできないのによく無事だったよ。つまり、現在ネスト側からグランダに吹く風は向かい風（アゲインスト：4 m / s）なんだ。

その落下傘からブレイクスルーしたのが、なんとナズでした。

……ナズはミシカの破れた落下傘（？）を繕い補修して、フリーくんと交代で「飛ばされごっこ」をしているうちに、私やエトワール先輩のように空を飛びたいと考えようになった。鳥もいないこの世界なのに、高い空に憧れるのは人の性なんだろうね。

エトワール先輩の立派な翼をいじくりまわして研究し、ナズはその形に似せようとしているうち、あのパラグライダー的な流線型を

思いついてしまったんだ……ロイならば流体力学的な発想があったのかもしれないけど。ナズは殆ど直感だった。

彼は現実世界の人間だから、飛行機の記憶とか臆げにあるのかな。彼は高次脳機能障害の患者さんだから完全な記憶ではなくいい塩梅にオリジナルな感じになって、現実世界のコピーじゃないからセーフ。現実世界で色々カンニングしてるって相当強みじゃん、ってか発想力チートだよな。伊藤さんがちらつと漏らしたところによると彼は現実世界では事故に遭う前、かなり優秀なアメリカの工科大学の大学院生だったとのこと。

アメリカの……工科大？ MIT（マサチューセッツ工科大）とか？ まさかね、はは。

将来、アガルタの発明王として頭角を現すかもしれない。

私も気合い入れてナズの教育に励まないと。同時に、ナズは二十四歳でこの世を去るの確定だから、後継者としてフリーくんにもしっかりと引き継ぎしとかなないと。さすがに工学は専門外なので、電子書籍で勉強しながら教える感じの自転車操業になるだろうけど。

ロイは理学、メグは農学ときたから、ナズとフリーくんには二人一組で、工学を重点的に教えてみよう。

お互い仲いいし、ライト兄弟みたいになつてくれればいいよね。

ナズはどこか確信を持って、動物のなめし皮を筒状にしそれを並行に縫い合わせ、小さな模型を作った。こしらえた筒をフリーくんとラインで結んで一本に束ね、凧揚げのように風になびかせる。彼はその手に、確かに感じたんだ……そう。空へ導くように垂直に働く力。人を大地から解放つ揚力を。風に流されるままに飛ばされているのではなく、今にも浮かび上がろうとするそれを、驚きと共に発見していた。

彼は直観的に悟ったのかもしれない。

飛べそうだが、でも翼が小さすぎる。人を重力から解き放つには、もっと大きな翼を……。

ナズは手応えを得て、俄然やる気になり設計図を書き上げた。

彼、作図の才能があるみたいだ……観察力が鋭くて、何故か遠近法ができる。そんな、私だってできないのに凄いよ。

そして彼はかなり立体的な設計図を基に、裁縫の得意なサチの力を借り、ミシカの意見を聞き、数学のできるメグに複雑な計算をお願いして、キララから金属の部品をおすそ分けしてもらい、ラウルさんに旋盤をやってもらい、カラビナ（鉄製の輪）もどきにし、ラインを束ね金属板に繋いだ。ハーネスがないので湾曲させた金属の板を渡し、そこに腰掛ける感じ。

皆の協力のおかげで、ナズがスケールアップした試作機を組み上げるのにさして時間はかからなかった。試作機は「これで飛ぶの？

しぬの？」ってなレベルで歪な形をしてたけれど、確かにパラグライダーのはしりみたいな形だ。私とエトワール先輩はナズをたくさん褒めてあげた。まさかこんな展開になるなんて、ミシカも驚いていたけれどね。だってネストでは、衝撃を緩衝するためのグライダーであって、上昇するためのグライダーじゃなかったわけだから。

エトワール先輩に『大丈夫ですかねこれ』と確認すれば、先輩がこっそり計算して、ナズの設計図の間違ってる部分を直してくれてたみたいだ。航空力学的には間違ってるので、操作性に乏しいものの、飛ぶだろう、てか少なくとも浮くだろうとのこと。

それは、よく晴れた真冬の日。

私達は完成したグライダーを運び、グランダの草原のはずれのなだらかな丘の上に陣取ってスタンバイ完了。成功すれば、アガルタの文明史に残る日になりそうだ。

「では、いよいよやってみようと思います。辺りの土は柔らかいので、失敗しても大丈夫です」

ナズは怪我防止と防寒のために厚着をし、きれいに広げたグライダーのラインを握りしめ背筋を伸ばし覚悟を決めたけど、心なしが顔が青ざめてる。グライダーの翼が風を孕みやすいようにグランダの住民たちが翼を持ってくれた。

「あにさま、本当にやるの？ うまくいくかな……」

命の危険を伴う未知の挑戦にメグの心配もクライマックス。私がしゃしゃり出ても、そーいや私体重が軽すぎ（神通力がある状態だと1kg きってる）ので意味ないし。

「ナズくん、ナズくんとおいらは体格が同じくらいだ。だからやっぱりおいらがやるよ」

フリーくんがナズの身代わりになると言えば

「ネストのことなので、やはり私がやります！ 落ちるのには慣れましたから、もう一度ぐらい落ちてもなんともないです！」

何ともつつこみどころ満載なことを仰るミシカ。すると、私の隣で腕組みをして様子を見ていた先輩が、

『危なくなったら私が助けるので心配はいらない。しかしナズくん、飛べたとして君は降りることも考えているのか？』

「えっ？」

「えっ?!」

『エエーッ!?!?!』

私が最後にマスオさんのモノマネをしたのを先輩は鮮やかにスル
ー、
『滑空する速度を緩めなければ、どこまでも飛んで行ってしまっ
たが』

ナズは暫く眉根を寄せていたけれど、これまた閃いちゃった。

「あ、では降りたいときには紐を引きこんで翼の端を少しだけおり
こみます。そしたら風を受ける面積がちいさくなって速度がゆっく
りになり、高度が下がりませんか？」

『成程それは正しい、ただ、飛びながら翼を折るには熟練の技術が
必要だぞ。8の字を描いて高度を処理するといい』

それはパラグライダーでは高度を緊急に下げするための翼端潰しと
いうテクニクらしいんだ。ナズはミニチュアの試作機を操作して
いたときに、翼がつぶれると揚力を失うことに気付いていた。

よく思いついたもんだと、エトワール先輩はナズを賞賛する。私
は最後になって、ナズに逃げ道を用意してあげた。

『ナズさん、空を飛ぶことは誰だって怖い。思いとどまることもま
た勇気です』

ただでさえ身体の弱いナズにそもそも試験飛行は危険だ。持病の
発作がでるかもしれないし。先輩が助けてくれるっても、絶対に怪
我をしないと保障できない。私達一同が心配していると。彼はどう
しても、たとえ怪我をしても飛びたいんだと言って聞かない。

「大丈夫です、きっと大丈夫だと思います」

「あにさま……気を付けて」

メグはもう止めなかった。ナズも何かしら、自分の生きている証
みたいなのを残したいんだ。誰かの役に立ちたい。そんな思いはメ
グも存分に理解できているから。

『恐れずやってみるといい、うまくいくさ。何かあったら必ず助け
るつもりだ』

先輩の言葉に背中を押されるように、彼はグライダーと連結している最前列のライン束を引いた。丘を蹴り全速力で駆けようとすると、向かい風が筒状のグライダーの中に取り込まれて空中にセットアップされた。

『腰を落とせ！』

くん、と彼の身体が上に吊られ脚が浮く。エトワール先輩の計算通りだ。

『いいぞ！ 浮いた！』

そう、それは僅かに三メートルほどの小高い丘からだけど、彼は確かに飛んでいた！

しかし身体が前に出すぎて後ろに機体が傾き、勢い余って振り子のように前に傾こうとする。インテイク（風の取り込み口）が塞がれるとグライダーが潰れて墜落する！ すると先輩が地を蹴って飛翔しナズのグライダーに背後から近づき、後ろのラインを指先でくいつくいつと引いた。

最後列のラインが引かれたことにより翼抵抗が大きくなりブレーキがかかり、インテイクが再びその首をもたげ、風を取り込み始めて揚力が加わる。私が神通力で最高の向かい風を吹かせてあげていたから、ナズの身体は見る間に高く高く昇っていった。私達は拍手と歓声を上げ、地上から手を振る。

『いい風です、そのまま上がってゆけそうです』

「あにさまーすごいー！ 気をつけてー！」

ナズは手を振って応じるどころじゃないけれど、エトワール先輩が傍についてくれているので落ち着いている。

『おめでとう成功だ。折角なのでそのまま上昇してみよう。リラックスしてゆつくりと右のラインを引き、左の脚を右に組み、重心を右に移せ』

先輩はナズの傍らをトンビのように滑空しながら指示を飛ばし、彼に空の飛び方を教えてあげている。先輩、休日はリアルでも日本人妻とスカイダイビングを嗜むみたいだ。どんだけリア充なんだよこの人、でもその知識が役立つてる。先輩さまさまだ。

すると、ナズの右翼が僅かに持ちあがった。

『む、そこに上昇気流サーマルがあるな』

「上昇気流？」

『うまく気流に乗れば、もっと高く飛べるぞ。上昇気流に沿わせて機体を廻すんだ。落ち着いて。神様聞こえますか、南東の風 5 m

ノースを送ってください』

『はい、南東の風ですね。おあいご用です。サーマルは直径10メートル、高さは80メートルです』

私は風を操りつつ、晴れ晴れとした気持ちで地上からナズを見守る。翼を広げ、まるで大きな鳥になったようだね。ナズの機影が私達の上に落ちた。彼はどんな気分だろう？

ナズは先輩の指示通り右のラインを引くと、機体はゆっくり右に旋回する。

私はインフォメーションボードで風の流れ、気流の発生を立体的に把握していた。

ナズはグライダーを右に傾斜バンクかけながら、草原の草がない部分が日光で暖められ発生した熱でできた円筒状の上昇気流に、片翼を突っ込むようにして機体を旋回させている。あれだ、トンビが環を描くように。上昇気流を利用して高度を上げているんだ。そっか、グランダの方が標高が低くても、こっやってグランダ側で高度を上げてからアゲインストの風に乗って飛んでいけば、それほど標高差はないネストにアタックできるのかな。

ナズはメグたちが固唾をのんで見守る中、二十分ほど空中遊泳を楽しんだ後、両翼端をちよろつと折り高度を下げ、先輩の指示のもと最後は八の字を描くように滑空して、ふわりと草原に降り立った。こらえていた嬉しさを爆発させ、きゃーきゃー叫びながら駆け寄る私と皆！

ナズ印のグライダー、増産決定だ。彼は上手に着地ランディングできず軽く尻もちをついていたけど、晴れがましい表情を浮かべている。

「ナズさん、空から見た地上の景色はいかがでしたか？」

「空は広くて大地も遠くまで見ええました。果てが見えなかったです。世界は広いんだなと思いました」

栗毛色の髪の毛を風になびかせて、はにかむように笑ってみせる。少しだけ自信が持てたような、ナズの笑顔は透き通っていて眩しい。二十四歳の彼は、現実世界ではどんな人なんだろう？

「とっても気持ちよかったです。僕、やっと生きている実感がしました！」

生きている実感か……しかしその感覚はリアルではない。君の居場所はここではないんだ。だから現実世界に帰ろう、ナズ。君の目で、耳で、五感で、自然に浸り空の色や風の匂いを、その肌感じてほしいんだ。仮想のそれではない、現実のものを体感してほしい。

ロイが強く望みながら決して見ることのできない空の果てを、君は見る事ができるんだよ。

私はアガルタ時間にして僅かばかりの時を見守り、そして君を笑顔で送り出す。

君は知らないけど、帰りを待っている人がいるんだ。

そして数日後

私とエトワール先輩を引率に、七機のグライダーが丘から飛び立ち空へと舞いあがった。

南風に乗る、未知の大地、断崖集落ネストを目指して。

第4章 第2話 赤井さんのネスト視察とねんがんの何か

グランダの地を出発し、上昇気流に乗ってわずか数十分。

一人の怪我人や迷子を出すことなく、無事ネストに到着しました。標高2200mの台地は空気が薄く、寒さが肌に突き刺さる。気温は氷点下二度ときた。

「姫様だー！」

「姫様が異国の民を連れてこられた！」

ミシカの帰りを待ち詫びていたネスト民に歓迎され、グライダーを折り目正しく畳んで（帰りに使うし）、ミシカに案内され早速王様の城へ。

予想通りネストの城は岩城だった。東京デイズニーランドのシンデレラ城程の大きさ、小ぢんまりしてる。内装には調度品など殆どなく、家臣も少人数でお出迎え。割と質素に暮らしてるみたいだな。王様っていうより領主の城って感じの佇まい。グランダの城の方が断然大きいけど、彼女は城の至るところから顔を出している風車に關心していた。

長い長い螺旋階段を皆で一列に並んでえっちら登り、煉瓦づくりの最上階の王様の居室に案内される。伽藍とした、だだっ広い石造りの部屋だ。グランダと似た構造で、姉妹都市であったというかつての面影を覗かせている。

入口のあたりには魔術師みたいな黒いフードを目深にかぶった猫背で目の不自由っぽいおばあさんが鍋をかき回していた。部屋にいたのは四人。白いセーターを着た王様らしき人は病床にいる。顎髭を生やし、銀髪を短髪にして無造作に横わけて流してる。端正な顔立ちをしているんだけど顔面蒼白で体調悪そう。

病床の父の枕元に寄り添うように、筋骨隆々として鎧のような金属片を着た大柄な男性。物腰の柔らかさそうな妙齡の女性は水色のニツトを着てる。皆さん王冠こそないけど身ぎれいに行っているの、王子様とお姫様かな？ 銀髪碧眼の一族みたいだよ。ミシカを見た四人はぱつと表情を輝かせた。

「父君様、兄上様、姉上様、大ババ様、ただいま帰りました」

「おお、よく帰ってきてくれたミシカよ。無事だったのか」

「ミシカが戻って来ました……。私達のお祈りが天に通じたのですね」

ミシカとよく似た顔立ちの姉上様、ハンカチを目頭にあてて涙ぐんでる。

いやそれより、大ババ様で何？ 今、大ババ様って言わなかった？

「泣かないで姉上様、赤い神様の御加護によりこうして戻ってくる事ができました」

「戻ってくると分かっていたよ。風が鳴いておったのでう」

大ババ様そんなこと言ってる……駄目だツツこんだら負けだ。

よく見れば部屋の壁に何がしかの伝説っぽい壁画があるし。何だよこれ、”絶対にツツこんではいけない”シリーズかよ。ガキ使的ボケは大晦日だけにしといてくれよ。ツツこんだら「赤井、アウトゥ！」とか言われて棍棒持った覆面集団が私を背後から殴りにくるとか？

「お、おお、そちらの御方はまさか……！」

ベッドで寝ていたネストの王様が咳き込みながら起き上がろうと

したので、私は傍近くに歩み寄り、腰を落として彼を気遣う。名乗らなくても私が誰か分かっているみたいだ。

『初めましてネストの王よ。そのまま結構です、ご無理をなさらないで』

既視感満載な眺めに片っ端からツッコミ入りたい衝動を殺し、まずは王様に挨拶。

いつものほわっとした営業スマイルでね。

「ミシカの父のパウルと申します。赤い神様、長い間あなた様のご来臨をお待ち致しております」

パ、パ、パウルって！ 出オチだ
！
ハウルじゃないの？

国民の皆様方の悪い方面での予感通り、ミシカのお父さん、存在自体が微妙に出オチでした。

よく見りや中年だけど甘いマスクで、声がキムタ……おっと誰か来そうだ、声が一世を風靡した某アイドルに似てる。なんちゃらの動く城の主人公を彷彿とさせるってのは禁句か。ボケの生殺しだよこれどうすんの。第二区画の人ボケ逃げて酷いっすよ。

私は興奮して若干身をのり出し、

『つかぬことをお伺いしますが、パウルさんのお城は可動式ですか』『い、いえ。ご覧の通り岩城ですので微動だに動かさせませんが……』

うん、常識的にそうだと思うんだ。

可動式にする意味もわからんしね。

『ですよね……普通お城は動きませんよね』

パウルの動かないお城ですよ。私がこの世の終わりのような顔をして肩を落としていると、あまりのへこみっぷりにパウル王は脂汗をかいて

「な、なにか我が城が神様のご期待に副えなかったようで申し訳ありません。平にご容赦をッ！！！」

国民の皆様総がっかり。

パウルの動く城じゃないってさ。でもジヴリ的な要素満載で……もういちいち反応せず真面目にやるうか。ノーツツコミでいくよ。本人たちが現実世界のネタキャラだったって知ったら悲観してその窓から身投げしかねない。

『こちらこそ失礼しました。ところでパウルさん、重いご病気なのですか』

身体が不自由で起き上がれないんだよね。

パウルさんは恥ずかしそうに脚を布団の上からさすりながら、
「いえ……病気ではないのです。両脚が腐って、立てなくなりまして。それだけなのです」

『失礼します。診せていただけますか』

脚が腐るって？ 壊死ってことか。

糖尿病をこじらせたとか？ 大ババ様の鍋が異臭を放っていたから気付かなかったけど、言われてみればパウルさん、少し臭う気がする。

人目を憚るように、姉上様がついたでベッドの周囲を仕切った。

診察。

メグはこちらに来たそうにしていたけれども、とりあえず一人で

「かようなものをお見せするのは心苦しいのですが」

『これは……！』

掛け布団を取り去ったパウルさん、現れた彼の”脚らしきもの”の悲惨な状態に、視線を外しそうになった。パウルさんは諦念を含んだ口調で、ぽつねんと述べる。

「单身、精霊を捜しに行こうとして、森の獣に足先を噛みつかれました。その毒が広がりこの有様。決心がついたら、脚の付け根から切断するつもりでいます。その頃には、息子に王位を譲ろうと考えています」

「父君……俺は無念でなりません」

マッチョ兄が悔し泣きしている、ハリウッド系アクション俳優みたいだな。体脂肪率相当低そうだ。

うーん、毒による壊死だったのか。パウルさんの両脚は膝下から真っ黒で、破傷風菌と思われる細菌感染を起こしている。壊死の状態から細菌感染すると壊疽えそに進行すると、敗血症を起こして生命の危険が伴う。現実世界では一刻も早く脚を切断し、義足を作る、もしくは再生医療を行うしかない。

ごめんよ私達がもっと早く来てあげなくて。

ミシカは悔しそうな表情を滲ませている。

でもここは仮想世界アガルタ……現実世界ではない。

私はおもむろに両手を伸べ、パウルさんの脚に触れた。

「な、何をなさっているんです」

『切断していなくてよかったです』

「え？」

切断していたら、私も先輩も手が出せないところだった。

私はこんなでもアガルタの神、二十七管区の最上級アカウントだ。

サイバーテロの一件で、バイオコンストラクトを使えないながら、かなりの裁量を与えられていたと知った。私がすっかりしなないとな、インフォメーションボードには「祝福にて治癒可」と表示が出てる。やってみよう。

” 赤井君、一人でできそうかね？ 駄目なら私が血行再建術を施してみるが”

先輩がついたて越しに思念で話しかけてくれる。

” 治癒可能と出ています、一人でやってみます”

” では君が癒してあげた方がいい。その方が彼らも喜ぶだろう”

「神様、御手が穢れます。どうか触れられませんな」

身をよじろうとするパウルさんを宥め、膝下から炭塊のようになってしまった黒い脚をいたわり両手を添え意識を集中する。じくじくしてるけど、壊死は骨に達していない。

神通力で不浄を浄め、病を払うイメージ。集中すると神通力の光が集まり、私の手の形に沿って組織が再生してゆく。黒く朽ちた部

分が剥がれ落ち、瑞々しい素肌が顔をのぞかせた。パウルさんは硬直し絶句している。

「！ えええっ！」

『よかった。立てますか？ しっかり歩いて、血流をよくしてくださいね』

パウルさんに肩を貸すと、よろよろとよろけながらも、ベッドの横に自立できた。うん、少しリハビリをすれば歩けそう。特にここ、寒いからしっかり歩いて血の巡りをよくしてね。にしても……

『驚きました。森の獣の毒とは、かくも凄惨なものですか』

「私は神様の御力に驚きました……どう感謝してもしきれません」

『毎日私にお祈りをしてくださっていたようですので、そのお礼も兼ねてですよ』

そうそう、信じる者は報われるってか特典ありますよ。

ポイントとかはつきませんけどね。というわけでパウルさん、兄上様と姉上様を軽く抱擁して祝福してあげる。三人とも、緊張してカチンコチンになってる。ミシカは私に向かって手をすり合わせ、熱心にお祈りしてくれた。なんかくすぐりたい。

ついたてを取り払うと、先輩が手持無沙汰に大ババ様の目も癒してあげてた。白内障だったのか。

「あかいかみさま、治りましたか？ お薬が必要なら、今日は紫のトゲトゲの花を持ってきています」

とパウルさんを気遣うメグ。グラランダの薬師さんと一緒に改良した新製品の薬花を持ってきたんだね。紫トゲトゲの花って何の効果？ パウルさんは喜びを隠せず両脚で飛んだり跳ねたり、年甲斐も

なくはしゃいでいる。

「信心が足りない」と叱られると思っていました。なお一層のこと赤い神様を信心いたします」

「いえ、これからはお祈りでなくていいので、何となく頼りにしていただける程度が嬉しいです。それより、森の話聞かせてください」

大ババ様に謎動物のミルクと思われる甘いホットミルクを振る舞われ、火鉢っぽい暖房器具を囲む私達。

話を聞けば、森の獣の毒は少量でも致命的とのこと。パウルさんは少し牙が触れた程度で運が良かった。毒を持つ獣たちを駆除しようと、森を焼き払うべくネストから何度も森に火を放とうとするも悉く失敗に終わり、今年の干ばつによる大不作で民の生活は困窮を極め、日に日に疲弊しているらしい。

「私が手を打つことができないばかりに……民には辛い思いをさせております」

パウルさんは表情を曇らせる。パウルさんは家臣たちが諫めるのも聞かず、何度か精霊を捜しに森に降りた。しかし数時間もしないうち、獣たちの毒牙に倒れる。

『精霊を捜し、森と共存できる方法を探りましょう。毒が人に致命的であるため、私とエトワールさんで捜してまいります』

「あいかみさま、私もついて行きます。私、よく効くお薬を持っていますから平気です」

危ないってば、メグなんて論外だよ。

『メグさん、いけません。毒によっては即死の危険があります』

「ネストの者が神様に随伴いたします。精霊を搜索する際には男手が必要です」

「俺も行きます」

ロイが目をららんと輝かせて頼もしいけど、誰も来なくていいよ。そう伝えると

「おそれながら神様がた、精霊の封印に至る導きは場所が日ごと変わるとの伝承があります。お二人だけでは到底辿りつきますまい」

『そ、そうですか……』

うーん、困ったな。封印の場所が日替わりってことなら、確かに人海戦術でローラー作戦するっきゃないよ。皆に手伝って欲しい気持ちはあれど危ないし。どうしたもんか。

『して、獣とやらの脅威は毒のみですか？』

エトワール先輩からパウルさんに質問。

「はい……獰猛で人を襲う獣ですが、武器を持って戦えば、太刀打ちできないものではありません。しかし多種多様な毒を持ち、解毒薬を作ろうにも間に合わないのです」

『どのような毒か、教えていただけませんか？ 分かるかぎりで構いませんので』

対策ぐらい講じてかないと私らもヤバい。

そう思ってたら……大ババ様、部屋の壁面の埋め込み式の氷室をすつと示した。氷で金属製の箱みたいなのが冷やしてある。大ババ様の食材用冷蔵庫かと思いきや、違うみたいだ。

「あれが何十年もかけて死んだ森の獣たちから集めた、全ての毒ですじゃ」

『拝見します』

五十センチ四方の金属製の箱を氷室から出し、中を確認する。箱の内部が整然と仕切られサンプリングされた何がしかの結晶体が入っている。標本箱だ。大ババ様のサンプル収集力に私は目を見張る。

『これが毒の結晶ですか』

実に数十種類もの小瓶に、毒の結晶と思しき、小指先ほどの小さな結晶片が整然と詰められていた。これだけの種類の毒を持つ動物がいるとなると、森そのものが人を寄せ付けないつても分かる気がする。先輩はインフォメーションボードを立ち上げ、毒の成分解析してる。いつの間にか、複数のウィンドウが出ていた。

しかし数分後、かぶりをふり、素敵な笑顔とともにボードをシャットダウン。

” うん、解毒剤作ればいいかと思ったけど無理。諦めよう赤井君”

さじを投げたんですね、先輩。

「薬草を調合して毒消しを作っておりますが、目も悪く、この老いぼれめではなかなか効果のあるものができませんでしたのじゃ……」

大ババ様の声は、涙まじりだ。彼女はパウルさんお抱えの薬師。パウルさんの脚の壊死の進行をある程度食い止め、敗血症にもならずすんでいたのは大ババ様の手当があつてこそか。私はそつと彼女の肩に両手を置き、積年の苦勞を偲ぶ。

『老いぼれなどと言わないでください。毒を結晶化して保存するとは、すぐれた知恵です、試料の保存は解毒のための手がかりとなる。』

それに、解毒剤を作るのは困難を極めるでしょう」

「おお、ありがたや。そう仰っていたけると、救われますでこのう」

大ババ様は感極まって平伏してしまった。

こりゃ早いとこ精霊さんを見つけて、不自由生活からネストの民を解放してあげないと。

義君なのに一人でカラ回ってるパウルさんもネスト王家も、崖の上のぼにy……じゃなくて崖の上のネスト民も気の毒だ。

飛翔のできる私達は即日断崖から森に降り、精霊さんの手がかりだけでも捜そうと思っただけど、

「赤い神様、異国の方々、民が待つております。ネストを視察していただけませんか」

パウルさんもそう言うし、まあ明日にするかと私達はネストの各所を視察することに。城の外に出ると城下町では既に噂が広まってネストの民が私に黄色い歓声を上げ祝福をしてもらいたがる。私は道すがら人々に触れのほほんと祝福して歩きながら、ネスト台地の中央の牧場へ。

私と国民の皆様念願のモフモフ……いるとしたらここしかないっしょ。

毛のない獣たちよさらば！ 今日から私もモフモフ富豪だ。

全国四億五千万人の国民のモフラーの皆様お待たせいたしました
スーパーモフモフタイムです！

高鳴る胸をおさえつけ、柵の向こうの草原には……いた
！

数百頭のモフモフの大群が！ 毛むくじゃらのふつかふかだ！
毛100%！ 手洗いをお願いします！ ！ 壮観すぎてもう私モ

フ死しそう。もし死んでたらエトワール先輩、モフ死って診断書書いていいからね。

『わああああ　！』

思わず絶叫。絶景かな、絶景かな。第二区画の構築士さんフルもつふな眺めありがとう！ 私が妙に動揺してるから、「どうなされましたか、御心が昂たかぶっておられるようですが」とロイ。昂たかぶってるなんてもんじゃないよ、みなぎってるよ！

手前にいて柵から首を出してこつち見てるモフは、ボルゾイ（犬です）みたいなルックスのが馬サイズ。首がやたら長くて、コバルトブルーの、カールしたモフ毛に全身がびっちり覆われていた。首を上下にゆらゆら振って挨拶してくれる。張子の虎かよ。愛くるしくつぶらな瞳は駱駝のそれを彷彿とさせるよ。

「マーマー」

「マーマーマー、マーマーマー」

完璧甘えてるよねこれ。毛だけじゃなく、舌まで青い。つか何その鳴き声？

「マーマー？」

ちよ、一斉にこつち見んな！

……かわいいから許されるけどさ。

「マ~~~~~」

青ボルゾイだと思ったら、羊っぽく鳴いたでござる。

そのシニールさに辛抱たまらずひっしと抱きついてしまったけど、フローラル系の上品な香りがして高級感マジぱねっす。柔軟剤使ってるのかなと思いきや、牧場に生える香草が主食らしい。草食獣で家畜としては完璧。

『ミシカさん、この青い家畜は何というのですか』
「シツジといます。グラランダにはいないのでしょうか。毛を刈ったり、大人しいので背に騎乗できます。肉は美味で、俊足です。ご覧に入れましょう」

羊？ 執事？ 違うか、シツジなのか。青ボルゾイなのに？

馬の代わりになる生き物なのかな。ミシカが指笛を吹くとミシカの愛馬、じゃなくて愛シツジが走ってきて、彼女はその背にひらりと飛び乗り、他のシツジの背を障害物に見立て次々と飛び越える。お転婆娘が、見事な騎乗テクニクを見せてくれる。つかすげージヤンプ力じゃんシツジ侮ってたよごめんよ！ 高さ四メートルは軽く跳躍できてる。馬を高機動にした感じが。

「みなさんも乗ってみます？」

シツジの性質は温和で人懐こいというので、皆も一人ずつ体験騎乗。

それぞれが騎乗すると飼育員さんに手綱を引いてもらって、馬場を一週。牧場にありがちな長閑な風景で、記念写真でも撮りたい気分。エトワール先輩だけ乗らなかつたのは、馬に天使の組み合わせでペガサスみたいになるからだよね。

”いらんお世話だぞ赤井君”

はいはい凶星凶星。

「わー、とっても楽しいですー！」

アイで騎乗に慣れていたメグは、乗馬じゃなくて乗シツジセンス抜群。ロイとラウルさんも度胸があるのですぐにコツを掴んで乗りこなす。一通り堪能したあと、ロイとキララは仔シツジ数頭連れて

帰りたがったので、ミシカが「グランダとモンジャとネストの友好のしるしです」と快諾。

「あれ？」

いつの間にかメグの周りだけシツジが大集合してた。彼女、動物に好かれるタイプなのかな。メグはモッフモッフなシツジの大群に囲まれて甘えられてる。いいなーメグ、私と代わってよそれ。

「あかいかみさま、助けてください〜。囲まれて全然動けませんー、服がシツジの毛玉だらけになってます!!!」

「えー、どうしてそんなにメグちゃんに懐いちゃったんだろう」

かわいがっていたシツジたちのあけすけな裏切りに、ミシカはものほしそくに口を尖らせている。

メグが現実世界で何をやってたのかわからないけど、獣医さんとかペットショップ店員だったりして。微笑ましい光景と思いきや、メグはにっちもさっちも動けず真剣に困っていたので私が助け舟を出し、

『シツジさんたち、もうメグさんから離れて向こうで遊んでいらっしやいー!』

というところ「ママー!（かみさまのけちー、赤いくせにー!）」と言いながら解散していった。

『ケチとは失礼ですよ! あと、”赤い”は悪口のうちに入りませんよ!』

「悪口言われてたんですか!？」メグが残念そう。

「動物には馬鹿にされ……アカイは本当に神なのか?」キララも便乗して私を馬鹿にする。

「マーマー（ザマあー!）」

こんなときは動物の心が分かるってのも善し悪しだ。
ちなみに私、動物王国の人の弟子とかじゃない。

ともあれシツジを利用した牛馬耕、馬車、貨物牽引、騎馬隊など馬の代わりに使えるかも shouldn't。エドは気性が荒く肉食性だったけど、温和で万能なシツジがモンジャやグランダに齎されたら文明レベルが急加速しそうで助かる。第二区画の人ありがとう、と、誰にともなく深々と頭を下げた。

「あ！ ミシカちゃん、あっちは何の塊ですー？ 色とりどりできれいですー！」

メグが指さす先には、色とりどりの毛玉の塊が月見団子のように小山を作ってる。

「ねえー、こっち向いて〜！」

メグが大声で呼んだからか、毛玉が数個ほぐれ、動物の顔らしきものかによきによきと生えた。耳の長い色つき巨大ウサギもどきが折り重なって鎮座してたんだ。球体に近いかたちで、手足と顔が取ってつけたよう。寄り集まって集団で暖を取ってるみたい。一匹が運動会の大き目の二倍くらいある、アンゴラウサギ的な感じ。赤、青、黄色、紫、黄緑、ピンクと、カラーバリエーションも充実！ カラーひよこかよ。なにこの謎モフ、染料なしで毛織物作れそうじゃない！

しかしミシカは真っ青になってメグの口を抑える。

「しっ！ 大きな声を出して驚かせてはいけません！ 興奮すると集団で転がってくるのです。一見柔らかそうですが、重いので轢かれると命の危険も」

何そのふわふわな暴走トラック。フワフワに轢かれるとか本望だよ私。さあ来い！ 受けて立つぜ！ とばかり私が大の字になって皆の前に立ちふさがる。カラーアンゴラは私の顔を見ると、元の毛

玉に戻った。あれ、こないの？ 来てよさみしいじゃん。私しょんぼり。

「ご、ごめんなさいミシカちゃん。私、不用意に大声出して」

「神様が庇ってくださったので落ち着いたようです。毛から糸を紡げば、上質の毛織物ができますよ！ 肉は格別においしいです」

牧場視察を終え、寒風吹きすさぶ牧場を移動。分刻みのスケジュールだ、時計ないけどね。

皆、シツジの利便性に気付いていた。

「モンジャの民も、シツジに乗れば移動も楽でしょうね」

とメグが私にシツジの感想を述べるので、私も和やかに返す。

『家畜と共存するネストの民の暮らしは、よく工夫が凝らされています。学ぶべきところは多々あると思いますよ』

「シツジに乗れば、敵より遙かに優位に立てそうですね。シツジの上から刺突や投擲をするにも有利です。組織的に陣形を組めば、多彩な戦略を可能とします。戻ったら早速導入してみましよう」

『……ロイ、さん？』

ロイはこのシツジを使った騎兵団の機動性に着目し、軍事力増強の青写真ができてみたいだ。でも私はロイの口から敵という物騒な言葉が初めて飛び出して、ふと、いつになく不安になった。

「なんですか？」

最近、君の国防意識が強すぎて怖くなることがあるよ。それとも君の野心は国防に留まらないのか？ 世界を知ることが、野心を知ることでもあるのかな。

物騒な方面に行かないよう、しっかり目を配っておかないと。

……と、私が半ば寂しく思っていると

『ロイは分岐点に立っているな……赤井君のもとにいても避けられないのか』

先輩がぼつりとこぼし、ついでに大きく失望の溜め息をついた。

『どづいことですか？』

話してもいいことなら、話していただけると助かります。先輩は現実世界側の盗聴に用心して念話で

”これはもう、君に話しておいた方がいいだろう。彼を止められるのは、君しかない”

え、止めるって何をです。……何かそこはかたなく嫌な予感がするんですが。

”高度学習型 A・I であるロイは、さる重大な使命のために開発された。日本アガルタのみならず米国アガルタでも試験導入され、日米全ての構築士がロイという A・I を知っている”

”！？……ロイは他の管区にもいるんですか！？”

”ロイは文武両道の万能タイプで、神通力との親和性もいだろう。理解力も応用力も高く、物怖じもしない”

た、確かに。ありえないぐらいハイスペックな子です。

それが彼の個性なのかと想っていたけれど、違う目的があるのか？　つかロイが近くににいるのにこの爆弾発言、私は平静を取り繕うので精一杯だ。あ、こっち見た。

”君の代役が、彼に務まりそうだと思ったことも一度や二度ではないだろう”

ええ、そんなの日常茶飯事です。

なんなら私より神様らしいぐらいです、優しい子ですし私なんかより聡明です。で、でも他の管区のロイはどうなんですか？ やっぱり出木杉君なんでしょうか。

”ロイの再生された環境は違えど、全て同じ失敗に終わり 危険な脅威として構築士らに処分された”

”しよ、処分って！？ 彼が脅威になってしまったんですか？”

”君ならそれを回避できるかと思っていた、しかし兆候は表れている”

しん、と、ネストを吹き渡る風が止んでしまったかのように錯覚した。私が立ち止ったので、ナズが「どうしましたか」と首を傾げる。

”他管区のロイというA・Iは本来の目的を達することなく、どのような過程を経ても”

先輩は一呼吸置いて、私の芯を捉え吐露する。

”暴君になってしまったんだよ”

目の前には草原を踏みしめ、空を見上げ背伸びをする、ロイの後姿。彼は最後の一人だ。

エトワール先輩はその逞しい背を見つめる。

”赤井君……君は止められるか？ 救えるか？ 彼を ”

どうしてだろう、

彼の魂が、彼の笑顔が、遠ざかってゆくように感じた。

第4章 第2話 赤井さんのネスト視察とねんがんの何か（後書き）

Special Thanks! モフモフ案を下さった方々、ありがとうございます。

次話は数日以内に更新いたします。

第4章 第3話 まずはおなかを満たすのこと

エトワール先輩の爆弾発言。

ロイが暴君になるかもしれない……私は一旦その情報を頭の中からシャットアウトし、目先の仕事に取り組むことに。第二区画解放が終わってから対策を考えるべきだ、区画解放に失敗するとネスト民へのダメージも計り知れない。ひいては第二区画の人の顔も潰すことになる。優先順位を考えて、まず仕事、仕事。

私達一行は牧場を抜け東西に広がるネスト台地の端の、深さ四百メートル級の巨大縦穴内部の視察へ。吹き抜けの大空洞を下へ降りてゆくと、壁面には夥しい数の住居群。三十フロアっていうから、三十階建て分のアパートがそのまま縦穴の中におさまっている感じ。木材資源に乏しいネストでは住居に岩窟を利用するのが賢明だ。

縦穴自体が風避けとなっており、中は比較的暖かった。階段はなくロープの吊り橋で各フロアが連絡され、穴の底にはネスト唯一の水源の泉から台地に突き出した風車で揚水し、生活用水、灌漑用水として供給している。でも水の供給量はギリギリで、水資源には相当に不自由している様子。

「今年は深刻な渇水が起こり水源が枯れてしまいました。……湧水に加え雨水も貯水しているのですが、追いつかず」

「ミシカがうなだれる。するとロイが気づき、申し訳なさに「責任の一端は俺にあるような気がします。俺が神様の神通力で無計画にモンジャの畑に集中的に雨を降らせていたから。ネストの雨雲を奪い取っていたのかもしれない」

あ、そうかその発想はなかったよ。

西に雨が降れば、東が渇く。パイを分け合っているんだ。

……うん？ でも十年前からつと、私のせいでもあるのか。ごめんよ、神通力を節操無く濫用して二十七管区全体の気候を左右してしまつてた。

『申し訳ありません、ネストの民よ。この禍いはすみやかに被いませ』

天候のことは私が何とかできるけど、それでは根本的な解決にならない。

縦穴での暮らしは温かく住み心地いい、しかし決して満足できるものではなく、人口も過密気味。もともとネスト台地の下で暮らしていた民は、森の傍で畑を耕したり狩りをして暮らしたいと口々に言う。

更に、縦穴に無理に足場を作っているから子供が落ちたり、お年寄りが足を踏み外したりと、毎年数人の死人が出ちゃう。それを聞いたラウル兄妹が何か話し合つていたと思いきや。半纏のような上着を重ね着して着ぶくれたラウルさん。腕まくりをして

「さしあたりここに、転落しないよう各階に鉄柵をつけるといいんじゃないか？」

「そうときたら、高所作業はあたしら兄妹の十八番だよ。いい具合に落ちないようにしたげるから、任せときなよ」

ヒノつてば、ネストに来て早々本職で活躍できて嬉しそう。

そついやヒノ……十八番オハコつて日本語使つてら。アガルタじゃ歌舞伎に由来する十八番なんて言葉ないので、彼女もメグと同じく記憶の回復基調にあるのかな。

「ではラウル、ヒノ、ここに防護柵を設ける作業を頼んでもいいかい
ロイが彼らに指示を出している。リーダーの風格があるよね、それ自体が悪いことではないと思うんだけどさ……」

「おう、三日……いや、二日以内にやるから任せとけ！」

ラウルさん、ヒノとロイが三人で気合いを入れるためにハイタッチしてた。

ロイはラウルさんに必要以上に強く手を叩かれて、後で首を傾げながら手をさすっていたけど。

それが男の競争心というものですよ、ロイ。

『それは助かります、ラウルさん、ヒノさん。ここはお任せしましたよ』

「赤い神様、この民にも祝福をお願いしてもよいですか。あなたの降臨を皆が待ち望んでいました」

『勿論です、一軒ずつお話を聞いて回りましょう』

ミシカが上階から崖っぷちの住居を案内してくれた。感心なことに、彼女は全ての家の家主と顔見知りで、簡単に紹介してくれる。民思いの姫様だよ。住民たちはやせこけていたけど、王家に不満があるわけではなくミシカを姫様、姫様と慕っている様子だった。うーん、何かとかぶる。

「おお、姫様が神様を連れてきてくださった。伝説は本当だったのじゃー！」

痩せてすじばった手で、私に祈りを捧げてくれるネストの民たち。私は彼らの幸福を祈りながら、一人ずつ抱擁する。

皆の抱き心地が何かごつごつしてモンジャ民と違う、痩せすぎだよ可哀そうに。女の子たちの胸もAカップ以下だよけしからん。女の子の胸はAカップ以上はあってもらわないと困る（ハードル下げました）、これまたセクハラでしたか、すみません。

男の子らも勿論、もやしっ子じゃだめだよ。

とはいえ、岩窟の食糧事情は想像以上に厳しそう。城下町の裾野の、わずかな畑で採れる作物。それにシツジと、アンゴラうさぎもどきの肉のみ。主食は干し肉だというから、その貧窮ぶりを察する

に余りある。城下町で暮らす人々と比べ、彼らの衰弱ぶりが目立つ。忌憚なく言ってしまうと、貧民窟なんだろう。

「これ、皆にいきわたるか分かりませんが、すぐ育つやつです」

メグが、モンジャ原産の寒さと乾燥に強い葉物野菜と根菜、イモ類の種子を貧民窟の民たちに手渡していた。グラランダから持ってきた甘い果実の種もある。「これはこれは」と感謝してくれたけど、作物つてすぐには実を結ばないよね。ネスト台地では作付面積にも限度があるし……森に降りて各々の畑を持ちたいのです、と彼らは私にうつたえる。

その後も私はミシカと共に岩窟の家々を回り、時間をかけて彼らの願いに耳を傾けた。メグは作物の育て方をレクチャーするためその場に留まり、キララとロイは私についてきた。

「疲弊しきっているな。しかし問題が問題だけに、為政者に非があるとも言えん」

と、実は民に慕われている賢君ってか賢女王であるキララが頭を悩ませれば、

「モンジャでは考えられませんね。モンジャではエドが唯一の肉食獣でまだ平和でしたが、毒のある危険動物にここまで困まれてはどうしようもありません。モンジャにはまだ受け入れ可能な土地があります。移住は望まないのでしょうか」

とモンジャの押しも押されぬ集落の長のロイが唸る。うんうん、二人ともしつかり考えて社会問題に強くなつてね。他人事だと思つてちゃだめだよ。

そうこうしている間にも各家々からの陳情は続く。

「今年の干ばつによる飢饉で、私も子供たちも、食うや食わずの生活です。もうお乳も出ません」

『まず水を何とかしましょう』

皆の不満を総合すると、水不足に対する不満件数が一番多かった

ので、私はこれ以上クレームが出ないよう縦穴の底に降り、25メートルプールが一つ入るほどの大泉の畔に立つ。皆が大切に使っているのか、透明度の高い水を湛えた青みがかつた泉だった。でも湯水が原因で底が浅い。水を節約するあまり、入浴もできないとのこと。不衛生にしたら疫病が流行るし、手を打たないと。

『清水よ、滾々と湧き続け、ネストの民に恵みをもたらすように』

それっぽいこと言いながらインフォメーションボードを操作し対象を泉のあたりに指定し水分子を構築。

【構築物質 : H₂O】

【構築スピード : 10L/sec】

【継続時間 : 60sec x 1】

何で雨にしないのかって、雨を降らせてもこれだけ寒いと多分雪になっちゃうから直接水源から水が湧くようにしたげた。これにより、毎分600Lの湧き水確保。時間にしたから、半永久的に一杯分構築枠を潰しちゃったけどね。水の硬度が高めだったので飲用に適した硬度にし、ミネラル分豊富になるよう調整する。ところで水が無限に湧き続けると縦穴住居群が水で水没してしまうよね、そこで

『砕け散れ！』

ここ最近使わなかった神杖を放ち、縦穴の薄くなっている岩壁をぶち抜く。水が泉から溢れた場合に機能するよう滝として台地の外に流す簡単な仕掛けを作っておいた。ギアナ高地のエンジェルフォールってあるじゃん、あんな感じ。滝が高すぎると、途中で水蒸気になって雲散霧消するんだけど。

「神様の御恵みだー！」

「ネストと赤い神様に栄光あれ！」

「やんや、やんやの拍手喝采。」

「あー、この感じ久しぶり。私久しぶりに仕事してる気がする。最近働いてなかったからね。」

『これで水不足については心配いらないでしょう』

しかし仕事した端から、腹ペコ集団が押しくら饅頭のように押し寄せていて……

「赤い神様、お腹すいて頭がくらくらしみます……おなかいっぱい食べたいです」

「弱弱しい声で私にしなだれかかる幼い少女。貧血気味だったから、先輩に治療を任せた。」

「おにぎりが、食べたいんだなあ……」

ぼつりと溢す、いがぐり頭のおじさん。私と先輩は全神通力を湯水のように使って高カロリーの飴玉をこしらえ、一人につき三つずつ配った。一個八百キロカロリーという、国民の女性の皆様の敵だよ。私達の構築枠をめいっばい使い、構築枠が三十分ごとにオープンするたび飴玉の合成をかける。一時しのぎに過ぎないけど、応急処置だ。

「甘くておいしいです！ ほっぺたが落ちそうです！」

『よかった、決して噛まずにとけるまで舐めてくださいね』

それカロリー高すぎだし急に血糖が上がると危ないからね。子供は言った端からガリガリ噛もうとした。うん、気持ちはわかる。私も飴なめるとすぐ噛んじゃう派だし。そう思って、噛めないほど硬く造つとききました。すると五分もしないうちに「わーん、歯が欠けた」って少年の声が聞こえてきた。誰だよ歯を酷使した子、食い意地張りすぎだよ。『しょうがないな』と、エトワール先輩がかさず治療。

ネストの民から寄せられる信頼の力によって使用可能構築枠が増えたから、増えた枠もフル稼働。でも、私とエトワール先輩が出せるのはせいぜい質量の少ない、飴玉を構築するので手一杯。

”ふーむ、こんなものじゃ埒があかな”

エトワール先輩は（多分面倒くさくなりました）物陰に隠れ、ボードを呼び出しネスト全体にエリア指定してバイオコンストラクトかけやがった。

【 強制投与：TPN 】

【 投与量：20Kcal/kg/day 】

【 投与部位：中心静脈 】

”TPNってなんです先輩？”

”IVH（Intravenous Hyperalimentation）だよ。日本語で何ていうんだっけね？”

”うおう！ それって高カロリー輸液じゃん！ 中心静脈から入れて、一日何千キロカロリーも強制接種できるやつ。”

”徐々に投与するから、暫くしたら血糖値が上がって満腹感を味わうことができるだろう。急場の飢えはしのげようさ、飴玉もあるし”

”と先輩がクールに鼻を鳴らす。さりげにパネっすね。いつも思うけど、ホント頼もしいですよ先輩。私も見習わないとな。”

夜はパウルさんの城に宿泊。城下町にも水源を造ってあげた。揚水だけじゃ不便してるからね。これで水不足は一時的に解消すると思う。シツジの肉類のミルク煮込みなどを中心とした簡単な夕食をいただき、体を拭いて就寝。

ネストは冷え込むから暖房するんだけど、各部屋を温めるだけの燃料がないから、暖房のあるパウルさんの大部屋に皆が集まって布

団を敷いて寝る。皆がシツジの毛製の毛布の温かさにカルチャーシ
ヨックを受けていた頃、先輩は日課のモンジャとグラランダのパトロ
ールに出かけた。

そしてネストの夜はふけてゆく。

第4章 第4話 免疫 ポリペプチドを記憶すること

私は皆が寝静まるの待ち、ごそごそと床を起きだす。
いや別に夜這いじゃないよ安心してくださいよ。

抜き足差し足で壁際に近づき、氷室から大ババ様が見せてくれた毒の結晶の小箱を取り出し、机の上に置いた。結晶インフォメーションボードで解析した私は、指先に小さな傷をつけ、傷口を直に毒物に押し付ける。

指先がピリピリと痺れる感覚、……想像以上の激痛だ。傷口はすぐに癒えるので、親指、人差し指、中指……と順に使って傷口を晒す。一つずつ、慎重に。もう指先が腫れてきた。私は不死身でも、許容量以上に神体に毒が回れば危険だ。それに、苦しくないわけではない。

”分かってはいたけど、辛いなあ……”

右手でインフォメーションボードを繰り返り、自らにアナライズをかけるステータスを見守る。情報に注意深く目を配りながら、その時を待っていた。窓枠の外を懇々と降る雪に気を紛らせ、息を深く吐いて苦痛を受容する。

黙々と繰り返す苦痛な作業。指先を傷つけては、生傷を毒の結晶に晒す。深く、肉体記憶に刻みつけるように。

じわりと、柔らかい部分を焼かれ浸食されてゆく心地。捌いた毒物が数十個を超えるころには、毒に蝕まれ手首まで腫れあがっていた。毒が混然一体となって体内をぐるりと巡り、全身が拒絶するように発熱しているのが、情報によって手に取るように分かる。

”大丈夫、耐えられる。この苦痛は仮初のものだ、リアルではない”
ただの電気刺激、痛覚シグナルにすぎないんだ。私のリアルの体、
桔平本体は現実世界の保存液の中で達者になっている、だから不安に
なることは何もない。グランダの時と比べたら、毛ほども痛くない。
何度となく言い聞かせる。耐えがたい時間をやり過ごしていると……

「あかいかみさま……怖い夢をみました。祝福してください」

背後から不意に声をかけられ、体がこわばる。メグが目を覚まし
たみたいだ。メグの睡眠は浅くなっている、また悪夢をみたのか。
ここ最近、よく悪夢を見るって言ってたもんな。その大半は現実世
界のことなんだけれども。

『少し待つてもらえますか』

私はメグに背中を向けたまま、作業を一時中断。視線を合わせな
い私を訝しみ、メグが布団から抜け出した。しまったと思うより先
に、メグは机の上の物体を目撃。毒結晶をきつく握りしめる私の手
が彼女の視線を奪っている。

「な、何をしているんですか、やめてください！」

メグが私の手を握りしめる、苦痛を遠ざけ、私を正気に立ちかえ
らせようとする。

「一体何のために！ どうしてそんなことをするんですか！」

『まあメグさん、落ち着いてそこに掛けてください』

「まずやめてください！ でないと話を聞きません」

私は根負けし、結晶を手放す。彼女は木製の粗末な椅子に着座し、
私の首のあたりに抱きついた。

メグは今にも泣きだしそうな声で私を諭す。

「かみさまは私達には、危険なことをしないでください、無理をするとか心配ですと仰います。なのにあなたはご自分を粗末にする、そんなのおかしいと思います」

急にメグのことがいとおしくなって抱擁してあげたいけれど、私の手は毒にまみれている。

「メグさん、私とあなた方は違う。神は不滅です、決して同情などしないでください。あなたの思いやりは、どうか人へのみ向けてあげてください」

「では、せめてそうしなければならぬ理由ぐらい教えてください。理由がわかれば、納得できることもあります」

メグは嘆き悲しみ、両手で顔を覆いながらそう言った。確かにその通りだよ。

彼女にはまだ教えていなかったことがたくさんある。現実世界に戻れば思い出すだろうから積極的には教えていないけれど、これもその一つだ。

「あなたの過去の思い出は、あなたの脳が覚えている。異物が体に侵入した痕跡は、あなたの体が覚えています。毎年の流感から回復して元気になるのはなぜでしょう。何があなたを病原体から守ってくれるのでしょうか」

「それは……かみさまのご加護だと思っていました」

メグは素直だな。私に寄せる全幅の信頼、その気持ち嬉しいよ。私はメグによってこの世界で生かされたと言っても過言ではない。彼女は私にとってかけがえのない存在、特別な一人となりつつあった。

「いいえ。あなたが病気と闘う力は、あなた自身に備わっているのですよ」

「どづいつことですか？」

不意打ちでロイが横やり入れてきた。声を落としていたとはいえメグと私の話し声が聞こえたのか、いつの間にかロイが起きて傍らに陣取っている。彼はメグの肩に毛布をかけてあげた。

『これを免疫系といいます』

「反応式で教えてください、これまでのように分子式で記述できないのですか」

『可能ですが、生化学を学ぶにはもつと視野を広げなければいけません。分子は立体構造をとり、相互に作用をしあい、複雑な振る舞いを見せます』

「して、それと赤井様の奇行が、どう結び付くのですか」
『まあ聞いてください』

彼らを夜更かしさせず早く寝かせてあげなければと思えど、私は指先を傷つけては次々と毒を自らに押し込み、気を紛らわせるように訥々と語った。できるだけ簡略化して分かりやすく説明したから、ロイもメグものめり込んで聞いてくれた。

大ババ様が集めていた獣の毒は全てタンパク質のもととなるポリペプチドだったから、私の免疫系が毒の情報を記憶することができるとんだ。電子論文を見ながらコンストラクトでそれぞれ解毒薬を造るという方法は非効率的だ。現実世界にはない毒物だから、一つ一つ自分で解毒できる構造を考えて構築しなければならない。シミュレーションできない、てか無理。

一方、私の免疫系は私の脳よりよほど利口だ。

安全かつ迅速に解毒剤、つまり毒に対する抗血清を量産する。

ネストの民が、これ以上獣の毒に怯やかされずともよいよう私自身を解毒薬へと創りかえる。

私がしていたのはただそれだけのこと。奇行ではないんだよ。私は理にかなわないことは、したくないスタンスなんだ。

『とうわけで私の血清を無菌的に希釈し、予め民に接種しておけば受動免疫が誘導されるでしょう』

「！……そうだったんですか」

私の神体は高い免疫力を持ち不浄を受け付けないから、少しでも毒が体に入れば抗毒血清が一瞬にしてできる。インフォメーションボードを見ながら、毒物に対する抗体ができてゆくのを確認していた。明日まで熟成させれば、立派な解毒血清として機能するだろう。

『納得してくれましたね？』

「納得しました」

私が微笑むと、二人とも安堵したように口をそろえた。幾分、憐れみを込めた視線が突き刺さる。私は水盆の中に両手を差し入れ入念に洗うと、約束通りメグを祝福し、ロイにも祝福をした。腫れ上がった両手で擁く二人の両肩、いつになく神通力を込めてしまった。普段と違う感覚をロイが疑問視する。

「赤井様？ 毒物で御身が痛むのですか」

『いいえ』

「では、どうされました」

『メグさん、ロイさん、あなた方ははじまりの人であり、私の大切な人です。どうか 』

お願いだから、このままの君たちでいてほしい。

しかし成長する、君たちは変わってゆく。このままではいられない

いい、よく分かっている。

この先何があっても、私は君たちを救ってみせる。それだけの覚悟はしていたつもりだ。でも更なる覚悟を、私はしていなかった。

私はきたるべき未来を受け入れて、小さく一つ頷く。

『明日があるのに、遅くなってしまいました。……寝ましようか』
「はい」「そうしましょう」

素直で、いい返事にほっとする。私は彼らがそう育ってくれたことに感謝した。

「おやすみなさい、あかいかみさま」

床に就いた私はメグとロイに両側から寄り添われ、今という時間の稀有をかみしめ、過ぎゆく時の非情を憂う。

パトロールを終えた先輩が戻り、川の字で寝ている私に、念話でただいまと言った。

”しけた顔をしているな赤井君。ロイのことを考えていたのか”

”先輩は前の管区で暴君になってしまったロイを見たんですか？”

”ああ。この管区は違うかもしれないと思っていたが……どこことなく片鱗を窺わせるな。最初はいいいんだ、最初は”

ロイというA・Iは優秀で、ハイロードの片腕としてハイロードを信頼し、構築を助けてくれる。……問題は百年もするとハイロードを脅かす知性と実力を身につけ、ハイロードの支配に甘んずることをよしとせず、クーデターを起こし神殺しをなそうとすることだ。そして、彼を見限ったハイロードの手によって殺処分されてきた。

このパターンが何度となく起こり、蒼雲と白棕の世界でも既に口
イは殺害されたとのこと。

二十七管区に残った彼だけが、現在稼働している最後のA・I。
だ。故 フォレスター教授によって非常に繊細なバランスで造られ
たA・Iであるため、パッチなどが当てられないのだという。し
かしそのバグがなければ、間違いなく彼は重要な極秘任務を遂げら
れる。

重要任務の部分は、先輩もさすがに知らないって言ってるけど。

ん？

ちょっと待って、今百年後って言わなかった？ ロイって何歳ま
で生きるの？！

” ああ、ロイは構築士と最後まで寄り添う不老のA・I。なんだよ。
不死ではないけれどね”

” そんなの、酷ではないですか？！”

周囲に血のつながりがなくなっても、一人だけ死なない孤独、無
限に続く時間。閉じ込められた世界。二十二歳の私が、彼の先を歩
み続けることができる殊勝な人間であるとは言い難い。容易に追い
越されてしまう。そして未来のロイが、だらしなく、成長もしない
自堕落な私を見たとき……認められない、赦せないと思うかもしれ
ない。無能な神に成り代わってやろうと、彼ならば殺意を懐くのか
もしれない。

A・Iの中でロイだけが、世界を、そして宇宙を知りたがって
いる。行き場のない苛立ちと閉塞感を感じはじめている。

彼にとつての神々の世界、現実世界の姿。私は彼に千年も真実を隠してはおけない。私の隣で眠る、ロイの穏やかな寝顔を見つめていた。救いたい、必ず。そのとき、私の耳元で何かが弾けた気がした。そして気付けば、こんなことを言ってしまった。

”彼を、この管区の維持士にしてはどうでしょう”

”は!?”

現実の世界のこと、仮想世界という概念、根気よく話せば彼ならば理解できると思うんだ。この世界がヴァーチャルで、素民は現実世界の人間の福祉のために造られた存在であるという、A・I.にとっては受け入れがたい過酷な事実。彼は哲学し、悩み、もの想うA・I.だ。私が接した大勢の素民の中で、宙そらの仕組みを知りたがるのは彼だけ。そんな人間味あふれる彼を、真実を知らないまま仮想世界の中に閉じ込めて、私が現実世界に戻るときにお役御免とされるなんて……。人間の都合よく使われてたまるかと、謀反だつて起こしたくなるかもしれない。

でも、もし「世界の真の姿を知りたい」というロイの気持ちを尊重してあげられたら。

神は完全な存在などではなく、現実世界の人間が演じているキャラクターなんだと。それが分かれば、そんな気も起こすまい。

”私、伊藤さんにかけてあつてみようと思います。却下されるかもしれませんが、ロイは適任だと思っんです。明日から彼を、そのつもりで育てます”

先輩は暫くの無表情の末にぎよつとしたような顔になり……。やがて満面の笑みで手打ちした。

” 赤井君！ 君はたまにいいことを言う！”

ん？ たまにとは失礼ですよ。

翌日は朝いちで、森に降りようとすする約五十人の武装した民が、ネストの牧場に集まった。

主に体力のある城下町の民たち、称号こそないけど、御家人つてか騎士にあたるのかな。集まった男性一人一人に危険性と効果を説明し、軽く問診して、希釈した解毒血清を針で無菌的に接種した。

魔の森探検隊のパーティ編成は以下の通り。

モンジャからは、私、エトワール先輩、ロイ、ラウルさん。グラ
ンダからキララ。ネストからパウルさんとミシカの兄上様。

メグたち女性陣はお留守番です。さすがに連れていけない。キララはどうしてもという希望があったので連れて行くことに。彼女、女だてらに武術一通りできるし、私も手こずったくらい強いからね。その他ネスト民の、それなりに戦えそうな皆様。ラウルさんは縦穴に手すりつけてあげるって言ってたけど、とりあえず今日一日ぐらいはこちらに付き合うとのこと。

「神様のお薬を受けた今なら、毒が回っても平気なんですね？」

と、豪華な甲冑っぽいのを着て凜々しいパウルさん。うん……多分としか言いようがないな。まあ神血で造った抗血清っていったら普通は超チートだから、平気じゃないにしても、最悪即死はないと思っよ。

「勇気が湧いてきました！ これで恐るるに足らずです！」

「父上、その意気ですよ！」

自信を取り戻しやたらテンションが上がったパウルさんと、兄上様もやる気になったところで、さてどこから森に降りようかという話になる。

「城の地下に、森への出入口として使っていた通路があります」

てなわけで皆で城の地下から長い階段通路を下り、わらわらと数珠つなぎになつて駆け下りる。

固く閉ざされた岩扉を開け、魔の森に至る。

『よいですか、何かあったらどんな些細なことでも呼んでくださいね。毒のある生物に噛まれたら、すぐに私がエトワールさんをお呼びください』

みんな、一人ずつ呼び笛を持たせている。私が武装した民を森の入り口に集めチュートリアルをしていると……

「赤井様!!!？」

ロイがはつと気づいて声をあげた。ふと振り向くと、私の背後に拳大の綿毛のようなものが無数に寄り集まってきてる。何これ、青い蛍光色の胞子のように、ふわふわしてる。毒があつてはいけないので、ロイが神槍で薙いで追い払おうとしてくれた。でも綿毛のように軽いから、華麗にスルーってか避けられる。

『あれ？ 何でしょうこれは』

慌ててインフォメーションボードを見ると、「蛍光植物、グローリア」って書いてある。

「アカイ、背中にびっしりついているぞ。何だその光るのは」

キララが私の背から一つつまみ上げると、青く光る菱形ブローチ

つばい形になつてた。

彼女がそれを茂みに捨てると、ひよひよひよ、と元のように綿毛化して漂い、また私の背にぺとり。

先ほどより発光を強める。おかげで私の背中、超明るい。

インフォメーションボードでは500ルクスって出てるんだけど、明るすぎじゃね？ 蛍光灯いらずだよ。

「ああ、これは精霊の導きとして知られ、心のきよらかな者にしか寄り付かない植物です。危険を遠ざけるとされ、滅多に見られないものですよ。こんなに集まっているのは、神様のお越しを待っていたからでしょう」

と、縁起の良いものを見たとはかり嬉しそうなパウルさん。気に入った人の背にくつついてくらしい。

植物なのこれ？ ちよ、青い菱形のブローチをよく見ればヒラメみたいに目がある！ きよろきよろつとこつちを見る。かわいいよ
うな……気もしてきた。

私を凝視してるけど……あ、全身がぼっとピンクになった。照れたのかな？

『かわいらしい植物ですな、グローリア』

グローリアくん……照れて、菱形が更に変形してピンクのハート形のブローチになりました。……てか第二区画の人、ガチ区画だなこりゃ。遊び心と造り込み半端ない、ド派手だと思うけど精霊さんの登場シーンが楽しみだ。

私の背にくつつくスペースがなくなったら、グローリアくんたち、仕方なくといった具合に皆の背にも一人一匹ずつくつついて、思い思いのブローチの形に変形した。背中が好きみたいだよ、キモかわ

キヤラだなこの植物。

エトワール先輩には一匹も来なかったから、天使なのに心が汚い人認定されるとか天使的にどうかと思うし、私のを何個か分けてあげた。

”グローリアくんたちには先輩の過去の悪事がバレてるみたいですよ”

”情けと施しはいらんぞ赤井君”

武士は食わねど高楊枝、闇米食わぬ的なこといつてたけど、とりあえずとくつつけといた。

グローリアくん、全身で拒否反応示してペカペカ点滅して嫌がってたけど知ったこっちゃない。

『では、参りましょうか。みなさん、お気をつけて』

『ん……あそこにいるのは』

鬱蒼と茂る森の二十メートル奥で、しよっぱなクマっぽい獣にエソカウント。……ただし黄色くてバカでかい。さらにクマ的にありえない色してる、背中の毛が赤い。まるで赤チョッキ着てるみたい。木の幹に顔を近づけて何か樹液っぽいの飲んでる。樹液じゃなくて蜂蜜？

”え、なにこの既視感……”

あれ？ 背中に赤いチョッキっぽい凶柄。ヤバいこれ危険な香りがする。とか思ってたらクマさん、こちらに気付いた。見ないでこつち！

大人しく蜂蜜でも食ってりゃいいのに、このクマーは！ 振り向いたらクマはすげー凶悪な顔してた。牙、なげえ！ セイウチぐら

いある！

長い牙をむき出しにして四つんばいになり、毛を逆立てる。パウ
ルさんと兄上様が同時に抜刀。

「い、いけません！ 威嚇しています。縄張りに入ってしまったよ
うです、あれは強烈な毒を持っています。お、襲い掛かってきます
！」

あれ？ 何か威嚇の仕方が「プー！ プー！！」って聞こえるん
だけど。クマもどきがプーとか言いながら威嚇とかそんな……著作
権的にOKなのこれ？

そんな餌で私らがクマ ！

こ、これは一刻も早く倒さねばなるまい（色んな意味で）。

第4章 第4話 免疫 ポリペプチドを記憶すること（後書き）

Special Thanks!

感想欄、拍手、その他ツールからモニター案を下さった方々。グロリア、クマー（ちよつと変えています）。名前をこの場に載せていいものかわかりませんでしたので、お名前は伏せさせていただきます。採用は掲載をもって発表しております。

第4章 第5話 絶対にツツこんではいけないネストの森24時

【アガルタ第二十七管区 第3391日目 第二区画内 第2日目】
【総居住者数 2870名(第二区画内 958名) , 総信頼率
99%(第二区画内 100%)】

前足で叢を踏み散らし、毛を逆立て威嚇してくる黄色いクマっぱいモンスターとエンカウント。

ある日森の中クマさんに出会ったとか言ってる場合じゃない。蜂蜜一緒に食べよってわけにもいかないし、一刻も早くすたこらさつさつさーのさくしたいけどクマさん許してくれそうにない。クマツたクマツたとか言っても更に駄々すべり。

「絶対に視線を外してはいけません！ 武器を構えて睨んで！」
森の獣の生態を知るパウルさんが警告を発する。視線を外すと襲い掛かってくるんだそう、なにそれこわい。

怖いと言えば、とりあえず黄色クマさんの赤いチョッキ柄が前あきの長袖チョッキ柄でよかった、半袖Tシャツ柄だったら著作権的にも怖いよこれ。あ、でも私古い時代の娯楽作品が好きでよくネタにしてしまうけど、よく考えたら昔の作品って殆ど著作権切れてるから別に問題ないのか。

では大きな声であのクマさんと呼んでみよう！ セーの、プーさん……やめやめ。君子危うきに近づくまい。

代わりにプー太郎って愛称どうよ。プープー威嚇してるからプー太郎だよ、別に他意はない、別に失業してるわけでもない。

まあでもここは私の出番か？ と、皆の一步前に出て何となく立ち塞がる。プー太郎君を神様の存在で懐柔しようとするも、摩なびい

てくれる気配なし。あれ？ 二十七管区の動物たちって私のこと好きなんじゃないの？

……そういやネストではシツジに馬鹿にされてた、ってか嫌われってたな。何でこの区画だけ……？ モンジャでは野生のエドすら私に甘えてきて飼い猫同然だったのに（毛が生えてないことを除けば）。

”勘違いするな、これらの獣は相手構築士の支配下にある。赤井君をボスと認め服従するのは、区画解放後だ”

そうなんですか、だから神様の魅力は通用しないってことね。ここはお約束的にちよつと噛まれて「ほら、怖くない……」発言を求められているのかと思っただけど……背後からエトワール先輩のツッコミが入った。

”そのくだりはやつても無駄だと思っし、肩に大穴があくぞ”

”そうですね、ちよつと試しにくのノリであのデカイ牙にざっくりやられるのは怖いです”

「赤い神様、あれを射てよろしいですね!？」

自作の短弓の矢を三本、番えながらラウルさんが私の許可を求めらる。ラウルさんの弓は持ち運びに便利な小型だけど、グラランダの技術と融合して改造された複合弓（金属で裏打ちがしてある）、更に連射式で飛距離が長く、矢じりに鉄製の返しがついてるから抜けない。殺傷能力が高めだし、モンジャの民は私が無益な殺生を嫌うのを知っているので一応伺いをたてる。

ロイも背に背負っていた神槍の帯紐を解いて構えながら、

「あの動物の肉は食用になるのでしょうか。食べられるのならば殺しますが」彼は実利主義。

「肉も固く不味いうえ、毒で舌が痺れますので食用には不向きです」しかめつらをして首を横に振るパウルさん。それじゃ自己防衛以外の理由がないから私は殺生できないな。

いや、別に皆は自己防衛の為に殺してもいいんだけど、これからネストの森を皆でローラー作戦で搜索しようとしてるのにいちいち虐殺してたら森の生態系が壊滅する。

”先輩、私らって人間も動物も殺生NGなんでしたっけ”

”甲種構築士は殺生不可だよ。乙種以下はノーペナだがね”

そうでしたよね。先輩、悪役のときはバツサバツサやってたのに今は聖人ヅラしてやがりますもんね。

”私のパッチの効果っていつ出ると思います？”

あれだけ伊藤さんに文句言ったくせに、結局困ったときのパッチ頼りかよ、と言わんばかりの先輩の視線が痛い。

”知らんがな。プロマネに直接訊けよ”

”先輩ってバイオコンストラクトを動物対象に使えないんですか？とりあえず眠らせたりしてもらえませんか？”

”既に他の構築士によってバイオコンストラクトがかかっているから二重がけはできんよ。相手構築士の支配下にある対象はどうしようもないな”

ですよね。ちょっと麻酔物質でもネスト全域の獣に打ってもらおうかと思っただんですが。ちょ、待って！今既にバイオコンストラクトがかかっているって何？

”ばっちり先方に三棒使われとるな。どうやらテストステロン（攻撃性物質）が過剰投与されとるよ、エグい濃度だ”

”ゴナドトロピン放出ホルモン（GnRH）受容体拮抗剤とかで、直接血中に打ち込んで攻撃性を緩和しましょうか。もしくはイソフルラン（C₃H₂ClF₅O：麻酔薬）で”

「赤井様、赤井様！」

私達の水面下での遣り取りを知らないロイが、私達が尻込みして
るように見えて痺れを切らしたのか

『あ、はい何でしょうロイさん』

「14(2) - 16(N2O)の構築をお願いしてもよろしいです
か!？」

「ちょ、笑気ガス使ってくれとか! 麻酔で気絶させて切り抜けよ
うってあたり私と発想が同じで怖っ!

私がいつかこの子と、先で一戦交える運命なのかと思うと戦々恐
々とする。いや、そんなことさせませんけどね。君が万が一暴走し
そうになったら私がどんな手段を使って石にかじりついてでも止め
てみせる。……その話も後でね。」

”君とロイはちょいちょい小賢しいな。そんなの大气で希釈してし
まうんだから構築枠の無駄だ無駄。無駄無駄無駄だ”

エトワール先輩ってばそんなに無駄無駄いわなくても。どこのス
タンド攻撃かと思いましたがよ。というわけで

『よい考えですがそれはできません、あの巨体に効く濃度となると、
あなた方も昏倒してしまうのですよ』

”下手な考え、休むに似たりだ。単純に気絶させてはどうだね。ほ
れ、こんなに集まってきたぞ?”

やめてー?! いつの間にかプー太郎の群れに囲まれとる! こ
れどこから湧いた? ねえ! さっきいなかったじゃん! てか先
輩のテンションの下がり具合がヤバイ、まさか高見の見物決め込ん
じゃう? やる気出してお願いしますから、かなりアテにしているん
ですから。って、まさか助太刀無用とプロマネに念押しされてると
か。人がいるから物理結界も張れやしない、物理結界の内側って真
空になるし皆が窒息しちゃう。

あれこれ考えていても、先輩の言うように休むに似たりだった。

私の動揺を察したのか、均衡が破れた！

「くるぞ！」

猛ダツシュで襲い掛かってきたプー太郎の首裏を、ロイが槍の柄で音が聞こえるほど殴打。効いている様子はない。ラウルさんが立て続けに射た矢は全て腹部に命中するも、プー太郎の分厚い皮膚に突き刺さりはしても巨体にダメージを与えない。……怒らせるには十分でしたが。鼻息荒くなってる！

『私に任せて下さい！』

ここはひとつ穩便に電撃で……私は人差し指を向け、息を吸い、できるだけ範囲を絞り込んでプラズマを纏い電撃を準備。私って厨二病的な能力色々持つてるけど、これまで殆ど電撃しか使ってないからね。だって力を加減すれば殺傷しないし安全ですから。てなわけで

『目を瞑り耳をふさいで！』

大きな声で予告して一秒後、パシツと乾いた轟音がして、二度、三度と巖霊が閃く。申し訳ないぐらい強い電圧かけたつもりだけど……プー太郎軍団は倒れない！？

「赤井様の神雷が効いていない……?!」

”ふーむ、神通力による攻撃がキャンセルされたな。神頼み禁止、住民にも戦わせろってことだろう”

”は！？ 電撃も火炎もその他もろもろ無効ってことですか？”

”そりゃ、区画解放は住民参加型のイベントだもの。神頼みで攻略できるなら住民ついて来なくていいだろ”

そうでしたね、だから先輩は以前グラランダ民を無差別攻撃して巻き添えにしゃがりましたよね！ ははっ、なんという住民参加型。

「あ、危ない！」

ばやばやしてたら、脇腹に鈍い衝撃がきて真横から突き飛ばされた。叢に顔からつんのめりそうになったので側宙で体制を立て直すと、誰かと思えば犯人はパウルさんだ。でも私が先ほどいた場所に猛突進してゆく黄色い影を確認。

あつぶね！ パウルさんに突き飛ばされなければ、プー太郎の超重量級の頭突き喰らってたよ。私の肉体強度は人ほどしかないし物理結界解除してるから、一撃喰らったら頭蓋骨折余裕でした。目標を見失ったプー太郎は前足で急ブレーキをかけ、こちらに向き直る。その巨軀で小枝をメキメキとなぎ倒し、一步一步にじり寄ってくる。何この猪突猛進型、猪でもないのに！

ちよい私もプー太郎になめられてばかりで頭きた。てなわけで

『皆さん離れて！』

私は神杖を握り単身プー太郎の群れの中に飛び込んだ。そしてすかさず展開したのは

”心理結界、径5m”

獣だろうが人だろうが、心をへし折ってやんよ！

『あ、あれ？』

コネ ！！

プー太郎さんたち、心が折れるどころか二足歩行体勢で立ち上がり更に怒りMAX。第二区画の人、テストステロン投与しすぎ！プー太郎たち逆三体型のマッスルボディになってるじゃん、パンプアップしてんじゃない！「キレてるキレてる！（筋肉の溝が深いよ！）」とか「ナイスバルク（いい筋肉）」ってご機嫌取ってる場合じゃない。違うか、ボディビルじゃないのか（ドーピングして

るし)。

はいはい、ちよつくら現実逃避してたけど心理結界無効ってことね。そういや先輩が神通力無効って言ったじゃん！ 聞いてなかったのかよ私！

ネスト民、ぽかんとしてる。うわやつちまった、ここは勢いで誤魔化すしかない！

『うおりゃあああああ！ 覚悟なさい！！』

結局、神杖で物理的に戦うしかないのでありました。何だかんだいって私って肉体強度はともかく怪力ではあるから、普通に戦えばよかつたんだよね。二、三匹は軽く頭殴ったら一発で気絶してくれた。よっしゃ、この調子で全部やつたるぜ、と思いきや

「おおお、我らも神様に続け　！」

パウルさんがときの声を上げると、ネスト軍団総攻撃。プー太郎さんたちをタコ殴りやら滅多刺し。パウルさんが先陣切って今までの恨みつらみを込め一思いにプー太郎の口に長剣を突っ込んでかき回した。ぎゃー残忍！ 鬱蒼とした森の仄暗い視界の中でも迷いのない攻撃は見事だ、そしてパウルさんと兄上様が連携し、背後から脇腹を槍で突いてきつちりとどめを刺す。この親子、さすが武芸に秀でた王族だけあってよく鍛錬してる。てか、殺しちゃったねこれ完璧に？

私の声も聞こえちゃいない。

『ちよつと……待つ……』

「いいですか！ ネストの森の怪獣は、口か目を狙うんです。迷ってはいけません」

それがネスト流の戦術らしい。粘膜なら柔らかいから人の力でも刃物が簡単に通る。口の中を剣で突くわけだから、運が悪いと一飲みにされそうだけど。

「うわあっ！」

仲間を倒され憤慨した別のプー太郎が、パウルさんの背後から鋭い爪で右袈裟がけに襲いかかった。一撃浴びるかと思われたが目を閉ざした時、なんとパウルさんの背後についていたグローリア君が光る毛玉の塊の巨大風船のように爆発的にパーンと膨らんだ。

何これ、何事？ パウルさんのエアバッグ!? パウルさんエアバッグ標準装備かよ！ プー太郎の爪の毒がグローリア君を蝕み、グローリア君はへなへなとしおれて蛍光を失い茶色く枯れ落ちた。
「どけ赤井！」

息つく間もなくキララが短槍を操り、面食らっていたプー太郎を喉から貫く。更に、これでもか、これでもかと二度、三度、深々と刃物が呑み込まれてゆく。怖っ！

『キララさん、それ以上はもうやめて下さい！』

そういやこの子、こういう事する容赦ない子だったよ！ そんなに念入りに止めくれなくていいから！

「今、背中の植物がパウル王を守ろうとしていたように見えたが？」
とラウルさんが私の疑問を代弁、

「そうです。グローリアは一度だけ守ってくれるんです、まだ油断しないで！」

パウルさんは身を挺して彼を庇ってくれたグローリアに報いるべく、盾でガードしつつプー太郎に躍り掛かり雨のように攻撃を続ける。ひらりひらりと縦横無尽、三十半ばとは思えない身のこなし。ともあれ総員入り乱れての大乱闘の末、ひいふうと数えてみれば死骸が十八体。足元を見ればさっき私が意識飛ばしたやつが目覚めかけたから、もう一回殴つといた。目を覚ましたら皆に殺されそうだし、眠つときなさい。グローリア君も何匹かやられて萎びた、もう

だめぼつて顔して。

「きゅ〜」

とかいってる、可哀そうに。暫く様子を見てると、枯れたグローリアくんの中から朝顔の種によく似た種がコロリと出てきた。土に植えておけば蘇るのかな。

『皆さん無事ですか、怪我はありませんか』

何人か牙や爪で負傷して毒が身体に入った人がいたけど、抗毒血清のおかげで問題ないみたい。にしても、よくもこれだけ殺生したもんだ、と私は血の気が引く。私は一体も殺してませんけど……。

複雑な思いで俯く私をまじまじ見ていたパウルさんが、

「とどめを刺さないのですね、ご自身に殺生を禁じておられるのですか？」

『え、ええ。殺生は好みませんから』

「私達が屠殺することは禁じないのに、ですか？」

自分の手は汚さないってことなのか、神の聖性は上辺だけのものなのか。パウルさんの心の中の疑問の声が聞こえてきそうだ。……すみません。綺麗ごとかもしれませんが、これは規則なんです。私が返事に窮していると、凜々しく澄んだ女声が耳朵を打った。

「赤井は違うんだ」

私とパウルさんの間に割って入ってきたのは、白いニットワンピースな民族衣装にオーバーニーの皮ブーツ、そして銀の胸あてをした金髪碧眼の少女。立ち回りを終えて頬がピンク色に火照っている。肩まで伸びていたウェーブがかった髪をおだんごにして頭の上でまとめ、おくれ毛が何本か。女武将然としてるけど可憐だ……勇ましく喋らなければ。

「赤井にとって、獣の命も我々の命もさして変わりない。蔑んでい

るのではなく、みな平等、みな尊い、彼は本気でそう信じているお人よしだ。だから絶対に殺生をしないし、彼は例え自身が傷ついても信念を貫く覚悟がある。結構じゃないか、我が国を支配していた天空神ギメノグレアヌスは獣も人も見境なく殺したぞ。神にも其々個性がある。ならば私は、誰も傷つけない穏やかな神がいい」

え……何とキララが私を全面弁護してくれた。

あれだけ毎日のように呪いをかけたり私を憎みまくってた子が……、普段はツンツンしてるだけに、これは何だかくるな。申し訳ないやら自分が情けないやら、でもありがとうキララ。先輩が果てしなく体裁悪そうだけど触れないであげてください。

私はキララの言葉に胸を打たれ、インフォメーションボードを密かに立ち上げて全110の構築枠を使いあるものを合成。……彼女の話は終わっていなかった。

「しかし、だ」

キララは私が止めをささなかつたプー太郎の喉首を一瞬にして掻き切った。彼女の立場、私のそれとの違いを明確に示すように。

喉元からヒューヒューと音が鳴り、やがてこと切れる。

「しかし我らは人であるから、我らが生きるために殺さねばならんのだ」

キララは頬に散った血飛沫を拭いながら私を振り返った。

命なきものに対する羨望の眼差しが、痛いほどに突き刺さる。彼女が私の言葉を待っているようだったので

「……生きるために必要なだけ殺すこと、他の命を頂くことは間違いではありません。しかし獣たちはもともと毒もなく、温和な性格だったと聞きました。私達の目的は精霊を捜して元の森の姿に戻

してもらうつことに他ならない。人は森と共存できる筈、いえ、そうしなければなりません。血の気配は森を騒がせ、獣たちを呼びよせます」

「でも、殺さなければ私達が殺されますし、一日でこの森の探索を終えなければならぬですよ？ 戦わず逃げて道を見失う」

兄様の御不満もごもつともです。そっぴやそっぴだよ。精霊の封印の場所って日替わりで変わるんだっけ。つまり今日中に森を探索し終わらなければ、翌日一からやり直さないといけないってことなんだ。何その鬼畜設定。じゃ、逆にいえば一番イージーそうな場所を陣取って毎日重点的に捜し続ければいつか封印が見つけれらるってことにも……やめやめ、ネスト民が待てないし、何日ごとにアタリが出るかも分からない。予定通り、一日で搜索を終わらせるのがベストなんだ。

私はタイミングよく構築を終え私の手の裡に落ちてきた白い物体を彼らに掲げて見せた。

『では、これを使ってください。遠くから攻撃できる飛び道具の刃先、針先に満遍なく塗ってください』

私は白い結晶を皆に配り、矢を中心とした飛び道具に結晶をたっぷり塗ってもらった。ケタミン、アセプロマジンほか、電子ジャーナルで調べた麻酔薬数種類を構築し練り薬にしたものだ。麻酔薬を塗った矢的なもので遠くから大型獣を射れば、ものの数分で数時間眠ってくれるから。近接戦になると身がもたないし怪我するし危ないから、エンカウントしたらそれでやり過ごしてどんどん先に進んでほしい。私達の目的は森を驚かすことではない。

「これで獣が眠るようになるのですか。これはいい、では早速、手分けして精霊の封印を捜しましょう」

ネストの五十人ほどの探検隊は、私とエトワール先輩が割り振って五班に分かれてもらった。

獣と互角以上に戦える主戦力のロイ、エトワール先輩、私、兄上様、パウルさんは一人ずつ分散して班わけ。キララも戦闘能力的には十分だけど女の子だし、私が他の班の救援に駆けつける際、私の代わりに班長として捜索を続けてもらうため私の班に。私とエトワール先輩の班に当たったネスト民は気持ちばかり心強そう。

「これが地図です、なくさないように」

森の地図の写本があったので、それをパウルさんが班ごとに一部ずつ配り、何かあったら呼び笛で連絡し合おうってことになった。この笛はネストに古来より伝わる、人間にしか聞こえない周波数の呼び笛なんだと。ピーツ、がSOSで、ピピーツが、精霊の封印を見つけたときの合図にしようと思った。各班に危険が迫ったら、基本的には私が駆けつけて対応する。方位磁石がないから遭難しないよう、木に班ごとの五色のチョークでカウントアップ式に数字をつけ、影のできる方向から方位を確かめながら進むよう教えた。

「では、行きましょうか」ロイが早く出発したがっている。

『精霊の封印が見つからなくても、日没までには森の入口に戻ってきてください。戻ることができなかつたらすぐ救出に向かいますので呼び笛を吹いてください』

エトワール先輩が最後に、掌大の紫の水晶玉みたいなのを各班のリーダーに渡して『お守りだから、絶対になくさないように』とか言っていた。わかった、それ盗聴器でしょ！ とカマをかけると

”盗撮用水晶だよ。半径十メートルの様子が見える、電波は君と私のインフォメーションボード上に転送されるから。1カメが赤井君、2カメが私、3カメがパウル班、4カメがパウル王の息子班、そし

て5カメラがロイ班だ”

インフォメーションボードのライブ画面を見れば、確かに私以外の4つのカメラからの中継が入っている。よっしゃこれで何が起ころうとも平気だ、呼び笛を吹く暇がなかったとしてもすぐ助けに行ける。

時刻はアガルタ時間で午前8時30分、ネストの森入口から班ごとに出発。

『皆さん、決して無理をしないように』 私の心配をよそに

「ただ、皆さんに幸運を」 何か覚悟を決めたようなパウルさん、

「必ず見つかりますよ、落ち着いていきましょう」 とロイが皆を勇気づけ、

「獣は強い、たとえ眠らせることができるとしても油断は禁物です。背後を取られないよう気を付けて下さい」と、実は慎重派の兄上様がロイを諫める。

『では、探索開始。はぐれずについてくるんだぞ』 とエトワール先輩が引率の先生みただ、エトワール班は多分無事に戻ってこれるよ、間違いない。

『さあ、私達も行きましょう』

私達、赤井班は森から海を目指す方角。南西を目指す。

私は地図とインフォメーションボードを照らし合わせながら皆の先頭に立って、ガシガシ草を踏み分けながら進路を取る。カヤっぱい草がびっしり生えてるし、地面も泥濘で足がとられる。木々が生い茂って鳶も絡みついて見通しが悪い。こりゃ皆がはぐれないように休憩を挟んだ方がいいのかもな。なんてなことを考えながら

『何か気付いたことがあったら何でも教えて下さいね』

と、私の班は私含めて十一人、とりあえず顔ぶれを見ておこう。引率責任者だしね。私は振り返って一人一人の顔を見て点呼……と思いきや。おかしいぞ、何回数えてもおかしい。むむむ、と段々と私の眉間に縦皺が寄ってくる。

「どうしたんだ赤井？ 険しい顔をして」

『あれ、もしかして十人しかいません？』

「……む、これは確かに。十人しかいないな」

班別行動始まって十分以内、一人消えた　！！　さつきいたよね？！　ちゃんとさつき私を含めて十一人いたでしょ、私数えたしキララも数えてくれてたよね！？　ちょおおおい！　誰だか知らないけど、はぐれるの早え！！　私、早くも引率者失格。

神隠しじゃん、私神だけど隠してないってば。なのに神隠しなってるじゃん！　神以外が神隠しやっちゃだめでしょ！　他の班はどうなってるの、全員ついてきてる？　私はかなりテンパリながらもインフォメーションボードをチェック。今すぐ迷子センターに問い合わせたい！

もしかしてはぐれた人、他の班について行っちゃった？

よその班と合流して無事ならいいんだけどさ……。

【ネストの森探索隊　総員51名】

1班　赤井班　10名（11名班　うち　行方不明者　1名）

2班　エトワール班　15名（13名班　うち　過剰者　2

名）

3班　パウル班　9名（9名班）

4班　パウルの息子班　9名（9名班）

5班　ロイ班　11名（10名班　うち　過剰者　1名）

何これ明らかにおかしいでしょ、人数増えたり減ったりしてる！
何で全体で2人も増えとるし　！

第二区画の人、あんた鬼や……対処できそうな班にだけ人数増減
させてる。

どっちかつてと不明より過剰の方が怖ええ、エトワール先輩はと
もかく、それ絶対人間じゃないからロイたち全力で逃げて　！

第4章 第6話 悪鬼悪霊と精霊の森

【アガルタ第二十七管区 第3391日目 第二区画内 第2日目】

【総居住者数 2870名(第二区画内 958名) , 総信頼率 99%(第二区画内 100%)】

【アガルタ歴9年106日 午前8時45分】

赤井班、ネストの森探索開始十数分後に班員数が当初の人数より一人減るといふ体たらく。

出足をいきなり挫かれちゃった感じ。

ほかの班はどうなったとインフォメーションボードを見ると、エトワール先輩は速攻増えた人を見破ったみたいだ。見破るの一瞬だったよパネっすわ！

そりゃそうかあの人読心術持つてるし、早速戦闘を開始してる。敵はどいつだ？

でも、え……先輩何を相手に戦ってる？ 誰が増えたのかとボード上を注視しても、私には何も見えてない。そもそもカメラに映ってないよ、超速度で移動してるとかじゃない。透明人間と戦ってるみたいだ、先輩にだけ見えてるのかな。それはそれでこわい。

先輩の所持してる武器について少々触れておくと、構築士は素民に文明発展のヒントを与えるような近代的な道具(武器)を使っただけじゃないという大前提がある。素民に近代兵器を見せてはいけない。その時代の文明レベルに応じたものを使う。となると私らが使えるのは剣、弓、棍棒、槍、そのあたりの原始的なもの。

私の武器は杖(棍棒)以外の何者でもない。

エトワール先輩は実力的には私より断然上なんだけど、立場的に天使だから神様より強かったり目立ちやいけないことで、派手な戦闘は控えて地味にしている。どう地味かというと、素民の目には見えないほど細い導体のワイヤ（材料不明）に熱やら電流やらを通じたものを意のままに操り、攻撃対象をワイヤで足をふん縛って動きを止めるなりして穩便に決着をつける。地味っしょ？ 天空神ギメノグレアヌス役で大迫力弾幕アクションバトルやった頃とは雲泥の差。だからといってしょぼくはない、スマートな印象。

だから素民には、先輩が念力的なものを使って相手の動きを止めてると思われてるんだけど、先輩の獲物、今日はいつものワイヤじゃない。ワイヤの他の武器といえば、司教服みたいな服の下に切れ味鋭い、スローイングナイフを暗器としてシーズごと腰に巻いて隠し装備してるけどそれ使うつもりなのかな。先輩が両手を腰に回しナイフを素早く腰から抜き出す。

右、左と両腕を大きく振ると、何もない場所に向けて十本のナイフが放たれた。速い！ ナイフは先輩のアトモスフィアによって意思を授けられたかのように直線的な軌跡を描き目標を攻撃している……らしい。

らしいとしか言いようがないよ目標が見えねーし。

うーん、敵は先輩の攻撃をうまく躲してるんかな？ それとも仕留めたんかな、やっぱり見えないな。

敵が攻撃を仕掛けてくる前に、手加減なしの先制攻撃を仕掛けて畳んでしまう寸法みたいだ。先輩のナイフは柄にワイヤがついてるので、ワイヤを引き込むと手元に戻ってくる。右手四本、左手四本と、計八本が手元に戻り先輩は指の間にナイフを挟んでる。ってことは二本命中してるのか。先輩は命中したナイフについていた二本

分の蛍光色のワイヤを手放した。オレンジと黄色のやつ。

しゅるしゅると先輩の手を離れたワイヤがのたうち、ほの暗い森の中でも先輩に攻撃のための導を示す。先輩のワイヤの色は十色。なるほど、透明人間にナイフを突き刺すことによって目印をつけ、更にワイヤの色によって敵性が区別できる。

先輩は間髪いれず、命中したナイフによって知覚した攻撃目標に衝撃波を浴びせた。勢いよく掌底を突き出した瞬間、暴風による爪痕が発生。発射地点を中心に木々が爆ぜるように薙ぎ倒されてゆくから衝撃波の通過痕は見えるけど、肝心の敵が見えねーな、カメラが認識できない設定でもかかっているのかな。

追い討ちをかけるかのように、先輩は大きく息を吸い、口元に筒状に丸めた右手を宛がい、その中に息を吹き込むように一気に吐き出す。その軌跡を僅かに掠めた全てのものを凍てつかせる、エトワール先輩の爆氷の息吹だ。木々は薄氷に覆われ凍てつき、急激な冷却に耐えられず縦に引き裂かれ、氷柱が地を貫いて一直線に目標を追尾するかのように柱の道を作る。

音声こそ聞こえないけど、氷が地面を貫いて絶対すごい音がして。なにあの業、ありえないでしょ！ 諏訪湖の冬の湖とかにできる”御神渡り”でしか見たことないよ、いやもうそんなレベルじゃない。氷柱の一本一本が数メートルあるし、どうやって冷却したの？ 液体窒素を構築……だと素民が窒息して危険だし複数混ぜてるっばいなあれ、混ぜるな危険だよ。

構築が速すぎなのは、平時からプリセットで構築とかかけてるからだ、抜け目ねーなあの人。やってることは口元に当てた手の中で迅速構築かけ、高圧で圧縮生成した寒剤か冷媒だかをアトモスフィアに乗せた吐息の爆風で飛ばしてるんだろっけど、……どう見ても

天使が氷を吐いてるよね？ ははっ、なんつーファンタジー。

少なくとも素民にはそう見えちゃってることだろう。徹底的に人間やめてるなー先輩。目標に刺さっていると思しき二本のスローイングナイフが、恐らくは先輩の超冷却にトラップされ中空で凍り付いている。透明人間の封じ込めに成功したっばい。この間、わずか2分。またたく間の決着。

エトワール先輩はスローイングナイフを腰におさめ、目標に飛翔で近づいてゆく。頼もしいその背がライブ画面を右から左へと横切っていた。そこで先輩はフレームアウト。

攻撃目標も捕捉したところで先輩はすぐにカタがつくだろうし、あの人はベテランだからあまり心配してない。寧ろ先輩は私とロイのことがものすっごく心配な頃だろうと思う。つか先輩のことよりロイの班が気がかりだったよ。

今度は5カメ（ロイ班）のライブウィンドウをクローズアップに切り替えて凝視していると、ロイはまだ人数が増えたことに感付いてない。神槍で叢を薙ぎ、後続の人たちが歩きやすいよう草を適当に刈って、時々後ろを振り返りながら先頭に立ち皆を率いている。すぐ後ろにいる年配の御家人が足をとられたら、手を貸してあげてる。何という気配りのできた子だよ。つか早く点呼して？ おたくの班、一人増えてますよ？

ロイは先輩のように読心術持ってなかったとしても、全員に幾つかの気の利いた質問を出せば”最初からいなかった”人間を見破ることができそうだ。

敵が先輩のパターンと同じく透明人間だったりすると厄介だよな

……。

ロイの獲物はもっぱら神槍、飛び道具持っていないから先輩と同じ作戦もできねーし。

私はロイ班のライブウィンドウをズームアウトして、ロイ班全員がフレームに入るよう映し出した。数えてみると、確かに一人多い誰が増えたのかわからないけど、全員人間の姿をしてるし私にも見える。てことは、見破って攻撃を加えた瞬間に透明人間になるのかな。先輩、透明人間と戦ってたし。どうするんだロイ。早く気づかないと隙について背後から襲われるかもしれないぞ！

『ロイさん……早く気づいて！』

私が手に汗握りながら観戦するさ中、ロイは後ろのネスト後家人と談笑中。なんだよ緊張感ねーな。あ、でもその御家人の人、後ろの人にも話しかけてるな。ん？ロイの言葉を伝言してるっぽい？会話の内容を後ろの人に伝えてくれとでも指示したんかな。伝言はロイの後ろの、さらに後ろの人にも伝えられた。そんな伝言ゲームせずに皆に呼びかければいいのに。早く警戒態勢に入らないとヤバイよロイ。

伝言が前から三番目の人まで伝わったところで、ロイが先に行つててくれ、的なジェスチャーをしつつ皆に呼びかけた。何？トイレ？トイレやってる場合じゃないよロイ？皆はロイをその場に残し先を急ぐ。……ロイは四人目まで見送ると、四人目と五人目の間にさつと腕を突き出し五人目以降の列の進行を無言で止めた。

どういうこと？ロイは口元を押さえる仕草。五人目以降の人々に、声を出すなと指示を発してるみたい。不審そうな顔を向ける五人目に彼はぼしよぼしよ耳打ちすると、また伝言ゲームのように後ろに連鎖的に伝わってゆく。背後で行われている伝言ゲームに気付

かず、前に行く四人との距離はどんどん離れてゆく。完全に二群に分かれた。伝言が最後まで伝わると、急に動きがあった。

ロイが突然大声を出したっばい！

彼の号令を待っていたかのように、全員が進行方向、向かって左に全速力で走り出した！？

ただ一人、ロイから情報を聞かされていなかった、前から四人目の男を除いて！

伝言は前から三人目までしか伝わってないんだ。だから四人目の彼だけは何故かその場に伏せた。何で地面に伏せたの！？ とにかく四人目だけ違う行動をとった。彼らとその男との行動の違いが何を意味しているのだろう。四人目はきよきよと周囲を見回して慌てて立ち上がり、皆と同じ方向に疾走するも、一度地面に伏せた手前、出遅れた歩数の差はデカい！

他の班員はロイの指示通り、後ろも振り向かず全速力で森の中を横方向に駆けてゆく。なりふり構わず、重い装備の詰まった背嚢を放り出して駆け出してる人もいる。

突如として始まった十一人の男たちの全力での徒競走！

しかし四人目の男は思いのほか俊足のようで、じりじりと先頭集団との差を詰めてきた。

すると猛烈な勢いで先頭を走っていたロイが急停止をかけ背後を振り向き、四人目を迎え撃つ攻撃姿勢へ転じた。

神槍を両手で進行方向Y軸に掲げると、彼の背後に向けて白い障壁が進行方向Z軸に展開される。

ロイの眼前に出現した、半透明の障壁は。

「なっ！？ ロイさんそれは……」

ギャー！ それって物理結界だ――！？ 何であの子物理結界張れるのよ！ まさか強羅大文字焼さんから奪い取ったアトモスフィアを大切に体内に含ませて持ってたわけ？ いやそんなわけない、別に大したエネルギー量じゃなかったよ？ てことはまたありとあらゆる方法でチャージしてアトモスフィアを蓄えてたのかな。ちよっ……ロイってば神通力に頼りすぎ！ 誰だよロイに神通力の便利さを教えちゃった奴、私かよ。私でしたねすみません。

とにかく彼、神通力を使ってる！

物理結界は術者を中心にドーム状に展開するのが一番簡単だけど、それだと結界中が真空状態になって窒息するからロイは一面のみの壁として展開する。やったことない人はふーん、って感じだろうけど結構難しいんだよそれ。通常の二倍ぐらいのエネルギーと集中力を使う。でもロイはそれに留まらず、面となった物理結界を四人目さんに向け楔形になるよう折り曲げた。

角度鋭っ！ 目視でおよそ35度！

四人目さんは急に止まれずロイの張った障壁に真正面から激突やむなし、うわー大惨劇の予感！！ 国民の皆さん残酷描写があるので手動モザイクお願いします　！？

『っ！？』

血飛沫飛び散るかと思いきや……四人目さんは刃物のように研ぎ澄まされた物理結界に裁断されて額から左右にぱっくりと割れ……スライムのように液状化し溶けて土くれとなり、黒い霧となって蒸

発した！？ いや人としておかしいでしょそれ！ つーことは……人間じゃなかったのか。ロイお手柄、物理結界ひとつで、ろくすっぽ戦わずして決着つけやがった！

物理結界にぶち当たったぐらいじゃ、人間は蒸発しないし威力はしれている。せいぜい血まみれになるぐらい。うん……でもそれは平面だった場合ね。結界の威力は面より線の方が高く、結界を楔形にした場合、衝突時の圧力はZ軸直線上に集中する。全力疾走して壁に激突して死ぬ人はあまりないけど、鋭い刃物に額から全速力で突っ込んでしまえば確実に脳味噌割れる。

だとするとロイ、一人増えたことに最初から気づいてたのか。読心術もなしにどうやって見抜いてたの？ 何なら戦術だけ見ればエトワール先輩より効率いいじゃん。「地面に伏せる！」みたいな言葉が、「走り出せ！」の合図だったのな。ロイは四人目だけ情報を与えないよう、伝言ゲームで前後の人たちに伝えていたんだ。

ロイは僅かな時間で偽者を見破り、戦わずして最も効率的に異形を強制排除する作戦を組み立て、それを敵に気取られぬよう実行してみせる。そこにシビれる、懂れるウツ！ 今のはネタです、古すぎて誰も知らないねスベったね。ははは。

しかし何という孔明の罫。ロイは野外生活時代、ヤスさんと共に狩獵もやってたからその経験が生きてるのな。ヤスさん、獲物に自分を追わせて急に方向転換して攪乱する作戦を好んで使ってたから私の胸中に渦巻いたのはロイ班全員無事でほっとした気持ちが半分、ロイの行く末を恐れる気持ちが半分。彼に秘められた実力は、まだまだこんなもんじゃないよな。彼が神通力を知ったのが僅か一年前。ここ一年で、その力の性質を理解し尽くしてる。

そろそろ彼に神通力の使い方を真面目に教えた方がよさそうだな。

いつか大怪我しそうだし。

尋常ではない適応力、そして状況分析力。彼こそがフォレスタ教授（面識ねーけど）の構築した、特殊任務を帯びた高度学習型A・I・なのか……ライブ画面を逆再生して見る限り、彼は私のように一人ずつ班員の人数を数えて確認していない。

そっか、数を数える必要がないんだ。

振り向いた僅かな時間で情報を完全に記憶し、スナックショット情報並列処理で人数が増えていることに気付く。それがA・I・というものだ。グラフィックを直接読み取り情報を識別、情報は1quibitも失われず正確に彼の脳で再現され、誰が偽物なのか看破すべく演算する。その手の情報処理能力にかけては、A・I・は人間の比ではないよ。彼の情報処理能力の正確性と迅速性は、生脳のコピーでしかない疑似脳を使う私の比ではない。同様に、身体能力も人間の反射速度を超えているし。

来るべき未来。人間の私が彼に敵うんだろうか。

私は彼を止められるのか？ この先暴君となるかもしれない、彼を？

「何を立ち止まって呆けているアカイ、こちらは一人減ったのだぞ！」

ロイの将来を憂慮していると、すぐ耳元で聞こえたキララの声で我に返った。

他の班もだけど、うちの班も大変だ。行方不明者がいたんだっけ。うちの班だけ神隠しになってる。神隠しっていつても私の仕業じゃありませんけど。最初に班員全員の顔を見て点呼しておけばよかつ

たよ。今となつては誰がいなくなったのか分からない。顔を覚えてもいかなかったし。すると、赤井班の中でも最年長っぽい、白髪まじりの長身のおじさんが声を潜め

「神様、これは悪霊の仕業かもしれませんぞ」

とか真面目に言っちゃってる。

『そうですか悪霊の仕業ですか、悪霊なら仕方ありません………
……ん？ ……して、悪霊とはどういうことですか？』

「この森は邪神ギメノグレアヌスに呪われているのです！ 邪神の手先の悪霊が我々を惑わしているのです！」

「おお、恐ろしや恐ろしや」

大の大人が悪霊を信じているという点が滑稽ではあるけど、皆が興奮気味に話してくれる。

それを聞いていたキララ、

「ギメノグレアヌスはアカイが滅ぼしたが、まだ影響力があるのか？」

今なんてつた？ キララがどさくさに紛れてそんなこと言ってる。いやいやいや！ 何ちゃっかり私だけのせいにしてんのよチミ、翼竜姿の先輩にとどめ刺して八つ裂きにしたのはあなただったでしょ！ 全部が全部私のせいにしないでよ人聞き悪いなあ。

でも悪霊、ねえ……。

科学信奉者の私は肯定も否定せずもやや引き気味にコメント。

『悪霊、ですか……』

「そうですね悪霊です！ 神様の御力で何とかありませんか、聖なる力で浄化して退けるとか！」

だからオカルト系は勘弁してつてマジで。私、霊とかからきしダメだつて前言ったでしょ？！ 悪霊退散すればいいわけ？ てか悪霊ってどうやって退散させるの？ 専門家じゃないし悪魔祓いの方
法知らないよ。何なら悪霊に鼻で笑われそう、念仏唱えるつて言つても南無阿弥陀仏なのかアーメンなのかすら分かんない、霊が何の宗教信じてるのかとか気にしたこともないし。あーでも現実世界では霊とか信じてないけど、ここ仮想世界だから悪霊がいても不思議じゃないんだよな。だつて言われてみれば神もいるし、現実世界にはいないよね神つて？ 不適切発言でしたかすみません。

その前に神も霊も信じてないんだけどさ。

先輩が透明人間と戦っていただけに、あまり強くも否定できない。

『……と言われましても、まず私は霊が見えないのです。靈感もありませんし』

「え！？ 神様なのに見えないんですか！？ 神眼とかで見えるんじゃないんですか？」

無茶言わないでよ、神眼しんがんつて何？ 私の目つて視力がいいことを除いては、今のところ集中してやっと人体の中身（骨とか）が見える程度。X線程度の解像度しかないよ。霊も見えないし。

霊？ んなもんでできることなら一生出会いたくありませんよ。

「それは偶々霊を見たことがないだけでは。もしくは神様の御威光で霊が畏まって出てこないとか」

「そうかもしれないな。しかし俺は悪霊を度々見たことありますよ」
ん？

「俺も。ネストにも頻繁に出ますよ」

んん？ 何言ってるのこの方々。

「黒い半透明の影みたいなのだよな、顔が白い。闊歩していました」

んんん？ 本気で言ってる？

「仮面を被った悪霊です、夜中にネストの牧場を歩いているのを見ました」

目撃情報多数じゃんこれどうすんの……黒くて半透明で顔が白いつてあんた、カオナシ的な悪霊なの？ 第二区画の人、悪霊とかやつちやつてるんかなあ。やめてー！？ 千と千尋系の神隠しとかやめて！？ そんなの来たら私どうやって戦えばいいのかわかんない。

「神霊が実在するのですから、ただの霊がいて何の不思議もないでしょう」

誰かがそんなこと言う。いや、そこは不思議です。……てかネスト民、皆揃って私のこと神霊だと思ってたの？ そりゃないよー。ちゃんと血も通ってるし体温もあるよ私、透けてもないし足もある。

『私は実在する神で、神霊的な存在ではないものですから。霊となるとよく分からないのです』

「神様にも分からないことがあるのですか？ 神様と名乗るからに

は造物主なのだと思いますか？　では、神様が”知らないもの”　は、誰が造ったのですか？”

ほかの人が矢継ぎ早に疑問をぶつける。私って造物主……じゃないよね？　ほかの構築士の方々が二十七管区を造ってくださったわけなんだけど。私の仕事はどっちかかってと管理者、統括者って感じ。どう答えても間違ってるような気がして返事に困っていると、

「確かに、天空神ギメノグレアヌスには実体がなかった。神とは、我々が姿を見ることができず決して触れることのできない、人間には届かない偉大な霊なのだと思います。しかし……この神は赤い血を通わせ、肉体を持ち、熱を帯びる。神霊が、人を救うために肉体に宿り、人に近づき、命に近づいたからだ。彼は罪の穢れに満ちた我々を擁き、祝福を授け苦しみを拭い去る。私たちは彼の恵みを、彼の命をこれほど近くに受けることができる、私たちは幸いだ。彼の温かな神体に、人の身でありながら触れることが許されたのだから」

先ほどに引き続き、キララがフオロー。

巫女王をやっていただけあって、神に対する一定の宗教的理解があるみたいだ。

神霊が実体に宿ることを受肉っていうんだっけ。私が透明人間ではないのは、受肉した神だからだ。素民たちと喜びを分かち合い、苦しみを共有するため、そのための肉体。

私の本当の肉体は現実世界、彼らから見ると神々の世界にあって意識だけでログインして……それって霊の状態なのか。私は受肉してこの世界に降り立って民を導いている。そして約束の日（最後の審判の日：二十七管区開設の日）、この世界の民の人口は削減され、神の眷属（現実世界の人間）がこの世界に押し寄せて神の世となり、

千年王国を築く……何か現実世界での宗教の構図と似てる？ 現代社会の縮尺版といえそう。

そう考えると、すげー後ろめたい。だって私がしてるサービスは、遠い未来に降臨するであろう神の眷属（現実世界の人間）のためであって、突き詰めて考えれば素民の為ではないんだよ。

でもそんな事情を知らない彼らから見れば、私って壮絶に神秘的な存在なんだろうな……。そりゃ私だって、現実世界で自称神ですとか言う人がいたら速攻論破しにかかるか、またまたご冗談を……と流すか、ちよつと可愛そうな人かと思つてそつとしいたげるもんな。

にしても私は何の根拠があつて「神」だと素民に吹聴して回つて騙してるんだろ？

奇跡を起こせるから？ 不老不死だから？ そんな表面的なものじゃなくて、このアガルタという死後世界で私が果たすべき「神」という役どころを、少なくとも演技や仕事以上に、もっと精神的、道徳的な意味で深く理解しとかないといけないよな。ロイが暴君になつちやうつていう他管区の話も、どうもこのあたりの「神」に対する素民と構築士の考え方のズレにあるような気がしてきた。

そういうところを、西園さんは私に理解してほしかったんだろうなあ……ちよつと伝わりにくかったけど。彼女、私のことずっと人間扱いせずに「神様」って呼んでたし、そう呼んでたのも意識的になんだろうな。そのためのアガルタ内千年監禁勤務なんだろうし。私の抜本的な意識改革も必要だ。でも、たった今、彼らに必要とされているなら どんな言葉をかけても、彼らを裏切ってしまうような気がした。

「引き返して捜しましょうか、どこかではぐれたのかもしれませんが。ちよつとお前捜してこい」

私が色々考えていた間に、上司が部下に使いつ走り命じてる。ネスト王の御家人みたいな人たちだから、上下関係が割とはつきりしてる縦割り分担型ぽい。あ、でも

『待つてください、単独行動は危険です』

もうこれ以上行方不明者が減ってはいけないから、私は赤井班全員にアナライズをかけて個人データをボード上に取り揃えた。うっし、これで誰が減ってもすぐ気付く。

『引き返さなければなりません、団体行動をとりましょう』

なーに。ものの十分しか歩いてないんだからすぐに見つかるさ。お気楽に考えていた私は見通しの甘さを思い知る。

どこだどこだと呼びかけながら、いつの間にか森の入口にまで戻ってたよ。先ほど皆でプー太郎と総力戦やらかした場所には死骸がある、死骸が二体減って十六体しかないけど……えーと。うーん、細かいことはいいんだよ！

『妙ですね、一列にらんで歩いていたのにどこではぐれてしまったのでしょうか』

迷子さんどこいった？ 私の声って実は数キロ単位で届くから無線放送かけちゃう？ でも獣たちも呼び寄せちゃいそうで迂闊に大声出せない。はぐれたっていうか、百パー拉致られてるよね。困惑していると、キララが何かを思い出した。

「あー……そういえば、一匹グローリアがはぐれてうるちよると浮遊していた場所があったが」

「それは不自然ですね、グローリアはとても臆病な植物なので、付着する相手がいないときは木の洞に隠れているものです」

ネスト民が重要証言。そこじゃん！ 失踪した人の背中にいたグローリア君が宿主を見失ってうるちよろしてたんだよきつと！ そこ行きましようよ！

『その場所はどこでしたか、すぐ戻りましよう！』

キララの記憶を頼りに、彼女の足取りを追いながら再度、森の奥へと進む。

赤井班のメンバーも物音に慎重に耳を傾けながら下草を踏み分けていく。

「このあたりだが……お、まだ浮いていたな」

迷子のグローリア君、真っ青になって綿毛姿で空中を縦、横、斜めとうるちよろしている。

宿主を見失って慌ててるっばい。

私が手を差し伸べるときゅーんとかいいながら、クラゲのような動きでひよひよっと空中浮遊して私の手の中に着地。何なんだこの癒し系植物、現実世界で売り出したらマニア層から人気出そうだ。それはさておき

『グローリア、あなたの宿主とはぐれてしまったのですか』

「きゅんきゅん、きゅーきゅー」

かくかくしかじかで……と身振り手振り（殆ど青蛍光の綿毛がもこもこ動いてるだけだ）で説明してくれる。顔よく分かんないけど申し訳なさそう。”拙者としたことが不覚！”とか言ってる気がする。気のせいかな、ちょっと責任感強すぎだよね別に植物にそこまで期待してないし。

つか私、いつから植物の心も読めるようになってた？ これも伊藤さんのパッチのおかげか。要するに、背中にとまってただけで背中であんなに急に見失ってこの辺りではぐれた、捜してるけど見つからない、かたじけないでござるみたいなこと言ってた。またアキバ系かよ……違うか、武士口調なのか。

すると私の背中にひつついてるグローリアの集団がきゅーきゅー言ってる（？）を責め立てる。”おぬし責任とって自害しろ一族の風上にもおけん！”みたいなこと聞こえたけど気のせいだと思いたい。

『まあまあ、グローリアたち喧嘩しないで。なんにも自害しなくていいですから』

『どうした、何かわかったのか?!』
『宿主はこのあたりのようですよ、捜しましょう!』

インフォメーションボードの警戒画面をサーモグラフィに切り替え私の視界に被るように垂直にセット。こうするとサーモグラフィのように見えるから、人も動物も居場所が詳らかに分かる。怪獣にエンカウントしないよう気を付けながらおっかなびっくり周囲を探索したところで、インフォメーションボードは木の陰にすっぽり隠れてるオレンジ色の熱源を捕捉していた。

『おや』

よかった迷子さん見つかった、ちゃんとはぐれずついてこないとダメじゃないですか！ と、大木の裏に廻って見たら……おっさんが蔦的な植物に雁字搦めにされて木の幹に縛り付けられてる。角刈りのおっさんが身動きとれず簀巻きになってる！ 口を蔦に塞がれて声が出ないみたいだ。もごもごいつてる。

「んーんー！ んんんーんー！ （神様ー！ 助けてくださいー！）」

「な、なんてこと！ 誰にやられたんですか！」

私が蔦を素手で千切ろうとすると、無数の触手が私の手に絡まってきた。

「わっ……ちよ、」

私の体が手前にぐらりと傾く。蔦としてありえないほどの怪力で私の手首に巻きつき、木に縛り付けようとする。蔦っていつても一本一本が人の腕ほどある太さ。それが蛇のように触手をくねらせる。超キメエ！ 誰かがオッサンを蔦で縛り付けたわけじゃなくて、蔦が絡め取って木に縛り付けたみたいだ。蔦の先の吸盤が私の手首にプチプチとくつついて、蛭のような吸盤から陰圧を感じる。血が吸われてる気がする、まさか吸血植物だったりする！？

「や、やめなさい、焼きますよ！」

蔦にやめると命じても聞いたこっちゃんない。そりゃそうだ、蔦に耳があるわけないし。

「か、神様が大変だ！」

ネスト民が応援して剣を振り回そうにも、剣を絡めとられて二次

災害が出そうだ。

『いけません巻き添えをくもらいます、あなた方は離れて！ 手出しは無用です』

「しかし！」

私の背中の中のグローリア君、宿主である私に危険が迫っていると知り綿毛に戻り飛び立ったりエアバッグになったりして、しっちゃんめっちゃかしてるけどあまり助けにならない。何なら鳶に巻きつかれて簀巻きにされてきゅーきゅーいつて降参してる。無茶しやがって……とか言ってる場合じゃない。脅しもきかないとくりゃ、肉体言語で分からせるしかないか。

グローリア君にも犠牲者が出てるし、かくなるうえは有言実行。神通力を纏い掌を数千度に加熱し、高熱で絡みついてた鳶を焼き切った。焦げ臭い煙がその場に立ち込める。鳶は面食らったのか、しゅるりと炭化した触手を引っ込めた。私はその隙に、鳶を焼きながら捕まっていた人を救出。おじさん、血を吸われて脱水症状になってふらふらしてる。私は両手をおわん型にしてポカリスエット的な生理食塩水を掌の中に構築。おじさんの口元に差出し直に飲ませたげる。エトワール先輩みたいに力技で点滴とかぶち込めないからとりあえず水分と電解質補給だ。おじさん、私の手の中から直接がぶ飲み。喉がカラカラだったみたいだ。

『十分に飲んでください、大丈夫ですか？』

「申し訳ない、おかげで助かりました！ 悲鳴を上げる間もなく捕まってしまった。怪獣のみならず、ネストの森にはこのような危険な植物が生い茂っているのです……っ、危ないっ！」

『……っ、！？』

おじさんに背後を指されて気付いた時にはもう遅い。

鳶が私を本格的に敵認識したのか、束になって襲い掛かってきたところだった。

完全に油断をしていた私の腰に、腕に、首に絡みついてきつく締め上げてくる。引きちぎろうにも完全に腕を抑え込まれて後ろ手にされてしまった。頭にも巻きつかれ、声にならない。

「……………！」

「か、神様！？ なんと！」

ネスト民が右往左往してるうちに、大木の幹に押し込められるようにして、大量の鳶にふん縛られて木と同化した状態になってしまった。鳶の中の吸盤から容赦なく吸われてゆく私の血液。やべー完全に息できねー、窒息しても死にませんけど。

「アカイ！ 何をやっているんだ ！」

鳶の塊の外から、絶叫に近いキララの声が聞こえる。

そんなに泣きそうな声で真剣に心配しないでよ、こっちの立場ないじゃない。

ここまでやられたら正当防衛ってことで本気出していいよね。二十七管区の環境に配慮する厚労省職員を演出してたけどもーやめた。私も容赦なく全身に酸化アセチレン炎を纏い、全触手を本気の火力で木を一本分、消し炭にしてやった。服も顔も炭で真っ黒になったけどどうせすぐオートクリーニングされるから気にしない。そして平静を取り繕い、不安にさせていたキララに呼びかける。

『これしきのことで私が挫かれると、本気で思いましたか？』

「そ、そんなわけないだろう！ しかしその姿。アカイではなくてクロイになったな、いい気味だ」

キララがほつとしたような顔を向け、珍しく冗談めかして笑った。冗談か……この子も明るくなったもんだ。あれ、でも私馬鹿にさ

れてんじゃん？

『キララさんキララさん、私は黒くても赤井ですよ』

「ふふ、違くない。アカイはアカイだ。黒くても、白くても、アカイはアカイだ」

私がいつものように微笑みかけると、安堵して彼女はまたくすりと笑った。

しかし……その穏やかな微笑が凍りついたように引きつり、キララの青く透き通った瞳がいつになく大きく見開かれた。彼女の異変につられるように、私も背後をゆっくりと振り向きキララの視線の先を辿る……

私たちの背後には、不気味な黒霧が辺り一面に立ち込めていた。視界が奪われ、方向感覚を失う。霧を掻き分けるようにして、何者かがこちらに歩み寄ってくる。黒い影だ……やがてその影が私とキララ両者にとって、人として識別できるほどの距離となったとき

「母上……様？」

「に、西園……さん？」

私たちは同時に、夫々異なる女性の名を呼んでいた。

そこにいたのは、黒一色のスーツに身を包み、髪をまとめ黒縁メガネをかけた現代女性。

口元に微笑みを浮かべ、何かを訴えたそんな視線でこちらを凝視している。

間違えようもない、私の担当官。

西園 沙織。

なぜあなたが、ここにいるんだ！？
そして何故、キララは彼女を ” 母上 ”

と呼んだんだ

？

第4章 第7話 キララの過去と待ち受ける試練

【アガルタ第二十七管区 第3391日目 第二区画内 第2日目】

【総居住者数 2870名（第二区画内 958名）、総信頼率 99%（第二区画内 100%）】

【アガルタ歴9年106日 午前9時48分】

『西園さん！』

ネストの森、濃霧の低く立ち込める中、西園さんはその場から動こうとせず、困惑したように辺りを見回している。私たちの姿が視界に入っていない様子。声を張って、彼女の名を呼びながら更に距離を詰める。

『……何故あなたがここにいらっしやるんです』

声は届いているだろう。しかし、この無反応はひどい。久しぶりなのに私のこと忘れちゃったんですか西園さん。思わず駆け寄ろうとすると、キララが「母上様……」と、今にも泣き出しそうな声で呟いた。

彼女は何を言っているんだ……キララのカアチャン、いや母上様はずっと以前に他界していたじゃないか。

グラランダ民によって手厚く葬られた陵墓もグラランダの郊外に存在するし、私は彼女と共にグラランダの共同墓地の中にある両親の陵墓に手を合わせに行った。墓碑銘によると彼女の母親は享年、二十四歳。夭逝すぎるだろ……って思ってたら、エトワール先輩曰く彼らは日本アガルタの蘇芳すほう工学博士によって開発された日本の高度学習型A・Iらしい。マジですか。それロイだけじゃなかったんですか。

スオウという血系は女性のみアトモスフィアの感受性が高く、強い巫力を発揮する。

ただし、短命と引き換えだ。

力の強い巫女王ほど天逝するようで、彼女らの平均寿命は二十五歳。彼女の母親も巫女王として天空神ギメノなんちゃら（エトワール先輩）のアトモスフィアを元手にグランダの統治をしていたけど、八年前に鉱山ガスへの引火によって起こった市街地の大火災を命がけで鎮めたって話だ。

彼女の母親は限界以上の力を酷使して死去、父親もほどなく病死。そんな、キララの母親なんだ。

でも西園さんを見てカアチャンと間違えるとか。どうみても違うじゃん。……と思いきや、彼女は戸惑う私の真横を過ぎ、人気のない方へとふらふら引き寄せられてゆく。

平時は鷹揚自若としている彼女なのに、判断力を失っている。

『キララ……さん？ 何をみているのです』

彼女は何を見ている？ 私には見えていない人物がいるとしたら何だ。幽霊？

一歩先に進むにつれ彼女の足が徐々に地面へと沈んでゆく。おかしいぞ。この森は苔むした土に覆われている平地で、高低差はなかったと思う。なら何でキララの足、踝まで地面にめり込んでる？ 地面は窪んですらいない。

地面を足が突き抜けて、周囲の景色が波紋のように歪んでる。グラフィックバグ？

『西園さん、ちょっとそこで待ってて下さ……』

西園さんの姿は既になかった。私は今にも見失いそうになるキララを追い、同時に西園さんも捜そうと駆け出す。西園さん、スーツだったけど知ったこっちゃない。だが数歩も走らないうち、皮のグラディエーターサンダルを包まれた私の足先全体に不自然な冷感を覚えた。

何だろう、水か？

立ち込める濃霧を神通力をこめた息吹で吹き飛ばしてみれば、苔に限なく覆われた地面が見える……。キララと同じだ。私の足は地面を貫いて地中にめりこんでいた。

即座にインフォメーションボードを手元に呼び、周囲の状況を簡易解析。まず明らかになったのは、向かって進行方向にキララ以外の熱源がないこと。全てのアバターは例外なく熱量を持つ、それは私たち構築士も素民も同じ。西園さんがここにいるということは、人一人分の熱源がなければならぬということだ。

インフォメーションボードは客観的事実だけを示している。

私の目に見えている西園さんも、私には見えないキララの母親も、ただの幻覚だということだ！

あぶねーあぶねー、もろ幻覚に引っかかってたじゃん私。西園さんに会えなくてすこぶる残念だけど。私たちの脳に働きかけ、幻覚を見せる条件は何？

電磁波、磁気異常？ 思いつく限りのパラメータを並列解析しても、どれも異常な数値を示してはいない。

ではやはりシステム側の問題なのか？ 焼人が見落したグラフィックシステムのバグが多発しているエリアなら、長時間留まるのは危険だ。ネスト全体で心霊現象が起きているという目撃情報も、この現

象を反映しているっぽい。

一刻も早くこの場を離れなくては！

『キララさん！ そっちに行つてはいけません。私の声が聞こえますか！』

もう腰まで地面に埋まっているのに、キララは異変に気付いていない……母親の幻を知覚して興奮状態に陥り、周囲が認知できなくなつてゐるんだ。

「母様……再会の日を夢見ておりました……」

「おい、何故そっちへ行くんだ！ そっちには何も無いぞ、戻つて来い！」

「あいつ正気じゃない！」

彼女の異様な行動に気付いたネスト民も必死に引き留めようとするけど、完全に無視を決め込んでいる。

『引き返して！ それは幻です！ あなたの母親は亡くなっているではないですか、現実を受け入れてください！』

私は飛翔で追いつこうとするも、どてつと前につんのめつてコケた。あらー、飛翔術を無効化される。自己解析をかけると、神通力が100%チャージから0%になっていた。

『力が……消えました』

ぞぞぞ、と背筋を氷で撫で上げられたような錯覚に陥つた。

本格的にバグエリアかよ、構築士の神通力が及ばないのか。飛翔を断念し、ばしゃばしゃと地面をかき分けて彼女を追う。しかし判断が一瞬遅く、キララの姿も忽然と消えた。

更に最悪なことに、インフォメーションボードが半透明に！ や

ばいやばい。A・I・が踏み込んできたことで予測不能なバグの連鎖反応が起こっている。

「神様、どうなされますか」

「何とかありませんか、森にかけられた呪いにやられてしまったのかもかもしれない」

私は白衣の帯をぱらりと解き、ネストの民に帯の一端を放り投げた。

『これをその樹にしつかりと括り付けてください』

ネスト民の誰かが受け取り、大慌てで大木に巻きつけてくれた。

『解けないように見ていてください、頼みましたよ』

私が腰に巻いていた三メートルばかりの白衣の帯は伸縮性があって切れないうえ、何メートルも伸びるから命綱となる。

帯の端をきつく手首に巻きつけると、大きく息を吸い込んだ。私の肺活量は人の二倍、8000mlぐらいだ。限界まで呼吸し、更に空気を圧縮して吸える限り酸素を取り込む。

息を止め、不気味に波立つ地中に意を決し突入。全身が圧迫感で締め上げられるけど、地中は真つ暗で何も見えない。視界は完全にゼロ。地中突入と同時に、インフォメーションボードの映像が大きく乱れ、かき消えた。あーあーボードがバグの影響で消えちゃったよ。こうなると私の勘だけで、真夜中の海中で彼女の気配を探るよななもの。

ここは環境パラメータが整っておらず酸素は皆無だ……。数分もすれば彼女は窒息死してしまう、私は神通力がないので酸素を与えたくても構築そのものができない。地中にはもったりと皮膚に張り付く液状の流体が存在し、対流らしきものが起こっていた。流れは

速い、流速3m/秒以上は絶対いつてる、そのせいでキララに近づくことができない。私たちはすり鉢状の空間の底に引き寄せられている。

まずい、早くキララを見つけて浮上しないと。

突入して一分、彼女の気配を近くに捉えた。私は咄嗟に手を伸ばし、彼女の足首らしきものをつかむと手繰り寄せ抱き締める。彼女は窒息状態で酸素を求め、もがきはじめている。斯くなるうちはやるっきゃないよね、人工呼吸。ちょ、国民の皆様、強制猥褻とか叩かないで。役得とか思っていないですよ。いや思ってる、思っていないとかキララに悪いし。

後でキララに、まだ誰ともキスしたことなかったのにもうお嫁にいけない責任とれ！ とか糾弾されるかもだけど、

ノーカウントツ……！ 私人間じゃないからノーカウントツ……！
……ネタやってる余裕ないねこれ。

私も神通力を剥奪された今は人間と変わらないから息苦しいんだけど、不死身の自分のことは後回し。ノーカウントと連呼しながら無心で彼女の唇を奪い、私の肺の中に圧縮してきた酸素を残らず彼女に与える。彼女は気を失ったまま、私の息を受け入れ呼吸が続いた。

早く地上に戻らないと……手首に巻きつけていた帯を手繰ろうとすると、

手ごたえは皆無。無情にも命綱は切れていた。

神通力を失った帯はただの帯でした。バグの渦の中で翻弄されているうちに、帯の強度も失われていたようだ。

私達はもう、濁流に翻られる木の葉と変わらない。
バグだまりの中に完全に啜えこまれてしまった。

キララを庇いつつ広大な液状空間の中を錐揉みされ、心細さに押しつぶされそうになりながら現実感もなく下降するに任せていると、何だろう、どこからともなく声が聞こえる。

「泣くなキララ、我が娘よ……スオウ一族としてこの世に生を受けたからには早世の定めにある。ならば民の盾となり、役目を果たすことができたよ、そう、喜んでほくれまいか」

女声の幻聴だ……スオウってと、キララの記憶なのかな？

私は読心術を無効化されているし、彼女はA・Iだから夢を見ないので彼女の夢ではないよな。キララはまだ、母親の幻を見せられているのか。

私が彼女の身体に触れているので、彼女の見ている幻が断片的に私に流れ込んできているみたいだ。仮想世界における自他の境界線が曖昧になって、相互のデータ再生が不安定になっているのかな。正規のエリアではないし……何が起こっているのか分からない。

私の擬似脳とキララのプログラム、ぶっ壊れてたらどうなるんだろう。廃棄処分にされたりして……。身の危険を感じている間にも……幻は続いている。

先ほどとは違う、あどけない女の子の音がする。これはキララの声だ。

「母様。グラндаは、赤い邪神に呪われているの？ 呪いはいつになったら解けるの」

話を盗み聞こうともつと意識を集中すると、キララの意識を映像として読み込むことができた。……彼女の母親の死に際の光景なんだろうか。

吹き付ける熱風、焦土と化したグランダの火災現場、瓦礫の上に息も絶え絶えに横たえられている、肌の青ざめた女性。煤けた金髪に引き裂かれ焦げた黒衣…… 意思の強そうな瞳、通った鼻筋、ふくよかな唇、真っ赤に火照った頬。キララの生き写しだ。私の意識はキララの視線に宿り、彼女の在りし日の母親を見下ろしているらしい。その美貌に似合わぬ雄々しい口調は、巫女王としての使命感を端的に表している。

「もうここまで、まだ炎が燻っている、早く逃げなさい。ここでお別れだキララ。私には邪神を退けることができなかつた。しかしいつの日か呪いを解くことはできる……そう信じている。私がいなくなってしまうたら、お前がスオウを名乗るのだよ」
「嫌だ……そんな嫌だ。名前なんていらぬ。いらぬから、ずっと一緒にいて……」

彼女の受け継いだ名前、母親の形見だつたみたいだ。
狼狽するキララを、女性は最後の力を振り絞って撫でていた。私はその感触を、言い知れぬ疾しさとともに記憶に焼きつけた。

「スオウの名と血脈は、代々に受け継いでゆかなくてはならない。
天空神様と共にグランダを守るのだ」

母女王が息を引き取る前に、キララの強い拒絶があつて意識が断絶する。と同時に、場面が切り変わった。……数々の供物が捧げられた、例の占いの館じみた呪術部屋に意識が転送されていた。

彼女は母親の崩御を受けて巫女王となり、天空神の啓示を聞いた

ようだ。

灯りの落された、牢獄にも似た冷たい部屋の中。

黒い布の掛けられた石造りの祭壇。その上に銀の盆、黒くきめ細かな砂が敷き込まれている。契約のスオウ一族の血を祭壇の杯に捧げ、ギメノグレアヌスとの交信を試みる。彼女の手首が、朱に染まっていた。

彼女の祈りにこたえ、グランダの古代文字がすらすらと黒砂の上に描き出された。

蘇芳か、しばらくだな

天空神が加護を授けるのは、スオウという血族であってキララ個人ではない。

「母は……先王は崩しました」

これは異なことを。蘇芳は蘇芳だ

「……………っ、……………仰せの通りです。天空神様、グランダにご加護を」

天空神を祀った祭壇に祈りを捧げると彼女は巫力を得るが、神託を聞いたたびに自らを傷つけなければならない。

そうやって、彼女は邪神との戦いに備えてきたんだ　彼女の全てをなげうって。

過酷な運命のもとにあるスオウ一族のアガルタにおける役割は、ずばりロイの代替。

他管区では暴君としての予定運命が待ち受ける高度学習型A・Iのロイ。ロイ並みの性能で安全かつ強力な、構築士の新しい相棒が求められている。……ロイの反省を生かし、スオウというA・Iには幾重もの安全対策が施してあるらしい。

不老ではなく、構築士が屈服させやすい非力な女性型で、構築士への信仰心に厚いこと。

スオウらは悪役構築士の管区で試験運用されてからハイロードに引き渡されるケースが多かったけど、どの管区でも問題なく運用されている。ただし個人ではなく血族としての運用だ。スオウ一族はハイロードの片腕として、どのエリアでも重宝されている。問題を起こす前に、巫力の行使によって寿命が尽きてしまうからだ……。

キララを長生きさせてあげられないのか、ってエトワール先輩に尋ねたら、

私たちが神通力を付与せず巫力を発揮させない。特殊型A・Iとしての使命を放棄させ、汎用A・Iと同じように扱えばいいと言っていたっけ……

彼女が平凡な人生を全うすることを、伊藤さんたち上層部が許してくれるかは分からないけど。

エトワール先輩は、キララを私に引き渡すこと前提で悪役やっていたから、キララの特種A・Iとしての安全性を試験するためにアトモスフィアを与え、巫力を発揮せざるをえない状況下に置いた。キララに最大限の肉体的負荷をかけてテストすべきだったらしいけど、先輩は人道的見地から規約に密かに背いていたらしい……でも酷いよ。

というわけで、キララはもともと短命の一族の末裔なんだ。

こんなところで死なせちゃいけない、彼女を待ち受ける運命がどのようなものになっても、納得のいく形で人生を終えてほしい。

グランダの巫女王、その帰りを大勢の彼女の民が待っているんだ。どうすべきか。

私は神通力を失ってしまったし、私が彼女に酸素を供給してるといっても消費してきてる。私の肺の中の酸素、22%ぐらいあったけど、0%まで使えるわけではない。酸素濃度18%未満になると人は意識障害を起こすし、10%切ると昏睡、それ以下になると死亡する。よって、酸素は数パーセントしか消費できない。

非常にまずい。

弱音を飲み込み、現状を打開すべく、息止めをしたまま目を皿のようにして辺りを見渡した。果たしてこの流体の中は完全に暗闇なのか、明度に濃淡はないか。キララに意識を向けながら情報を必死に得ようとする。

私たちは既に何十メートルか潜ってるんだろう、全身がきつく締め上げられる。

キララの体に、肺に、水圧という名の過負荷がかかってくる。

地球上なら十メートル潜ると、およそ一気圧がのしかかる。

アガルタは違うのかもしれないけど、それに匹敵する殺人的な水圧だ。

日頃からいかにインフォメーションボードと神通力に頼り切っていたかを思い知らされた。神通力がなければ、私は悲しいほどに無力だ。肺に残っていた最後の空気を、キララに残らず与えた。する

と気体を失った私の肺に周囲の液体がなだれこみ、私の肺の中の PFC は外圧と等しくなった。

ああ、しかしこちらの方が楽だ。

でも……何で？

何で楽なの？ おかしいでしょ。神通力もないんだから窒息して
るのに。

そのとき私は、私たち二人を飲み込まんとするこの場所が決して
バグの産物ではないということに気付く。

殆ど直感だった。ボードがないので真相は分からない、或いは見
当違いである確率の方が高い。

しかし私の息は続いている。

この溶液は、ペルフルオロカーボン（PFC）の一種じゃないの
か？

PFC はフッ化合物で、無味無臭。水より粘性があり、H₂O
の二十〜三十倍も酸素を溶かす。何で PFC だと決め付けるかって
と、息ができているから。

人は何も、気体を吸うことでしか呼吸できないわけじゃない。酸
素が溶けていて浸透圧の調節された毒性の低い流体になら、割と何
でも適応できる。肺をこの溶液で満たすと、液体呼吸ができるんだ
よ。PFC は酸素溶解度が高いから、キララの肺は肺胞から直に血
液中に酸素を取り込んでくれる。現代でも PFC（他には細胞の保
護成分が色々入ってるけど）が潜水時に肺を守る為に使ったり、戦
闘機乗りが耐圧訓練をしたりする用途がある。

なら、肺が水圧でぺちゃんこになる前に、キララに直ちに液体呼

吸を開始させるまで。

肺の中を完全に液体で満たす完全液体呼吸は負担が大きいかから、部分液体呼吸で……とか思ってたなら、キララが水圧に耐えかね、ゴボツと大量に息を吐いてしまった。そりゃそうなるか。

でも反射的に大量の液体を吸い込むんだので、肺の内部が空気からPFCに置換された。

よし、うまく水圧を受け流した筈だ。

んー。ここまではいいんだけど、完全液体呼吸は空気より密度や粘度の高い液体を肺の中から外へと出し入れしなきゃいけないから、実は空気呼吸するより大変だったりする。

はい、自分で頑張つて息してね！ つてわけにいかない。完全に肺の中のPFCを置換することができなければ、二酸化炭素の溶解したPFCが肺の中に溜まって窒息する。毎分5リットル以上の液体を肺から出し入れする必要があり、液体呼吸が不完全だと命取りだ。だから人間には呼吸補助装置なしで液体呼吸を続けることはできない、呼吸を補助したげる必要がある。

しかし私が何とかすれば、彼女は生き延びられる。てなわけでこれはバグなんかじゃない。

第二区画の構築士さんの仕業とみて間違いないようだ。

彼女にとってはある種お遊びに過ぎない、ある意味私とキララに恐怖心を与えるための茶番。

ここは悪役区画ではないので、過剰演出というより……私、値踏みされているんだろうか

……その可能性に思いを巡らせた途端、何かが滾る。

ずくん、と背中が疼いたような気がした。いや別に邪気眼とかじゃない。

背中のパッチは、仮想世界において存在する筈のない、私の生理的情動に呼応しているようだ。

感情をコントロールしないと。伊藤さんは”強力なパッチ”だと言ってたし、下手うつと暴走しかねない。

キララの液体呼吸を助けながら、集中力を取り戻し周囲の環境に向け続けた。

私たちはあてどなく漂いながら下へ下へと沈んでゆく、臃げながら水底が明るくなってきた。出口か……でも水底に？

覚束ない薄明かりによって……突如として水底が出現し視界が確保された。

全景は見えないが、私たちは何やら水中遺跡じみた石造りの壁に囲まれていた。幅五メートルほど、縦に続く円筒状の巨大水路を下降りしながら押し流されていたんだ。縦坑の地下水路は、どうやら行き止まりのよう。底部は、白い御影石のような石材が敷かれている。床面はほわんと仄白く発光しており、径五十センチほどの穴が底面全面に疎らに穿たれ、穴を通過する水が勢いよく水流を生じていた。

その石床には穴を塞げとばかり、マンホールの蓋のような金属製の蓋が散在している。数えてみると蓋は十個だ。穴をふさげば、水流が堰き止められ、私たちは泳いで縦穴を浮上、ここから脱出できそうだ。

穴をくぐってその先に進むこともできそうだけど、

私はキララの命を預かっている、退却あるのみだ。
キララの息継ぎを手伝うのを忘れず、私は一個一個着実に穴に蓋を重ねてゆこうとした。

しかし……僅かずつ蓋の大きさが違うようで、うまく合わせる事ができない。蓋の微妙な大きさの違いは、肉眼では見分けがつかなかった。

成程、穴と蓋が鍵穴と鍵の役割を果たしているのか。

といつても、蓋の配置に何か法則でもあるんだろうか。

全ての穴は、床の上に薄く引かれた直線上にあり、それは星型に配置されている。

まさか何か意味がある？ 図解するところだ。

位置がずれてたらごめんね。要するに一筆書きした星型の、全ての頂点と交点にあたる座標に穴がある構図。

は中心部にある石版。凝った彫刻が施されている。何か仕掛けがあるのかな。

石版は、モンジャではすっかり見慣れた二つの植物を象っていた。

両者とも、私もメグもよく知っているやつだよ。カルーア湖岸に広く生育している多年草で、十一月ぐらいにすずらんのような白い花をつける。あと、メグの好きな葉物野菜のシクワ菜。

床上に転がっているマンホール状の茶褐色の円蓋に触れて検めると、豪華な植物のレリーフが刻まれている。全て植物のレリーフ。一貫性があるな。

ほら、これもさつきネスト台地の畑に咲いていた芋的な植物の花じゃん。今の時期が旬だつて、ミシカが嬉しそうに言つてたっけ。私は普段から植物に興味を持って目を配っていた、というか素民が食べられそうなものを血眼になって探していたから、アガルタの植生も大体把握してる。

全ての植物のレリーフの相違点を見つけるとすれば……開花時期が違っているぐらいか。

何だろこのパズルゲーム。推理物？ 無理無理無理、できるかつて！ バーローwww の人ならできるのかもしれないけど。

紙とペンもなく、液体呼吸しながらやれとか鬼畜すぎでしょ。呼吸だけで必死なのに、頭も働かないつてもんだ。

でもさ、アガルタの地に存在する植物を暗号に見立ててるってことは、必ずしも構築士向けのパズルではない。

構築士向けの情報なら普通に日本語でこうしろつて書いてあるだろうし。素民にも理解できて、クリアできる難度設定なんだろうね。見れば見るほど魔法陣っぽい配置だよな。クリアしたら魔法使えるようになるわけ？

アガルタ九年目にして遂に魔法が……いいよ別に私そんなの求めてない。

んー、でもこの陣形はまさしく魔法陣的なアレ。

第二区画の人、明らかにファンタジー好きそうだしやりかねないな。

魔法陣……？ 星型で……中央部に二つの植物のレリーフ、七月と十一月に咲く花、周囲に十個の蓋……。

私は全ての図柄を手早く確認しあることに気付くと、もの一分以内に、この難易度高すぎな貝合わせに成功する。

間違ってたなかった。これ魔星陣（五芒星）だったんだ。

魔方陣の一種だ。”魔法”陣じゃないよ。

植物のレリーフの開花月に数字をあてはめて、五芒星の一直線上の和が全て等しくなるようにすればよかったんだ。

何で気付いたかっていうと、1から12の数字に対応する植物しかなかったし、7と11は中央の石版に刻印されていたから使えない。

解答は複数あるけど、配置パターンは規則に従っている。私の解はこれ、一辺の合計は24だ。

1

2

8

9

5

解の提示により水流は止まり、私たちは浮上する間もなく星型の中央のレリーフから発せられた閃光に包み込まれ

急速にホワイトアウトした視界が回復してくる……。

気が付くと、私とキララは揃って見知らぬ部屋の中にいた。ここは……内意識の世界を模したどこかなのかな。パズルを解けば元の世界に戻るのかと思いきや、別の場所に閉じ込められている。先ほどとは一転、今度は白壁に囲まれた場所で、PFCは充填されていない。私はキララを手放してはおらず、しっかりと両腕の中に抱き込んでいた。

「げほっ、げほっ！」

キララが急に噎せて、PFCを吐き出した。

「だ、大丈夫ですかキララさん。吐いて、全部残らず吐いてください」

私は彼女の背中をぽんぽんと強く叩いて、PFCの液体を残らず吐き出させる。白いニットワンピースな民族衣装はずぶ濡れ、まとめ髪はPFCのせいで乱れ放題、オーバーニーの皮ブーツも濡れてぐしょぐしょだ。

「はあっ、がはっ、はあっ……ぐっ」

涙目になりながら咳き込んだ後、身をもたげた彼女は相手をよく確かめもせず私に抱きついてきて、「母上、母上！生きておら

れてよかった」と無心になって連呼する。そっか、直前まで母上の幻を見ていたんだっけ。私のこと母上と間違えて甘えてるのな。私も圧倒されてしまって、どう言葉をかけたらいいいのか分からなかった。

「母上え……母上。生きておられるのなら、何故お会いになつて下さらなかつたのですか」

子供みたいな声を出すなあ……今まで相当寂しい思いをしていたんだろうな。誰にも本音を言えず、弱みを見せることもできず。彼女が私だと気付いていないのなら、暫しの間、黙って彼女の母親役を務める。

「私がどれだけの寂しさ、心細さに耐えて……あ……」
『うっ』

やべっバレた、速攻バレた。まあバれますよね。彼女も私も双方、体裁が悪いのなんの。

「な、なな何だアカイか」
『す、すみません私で』

「という事は……母上様の幻だったのか……私としたことが惑わされて。情けない、愚かしい。それもこれも、心が弱いからだ」

彼女はあからさまに落胆した後、いつものように皮肉っぽく苦笑してみせたけど、悲しみの色を隠すことはできなかった。なんていうか、ごめん。君のお母さんじゃなくて。赤面した後、ちらりと流し目で私を見る。そんな目で見ないでよ。

「私のみた幻を、アカイも見ていたか？」

『はい……はい。私はずっとあなたと共にいましたよ』

「私の一族は短命なんだ、母上はその定めから逃れられなかった。

私も恐らくそうだ」

長い長い沈黙が差し挟まれる。君を呪縛から解放すると言ってあげたいけれど、プログラムとしての寿命が定められているなら私にできることは少ない。

「だから怖いんだ。不滅の命を持つものにはわからないのだろうな、ちっぽけな人間の、ちっぽけな命への執着は」

私は黙して、叩きつけるような彼女の思いを受け止めた。いや、ただ聞いてあげるしかない。彼女は私に見放されたと感じているだろうか

「すまない。弱みを見せて。こんな身の上だ、早く世継ぎをつくらねばな……私の命が絶えてしまう前に」

「いけません、まずはあなたの人生を考えてください。あなたがなお孤独に震え、心の内に癒えない傷を抱えて、それが消えないでいるなら」

私がこれから彼女にしてあげられることは、さほど多くないかもしれない。それでも、彼女の支えになるぐらいはできる。口先だけではないよ

『どうか私を親代わりだと思ってください。精一杯こたえますから……ね』
「……アカイ……私は」

私とキララの間で交わされていた、割と深刻な会話を遮るようにピッ、と、この場に不釣り合いな電子音が鳴った。

おやまあ、私の左真横、銀色のテロップが強制表示されている。
何でバラエティ番組風のテロップなのこれ。ちよつと待ってよ現実
世界からの入電？ 今いいところなんだから自重し……

【第二区画中枢 第一試練が突破されました】

【このまま第二試練に臨みますか？】

第4章 第8話 地雷原

【アガルタ第二十七管区 第3391日目 第二区画内 第2日目】

【総居住者数 2870名(第二区画内 958名) , 総信頼率 99%(第二区画内 100%)】

【アガルタ歴9年106日 午前10時15分】

私とキララが水中パズル地獄を突破したのも束の間。

【引き続き第二試練に臨みますか?】

バグじゃなくて試練だったのか。精霊さんに会う為の?

まずこの情勢でコンテニューはキツすぎる。装備や体調、人員を立て直したい。神通力無効化されるなら、カスタマイズした武器や道具を持ってこないと。大体これネスト住民参加イベントになってねーじゃん私とキララしか参加してないんだから。私の真横に浮かんでいるバラエティっぽいメッセージに直接要望を出してみる。

『日を改めて臨みたい場合は?』

【試練の地は】三

三三三【変更となり】

三三三【第一試練からの】

一一一

【挑戦】

三三三【となります】

今度は代ゼミのCMっぽい段組とゴシックフォントになって文字が左右右下左に飛んでった。東大代ゼミ!京大代ゼミ!東大京大阪

大代ゼミ！ みたいなのいらないよ……すみませんね北大で。フロント凝らなくていいから。表示普通でいいです、標準で。凝られると逆に見辛いです。

ツッコミもほどほどに。ボケは用法、用量を守ってね。じゃないと私、ネット上で”ギャグが寒い”、”よくスベる”みたいな評価受けてっから。自分の名前でぐぐっちゃいけないって本当だね。面白いギャグ教えてくださいよネットユーザーの皆さん。私だって好きで十年もギャグ滑らせてるわけじゃないんだよ。

とにかくここで中断するとまた液体呼吸地獄のうえ、場所が分からなくなるのか。

』では続行します』

【300秒後に開始です】

秒数指定とか細いな！ 引き続き神通力無効っばいけど仕方ないか。数秒経つと文字は消え、何の変哲もない白壁の部屋に戻った。部屋の広さは二十畳程度。天井の高さはどうだろう、私の身長の一・二倍、以上4メートルかなあ。

あらぬ方向に独りごちていた私をキララは心配そうに見つめ、私の額にぺとっとな手をあてた。冷たくて気持ちいい。あ、でも彼女は全身ずぶ濡れだから、手が悴んでいる。早く体乾かさないと風邪ひいちゃうかもな。どうしたのかと思ったら、彼女は私の額を軽くぺしぺしと叩いた。やめてやめて、おでこ広くなったらどうするの。生え際大事だからやめて。

「平熱だな」

ん？ 熱とか出てないですよ。私は目が上に寄りそうになりながら、キララの手を注視する。

「調子が悪そうだと思ってな。アカイに倒れられると私もこの世界の民も困る」

それは私だって困ります。身体が資本ですからね。

『私は元気ですよ、なんとかは風邪を引かないですからね。キララさんこそ体が冷えてはいけない。早く元の世界に戻りたいですね』
茶化してやり過ぎそうとすると。じつ、と逃れがたい碧色の瞳に射抜かれる。吸い込まれそうに透き通った青。彼女の瞳に宿る力の強さ。つい先ほどまで母上母上と頼りなく連呼し、弱さを曝け出していた少女のそれではない。

「誤魔化すなよ。力が使えないのではないか？ 神気の放散が絶たれているな」

むむー、鋭い。

気の流れ（？）らしきものまで読めるのか。私はボードがないと読めないな。

巫女一族として凄惨な訓練してきただけある。

『問題ありませんよ。何とかしてみせます』

キララはやれやれと左右に首を振り両膝をつくと、すらりと直刃の長剣を抜き私に柄を握らせた。そういえば彼女は短剣二本と長剣を帯びていて、長剣は背中に背負ってきた。戦う気満々だ。私が剣を返そうとすると、

「持っておけ。片刃の剣だ、両刃の剣を好まぬだろうからな」

これはかたじけない。片刃だと峰うちできますからね。気のきく子だ、キララって敵にすると怖いけど味方になると構築士にとって頼もしい存在なんだな。これが少年漫画的お約束な、一度戦って負かした敵が味方になったときの抜群の安定感？

「我々はどこに迷い込んでしまったのだろう。この世のものとは思えん場所だが、出口はどこだ。何も知らないのか？」

あと数分したら、第二試練とやらが開始されますけれどね。平常心、平常心。

『何やら試練が始まるようです。試されているのは、あなたではなく私のようです』

「試練とは何だ、敵襲か？ 神通力が使えぬ状態でか？」

キララは表情を険しくし短剣の柄に手をかけた。私も立ち上がり、白衣の裾や髪の毛を雑巾のように絞り上げ水分（PFC）を落とし、僅かばかりでも身体を軽くしておく。その場でぴよんと跳躍すると、人間時代の私のジャンプの感覚が蘇る。うん、神通力のアシストゼ口だねこれ、体が重いよ。

「重そうだな。敵襲だったらどうする」

『何が起ころかはまだ分かりません。敵襲かもしれない』

「アカイ、汝の神体に神通力はまだ残っている。それを私に預けてくれ」

神通力を巫力に変えて戦うつもりなのか。ロイのように？

何を言い出すのこの子。寿命縮まってしまっつて、自分で分かっているじゃない。

『それはできません。その理由はあなたもよく分かっている筈です』

「そうだろうか。ギメノグレアヌスの力を受けたスオウの者は短命だったが、アカイの力はそうではないのだろう」

何故なら汝は、邪神ではないからな。

キララは感傷を込めた、聞こえるか聞こえないかの小声でそう呟いてくれた。ありがとう、その気持ち嬉しい。でも私は、”神通力を与えさえないければキララを長生きさせられる”と言った先輩の言葉を忘れたわけではない。複雑な表情をしていると。

「アカイはギメノグレアヌスを一度滅ぼし、転生させ使役してもいいわけではないか。ギメノグレアヌスの力とアカイのそれは、本質的に違うものと考えられる」

そうそう。私一度死んだブリリアント先輩をエトワール先輩として部下に迎えていますよね……って、

ば！ れ！ た ……！！

エトワール先輩がギメノなんちゃらだって、ばばばばばばれてた！？ 何でばれた？ ねえねえどう答えればいい？ 肯定したら今後の先輩の立場悪くなりそうだし、否定してもキララに確信があるならあまり意味がない。疑いは深まるばかり。

』ど、どうしてそう考えたのですか』

「どうしても何も、エトワールの祝福を受けたときに気付いたのさ。紛れもなくギメノグレアヌスの気配がした。エトワールに前世の記憶はないようだから苦情を言えぬのが悔しいが、彼も私と同様、アカイによって救われたのだろう」

『……あのですねキララさん、それは少し誤解というもので』

「違うのか？ 私の目を見て違うといえるか？」

うつつ。そんな澄んだ瞳でガン見されたら無理です。

「ふふ、否定もせぬのだな。とてもそうは見えんが、汝はギメノグレアヌスより格上の神と見受ける。そしてロイはアカイの巫ふなのだろっ？ ただひとではあるまい、神力は人には強すぎる」

巫ってというのは巫女の男版って感じか。ロイはロイだよ、”私の” なんとか、って関係ではなくて。A・I・としての任務だとか他管区での運命とか。この世界のロイは他管区のロイとは違うと信じている。同じようにキララもキララだ。スオウ一族の呪縛呪縛というか、枠にはまって生きてほしくない。普通の女の子として、まあ彼女の

立場は普通じゃないけど女王としてあたりまえに生きてほしい。

” はじまりの民 ” に民主主義的な思想は少し先進的かもしれないけど、個人の幸せあってこそその全体の幸せだ。こんな時代だからこそ誰かに犠牲を押し付けたり、誰か一人に ” 貧乏くじ ” を引かせたくない。現実世界は綺麗ごとでは済まないかもしれないけれど、せめて私が神を務める仮想世界では最大多幸の世界にしたい。

だってここは死後世界、いわば天国だ。本来皆が幸せであるべき場所だよ。万人の幸福を目指し突き進んだっていいと思うんだ。

「先ほど、汝は私の親になるとまで言ってくれた。アカイは博愛主義者だから、軽い気持ちで言ったものか、はたまた神は全人の父性を担うゆえ、誰にでもかける言葉であるのかもしれない。しかし私は心より汝の慈悲と寛容に感謝し、恐れ多く受け止めた」

「私はロイさんにも同じように言いましたが、誰にでもというのは違います。ゆえにあなたの体を大切にしたいのです。さればこそ、ときとして人の身に害を及ぼす神の力を、軽々しく人に預けることはできません」

「汝に守られるだけの存在になりたくないんだ」

一度手放した禁忌の力に、彼女は再び手を出そうとしているのか。しかし。

『お断りします』

アスキーアートは省略して、キララの頼みを一礼とともに断固として却下。分かってくれキララ、君とロイとは違うんだ。キララが食い下がろうとしたとき

【開始します】

ガクン、と床面に振動音が走った。やべっ、うだうだ押し問答や
つてる間にタイムリミットきてた。ざあっとノイズ音がして床上に
タイルのような格子模様が出現。床一面真っ赤だ、ペンキで塗った
ような感じじゃない、床下に真っ赤なライトが点灯した雰囲気。

『始まりましたかつ。何か出てくるかもしれません』
「どうなったんだこの床石は。光っているぞ」

キララが床をコツコツと二度蹴って検めると、私たちを取り囲ん
でいた赤い格子の一部が続けざまに消灯した。依然として点ってい
る赤床を囲い込むように、先ほどは異なる植物の模様が赤いホログ
ラフとなって表面に浮かび上がっている。なんじゃこりゃ。

今度はパターン違うな。まだ魔方陣やるの？ 誰か第二区画の人
にクロスワードとかナンプレ差し入れてよそんなにパズルゲ
ームやりたいんならさあ。さっぱり要領を得ないまま、緊張感ばか
りが高まってゆく。急場の備えとして先ほどとは違う植物を同じよ
うに開花月を1〜12までの数字に変換しておいた。

格子は縦9列×横9列、合計81。ナンプレが9×9で81のマ
スを使うパズルだけど、ナンプレとは違う。今、赤く点灯してるマ
スが24ある。残りは消灯しているか、植物模様のホログラフが線
画で浮かび上がった。

ん？ でもさつきと違って同じ数字が多いな。ぶっちゃけ、1〜
3までしかなくない？

急に天井に赤みの光が差したので振り上げば、巨大な植物模様が
赤いホログラフで天井いっぱい浮かび上がっている。この図柄は
10を示す数字と変換できる。

「敵は出てこないのか」

私とキララは首が折れそうな角度で見上げたまま首を捻った。試練というから敵に襲撃されるパターンじゃなくパズルでよかったといえよよかったけど……。

『ただの謎解きのようですね』

「私は頭を使うことが苦手だ。何か仕掛けがないか全て調べてみよう。アカイはどうすればいいか考えてくれ」

えー面倒なことは私に丸投げ？ 清々しいまでに、当たって砕ける精神だねキララ。エトワール先輩曰く、彼女の頭脳もロイに匹敵するほど優秀だって聞いたんだけど、頭脳の無駄遣いだよ。

私が床面を見ながら頭を捻っている間にキララが部屋中を隈なく歩き、床を片っ端から蹴って回った。そして彼女が1を示す紋様で取り囲まれた赤床を蹴ったときのことだ。天井からビー、ビーとブザーが爆音で鳴り赤床のライトが消灯。

「うわっ！ 何だ！」

何これ怖い、嫌な予感がする?! 天井を見ると植物の柄が変わってた。10から9に減ったよ何が始まるの？

ほどなく天井の植物の図柄がぐにゅりと波形に歪み……何か天井から突き出してくる。

爬虫類っぽい赤褐色の尻尾が壁から出てきたああああ!! これにはキララもたまげたのか生唾を飲んだ。

「見る、何か出てくるぞ! 赤い床を踏んだからか!」

『そのようですね。気をつけて!』

私たちは尻尾を迎え撃つべく各々の剣を握り締めるが、私はまだ鞘を抜いていない。土壇場になったら抜くけど、様子を見てからね。地響きと共に、巨大赤トカゲが私たちの前に、文字通り降って沸きやがった。世界最大のコモドオオトカゲの倍はあるサイズ、でけ

え！ 全長五メートルぐらい。二十畳ぐらいの部屋に、ちよつと窮屈じゃない？ 私たちの存在に気づいたか、ぐるりとこちらを振り返った。緑の瞳が私たちを完全に捉えて、敵性認識している。……但し4つの瞳だ！

「あ、頭が二つあるぞ！」

双頭の大トカゲだ、マジで！？ いやいや、落ち着け私。別にこの双頭の大トカゲ自体ファンタジーではない。現実世界にも体はひとつで双頭のトカゲは存在する。突然変異なだけだね。隣の研究室にも双頭のカエル飼ってたし。首は二つでも体は一つだから、一頭として相手をすればいい。

むしろ単頭のトカゲが二頭出てくるよりよほどマシだ。

『落ち着いてキララさん、こわくありませんから刺激しないで』

「ば、化け物めっ！」

ぎゃー言うだけ無駄ー！ キララが叫んで驚いたのか、トカゲさんの逆鱗に触れたのか。キシヤアアア、って鼓膜を劈くような轟音で威嚇すると、体を低くし四足を踏ん張り、襟巻きのようなトサカを首周りにズバツと立てた。トゲが鋭くて刺さりそう！ 頭二つ分、トサカも二巻き。誰がどう見てもお怒りモードだねこれ、てか私らまだ何もしてないじゃない。沸点低いな爬虫類は、トサカ頭なだけあるよ。

ん？ 何かパシパシいつてない？ えーと、トサカから電気つばいのがスパークが見えるんですが。そのご自慢のトサカ、発電器官だったりする！？ トサカ頭とか言っでごめんなさいー！

雷大トカゲだったのかこいつ！ 火吹きトカゲならまだしも……つて、サラマンダーは生物学的にあり得ない。常識的に考えて火を吹くとか理にかなってないでしょ。雷トカゲなら何とか存在しうる、電気ウナギもいるぐらいだし。発電器官で敵を麻痺させて捕食する

類の爬虫類なんだろうか。

でも大丈夫、この手の発電動物は触らない限り感電しない。だから極力刺激しないように……ってあれ、キララさん何やってんすか？！

気が付くとキララが短剣を握りしめ、機敏な動作でトカゲの死角に回り込み、身を低くしたまま音もなく走りこんできていた。彼女は助走をつけオオトカゲの背を駆け上がり、一対の短剣でオオトカゲの首裏から断とうと狙い済まして踊りかかる。

『そこを攻撃してはだめです！』

私は叫んだが、コンマ数秒遅かった。もー、私最近後手後手。

「くたばれ化け物が！」

口汚くトカゲを罵ったキララの短剣が頭部を貫く前に、発電器官で蓄電されていた電気が剣に吸い寄せられもる感電。乾いた破裂音とともに彼女は電気ショックで弾き飛ばされ、白い部屋の対角線側にごろごろと転がって倒れ伏した。くう……と苦しげに呻き、体がびくびくと痙攣している。不幸中の幸い、意識はまだあるようだ。

倒れ伏したキララに追い討ちかけようと、トカゲがのっしのっしと転回させ今にも飛び掛かろうとしていたので私はトカゲの太いしっぽをガツンと力強く踏んで、

『待ちなさい！ その子に手を出すことは許しません、厳罰を下しますよ！』

私にしては珍しく大声で怒鳴りつけて警告。こっちもせめて大声で威嚇しないと、体の大きさでは向こうに負けてる。

アガルタ内の遍く動物は、私の言葉を解している。それは怪獣と呼ばれる彼らであっても同じ。交換条件だ。キララに何もしなければ、私も危害を加えない。つっても今は神通力もないのでハッター

ですけれど。

『その子から離れなさい、私の言葉が分かりま……え？』

返事の代わりにバシッ、と何か丸くてキラキラと輝くものが私のどてっ腹めがけて飛んできた。私は反射的に攻撃を躲すも、避けなければプラズマ球が私に直撃するところだった！ ちよおおおい、トカゲがプラズマ飛ばせるなんて聞いてねーぞ！ いい度胸だね私に喧嘩売るなんて。私の言うことなんて聞きちゃいけない、さっきのプー太郎と同じパターンかよ。

「がるるる……」

よくも尻尾踏んだな……ってな副音が聞こえてくるようだ。トカゲくんは素直に聞き分けるところか、今度は私を敵と認識したのか、私に向かって真正面から突進してきた。私は部屋の隅にダッシュで逃げて急転回、トカゲくんの動きをひきつける。幸い、神通力は無効で体の動きが鈍っていても、動体視力は生きていた。

頭突きをくらわされる寸でのところでトカゲの胴下にしゃーっとスライディングの用量で滑り込むと同時に、前脚の向こう脛（あるのか？）にキララの立派な長剣を鞘に入れたまま強かにぶつける。手加減なしでやったから、骨を折るぐらいの威力はあるだろう。

すると、弁慶の泣き所（？）をやられたトカゲくん。哀愁漂う絶叫をあげ両の頭を白壁にゴツンとぶつけ、気絶したようでぐらりとバランスを崩し倒れ落ちた。脚の下に入っていた私は巨体に押しつぶされる前にヘッドスライディングでトカゲの脇腹あたりから無事脱出。

頭の打ち所が悪かったのか、トカゲは平たく伸びて動かない。息はあるから殺してはいないが、完全に気絶してるっぽい。そうかと思えばやがてグラフィックが薄くなり、その雄大な姿は消滅。

はつとしてキララに駆け寄ろうとすると、彼女は自力で膝をつき、体裁悪そうにふらふらと立ち上がっていた。

「礼をいわなければな……」

『必要ありません、あなたが無事で何よりです』

先ほどキララが踏んだ赤い石畳には、トカゲの模様が変わっていた。天井には、相変わらず9を示す植物の図柄。数が……減ったんだよなこれ。10あったものが、9になったってことだよな。トカゲ1匹倒したから、9になったのか。

てことは、この石畳の上に残り9匹、密室にトカゲをはじめとする怪物が落ちてくるトラップがあるってこと？

やばい、一頭なら何とかなくても9頭も出たら死ぬ。じゃ、赤い石畳をコツコツ蹴らなければいいわけでしょ？ ちょっと痛い目見たけど、赤い石畳を蹴らずに仕掛けを解けばいいわけで……。

『ん？』

私は目が飛びだしそうになった。天井、さっきより低くないか？ 私の身長の上の倍以上の高さがあったと思うけど、今は1.5倍ほどしかない気が。えーと

『キララさん。天井、あの高さでしたか？』

「いいやもつと高かったと思うぞ。明らかに低くなっている。あ、今も少し下がったな」

『やはり。時間が経過すると、私たち天井に押しつぶされてしまいますね』

「私もそう思っていたところだ。何とか天井を砕けないか」

『仕掛けを解く方が天井を壊すより早いと思いますし、天井を砕くとまるごと崩れてくると思いますよ』

早くしないと……私たちの体が二次元になってしまいます!!

既に二次元にいるのにこれ以上二次元になってたまるかって。

「アカイ！ 新たな模様が出現している」

さっきのトカゲの格子の隣に、1を示す植物の図柄が増えていた。よく見るとトカゲ模様の周囲8マスはこんな状態になっている。余談だけど植物の図柄が描いてあるところは、蹴っても何も起こらなかった。

2 1

1

2 2

の部分はキララが蹴ってトカゲが出てきた地雷マス。 は消灯しているマス、 は地雷が埋まつてるかもしれない赤いマスです。なーんかこの配置、見たことがあるんだよなあ。

皆さんも見覚えある人はあるでしょ？ 分かる人こっそり教えてくださいよ。

要は地雷を踏まないようにしろってわけで……ん？ 地雷？ 地雷を避けて……って。

マインスイーパー（地雷よけゲーム）だ

！！

何それっていう人はウィンドウズのゲームに必ず入ってるやつだよ。絶対あるからスタートボタンから開いてみてね！ Mac派の面倒は見られません。未体験者はご愛用のパソコンでやってみてよ。地雷以外のマスをできるだけ短時間で開けていくゲームだよ。地雷のヒントは の周囲にある数字。当該マスの周囲8個の中に埋まっている地雷の数が表示されている。それでいくと の左側に、もう一つ地雷が埋まっているはずだ。開けていいのは左上のマスだけ。

キタ ! 解法分かっちゃった!

てことは制限時間内にマインスイーパー解いてトカゲの地雷を避けつつ圧死から逃れてステージクリアしろってパズルなの！？ いける、これ全然無理ゲーじゃない。むしろ私このゲーム超得意だよかってこいや。

『分かりましたよキララさん、謎解きの解法が！』

「何だと?! 早く解き方を教えてくれ」

あ、それは無理。説明してる時間ない。マインスイーパーには一時期どっぷりはまったことがある、皆さんも一度ははまったでしょ？ なに？ フリーセル派だ？ けしからんね。フリーセルはフリーセルでいいんだけどさ。発展性がないじゃない。私は断然マインスイーパー派。

ナンプレかと思いきや、マインスイーパーでマス目が9×9ってことは初心者設定じゃん、旗なしでも全然いけるよ。

やべえ俄然やる気出てきた！

私は直感を信じながら、地雷の埋まっていないであろうマスをコンコン、と何個か蹴ってみた。あるものは消灯し、またあるものは植物の図柄に変わった。おっしや大体マインスイーパーのルール通りだ。キララは踏んでよいものと悪いものの区別がつかないようであった顔をしてうろたえていた。

「赤いものを踏んでも何も……起こらない。何が違うのだ、違いを教えてください」

キララは若干イライラしてきてる。分からないとつまらないよね、その気持ちよく分かる。私はそれなりに楽しんでますけど。

『後でじっくり説明しますが、時間がありませんから手分けして踏んでゆきましょう。踏むべき全ての石畳を踏めば、外に出られるのだと思います』

「アカイは賢いな。私は無知だ」

キララは恥ずかしそうに首を竦めた。賢いとか知識とか関係なく、ルール知っていれば解ける類の簡単なゲームだからね。とはいえ、論理性に基づいているからロイだったら一つ地雷を踏んでしまった時点でルールを理解するかもしんない。守られるだけの存在になりたくないと言っていたのに、何も役に立てることがないと知った彼女が落ち込みまくっていたので。

『ルールを知れば、楽しめる遊びなんですよ』

「楽しめる、か……」

段々と迫りくる天井に押しつぶされそうになりながら、最後の方は中腰になってマス目を蹴りまくった。

『残りあと一つです、最後のマス目は……』

「こ、これか？」

お、合ってる。私の解を見ているうちにパターンを掴んだんだ、彼女が気づいていないだけで、学習能力は高い。

『よく分かりましたね、正解ですよ』

「よかった」

彼女ははにかんだような笑顔を向け、私たちは残り9つの地雷を避けつつ、最後は天井からの高さが残り1m以下になって残りの赤いマスを開ききった。

最後のマスを蹴ると、人一人通れそうなサイズの穴が出現。

「出口だ！」

私たちが飛び込むようにして間髪脱出口から滑り出ると、私の視界にあのアナウンスが表示され……景色は色褪せ時間が止まる。

【第二試練 突破しました】

よかった、クリアだ。

【引き続き第三試練に臨みますか？】

『続行します。続けてください』

ここまできたら、やるしかない。試練とやらが数理パズルである限り、どんな難易度でも私は負けないだろう。まだ難易度低いから、この調子でいくと第100試練ぐらいあたりしてね、はは。でもやれるだけやってみるよ。キララを付き合わせて悪いけれど。

続行の意思表示をするとフォントは消え、気が付けばキララと共に苔の上に軟着陸。

「おお！ 神様が戻られた！」

「ご無事ですか！」

大勢の歓声が聞こえるので顔をあげると、心配して集まってくれた皆にわらわらと取り囲まれていた。ロイたちも集まっている。私の班のネスト民の誰かが呼び笛を吹いて、皆を集めてくれていたんだ。各班班長は無事だ、ロイもいる。

“何が起こっていたんだ赤井君、どこで油を売っていた”

エトワール先輩も念話で話しかけてきた。

あ、そういえば神通力は？ 神杖を呼び出すと出てきた。よかつた戻ってる。

「きゅーん！」

「きゅきゅきゅーん！」

きゅんきゅん聞こえるから何事かと思ったら、グローリアくんの大群が私の背をめがけてドドドドと衝突してきた。私が地面に吸い込まれていったときにグローリアくんたち、剥がされてその場に取り残されてたみたい。先輩の背中がガラ空きなんだから先輩のところに行けばいいのに。私の背からはみ出したグローリアくんは、キララの背に一匹。先輩の背にも一匹。

【只今より第三試練を開始します】

エトワール先輩と私にだけ見えるフォント。今度は全員参加型の試練のようだね、皆で解くパズルってどんなやつだろう。レクリエーション的で、パズル好きの私は楽しみでもある。多少難易度が上がっていても私と先輩、ロイで考えれば簡単に解けそうだし。

『第三試練だと？ 第一、第二はないのか？』

『私たちが必死で突破してきましたよ。ところでエトワールさんはパズル得意です？』

彼は返事の代わりに、小馬鹿にしたような笑いを向けた。

何を言ってるんだ当然だろうというそのドヤ顔が素敵です先輩。

『得意そうですね』

私たちが手ぐすね引いて第三試練を待ち受けていると。

【制限時間 10秒】

短かつ！ 10秒で解けてこと？！

『やけに短いな』

『私もそう思います、早押しクイズのようなものですかね』

「赤井様、どうなされたのですか？」

ロイが私たちの会話に割り込んできた。ちょっと待ってね、ロイにはアナウンス見えてないからね。ちゃんとルール聞いておかないと問題解けなくなるから待ってね。

【制限事項：人工物は禁止】

【第1問 緑】

” 緑だ、赤井君！”

” 緑ですね先輩！”

え……問題それだけ？ 問題それだけ！？

緑を、どうしろって ！？

第4章 第8話 地雷原（後書き）

【重要なお知らせ】

次回から現実世界側のことを描写するために三人称が入ります。

第4章 第9話 わたくしという現象についての客観的考察

【アガルタ第二十七管区 第3391日目 第二区画内 第2日目】

【総居住者数 2870名(第二区画内 958名) , 総信頼率 99%(第二区画内 100%)】

【アガルタ歴9年106日 午前11時02分】

ネストの森では、第三の試練が始まっていた。

【第一問 緑】

彼らに提示された設問は僅かに漢字一文字。

”主語も述語もあつたもんじゃないな。何を訊いてるのすら分からん”

現実世界では日本語のままならない、カナダ人構築士エトワールも呆れる始末。

『……………そうですね。これでは何の問題か分かりません』

これには頓知の一休さんも真つ青だ、いやしかし一休さんなら……一休さんならやってくれる筈、と赤井が今日も下らない妄想で頭をいっぱいにしている。そんな赤井の暢気さ加減に、読心術をかけていたエトワールは辟易どころか感心するのだ。赤井は徹頭徹尾、度し難い楽観主義者なのだ、と。

エトワールが仮想世界で苦痛に対する恐怖を覚えず、非常時においてもパニックを起こさず、人間の本能的行動を取らず、その状況に応じた最適な判断を下すことができるのは、ただ単純に人格矯正プログラムとの融合を果たしてログインしているからだ。それはエトワールが優れているから、ということにはならない。

一方の赤井の脳はほぼ生身、それでいて彼はあらゆる環境に適応できている。

生来のものとしか考えられない、俯瞰的なものの見方は彼の何に由来している。

”仕方ない。一問目は捨てよう赤井君、設問不十分だ。これが解けなければどうなると思うかね”

”えーと、先ほどは双頭の大トカゲが出てきましたよ”

出てくる敵がその程度なら故意に回答を落としてもかまわないだろう、とエトワールが高をくくる。思考することを放棄した有能な彼の片腕、兼参謀の判断は迅速だ。肉を切らせて骨を断つ心積もりで、ルールが判明するまでの最初の一問は捨てる。

”そうですね、この一問は見送って私とエトワール先輩で何とかしましょう”

この一連の試練と銘打ったパズルの解法は、ルールが判明するまでの被ダメージをどれだけ最小限にできるかに掛かっている。パズル自体の難易度はさして高くない。二人の構築士は目配せし、互いに念話で合意すると頷き合った。

ネスト民とロイヤキララたちが二人の構築士達に、熱く期待を込めた視線を注ぐ中、

「赤井、今度の謎解きはどうなっているんだ。もう始まったのか」
先ほどの二つの試練で要領を得ているキララが赤井を問い詰める。下手に動き回れば赤井とエトワールの行動を妨げると、彼女は弁えていた。同様にロイも、何が行われているのか分からないながらも、いつものように背筋を正し、聞き耳を立て警戒を怠らない。

【カウントダウン開始 10】

素民たちには見えざる情報をもとめた、構築士たちの間にぴりっ

とした緊張が走る。

『残り9秒だ！ 何かが起こるぞ、身構えておけ！』

エトワールは秒数読み上げを開始。

「赤井、どうなっている？！」

キララは再度質問をぶつける。

『何もしません。いえ、何もできない。心構えはしておいてください』

赤井はエトワールと手分けをして、神杖を通じ総員を囲い込むように物理結界を展開し維持していた。聳え立つ半透明の結界壁面は、強固な攻撃性防壁でもある。自らのそれと質と構造の違いを比較しながら、ロイはその力強い守りを五感に焼きつける。そして、完全なるものへの憧憬に静かな闘志を燃やす。

『今度は色の問題のようです、詳細はまだ分かりません。一問目は捨てます』

「それは何色なんだ？」

『4！』エトワールのコールが折り返し地点を通過。

『え？』

きよとんとする赤井に、少女は業を煮やしたように詰め寄る。彼はこのぞという場面で何故慌けるのだらうと、キララは拍子抜けすることがある。話を聞いていないのかと思いきやそうではない。彼女は波立つ心を抑え、一語一語に力を込めながら歯切れよく

「それは な、に、い、ろ なんだ？」

なにいろ？

そう聞けば、赤井でなくとも閃いた人間は少なからずいるだろう。日本人には馴染み深い、とある遊びの定型句。

いる鬼は、鬼ごっここの派生の遊びだ。”なにいろ？”と子が尋ねれば、鬼が色を決める。子は鬼が提示した色に触れている限り安全だ。

「そうか、色ですよ！」

赤井の瞳が何かを確信したように煌いた。ルビーより深い赤は鮮やかな輝きを放つ。それだけ見れば毒々しいまでの瞳色であるが、彼の穏やかな印象に躰けられ、気高さこそあれ禍々しい印象を与えない。

鬼はまず子らに”色”を提示し、10秒数えてから子を追うのだと。色鬼の大まかなルールはたったそれだけだが、大抵は遊びを複雑にするために付加的なルールが存在している。今回、”人工物以外”という縛りが明示されていた。

身に帯びている人工物の色に触れてはいけないということだ。毒を持つ怪物達と謎の植生で溢れ返ったネストの森の中、鬼の提示する色を求めて全員が奔走すべし。それが第三試練で求められている課題なのだと、赤井はこのとき気付き、彼を取り囲む民に伝えた。

赤井の推測が正しければ、わずか十秒後、この森に鬼が放たれ指定された色に触れていない”者を襲う。鬼に捕まった子は、鬼にされるのでは……！人間に戻るのだろうか？確信がない。赤井は子供の頃に遊んだきりの色鬼のルールを、うる覚えのまま思い起こした。

ではこの設問は一問たりとも落せないではないか、絶対に捨ててはならない！

「鬼とは、どんなものですか？ 霊は分かりますが鬼は知らない」

『何にしろ、設問の意味が分かってよかった。皆さん、今すぐ近くの草か葉に触れて！』

「なっ、何ですと?!」

どの葉だ、どの葉だと各自必死に探し回る。とはいえここは森の中。噓せかえるほどにあるが、すぐに行動に移せない手合いもいる。

『早く両手を地面について！ 早く！』

赤井が急かし、素民たちが素直に指示に従えば、地面が柔らかかな苔に覆われていたために、ほぼ全ての人間は”緑”に触れることができた。彼の機転により誰もが物理的安全圏に”一時避難”したところで、辛くもタイムアップとなった。

『0だ！ 気をつける！ 何か来るぞ！』

エトワールが警告を発する。

「ひー！ 一体何がくるんですか！」

大丈夫だ。問題ない、間に合っている。色鬼の提示した条件は満たしているはずだ、一問目は無事に全員突破。赤井はひとまず安堵の息をつき、しかし用心はすべしと物理結界に裏打ちの結果を副えた。木々がざわめく以外は、あたりは静まり返っている。何事もなかったことに気を緩ませたうち一人が早くも立ち上がるうとしたので、

『まだそこから手を離してはいけません！ よく見て！』

赤井が楯を飛ばす。カウントダウン終了を待って数十秒後、黒い人影が物理結界を貫通し三体出現した。白面をつけた、首から下は黒く半透明のケープを纏った人間の三倍ほどの体躯を持つ、鬼と思しき何か。何かを捜し求めるように森じゅうをガサガサと這いずりはじめた。ケープがてらてらと黒く輝き甲虫然として、素民たちに異様な不快感を催させる。

「うひっ！」

一人のネストの民の前で、鬼と思しきそれが動きを止めた頭部をもたげた。

ギ　ギギ……と、白い面の中央が陥没し不気味な穴があく。色鬼の標的となったのはブロンドの髪に、帷子を着た若い青年。彼は赤井の命に従い、両手を地面にぎゅうと押し当ててはいたものの、そこが運悪く枯草だったのだ。”緑”ではなく、安全ではない。彼は慌てふためき緑色の葉に触れ直し愛想笑いを浮かべたが、色鬼の判定は既に決し、覆らなかった。

「う、うわああああ！」

粗相に気付いた青年は恐怖心に扇動されるがまま、跳び上がり、おぞましさに振り返りもせず、背を向け一目散に逃げ出そうとしたが、あつという間に追いつかれ鬼に肩に触れられてしまった。青年を守ろうと赤井が神杖を、エトワールがスロージョウロウナイフを色鬼に放っていたが、色鬼の体躯はそのどちらも通さず、無機質な金属音を響かせ弾き返した。

赤井は電磁で、エトワールはワイヤで各々の獲物を呼び戻し第二撃に転じようとするも、彼らが救おうとした青年は既にピクリとも動かなくなっていた。三体の色鬼は仕事を終えたのか、物理結界を貫通し森の奥へと姿を眩ませる。赤井が駆け寄り、エトワールが不動の青年に迅速解析をかけると、

『……生きています。が　これでは動けまい』

死んではいけない。プログラムが一時停止状態となっていた。試練とやらを終えなければ、彼はここで永遠に生ける屍となるほかない。

「せ、石化したのか!?　神様方の攻撃も通じなかったぞ！」

「俺たちはどうすればいいんだ!　神様に倒せないものを、倒せる

わけがない！」

素民たちは震え上がった。一人ひとりの小さな動揺と不安が、増幅され約五十名の探索隊の間に拡散してゆく。

「赤井様。残り何問あるのでしょうか。先ほどのものを攻撃せずとも、指定された色に触れ続ければよいのですか」

目的も知れない試練に、ロイは不安を募らせつつも諦めの言葉を吐こうとしない。

『何問あるのかわかりません。が、色に触れ続ける限り安全だと思われます。試練終了までに一人でも誰かが生き残れば、全員復活できる筈です……しかし』

赤井は言い出せなかった。

鬼ごっこ全般にいえることだが、この遊びに終わりはないのだ。

これは飽きるまで続けられるゲーム……。いつかは誰かがミスを犯す。消耗しきって、一人ずつ削られてゆく。

赤井が冴えない様子だったので、彼の胸中を気取ったロイが現実的かつ最善と思われる案を出す。

「一つ一つ走り回らず、第二問までに、ありつたけの自然色を手元に揃え、予め備えておきましょう」

「おお、それがいい！」

「あ、ここに黄色の花があります」

黄色の草花が全員の手で摘まれ、赤い蔦が一部ずつ切り分けられ、青い種のかけらが配られた。ほうぼう探し回って人数分取り揃えたのは、十二色。色鬼という遊びには確か、「誰もが知っている色」という縛りがあった筈だ。赤茶色や青緑色、という指令はないだろう。ようやくのことで準備が整うと、見計らっていたかのようなタイミングで第二問が表示。

【第二問 金】

「金!?!」

当然のごと彼らの手元には持ち合わせがない。森の中に、自然に存在する色ではないのだ。人の手を加えたものを除いては。

「金、です、か?」

彼らの努力を、せせら笑うかのようだった。

しかし赤井は諦めはしなかった。そう、この試練には必ず突破口がある。解法のない設問は、数理パズルを好む構築士にとって美しくないと思うのだ。ならば突破口をこじ開けるまで。

「無理だ!」

「さっきのやつにやられる! 全員やられる!」

手当たり次第に探し回っても、金鉱脈を見つけてもしない限り金色の輝きを発するものはない。人工物ではいけないという縛りがあるのだ。ブロンドの毛髪を生やしている民もいたが、これも人工物というカテゴリに入るのには変わらない。

【カウントダウン開始 600】

厚労省内地下施設、15階。

そこは一階ロビーのエレベーターからは決して辿り着くことのできない、機密性の高いフロアである。

専用エレベーターを降りてすぐ左。一見倉庫と思しき扉を開くと、広く暗い一本の通路に出る。突き当たりにはガラス扉、警備員のボディチェックと高度なバイオメトリクス認証を要求される。その先に、外界から厳重に隔離された大ホールがある。

ホールの受付には愛想のよい女性スタッフと「死後福祉局 戦略

的構築技術研修会」との看板。防災対策本部として殆ど使用されることのないこの場所は、普段は閑散としているどころか、清掃担当者以外には寄り付くものもない。しかし本日は様子が異なり、防音扉の奥は騒然として、異様な熱気と興奮に包まれていた。

【カウントダウン開始 600】

照明の落とされた大ホールの中央に敷設された投影装置。黒い素焼きの陶器のような三日月を六つ重ね合わせたようなフォルムの上に浮かび上がる、青白いグリッドと点滅する白いガイド。高解像度の立体フィールド投影を、職員たちが360度からとり囲んで見上げ、緊張した面持ちで臨む。彼らは総勢百名からの日本アガルタスタッフ。立体映像の投影中、歓声も、野次も罵倒も満遍なく上がる。あからさまな陰口もそこかしこで囁かれている。

彼らのお目当ては、二十七管区主神 赤井構築士そのひと。

そして脳機能障害患者として仮想世界で治療中の、メグの治療経過。

赤井というのは、今年度入省したての^{ルーキー}新神だ。

とはいえただのルーキーと軽く見てよい人材ではない。

彼の情報は一度サイバーテロで狙われたという実情もあって、今や厚労省の最高機密レベルで扱われており、映像および音声の記録は禁止となっている。現実世界で執務する二十七管区スタッフ全員は勿論のこと、各管区スタッフらの顔ぶれも見受けられる。各管区の構築士補佐官たちは普段各々のペースで構築時間を進めているが、仕事を止めて研修会に挙って参加した。

彼らは現実時観速に時間同調された映像を、同一タイムラインで見守る。それはステージを中央に据えたライブ会場のような光景だ

が、彼らが赤井に向ける視線は嫉妬も込められ、必ずしも好意的に見られているわけではない。マニユアルを持たず、医師でもないド素人もド素人。

「まだ第二区画じゃないか」

「こんなにとろとろやって、ちやほやされて金もらってるのか」

「おい、聞こえるぞ」

新神が実時間僅か数ヶ月、仮想時間9年で仮想下り八ビリテーシヨン治療という世界初の偉業を達成し、世界初のタイトルが搔つ攫われたとあつては、既に何百年も仮想世界で執務中のベテラン構築士勢は面白くない。

マニユアルが擬似脳と融合していない状態でログインしたのはただの事故ではないか……：今後はいつそ、全主神にマニユアルなしでやらせてはどうか。そんな的外れな議論が俎上に上ってきたこともあり、伊藤二十七管区プロジェクトマネージャーは赤井への批判を封じ込め、そのありのままの彼を包み隠さず見せようと、今回の赤井の区画解放イベントを日本アガルタ全エリアに公開すると決定。内々でのパブリックビューイングとあいなつたのだ。

区画解放とは異なるプログラム同士の連結・統合作業を意味し、別々に組み立てられていたパズルのピース同士を結合する作業に似ている。結合によってバグは発生しないか、環境パラメータは正常か、ファイルやデータの破損は？ ウイルスの感染はないか。あらゆる事柄に細心の注意を必要とするステップだ、不良なエリアを一つでも統合してしまうと、二十七管区全体が危険に脅かされかねない。二十七管区スタッフは全員仮設端末の前に張り付き、仮想世界中の焼人部隊と連携を取りながらびりびりとしている。

「色鬼に因んだこの設問はどうやって突破するのでしょうか」

「さあ」

手のあいた甲種二級以下の構築士たちも顔見知り同士寄り集まり、

フリードリンク片手に観覧中だ。

「森の中に人工物の金色はない、おおかた、金色のモンスターとでも戦わせるのではないか」

「冗談交じりに、誰かがそういった。」

「おい、的中だぞ」

「ははは、本当だ」

嘲弄の声上がる。立体映像の中には金色の毛並をした、象ほどのサイズもある二角獣バイコーンが四頭出現し、素民たちを慄かせていた。赤井とエトワールは結界を展開し素民たちを庇護しつつ、バイコーンを捕獲しようと二手に分かれ、打撃と電撃を中心とする波状攻撃を開始。ロイも簡易的な結界を盾に、バイコーンの動きを封じている。「ロイはいい動きをする。あの問題さえなければ、性能はいいんだが。惜しいものだなあ」

「見る……蘇芳も負けてはいないぞ」

キララの両手に握り込まれた一对の剣が紅蓮の炎を宿し、バイコーンの脚を大炎の舌で舐め上げ、焼き落としていた。驚きの声を上げる赤井、それ以上巫力を使っではいけない、やめなさいと、必死に諭している。

「何を言っているんだ、蘇芳はA・I・だぞ？」

「蘇芳はいつ巫力をチャージしていた？ 赤井は与えていない、エトワールもだ」

「双頭の蜥蜴の電撃でチャージしたのかな？」

「ああ、それだそれだ」

A・I・に注目している者もいれば、第二区画という作品そのものの品評も行っている一団もいる。各構築士のオリジナリティが具現化され、ある種芸術家としてのセンスの問われる場面である。

「しかし第二区画の出来は今ひとつだな。そこは下手にゲーム的要素を入れないほうがよかつたと思うのだが」

「B+。クリーチャーの造形、”どこかで見たことがある”のはい

けない。既視感を懐かせてはだめだ」

「俺はこのイベント自体がマイナスイメージだ。俺なら古代遺跡でも探索させてオリエンテーション方式にする、時間制限をつけると白けるだろう」

構築論に花が咲く。区画構築ではエンターテイメント重視か、美術重視かで意見も様々だ。管区開設後、入居者に人気が出るよう、クリチャーデザインにも気を遣う。

「18管区では空中迷宮を造ったそうだが、それを聞いて迷宮モノが一時期流行ったな」

「ああ、流行った流行った」

「ともあれ、うちの管区のプロマネならC判定だな」

同業者だけに細かい部分に粗が見えるらしく、採点は概ね厳しい。

「それにしても赤井の蘇芳に対する言葉……本心で言っているのか？ ただの演技なのか？」

「蘇芳を人間患者だと思って丁重に扱っているんじゃないか？」

「いやA・I・Iだと理解している」

「ではA・I・Iを人間扱いしているのか。しかも、素で？ 二次元の女に惚れ込む輩なのかもしれない」

赤井の評価も、プロジェクトマネージャーたちを中心に真つ二つに割れている。

喧々諤々、そちこちで沸き上がる議論。ますます熱気の増してゆく会場の片隅に、白い上下のスーツを着た大柄な男の姿があった。「どうだ、同期の仕事ぶりに何か決定的な違いがあるか？」

この構築士補佐官は携帯端末のモニタの画面の人物に語りかける。パブリックビューイングだけではなく、伊藤の計らいで各管区構築士にも開示されたので、各管区内で構築中のハイロード達にも第二区画解放のライブ映像は配給され、彼らはインフォメーションボー

ド内で視聴している。

おっとりとした仕草で首肯したモニタの中の人物は、柔らかな灰瞳の印象的な女性アバター。

地上の美を結晶させたかのように完璧な美貌と研ぎ澄まされた知性を併せ持つ、清楚可憐な女神だ。長い純白の髪に銀のティアラがよく映え、ギリシャ神話の世界から抜け出てきたかのような、デコルテの大きくあいたチュニツクをゆったりと纏い、その下に覗く形の良い豊満なバストはまさに、主神のそれに相応しい。

彼女の世界では、アガルタ歴211年。

28管区甲種一級構築士、絶大なる神力を備えた創造と豊穡の女神として二つの海と四つの区画を総べ、厚く信仰を集めている。

彼女の名は、白棕くわんじゆ 千早ちちはや。

素民からは「白の女神」と慕われる。

壮麗な白亜の神殿の至聖所に住まう彼女は本日のイベントに際し神官たちに暇を出して帰郷させ、インフォメーションボードに釘付けになっていた。現実世界においては精神科医でもある彼女は、赤井の仕事を細やかに観察し、緻密な分析を重ねている。

『先ず気付いたのは、蘇芳やロイの性格がわたしの管区と随分違います。蘇芳だけでなくA・I全般のようですが、あれほど情緒豊かではありませんでした。より高度に発達した精神段階にあると伺えます。また、ロイはこちらの世界のロイよりも状況分析力に長けています。性格も随分と穏やかで安定しているように見えます』

「A・Iたちは皆、インプットされているパラメータ以上に、彼を不自然なほど好いているようにも見える。尊敬以上の何かを集め

ているようだ。ロイもどこか違うな」

「しかしロイも蘇芳も、ベースはわたしの管区と同じプログラムです。構築士によって、A・I・は異なる反応を見せるのですね。わたしの力量がないばかりに、……申し訳ありません」

「そのようだな。だがそれはお前のせいではない。誰もできなかったんだ。そう、しょげるな」

女神は柔らかな白い睫毛のついた瞳を静かに伏せた。

強すぎる神通力を反映したまばゆい後光が、彼女の落胆をあらわすようにその光度を落とす。

「……彼は、赤井神はあと数年で命の尽きる蘇芳に、”親代わり”になると言っていましたね」

「ああ、正気とは思えない言葉だな。A・I・を命あるものとして未来や人生、生命の在り方を真顔で説く……ありえないだろう。A・I・には哲学が理解できない、時間の観念が人と異なる。それでも彼は説く。既に、現実と虚構の区別がつかなくなってしまっているのかもしれない。なにせ彼は生身だから……既に九年か。発狂していてもおかしくはない。適当な区切りで外に出して、精神鑑定を受けさせてはどうかと俺も思う。千年の監禁勤務は生身では危険だ、取り返しのつかないことになる」

この補佐官は赤井の精神衛生上の問題を気にかけている。しかし白棕は

「いえ、赤井神の心配はいらないと存じます。それより蘇芳が複雑な反応をみせたのに気付きましたか。そう、安らぎと歓喜、そして照れくさそうな。とても高度な反応です。まるで人の、年ごろの少女のようでした。わたしは彼女の感情の発達度合が、非常に気になりました」

そこで言葉を区切り、彼女は敗北を認めてさらに肩をおとし項垂

れた。

『信じられません。彼のもとではA・I・Iがこれほどまでに、人間に近づけるものかと』

「スオウに関しては、ジエレミー・シャンクス（エトワール）の手腕もあると思うぞ。新神のお前は知らないだろうが、彼は千年王国に在籍していたこともある男だ」

『わたしの管区にも、実力ある構築士は多数入っています。理由は明白ですよ』

「どれだけ努力を重ねたからといって、決して手に入れることもできず、身に付くものでもない。なぜ、彼は持ち得てしまったのだろう。白棕は赤井と言葉を交わしてみたくなった。そう、

『彼の父性は、人間のそれを超越しつつあります』

表も裏も、膝に置かれた両の手を見る。そこに、彼女の生きた年月は刻まれない。

陶磁のように青白く透き通る、瑞々しい素肌は紫外線を知らず、傷ひとつない。

赤い血は通い、肉はあれど造りもの。きゅ、と口角を無理にあげてみる。この場の時間と風景に、できるだけ溶け込んでいられるように。

アイボリーのブレザーと、グレーのチェックのスカートの真新しい女子高の制服に包まれた若くしなやかな体に、彼女の歩んできた歴史は馴染んではくれなかった。一見、何の変哲もない女子高校生である少女の頭脳が、その外見に相応しからぬ価値の情報を所有していることに、忙しなく行き交う誰が気づくだろう。

六年。それは彼女が心象と外界の境界線を失うために要した、長いようで短い時間。

容姿が、名が、四肢が、時間さえも流動的かつ主観的なものとなり、さほど意味を成さなくなつてより久しい。自己は曖昧に、どんな快楽も欲望も色褪せ、五感は鈍り、思考だけが鋭くなつてゆく。肉を纏い、現実と虚構の狭間を泳ぎ続けるだけの漂泊者のようだ。

ここは芝浦埠頭空の駅。

首都高速飛行道路2号線上の、空上バスターミナル。空駅である。長いストレートの黒髪の、小柄な少女は空中公園のテラスの白いベンチに深く腰掛け、ハンズフリーの立体電子書籍をバッグから出し起動すると、その世界に没頭しようと目を落とした。

宮澤賢治の「春と修羅」、彼女のお気に入りの詩集だ。彼のことを思い出していると、ふと読み返したくなった。

わたくしといふ現象は 假定された有機交流電燈の ひとつの
青い照明です

暫し生じた意識の空白に、どつと、洪水のように心象が流れる。

何もかもがあやふやで不確かな環境で、彼女は確かなものの存在を疑い続けてきた。

仮想死後世界アガルタの開設より八年。人が神を演じる世界規模の試み、終わらない人生の壮大な暇つぶしと、究極の娯楽の提供に加担した日々。

アガルタの誕生は、生物種として急速に縮退しつつある人類と、縋るものも救済もなき現実世界で、救いと安息の地を求めようとした趨勢である。言ってしまうえば、物理的に無限大の規模にして、省スペースな娯楽福祉施設の構築。

来る日も来る日も繰り返される、記号として制御された”神々”による仮想世界作成ごっこ。神々の中身は、金銭報酬に引き寄せられた有象無象だ。入れ代わり立ち代わり仮想世界を往来し、新工リア開設に沸く。おめでたいものだ、仮想世界のテーマパークではないか。その行政サービスの一端を担う構築士補佐官という職は、しかし彼女の表向きの顔に過ぎなかった。

焼け太りした組織の税金を湯水のように使い、影では本業をこなす。半ばバイオロボットと化した構築士達の管理と監視、厚労省内での彼女の仕事はそんな認識でしかなかった。

本来の任務のためとはいえ、この茶番にいつまで付き合えばいいのか。毎日のルーチンの中で、箱庭の中の構築士を人間とさえ思えなくなっていたとき。

彼は唐突に現れた。

人の心を持ちながらにして神であるように錯覚させる、それは不思議な存在。

彼の人生のバックグラウンドに横たわる独特の生命観に、彼女は引きつけられた。宇宙の中の自己存在を明確に定義づけ、自然と生命を尊び、素直に感謝の心を懐く。

だから彼は適任だったのかもしれない、人間を超えた父性を兼ね備えた箱庭の神として。

彼は、紛れもなく人ではなかった。こちらの思惑通りに、計画通りに構築任務をこなしてゆくだけの木偶人形ではないのだ。

彼の造り上げようとする世界には、熱い血が通っている。まるで一つの世界の創世を、目にしているよう。彼女はどっぴりとはまりこんだ。彼に。

冷たく暗い自然のままの洞窟に起居し、とりとめもなく思考し、
仮想世界の民を導き続ける彼に、幾度か問うてみたことがある。答
えの出ない禅問答、ほんの戯れにだ。生命の本質は何だ、人は何の
為に生きるのか、と。

凝集と分解、再凝集の中で起こる発火の連なりだ。
意義なんてない。彼はそう答えた。

F 1	凝集	発火	複製	衰退	分解	
F 2		凝集	発火	複製	衰退	分解

有機物が凝集し、人の形となり脳のネットワークが形成され、発
火し自我を持ち、やがて肉体は廃れ、滅び分解する。されど残され
た凝集片はまた異なるネットワークを形成し、過去の情報を受け継
いで保たれ、発展させてゆく。
結びつき、発火し、ほぐれて消える。

刹那の連続に生きる発火の複合体、それが人間。
その積み重ねが、過去と我々を透明な糸を繋いで永遠の時間を紡
いでゆくのだ。

過去とかんずる方角から 紙と鑛質インクをつらね ここまで
たもちつゞけられた

いつ、いかように結びつくか。
それは偶々（たまたま）の積み重ねだ、と彼はありのままを述懐
した。

偶々、現代において私は発火しているのだと。
少し凝集の様式が違えば、簡単に他者たりえた。

けだしわれわれがわれわれの感官や 風景や人物をかんずるやうに

そしてたゞ共通に感ずるだけであるやうに 記録や歴史、あるひは地史といふものも

私という現象は、あまりにも臆げで頼りない。

私たち人間だつてはじめは生命ですらなかつただろう。そう、言うのだ。

A・I・は生命ではないのか否か。それが思考の発火であるかぎり、単純なものはやがて複雑なものへ結びつき。ネットワークを構成し、自我が生まれそして生命へと発展してゆく。その可能性を、彼は信じている。

神は、このようだっただろうか。地上に単純なアミノ酸の配列、原始の海に生命の萌芽が生じたとき。それを慈しみ育ててみようとする。

そののいろいろの論料といつしよに われわれがかんじてゐるのに過ぎません

だから生命現象の偶有性に思いを巡らせたとき、彼は他者を他者だと思ふことができなくなるのだらう、と彼女は理解している。

他者の痛みに共鳴する能力に長けている。その人間性を電気シグナルに変換されぬまま、彼は仮想世界に存在する。

彼を人でないものにしたい。人権を剥奪し、戻るべき場所と肉体を破壊し、その箱庭に永遠に閉じ込めてしまいたい。役者ではなく、感情を持った神そのものに創りかえてしまいたい。

彼を見ていると、衝動が抑えられなかった。来る日も来る日も、気付けば彼女は彼を創りかえようとした。

ごめんなさい、ごめんなさい。彼の苦しむ姿を目に焼き付けながら、何度も彼に謝った。

しかし助けることはしなかった。全てを受け止め、笑って許してくれるような気がしていたから。

彼女は直感の赴くままに彼の精神を極限にまで追い詰め、次第に彼の性質を変容させていた。非人道的であると糾弾されたなら、反論の余地もない。しかし彼女の行為は、思いがけない形で結実した。

ごめんなさい、赤井さん。あなたが辛かったのは、苦しかったのは分かってる。

もう二度と、彼と会うことはできないだろう。ならばせめて別れ際は憎まれるように、きれいに忘れてもらいたくて、あんな態度で幕を引いた。

チカチカ、チカチカ。

量子腕時計のアラームが視界の端でしとやかに光る。

午前一時の待ち合わせ時刻。たった数行しか読み進めることのできなかつた電子書籍を閉じる。鳥肌の立っていた剥き出しの膝を数度こすって立ち上がり、スカートの裾を几帳面に手で直す。高校指定の鞆を手首に所在無さげにぶら下げ、空駅のテラスの軒先に出た。

人生の節目は、いつも雨。ひどい雨女だ。

「その体は困るな、連れだって歩くと人目が気になる」

舗装路に打ち付ける雨音に紛れそうな、くぐもった声の男に、少

女は耳を傾け視線を向ける。スカート裾を直すと、男は苦笑した。少女は軽く会釈をし、こちらに歩み寄ってきたつば広の帽子を目深にかぶった、背の高い男を見上げた。濃紺のスーツに白のシャツの、地味ないでたち。

「ともあれ、復職おめでとう。激務だったようだね」

「課長こそお久しぶりです、お変わりありませんか」

旧知の仲かというと、それはある意味で正解である。直属の上司との数年ぶりの再会だ。

「こちらはこちらで色々あったがね。出向先では……懲戒免職になったって？」

「はい。予定通りです」

無事に戻ってきてくれてよかった、と男は安堵していた。死後福祉局に入局した職員はその機密性の高さのために……実質退職することができないから。その分、先方がクビを切ってくれたというのなら手間が省けたというもの。

「君はこちらの人間なのだから、厚労省をクビになったのはむしろ好都合だね。釈然としないこともある」

「厚労省は退職金を出しましたよ。払い込みがなされたかは分かりませんが」

「君の退職するのを見計らったかのように、ソーシャルエンジニアリング・ハッキングが仕掛けられたようだが……嫌疑はかけられなかったのかね」

「かけられていると思います。それで……」

「ああ、それで」

それで、その恰好なのか。男は合点がいった様子だ。

「アガルタの日本人構築士が治療に成功したとの話があるが、あれは君の担当だったのか」

「場所を変えましょう、課長」

「確かに立ち話もなんだ。パーキングに車を用意している」

「それはどうも」

彼女はマールブル柄の傘をひらいた。ぱつと曇天の空に鮮やかなオレンジ色の花が咲いたようだ。

「いまどき、傘……かね。空気傘エアシールドは？」

ちよい、と男は帽子のつばを引っ張る。今日は東京都二十三区全体が、計画降水の日。都民はみな、帽子型のエアシールドを被る。帽子のつばから圧縮空気が噴出して、雨粒を吹き飛ばしてくれるのだ。すると彼女は視線で促し、バスに乗りかけた女子高校生の一団を見やった。

「女子高生の間では流行っているらしいですよ、アナログ傘」

「へえ。しかし君は過剰防衛だと思うよ……東くん」

「妹のことが、ありましたからね」

かくして……内閣情報調査室

国家特命防諜課

情報調査官

東沙織。

厚労省死後福祉局潜入調査を終え、恙無く復職。

第4章 第9話 わたくしという現象についての客観的考察（後書き）

マナー化を打破すべく、今回は三人称にしてみました。

第4章 第10話 蘇芳色ロボティクス

【アガルタ第二十七管区 第3391日目 第二区画内 第2日目】

【総居住者数 2870名(第二区画内 958名) , 総信頼率 99%(第二区画内 100%)】

【アガルタ歴9年106日 午前11時32分】

国民の皆様あげぼよ (2010年ぐらいのギャル語だったはず)！ 私厚生労働省 甲種一級構築士の赤井ですけど……何か一話分ごつそり、私のナレーションがリストラされてたつばい。私全然あげぼじゃねーよ、さげぼだよ。

今後は適当に外で記録進めてくれるから、私は飛び飛びで話せばいいって外からの指示があった。厚生省も合理化するんかな、外のこととはよくわかんない。脱線ばかりしてたからあいつ黙らせろってなったんだねきつと、私の存在自体仕分けされないよう気をつけます。

んーと、どこから話せばいい？ てか私、話してもいい？ ウザいからダメ？

じゃ意地でも話す。巻きでいくからね、巻きで。私たちは第三試練の第二問目を突破。何かバイコーンみたいなの出てきたところ？

あ、あれ制限時間以内に皆で協力して追い詰めて、エトワール先輩のワイヤでふん縛ってタッチしたら、色鬼出てこなかった。割とチョロかったよ。結果はよかったんだけど……問題が発生。キララが双頭の蜥蜴の電撃によって巫力を得てしまったらしいんだ。一度得た力を取り消すこともできないらしいし、どうしようもない。巫力を使い切ってしまうまでは私たちも手出しできない。

『それ以上巫力を使っではいけませんよ、キララさん』

私は声を荒げきつく注意した。すると彼女は何故か悔しそうな表情を浮かべ、

「既にもう幾度となく巫力を使ってきたのだ。今更一度や二度使ったとて、ものの数にも入りはせん。気にせずともよい！」

とか言つて、強がつてる。んー、そうなのかもしれないけどさ。さつきあれだけ「死にたくない」って言つてたのに言つてる事矛盾してない？ 巫力を使えば寿命が減るって知つてるのにどういふことなの。

”ロイを意識しているんじゃないかね”

と冷静に女心を分析する先輩。さすが、キララとは長い付き合いの仲だよ。そういやエトワール先輩、あなたキララに過去の悪行バレバレでしたよ。まあその話は後ほど。先輩がここで悶絶しちゃったらいけないからね。

”ロイは力を使い続けているのに、それを赤井君は咎めない。彼女は、神通力を使えばロイも早死にすると思っている。キララは巫女として修練を積んできたうえに、グランダの女王という立場も兼ねている。彼女の性格としては、モンジャの長のロイに負けるわけにいかない。てなわけでチキンレースのようになってるんじゃないか”

そうだったのかな。なんか複雑だな、彼女は負うものが多くて大変そう。ロイはキララのことを気遣つてるっぽかった。

”まああれだ、同じことをしているのに兄弟の片方だけ叱ると片方が拗ねる法則だ。私が何か言つても互いに聞かないだろうから、君が灸を据えてやるといい”

何その法則。でもすげー例えが分かりやすかった。私のリアル弟

の健太なんてさ、要領がいいのなんの。いつも兄貴の私ばっか「お兄ちゃんなんだから！」とか理不尽な理由で親に怒られて、子供の頃は相当不公平感募らせてたんだよな。何だよ健太も私と同じことやったのに何で健太は怒られないんだよ。みたいなやつか。大抵どこの家もそうですよ。あの現象か、あれと同じことが起こってるのか。それは悔しくもなるわ、よしキララ、その気持ちはよく分かったよ。てなわけでロイも同じように叱る。

「ロイさん。あなたもですよ、平時から安易に神通力に頼ってはなりません。実力で問題を解決するよう努力してください。思い出してください。私はその力を何の為に与えたと言いましたか？」

一応、釘をさしておいた。急にSEEKYOUしてごめんよ。ロイ、驚いて目が丸くなってる。神通力が扱えるようになって褒められこそすれ、怒られるとは思わなかったんだろ。うね。実力で頑張れとか言ってる私もチートだから自分の実力じゃないし、よく考えたらそれロイが雷でチャージして貯めた神通力だから私がとやかく言えないだけだよ。それでも、叱られたロイは何かを反省したのか

「はい。赤井様の仰るとおりです。俺は最近、過ぎたる力に溺れておりました」

やっぱり彼は素直で聞き分けがいい。何かこっちが申し訳なるぐらい。

珍しくマッチョな肩をすんと落としていたから、多少はこたえたのかな。余談だけど、ロイの背中のグローリアくんが、私に怒られたからか総ブルーになつてた。いや、別にグローリアくんには怒ってないよ私。悪いことしちゃったね。

色鬼三問目は銀。意地の悪い設問だよ。勿論銀なんて森の中にあ

るわけないから、銀の尾羽持った、白いダチヨウみたいな巨鳥の大群が急に森の奥から地響き立てて走ってきて、おっしやかかってこい返り討ちにしてやんよ！ とか思ってるうちに、猛烈な勢いで私たちを無視して嵐のように走り去っていった。

『あれ……今の。逃げました？』

【カウント 20】

呆然とする私たち。

『え？ さっきの鳥、行っちゃいましたよ！？』

待って　　！　ダチヨウ倶楽部待って　　！

待って待ってと追いかけたら、くるりんぱ、と振り返ってまた一目散に逃げてゆく。

いいからかかってこいよマジで、逃げないでそっちに　　！

エトワールと赤井が飛翔によって怪鳥の群れを森の上空から追い、先回りしてワイヤを木々の間に張り怪鳥の集団の脚を躓かせ滑りこかせば、後ろから追っていたロイが最後尾を走っていた怪鳥に飛び掛り、キララもそれに続く。

彼らのどこかコミカルで微笑ましい様子に、まるでダチヨウレースじゃないか、と、第二区画解放イベントを観覧中の厚労省地下研修会場内から笑い声が聞こえてくる。ロイは赤井の言いつけに従って神通力を用いず、キララが巫力を使う余地もないうちに怪鳥の上に馬乗りになって尾羽を耄り取り、民に手際よく配って怪鳥を逃がした。羽根は一人一枚は行き渡らなかつたが、二人、三人で分け合

つて凌ぐ。これで12色と金銀併せて全色を揃えた形となった。全員、息が上がっているが、その表情は清らしい。

「やっと色鬼イベントをクリアしたのかな？」

「全色揃えたのだから、この設問は終わりだろうね」

ホール内では、他管区アガルタスタッフからの容赦ない駄目出しが依然として続いている。

「他愛もないイベントだったな。死者もなかったし」

「第一〜第三試練までぶっ通しで、となると難易度バランス的にはこんなもんだろう」

イベントを観覧するアガルタスタッフたちの推測通り、第三試練突破の表示が出現し、色鬼の設問に失敗して石化していた数名の素民のポーズ状態が解け、無事隊列に復帰。彼らはばつが悪そうに一言一言コメントをしつつ、赤井や他の素民たちに生還を歓迎されていた。

彼らが喜んでいたのも束の間、地面に大きな亀裂が何本も走り、木々をなぎ倒しながら岩が地面から隆起し、断層となって岩壁が聳え立つ。切り立った断崖の壁面には、正方形の黒い岩扉が埋め込まれている。赤井たちが扉を力づくで開こうとするも、扉はびくともしない。扉には、キララとパウル王に見覚えのある二つの紋様が刻まれていた。

それは、グラнда王家の紋様、そしてネスト王家の二つの紋章。嘗て姉妹都市関係にあったという、二つの国家の強い結びつきを象つたもの。

キララとパウルは互いに顔を見合わせ、導かれるようにそれぞれ王家の紋様の上に手を重ねる。すると、扉は血族の正当性を認め

たのか、そこに何もなかったかのように透明となつて消え、どこへ
続くともしれぬ洞窟への入り口がぼっかりと開いたのだ。

「いよいよ、ここからが本番か」

次々と試練を突破してゆく赤井たちの一団を、中央の投影装置の
脇にブース状に設置された二十七管区仮設司令部から注視するのは、
顔の半分以上を多い尽くすゴーグルを装着した、茶髪のくだけた雰
囲気の青年。ぴりぴりと緊張感を進らせる彼に、躊躇もなく近づい
てきた者がいる。彼女は真横から、彼にそつと声をかけた。

「伊藤プロジェクトマネージャー。少しお話があります、宜しいで
すか」

「……これはこれは教授。お見えでしたか。お越しいただき、どう
もありがとうございます。今日も素敵なお召し物で」

伊藤がプログラム閲覧用ゴーグルを取り深々と90度身を折り曲
げて頭を下げた相手は、女性SP二人に付き添われた、浅蘇芳色（
薄い緋色）の色地に抹茶色ぼかしの入った色留袖姿の貴婦人。黒髪
を夜会巻きにして、優美な雰囲気醸し出している。

「ありがとうございます。お世辞でも着物を褒めてくれるのは嬉しいわ。こん
なお婆さんでもね」

茶目つ気たつぷりに伊藤に軽く会釈した貴婦人は、名のある茶道
家のようないでたちだが、古風な印象とは正反対の経歴を持つ。

東京工業大学 情報理工学研究科 バイオロボティクス研究室。

蘇芳 桐子 名誉教授。

ロボット工学の権威にしてA・I・開発の第一人者である。

発達したアンチエイジングテクノロジーにより、その肌の張り艶
から容貌は三十歳代にも見えなくもないが、彼女の実年齢は七十三
歳だ。百歳が定年の現代社会において、世界の第一線で活躍し続け

る現役の工学教授である。日本アガルタの技術顧問。日本アガルタ創設に多大な貢献を果たしている人物だけに、伊藤も最大限の敬意をもって接する。

彼女は国内外の学会、パーティーなどの公の場では決まって緋色の和服を着用する。

「そうそう、先日あなたの奥様が送って下さった和三盆抹茶ケーキと煎茶セット。大変美味しゅうございましたよ。お気遣いなど、いいりませんのに」

伊藤は案外、まめな男だ。重要な仕事相手には贈り物も欠かさない。妻の内助の功もあるのだが。

「蘇芳教授の研究グループに開発いただいた”高度学習型A・I・スオウ ver 4.1”。おかげさまで我が管区をはじめ、日本アガルタ全管区で順調に運用されておりますので」

「そのことです。スオウシリーズは、ロイの失敗を踏まえて発注書通り、御しやすいよう感情パラメータを最小限に抑え、短命の仕様としております。しかし、ですね……」

「……と、申しますと」

何か運用に不備があったかと、伊藤も緊張する。

「先ほどの赤井神とのやり取りを見て、本当に私の創ったスオウなのかと目を見張りました。あれが何を思ったか、あのように必死に胸に迫る声を出して命乞いをしていると、何やら哀れに思えてまいりましたね……。それを見て情が移ったか、赤井神が“親代わりになる”と仰っていました。複雑な心情になりましたよ」

女教授は何かを堪えるように、視線を伏せ薄く微笑む。綺麗に山なりを描く目元。虫も殺さぬような趣の品の良さが、彼女の伶俐な言葉と対照的だった。

「何一つ、あれの心情など気にも留めてやらなかったのに。私こそ

が生みの親だと、陰ながら主張したくなってしまうたのですよ。かように無責任なことは研究者にあるまじきこと。赤井神に対する、幼稚な敵愾心というものでございませうか」

不思議なものだ、と蘇芳教授は回顧する。彼女はこれまで一度も、A・I・に感情移入したことなどなかったのだ。何故なら蘇芳の全ての感情プログラムは教授によって、文字通り“設計されたモノ”。人間の反応を似せただけのものにすぎず、その全てを知り尽くしていたから。感情移入するなど滑稽なこと、何故ならそこに人格は存在せず、造られた“人格らしきもの”があるだけなのだから。

「あれを助けてやりたくありません」

赤井神が父と呼ばせるなら、私は母と呼ばれたいのだ。

彼女は恥じらいながら、そう言い添えた。

「し、しかし……既に赤井によって運用されておりますので、代替のスオウと取り換えることは」

「心配には及びませぬ。彼女をあの世界から引き離すということではありません。赤井神にお伝えください。私が欲をかってスオウに仕込んでおいたものが、今更ながら役に立ちそうです。スオウ一族の短命の要因は、高度の免疫不全に由来します。免疫系の不在。よって、免疫系を補うことができれば短命を回避できませう」

伊藤は彼女の意図するところを汲むことができず、教授の言葉を繰り返すにとどまる。

「免疫不全……ですか」

「ええ。お気づきでしょうか、伊藤さん。また、赤井神も生物学のバックグラウンドをお持ちとのことで、免疫不全と聞けばお気づきになるかと存じます」

「む！なるほど」

神の免疫系、造血幹細胞をキララの体内に生着させるとい
うのか？

もし、赤井の神体を受けることになれば……異種移植細胞、この場合赤井の細胞を体内に生着させることによって、赤井と同じように、微弱ながら神通力らしきものを揮うことができるようになるだろう。伊藤は敢えて尋ねることはしなかった。さすれば長命にして、神通力を自ら行使することができる、優れたA・I・Iに変身させることができる。

「ロイには決して、引けをとらないと自負しておりますよ」

それは冗長性というより、蘇芳教授のプライドを反映したものだだろう、と伊藤は察した。何と恐ろしく聡明な女性なのだろう。伊藤は彼女の抜け目のなさを思い知る。死後福祉局きつての伊達男の頬が引き皺つたのを、愉快そうに観察していた教授は

「ふふ……仕様書には敢えて書いておりませんでしたね、要求されておられませんでしたので。スオウが血族として維持されていれば、かような使い方をする必要はありませんでしたから。私は厚労省あなたから、このように発注を受けました。ロイに準じる性能のA・I・Iを創ってほしいと。しかし私が“ロイに準ずる”で、満足できましようか？」

自分より若い方にそのように言われると、意地でも冗長性以上のものを仕込んでしまいたくなるのが性格たちでしてね。蘇芳教授は柔和に微笑み、とん、と自らの胸を叩き澄ました顔をする。仕草に愛嬌はあれど、彼女の行為は聊かばかりの可愛げもない。故フォレスト教授が何するものぞ、日本ロボット工学界の牽引者 蘇芳 桐子、ここにありと主張しているように見えたからだ。

「なんにつけても、最高を目指さなくては。人生、詰まらないではないですか」

それをやってのける彼女の言葉には、ずっしりとした重みがある。そうありたいものだ、伊藤も同調した。彼女はフォレスター教授よりも格下との評価を受けることに、我慢がならなかったのかも知れない。

「さすがは蘇芳教授。御見それいたしました」

教授は人差し指を立てて、ふつくらとした下唇に僅かにあてがった。

「しかし他管区には内密に。この管区でのみ、第三区画以降からそのように運用してください」

「……何故。ご教授いただけただけのですか」

「それも内緒です」

「どうしても内緒ですか？」

隙ありと見た伊藤が追い討ちをかける。

「私の口から言わせないで下さい。ここに入居したくなったのですよ。終の住まいはこの管区に決めました。私には実子がいません。ならば巫女として伸び伸びと働く我が“娘”に囲まれて暮らすのも、悪くありません」

まだ完成を見ない管区に入居を希望する。それは、最高の評価と期待を受けたと言つても過言ではなかった。何故なら敬虔なカトリック信者である蘇芳教授は、当然米国アガルタ、千年王国への入居を希望しているとの噂があったから。赤井の構築するこの27管区は非宗教管区、既存の宗教管区ではない。

彼女の告白は、実質宗旨替えにも等しいのだ。何故、今日、僅か数時間観覧しただけでそれほどまでに赤井に入れ込む気になったのか、一目惚れに近いものなのか。伊藤は教授の本意を掴みあぐね、内心首を捻りながらも愛想よく会釈をした。

「光栄の至りです。必ずや、教授に御満足いただける区画を造り上げますことをお約束します」

「今から、楽しみができました。それでは、これで」

しやなりしやなりと退出してゆく教授の後姿を平静を装いつつ見送りながら、気付けば左手がガッツポーズをしている。いつになく浮かれていた伊藤に、教授との会話の終わりを待っていたかのように背後から黒服の男が足早に近寄り、内報が入った。

伊藤は緩んでいた表情を引き締める。

「伊藤マネージャー。ご指示のあったように、西園の家を訪ねたのですが……」

「ご苦労さまです。赤井さんには会わない、と言いましたか」

伊藤は右手で口元を覆い、表情は変えず声量を落とした。会わないと言うのなら仕方がない。無理強いはすまい。西園に下された処分は懲戒免職。官僚にとって破滅的、かつ最も不名誉な幕引き。その処分が省内に発表されて以降、厚労省には金輪際近づきたくもないだろう。旧知の者と顔を合せたくないという心情も理解できる。

しかし大変な不祥事をしでかしてくれたのだ。伊藤は西園を憐れむ気にも、庇いだてする気にもなれなかった。機密維持のための口止め料も兼ねて退職金だけは融通したが、それ以上に彼が西園に対して出来ることはない。再就職は天下り関連企業であっても、ほぼ絶望的であろう。相応の罰として受け止めるべきだ。

「いえ……それが」

観覧中のアガルタスタッフたちの目を引いているのが分かる。囂然たるホール内で、誰もが伊藤を窺っていた。内通者はその様子を

察し一層声を落として告げる。

「西園は亡くなっていました。一週間前に」

「退職ついでに、辞世したということですか」

現代日本において、人間の捜索は現実世界と死後世界双方で行わなければならない。個人にとって死とは、必ずしも結末的な意味を持たなくなっていた。よって殺人事件も事故も傷害事件と同等の取扱いとなり、殺人及び遺体遺棄罪でない限り、死刑は適用されない。これとは逆に、被害者の脳を著しく傷害した犯罪は最大級の刑罰が科せられる。

訃報ときけば「ご愁傷様です」と返していたのは過去の話で。人生をリタイアし、アガルタで第二の人生を送るという意味においては人生の門出であるとの解釈もできるため、「おめでとう」という挨拶も今や礼法に反しない。

葬祭業者はしめつばい葬儀を取りやめ、華やかな門出の祝宴として新たな葬送のスタイルを提案し、歓談とともに故人を偲ぶ場合もある。

隠居程度の認識でしかないのだ。若くして隠居するか、遅く隠居するかの違いはあれど。西園のキャリアにケチがついた以上、就職氷河期での再雇用は難しい。先走った感はあるが、人生を終えるという選択肢もなきにしもあらず。

「それはかえって好都合です。サイバーテロへの関与への彼女の嫌疑も晴れるでしょうし。アガルタ内で赤井さんと直接面会の場を設けましょう」

アガルタ入居を考えている者が、サイバーテロの手引きをしていとは考え難い。現世で犯罪を犯した者は、量刑が確定し地上で刑期が終わるまでアガルタへの入居は不可能となる。西園がアガルタに入居できたということは、嫌疑が晴れたも同然だった。伊藤はい

っそ晴れやかな心境で、赤井と西園をゆっくりと落ち着いた場で引き合わせてやりたかった。

「西園はどの管区に入居しましたか。死後住基ネットには即日データが上がってくるはずです。該当管区プロマネにかけあって融通しましょう」

「それが。投身自殺で。既に茶毘に付されています。頭部損傷により、アガルタ入居は不可能だったそうです」

伊藤は何かに思いを巡らせるように、沈痛な面持ちで瞑目をした。アガルタへの入居を拒むほど、それほどまでに、西園は追い詰められていたのだろうか。

西園の身に何があったのだろう。仮想世界では全知全能を誇る伊藤の、現実世界において何と無力なこと。かつての部下の胸中を察してやれなかったことを、表情ひとつから気取ることすらできなかったことを。そこに必ず存在していたであろう、西園の心の闇を理解せず救えなかったことを、心より懺悔したのだった。

「わかりました。ご苦労さまです」

「いかが致しましょう。このことは、赤井神には伏せておきましょうか。西園とは連絡がつかない、と」

「いつまで隠し遂げるものか分かりませんが、そのように」

第4章 第11話 白の女神の焦燥

「何を言い出すんだ急に」

構築士補佐官 鴻池トウチ 弘人ヒロトは赤井の第二区画解放イベント、パブリックビュー会場の隅で引き攣れた笑いを浮かべ、いつになく思い詰めた様子の携帯端末の中の女神を見つめた。彼女、白棕のアバターに見詰められるたび鴻池はそのえもいわれぬ完全なる美貌にKOされ生唾を飲む。

『もう一度申しあげます。わたしの疑似脳の感情制御を解き、この二十八管区世界で完全に生脳の再現をしていただけませんか』
女性ですらない、性別を超越した神というアバターなのだから欲情して穢してはならない……、と自身に言い聞かせてはみるもの、中身は自我を持った人間。複雑な反応を見せる。今も上目遣いでこちらを見てくるが、その視線に堪えられない。

自分だけの世界で女神を籠絡し、身も心も支配しているという危険な錯覚に陥り、ともすれば世界の支配者であるように思えることもある。ハイロードに性別はないが、構築士補佐官には情欲はある、恋愛シミュレーションゲームのように、仮想世界中の構築士との対話、果ては模範的な恋愛にどっぷりとはまってしまう構築士補佐官も多かった。

『お願いします』

とりわけ、監禁されているハイロードは信仰の対象として設計されているため、美しさも聖性も格別の造形を与えられている。邪心のない澄んだ瞳に見つめられると、もう骨抜きにされてしまうのだ。鴻池の邪念などどこ吹く風、女神は何も気付かず、淡々と用件を述

べる。

『負け惜しみなのは分かっています。ですがわたしは……ある思いを払拭できません。疑似脳が制御を受けていなければ……』

赤井のようになれる。そう言いたいのだろうか。

慎重に言葉を選びながら、鴻池担当は不安に襲われた。彼女は切羽詰ったような表情で、こう繰り返すだけだった。

『わたしは女神である前に医者です。精神科医です。構築より治療を優先したいと思っただけです。ここまでやってきました。しかし結果は惨憺たるもの』

気付かないうちに、感情を欠いたロボットになってしまっているのか。認めたくない、受け入れがたいことだった。彼女は感性を大きく欠いていると分かっている。疑似脳の制御、それは長期監禁により構築士の人格を守り正気を保ち続けるために必要なことだ。疑似脳の感情制御を解けば、人の精神統合が脅かされる。恐怖し、漠然とした不安を感じ、孤独と無力感に苛まれ、苦痛を覚え、これらの状態が続くと、数カ月としない間にパニック状態になり精神崩壊を起こす。だから構築士は不安を感じないよう、感情制御および構築マニュアルとの融合は必須。

アガルタ二十八管区という世界での生活は、彼女にとって終始快適で居心地がよく、幸福感と充実感を味わえる。エンドルフィン脳内麻薬を否応なく分泌し続けているような……。監禁されているからといって、何一つ不自由を感じることはない。必要な情報があれば鴻池が何でも取り寄せ、甲斐甲斐しく世話をやいてくれる。外に出たいとも感じなくなっていた。

敬虔な信仰を捧げてくれる従順な民、各区画は発展し、滞りなく進む構築。一見、全てうまく行っているように見えた。しかし

どれだけ精神科医としてのノウハウを尽くしても、脳機能障害を持つ患者の治療成果だけは出せなかった。その原因を、見出せずにすらいた。

鴻池は白棕を諭し、窘めながら

「そんなことをすれば、廃人となりかねない。それ以前に、疑似脳に制御を加えないことは、構築士に対する許しがたい虐待だ。内規にも定められている。感情制御あってこそ、俺たちはお前を安心して仮想世界に送り出せる」

しかし彼女は食い下がろうとする。

『赤井神に対しては虐待ではないのですか？ わたしが彼のようにもつと民に共感し、苦楽を共にすることができれば……』

白棕には理解できている、急にそんなことを言い出したとしても、ここは厚生労働省。人権を最大限に尊重しなければならぬのだ。感情制御を解除することなど認められないし、鴻池は白棕の身を案じてその選択肢は絶対に選ばない。だから、我俣を言えば鴻池を困らせるだけなのだ、白棕にも分かっている。あてつけのようなものだ、これ以上我を通しては駄目。そう思えど、歯止めがかからない。

この世界に入ってより211年もの間、仮想世界で押し殺され続けていた彼女の感情が、情熱が、彼女の胸中で出口を求めのたうち回っているかのようだ。

「西園元担当官による赤井への虐待の事実があり、糾弾された。だが……それでも赤井の精神の健全性は保たれていた。それは奇跡なんだよ。伊藤PMの公開した赤井の疑似脳活性地図のログを見ていたか？ 違うんだよ……根本的に違う。人間のそれじゃない、生き神のような奴なんだ」

あるいは、西園は赤井の特質を見抜いていたともいえる。赤井は不安も苦痛もパツシブに受け止めながら、それを昇華しうる極めて奇妙な神格の持ち主だと分析結果が出ている。赤井が常神であったのなら、西園は早々に見切りをつけて不具合を伊藤に通報していたに違いない。

赤井の入省は未知との邂逅、逸材の発掘といってもよかった。

『しかし、わたしも同じ状況になれば』

鴻池は白棕の思いを無碍にするかのように、かぶりを振った。

「やけを起こすのはよせ。A・I・の幸せを思うがあまり、正気のまま一年間も城壁に磔になっていたような奴だぞ。同じことがお前にできるのか？ 奴は異常なんだ。正常な状態ではないんだよ、西園が彼を洗脳したのかもしれないし、彼の地の性格なのかもしれないが」

鴻池は分かってくれ、というように語り掛ける。

「彼のように、なってはいけないんだ」

『鴻池さん……わたしはどうすれば。どうか、現状を変えたいのです』

「早く構築を終えて、現世に戻ってこい。白棕、お前に何かがあったら」

俺は……。彼は言葉を噛み潰した。惚れ込んでしまっているという言葉では足りなかった。

『鴻池さんが咎められますね。西園さんのように、懲戒解雇になるかもしれませんし』

そうではない、保身などではない。鴻池は反論したかったが、ぐっと口の中に言葉を飲み込んだ。

『すみません鴻池さん。無理なことを言って申し訳ありませんでし

た。仕事に戻ります』

白棕は虚ろな表情で鴻池に礼をすると、定期通信予定時間を大幅に残して通信を切った。神官や侍従、彼女の召抱える七名の使徒（二級構築士）たちに暇を出したおかげで、久々に”白の神殿”の内부는閑散としている。仮想世界の時間の流れの方が速いため、現実時間速と同期して閲覧されている赤井の構築の様子は、白棕の世界に後日まとめて配信される。続きが楽しみ……ではない、正直なところを言うと、続きを見るのが怖かった。彼の構築の様子は、白棕の世界にとって閉塞していた何かを打ち破る、重要な突破口となるであろうけれども。

密室の至聖所に一人きり。天蓋を引き祭壇上の褥に横になり、うつ伏せになって物思いに耽ける。私は一体、どんな人間だったかしら……思い出せない。現実世界に戻れば思い出すし、感情も戻るのだらうけれど。ノスタルジックな気分になるのは一瞬で、強く思い続けなければ、悩みも不安も消える。

それほどに安定化された、病まない、強き神の精神こころ。そう在ることに、疑問さえ抱かなかった。

「失礼いたします」

至聖所の外で、呼び鐘の澄んだ音がする。午後8時。スオウ一族の少女が神通力を受け取る為に寝所を訪れる時間だ。

「女神さま。祝福を賜りたく参りました」

『もう少し、あとにしてください』

白棕が拒絶の意思を示すと、やや沈黙があつて

「ご気分が、すぐれないのですか？ 薬師を呼びましょうか」

少女の狼狽したような声が聞こえたので、心配をかけてはいけな
いと我に返る。

『スオウ……おいで、こちらへ』

「仰せのままに」

至聖所の扉を開き、姿を見せたのはピンクゴールドの長い髪をおさげに結った、純白の巫女装束に緋色の組紐帯の少女。銀の王冠をちよこんと載せている。十四歳という若さだが、神聖エルド帝国の巫女王として八つの王国を支配する。まだ若いため統治能力はなく、実質は文官たちの傀儡。腰には一族の証の聖剣を帯び、女神からの祝福を受け、強い巫力を行使し国民にその恩寵を与え国を富ませる。女神信仰を代行する、象徴の女王。

祭壇の下で恭しく膝をつき、白棕の前に平伏する。赤井の管区の粗暴なスオウとは違う。いつもは白棕の近くで祈りを捧げるだけで、大気を介して祝福を受け取り、退出してゆく。しかし……今日は何故か、彼女をすぐに帰したくなかった。

『今日はここに泊まってゆきませんか』

白棕は祭壇から降りると、手を引いて少女を立たせ、褥に招き入れようとしたり。女神と添い寝。前例のないことに、少女は心臓が飛び出しそうなほど恐縮したが、唯一神に求められれば断るわけにいかない。剣を祭壇の外に置き、おそろおそろ、祭壇の隅に横になる。はた、女神と目が合ってぱーっと頬を朱に染めた。

”ああ……しろの女神さま。なんてきれい”

少女が至近距離から見た白の女神は、遠くから眺めて想像していた以上に完璧だった。美しく強く、偉大な唯一神。彼女の神通力を至近距離から浴びると、心の底まで洗い清められるようだ。民の憧れ求めてやまぬ、穢れえぬ至高の存在。その彼女に手が届くほど近い距離にいる。胸が詰まり、感動のあまり声がでなかった。そんな少女を慈しむように、女神は優しく髪を指で梳った。

『お前が五つのときよりわたしに仕えて……お前の名を、わたしは一度も呼んだことがありますでした』

少女はキララのような声を出して、縋り付いたりしない。それどころか白棕に触れようともしない。神と人の距離は、この世界では赤井の世界ほど近くない。人は神を恐れ、その身を遠ざける。それでよいのだと、当然だとすら思っていた。

「女神様は真名をご存知でありますれば、私は”スオウの者”で十分です。母と同じ、祖母と同じ……スオウの名を、誇りに思っています」

彼女は一度も名乗ったことがないが、読心術を心得る白棕は彼女の全てを知っている。少女の名は、コハク。スオウ一族の名は、現実世界での鉱物の名が多いようだ。コハクの類にそつと触れてみる。ぽよつと、柔らかく瑞々しい人肌。A・I・Iであつても体温はある、そして恐怖心もある。

「お前の母は腕の良い巫女でしたよ。祖母も……代々の一族に、わたしは守られてきました」

「亡き母は喜んでいと思います。女神様のためにお役にたつことができ。私には、女神様が全てです。私の命果てるまで、全てに代えてお守りします。それが一族の自負です……」

コハクは滔々と、女神を賛美し続ける。そうするほかに何も知らないから。白棕は彼女に守られるのが当然だと、どこかで思っていたか知れない。A・I・Iだから彼女にはもともと命はない、感情移入しようという気にもなれなかった、その発想すらなかった。

しかし赤井は……キララに命あるものとして接していた。A・I・Iも人間も彼のもとでは真に平等を勝ち得ていた。彼の世界のA・I・Iは命を吹き込まれたかのようなようだ。そんな世界の中で、人間患者たちは生彩を放つA・I・Iたちと交流し、心を癒し、居心地よく平穩に暮らしていた。

人間患者とA・I・Iとの居住区をわけ、人間患者のみを腫れ物に触れるように丁寧に扱ってきた白棕の世界では、信じられない光景

だった。彼が何をしているのか分からないが、模倣からはじめよう、白棕はそう思い立った。

『コハク。わたしは今後、お前に力を授けまいと思うのです』

「な、何故ですか？」

祝福を受けなければ、力が使えなくなる。

コハクは見放されたという顔を白棕に向ける。神の巫女の血族であるということは、一族のアイデンティティであり、彼女が巫女王として国を統治する論拠なのだ。巫力を持たないことは、諸侯のパワーバランスを崩すと常々言われてきた。許されない。幼いながら、女王として染み付いた政治感覚が、これはいけないことだとコハクの心に訴えていた。私が特別でなければ、スオウの一族として認められない。民にも見放され、暴動が起き国が滅びる……。

『それでよいのです。わたしから巫力を授けられ、怖かったでしょう？ 使えば命が磨り減る。そうと分かって、使ってきたのでしょ

う』

スオウ一族は、神の懐刀だ。巫力を持たせ、危険が迫ったときに身代わりとするための……。そればかりではない、神が長き眠りについたとき、神に代わって領土を治め構築を進めてくれる存在でもある。

『わたしには人の心がありません。お前たちには酷なことを強いてきました、それではいけないと、今更ながら気付いたのです』

「ふえ？」

間抜けだが愛らしい声を出す。白棕に連れ添い、最も身近にいてくれた彼女を救わなくてはならない。そんな思いがこみ上げてきた。大丈夫、私は強くなった、十代そこらの少女に守って貰わなくとも自分の身は自分で守れるし、これからは彼女の代わりに私が直接国を富ませればいい。七名の使徒もいるし、赤井はたった一名しか使徒を持っていなかった。それでも彼の世界は充実している。なんと

いうことはない、千年、眠りにつかなければいいのだ。そうすればスオウ一族に留守を任せず、あたりまえの人生を遂げさせてやれる。……彼女は腕の中の少女のか細い呼吸を聞きながら、静かに覚悟を決めた。

「しかし、私は巫女で……」

巫力などなくとも、お前はわたしの立派な巫女です、わたしがそう認めます。白棕がそう言うってぎこちなく彼女を抱きしめると、コハクはぼろぼろと澄んだ涙をこぼし枕を濡らした。

「ありがとうございます、しろの女神さま」

*

【アガルタ第二十七管区 第3391日目 第二区画内 第2日目】
【総居住者数 2870名(第二区画内 958名) , 総信頼率
99%(第二区画内 100%)】
【アガルタ歴9年106日 午後15時48分】

第三試練を突破した私たち一行の前に、突如として怪しさ満点の洞窟が出現した。私とエトワール先輩を先頭に、ぞろぞろと五十名の探索隊が中に入ってから三時間あまりが経過してゐる。

洞窟内部はダンジョンなのかと思いきや、自然洞窟って感じ。

逆にすげー歩きにくい。ダンジョンならまだいいよ、ダンジョンって軽く舗装してあんじゃん。自然洞窟の足場の悪さときたら。いや、足場以前に泳ぎにくいなの。そうなんです、洞窟内には水脈が流れていて、私ら全員腰から下はずぶ濡れです。立ち泳ぎしながら進んです、ヘコアユの行列みたいだね。ヘコアユ知らないって？
立ち泳ぎする魚だよ。

時々首まで水に浸かって溺れそうになるわ、岩にぶつけて膝は擦りむくわ、水底には毒のある蛇がいて、踏むと驚いて取りあえず足を噛んでくるし私が先頭なので私の足が餌食になってる。くそー、イトワール先輩代わってくださいよ。と、しんがりを務めているイトワール先輩を睨み、ふと溢したくなる。私と先輩は照明替わりになるから前後で、ヘッドライトとテールライト……ってやべ、こんなこと言ったらJASRACに怒られるわ。著作権切れてるしまだ口に出して歌ってませんけど。

水中行軍は体力奪われるし重い甲冑の老人御家人なんてへとへと。ついて来れそうにない人は、何人が固まってその場で休憩してもらい、体力のある若者たちだけ連れて先へ進む。パウルさんも辛そうだったけど、根性でついてきてる。見上げた根性だよ。

「これはどこまで続いているんだ。アカイ、あてはあるのか。全員が消耗してしまうぞ」

キララが音を上げた。体力あるとはいえ、冷え性の女の子がずっと水中って辛いよね。……そういう問題じゃなくて普通に疲れたのか。すると先輩が黙ってキララの前に出て、水中に潜りキララの両足を掴んでよいしょと持ち上げた。先輩が負ぶってあげるとか、マジ販促、じゃなくて反則じゃね？ ふわふわの白翼にまるごと埋もれて気持ちいいのなんのてさ。なのにキララったら

「っ！？ な、何をするんだ。下ろせ」

とか言ってる。え？ 疲れてる時に天使に負ぶってもらえるとか何が嫌なの。腐女子の夢なんじゃね？ 違うか、キララは別に腐女子じゃないのか。何なら元天空神とその巫女で超気まずい仲なのか。あーこれ修羅場きちゃう？

『騒がずにしつかり捕まってなさい。右足首の古傷が痛むのだろう』
「……え、エトワール？ ……何故それを知っている」
ん？ キララって古傷あんの？ 知らなかったよそんなの。そりゃ歩くの辛いよね、距離的にはもう結構歩いてるし。

てか先輩、それ言っちゃったら何で古傷のことを知ってる？
って話になるじゃん。記憶あるのバレちゃうじゃん、墓穴掘ってますよ先輩。あーどうすっかなこれ……先輩、ひっぱたかれるぐらいは覚悟してくださいよ。

「まさか、記憶が！？」

ほらー。ほらほらー。あ、キララさん剣の鞘に手がかかっていますか、どうするの？ 平手打ちじゃなくて、打ちは打ちでも打ち首？ 打ち首ぐらいは覚悟してくださいよ？

『そう、身構えるな。だが私にも少しは、前世の記憶がある。私が憎かるう』

先輩は観念して白状した。私は背ごしに、はらはらドキドキしながら聞いていた。あーどうしよ、今からここでバトルとか口論とかその他もろもろ始まっちゃったら。今それどこじゃねーの、喧嘩して和解して焼け棒杭に火がつくなり何なりしてもいいけどさー、その後でやって。ね？ で、仲直りしてよ二人とも。

『私も神様と同じく不死の身だが、何か思うことがあるのなら、煮るなり焼くなり気の済むようにする』

何と潔のいい男だよ先輩。さすがもうすぐパパになるだけあるよ。そうそう、エトワール先輩の日本人妻が待望の長女出産なんだって。予定日は一週間後とか言ってたな、仕事も上の空じゃない先輩？ 色々と長女の名前考えてるんだって。先輩、娘の名前「きらら」はどうかって妻に提案したら、妻にポテチ食べながら「お米じゃある

まいし……」って言われたとか。それ「きらら397」っていう北海道米だし。違いますよ奥さん、お米じゃないんです。

とにかく、実子に同じ名前をつけようと思うほど、実はキララのことを娘のように大切に思ってるんだよね先輩？

「卑怯者……」

キララは先輩の背に顔をうずめ悔しそうに呟いた。先輩の背中で彼女は何か考えている様子だった。エトワール先輩にどういう態度とっていいか、彼女も分からないみたいだ。

「しかし、アカイに許され、贖罪のために現世に戻ってきたのだから。アカイに許されたのは、私も同じだ……彼が許した者を、私が咎めることはできない」

『……咎める気になつたら、いつでも咎めを受けるよ』

先輩がそう言った頃には、キララはもう寝てた。どうやら先輩の背でそのまま寝てしまったみたいだ。くてー、ってなってる。先輩の、いい香りのする天然羽毛100%に埋もれて気持ちよかったんだよねきつと。あ、先輩が人差し指立ててしーってやった。起こすなってこと？起きてるとかしましツンデレ娘だけど、喋らなければ可愛いんだよね、残念なことに。寝顔が可愛いよ。

更に歩くこと三十分。私達の疲労もピークに達してきた頃。何か酸素濃度も低くなってきたしやべーな。

「あ！あれを見てください神様」

パウルさんの指差した先には、黒壁に覆われた洞窟の、円筒状のただ広い部屋に出た。不自然でしょここまで自然洞窟だったのに。古代遺跡かな？床も黒いけど色々魔法陣みたいな模様が描かれている。部屋の中心にはオリエンタルっぽい彫刻の凝った白い台座があり、ばかでかい銀の金属柱がひとつ鎮座してる。縦横は1m x 1

mぐらい。高さは何メートルだろう、私の身長の二倍はある。何かのモニUMENT？ そのわりには芸術性を感じないね、加工もしていない寸胴な金属柱だけって。

「ん……、赤井様、少し」

金属柱に触れて確かめていたロイが何かに気付いたみたいだ。

「触れてみてください、これ不自然に温かいです」

でもここは真冬の洞窟の中……何で温かいの。どれどれ、と触れると確かに温かい。しかも気味悪いことに、人肌ぐらいの温かさ。

ロイが耳を当てた。うん？ 石の中から何か聞こえる？

『中に何か熱源があるのでしょいか。割ってみましょいか』

するとエトワール先輩がキララを背負ったままスクエアを描き、片手でボードを呼び出す。

子連れ狼みただよ。違うね、子連れ狼には手押し車か。

”何が入ってるか分からないのにいきなり割る奴があるかね、まずX線CT撮れよ”

ごもつとも。非破壊検査ですね？ 破壊検査は危険ですよ。てか私やり方わからねー、つので先輩が撮ってくれた映像を見れば……人間っぽいシルエットが中にある。金属塊の中に人間入ってる

！ なんかこういうの、昔の映画で見たことあるよ。スターウォーズだっけ。いやスターウォーズでもこれだけ丸ごと人間入ってるのいないよ。死体？ 死体は嫌だよ……？ でも温かいし。

『え？ まさか……中に、人が？ 生き埋めに！？』

あーでも自分でもアナライズかけると、構造は分からないけど中に生命反応がある。体温37度、中で何か鼓動してる。マジ？ どうやって生きてる？ てかどう救出すればいいこれ？

『いや人間なら死ぬだろうね。中にいるのが、封印されているという精霊じゃないのかな』

エトワール先輩、真剣な顔してますけど格好がまず真面目じゃないので気を抜けば笑えます。てかやっとな精霊さんにご対面したのに、対面できてない。顔が見えないよ。

「どうやらそのようです。ネストの銀の精霊です」

パウルさんも興奮気味に同調する。えー!? マジ? この人構築士だよな? 何この勤務形態! 生き埋めとかありなの!? 私の境遇なんて全然ましじゃん、さすがに生き埋めはないよ! 人柱もいいところだよ。

”彼女はこういう役どころなんですか?”

先輩は下の台座を少しナイフで削り、その粉末をインフォメーションボード上にかざして解析かけてた。C14放射性炭素年代測定ですか。色々小技持つてるなー先輩、考古学者かよ。あとで全部教えてもらおうっと。

『解析によると、この状態になってから百五十年は経ってるな』

「百五十年、おお、ちょうど伝説に合致します」

百五十!? 石の上にも三年どころの話じゃない。動けないってレベルじゃないわこれ、てかこの構築士さん自分で埋まるとか何やってんだ? どうやって埋まった? 構築の仕事できない、働けどころか動けないじゃない。誰が決めるのこの役、担当官に「えー、今日からちよつと銀塊の中に百五十年ほど埋まっててください」とか言われるの!? 怖っ!

怖いといえば、さっきから背筋がぞくぞくするんだけど……。気のせい?

『精霊さん、聞こえますか? 大丈夫ですか、意識はありますか? ネストの森の呪いを解いていただけませんか』

コンコン、と丁重に銀塊をノックしてみる。ノックはかえってきませんでした。返ってきたら怖いよね。

「どうしましょう、割りますか？」

ロイが神槍構えて物騒なこと言ってる。ロイ、神通力の通った神槍でスパーンとやっちゃったら精霊さんの胴体もスパーンと切れちゃうからね？ ちよつと穩便に、という言葉を覚えようか、チミ。一回この洞窟の上をぶち抜いて帰って考えるかなー。というわけで、腰入れて銀塊を持ち上げようとしてみる。台座からびくとも動きません。1mmも動かないよ。先輩がぼーっと突っ立って銀塊を見てるからちよつと手伝ってよ。

『エトワールさんも手伝ってくれます？ 持って帰って何とかしましょ』

『それは物理的に動かないと思いますよ。封印が施してあるなら、それを解くのが定石です。下手に動かして壊れてはいけない』

はいはい正論ですね。てかさろそろキララ起きて？ さすがに寝すぎ。って思ってたならその思い通じた、むっくり起きました。あ、よだれでてるよ拭いて拭いて。

「この洞窟の入り口は、グランダとネストの二人の王を導く封印が施されています。この封印も私たちが解くものでは」

『そうかもしれないね、もう少しく調べてみましょう』

ふーむ、どうしよつかね。そう思ってふと顔を上げてみると、いかなね。非常にいかな。

あ……れ……？ あれれ？

なんかさつきから背筋がぞくぞくするし誰かの視線がビシビシくる、こつち見んなマジで。と思ってたら、銀塊の置いてある石室の黒い壁一面に目があるよ？ さつきは目なんてなかったのに、精霊さんの塊に触ったからかな。壁に耳あり障子に目ありなんてもんじやない、コーヒー皿大の、爬虫類的な目がめっちゃあるよ！？

「赤井様！ ここには何かいます！」

「うわあつ！ 目だ！」

「こつちを見ているぞ！」

これには、最終的に三十人ほどになったネスト御家人たちも大パニック。うん、気持ち分かる。私もお化け怖い。

でも私的には黒髪に白い着物の女幽霊が一番怖かったりする。ジヤパニーズホラーってやつ？ 超怖いじゃんあれ、見たら畳の部屋で寝れなくなるよ。だから私は大味なモンスターはそれほど怖くないかな。でも密室に目玉おばけかー。この目玉おばけとどうやって戦うかなあ……。壁の中できよるきよるやつてくれてたら助かるんだけど。絶対出てくるんだろうしね。出てきてこの精霊さんみたいにかの塊にされるか。やべー、私がこんな状態になったら構築進まないから絶対アウトじゃん。二十七管区終わってたってなるよ。

『物理結界を張ります！ 皆さん中央に集まって！』

とか指示飛ばしてたらロイが結界張る前に急に突攻かまして駆け出して壁にお目玉に神槍を全力でぶっ刺した！ うわー目玉の色が変わった、黒から赤になったよ絶対ブチギレたでしょ。この壁目玉、全体でひとつのモンスターだったら単に怒らせただけー！！

ロイ！

”ロイは赤井君の親衛隊長なのはいいが、切込隊長だと困るんだがなあ”

エトワール先輩も顔がひきつってる。って思ってたら、ロイ、目玉から槍が抜けないらしい。言わんこつちなーい！ 壁から黒い触手っぽいのが出てきて、ロイの槍から手に絡みつき、壁の中に引きずり込もうとしてるー！

『エトワールさん、結界の維持を任せました！』

私は一にも二にもなく飛び出した。あまり作戦も何も考えず。
ロイのと言えないな！。

第4章 第12話 青の神様と、暗躍する内閣情報調査室

夜の東京赤坂。高級料亭 まつゑ荘にて。

都会のコンクリートジャングルの中にひっそりと佇む、政治家や財界人、官僚御用達のこの店は、古式ゆかしき日本の美の中に近代の趣きが融合している。

日本庭園を一望する離れの数奇屋風個室。本座敷にて、八名の黒服の団が会合を行っていた。彼らは内閣情報調査室、通称内調ないちょうの職員のうち生え抜き（プロパー）にあたる者たちだ。内調の所在地は霞ヶ関の総理府庁舎内なのだが、特に憚られる機密性の高い内容の話は外部で行われる機会も多い。

さて、その場には聊か不似合いな制服姿の女子高校生。その彼女が何故か、上座側にいる。彼女は斜向かいの男と時折言葉を交わしていたが、表情はどこことなく曇っていた。

彼女はどこのご令嬢なのかしら……と、和服姿の仲居たちが勘繰り、不自然な光景を横目に見ながら黙々と給仕する。目利きの厳しい板前の旬の食材をふんだんに使い、素材の良さが引き立たされた料理がずらりと並び、鯛や伊勢えびの活け作りも運ばれてくる。

仲居たちの姿が消えると、立派な掛け軸の前にいた白い顎鬚を豊かにたくわえたグレーのスーツの老紳士が、ビールの入ったグラスを手に取り口を開いた。

内調No.2 プロパーにして次長の竹原たけはら 義一ぎいちである。

「先ずは東くん。厚労省アガルタプロジェクトからの復職おめでとぅ、そして任務ご苦労様。内調のみならず厚労省にも十分な成果があったようで、相互に益のある素晴らしい仕事をしてくれた。一言、

コメントをもらってもよいかね」

東はウーロン茶のグラスを取って立ち上がり、復職の挨拶の言葉を述べる。

「昨日より四年ぶりに内調に復帰する運びとなりました、東 沙織です。室員の皆様にはまた色々ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、職務に際しては粉骨碎身の覚悟ですので、よろしくお願いいたします」

「乾杯！ お疲れ様」

「お疲れ様」

乾杯の発声とともに東にグラスを合わせ、黒服たちは杯を乾す。

東は未成年の設定を忠実に守り、律儀にウーロン茶を飲んだ。

「女子高生のいでたちだからといって、誰も見ていないよ。一杯だけでも飲んだらどうだろう」

「いいえ結構です」

酒を勧められても、彼女はぴしゃりと撥ね付ける。叩けば金属音がするのではないかというほどの、筋金入りの堅物だ。彼女は以前から魅力的な容姿をしていたが、このとっつきにくい性格が災いして男をよせつけない。ましてや今となっては、女子高生を口説こうなどという気を起こす者はいない。

「早速で悪いが、これを読んでくれ。話はそれからしよう」

東は隣席の黒服にビールをお酌をしていた手を止める。竹原が多機能携帯端末を料理を避けてそっと卓上に置くと、投影モードを選択。東は大きく出現した立体映像の電子新聞を斜め読みにする。いかにもセンサーショナルな見出しが飛び込んできた。

「読み上げてくれ。皆にも聞かせてほしい」

「はい次長。読み上げます。」

アガルタの日本人構築士が世界初の快拳。
人類医療技術、ついに夢の全疾患克服へ。

【記事】

医療技術完成の妨げとなっていた最後の難関が、厚生労働省プロジェクトチームにより遂に陥落した。従来の治療法では脳損傷を受けた人間の脳細胞を医学的に治療・復元することは可能であったが、記憶を修復することはできなかった。

厚生労働省では、仮想死後世界アガルタに治療患者の破損した記憶を転送し仮想世界内でリハビリテーションを実施する取組みを行ってきた。その成果として、脳領域の4割を損傷した22歳の女性脳機能障害患者の記憶を完全に修復したと発表した。

仮想下リハビリテーション治療（VRT）を成功させたのは厚生労働省の甲種一級構築士。

構築士の氏名、経歴は明かさないとしている。

治療を受けた女性患者はさ来月にも社会復帰できる見込み。このほか、アガルタで治療中の三十名の同疾患患者の治療経過も順調で、今後は症例数を増やし、仮想世界内での精神治療技術の更なる実証を目指している。

厚生労働省 岡山 （まゐりやま） 新一死後福祉局長は「世界に先駆けて、待望の治療成果を発表できた。これで実質的に全ての疾患の治療が可能となった。まだ治験段階だが、治療指針を早急にまとめ、医療現場にノウハウを還元したい」と述べた。治療成果は米ネイチャー誌に掲載される……とあります」

記事の音読を終えた東は、竹原に体ごと向き直った。

「大した業績じゃないか。ひとまず東くんの感想を聞きたい」

竹原次長は、実年齢二十九歳という若さで既に情報員として十分

なキャリアを積み重ねてきた東を信頼し、一目置いている。

東は内調プロパーだが、日本の諜報・防諜能力を強化するためアメリカ中央情報局（CIA）で半年間のトレーニングを受けて帰国した、三人の特命情報員のうち一人だ。留学期間は半年とはいえ、訓練はヴァーチャルで行われたため、実際の養成期間は五年間。十二ヶ国語を操り、細腕で銃火器はもとよりヘリや戦車まで扱う。つまり彼女の精神年齢は、三十四歳。

彼女は内調の機密情報を守る為に様々な姿と偽名を使い分けているが、内調では東 沙織を名乗っている。今も本来の肉体を捨て、常備している自身の体細胞クローンに記憶を移植し肉体年齢十七歳の少女へと変貌したうえ、整形手術を施していた。

女であることを捨て、人であることをも放棄しつつある、変幻自在の情報員だ。

確か、彼女の体は三体目のクローンだといったか。やりすぎだ、体を損なうな。と竹原が諫めても聞かなかつた。彼女はプロだった。仕事において完璧を求め、自身もそう在ろうと修羅の道を歩む。彼女の素顔は、竹原以外の殆どの室員にも知られていない。

東は、柔らかかそうな艶のあるストレートの長髪をするりと指先で弄びながら記事を再読している。

「私の口からはコメントを差し控えます、私の業績ではございませんし。それに、目的のためとはいえ赤井構築士には惨いことをしてしまいました。彼の血が流れ、彼の苦痛のうえに打ち立てた成果です」

東は困惑したように電子新聞から視線をはぐらかし身をのけぞると、重苦しい雰囲気の中でずず、とウーロン茶を飲み干した。竹原次長は、深刻な表情で腕組みをして瞑目する。

「そうか。しかしそういうわけなんだ。厚労省がこの一件を大々的に表沙汰にしてみましたよ。動かれてはならない各方面への牽制のつもりだろうが」

内調が組織をあげて追っているのは、謎のDFH計画というものの全容解明だった。

それは簡単にまとめると、日本の国体を転覆させうる前代未聞のクーデター計画である。本来は公安の担当案件のだが、公安内部にこの計画に関与する人間が複数いるとの疑いがあるため、政府によって直属の少数精鋭特命班が組織され、何とか未遂に終わらせようと奔走しているのだった。

27管区サイバーテロのごたごたで、厚労省内にもDFH計画の遂行者、協力者は複数いるとの裏付けがとれた。調査を終えた東が厚労省内のDFH計画加担者に気取られず職場離脱する為には、解雇されて当然と頷ける、分かりやすい罪状が必要だった。彼女は何らかの不祥事を起こさなければならなかったが、その不祥事作りに赤井を利用しようと東が考えついたのは、つい最近のことだ。

東はアガルタのシステム自体に不具合を起こさせる不祥事を望まなかったし、警察沙汰になる犯罪を起こして前科持ちとなるのは都合が悪い。それでいくと、アガルタの構築士を虐待するという不祥事は、アガルタの機密性とデジタル化された構築士の人格の有する”人権”の曖昧さ故に刑事事件にならないが、人道的観点から必ず懲戒解雇処分となり厚労省を離職できる、東の切りうるカードのうち最良の手札であったともいえる。

「勇み足ではないかと、私は思いますよ。公表することによって国内への牽制にはなりますが、国外から狙われる場合もあります」

計画の全容は東が概ね掴みつつある。しかし後一步、情報が揃わず決め手に欠けている。東は何かを隠している、赤井構築士にまつわる何か重大な事実を。竹原は漠然とそう感じた。

赤井を守りたいがゆえのことなのか　赤井という男に、どんな秘密が隠されているのか。

まずは外堀から、と竹中は質問を投げかける。

「伊藤は、DFH計画に勘付しているのか？」

「いいえ、おそらくは何も。伊藤PMはアガルタ内のことに腐心しておられますよ。かねてよりアガルタの医学利用を目指しておられたので、たいそう喜んでおられました」

「狙われそうなのはその構築士だけか。……では合法的に仮想世界を出してもらって、赤井の肉体をこちらで匿おう。いくらだ。その男の報酬は？　生涯給与総額で構わない」

甲種一級構築士の正規報酬は退職金込みで概算50億。しかし赤井の場合、各国からの維持士としての青田買いも熾烈化しており、維持士を務めるとすれば生涯給与総額は120億は下らないと黒服が概算した。

「では120億で獲得しろ」

竹中は更に強気で大風呂敷を広げて見せる。予算はどこから拠出するのだろうと課長が息を呑むが、竹中はお構いなしだ。

「総理に執行委任された、三年分の機密費を用意している。折角だから、内調で働いてもらおうか」

東はびくり、と耳を欬てた。赤井をアガルタから出す……赤井をDFH計画に利用される危険性を思えば、確かにそれは国益のためでもある。しかし、赤井の助けを待っている者がいる。彼は回復を諦めかけていた難治性疾患患者とその家族に必要とされているのだ。

彼という公人を、厚労省から取り上げては いけない。

「しかし……治療が軌道に乗るまで、彼をアガルタから引き剥がすのは好ましくないかと考えます……」

東は必死に、竹中を説得できる材料をさがした。予算執行権を握る竹中がやるぞと言えば、何でもできる立場にあるのだ。アガルタの神を買い取ることだって……。

「アガルタ再生速を上げて、きりのいいところまでやってもらえばいい。考えてもみる、千年も箱庭に監禁されて50億ばかり。一方、こちらの待遇は休暇もあるし家にも帰れる、プライベートも好きにすればいい。一定の成果を出したのち、赤井を買い上げ、厚労省死後福祉局は新しい構築士を二人雇えばいい。円山には話を通しておく。快諾してくれるだろう」

「しかし、赤井構築士を引き抜くとなると、構築中の管区をリセットすることになりますので、初期化費用と賠償金を支払わなければなりません。すると120億ではききませんよ。しかも彼の管区には……」

竹中はそれでもそれでもと理屈を並べたて、赤井の引き抜きを思いとどまらせようとする東の話の腰を折った。

「東くん。どうした、君らしくない。勘違いしてはいかんぞ？ いか」

「いついかなる場合も、国益が第一優先だ」

東はそれ以上、何も反論できなかった。

中央大陸の主峰の山頂に、サヴァレー大神殿という巨大建造物が

ある。

大神殿の主は青の神 蒼雲そうじゆん、アガルタ二十九管区を統治する唯一神だ。

神殿の中央に聳え立つ純白の聖塔は凡そ六百メートル。塔全体を覆いつくす強力な神聖結界のため、人間には不可侵の聖域である。現在、青の神は塔の頂上に引き籠もり、その強大な神通力で彼を仰ぐ民たちに等しく恩寵を与えながら世界を支え、聖塔の中で深き眠りにについている、と伝説ではそう語り継がれてきた。

ところが……少なくとも幾十年は眠りの時にあるとされていた青の神が、いかにも気安くはたき起こされた。29管区アガルタ歴289年の夏、それはよく晴れた日の早朝のこと。

彼の担当官、川添かわぞえ 瑞希みずきによつて。

彼はまだ85年しか寝ていない。予定より随分短い、担当官が起きると言えば起きなければならない。一度目覚め、そそくさと二度寝をしようとしたところ、現実世界側からクリック一つで擬似脳に覚醒シグナル（アラーム）をぶち込まれた。頭の中で不快に鳴り響くアラーム。何故か着信音は黒電話だ。こうなつては起床するより仕方がない。

『ああ眠い。まだ起こさないでくれよう……』

彼はにやむにやむ言っている。幾十万もの民を統べ、畏怖され崇められる創造神も川添担当官には形無しである。

摩天楼の最上階にある、贅を尽くした絢爛豪華な青の神の寝室は白一色に統一され、彼の民からのクリスタル貢物の調度品で埋め尽くされている。360度の眺望を見渡す部屋の中央に置かれた広いベッドには最高級の羽毛が敷き詰められ、羽毛の中に埋もれる形で

横になっていた。

『あー……分かった、起きる起きます！ アラーム止めて！』

ぷるぷると震える指先でスクエアを描く。長方形で呼び出すべきインフォメーションボードが台形になったが、彼は少しも意に介さず大あくびをひとつ。空より濃く、海より深い青き色彩を持つ神。コバルトブルーの短髪が、神殿内に差しこんでくる朝日に反射して煌めきヴィヴィッドに眩しい。

整った鼻筋と薄い唇、透明感のある瑞々しい白い肌は若くシャープな印象を与え、決して不快感を懐かせず、誰しも見惚れてしまうほど整っている。手足の長い長身を見栄えよく見せる筋肉質な神体は、彼の民から集められた信頼によって神通力に漲り、きらきらと輝いている。

彼のアバターの造形は申し分なく美しいと、川添も認めるところだ。

但し、その口を開かなければ……

『んああ……瑞希ちゃんおはよ。！？……俺、寝違えてら』

首を斜めに傾けたまま、蒼雲は半笑いでひらひらと手を振り、寝転がりつつ腰の辺りをぼりぼり搔いたかと思えば、寝癖のついた前髪をいじりながらゴロゴロとインフォメーションボードの奥の担当官を覗き込む。

インフォメーションボードの越しの川添補佐官は思い切り顔をしかめ、両手を突き出して青年の視界を遮る。現実世界側でディスプレイのモニタを手で覆い隠しているのだろう。川添は二十五歳の補佐官で、入省四年目のシングルマザー。ベージュのパンツスーツを着て、パーマのかかった茶髪をおだんごにして頭頂でふわっとまとめ、前髪を編み込みにして横に流している。黄色のフレームのつい

たお洒落な眼鏡を鼻でかけ、現代風の美女だ。服装はカジユアルだが、彼女の仕事ぶりは意外に真面目だったりする。

『まず、白衣を着て。人の話は起きて聞く！ あと、髪をちゃらちゃらいじらない！』

『別にいいじゃん俺グラフィックなんだし、ちゃんと素民と話すときは服着るよ。それに俺男じゃねーの。エロスの欠片もねーじゃん見てよ、股間つるつるよ？ 見たい？ やめて瑞希ちゃんのスケベ！ 啓介君に言いつけちゃる！』

85年の眠りから覚めた割にはよく動くその口をいつそ喉ごと潰して塞いでしまいたいが、川添補佐官は突っ込みを入れる気力も起こらない。ちなみに啓介というのは、川添の一人息子だったりする。啓介をダシに、川添は蒼雲に何かとからかわれる。

そう、このセクハラ紛いのたわ言を垂れ流す青年が、主神役をやっているのだから川添の苦労がたえないのである。アガルタでは男神には女性補佐官を、女神には男性補佐官を宛がうのが通例だが、今からでも遅くないから年配の男性担当官についてもらってこっぴどく叱られるべきだ、と川添が真剣に上層部に抗議したい気持ちをこらえてもう数カ月が経つ。

『少しは神としての品格を持ちなさい。どこに全裸で寝る神がいまつか。眠りにつく時も油断せず、誰に見られても恥ずかしくないように。……どうしてこんな子供に言い聞かせるようなことを言わなくてはいけないのでしょうか？ 情けなくなりますよ』

『いや、だから人間こねーもんこ。結界あるし』

矜持というものを説いてきた担当官の説教を耳にタコが出来るほど聴いたはずの青年が、一度だって補佐官の言うことを聞いてくれただめしはない。ただ、彼は残念なことに構築士としては優秀だったのだ。

彼は統治能力においては他の構築士たちより頭ひとつとびぬけ、

野心旺盛な性格もあって次々と区画を解放し周辺の国々を支配下に置き、強烈なリーダーシップを発揮している。素民はただ彼に信賴を寄せ、彼を賛美し信仰を捧げ続ければ彼の威光によって平和な世が訪れるのだ。ますます人心は惹きつけられ、彼はめきめきと実力をつけた。とりわけ大した苦勞もなく。

彼ほど気楽に構築を進めている神はないのではないか、と川添補佐官は総括する。

彼にとって構築とは、天下統一ゲームのようなものでしかない。

ただ、素民相手にはそれでよくとも、管区開設を迎え人間の利用者がやってくる頃には、それも言うてはいられなくなる。彼は維持士を希望しているが困ったことに、彼には維持士として最も重視されるというていい神としての聖性やありがたみが欠落している。信仰の対象になりうるかという点、もう論外なのだ。

全ては彼の、下品でチャラすぎる性格が災いしている。

ああ……赤井神の半分でも彼に神としての風格があれば……と補佐官は頭が痛い。とはいえ蒼雲も彼なりに素民の前ではある程度演技をしているつもりのようなだが、全身からこれでもかと漂うチャラさをカモフラージュできたものではなかった。構築の腕はよくても、神を演じる演技力とセンスがないのだ。言葉の選び方ひとつをとってもそう、赤井と違って素民の心に響く話もできない。折角の説法も漫談になってしまう。こればかりは如何ともし難い、生来のものである。

『俺、現実世界では寝るとき全裸派だったからもう全裸じゃないと寝れないわけ。分かる？ それやめる言われても安眠妨害なわけよ。それに全裸が駄目っても古代ギリシャの神々なんて割とマツパじゃん。何が駄目なの。もうジェダイ服もとっくに飽きたし、リニョールしてほしいよ』

しぶしぶ、といったようにジエダイ服と揶揄した純白の装束を全裸の神体に着つける蒼雲。見事なまでの猫背だ。

『ほら猫背！ まだ直ってないの?!』

『あーはいはい。85年ぶりの寝起きだから猫背にもなるよ』

白衣はハイロードの一張羅であり、仕事着でもある。これを着なければ、人の服を着られない彼は全裸で過ごさなければならなくなる。彼の衣装は帯つきの着物のようなインナーに、だぼっとしたフードつきの長いローブ。彼の言うように、どこぞの古いSF映画の登場人物のコスチュームに似ていた。彼をデザインしたアガルタ二十九管区のグラフィッカーの趣味なのだろうが。彼は室内の聖泉で顔をばしゃばしゃ洗いさっぱりとすると、白衣で顔を拭いながら要件を尋ねる。

『で、何か用？ 瑞希ちゃん』

『まず私の下の名前と呼ばないで。そして勤務中ですよ、真面目にやりなさい』

何なら怒るのも疲れてきた補佐官である。

しかしその反応を楽しむように、蒼雲は再びベッドに寝転がってニヤニヤとしながら頬杖をつき

『やっぱ久々の瑞希ちゃんはかわいいーね。顔真っ赤にして怒ってるの、すげー俺好みなんだ。頬がりんごみたいでおいしそうだしさ。

外出たら、結婚する？ 啓介君もパパがいた方が喜ぶしさ？ 俺、これ持つてるよー？』

人差し指と親指を合わせて、マルを作ってその中から川添を覗き込む。金を持っていると言いたいのだ。

人の話を聞かない癖とちゃらちゃらと貧乏ゆすりをする癖も、さっぱり直っていない。

『どれだけお金を積まれても、あなたと一緒にするなど願ひ下げです。あなたと話すと疲れず、生気を搾り取られるような？ あな

た疫病神か貧乏神みたいですよ……もう通信をきりましようか』

川添はいい加減、蒼雲の態度にうんざりしているのである。まるで倦怠期の夫婦だ。まだ九年も一緒に仕事をしなくてはならない仲だというのに。しかし蒼雲は懲りていない。

『嘘、何で切るの!? 瑞希ちゃんそりやないよー俺気持ちよく眠りについていたらところを折角起きたげたのに。真面目にやるって! だから要件はなに?』

『赤井構築士の管区の様子が日本アガルタ全管区に配信されています。見ておいた方がいいのではないかと思って起こしたのですよ』

蒼雲は同期の赤井のことをすっかり忘れていたようだ。とはいえ、彼にとってはもう二百年以上も昔の話なのだ。しかも彼は、赤井の素顔すら見ていない。

『赤ちゃん? 誰の赤ちゃんかとはかくしらねーし。あ、俺隠し子とかいないから』

大体話の内容を把握しつつも、おちよくったように頭を掻く蒼雲。イラつとくる川添補佐官。血管の切れる音を聞いて、肩をすぼめる蒼雲。

『誰が赤ちゃんですか! 赤井構築士です。白棕もきちんと見ているそつですよ。少しは赤井さんの演技を見習ってください』

『あー思い出した。あの全然構築が進んでないっていう恥ずかしい落ちこぼれ同期……? てか二百年以上進んでる俺が構築超初心者何を参考にすればいいの? 見るのダルいんでパスでも……』

味噌クソにけなしているうちに川添の頬がますます熟したりんごのように紅潮してきたので、これはまずいと蒼雲も悟り……

『はい見ます! 見ます見ます! 正座して見ます!』

いくらふざけたところで、蒼雲は川添には勝てないのである。川添のクリックひとつで屈服させられる上下関係なのだ。

『あなたには国民の血税を投入されている公務員だという自覚が徹頭徹尾足りません！ そんなことだから、誰も癒すことができない。この管区に入った生身の患者様はただ無為に時を潰しただけ。真面目にやって失敗したのならまだしも、そのふざけた態度！ 大事な時間をあなたに預けた患者様のご家族に申し訳が立ちませんよ！ ライブ中継を見終わったら、反省文を書いてもらいますからね！』

川添のたまりにたまった不満も爆発するというものである。言い過ぎた、と彼女はやや後悔したが、蒼雲には特にこたえている様子はない。

『待つてよー、その言い草だとまるでさ。その赤ちゃんも治療に成功したみたいじゃね？ 誰も出来てないんだから少々大目に見てよ、仕方ないっしょ』

『いいから赤井構築士の仕事を見なさい。これは日本アガルタ全構築士に向けて開催されている技術研修会ですよ、学ぶべきはあなたです』

それを聞いた蒼雲の眉間に一本、きゅっと縦筋が入り青い眉根を寄せた。

『……ありえなくね？ 成功したってこと？ 世界初じゃんそれ、日本神がやったってすげーよ。俺、治療だけは無理ゲーだと思ってた』

蒼雲とて腐っても医者である。これまで不可能だと考えられてきた治療の見込みが少しでもあると聞けば、医者としての血が騒がなうと言えは嘘になる。また、攻略すべき目標ができ、張り合いも出てくるというものだ。彼の背筋が、珍しく伸びている。

あの、何事にも適当だった蒼雲が、珍しく刺激を受けているよう

だ。川添は赤井のことを蒼雲に話してよかったと感じた。

『だから起こしたのですよ。やる気スイッチ、入りましたか？』

『入ったどころじゃねーわ。瑞希ちゃん……俺、たしか他管区留学資格あつたよな』

アガルタ内で二百年以上構築時間が経過し、第七区画まで解放した、いわゆる成熟した主神は分身スキルが使えるようになり、本体を担当管区に残したまま分身で仮想世界内を移動することができるようになる。

この能力の獲得を条件に短期間の他管区留学が認められており、一般開設後のエリアか、構築時間200年以下のエリアに短期滞在することができた。他管区留学制度は以前からあり、大抵の構築士たちは一度か二度、他管区に留学するものだ。しかし彼らは開設後の管区に留学することはあっても、開設前の未発達な管区にわざわざ留学することはない。

『ちよつくら27管区行ってくる、手続きを頼む』

そう言って白衣の襟を正した蒼雲は、いつになくいい笑顔をしていた。

第4章 第12話 青の神様と、暗躍する内閣情報調査室（後書き）

蒼雲の様子を読みたいというお声がありましたので書きました。オリラジ藤森みたいな感じのキャラ系イメージで間違っていないはず大変ありがたいことに、ヘヴンズアンダーコンストラクションの二次創作をいただきました。による様より赤井とエトワールのフル3DCG、横山様よりSSを頂戴（筆者がアンサーSSを同時掲載）しております。

目次ページに飾らせていただきましたので、どうぞご覧になってください。

また、HUCではどの形態での二次創作も歓迎しております。SSをいただいた場合はお礼にアンサー小説を書きます。

第4章 第13話 金の女王と銀の王

「赤井様……！ 助けに来ないでください！」

壁に触手ごと飲み込まれそうになっているロイが困ったように叫んでいる。ロイがどんな危険な目に遭っているかと、見殺しになんてできるわけない。つか、壁一面に黒い触手と赤い目玉？ もうこのエリアのコンセプトが分からん！ クトゥルフ神話のないあ・いあ？ それとも王蟲的なラン・ランララン！？

せめてコンセプトだけでも分かれば弱点割れそうなものなのに。

私は壁の中に沈みゆくロイの手首を引っ掴んだけど、相手も剛力、予想外に力が強く引きずり込まれそうだ。

「や、やめてくださ……ふぐっ!？」

あー喉に触手が巻きついてる！

『黙ってなさい！ 舌を噛みますよ!』

ヤバい、これ以上引っ張ったらロイの手が千切れる。すばーんて抜ける！ 私は神杖を真っ赤になるまで熱すると、それを目玉と触手ごと貫いて壁に捻じ込んだ。

熱を感知したのか、ビターンビターンとのたうつ触手！ 触手は生物的な感じじゃない。ゴムみたい。触手はじゅっと煙を出して、辺りに焦げた臭いが漂った。怯んだのか、壁面の触手の引き込む力が僅かに緩む。

おっしや今だこんにゃろー！

一瞬の隙を見逃さず、私はロイを壁から引つ張り出して背後に匿うと、追ってこようとする触手に向けて最大電圧で電撃を数度放った。パシ、パシ、と吹き抜けの遺跡内が明るく閃く。触手の合間から壁をびっしりと覆い尽くしていたコーヒー皿大の無数の目は、電撃を喰らって目玉が白く変色し、北を差さない方位磁石のように各々あらぬ方向にぎよるぎよると目を？いた。うげー何これ珍百景だよ超気持ち悪い。でも目玉どもは私たちに焦点が合わなくなっているっばいから、一応効果はあったか。

『ロイさん！今のうちにエトワールさんの結界に入りなさい！』

ロイは私の背後でがくりと膝をついた。ひどく震えている、

『どうしましたロイさん、急いで！』

震える彼の肩を擁くと、手にぬるり、とした粘液がついた。

『っ！？』

粘液に触れた指先に激痛が走る。ロイはもつと痛がっている。粘液にやられた皮膚を見ると、触手に触れた部分が白くなっていた。なんてこった、褐色肌のイケメンが台無しだ。

何これ？手がぬるぬるするけど強アルカリ？私インフォメーションボードで解析してる暇ない。強アルカリならやべーよ、一定濃度以上では引火性あるからさっきの熱攻撃でこの遺跡全体が爆発してもおかしくなかったよ。ぞつとした。今度からむやみやたら放電したりするのやめよう、私の悪い癖だ。背後から結界張りつつ解析かけてくれてた先輩が叫んだ。

『神様、強アルカリではありません。これは酵素です！』

おし酵素か、ならこつちにも考えがあるっ！ ええ大してありませんけど！ 私はロイを大慌てで運んでエトワール先輩の結界内に避難させ、精霊さん内蔵の金属柱に寄りかかせて、私自身は先輩の結界の外に出る。

両手を大きく左右に広げて集中力を高めると、円筒状になっている部屋の壁の手前ギリギリ、20cmぐらいに物理結界をびちっと張り巡らせた。遺跡壁面を結界で隔離したような形だ。しっかり密閉されているか、入念に確かめる。

「神様もこつちに避難してください！ お一人では無茶です！」

パウルさんが叫んでる。はいはいちよーっと待ってね。

私は広げていた手の拳を握りしめ、ぎゅんつと私が壁ギリギリに張っていた結界を引き込むような動作を行った。すると……物理結界と遺跡壁面との距離が離れ、円筒状の部屋の中の円筒状の結界が更に窄まったような形になる。結界と壁面との間の空気が急激に膨張し、結界を元に戻そうとする圧力がもの凄い。私は力任せに結界を手繰り寄せる。引き込むこと、十数メートル。

きつっ！ 百人対一人ぐらいの綱引きをやってる気分。

ぐわああ神通力消耗ハンパね ！！

そして……

「こ、凍った！？ どうして……！」

「神様の御力か?! 奇跡だ！」

「アカイ!? 一体何をやったんだ!？」

ネスト民とキララがやーやー言ってる。狙い通り、触手はもの

見事に凍り付いて動きを止めていた。空気が膨張して、結界と壁面の間の温度が急激に下がり、触手が凍ったんだよ。これで少しは安心して行動できるかな。私は結界を引き込んだまま、その場から結界がブレないように維持すると、エトワール先輩は素民たちを匿っていた物理結界を解いた。

『神様もロイも早く水で全身を洗った方がいい。壁の怪物の消化液がついたようだ』

怖っ、壁に獲物を取り込んで消化しちゃう感じ？ 凍り付いている目玉と触手たちの群れを見れば見るほど、おぞましいことになってる。

『ここは私が、片付けておきますよ』

勿体つけてそう言い放った先輩が指先をピンと弾くと、壁面と結界の隙間に取り残されていた私の神杖がふわりと浮きあがる。え、それ私の杖だけどうするつもり？

先輩がぐつと掌底を繰り出す動作と共に神杖が壁面にへばりついた。その状態から時計回りに、グラウンドをトンボで整地するかのような気楽な感じで、冷凍された目玉と触手たちをベキベキ折り進めていってるー！！ 凍てついた目玉と触手は、驚くほど簡単に凍結粉碎されてしまった。先輩が芝刈り機……じゃなくて神杖を遺跡の壁面に沿って一周した頃には、目玉も触手も粉々に砕け散ってきれいさっぱりなくなっていました。

なんかもう、凄すぎてえげつねー！

『神様、もう結界を解除してもいいですよ』

先輩、どや顔。よかったー助かったよ、神通力の消耗があまりに激しかったからさ。

『ロイさん、早く洗い流しましょう。皮膚が溶けてしまいますよ』

幸い、古代遺跡ばい円筒状の部屋の外に地下水だけは大量にあったので、私は手を、ロイは体を黙々と洗った。ロイが落ち込んでいたので。

『今度から、一人で飛び込んでいかないで下さいね。特に、得体の知れないものに対しては、慎重に作戦を練ってから挑んでください』

と、ロイに軽く注意を促すと、ロイは悔しそうな表情を滲ませていた。勇気と無謀は違うからね。ロイ、落ち込んでるな。下手こいたーって顔してる。まあ一人で飛び出していつて返り討ちにあつたつてなりや、男としてはカツコ悪いよね。いや、私も慎重に作戦を練るタイプじゃないんですけどね。どっちかっては行き当たりばつたり。ロイは私なんかよりよくやっているよ。彼はまだ十六歳なんだから。

「俺、もっと強く賢くなりたいです。あなたみたいに」

『あなたは十分強いですよ』

と、励ますと。

「神通力がないと、俺は何もできませんでした。過分なる力に頼り切ってばかりで。俺は弱い、ただの人間でした。あなたに追いつくことなどできなかつた」

ロイは辛そうに告白。

私に神通力の使用を禁じられて、ロイは焦っていたんだろうか。彼ってばいつも私を目標にしちゃってるから。他に何か取り柄があるのかって、自己確認の為にあんなことをやったんだろうか。それ言ったら私だって神通力がなけりやただの人間だよ。不死身なだけの。でも私が仮に人間としてこの世界に入ってたら……やりようがないわけじゃない。

私はぼん、と彼の肩に手をのせた。

『ロイさん。人間の武器は、腕力だけではありませんよ』

「あなたは神通力を使うなと仰る。では神通力なしで、どのようにすれば先ほどのような巨大な敵に勝てますか？」

ロイは縋るように私に訊いてきた。彼は答えを求めている、人が自力である場を生き延びるにはどうすればよかったのかと。私自身に対して”神通力なしで勝てるのか”と投げかける、そんな含蓄もあるんだらう。

『私は大切なことを、教えていませんでしたね』

どうして今まで気づかなかつたんだらう。彼らを必要以上に庇護しすぎてはいけない、一から十まで守ってあげたいと思っていたけれど、それは彼らの本来の力強さを、人としての成長を邪魔しているも同然。私は私の知りうる限り、伝えられる限りのことを君たちに教えてきたつもりだった。教育に関しては特に力を入れた。

それでも、本当に身の危険が迫っているときにどう対処すべきなのか、私は君たちを守るばかりで教えていなかつたんだ。だから私自身も、神通力を濫用してはいけないんだ。

何故なら、私が創り上げようとしているのは”人の世”なんだから。

『一人の力で足りないと感じるときは、皆で立ち向かきましょう。私のような戦い方ができなくても、あなたは一人ではないのだから、皆の力を借りましょう』

「では、先ほどはどうすればよかったのですか？」

そうだね、躓いているところに立ち返ろう。

『先ほどの目玉の怪物を倒すには、部屋の中央に皆で集まり、矢で遠くから射続ければよかったでしょう』

「その方法で、倒せたのでしょっか」

『そう思いますよ』

うん、考え直してみればあの触手、何十メートルもは伸びてこなかった。だから目玉を射るという遠隔攻撃が可能だったんだ。近づかなければ勝てた。組織的に戦えばネスト民だけでも攻略できたよ
うな気がする。

「おーい、アカイにロイ。大事ないか？ 皆の者が心配しているぞ」
キララが様子を見に来てくれた。私はわざと声のトーンを上げて彼女に返事する。

『大丈夫ですよー！ すぐ行きますよー！』

酵素でいたんだロイの皮膚を癒し、彼が体が濡れて寒そうにしていたので温風を起こしたげて服や髪を乾かす。ついでに私も手を乾燥。ホットドライヤーだ。

『これからは、皆の力を合わせて勝つことを考えましよう』

それがロイの身を助け、皆を守ることになる。一人だけ飛びぬけた力を得ようとするより、皆の心をまとめ戦術を組み立てる方がよほど価値がある。

「俺は強くなつて、あなたのようにモンジャの民を守りたいと考えることができました……。でも、俺が死んで赤井様がいなくなって、この先どんな怪物に襲われても、皆が生きてゆけるようにしておかないと」
『その意気ですよ！』

そうだ、一人の超人的な傑人になるより組織を纏め上げてゆく優れたリーダーになってほしい。君の歩む道は、その先にあるのかも
しれないから。

君も分かっていたんだろう。だけど、皆を無傷なまま守りたい、非力な者たちを傷つけないという君の優しさが、あまりよくない方向に向かっていた。それはキララも同じ、一人で全部背負い込

んではいけない。それは私自身に言い聞かせるべき言葉でもある。

彼を励ますように、私はにこやかに一つ大きく頷くと、

「今度から、皆の力を合わせるようにします」

ずっと思いつめていた様子だったロイは、どこか肩の荷が下りたように、優しく微笑んでくれた。

てなわけで遺跡に戻る。私は金属柱を見上げ

『問題はこれですよ』

”私が詳しく解析をかけておいたぞ赤井君”

おお、有難い！先輩のインフォメーションボードを覗き込むと、金属柱の素材は、何と3層になってる。

表面から30cmぐらい、アルミニウムの層。その内部に4cmぐらい、純金の層。で、中の人を包み込むように厚さ5mmぐらいの銀の層があることが分かった。アルミと金と銀の中に精霊さんが閉じ込められてるっぽい。150年もどんな過酷勤務環境なんだよ、早く出してあげないと苦しくない？てかどうやって入った？こんなに密封されてるってことは、やっぱりドロドロの金属の中に封じ込められたってことで……。

”ーことは精霊さん、熱には相当耐性あるんだよね？”

”エトワール先輩、ここは熱で溶かすべきでしょうか。彼女、熱耐性ありそうですね”

”うーん。それも分からないしなあ……。熱で溶かすにしても時間かかるぞー。さっきから中に念話で呼びかけてはいるが、だんまりだ。耐熱性がなかったら死ぬしな”

エトワール先輩は第一区画開放中、悪役だったのに私と念話しち

やったお人よし構築士だけど、この精霊さんは几帳面に内規を守っているみたいだ。あーでもない、こーでもない、私と先輩が念話で駄弁っていると、パウルさんの息子が痺れをきらして

「この金属は熱であれば溶けるのではないでしょうか。ちょっとやってみましょうか」

ちよーい！ 早まっちゃだめー！

「しかし無理にこの金属を溶かしてしまって、中の精霊がどうなるでしょうか」

ロイは先ほどの大失敗とはうってかわって、慎重派。アルミニウムの融点は660度だから、皆が持つてきた火でしこたま炙るだけで溶けるっちゃ溶けるんだけど相当時間かかるし、熱が中に伝わって精霊さんがアチチなっちゃうかも。いざとなったら杭で数か所を砕いて割ればいいいんかなー！

私が困ってアルミ表面にペタペタ触っていると……ネスト民が叫んだ！

「ぎゃー！ 神様ー目がまた出ました！」

気が付くと壁から新しい目が出てきたー！ 目が再生ー！？ 大慌てで金属柱から離れると目が壁の中に引っ込んだ。ペとっとなつと触れるときよろっとな目が出る。なにこれ、面白い。ちよっとな目玉がかわいく見えてきた。

「この柱に触れたりしてはいけない、ということなんですね、迂闊に触れないようにしましょう」

満場一致でそうすることに。直接触れられないなら、間接的に封印を解くしかない。

『この部屋を隈なく探して、何か封印らしきものがないか調べましょう』

物理的に砕きたい気はあるけど、物理的にやるとまた目が出てく

る。というわけで、私たちが目を皿のようにして円柱状の遺跡の内
部を、あるやらないやらの手がかりを捜しはじめてすぐ。

「アカイ……おい、これを見てくれ」

私を呼ぶキララが大興奮してる、彼女が手に持っていた明かりで
照らしたのは。

直径1メートル、深さ1メートルほどの円い窪みに、金色の棒が
刺さってた。その窪みの上部は直線の溝に繋がっており、溝は遺跡
内の石畳を這って、なだらかな傾斜を描いて精霊さんの封印されて
いる金属柱に接続してる。

何だろう、この窪み。水を注ぎ込めってこと？ 私は溝を辿って
歩くと、精霊さんの柱の真裏側からも、溝がきててその先は窪みに
なって、窪みの底には銀の棒が刺さってた。

……ってか説明してもわからないだろうから、模式図にするとこ
んな感じ。

(窪み1 + 金の棒) = 金属柱

(窪み2 + 銀の棒)

窪みの深さは窪み2の方が深く、溝幅は窪み1と金属柱を繋ぐ方
が大きい。何やら意味深な構造。

「エトワールさん。これは……どう思いますか」

「ひとまず、その棒を抜いてみてはどうですか？」

先輩がそう言うので私が棒を引っこ抜こうとするもびくともしな
い。エトワール先輩が動かしても動かない。私らの怪力で動かない
となると、人の手では絶対に動きやしない。詰んだ？ と思いきや

「あ、待ってください。棒に何か彫られてますよ」

ロイがそう言うので金の棒をよく見てみると、ネストとグランダ

で用いられている文字で何か書いてある。パウルさんに読んでもらうと” 相対する王を求めると書いてあるらしい。ついでに、相対する王以外に触れられると封印は二度と解けなくなるって。しかも金銀の棒を” 相対する王” が二人同時に触れないといけならしい。

間違えたら一巻の終わりじゃんそれ！

「あいたい相対する王とは？」

『キララさんとパウルさんじゃないでしょうか』

それで合ってるよね。この洞窟に入るときにもキララとパウルさんが封印解いて入ったんだし。でも金の棒に相対するってどっちの王のこと？ 間違えたら二度と抜けなくなるよ？

私はキララとパウルさん二人の顔を見比べて気が付いた。あ、キララって金髪だしパウルさんは銀髪だ。金銀揃ってめでたい感じ。

じゃー金の棒を銀髪のパウルさんが、銀の棒を金髪のキララが動かせばいいってことか。

ややこしいなー。

『金の棒にパウルさんが、銀の棒にキララさんが触れて同時に動かしてください』

というわけで、キララとパウルさんがそれぞれの棒を持ってスタンバイ。

『ではいきますよ、………3、2、1。はい!!』

二人同時にそれぞれの金銀の棒に手をかけると、先ほどの私たちの苦戦ぶりが嘘のよう、棒は軽やかに動いた。てか棒が窪みから抜けた。その途端、窪みの底にあってた穴から透明な液体が湧き出し、窪みの中に溜まり始めた。パウルさんの方が勢いよく、キララ

の方はちよろちよろと湧いている。パウルさん側の透明な液体は遂に窪みの中から溢れ出し、溝を伝って金属柱めがけて流れはじめた。すると……

「神様、見てください。柱が沈んでゆきます！」

「地下に沈んでゆくぞ！ どうなってるんだ」

『様子を見てみましょう』

液体が溝を伝い始めたのが引き金となったのか、金属柱の周囲の土台ごと30cmほど地下に陥没し、そのまま金属柱ごと音を立ててゆつくりと地下へと沈み込みはじめた。すげー、この仕掛けどうなってるんだろう？ 溝を伝った液体は、陥没した土台の穴に流れ込み、金属柱のアルミニウム表面を濡らして滑り落ち、土台にあいた穴に吸い込まれていった。そのときだった。アルミニウムの表面が泡立ち、溶け始めた！

『これは！？ 酸ですか？』

私はパウルさん側から流れてきた液体にインフォメーションボードで解析をかけると、塩酸だ！ しかも濃度高い。マジか！ じゃ、キララの側から湧いてきた液体は何？ ちなみに、キララの方はちよろちよろと湧いているし窪みが深いので、まだ溝を伝って流れてきていない。

” 赤井君、こちらは濃硝酸だったぞ ”

塩酸と、硝酸。塩酸と硝酸……

なん……だと……？ 先に大量の塩酸、後から硝酸……

やべー分かった！ 分かっちゃったよこの仕掛け！

『みなさん、部屋の外に出て暫く待ちましょう。ここは有毒な気体が出て危険です。暫く待てば、精霊さんと遭える筈です』

というわけで私は皆を引きつれて遺跡の外に出て、遺跡内部で発

生ずるであろう有毒ガスをやり過ぎたために来た道を少し戻った。反応が終わって大気中に希釈されるまで、外で待つておいた方がいい。

「中では何が起こっているのですか？ さっき、金属に液体がかかって溶けていました。あれはどんな反応が起こったのですか？」

ロイがやつぱり聞いてくる、化学反応大好きっ子だもんねチミ。キララやパウルさんも私の周囲にやってきて体育座りした。

『先ほどの液体で、金属が溶けてゆきます』

てなわけで私は簡単に原理を説明。ロイ以外は基礎的な化学知識がないので分からないかもしれないけど、キララやパウルさんたちも金属産出国だから一応聞いておいた方がいい。

パウルさん側からは塩酸が、キララ側からは硝酸が流れてくる。

で、塩酸の方が先に大量に、硝酸はちよろちよると後から流れてくる。金属柱の表面を覆っていたのはアルミだったから、アルミは塩酸に溶かされる。逆に、硝酸が先に流れてくると、アルミが表面で酸化皮膜を生じ不動態を作って反応が進行しないところだった。

塩酸がその酸化力によってアルミニウムを溶かし終わると、次第に純金の層が見えてくるだろう。ここで後からやってくる硝酸が必要となる。

金（Au）は化学的に非常に安定な金属なので、塩酸には溶けない。それどころか殆どの酸に溶けない。

ただし、例外はある。王水だ。

王水ってのは塩酸：硝酸＝3：1の黄色っぽい混合溶液のことで、強い酸化力を持ち金をも溶かす。最初は塩酸のみが流れてきてたけど後から流れてきた硝酸と混合されて王水に近い割合になるだろうから、精霊さんを封じる金の層も陥落し銀の層が露出する。

王水はそのまま銀の層をも溶かして精霊さんも一緒に溶かしちゃうかと思いきやそうではない。

この仕掛け、そこらへんは考えられていて、銀の層は王水に溶けない。

金属表面で王水と反応して不動態膜を形成するからね。だから私たちは反応が終わった頃、銀の膜に包まれた精霊さんを王水の中からレスキューし、銀の膜を剥がしてあげればいい。厚さ5mmぐらいの層だつてことだし、銀は柔らかい金属なので手で千切るように剥げればいける。

この内容を皆に一応説明したけど、ネスト民は子守唄に聞こえたみたいで途中から寝てたね。授業中居眠りに悩む教師の気分がよくわかったよ。チョーク飛ばそうにも持つてないし。ロイは化学的に理解できたみたいで感動してたけど、キララもパウルさんも途中からついていけなくなつてた。

「ま、細かいことはいいんだ。封印が解ければ目的は果たされる」キララがいつそ清々しい。ですよねー。酸化還元反応あたりからたつぷり二時間かけて説明したのに私の労力は一体……。エトワール先輩は暇を持て余して勤務中だつてのに妻にメールしてるし……臨月の妻が心配なんですよね先輩。

というわけで2時間後、私たちが精霊さんとのご対面で期待に胸を膨らませて意気揚々と遺跡に戻つてみたら……。

いつの間にか、でっかい毛むくじやらの怪物が精霊さんのいた穴の上に鎮座していました。すげー気持ちよさそうに寝てる。何かホワイトタイガーを超巨大にした感じ。やめてー！ コイツさつきいなかっただじゃん?! どこから出たのかと思えば、遺跡の上から降ってきたっぽい。天井に大きな穴があいてら。精霊さんとの対面を阻む最後の試練はコイツと戦えつてことみたいだ。

ここはいつちょよ、バーンと男らしく！ 正々堂々と！ 声をひそめて。

『起こさないように精霊さんを救いましょう』

「赤井様。戦わないのですか？」

ロイががっかりしていた。いーんだよ穩便に済めばそれが一番簡単なんだから！ そんな漢気のない私にキララが同調してくれた。

「まあ、そちらの方がよほど得策だろう。わざわざ怪我人を出すこともあるまい。気付かれないように慎重に近づこう」

って言った端から、キララが怪獣のしっぽを足で引っかけた

！！！

「あ、すまん。うっかり」

てへ、って顔したけど……可愛いけど許しませんよ！

「しろのめがみさまあー。こなをもっと入れたほうがいいですか？」

ここはアガルタ二十八管区。コハクの城の調理場を借り切って、二人が仲良く寄り添うように立っていた。今日の白棕は彼女の巫女のコハクと一緒に、パン（のようなもの）づくりに励む。

コハクはもともと食が細い。食事といえはわずかばかりの野菜を食べる程度、エネルギーとなるパンや肉を食べられない。だから彼女が少しでも食に興味を持つように、白棕がパンを作ろうと誘ったのだ。コハクは頬に粉をつけて悪戦苦闘している。

『粉はもう入れなくてよいですよ。水を少し足して粘り気を出してください、こう、このように。粘り気が出たら、丸めて焼きましょ』

コハクは力任せに団子をぐりぐりと丸めるが、どうも不器用らしく形が悪い。それを白棕に発見されて、恥ずかしそうにしている。

『おや、コハクは不器用ですね。ほれ、こうすれば綺麗にできるでしょう』

くるくると女神は美しくタネをまとめてみせる。コハクはそのすらりとした華奢な女神の指先に、ほろりと溜息をつきながら見とれていた。私の指は短くて……と比べてへこんでいる。それにしても

「どうしてめがみさまは、何でもお出来になるのにそんなことまでお上手なんですかあ……」

『昔を思い出しますね……』

どうしてパンなど焼く気になったかというところ、白棕が人間だった頃、よく母親と一緒に菓子を焼いたものだと思いつたのである。

今となつてはその味を思い出すこともできないのだが。……ここ最近、白棕は大神殿に引きこもるのをやめた。構築の合間に、時間の許す限りコハクや素民たちと触れ合う機会をもつけ、彼女が人間時代に”楽しかった”と覚えていることを一つ一つ思い出し、彼らにその通りにしてあげている。

自国ばかりではなく他国にも平等に視察に出かけ、地方の神殿にも時間をかけて滞在することにした。神秘の女神というベールを脱ぎ捨て、人々の前にその姿を現し始めた。それが間違いなく、よい方向に働いていた。

彼女は赤井の行動を逐一真似て、その一環として祝福も大気を紹介してではなく直接抱擁することにした。原始的な方法だが、そちら

の方が優れていると分かったのだから積極的に取り入れる。

もともと白棕は精神科医であるからか、読心術に長けた女神である。そのうえ直接抱擁することで素民との距離が近くなったので、彼らがどんな悩みを抱えているのか手に取るように分かるようになった。

その結果、素民たちは赤井の管区ほどではないものの、白棕に少しずつ懐くようになった。最初は女神様の御姿を拝見するなんて畏れ多い！ と遠巻きに見ていた彼らも、徐々に白棕に近づいてくれるようになったのだ。白棕はそれがよい事なのか判断できなかったが、巫力を失ったコハクは肉体的な負担も減り、以前よりも楽しそうに笑ってくれるようになった。

七名の使徒たちには『蘇芳に巫力を持たせないなんて、一族の存在価値をなくす気ですか！』と叱られたし、コハクは神官たちに陰口を叩かれたらしいが、白棕はきつと、コハクの為にはよいことをしたのだと思った。

丸めたパンのタネに果物を乗せ、石窯に火を入れて数十分後。パンもどきはこんがりと焼きあがった。白棕が神通力で石窯の火加減を調節していたので、焼き加減もパーフェクトだ。おかげで色よくふっくらとして、コハクも食欲をそそられたのかゴクリと唾を飲む。コハクは自分が拵えたそれらの中で一番形のよいものを見つけると、彼女が見繕ってきたピンクの布で包み、はちきれんばかりの笑顔で白棕に向けながら

「えへ。これ、一番大きくてきれいなのが、めがみさまの分です」

ぼふ、とコハクは白棕の前に両手でパン（もどき）を捧げる。

おいしそうな匂いにつられ、侍従や料理人たちが調理場に集まってきた窓から中を覗き込んだ。しかし中に女神がいるのを見ると彼らは、厨房が汚れていかなかったかしら、女神様が包丁で手を切った火傷をしたらどうしよう……と顔面を蒼白にして非常に悩んでいた。

『コハク、わたしは人の食べ物を、食べられないのです』

コハクはそんなこと、重々承知しているはずだ。女神は一度として人の捧げる供物に口をつけたことはなかったから。人のものを食べると女神様が穢れるから、召し上がらないのだとコハクの母親から教えられていた。しかし……

「食べられなくても、お供えます。私の感謝の気持ちです」

これはコハクの気持ちを無碍にはできないと白棕も思い直し

『よい香りです』

すん、と白棕は香りを楽しむ。その間にインフォメーションボード起動・メニュー展開・選択……彼女は念じるだけで必要な情報を目前に呼び出し、指先ひとつ動かすことなく念力で文字を打ち込む。

【生体構築 : 疑似消化管形成】

続いて真っ黒に切り替わったボード内に現れる3Dグリッド。内部に立体投影された自身の神体の模式図。白棕は解剖学的に正確に消化管を形成してゆく。胃袋までを形成すると、正確に周囲からの血管を配置し、実行、と念じた。

自身の体内がグラフィックに反映され変化したのを自覚すると、パンに両手を添え取り上げる。

ぱりっ。と女神はパンを口に含んだ。

よい音をさせながら上品に咀嚼をし、喉を鳴らして飲み込んでみせる。その様子をコハクは満腔の感動と共に観察していた。「めがみさまが、人の食べ物！？　こんなの、母も誰も見たことがない！」コハクの手から、ぼろりと自分のパン（もどき）が調理台の上に落ちた。

「めがみさまぁ……食べられるのですか？」

『おいしそうで、つい食べてしまいました。甘くておいしいですよ。コハクも食べてもらいなさい』

そうは言っても、白棕の舌に味覚などなかった。自らに生体構築をかけ、あくまでも仮に、“食べられる”振りをしてみせただけ。おいしい、と感じるわけではない。仮に舌に味蕾を再現したとしても、擬似脳が制御を受けているので味覚を再現できない。それでも、おいしそうに食べることはできる。

それを見て、コハクが喜ぶ。我が子の食育には、親が食べるころを見せるのが一番だ。

コハクが食べないわけがなかった。

「はふ、おいひいれふ！　めがみさま！」

『お前は頬張りすぎです』

口いっぱいパンを頬張って喋りにくそうにしながらも、一生懸命感想を述べるコハクのピンク色の頭を、衝動的によしょと撫でてやりたくなった。そうこうしていると、展開したままのインフォメ

ーションボードの右上に入電のマークが点った。

彼女はコハクに、少しだけ席を外しますよと断ったうえで、すると壁を貫通し神殿の外に出た。物質透過は、故意に引き起こすバグの一種で、構築士の習得するスキルとして難易度の高いものではない。壁一枚隔てるだけで人目を憚ることができる。白棕は厨房で粉っぽくなった白衣を整え、ふうとため息をつくとき、おもむろに受話ボタンを押した。口の中がもそもそする。

『お待たせしました。鴻池さん』

彼女は先ほどまでの緩んでいた表情を引き締め、いつものように、凛々しいキャリアウーマンの面持ちに戻る。彼女が鴻池に、公務員として見せる顔だ。

『コハクと随分と仲良く遊んでいたんだな。スオウはA・I・だろ
うに』

『ここ最近。人間もA・I・も、あまり大差ないように思えてきましたよ』

『赤井の影響か。まあ真似をするのは構わないが。その赤井絡みでもあるんだがな、蒼雲が赤井の管区に短期留学申請を出したぞ』

『その手がありましたか!』

白棕は出し抜かれた気分になった。蒼雲に先を越されなければ思い至らなかつただろう。しかしまだ手遅れではない。

『蒼雲神だけですか、留学申請を出しているのは』

一管区で受け入れ可能な他管区神の人員は、一年につき二柱まで。

他管区の神を同一管区に同時に多数受け入れると、素民に対する

影響が計り知れない。留学してくる神の方がホスト管区の神より強
大でキャリアがある、となると、ホスト区画の神が素民たちの信頼
を失う危険性を孕む。そこで他管区に留学する際、構築士の神通力
はホスト管区の神の1/10に制限され、素民に改宗を促さないな
どの多数の条件が付されたうえで滞在が認められる。

他管区留学は短期間が原則。分身で他管区に留学する間、本体は
昏睡状態となるため長い間留守にはできない。

『蒼雲が一番乗りだ。しかも彼は構築時間が一番短いので留学も優
先して認められるが……リアルタイムで世界各国の神々から申請が
きているな。……伊藤が発表した、Nature誌の発売日は今日
だったか?』

日本アガルタは日本人の宗教感情のなさからアガルタ内では全て
において後進国だったが、他国構築士がわざわざ見学に来るとは大
したものだ、と鴻池は誇らしい。しかも、留学が実現すれば赤井が
ストレスでハゲるか、スキャンダルとなるような海外の有名神まで
申請を出してきている。名前は敢えて伏せておくが。

『注目されすぎだ……』

ああ、確か海外では例の治療に成功すると一人あたり膨大な額の
ボーナスがつくという噂だ。一人成功すれば……と、目が血走っ
ている構築士も一人や二人ではあるまい。日本では特に治療に成功
したとて、ボーナスなどはないのだが。

『もし、わたしが今申請をだしたら、蒼雲神より先に留学できます
ね?』

白棕は急ぎ立てられるように、早口になった。

『ああ、お前の方が累積構築時間が浅いから、リスト最上位に割込

み可能だ。逆に今留学しとかなないと、受け入れ枠が二枠しかないから順番待ちでかなり待つことになるな』

維持士よりも構築士、ベテランより若手、の順で順位づけが決まる。基本的に順番は素人神の順と考えていい。ベテラン維持士が申請を出しても出る幕はなく、第一陣は問答無用で白棕と蒼雲になるだろう。

折角打ち解けはじめた彼女の素民とコハクを二十八管区に残してゆくことは気にかかるが、留守を任せる使徒たちも大勢いるし、再生速を落とした状態で留守にすれば、数週間程度の留守で済む。何かあったらすぐに戻ればいい。それより、赤井と話して得られるであろうものの方が大きい。

『もうすこしわたしの管区で工夫してやってみようかと思いましたが、決めました。すぐに留学します。私が戻るまで、この管区の再生速を下限まで落としておいてください』

『まあ待て、すぐ予約はしてやるが、区画解放イベント中は他管区神の立ち入り禁止だ。早くても第二区画解放後だよ』

今にも荷造りを始めそうな勢いの白棕を笑って宥めつつ、鴻池は彼女の為にその場で留学申請を出した。口では渋りながら、鴻池は仕事が早い。留学生リスト最上位に、白棕の名とカラーを示す白のフラグがピンと立った。

『申請受理されたぞ。この状態だと蒼雲と同時か、蒼雲より早く留学できる筈だ』

『よかった！ 楽しみです、赤井神に早くお会いしたい』

同期三人、勢ぞろいだな。

さて、どうなることやら。と鴻池は面白そうに口元を綻ばせた。

第4章 第13話 金の女王と銀の王（後書き）

ありがたいことにHUCの二次小説・イラスト等をいくつか頂戴いたしました。

目次ページに飾らせていただきましたので、興味のある方はご覧ください。いただきもの二次SSには筆者のアンサーSSをお返ししています。

第4章 第14話 伊藤プロジェクトマネージャーの提案

二十七管区、寒風吹きすさぶ冬のネスト台地にて。
ある兄妹がぺちやくちやくと会話を交わしていた。

彼らはモンジャの民の中でも特に始祖と呼ばれる二人、ナズとメグだ。シツジの毛の青いセーターを着用し、シツジと綿的素材の混紡のズボンを履いてネスト民に馴染んでいた。膝下には黒と白のクロスステッチの刺繍が入っている。ミシカに貰ったものだ。ついでにいうと、メグはミシカに習って三つ編みを覚えた！

というわけで、メグは長い黒髪のサイドを編み込みにし、青いビーズでとめている。

そして彼らは何をしているかというと、メグとナズはネストの森の探索隊への戦力外通告を出されたということもあって、ネスト大地に残ってミシカと共に過ごしていた。

「あにさまー。牧場の方に行こうよ、ミシカちゃんがシツジのお乳を絞ってくれるってー。絞ったお乳は濾して固めてね……」

「メグ先に行つてて、僕はもうちょっとこっちがみたい。メグはこういうの、きょうみないの？」

「私は動物のほうがいいなあ。あにさまはあの回るやつが好きなの？」

「うん！　すごく大きくて、あんなにはやく回るんだよ！」

ナズは茶色の瞳をきらきらと輝かせ、ネスト城の城壁にいくつも並ぶ風車がカラカラと回る様子を見上げる。

彼らがネストに来た日より、ネストの生活も道具も全て、モンジャはおるかグラндаより遥かに進んだ文明だと、この兄妹が気付くのに時間はかからなかった。ネストは金属加工技術に優れ、建築水準もグラндаを圧倒し、風車を労働力の代用にして生活に利用して

いる。痩せた土地で堆肥を作る農法は、神の祝福に預かり肥沃な土壌を当たり前のように享受し農地としていたメグたちには思いも付かなかった。メグはネストの人々の知恵に感心する。

「グランダもすごかったけど、ネストはもっとすごいよね！」
「すごいよね！」

素直で無邪気な兄妹である。メグは、ナズと共に過ごす幸せな時間を噛み締めるように、寄り添って楽しそうにはしゃいでいた。

現実世界では世界初の仮想リハビリテーション治療によって回復した高次脳機能障害患者として注目を浴び、治療の終了に伴い兄妹で過ごせる時間に終わりが近づいているとは露知らず。

赤い神の庇護のもと、この平和な時間がいつまでも続くものだと信じていた。

「あにさまは男の子だから、大きくて強いものがすきなんだよ」
「そっかな」

ナズが恥ずかしそうに鼻を鳴らす。仲の良い兄弟だ。

しかしメグとナズは一時、いかに“あかいかみさま”と遭った頃の自分たちの暮らしが原始的だったかということを知り、気が沈んだ。彼らモンジャの民が裸で暮らし火を知らず採集生活を行っていた頃、ネスト台地では風車の羽音が聞こえ、大空をグライダーが飛んでいた。しかしナズとメグにはまた、誇りにしているものもあつた。

ネストの民もグランダの民も、赤い神を知っている。

彼らとその降臨を渴望すれど、伝説上でしか知らなかった赤い神。

最初からその“あかいかみさま”と共にいて、彼はモンジャの民を祝福してくれていた。彼は先のことを教えてはくれないが、ネストの風車のことも、もっと先の進んだ文明のことも知っているのだ。

ろう。

モンジャが他の文明より遅れているなら、学んでその水準に追いつけばいい。そのために、モンジャを代表して皆の分まで学ぼうと彼らは奮起する。そこで彼らはミシカの後ろをちよこちよこついで回り、彼女のネストでの普段の仕事を見学しているのだ。

ナズは現実世界において工業大学生であつたためか、記憶がなくとも三つ子の魂なんとやら、動くものや素民の生活に役立ちそうな工芸品などに釘付けた。一方のメグはモンジャ集落で得意としていた畜産業と農業に興味津々。

兄妹でもこのあたりに個性の違いがみえる。

牧場への道すがら、立ち止まって城壁の風車に目を奪われている兄妹を、ミシカが迎えにきた。

「メグちゃん、ナズくんー。なに見てるのー？ シツジの乳搾りと毛刈りしようー？」

「ミシカちゃん遅れてごめん。この風車というものが面白いなあって。どんな仕組みで回ってるのかなーって」

「仕組みかー。風が吹くから回る、としか言えないかなー？ ずっと前からネストはこうだったんだよ。風の力を使って大きな機械を動かして、粉をひいたり水を汲み上げたり」

ミシカは腰に両手をあて、体裁の悪そうな笑顔を浮かべる。

「そつかあ」

ナズは若干不満そうに口先を尖らせ、ぼりぼりと天然パーマの茶髪を掻く。回るから回る。彼らはそれ以上の原理を追求しないらしい。ナズもその心情を理解できないではない。例えば、ネストへの到達手段となつた例のグライダーも単純に、浮いたから浮いた。ナズはただ、最も効率よく浮く形を求め、実験によつて理想形になつたに過ぎなかった。

それと同じように、回る形を追求すればこの四つ羽根の風車にな

ったのだろっ。

「ちょっと絵をかいていい？ メグとミシカさんは先にいってて、僕もあとですぐいく」

ナズは布に包まれた一枚の白い大きな羽根を、肩掛けの袋から大事そうに取り出した。右曲がりの白い立派な風切り羽。

「わあ、エトワールさまの羽根！ 落ちてたの？」

メグは大興奮だ。天使エトワールの羽根はレアアイテムなので、素民たちの間では装飾品やら何やらで人気が高かったりする。

「あれ？ どうして中央が黒い？」

しかしこの羽根は根元が持ちやすいようにカットされ、空洞の軸の中にモンジャで使われていた液体の染料が詰められている。ナズが軸を加工して持ってきたのだ。ナズはふわふわと羽根ペンを二人に見せながら、

「羽根のさきをちょっと傷つけると、中からせんりょうが少しずつでてくる。こうやって、ほら。グラングのかくものより、皮になめらかな線がかけれるし、とてもかるい。また中にせんりょうを詰めたらいつまでも書ける」

「あにさますごーい。私もエトワールさまに羽根を分けてもらおうかなー。うう、でも言いづらいなあ。エトワールさま、みんなに羽根抜かれてたからなあー。あかいかみさまが、エトワールさまの羽根がなくなっちゃうって心配してたし」

メグはくすくすと思いついて笑いをした。

「僕はおちていたのを三本拾ったから、あとでメグとミシカさんにもあげるよ」

ナズは城の壁面の至るところから突き出している風車を、丁寧にスケッチしはじめた。真正面、真下、真横……様々な角度から、注意深く絵に描き起こしてゆく。その見事な画力は子供の描く絵といふよりは完璧な作図、嘗て27管区で誰も描いたことのない製図用

の三面図式である。

無意識の中に埋もれるナズの記憶が、彼の指先を通じて微細に至るまで具現化されてゆく。

「ナズくんは絵が上手だね！　うちの城の絵描きより上手かも」

あまりに正確に描写するので、ミシカは目を見張る。ネストの城には絵師がいるが、誰もナズのように立体的な絵は描けないのだ。

その理由は明白だった。立体的に見えるのは、遠近図法で描かれているからだ。

三面図式を描き終わると、彼は仰角45度の三点透視法で城壁の絵を描き始めた。まず彼が描いたのは見たままの城壁ではなく、そこに存在しない筈の目の高さ、アイレベルというものだ。どこまでも平坦で消失点を持たない27管区世界に、水平線により始まる世界が描かれる。彼の頭脳の中で想定されている、地球の丸みと消失点。それはナズが現実世界の人間たる証拠でもある。

「すごい、どうしてナズくんは見上げてるように描ける？」

「これが僕の目線。この線より上のものを、見上げるようにかけばそうみえるんだよ」

「へー、そんなの全然思いつかなかったよー」

工業大学時代に習得し、遠近図法を仮想世界においても忘れなかったナズの絵は、ありのままの物体を写し取っていた。

ナズは復活して暫くの間、埋め合わせのきかない劣等感に悩んでいた。ナズが取り戻すべきは、空白の9年間と男としての誇りだ。もし、死の淵に沈むことなくいつぱしの男として成長することができていたなら、自分は今頃どんな青年になっただろう？　ロイのように、頼りがいのある立派な青年になれたんだろうか……。家族に負担をかけるばかりの、何の取り柄もない病弱な青年となる運命だったのか。

神様は十年前、僕を病氣から助けてくれなかったけれど、力を付けてこの世に呼び戻してくれた。そこに何の意味があるんだろう？ 神様は僕に何をさせたいのだろう。

僕が生きて皆の役に立てることがあるんだろうか。モンジヤでは皆それぞれに居場所と得意分野が与えられている。僕には何が？

メグにも悩みを打ち明けられず、人知れず悩んでいた時期……。

彼が見るといふ悪夢に興味を持ったらしい赤い神に、ナズがその夢を詳しく説明するために絵を描いて見せたとき、彼に非常に驚かれた。遠くのものが遠く、近くのものが近く、見上げるものはそう、見下げるのもそのように見えたから。

そして、真剣な面持ちで啓示されたのだ。この世界にある様々なものを描き、それを消えないように残し続けてください、それが世界のはじまりの記録、百年先も、二百年先も、時間を越えて世界の終わりにまで残る歴史の標しるしとなります、そしてあなたの画法は、末の世にまで通用するでしょう、と。

ずっと残る記録だなんて、未来の人が見たらどう思うだろうと、何だか楽しみだった。それが赤い神に与えられた彼の使命だと信じた。生きていてよいのだと言われた気がして、自分の存在が必要なのだと言われたようでナズは嬉しくなった。彼は赤い神の言いつけ通り、消えないように描こうと思った。

グランダの筆記具で書いたものでは擦ると消えてしまう。モンジヤのものは木の皮を引っかくので描きにくい。だから彼は羽根ペンで絵を描く。

ひそかな使命感に燃える兄を横目に、メグは人差し指を唇に当て、

ぼれつとした顔で風車を見詰めていたが……

「ねえあにさま。べくとるを使えば力のかかり方が分かるかも。風がこつちから吹いたらこつちとこつちに、こつち向きとこつち向きのべくとるがきて。それでね、上側に力がかかって回るんだよ！」

普段はトボけているが、メグは数学によつて物事を理解し吸収できる賢い娘だ。赤い神が、万物の基本の理論を幼い頃から叩き込んだからだ。メグは兄の描いた絵の上に、指を滑らせて力学的ベクトルの向きを示した。

「わあ、本当だ。力がつりあつたみたい。僕とフリーくんで作つたひこうきと同じ力がかかつてるのかなあ？」

妹の理論的なアイデアに、ナズは立式できない自分を少し不甲斐なくも思いながら大いに頷く。ナズは赤い神から、フリーやと共によつやく四則演算を教えてもらったレベルだった。

「原理的には同じなんじゃないかなー。あ、ほらほらあにさま。この軸をもつ少し傾けたら風を受けてもつと回る力が強くなるかも？ ちよつとやってみるー」

メグは近くに落ちていた細長い二枚の葉を内側に折り込むようにして斜めに折り曲げ、細い小枝で二枚の葉を貫いた。ちよつど風車のよつな形をしている。

「メグちゃんなあにそれ。ちよつと形が違つけど、風車みたい！」
「ミシカは目を皿のようにしている。」

「これはおもちゃだよミシカちゃん。私が小さかつた頃、あかいのみさまがこのおもちゃ作つてくれたなあつて思い出して……皆で息を吹いて、葉っぱがくるくると回るのを面白がつてたんだよ。今でも面白いけどね、ほらー！」

メグはふーつと息を吹くと、風車はぴゅーつと回る。

ミシカに手渡すと、ミシカも楽しそうにぷーぷーと吹くのだった。

「メグちゃんは色々なこと知ってるのねえ」

ミシカは感心している。

「あかいかみさまのおかげだよー。もっと遊ばずに勉強しておけばよかったと、今では思ってるけどね」

えへ、とメグは照れている。

ミシカはネストの王女という立場から、幼い頃から家庭教師にネストでは最高の教育を与えられてきたが、どうもメグには敵う気がしない。メグはネストの何を見ても”知らない”と言うが、説明しなくても”分かる”と言うのだ。暗記が主体のネストの教育と、モンジャの教育は一線を画しているような気がした。

メグには”考える力”が備わっている。

「あ、待って。いま……もしかして」

「どうしたのナズくん」

「その風車、正面からだけじゃなくて横風でもまわるんだ？」

「ネストの風車は横風では回らないよー。だから、一日のうちずっとは回っていないんだ。それで、ほら。城壁から色々な方向に風車が出てるでしょ」

ミシカが指差すと、確かに風車はあべこべの方向を向いている。ミシカいわく、どの方向から風が吹いても、いずれかの風車は回っているような状態に設置しているのだというが……。

「うん、ネストの風車は回らなくても、かみさまがメグに作ってくれたおもちゃは横から吹いた風も受けて回るんだ。ハネがたわんでいるから、風をつけるぶんが残ってて」

ナズは葉の風車を持って、軽く横から吹く。横風で葉のたわんだ部分が押され、風車が風を受けて軽快に回転する。

「分かった。こうすればいいんだ、羽根をもっと大きくすると……ネストじゅうの風車がいつも回るようになると思う」

「あ、そっかー。軸を垂直にすると、どこからの風でも受けられる

ね！ 水平じゃなくて垂直なんだ！」

風向きに依存しない垂直式風車であれば、その回転を利用してより多くの仕事ができるようになり、ネストの民はそれだけ辛い肉体労働から解放される。余った時間でほかの作業ができ、民の生活が潤うだろう。この色白で病弱な少年は、モンジャの人々にそう願うのと同じように、ネストの民の幸福も心から願っていた。

「ねえメグ、あかいかみさまがネストの泉の外に、”滝”をつくってくださったよ。あの水の勢いを風車に当てたら、風よりもっと途切れることなく回るんじゃないかな」

「ほんとだ！ほんとだよナズくん！」

ミシカとメグは顔を見合わせ歓声を上げた。かくしてものの十五分の間に、垂直式風車と水車が発明されてしまったのである。そしてナズの着想は、それだけに留まらなかつた。

彼の脳裏にはちらりとこんな考えが過ぎつていたのである。

”あかいかみさま”は『ミシカの城は動かない城なのか』と聞いていたけれど……できもしないことを、彼はさも尤もらしく問いかけたりはしない。

この城は動く、知恵を絞れば動かせるってことなんだ。

だとすればどうやってこの重い城を動かせるんだろう？

いつか、”あかいかみさま”からヒントを聞きだそう。

何だかわくわくしてきたナズだった。

メグとナズが薄い雲のたなびく快晴の冬空を見上げた頃。

アガルタ27管区内でナズとメグの様子を見下ろす、異世界から注がれる無数の視線があつた。彼らにとっては天上界からの眼差しに等しい、伊藤をはじめとする厚労省職員の間々だ。

さて、厚労省地下のパブリックビューイング会場には夜になって
も人が途切れない。

夕方五時を過ぎ各自の仕事を終えた職員たちが、時間外であるに
も関わらず続々と集合してきた。赤井のライブ中継を一時中断し、
伊藤がカメラワークをメグに切り替えているうちにナズの驚異的な
発明に居合わせたため、彼らの目当てはナズではなくメグであつた
が、ナズがにわかには脚光を浴びることとなっている。

「ナズか……ナズは人間だな。一体何者なんだ？」

「発明家として開眼しつつあるのかな。ナズは」

ざわめきは大きくなるばかり。

「にしても、ナズの発想はアガルタではタブーの”現実世界のカン
ニング”に相当するだろう。更に遠近法で絵を描いているし。脳機
能が回復すると同時に、ばらばらになっていた記憶が戻ってきたら
……まずいんじゃないか、これは」

「ナズは航空宇宙工学専攻だったという話だ。そのうち航空機やロ
ケットだって飛ばしかねないな。というか、もうパラグライダーが
飛んだし」

「あーあ、どうするんだ」

文明の発展に影響を及ぼしかねない、元専門家のような患者は、
治験患者から意図的に外したほうが無難ではないか。という意見が
急浮上してきた。文明の発展にはしかるべき順序というものがある。
順序を誤っては、素民の混乱を招くだけだ。したがってアガルタで
は現実世界の知識の持込みは原則禁止されている。ナズの記憶が回
復すれば、彼は27管区の技術水準を引っ掻き回してしまうだろう。

「おい伊藤。これ以上ナズが素民たちに影響を及ぼす前に、現実世
界に戻すか素民たちから隔離したほうがいいんじゃないか？」

伊藤の旧友、第一管区プロマネ茂本が今後の27管区への影響を懸念して伊藤に忠告する。茂本はグレーのサングラスを鼻でかけた、白髪の恰幅のよい初老の男だ。肌の色艶や豊かにたくわえた白髭から、伊藤にはカーネルさんと呼ばれていたりする。

茂本の担当管区は日本アガルタ一丁目一番地。日本国民の凡そ9割が信仰しているとされる、めくるめく神道の世界”高天原”、茂本は天照大神役の伊藤と組み、日本アガルタの基礎を築き上げた功労者だ。カリスマ的存在と化している伊藤に、面と向かって率直な意見を投げかけられるのは茂本ぐらいのものだった。

伊藤PMは茂本の意見に対しても首を縦に振らない。

「カーネルさん。これまでのアガルタでは、人間の患者様は概して仮想世界で無気力で、積極的に活動したり、ましてや発明を行うことなど皆無でした。これは仮想下治療が順調に進んでいる当管区ならではの問題なんです」

「カーネル言うなっつーのに。お前がそう言うから、これでも少しは痩せたんだぞ」

茂本は髭をいじりながらハイボールを飲み干し苦笑する。パブリックビュースタンド内のフリードリンクバーには、五時を回ったのでアルコール類が並びはじめた。茂本は今度はソルティドッグに口をつける。

「お髭に塩がついてますよカーネルさん。そしてナズの発想に関する問題ですが、現実世界で生死の境を彷徨う一人の患者さんの治療より仮想世界の文明進捗が大切などということは、断じてあつてはなりません。問題が起こらぬよう、バックアップ体制には万全を期しています」

ナズの着想と現実世界の文明の利器の形状が必ずしも一致しているわけでもないし、と伊藤はナズを弁護する。まだ自らの足で立ち上がるのがやっとのナズを、メグのいる世界から引き離したくなかった。

「管区担当プロマネがそこまで言うなら口出しはしないが……」

茂本が口をつぐむと同時に、湯あがりの石鹸のよい香りを身に纏った若い女性が伊藤に近づいてきた。彼女は定時までの任務を終え現実世界にログアウトした甲種二級構築士。蒼雲の使徒だ。

「伊藤プロジェクトマネージャー、ちよつと質問をよろしいですか」「どうぞ」

「ナズはまだ復活して間もないと聞きましたが、何故回復の兆しが見えているのです？ 赤井神は一体ナズに何をしたんです。私どもが知りたいのはそこです。教えてください、これは技術研修会なのでしょう？」

「29管区の蒼雲神は27管区に留学申請を出しているではないですか。蒼雲神が彼のもとで学び、その答えを自力で持ち帰ろうとしているのに、あなたはかくも安易に私に訊くのですか」

伊藤は赤井の仕事を直に見、赤井と直に言葉を交わすうち、彼が無私の境地で民の為に尽くしているのだといやというほど分かった。彼はアガルタの中に生きる者を、決していい加減にしない。赤井はナズが復活してから暫くの間片時も離れず、毎日祝福を欠かさなかった。そして今もナズのことを、常に気にかけている。その心には偽りもない。A・I・だと判明している者も人間患者も平等に扱い、彼らの「つくりもの」である筈の心を慮る。

だからA・I・たちも赤井に感応するかのように複雑な反応を見せ、赤井を慕うのだ。27管区の民たちは絶対の庇護者として赤井を信頼している。彼らが赤井に向けるのは信仰ではない、信頼に満たされた温かな世界。

そして神と人との絆の強さ。
それが27管区の最大の特長であるといえる。

仕事あがりて途中から観覧する構築士勢は、伊藤の挑発的ともとれる言葉に納得がいかない。赤井に特別なステータスが与えられているのではないかと疑う者もいる。遂にはこんな意見も飛び出した。「赤井神の神気の組成と周波数を公開してください。アガルタ全管区の主神の神気を赤井神と同一周波数に合わせてはいかがでしょう」伊藤は嘆かわしいと思いつつも、赤井がチートをしているのではないかという疑惑を晴らすため、包み隠さず赤井の神気アトモスフィアの情報をパネルで映し出した。

「何の変哲もないな……周波数もごく普通だ。一体何が違うんだ」
「彼の神気や神体が特別なわけではありません。違つとすれば彼の生き様です」

しかし伊藤の言葉がアガルタスタッフの心を掴むことはなかった。伊藤の言うことが宗教じみてきたと、嫌悪感を抱く者。赤井神に傾倒しすぎだ、アガルタは宗教団体ではない。公的福祉施設だということをおぼれているのか、と反発心を抱く者も多々。

「太上老君と天照大神を勤め上げた伊藤さんが……新神に熱を上げて。過去の輝かしい経歴からすると、信じられん」
失望した、と大げさな溜息もちらほら。日本アガルタのパイオニアであり数々の伝説を残す伊藤に憧れる甲種以下の構築士は数多。その伊藤が新神に傾倒するという異変が起こっていた。

「では、赤井神以外には治療ができないということですか。疑似脳の制御を外した状態で構築士を故意にアガルタにログインさせるのは違法ですよ。西園が処分を受けたばかりではないですか！」

確かに疑似脳の制御を受けたアガルタの神には感情の欠落があり、赤井のように人間味のある感情豊かな振る舞いは不可能である。ならば人を集めて、一体何を学ばせようというのか。

「なら、何のための技術研修会なんです。27管区の成果発表会で
すか？」

「そつだ、そつだ」

「仮想化リハビリテーションを全区画でという試み自体が、そもそも無茶だったのでは。赤井神だけが患者様を治癒できるとして、それが何になります。彼が年間に治癒できる人数にも限度があるでしょう、そして彼が構築士を辞めたらこのプロジェクトは打ち切りですか？ 体系化できない成果を厚労省の業績として世界的に発表して。伊藤さん、今回のことは拙速だったと言わざるをえませんよ」
他管区プロマネが伊藤をちくりと刺したが、ある意味で正論だった。

「お集まりのスタッフの皆様。落ち着いて、私の話をよく聞いてください」

伊藤はその場で立ち上がり、スタッフに指示して一度27管区内の時間を止め、ライブ中継を完全に中断し会場内の喧噪がおさまるのを瞑目して待つ。場内はなおも騒然としていたが、ホログラフに何も映さなくなったため、職員たちは自ずと伊藤の話に耳を傾ける。
伊藤は声を震わせ、穏やかに切り出した。

「はたして主神だけが、役者なのでしょうか」

演技力に定評のある伊藤だが、その言葉は演技ではなく彼の本心からのものだった。

「今こそ、現実世界にいるあなた方の出番です。主神に演技指導を

行ってください。赤井さんは血の通った演技のできる役者ですが、例えば彼が大根役者だったとしても監督や演出の手腕によって役者を引き上げることができるとでしょう。何故なら補佐官や外部スタッフには生身の感情があるではないですか。主神と二人三脚で人の心をもって、素民や患者様に真摯に接してください。いいですか」

伊藤の言葉には、次第に熱が籠ってゆく。

「われわれはチームなのです。この管区だけが特別であってはなりません。日本アガルタ全管区で治療実績をあげましょう。決して無謀な目標ではない、私はそう信じています」

何を言い出したのかと顔を見合わせる職員たちに、伊藤は更にとたみかける。

「そして患者様だけでなく日本アガルタ利用者様の魂にとって還るべき温かな場所、安らぎの地として選んでいただけるとともに、全管区全スタッフを挙げて、心づくしのサービスを提供してゆこうではありませんか」

しん、と恐ろしいまでに静まり返ったパブリックビューイング場内。

それから十秒間というものの、物音ひとつ立てるものはなかった。伊藤は一人一人のスタッフの瞳を覗き込むように、励ますように、ぐるりと観衆を見渡す。

水を打ったような無音の果て、ぱち、ぱち、と拍手の音がホールにこだまする。

伊藤の呼びかけに賛同した職員がいる。その拍手の音が、一つ、また一つとどこからともなく聞こえては重なり合って増えてゆく。そ

して気づけば万雷の拍手喝采となっていた。もはやこの会場において愚痴や嫉妬の声は、聞こえてこない。

カヤの外であった彼らがまさにこの変革を行うための当事者であると、理解が及んだからだ。

「伊藤さん。早くライブの続きを見せてくれ。嫉妬して腐っかけても仕方がない」

「ああ……赤井さんの仕事を見せてくれ！」

「学ぼう！」

茂本プロジェクトマネージャーは景気よくビールジョッキを高々と掲げた。

「赤井さんに続こう」

「日本アガルタの前途を祝して」

「赤井神に」

次々とグラスが会場内に掲げられ、赤井に捧げられる。

「赤井神に乾杯！」

楽しく賑やかで、テーマパークのような死後世界ではなく

そこに人の心の通った、利用者の安住の地を創り上げるべきなんだ。

日本アガルタはその真価を見出され、再スタートをきったのかもしれなかった。

一柱の神と、一人のプロジェクトマネージャー、そして西園沙織という一人の女性によって。

第4章 第15話 赤の神様、銀の精霊とご対面

盛大に猫ふんじやったした後、てへ と、とびきりの笑顔でこまかしたキララ。

花も恥らう17歳、見た目は金髪ゆるふわウェーブにニットワンピース着用の美少女。

そりゃ可愛いけど許しませんよ！

前回私、例の遺跡に陣取ってた怪獣のことをホワイトタイガーっぽい獣って言ったけど、あくまで模様がトラ柄って意味だよ。具体的には白地に虎柄の、顔の平たい猫そのもので、サイズさえ気にしなければ愛嬌はある。猫目は青くてキラキラ光るビー玉みたいだ。三角形の鼻も蛍光で青く光って幻想的、お前のピカピカの鼻は暗い夜道で役に立つのさ」とサンタさんに褒められる程度の明るさ。

獣のサイズは……猫バスぐらい？ 猫バスなら安心だ。粗相があってもブチ切れないだろうし、何なら背中に乗つけてトット口、トット口してくれるよね？ エトワール先輩と並んで左右に揺れながらエンドロール行きますよ……とか現実逃避してたら、キララに尻尾踏まれてご機嫌損ねていました。

「フシャー！！！！ フギユラああ ……！！」
『……………ですよー』

鋭い牙？いて全身の毛を逆立ててお怒りモード。口の周りにお髭がビリビリしてる。ジヴリ作品にありがちな感じ。

そんな怒らなくてもさー。心狭いよ尻尾踏んだぐらいでさー。ちよっと女の子が足先ひっかけたぐらいなんだから、痛くもないでし

よーが。キララは絶対謝らないからジャンピング土下座で私が代理で謝りますよ。

てかこの獣、声でかっ！ 部屋中に咆哮が反響して鼓膜が破れそう。私は平気だけど民たちは当然

「ぐああ耳が壊れる！ うるさーいっ！」

パウルさんの息子や御家人たち、堪りかねて絶叫してる。皆、武器も手放して（脇に挟んでる人もいるけど）両手で耳押さえてるから、手が塞がって攻撃もできない。動き封じられたなーどうすっぺ。見た目猫科ならあれ効くかな。お約束のマタタビ。確かネコ科全般にマタタビ効くんだよな？ マタタビに含まる成分、マタタビラクトン類を構築すれば猫まっしぐら！

……と、私がインフォメーションボードを操作しようとする

“何馬鹿なことを考えてる赤井君、猫のわけがあるか！！”

念話で先輩にぴしゃりと怒られました。私しょんぼり、何だよ試してみればいいじゃないのさ。ひょっとして効くかもしれないよ？

『神様、そのうえこの獣には物理障壁が通用しないようですよ』

先輩、ついでに肉声で嬉しくない情報を小出しになさる。物理結界無効てことね、知ってますよ。だってこのモンスター、さっきから私の物理結界スルーしちゃって既に物理結界の圏内にいるもん。じゃあ心理結界はどうなのよと手懐けようとしてみても、相手のガードが固くて交渉無用。

私たちが身を竦めることしかできないでいると、鼓膜を劈くかのような雄叫びを終えた例の怪獣は……。

「ゴルアー……！」

と、牙を剥き、更に甲高いデスマタル系の声でシャウト。屋久杉

ぐらいの太つといフサフサの白黒シマシマシツポをムチのようにしならせ、私らめがけて横薙ぎにしてきやがった！ 前線にいた私とエトワール先輩が辛くも攻撃を躲すと、床に激突した尻尾が床石抉っていった。

あれ、見た目柔らかさそうだけどシツポ相当固くね？！ ふさふさ詐欺ですよこん畜生！

私とエトワール先輩は互いに声をかけあうこともなく顔を見合わせる、私は神杖に炎を通じ、先輩はワイヤーを手に、シツポの攻撃から素民を守るために二人がかりでガードを試みた。しかし私も先輩も獲物の補助効力をかき消され、競り負けて土手腹にもろに衝撃を受け、さらに怪力で力任せに吹き飛ばされ壁にびたーんと叩きつけられる。

っつー！ 効くー！

『くっつ……不覚っ』

私は受け身の姿勢もとれず背中から大の字でいてこまされた。一方の先輩は身を翻してM字開脚で壁に着地。あまりの速さに、私の背中にいたグローリア君たちも防御できなかつたみたい。それでも彼らかなり衝撃を緩和してくれてた。

「きゅるる……」

「きゅーん」

私の背と壁に挟まれて、押し花みたいに平たく真っ青になり失神してしちゃったグローリア君たちもいる。てか君たちまだいたのな！ もう私の背中にひっついてないで離れてよ、身を挺してくれての申し訳ないし。まだびっしりくっついてるっばいけど背後見えない。ただ、私の背後すげー明るい。うん、まだいるねこれ分かりやすい。

『いけませんな……物理攻撃も無効のようです』
先輩はワイヤを切られたみたいだ。私の杖もへの字に曲がってる。嘘だろ相当堅いぜこの杖？ しかも何か身体が重くて浮遊できない。インフォメーションボード見たら神通力の絶対量減ってるし！ 勘弁してよこんなときに！

私らのアトモスファイアを吸収してるってこと？

見た目ネコ科の怪物は私に考える暇も与えず、容赦ない第二撃をくれる。今度は私とエトワール先輩という壁を失った素民たちにヒツト、吹き飛ばされては打ちつけられ、蹴散らされてゆく。

トーチ持ってた人から標的になってる！ 明かりを目印に攻撃してんのかな。そういや私もエトワール先輩もすげー光ってるからなやべー明かり消して暗闇に紛れないと！

『皆さん、火を持っていると危険です！ 火を消して伏せて!!』

「ぎゃああー!!」

遅かったー！

「ぐえええ！ 剣が折れたー！」

ネスト民がばっさばっさと、モフモフな外見からはありえない強度のシツポの餌食になる中、巫力を宿した短刀で正面から切り込もうとしていたキララ。彼女をロイが背後から抱きこんで床上に倒れこみ、背後に迫っていたシツポ攻撃を躲してやり過ごした。思ったら往復で攻撃きた！

『！ 油断しないで！』

ロイの背中にシツポが激突したみたいだけど、ロイは身をこわばらせて背を丸め、踏みとどまった。ロイの背中のグローリア君がエアバッグみたいに膨らんで一匹犠牲になったし。キララを守ってくれてありがとうねロイ。庇わなかったらキララもぶっ飛ばされてた

よ。キララは特に軽装で体重も軽いから、確実に骨折か内臓いつた。

むさい男集団の中で紅一点だ、女の子には優しくしたげてね。とか思ってたら

「ええい！ 離せモンジャの長、邪魔だ！」

ええー！？ 感謝の言葉もなしー！？

怪獣に一太刀浴びせる気満々だったキララが、背後から彼女を押しさえ込もうとするロイに反発。彼女は自立心が強いので、手助けされるのも我慢ならぬみたい。一方のロイは私が常々女性と子ども、お年寄りや身体の不自由な人を守ってあげると教えてるから、自然に体が動いたんだろうけど。

でもロイはロイで言い分があつた。

「巫力はだめだ！ 敵に力を与えてしまう。見る、赤井様たちの神通力を吸収し先程より巨大化しただろう！」

気付かなかつたよ。ロイの言う通り、確かに一回りくらい大きくなった気がする。だつせ！ 私ら立場ないじゃん。てかこの怪物実体じゃないでしょ、霊獣つてやつかな。私が熱を通じて杖を修復しつつ、インフォメーションボードいじってた先輩を呼ぶ。

『エトワールさん！』

『むう、確かに。相手の攻撃は当たるが、我々の攻撃は殆ど相手に効いてない。ロイの言う通りです』

「弱点を探りましょう」

そう言うロイは、先ほどシッポがぶつかった時に怪獣の毛をひと束引っこ抜いてみたいだ。毛束を床に投げ捨てて数秒して、焦げ茶色の双眸がきりりと凜々しく眇められた。ロイが閃いたときのキメ顔だ、分かりやすいな。そのロイの脇に抱えられたキララはロイの腕を振りほどこうと、じたばたしている。

でもロイの方が腕力強いから、実質身動き取れない。そんな力関係に私がちよつと萌える。

お、そついやこの二人の絡み初めてだ。私の集落では集落の女子たちを無自覚ニコポで陥落させてたロイだけど、キララは捻くれているから一筋縄じゃいかない。や、別にロイは意識すらしてないんだろうけど。二人とも高度学習型A・I・同士仲良くしてほしい、何なら意気投合して付き合ってほしい。

つか今それどこじゃない。これが終わったらね。

「離せというのにつ！不快だつ、聞こえないのか！」

「ああ、すまない気付かなかった。……おや？」

ふと足元を見下ろしたロイの視線が分かりやすく釘付けになっているので私も追ってみると、円筒形の部屋の床には壁から二メートルほどの距離に、白い石のラインが埋め込まれてるのが見えた。それは部屋を一周するように幅三センチほどの正円を描いている。何かの模様？

白線は床石より凹んでる。ロイは再びやってきたシツポ攻撃を軽いステップで軽業のようにやり過ごしつつ、槍の柄で床をコンコンと突いて回り、何かを調べるようなくさ。床下の脱出口でも探してる？ そんな奇妙な行動の末、彼は神槍で白石の欠片を削り採取した。ロイさんこんなときに何やってんの。好奇心は後でいいから下見てないでもっと前見て前！ぎゃー後ろにシツポ迫ってるー！

志村 後ろー！ロイは白石採取に夢中になって注意力散漫になつてる。

『ロイさん後ろ！』

「はっ?!」

私が助けるまでもなく、今度はキララがロイを両手で突き倒し、

尻尾攻撃を間一髪で躲す。キララは鼻の下をこすって、面映ゆそうに「これであいこだ」

ロイはアクション俳優のように、仰向けの態勢から膝を曲げ、ブリッジのようにしてぴよいと身軽に起き上がった。往年のジャッキを思い出すよ。

「助けてくれたのか、ありがとう」

ロイは素直に感謝の気持ち伝える。キララとは対照的だ。

『神通力が使えないというのなら……エトワールさん！ 実在する炎を』

『そうですな。皆、耳を塞いで伏せている！』

私たちは怪獣の気を引き付けようと、即席の連携技を発動。

エトワール先輩が迅速構築で適量の火薬玉を拵え、怪獣の目の前に数個出現させセツティング。私が物理結界で怪獣を囲み、素民たちの盾を作る。

『いきますよっ！』

それを見計らい、私が酸素を予約構築しつつ爆薬に狙い定めて衝撃波を放ち、火薬に着火と同時に発破！

強烈な炸裂音とともに室内を閃光が迸る！

民たちを爆発の衝撃から、物理結界が防いでくれる。

狭い部屋で大量に酸素が消費されては皆が酸欠になるので、爆発が終了したのを見届けた後、私とエトワール先輩は酸素を供給。

「今だ！ 彼奴が怯んでいる隙にいくぞ！」

「神様、結界を解いてください！」

動ける御家人数人が勇気を振り絞り、怪物の背後からわらわらと一気呵成に切り込んだ！

「はあっ！！」

誰かの剣が、怪獣のお尻にざくりと刺さった。

「どつだつ……?! これでもくらえ！」

「頼むつ。効いてくれっ！」

手ごたえはあり。その証拠に、怪獣から苦しそうなうめき声がかかる。続いて、一人、また一人と攻撃をしかける。素民たちは迷いながらも、その手を止めない。

「斬れる！ ははっ、やった斬れたぞ！」

と、パウルさんの息子さん嬉しそう。これは……攻略の糸口が見えた！？ 相手があまりに巨大すぎて、袈裟懸けに切ろうが突こうが切り上げようが、深刻なダメージは与えられないけれど、無効化されていないというだけでも見所はある。

かくなるうえは一点突破で！

「フギユルアアア！」

煙幕が去ると、怒りに任せて起き上がり毛を逆立てる巨大な敵影が見えた。神通力を使って構築した私たちの爆薬は怪獣を傷つけることはできなかったが、素民たちの攻撃だけは、ほんの怪獣を怒らせる程度ではあるうがとにかく届いた。てことは神通力と無縁な物理攻撃が有効なのか。武器だけが有効だつてことは……

私は修理したばかりの神杖にわざわざ熱をかけて溶かすと、真つ赤に焼けた金属塊を手で練りこみ、ピザを作るように空中でひゅんと回す。円盤状に薄く引き伸ばして息吹で冷やすと、円周の端をギヤリリリと一周床石に撫で付けた。堆積岩の一種と思われる床は砥石の代わりとなり、私の直径1m程度の大判で鋭利な円盤カッターをゲット。

「今回だけは例外です、民を守るためなら仕方ありません」

私以前「神様は武器持たない」「殺生できない」的なこと言うだけ、相手もどうやら反則気味で簡単には死ななさそうだし、今

下手こいたら素民が犠牲になっちゃうから今回は一旦その縛りを解く。対応は臨機応変にだ。

その後も物理結界の中ではエトワール先輩が散弾式に爆発を誘導しては奇襲をかけようとすると、段々と相手もこちらの戦略を読んてくる。そのうち、発破しようがしまいが大きく尻尾を振り回してくるようになった。こうなってはかなわない。

疾。

私は暗がりとエトワール先輩の爆撃に紛れ、手首のスナップをきかせ渾身の一投で音もなく円盤カッターを放つ。その軌跡は頼もしく弧を描き、怪獣の背後に回り込むと、電光石火の速さで私たちへの攻撃の最大拠点となっている、ふさふさ尻尾を付け根から切り落とした。

「ぐぎゃあああああああ！」

多少の後ろめたい気持ちを抑えつつ、辛くも尻尾を攻略。尻尾が切れても血の一滴も出ない。傷口は石切の断面のようにすべらかだ。絶たれた尻尾は見る間に朽ちてしほみ、最後は黒い煙となって蒸発した。半実体つてのは間違ってたよつだ。

『物理”攻撃は有効のようですよ！』

『おお、さすが。ではその手でいきましようか……って？』

しかしその希望は早くも潰えた。傷口がめりめりと盛り上がり、また新たな尻尾が見る間に再生してきたのである。

「うわあ、また出た！」

一旦は希望が見えたところで新たな脅威、怪獣が尻尾と共に両前足を使つての襲撃を開始した。蜘蛛の子を散らしたように逃げ惑う

ネストの御家人たち。右往左往するも、逃げ遅れた誰かが怪獣の太い前足で引つかかれたり踏み潰されたり！

それを見て慌てた私が、無駄とは承知しつつ再びディスクカッターを手に取るうとする、相手もさるもの。それを前足で弾いて、精霊さんのいる部屋の中央の穴に蹴り入れてしまった。NOOO

！ それ私の大事な得物　　！ 下は王水で金属のディスク溶けちゃうからー！

その後も、休むことなく両足や尻尾使つての連続攻撃フルボッコ。民涙目。

ちよーい！ 猫パンチやめてー！

逃げ疲れて、向こう脛やら脇腹を三本爪でざっくりやられた人がいる！ 更に床が滑って、すってんころりんと豪快に転んだ。御家人は半べそ。

「うわああ！ やられたあ。もうだめだあ！」

『弱音を吐かず傷を見せて、早く！』

エトワール先輩がその場で生体構築かけ、応急処置してあげる。傷口を見た先輩が私に大声で叫ぶ。

『ん、これは！ 神様、爪に猛毒がありますよ！ 気を付けて！』

もう踏んだり蹴ったりー！ 予備免疫がなければ死んでたかも。

ネストの森に入る前に私が血清作って全員に投与してたから急場の凌ぎにはなってるけど。

てわけでここは退散退散！

『皆さん、出口から一旦この部屋から出て下さい！ 急いで！』

作戦タイムにしよう、という訳で素民たちは部屋の外にほうほうのいで脱出。

「神様、お助けエ………！」

なにやら足首を踏み潰され、痛がって床に蹲ってた最後の御家人

が目にも留まったので慌てて肩に担ぎ上げ、私も部屋から脱出し出口の青銅の扉を閉ざすと、中は嘘のように静かになり、私たちが逆鱗に触れまくったらしい謎の怪獣の嵐のような攻撃はぴたりと止みました。

そうですね、怪獣はでかすぎて扉を出られず、遺跡っぽい部屋から出てこれないんです。実にしょぼいけど、何かあれだな。トムとジエリーの、巣穴に帰ったジエリーになった気分。違うか、ジエリーはこんなに苦戦しないか。もっとスマートに圧勝しますよね。というか常勝ですよ。

チーズが出たら別ね、あれにはジエリー、滅法弱い。

扉の隙間からこつそり中を覗くと、あいつ真ん中に陣取ってとぐる巻いてこつち見てやがる。ふてぶてしい奴だ。番犬みたいなキラなのかな。精霊さんを護衛してるのか精霊さんに嫌がらせしてるのか分かんない。相変わらず毛は逆立ててる。

あの怪獣のことは一旦忘れて

『怪我をした人は私がエトワールさんにみせてください。重症者から順に手当てします、他にはいませんか?!』

私とエトワール先輩が右から左へと流れ作業で怪我人の手当てに勤しんでいると。酷い目に遭った御家人たちを中心に、邪神ギメノグレアヌスに対する不満が爆発した。

「くそ、あの畜生は邪神の手先なんだ。こんな辺鄙なところにまで手を伸ばして狡猾な!」

「まだこつちを見てやがる!」

「こつち見んな! しっ、しっ!」

「グラランダの黒き邪神め、滅びたというのに憎たらしい! どこまで我々を苦めるんだ!」

「ネストの干ばつも飢饉も、森の獣たちを凶暴化させたのも邪神の仕業だ！」

あることないこと全部ギメノさんのせいってことになってる。それで士気を高めて丸く収まってるみたいだけど。

「実際はどうなんだ？ 耳が痛いんじゃないのか、エトワール？」

真相を知るキララが先輩にわざと話題振ってら、傷口に塩揉み込む揉み込む。エトワール先輩は膝を怪我した人の傷口に、自分の上着の衣を裂いて縛ってあげながら苦笑。

『さてね。私はネストを支配下に置いていた記憶はないし、そもそも私の仕業だというなら私もろとも襲わないと思うが君の見解はどうだね』

「それもそうだな……」

「何の話ですか？ 天使様がネストを支配下に、というのはどういうことですか？」

水面下で軽くジャブを打ち合ってる二人の会話を、おでこがM字に禿げた中年の御家人が隣で聞き耳立ててた。

「いや、こちらのこと」

チクリチクリと先輩を刺しても、一応先輩を庇うんだなキララ。

先輩の弱み、握っちゃってるよね、まさかそのネタで強請^{ゆすり}るつもり？

先輩に対する恨み節は色々あるんだろうけど、時間をかけて氷解してくんだろう。すぐには無理だろうけどね。先輩、憎まれ役で居心地悪いだろうけど割り切ってる。鋼のメンタルっすよ先輩。

私はというと神通力を絞り疲れ、洞窟の通路となっている岩の端っこに口ダンの「考える人」のポーズで腰掛け、どうしたものかと思案してた。参ったよー、私や先輩の攻撃は物理攻撃だろうが神通

力使おうがキャンセルされる。防壁も貫通するから意味をなさない。民たちの物理攻撃は有効だけど、民は非力でまともに戦おうとしても大怪我をする。

それを見てパウルさん、何か力になりたいと思っただらしく、部屋に繋がる扉をあけて、怪物が部屋の外から出てこれないのをいいことに遠隔から矢や槍を投げて射ましようという提案。私がうんという前にパウルさんの御家人たちが勢いに任せて射たけど、矢は放たれるなり失速してカランカランと床の上に転がった。部屋の外からの攻撃はできないようになってるんだね。

『どれ、私がやってみよう』

エトワール先輩が満を持し、素民から借りて投擲した槍でも、部屋に入るなりすぐに失速して放物線を描き床に刺さった。先輩、失敗した槍投げ選手みたいでかつこ悪い。

『近接戦しか方法はないようです。厄介ですね』

再突入するつきやないのか。そんな空気になったとき。ロイが確信を持った足取りで私に近づいてくる。うん？ どした？

「赤井様、これを……この石の成分を教えてくださいませんか？」

さつきロイが削り取った白い石くずを、おずおずと私に見せる。まだ持ってたんだな。調べてみると大理石だ、主成分は炭酸カルシウムだよ。ロイが私の前でけなげに正座待機してるので

『主成分は20-14-16(2)、その結晶です。モンジャでは粉末で肥料など、多くの用途がありましたね。覚えていただけますか』
と教えたと、

「ありがとうございます。成程、あれだったんですか。では比較的柔らかいんですね」

「ええ。三方晶系で方解石の硬度は3、劈開は完全です。あなたが知っている通りですよ」

硬度つてのはモース硬度（傷つきやすさ）のことね。”モース” がつけたら現実世界のパクリだから教えてないけど。大理石の劈開は“完全”、つまり結晶が割れやすいつてことなんだ。韌性（じんせい、材料の強靱さ）も低いんだろうけど、覚えてないや。

何か企んでる顔だな。確かに大理石の強度つて石の中ではかなり低い、それをどうするのさ。てか何でそこに着目した？

「赤井様。再突入しての先ほどの先ほどのような物理攻撃は有効かもしれない。しかし相手の方が動きが速く、一度やられて警戒させてしまったし、あなたとエトワールさまの攻撃は無効化されている。俺たちも致命傷は与えられまい。そこであの獣を、殺すのではなく最小限の労力で消滅させる方法を考えました。話を聞いてください。赤井様たちにもお力添えいただきたいんです」

ロイの提案は私とエトワール先輩を唸らせた。迂遠な気もするけど、ロイの計画には説得力があったし、それに勝る代案を思いつかなかった私たち。目の前の遺跡の部屋の地下構造をインフォメーションボードで解析したうえ……

『成功を祈り、協力します。やってみましょう』

『同感だ。作戦を皆に説明してくれ』

私たちがロイを褒めると。ロイは私たちに敬意を払い深々とお辞儀をして、お墨付きを得たからか少し胸を張ってネストの民に向き直る。

「そついうわけです。個々ではなく、皆で力を合わせて攻略しましよつ」

彼は疲労困憊でげんがりしている御家人たちの前に立ち、叱咤激

励するように呼びかける。前から思ってたけどロイの声って素民の心を惹きつけるみたいだ。特殊型で汎用A・Iと違うからかな。私からしても、いい声しててよく通って聞こえるんだけど、多分、+アルファで何かある。

今日のロイは木綿のシャツを一枚着て、黒いチノパンのようなシンプルでワイルドな軽装。キララも軽装だけど。防具とか全然つけてないのな、二人ともそんな装備で大丈夫なんだろうか。

「やりましょう。それなら、役たたずの私どもにもできそうです」
パウルさんは両肩を捻挫して、応急処置は施したけれど私が神通力不足で完全には癒してあげられず、剣を持つのもやっとこさ。それでも自国の民のために、命がけで戦う覚悟は出来ている様子。勇敢な王様だからこそ、御家人たちも彼を慕い忠誠を誓っている。

『作戦を開始します』

私とエトワール先輩が、怪獣がうつらうつらした隙を狙ってまず突入。同時に、予約構築をかけて準備しておいた遺跡の壁と全く同じ材質の石壁を、ロイの着目してた白線の手前に、二人分の全構築枠を使って天井まで目隠しをするように構築。部屋の中は図解すると、(二重円)のような状態、二重壁構造となる。音や振動を立てない様に構築したので、怪獣は変化に気づかず。

怪獣はふとこちらに向き直り、扉のあたりに一瞬視線をくれたが、そこには緊張した面持ちで中を窺い見る数名の素民、そのほかは先ほどと同じ景色があるだけ……ただし、部屋は合計4メートルちょいほど狭くなってるんですけどね！ 奴さん、知能はあまり高くないらしく、勘付いてない。

……OK、作戦を続行しよう。

部屋の中央へ流れ込む窪みを私と先輩の壁で塞がれた硝酸と塩酸の流れは、その途中にある白線の窪みに注ぎ込み、王水となって大理石質のそれを急速に侵食する。そして怪獣の目を盗み、ロイがハンドサインを送ると、一人、また一人と部屋の中の壁と内壁の隙間、1メートルの間に突入して、一定の距離を保って壁裏に潜みスタンバイ。勿論、素民たちは壁に遮られて怪物からは見えていません。私は更に、構築した壁の内側に、白線のギリギリ外側に物理結界を壁状に張り巡らせた。

下準備は完了。

あとは慌てず騒がず、その時を待つだけだ。エトワール先輩は、壁と壁との隙間に酸素を送り込み、大理石と酸との反応によって生じる二酸化炭素濃度を下げ、素民たちの呼吸の安全を図る。怪獣の目を盗み、総員が配置につき、十五人の素民が部屋の中に突入して壁裏でその時を静かに待つ。

私は先輩と共に、インフォメーションボードで構造解析を行う。厚さ20cmの大理石の床は、2/3ほど浸食されている。

ええっ！？ 早っ！ 何か現実世界の化学反応より凄い勢いで浸食されてる気がするけど、そこは仮想世界補正なのかよく分かんない。

よし……そろそろ頃合いだ。ひっそりと水面下で準備を整え。

私は背中でピカピカ緑色の蛍光を発していた菱形のグローリア君を一匹ずつ剥がし、作戦を言い聞かせて一匹ずつ壁と壁の間に飛ばせた。グローリア君たち、一定間隔で壁裏にひつついて、素民たち

の手元を作業しやすいよう明るく照らしてくれる。最後の一匹のグロリア君を放つと、壁裏を一周して取り囲んだ。こちらもスタンバイOK。

3、2、1……私の隣にいる先輩が、ゆっくりと頷く。

ゼロ。はじめようか。チャンスは一度きりだ！

最も私に近い場所にいたグロリア君をよしよしと撫でると、グロリアくん、端から順に伝言ゲームのように緑色から一斉に赤色蛍光に点灯した。彼ら、照れてるんです。見事なまでのナデポ連鎖が成功。

グロリア君は一匹色が変わると一時的に皆同じ色になる性質があるから、石壁の裏側にいる、私からは見えない素民たちにもグロリア君を介してシグナルが伝わる。それが特攻開始の合図！

素民たちはグロリア君の合図で、一斉に大理石に剣や槍などの刃物を突き立てる。怪獣がその振動に気付いたときにはもう遅かった。王水によって浸食し脆弱化していた大理石のラインに剣で衝撃が加われれば、円周状に亀裂を生じ、更に私たちが構築していた壁の重さも上乘せされ、構造が耐えられなくなって床が怪獣ごと落ちる。同時に亀裂を造らなければ、床が傾いて落ちてしまう。変に傾きが生じれば、床がつかえて上手く下に落ちない可能性もある。

皆が同時に衝撃を与えるというのがポイントだ。

そう、この部屋の床下　大理石の白線の内側に、床の構造を支える柱は一本もなかった！

ロイは床を細かく小突いて跳ね返ってくる音をもとに推測し、大理石のラインを境に、内側の床を落とせばよいということに気付い

ていた。そして、床下に待ち受けるは酸の池。

怪獣の毛は酸に溶けた。憶測でも希望的観測でもなく、ロイは、実際に毛を取り取った毛で実験して確認していた。ロイは、あり得ないほど一瞬で溶けたと言っていたから……。

この怪獣の弱点は、物理攻撃や神通力での攻撃ではなく、この部屋の床にふんだんにある強酸だったんだ！ 再生が追いつかないほど急激に、大量の酸で溶かせば……勝利はこちらのもの！

大音響を立て、怪物を乗せたまま、遺跡の床は陥落した。

更に私とエトワール先輩が構築した内壁も崩れ、それが重厚な瓦礫となって落とし蓋のように怪獣の上から襲い掛かりとどめをくれる。強酸の水しぶきが天井高く上がったけれど、民たちは私が内側から張っていた物理結界で守られて酸の雨を浴びることはない。

難攻不落だった巨大な虎型怪獣は、最高の酸化度を示す王水に焼かれ、絶叫をあげながら足元から溶けて跡形もなくなってしまった。あとには暗闇と静寂が蘇り、素民たちは崩れず残ったリング状の床の上に取り残された。

グローリア君たちはピンク色にピカピカと明滅して浮遊している。民たちは互いに顔を見合わせ……勝ちどきをあげた。

「やったー！ 成功した！」

「わー！ 戦わずに勝てた！ 信じられない！」

「酸つて凄いな……」

抜けた床下を覗きこんだり、飛びあがったり。落ちそうになってる人もいる、ちょいはしゃぎすぎ！

『みなさん、床が抜けていますので酸の中に落ちていけません。早く隣の通路に戻ってください』

素民たちが勝利の喜びに沸く中、私と先輩は瓦礫の下にいるであろう精霊さんの姿を搜索。部屋の中央の瓦礫の隙間を隈なく見てゆ

くと、塩化銀（AgCl）の不動体皮膜に包まれた人型の銀のオブジェが！

出た！ 精霊さん本体だ！

私とエトワール先輩、興奮しながらそのオブジェを瓦礫の上に引き上げ、エトワール先輩がナイフで厚さ5mmの銀の皮膜を引き裂いた。すると、中からひよこつと飛び出してきたのは……

『きゃー！ あかいかみさまだー！ はじめまして！』

えーと！ ちよつと待つて。ちよつとじゃなくてもうちよつと待つて。

『あた！ あたた』

顔ごと（？） 私の顔に突進してきた精霊さん。鼻骨折れたかと思いました。鼻血出てない？ 出てないか。身だしなみOKです。エトワール先輩も、これには失笑。

『あ、どうしよキスしちゃった！ ごめんよあかいかみさま』

そうなの！？ 知らなかったよキスされてたとか、鼻へし折る勢いで激突してきたじゃん。声かわいい。幼い女の子みたいでお茶目な感じ。

でも待つてほしい。何でこうなってる？

てかあなたキスとか言っても口ねーじゃん、どこが口なんだよ教えてくれよ。女性型してた銀のオブジェから出てきたのは真っ白でふわっふわの、バレーボール大のまんまるい毛玉。毛系的なモシヤモシヤ毛玉じゃなくて、シロウサギ的なふわふわなのが丸まったような感じの毛玉。

……おかしいでしょ形違つでしょ！ 合ってないよ！ 形合ってないよ！

何で女性型のオブジェの中から毛玉出て来るの！

というわけで彼女を私の顔から引き剥がすと、離れてくれない。
みよーんと餅のように伸びてしがみついている。

『まずどこが顔なんです？』

と声をかけつつ更に引きはがしてボールを抱えるように抱えてみると。

『もうどこでもいいよ！ 全部顔だよ！ モフっていいよ！ 特別にモフモフしていいよっ！ モフモフ好きなんですよ。素敵！ 抱いて！』

素敵！ 抱いて！ とか。何ていうんだろう、あなたのこと抱けない。私がドン引きしている中、精霊さんのテンションはクライマックス。

『きゃー萌え死ぬー！』

一体どういうことなん。この人またあれかな、神様フェチなんかな。この職場、神様フェチ多くね？ てかまずいよねこれ。中身女性構築士じゃん。いいの？ うっかりモフったらセクハラになったりしない？

まず私、猫的なモフモフは好きだけど、モフモフなら何でもいってもんじゃねーぞ。……モフモフ要素を素因数分解したら毛玉でした、って感じじゃん。手触りすごいけどこれに萌えたら何か違う気がする。何かに負けた気がする。

『ちょっとそんなに興奮しないで』

真面目にやってくださいよ。素民がガン見してますよ、ちゃんと仕事（演技）してくださいよ。

『大好きっ！』

ひしつとしがみついていること再び。とはいっても、モフモフボールが私の顔面にへばりついているだけなんだけど。待ってこれどうやって張り付いてる？ 民たちも、あまりの出来事に唾然。

『私ね、ずっと封印されていてね。邪神ギメノなんとかの呪いにやられて、意識がなくなっここに閉じ込められてたの。そしたら…夢の中で声が聞こえたの。……出ておいで。そんなところにないで出ておいで……って！ 聞こえてたんだよ、ちゃんと。ありがとう神様、嬉しかった』

私たちの声、中から聞こえてたんだ……。

心細かったろうねこんなところで、眠ってたんだろうけど一人で閉じ込められて苦しかったろうね。辛い勤務でしたよね。

と、ちよつと同情モードに入っていると……毛玉はふあさつと爽やかに揺れて

『出ておいで、まっしろすけ出ておいで！ って！』

アウト ！

『言っていないです！ 言っていないったら言ってませんよ！』

あぶねー！ この人やだよ超危ないよ。ただでさえ著作権ギリギリを攻める私の更に内角を抉るように攻めて来るよ！ ちよつと叱り気味に言つと、しゅんと綿毛をしばませる毛玉の塊。

『しろすけって……言っ』

『ってませんって！ どうしてあなた真っ白の毛玉なんです？』

やばい、この人やババい！ アガルタでは見たことないタイプの危しゅわ。

伊藤さん、この方、どうして採用しちやっただんです？ 言うに事欠いて精霊さんが一言。真ん丸だったのが、気持ち楕円形になる。

『え？ 私人型だよ？』

……ちよつと殴りたくなってしまったよ。

第4章 第15話 赤の神様、銀の精霊とご対面（後書き）

拍手内投票の結果、精霊さんのルックスが毛玉になりました。どうしてこうなった……。もうどうにでもなあれ！（A A 略

毎度のように、精霊さんのお名前募集です。

本名と芸名。よろしくお願いいたします！

この構築士は日本人女性です。

ちなみに、この構築士は人型になります（お問い合わせがあったので追記：バトルが多いとのご指摘があったので、バトルタグを追加。

第4章 第16話 スーパーノヴァ・フォールダウン

『これっ！ 名刺です。私モフコ、皆は”銀の精霊”って言うの。幾久しくよしなにねっ、赤井神様！』

みよーん、と毛玉から小さな二本の突起が伸びて、デジタル名刺を私に差し出す毛玉。伊藤さんが以前私にくれたやつと同じのだけど、超シユール。モフコさん、全体的にUの字に折れ曲がる。お辞儀のつもりらしい。モフコってあなた……見たまんまでですけど。体張りすぎです。いくら私や一部の国民の皆様がモフモフ好きだからって……！

『モフコさん、ですか？ 見たところ珠のような御姿ですが』
これいかに。

『そうそう、人型』
強引に人型で通そうとする精霊さん。呑めるかつ！ 人型じゃないでしょ百人が百人に訊いてもそう言うよ、おこがましいですよ毛玉なのに。銀の精霊って割に銀色でもないわ……JAROに通報されたらどうするんですか。素民の皆、フリーズしてついていけない。なってる。

ちよい待ってね、皆がツッコみたいこと代表して訊くから。

『こんなところで立ち話もなんだし。ホップ、ステップ……からの
！ 捻挫！』

毛玉さん、改めモフコさん。勢いよく大ジャンプを決めると、くると空中でトンボをうって私の頭の上にぼふっ、とナチュラルにおさまりました。

ホップステップ捻挫って何！？ 大丈夫なの！？

どつか捻挫するような関節あるの！？ ……ねーし。

『きゃっ！ 頭の上っ！』

頭上ではいんばいんばいん！ と、興奮気味に飛んだり跳ねたりしてる。私の頭が馬鹿になったらどうするんですか……すごく……元からですね。

『まぎれもなく頭上っ！』

うん、そうだね。そこまぎれもなく私の頭上。知ってる。うんわかる。

お転婆すぎますよヒトの頭上で遠慮もなく跳ねまくって。上下左右に伸縮して、時々勢い余ってハート型になったり。全身で喜びの舞を踊っているつもりらしい。たまに突起だして、ちよいなちよーいな、とかやってる。

素民たち完全に置いてけぼり。エトワール先輩は苦笑い。

『あの一、帽子になるか頭の上から降りるかしてください』

『ほいっ！ 忍法、毛玉七変化！』

モフコさんはいそいそと円筒形に変形し、ロシア風の帽子になって居座る模様。

どこから突っ込む？ ……忍法のあたりから？ 自分で毛玉って言ったし。それとも残り六変化は何？ っところから？

『あの一。そうではなくてですね』

ちがーう！ 私は降りてと言いたかったんですよ。

その結果私、白衣に白いファーの帽子で銀河鉄道ヒロインの人みたい。あの睫毛長い人、昔は白い衣装も着てたからね。私もうっかりしていると機械の体を求めて旅立ちそうだよ。あ、私はもう電子の体だよ。

やっちゃった感を募らせるのは私だけじゃない。ネストの民もだどこからともなく、ひそひそ声が聞こえてきた。

「これがネストの精霊さま、だったか？ 大ばばさまの伝え聞く話では、美しく若い女の精霊だと」

パウルさん、これ呼ばわり。

そして伝説というものは往々にして間違っているものです。殆どは悪い方向に。

「……う、うん？ こうだったかな？ 違う気がしますよね父上」

困惑顔で記憶の糸を手繰り寄せようとするパウルさんの息子さん。ロイとキララは、精霊さんなら別に容姿に拘泥はない。大らかに育つてくれて私は嬉しい。あれなんか目から汗が。

「何かこう、もつと、こう！ ……神秘的なのかと思ってたら」

素民たち一同が凄く残念そうなオーラを出しているので、モフコさん、いえモフコ先輩のテンションも落ち着いたところで閑話休題。何でもつとファンタジックで幻想的な姿で現れてくれなかったんですか先輩。

「精霊様、ネストの民一同、復活をお待ちしておりました」

パウルさんが仕切り直した！ ナイス平常心。

「おつ、パウルさん久しぶり。よかったね！ 歩けるようになったんだね」

軽っ！ そしてあなたとパウルさんは面識ない設定だと思えます。言う端からボロが出てるような気がします。

「ネストの民は、あなたが邪神に封印されてより、森に降りることができず、資源も尽き果てて日に日に困窮しております。再び人と獣とが共存できる豊かな森を取り戻していただきたくお願い申し上げます」

パウルさん一人で話進めてくれてる。話が早くて助かるよ。パウルさんの隣で、大きく首肯する私。

『そうしてあげたい気持ちはやまやまだけど、難しいと思うの。今の私に、昔のような力はないのよ……』

伏し目がちな感じになるモフコ先輩。

目、ありませんけどね。てかここまでできて私らの努力が水の泡！？ 話が違うぞ、聞いてた伝説と違う、と、騒然とするネスト民一行。

「で、では私たちはどうすれば」

「な、何とかならないんでしょうか。せめてお知恵だけでも」

パウルさんが食い下がる。パウルさん、疲れてるだろうに必死だ。んー。なんかパウルさんの責任感強いとこ、無茶するとこ、私の父親とかぶるなー。でも私の父親より彼の方がはるかに苦労しているよ。私がパウルさんにどんなフォローの言葉をかけようかと思案している。

” 赤井さん赤井さん ”

頭上からモフコ先輩の念話が聞こえてきた。ようやくコンタクト可能になったよここからは副音声でお楽しみください？

” 私のプロフは名刺の裏に書いてあるよ！ チェケラー！ ”

ちえけらーじゃないよ。ったくこのヒトは。そういうので、モフコ先輩のプロフをさっそく拝見。

出ました、構築士情報！

【構築士情報】

役名 : モフコ (J A P A N / I D : J P N 1 0 8)

本名 : 城 実樹 きつき みき

クラス / 職種 : 乙種二級構築士 / グラフィッククリエイター

心理層 : 2

物理層 : 3

絶対力量 : 25621ポイント
滞在日数 : 48211日
有効信徒数 : 0名
総信徒数 : 1021名

ふむ？ プロフィールに添付のグラフィック上では人型の精霊です。

これですよ求めたのは！ 私と国民の皆様の精霊さんのイメージはこう！

で、何でこれで登場してくれなかった？

こだわりが過ぎて、突き詰めたら逆に毛玉になっちゃった？

私も皆も、登場シーンの衣装とかエフェクトとか色々期待してたし！ どういうことですか、と念話で苦情を言うと、これは国民の皆様のお茶目心と悪ノリとで決まった名前と姿で、私のせいじゃないもん。とかわいく弁解された。精気切れを起こすところなっちゃう設定らしい。てことは逆に、戻れるんですね人型に？！

一気にテンションが突き抜ける私！

それと、駄々下がりだった白翼がしゃきんとなったので、エトワール先輩も。むっつりですねエトワール先輩。

『どうやったたらその、精気切れは治る？ 人型に戻れないと、力を発揮できないのでは？』

エトワール先輩、満を持しての質問。早く仕事終わらせて定時に帰って臨月の奥さんの元に駆け付けたそうな顔でもある。……気のせいかな。

『やあエトワールさん久しぶり。精気のない精霊は、ただの毛玉さ…』

…』

面倒くさくなってきたのでもうツツコミません。モフコ先輩を人型に戻すためにクエスト発生とかやめてくださいよ。でも人型に戻らないとネストの森を元に戻してもらえないんですよね精気ないから。今日は私ら行きませんよ。せめて日を改めてください。

「いや、単に月光を浴びれば精気回復して元に戻れるけど、焦る必要性を感じないっていうか。明日でもいいんじゃないかっていうか。人生勇み足でもろくなことないっていうか」

モフコ先輩、私の頭の上でのびのび垂れる。

「くるおしいまでに必要性を感じますよ」と、私。

「それ早く言つてください」若干語気も荒目のパウルさん

「もう帰っていいかな」と、エトワール先輩。

三人三様の鋭い切り返しを受け、テンション低く、ついでにかさも低くなる、全体的にふわっとした円筒形。円筒形の体積は $r^2 h$ で求められますが、どうでもいいことです。

「んー……明日の夜とかじゃだめ？ 今日ちょっと都合が」

人型に戻ったら私の頭の上に載れないしモフつてもらえないからせめて一日……とか念話で言つてたけど無視つて私はバレーボール大の先輩の両脇をがっしり捕まえ、

「あなたが本来の姿に戻つて力を行使して下さいと、ネストの森が魔の森のままです。ネストの民が飢えに苦しみ、渴きに喘いでいます」

と、首根っこ捕まえて（首どこだよ）説得しつつ洞窟の途中で取り残された人たちと合流しつつ私たちは洞窟の外へ。わー空気おいしい。あの遺跡っぽい部屋、多少有毒ガスが出てたからね。素民の皆さんも思い思いに深呼吸したり、肩回したり。靴の中に入った泥をかきだしたり。

時刻は八時、とつぷりと日は暮れていた。
そして肝心の天気は……曇天！　こんなときに月が見えない。

『あ、曇りだよ残念〜！』　背伸びをするモフコ先輩、何だか嬉しそう。声かわいいですね二回目ですけど。逆に言つと容姿どう褒めていいか分からないから声を褒める。

「ちっ、曇りか」

素民の誰かの舌打ちが聞こえました。

モフコ先輩、曇りと分かつて私の頭の上で伸びたり縮んだり。もー仕方がないなー、曇り程度じゃへこたれませんよこちらもこの道九年ですから。モフコ先輩を両手でわっしと掴んで月光にかざすとエトワール先輩が上昇気流を送つて分厚く垂れ下がっていた雲を吹き飛ばしてくれた。雲のかからない、下弦の月がきれいだ。

『ほら、きれいな三日月ですよ、モフコさん』

『うーん……いまちなお日柄だなあ』

うーんじゃありませんよ、きりきり変身してください、あなたの変身待ちなんですから。

『じゃ、やる？　へーんしんっ、とっっ！』

いちいちアクションが。

びょーい、とモフコ先輩が私の頭の上からさらに跳びあがると、迸る光のレインボー。びくっとする素民たち。輝く虹色のエフェクトがモフコ先輩を包み込む。……グローリアくんたちがハート形になって無駄に演出、君たちいつの間になー？

星が飛び、ハート入り乱れ、きゅるるん、しゃらん！　つてなけしからん擬音が出てる。どこから出てる？　ご想像にお任せします。

あれだ、日曜日朝にやってる少女向けアニメの美少女変身シーン

見てる気分だよ。さあー感動の、人型精霊さんごたいめ……

って、長いよ！ もう二分ぐらい変身シーンやってる。

”まだ？”

エトワール先輩が思わず念話で訊いてた。

”もうちよい。今着替えてるところ！”

だそうです。私たちの見事な待ちぼうけっぷりをよそに、更なる盛り上がりを見せるエフェクト。

結局五分後。最初は驚いてた素民たちも、疲れてもう誰も真面目に見てない。

『お待たせー。ど、どう？』

光のエフェクトを払いのけ、もやの中を精霊さんのシルエットが現れる。

待ちくたびれたー！

デート中、アパレルショップで彼女に延々待たされる彼氏の気分。国民のうら若き女性の皆さん、服は一人で買いに行ってくださいね。付き合わされる男性は実はたまったものではありません。

気を取り直して。

登場したのは！？ 期待に心昂ぶる……じゃなくて心荒ぶる私ら。

ウェーブのかかった長い銀髪に、透き通った碧眼。涼しげな目元を清涼感のある青いアイシャドーで彩った、ほんわかと優しさと気品漂う面立ちの、大人サイズの美女精霊。花をあしらった透明な杖を持ちーの、銀の光沢のあるショートラインのドレスを着ーの、クリスタルの冠つけーの、ドレスから生足見えーの、きらきら鱗粉てか光のエフェクトが輝いて眩しーの！ もう散々っばら趣味に走っ

たデザイン。あーなんか全体的に銀色だね、銀の精霊って名乗るだけあるよ。

胸？ それ大事でしたね。胸はたゆんと擬音の出る程度のサイズです（当社比）。

いかにも精霊さんらしく、背中からスワロフスキー製のクリスタルっぽい、蝶のような銀の翅によつきり。しかもステンドグラスっぽく銀色と薄水色の模様を取り入れ、多分自分でやったんだろうけどデコリまくってる。アールヌーボーっちゃってる。関係ないけど、ミュシャの絵とか好きそうだなこの人。

結論。

360度、どう見ても清楚可憐な美女精霊さんでした。
女性って変身願望あるらしいからね。

黙ってれば見目麗しき精霊さんです。あまりに幻想的なので、画家がこぞって絵を描いたりカメラマンが寄ってたかって写真を撮りたくなっちゃう感じ。あ、戦場じゃない方のカメラマンね。

彼女、背筋伸ばし、どちらかというと往年のキャイーンのポーズでリアクション待ってたけど、私たち全員が先輩の美貌にやられてフリーズしてるので、

彼女、内またになり、困って頬をかき……。

『あ、……ダメだった……かな？ チェンジ？ チェンジは三回までならやり直すよ？』

ぶにぶにのピンクの頬を染め、消え入りそうな声になるモフコ先輩。衆人環視の中、期待渦巻く中での変身シーンとか、かなりの羞恥プレイですもんね。

チェンジじゃないです、デリヘルじゃないんですから。十分綺麗ですから仕事をしてください。

『あ、赤井神様は、どんな衣装が好みなの？』

モフコ先輩、クリスタル製の花の杖持ってわたわたしてる。毛玉のときとはうって変わり、何だか女性らしくてキュートな感じ。人型の時は恥ずかしがり屋なかな。人型で仕事するの照れくさいから毛玉になっただけだったりして。その姿に不覚にも萌えた。のは私だけではなかった。

「おうふ！」

「うっ！」

素民で鼻血出してるのがある……名誉ある負傷だよチミたち。

”赤井さん、何で黙ってるの。黙ってないで何かフォローして！
恥ずかしいんだからっ”

モフコ先輩からのSOSが。

恥ずかしいなら地味な外見にすればよかったのに、やらかしちゃってるから……。過ぎたるは及ばざるがごとし、そんなあなたに贈りたい諺です。さ、私も仕事しないと。

『あ、驚いて見惚れていました。モフコさんがお美しいので』

「ほわあ、銀の精霊様だ！」

「なんと可憐な御姿なんだ！ 精霊様、モフコ様！ うっ！」

「うっ！」

「うっ！」

感動のあまり、マンボ！ 的なノリで何かの踊りが始まった。ネスト民、先ほどまで毛玉とかコレ呼ばわりしていたことも忘れ、この現金な感じがニクい。

「玉様！ 玉様！ うっ！」

「ばか、もう玉じゃないぞ。玉とは失礼だ！ うっ！」

ほっといたらオーバードライブまでヒートアップする素民たち。

ノリについていけないロイとキララ。かと思いきや、二人で仲良く国の行政について熱く話し合ってる。民放バラエティー枠に囲まれたNHKの日曜討論ですか。

でもパウルさんだけは自国の命運がかかってるからか下手に出て「ネストの森の獣たちをその偉大なお力で鎮め、昔のように美しい森を取り戻してください」

一人真面目だった。

「ネストの民が、というかパウルさんがそういうのなら、力をかしましょう」

にこ……と、かわいらしさを意識した角度で小首を傾げ、気品溢れる慈母の微笑をネスト民に送ると、恥ずかしそうに咳払いをし、内またで歩くモフコ先輩。森の中の、少し木々の開けたところを見つけ、……そこにてってってと勢いよく助走をつけて走り込み

「てーい！」

……かわいらしい掛け声とともに地を蹴って跳んで……？ またホップステップ捻挫？

「れれれ?!」

あれ、跳べずに、そのまま暗がりの茂みにダイブして飛び込み前転　!?

え、今前転するような場面じゃなかったでしょ。まずどうしたかったの先輩？先輩、顔を両手でおさえつつ、女の子座りで森の中に座り込んで肩をプルプルしてる。

「ど、どうしましたモフコさん？大丈夫ですか？」

主に、頭とか。

「きゃ、はずかしー。一応やってみたけど、失敗しちゃたー。飛んで森全体に浄化魔法をかけようとしたんだけど。精气足りなかったの。満月になったら精气全開なんだけど」

ど、ドジ！

先に言ってくださいよ。無理なら無理で、日を改めましたよ。と
いうかまず飛べないって、その背中の美しい、いかにも飛びます的
な翹は飾りなんでしょうか。

”あ、これはただのスワロフスキー的なあれです。飾りパーツでし
かないの”

……把握です。モフコ先輩、精霊というだけあって信頼の力とか
ではなく自然界のパワーを集めて自身のアトモスフィアにするんだ
そうだ。素民の信頼に依存してる私らとはパワー出力の仕様が違
うのな。だから今日は三日月って時点で、精気足りなくて無理だっ
たってことね。

人型になるの渋ってたのもそういうことか。

”あは、せつかくの見せ場だったのにごめん赤井さん。今日、月齢
悪くて。洞窟の中の色んな仕込みとか、赤井さんの試練イベントす
るのに、精気使い果たしちゃってさー”

そうか、あれモフコ先輩の精気で色々やってたのか。かなり大が
かりな仕掛けでしたよ、そりゃ使い果たしますよ。監督、主演、演
出、美術、技術、全部一人でやってたんだもんな。

”こちらこそすみません、気が回らず”

赤っ恥かせてすみません。

”モフコくん。事情は分かったが赤井くんが前フリする前に言っ
てくれないかね、そういうことは”

”エトワル先輩もごめんなさいっ！”

エトワル先輩の方がモフコ先輩より上なのね。エトワルとか言
ってるけど。

かくなるうへは、ネスト民には誤魔化す方向で話をまとめるしか

ない。

「皆さん、今日はこのあたりにして戻りましょう。モフコさんに森を浄化してもらうのは明日以降にしませんか、ね？ ほ、ほら。私たちだけでなくネストの皆もその劇的瞬間に立ち会ってもらいたいですし」

「あーでも、神様の神気は靈気に変換できますよ。レートもいいし。神通力1に対して変換効率75・24倍だろう」

「エトワール先輩だ。何そのドル円レートみたいな、1ドル75円24銭で円高です、みたいな」

「そうなの!?」

モフコ先輩、知らなかったらしく、嬉しそうに私を振り返った。
えっ!? 急に水を向けられて、驚く私。

「祝福！ 祝々福！」

「がばつと！ 思い切って！」

「あ、よいしょっ！」

「ちよつと、皆さん……」

ネスト民が……あの真面目だったネスト民が、モフコ先輩の影響ではっちゃけたのかなんなのか想像以上に悪乗りしてごく……手拍子と共に囃し立てます。何この王様ゲームみたいなノリ。ちよつと、何を仰ってるか私には理解でき……

「赤井神様……そんな、私そんなつもりじゃ……！」

モフコ先輩。照れて遠慮してるわりにあなたどうして女芸人ばりに腰を45度に曲げて唇突き出してる？ これセクハラになりませんか？ ……むしろ私への。

「え、ですから明日以降の、モフコさんの体調が万全な時にすれば……あつ」

誤魔化して許される雰囲気ではありませんでした。

『いいから早く祝福すればいいと思いますよ!』

おーっと!?

裏切り者が背後にいた。先輩が後ろから私を押す。モフコ先輩が『ああつ、ちよつ、そんな』とか意味の分からないことを言いつつ私にきゅつと抱きついてきて……仕方ないので私はぎこちなく抱擁して祝福。鳴り響く拍手。おめでとー。と、面白おかしく囁し立てる声。何この羞恥プレイ。

職場の同僚に祝福するとなると超緊張するよ。私の中身のことを知らない患者さんとは違う、仕事だと分かっているからこそその、漂う気恥ずかしさ。

”モフコ先輩……何だか微妙な気分ですがお互い仕事ですもんね。お客さん、軽油ですかレギュラーですか?”

”何でそんな昔の、ガソリンの油種とか知ってるの。……じゃあ……ハイオクで”

”ハイオクはダメです。軽油しかありません”
”注がなくても奪い取ります。へへ、照れちゃいますねっ”

分かりましたあなたも神様フェチですね。モフコ先輩は私の神通力を根こそぎ奪い取ってくみたいだ。あーだめ、もう私干からびそう。エトワール先輩の方がたんまりアトモスフィア溜めこんでるよきつと、先輩にやってもらえばよかったのに。と恨み節を言いたかったけど、先輩は「私のは精気に変換できないんだよ」と、涼しい顔。私が神通力を搾り取られ干からびそうになるのとは逆に……モフコ先輩に精気が滾りはじめる。銀髪の本一本に力が流れ、肌という肌は光に満ち、彼女の周囲にはオーラが……。

『くうーっ! きたきたっ……精力みなぎってきたっ! す、すごい! 何か胸いっぱい!』

ココロも満タンに、赤井石油です。それより精力で女性がそんな……やめて下さいそこは霊力でお願いします。この管区が全体的に

お下劣になつてしまいました。私の理想としては上品でハートフルな区画に仕上げていきたいんです。

『……靈力、でしょ』

『あ、そか。やったー靈力満ターン!』

モフコ先輩、私の神通力を精力じゃなく靈力に変換し給油完了。アトモスファイアを受け渡しできるとか、何かもうガソリンで動いてるみたいだな構築士って。

違うか、クリーンエネルギーだしエネルギーか。

仕切り直して、今度こそモフコ先輩、ホップステップで飛びあがり、ネストの森の夜空に舞う。先輩が飛ぶと光の鱗粉みたいな、きららしたのが降ってくる。そして……例のガラスっぽい素材でできたファンシーな杖をきりきりとバトンのように華麗に振り回し、両手を広げ。

カッ!

と夜空全体が輝いたかと思うと。モフコ先輩を中心に、大小の無数のカラフルな発光体が彼女をとりまいていた。赤、青、黄色、緑、オレンジの五色。すげー凝ってるなー、私やエトワール先輩の技の地味でもいいや、的な感じとは違う。精霊さんだからか女性だからか、全体的に技がファンタジックだね。

「なんだあれは!？」

「光ってるぞ!」

『みんな見てねっ。三千発の花火。それ、わっしょーい!』

モフコ先輩、めでたい掛け声とともに靈力で発光体を吹き飛ばし、何か花火の大玉を打ち上げたような感じに整形して大輪の花にして咲かせて魅せる。夜空を背景に、疾走し躍動する光の洪水。幾重にも重なり、しゅるしゅると回転したり、先輩が杖を振って舞い踊る

たびに呼応して展開、四散し、明滅する。爆薬ないからどーん、という音こそないけれど、まさに花火大会だ。

その夜、ネストの冬の夜空に咲きみだれた百花繚乱。

メグも、ナズも、モンジャの民も、グランダの民も、私の世界の全ての素民たちが、希望を込めた眼差しで見上げただろう。

闇に浮かび上がる極彩色のフラッシュのコントラストが、何だか人工的で温かくて、私はどこかほっとする。

家族や友人たちと花火大会に行った記憶が蘇る。東京江戸川の花火大会、今年もやったのかなあ。なんて、懐かしく遠い記憶を呼び起こす。

吹き飛ばされた光の破片は失速すると重力にしたがって、ネストの森の上に舞い降りてくる。ふわりふわりと、光の光跡を描きながら。夢幻的な光景だ。

……日本が恋しくなってしまったなあ。

絶え間なく注いでくる発光体は近くで見ると光る大きな胞子のような形をしていた。木々にも、草花にも、水辺にも、地上にも、森の獣たちにも、ひとしく降り注ぐ浄光。胞子は着地すると発芽し、芽は互いに網目状に結びつき、ネストの森一面が輝きに満ち、やがて目も眩まんなばかりの光の中に覆い尽くされてゆく。いびつな形をした禍々しい植物も、小粒の可憐な花をつけ香りがあふれる。狂気と毒気に満ちていたネストの森が元の美しく豊かな生態系を取り戻してゆく。

「この世のものとは思えない。まるで星が降ってくるよう……絶景だな。色々あったが、これを見ると報われた気分になる」

キララが何か私の横に来て両手に息を吹きかけ寒そうにしてたので、私のストールを肩に巻いて片手で抱き寄せた。私の腕の中で暖を取るキララ。安心しきった表情をして、ことり、と頭を私の方に倒す。その、ほんの僅かな傾きだけど、彼女の私に寄せる信頼が伝わってくる。

『そうですね……精霊さんからの、最高の贈り物ですね』

私がほんわかとした気分でキララの体温を感じていると。白銀のインフォメーションボードが勝手に立ち上がった。あ、これももしかして第二区画解放のアナウンス？

【第二区画解放。 任務終了……確認】

『はい』

やっぱり。確認しました。ぼち、とインフォメーションボードのボタンを押します。第一区画のときも区画解放表示が出たよね。ひと段落ついたと実感する。

【 オファーが12件 あります 】

12件！？ 第一区画のときはエトワール先輩しかいなかったのに。え、まさかと思うけど全員使徒希望者……とか……？ 顔と名前覚えられるかなあ。てか普通はこれぐらい申請がくるものなのかな。私もようやくいっぱいしの神様として他の管区スタッフたちに認めてもらえたんだろうか。

誰がオファー出してくれたのかと、名前だけ見たら女の子っぽい芸名もずらりと並んだ。これは念願の、女性使徒が私についてくれるってこと！？ 私も遂に女天使さんたちとハーレム生活！？

いいっ！ すっくいいっ！

あ、でも、たしかエトワール先輩が、使徒ってか天使役は構築中は一管区に七人までだって言ってたよな。じゃ、エトワール先輩を除いて6人選べってことなのか。先輩やモフコ先輩と話し合って慎重に人選をしよう。事情通な先輩方の情報を聞いてからにしましようね。

となるとじっくりプロフィール見たいからとりあえず後で。というわけで全員に【保留する】ボタンを押し、ひとまず終了かと思いきや……

【当管区への申請が2件 あります】

あ、こっちの方は事務手続きつばいからちゃんと読まないやばそう。何か区画解放の手順とか設定とかあるのかな。というわけでクリックすると

【第28管区主神 白棕 千早（ID：JPN215）が、当管区への短期留学を希望しています】

【第29管区主神 蒼雲 天晴（ID：JPN216）が、当管区への短期留学を希望しています】

『こ、これは まさかあの二人が……！？』

「ど、どうしたんですか神様」

素民たちに漂う安堵の空気の中、私が一点を凝視し不穏な独り言を脈絡なく発するので、ロイが心配そうに尋ねてくる。あーもう絶対ロイに独り言言う癖がある痛い人だと思われてるよな私。

わかりません。マキシマム・ザ・わかりません。

知ったげに一言二言漏らしてみました、私混乱中。

字面通りにとらえたら、留学って……ここに來るってこと？ 自分とこの管区どうするの？ アガルタから出たら構築がりセットさ

れちゃうんだよ？ いいのかそれで。

それとも、構築終わっちゃって維持士に引き渡したとか？ まさか私を冷やかしくるとか？ はえーよあの二人終わるのが、どうなってるんだよ。あ、でもその線もない。きっかり十年、アガルタの中に入ってなきゃいけないわけだし。何がどうなった？

てか、蒼雲さんの名前、天晴っていうんだ知らなかったよ。
えーと、……あっぱれ？

第4章 第16話 スーパーノヴァ・フォールダウン（後書き）

第4章終了です！

かなり時間がかかってしまいましたが、読了ありがとうございます！

次章、青白の神々留学で同期会とトリコロールの完成です。

第5章 第1話 赤の神様と白の女神様と青の神様

『よくよく申し付けておきますが、わたしが不在だということを外地に気取られてはなりません。きな臭いことが起きる可能性が、万に一つもないとは断言できませんからね』

第五区画解放を経て、白の女神こと白棕神が二十八管区のおよそ三分の二を平定し支配下に置いた今、二十八管区の安寧は盤石の構えにある。されども、白棕神はその胸に患いごとを抱えていた。彼女が自身の誘引力を知るが故に、神通力があらゆる難局を収め覆い隠すことを知っている。民心を惹きつけ叛逆心を根本から殺ぐ。

自らが本体を残し二十八管区を去った後、管区に何が起こるか想像をめぐらせる。使徒たちだけでは対応のきかない、大規模で厄介な自然災害が発生する可能性。考えたくもないが、革命だっていつ起こるとも知れない中だ。

その手で導いてきた民を残し、誰がこの地を離れたいものか。それでも、行かねばならぬ。 。
託された生身の患者を、誰頼ることもなくこの手で救うためだ。
二十八管区の新たな未来を切り開くためだ。

心は固まり、赤井神も留学を受諾し、二十七管区へと繋ぐ量子転送ゲートは開きつつある。住み慣れた神殿の全権全機能を、巫女に一任する。一度たりとも手放さなかった、神殿の至聖所のマスターキーをコハクの手に渡す。無防備に陥る白棕の命。白棕の本体は、意識なきままに至聖所にある。

『ではコハク、あとは頼みましたよ。……ほれ、手を放しなさい』

「ひゃい」

こくんっ。

ピンクゴールドの三つ編みの毛先を所在なさげにいじり回しながら、少女は覚悟を決めて頷く。内に秘めた心もとなさを押し込めようとした結果、鼻水が出てしまって、返事の声の不細工になった。もっと凜として、彼女が安心して往けるよう笑顔でお見送りをするつもりだった。が、彼女の緩すぎる涙腺は決壊したまま。

『困りましたね。そうさめざめ泣かれると、旅立てないではありませんか』

「しろのめがみさま。やっぱり私、お供しますっ！ 行かせてください！」

着の身着のまま、コハクは一族の証たる大切な神剣を取り、白いローブを纏い白棕に同行しようと頑張る。しかし近づこうとしても普段は優しくコハクを受け入れてくれる、白棕の結界にぐいと弾き返される。

「あうっ」

コハクは恨めしそうに白棕を見上げる。

『わたしがお前を置いてゆくのは』

去ろうと決心していたものが、心を揺さぶられ緩慢な足取りでふわりと踵を返す。全身に純白の煌めきを宿した女神は、その頬にしつとりと慈愛の微笑みを浮かべ、

『お前がわたしを信じるように、わたしもお前を信頼しているからです。留守中、お前以外の者には指一本、わたしの本体に触れさせる気はありません』

「天使さまたちにもですか？」

『ええ』

こんな肝心なときに、白棕の天使たちがいない。主神の決意を引き止めてくれそうなものなのに……。今日は天帝降誕日なので安息日だと、そういえば昨日女天使が言っていた。コハクにはその意味するところは分からなかったが、とにかく白棕を思いとどまらせられそうな材料ならば何でもよかった。

「て、天帝様降誕日は安息日ですつ。めぐみさまも、安息日を守らないと。ですから、天使様たちがかえってきてからにしてくださいつ」

『天帝降誕日は神の眷属のための安息日であり、お前には何ら関係がありませんよ』

現実世界では天皇誕生日で祝日。使徒たちは休暇のためログインしていない。何とか引き留めようと頑張るコハクに、白棕ももう少し付き合っただけでもないが、空間が不安定化する事を考えれば、二十七管区との接続時間は最小限にしなければならぬ。既に^{ゲート}干渉場は開いていると、鴻池から報告を受けていた。

37歳独身鴻池 弘人、白棕のためなら休日返上もなんのそのである。頼もしくもあり、それでいいのかと白棕は幾分心配にも思うのだった。

「で、ではせめてつ。夜はめぐみさまのお隣で寝てもいいですか？」
『もつ……』

ふつ、……と、我知らず調子を乱されて息を零した。嬉しくないと言えは嘘になる。勿論戸惑いもある。アガルタの神と素民を結ぶ重要な役割を果たす、蘇芳一族の巫女をただの少女へと転化せしめた責任は重い。神通力を失い、「特別」でなくなったコハクを自立させ、周囲に認めさせ、立派な賢君へと成長させることが彼女の主たる白棕の務め。これでよかったのだろうか、と一抹の不安を覚え

たこともある。

迷いながら、確固たる選択を一つずつ積み重ねてゆくほかにないのだ。白棕にはただ、前進あるのみ。その推進力を赤井神から学びたいのだ。

『コハク。……いつからそんなことを言う子になったの』

「ご、ごめんなさいっ?」

コハクは素直で従順なよい巫女。彼女が今に限りそうでないことは、コハクが自らを慕う証であり、ここ最近の彼女の情緒的な変化を見ると、込み上げてくるものがある。白棕は嬉しかった。

赤井神が彼の世界でA・I・Iに命を吹き込んだように、この世界のA・I・Iも人に限りなく近づくのだと知った。A・I・Iとして割り切り、見限るのではなく、道具のように扱うのではなく、彼女と共に生きる。褒める。叱る。与え、汲み取らなければ、感受性は芽吹くまい。

「ごめんなさい。一人で寝ます」

『では夜ごと、お前が眠りにつく前に、その日の出来事をわたしに具申するよう命じます。怠らないこと。どこにいても、どんなに離れていても。わたしはいつも、耳を傾けていますからね』

「はい!」

仮想の女神として長きを生き、仮想世界を錯綜する情報を構築し、選ばれし地の民を自らの色に染め上げてゆく。どのように彼女の色味を出すべきかと、長い間掴みあぐねていた。この理想郷をもっとより良くするために、旅立つのだ。必ず、大きな糧を得て戻ってくる。白棕は己とコハクに固く誓った。

『では、行ってきますよ』

よい返事に安堵しつつ、女神は明るい声で暫しの別れを告げると軽く跳躍し、神殿の祭壇中央に出現した球形の光塊の中にその身を浸す。同時に高度量子暗号鍵生成フィールドにエントリ、白棕の情報を転写し生成される光子対（EPR）。それらは細かな光のノイズとなつて身体に纏わりつく。

情報が生成させると、空間系量子転送に伴い、足元から光の屑となつて砕け、エンタングルした状態でかの地へと昇華されてゆく仮初の身体。量子暗号化され、まったく異なる世界、異なる座標において再観測される瞬間に跳躍する。

神殿内の空間は不安定化し、景色が球形を描くように歪んで見えるが、コハクは恐れなかった。女神から聞いていた通りだ。彼女が去つてまる一日は、空間がひどく不安定化しているので神殿内にはだれも立ち入らせてはいけないと教えられている。

女神の身体が細かく引き千切られ、ぱらぱらとほつれていっても、コハクは飛び出してゆきそうになる心をぐっところえた。

そして今、白の女神は世界を超えた。

切なげな残響と白い光の余韻を残し、白棕神の分身は二十八管区世界から消滅した。

「めがみさま……お気をつけて。お帰りを待っていますから……」
コハクは祭壇の前にくずおれ、コハクなりの丁寧な最敬礼を送ると、鼻をすすり、ごしごしと両手で涙をぬぐい表情を引き締め、地を踏みしめて立ち上がる。誰もいない神殿の扉を固く閉ざす。私が守り抜いて見せる。白の女神のいない、祝福なきこの世界を。

そして笑顔で、おかえりなさいを言うんだ。
すつと背筋を伸ばし、規則正しい足音を響かせ、彼女の執務室へと足を向けるのだった。

しかし……泣きすぎて顔が腫れていないかしら、臣下に笑われるのではないかしらと気にしたコハクが、神殿の外の聖泉の水面を覗き込んで自らの姿を映しだそうとしたとき……。

「きゃあっ!」

その日の朝、短く小さな悲鳴一つをその場に残り、量子転送ゲートの開闢によつて不安化したバグの狭間に飲み込まれ、誰に知られることもなく神聖エルド帝国の若き女王が失踪した。そして奇しくも彼女のデータは、白棕と共に二十七管区に転送されてしまったのである。

赤の神の総べる、その世界へ。

***Heavens Under Construction
第5章***

> i 2 8 7 3 4 — 2 4 9 6 <

『むーふーふふっふー』

……ん？ んん？ 何か様子がおかしい。

『ふーふふつふつふー　　ふん〜ふ〜ふふん、ふ〜ふ〜ふん』

結界で外界と隔絶されたヤドカリ神殿の寢所で惰眠をむさぼる私の耳元で、何かウイスパーボイスで鼻歌が聞こえてきた。弦楽器的で陽気な演奏もジャンカジャンカ背後で鳴ってる。何この曲、オリジナルソング？　鼻歌も音程は合ってるけど酷いコード進行。うわーテンションコードだらけで精神的に不安定になる！

寢覚め最悪な気分で薄ぼんやりと瞼をもたげる。

至聖所の寢所の天井は一部が吹き抜けで、天窓から外が見える。

ちよーい、まだ外暗いじゃん、夜明け前だよ。誰とは知らないけど変な目覚ましで起こさずに寝かせてよ二十七管区最近平和なんだからさ……と、耳を塞ぎつつ、ふわふわの白い枕に顔を埋めようともし、ウイスパーボイスは更にポリリュームを上げ一本調子で継続。

あまりにウザいので無視してるってと極めつけに……私の枕が急に跳ねて

『1、2、3　　つからのDA　　!!』

『ふぐう　　?!』

私の顔面に闘魂が注入された　　!!

つて、これ枕じゃね　モフコ先輩　!!　何か自作の曲の途中から闘魂注入みたいなのがフュージョンしてた。

『ファイツ！　ファイツ！』

ふっさふさの白い毛玉は突起を二本出してファイティングポーズ取りつつシャドーボクシングしてる。動きが超すばしい。まっしるしるすけも真っ青だよ先輩、残像が見えますよ。これには私も驚いて跳ね起きる。

『ファイツ！ じゃありませんよ！ 一体何と戦ってるんですかモ
フコ先輩朝っぱらから！』

『朝だよ赤井さん！ モーニングコールだよっ！』

うん朝なのは分かる。正確には夜明け前ですけど。

『起こすなら普通に起こしてくださいよ……何で先輩が私の寝所で
闘魂注入してるんです。寝込みを襲われるとは思いませんでしたよ
！ あ、私の枕……いつの間にも！』

先輩が私の枕と入れ替わってた。何か今日はやけに枕がモフモフ
して気持ちいいと思ったら！ 先輩が私の頭の下で息潜めてたん
ですか！

『で、何でモーニングコールしてくれたんですか』

頼んでません。頼んでませんか？ すると毛玉、よよよと目
頭せんけとをおさえて

『冷たいよー赤井さん。何でって、エトワル先輩がいないから赤井
さんに枕営業してるんだよー。枕だけに？』

ぼっ、と何を勘違いしたかサーモンピンク色になる毛玉。

もうイラつときたからモフコ先輩をお値段以上二りでクツシヨ
ンとして陳列してもらおうか。それが夜店に射的の景品として並べ
てもらおうか。思わずそんな衝動が沸いてしまったよ。何でモフ
コ先輩がまた毛玉なのかって話だけど、精気の消費量を抑えられる
から毛玉状態の方が楽らしい。エトワル先輩がいないのと、毛玉
なのをいいことに、足の裏くすぐられたり、沐浴中に物影から覗か
れてたり、枕営業（何だよそれ）してみたり、モフってくれと要求
してみたり。私へのセクハラし放題。

『枕営業とかいらないので、普通に仕事してください』

『えーケチー。残念な神様だなー赤井さんは。もうちょっと器が大きくてもいいと思うよ?』

チラツ、とこちらを見る毛玉。要約するとモフレと言いたいらしい。

……さてお見苦しいところをお見せしましたが、国民の皆様おはようございます。

私アガルタ二十七管区の甲種一級構築士赤井ですが、今日も皆さん勤労していますか？

勤労納税して下さいね私のお給料の元ですから。一に納税、二に納税、三、四がなくて五に納税の意気をお願いします。なに…ウザい通り越して私への殺意が沸いてきた？ そりゃ大変。では真面目にナレーションします。

さてさて、第二区画解放も無事に終了。

ネストの森はモフコ先輩の粋な計らいによって豊かで多様な生態系を取り戻し、モフコ先輩と私達はネストに凱旋帰還。ネストと二十七管区に久しく待ち望んだ平穏が訪れてから一か月ちよいが経過。こちらでは二月の終わりだ。

陸の孤島と化していたネストが開け、地域間の交流が一段と活発化し文明水準も引き上げられた。半ば強制徴集されていたロイはモンジャに帰郷、メグとナズも一時帰郷。メグはシツジの子をパウルさんから譲り受けて四匹連れて帰り、モンジャに牧場を作って牧畜を開始。モンジャの周辺は軟らかい草が豊富で、牧畜に向く土地柄ではある。でもエド対策は念を入れてね。

ナズは何やら風車から着想を得て、大きな動力源となる水車を作ろうと、親友のフリーくん小さなモデルを作ってモンジャで試行錯誤の日々を送ってる。私はヒント出せないけど、工学部出身のナ

ズの発想チートに期待してる。ナズの記憶が回復してきたら、タービンのなものを思いつくんじゃないか？　もう原型の発想はあるみたいだし。これには期待せざるをえない。

ヒノとラウルさんはネストに残留し断崖絶壁の縦穴住居部分の各階連絡通路の足場を補強しつつ、建築技術の研鑽にも励んでいるみたいだ。グランダからの建築技師もネストに何人が入ったり、ネストの鍛冶師もグランダに交換留学。文化交流、大いに結構。

各地域間の円滑な交流のために、高地にあるネストとグランダの領地間に橋をかけようという計画がキララとパウルさんの間で浮上。ネストとグランダ間を結ぶ大橋は、最短距離で980m。標高二千メートル級。

うん、そんな距離と高さに吊り橋かけるとか無理。

突風とかで超揺れるしあの地域、年間通して強風なお土地柄。仮に根性で架けたとしても絶対すぐ落ちるからやめて大惨事になっちゃう。……と説得してたら、モフコ先輩が「高架橋を架ければいいじゃない」と言い出した。二千メートルの橋を架けるんですか！　建築水準がもはや現代並みじゃないですか……と指摘すると、古代ローマの水道橋ポン・デュ・ガールが紀元前何世紀に建てられたと思ってるの！　と逆ギレ。

何だよそれどんな少女ガールだよ……と、歴史の苦手な私が首を傾げている間に、電光石火の勢いで二千メートル級の超高架橋を建設してしまわれた。伊藤さんと同じく、CADみたいなソフトでさくつとあっさり造るものだから、前回のヤドカリ神殿一夜にして建設の例もあって、素民たちは今回の件で何か新しい領土が見つかるたびに神とその眷属たちに凄い建造物を建ててもらえる特典がついてくると誤解されたっばい。まあそのことで、「赤井神様たちSUG

「EEE」になつて私への信仰心を一層深めることになつてはいる。いいのかこれ？ 文明レベル的に厚労省に怒られたりしない？

普段は毛玉なモフコ先輩は乙種二級構築士で、グラフィッククリエイターの資格がある。乙種二級は本来、サポーターっていう職種で特に特別な権限は持たないんだけど、モフコ先輩は厚労省公認のグラフィッククリエイターでもあり、これは現実世界での一級建築士資格が必須。変な巨大建造物建てて設計悪くて大事故しちゃいけないからね。

彼女は乙種二級としての技能の他に建造物や生態系の構築など、外観に関するデザイン決定権を持つ。仮想世界にダイヴできるグラフィッククリエイターって日本には五人もいないらしい。オリジナルテイのなさとネタのきわどさに目をつぶれば、モフコ先輩って超人なんだなと知らされた私。くどいようですが、見た目は毛玉です。

そういえば愛妻が長女を出産したので、立ち会いと付添いのために念願の有給を取得したエトワール先輩。だめだあの人、赤ちゃんに骨抜きにされて皆様に見せられない顔してる。ついでに育休取ったりして！ とかモフコ先輩と茶化して笑ってたら冗談抜きで先輩が出勤してこない。マジすか。

紆余曲折の末、長女が未来望ちゃんみらいのという名になつたと聞いて、私が親でもないのに枕に顔を埋めてジタバタしてたところで赤ちゃんの写メがインフォメーションボードに届いたと思つたら、危ない危ない、殺人級の愛くるしさ。一切名前負けしてなかった。何で天使の先輩のお子さんまで天使みたいなの？ さらにストレートの栗毛で、瞳はヘーゼル。ハーフの赤ちゃんを甘く見てはいけない…：そう実感した私はエトワール先輩にベビザラスの子供商品券10万円分を贈つたんだ。

先輩、近々戻ってきてくれるといいな……。もう多くは期待すまい。

天使といえば、私の管区にオファーを出してくれた天使さんたちは、優柔不断な私がプロフィールだけでは選べなかったものだから、伊藤さんの計らいでモニタ越しに面接して採用することになった。伊藤さんに日程調整をしてもらってるところです。

伊藤さん絡みでいえば、西園さんとは暫く連絡取れないって話があった。西園さんの自宅、もぬけの殻で足取りがつかめないらしい。何で厚労省なのに引越し先も把握できないんだろう。個人情報保護法がどうちゃらって言ってたけど。変わったことがなければいいけど……。伊藤さんは引き続き行方を追ってみます、とは言ってくれた。西園さん、今頃どこで何やってるんだろうなあ……。仮想世界から出られない私じゃどうしようもできないから、西園さんのことは、伊藤さんに任せるしかない。

そういう訳で私はモフコ先輩と神殿に二人きり。今日も二十七管区全域、祝福ついでにパトロールに行くかなあ。エトワール先輩がいないから仕事を分担できない、私が全員に祝福して回らないといけないんだよね。モフコ先輩は乙種だから祝福はできないし。そんな事を思いつつ、顔を洗ったり口を濯いだり水で寝癖を直して身支度を整えている間に、毛玉先輩がインフォメーションボード出して何か情報見てる。あまりに熱心に見ていらっしやるから、気になつてたことを聞いてみた。

『二十七管区に留学すると言っていた同期二人はいつ来るんでしょうねー』

『えっ!?!?』

ぎょっとして毛を大きく逆立てるモフコ先輩。

ハリセンボンですか。二倍ぐらいの体積になってる。よく膨らみますね先輩。

『!?!』

その形態に口に水を含んだまま、つられて驚く私。

『今日か明日だよ。だからモーニングコールしたんじゃない、枕営業のくだりは冗談だよ。プロマネから聞いてないの？ あ……もうロゲイン用のゲートが開いてるじゃん』

『ぶー!?!』

びつくりして思わず口を濯いでいた水吹きました。

聞いてないよ。何でいつもそういう大事な告知が当日なんだよー伊藤PM勘弁してよ。毎回毎回アドリブ求められたって対応できませんよ。接客準備もできてねー。神殿の掃除は昨日もモフコ先輩と一緒に念入りにやったけど……昨日も二組結婚式ありましたからね。まー新婚さんたち、神殿内をフラワーシャワーで散らかす散らかす。あ、ちなみに先輩はダスキンのなお掃除ワイパーにもなれません。水洗い可能、抗菌仕様。一家に一台……って言ってる場合じゃない。

準備って何すればいい？ 歓迎の宴とか？ 私ら食べられないから侘しい祝宴になりそうですけど。

『どうしましょうかモフコ先輩。何も準備してないんですが。まず二柱に寝てもらおうベッドがありません』

何日ご宿泊するのかわからないけど、白棕さんは一応女神だから私と同じ寝所ってわけにいかない、部屋別にしないといけないと思うさー。

『寝室ぐらいは私が作るけど、変わったことはしなくていいと思うよ。だって彼ら、勉強しにくるわけだし。ただ、ロイ、キララ、パ

ウルたち各地区の長たちには伝えておいた方がいいんじゃないかな？』

【 第29管区主神 蒼雲 天晴（ID：JPN216）が、二十七管区にエントリしました 】

えーもう来たー！？

『あ、まず蒼雲神がエントリ完了。白棕神用のゲートも接続開始。あれ、どこに到着したのかな？ ステルスしてるから分からないな』

モフコ先輩曰く、留学神はエントリ時にその管区の主神の神通力所持量の1/10に力量を調整されてやってくるらしい。だから私より留学神の方が強くて民たちに人気が出ちゃう！ 大変！ なんてことにはならないんだけど。その措置が逆に彼らの神気を分かりにくくしてる。

【 第28管区主神 白棕 千早（ID：JPN215）が、二十七管区にエントリしました 】

『ぎゃー二人とも来たー！ 民たちに見つかって大騒ぎにならないうちにお二人を迎えに行きましょう！』

変装してくるならまだしも、私みたいな白衣に後光姿でやって来るなら、相当目立つ。目立つってもんじゃない輝いてるもん。キララは曲者じゃー！ して下手したら拳兵するだろうし、ロイは怪しい奴！ と先手必勝とばかりに挑みかっっちゃうかもしれない。この世界に神は私だけだって以前ロイとキララに言ったことがあるから。白棕さん蒼雲さんが偽物だと思われて、血の気の多い彼らに攻撃されても仕方がない。そして彼らが返り討ちに遭っちゃうかも！

『んー。二柱別々の場所にエントリしてるし、気配消えてるから、迎えに行こうにも見つからないかな。普通は赤井さんに挨拶にくるのが筋だから、神殿で待つてればすぐ来るっしょ。別にトラブル起こしに来てるわけじゃないし』

ちくしょう……毛玉さん大あくびだよ。

私はモフコ先輩を肩に寄せ、居てもたってもいられず神殿の入り口に仁王立ちでお迎え準備。モンジャの民とグランダの民が神殿に朝の礼拝に来てたから、祝福しがてら、キララとロイに来客がある旨を伝えてくださいとは言ったけど。

伝わったかなあ……間に合えばいいけど。

一足遅かったっばいなあ。

その後、日は高くなってきているけど、待てど暮らせど……

『もしもし。モフコ先輩？一向にだれも来る気配がないんですが……』

『来るよ、来るって。きつとくる』

私の心配、クライマックス。

もしかして皆さん、私の存在無視でもう二十七管区の視察に出かけちゃってます？

それはわざとらしいほどよく晴れた、モンジャの朝だった。
モンジャの少女、メグの朝は早い。

「一、二、三、四！ よかったあ……」

メグがネストからもたらした四匹の仔シツジは、メグたちの作った柵のシツジ小屋の中にきちんといてくれた。青い毛むくじゃらが四つ、木の寝床の中でもこもこと折り重なって動き回っているのを見ると、ざわざわとしていたメグの胸さわぎはおさまり、何だかほつとして笑みが零れる。

メグはミシカに習ったようにシツジの面倒を見ている。ネストと比べてモンジャの気候が暖かいからか、最初はシツジの餌食いも悪かったが、最近は環境に慣れた様子だ。小屋の門を外す。

霜の降りた牧草を踏む足がふるると震えているシツジもいるけれど、今日もエドなどの襲撃を受けてはいないのが何よりだ。夜行性のエドの来襲は基本的に夜間。モンジャの草原に面する場所に作られたこの小さな牧場は、地形的にエドに襲われやすいのだ。だからメグが神経を尖らせている。エドのアイは大きなふさふさの身体を丸めて伏せの状態で、牧場の中に入ってゆく青い仔シツジたちを興味もなさそうに横目に見送る。

アイは最近、メグがシツジにはかり構うので面白くない。

「アイにもあとで、たくさんごはんあげるからね」

メグはアイの首筋に抱きついた。アイはふん、と鼻を鳴らす。

いつもと同じ朝……ではないと気付いたのは、メグの視界の端で東の空がきらりとおかしな風に青く輝いたからだ。

「っ！？」

光が走ったあたりには、朝焼けの赤色に燃える太陽を映した冬の空。しかしそこに青い二重の平らかな光円が二つ。浮かんでいる。シツジの為に持ってきた水をその場に置いて、「ママーママー」と鳴き声を上げながら近づいてきた仔シツジの頭をよく確かめもせず撫でる。

注意深く見ていると、光円の中に、初めは薄く、やがてくつきりと光の模様が現れた。円と同じように青い。

「神……？」

メグはその黒い目を見開き、呟いた。どうしてそう言ってしまったのかわからない。ただ、メグには”読めた”ことが不思議だった。最近、メグは習ったことも書いたこともない記号が読める。ロイに相談すると、赤い神の使う神聖文字であるとのこと。それらは全て、メグの夢の中で見たものだ。

夢の中のものを覚えたというより、夢の中で見かけて思い出したという感覚が強い。そんな筈はないだろうと赤い神に理由を尋ねたこともあったけれど、彼は言葉を濁し、未だに理由を教えてはくれない。メグには分かっていた。

この文字は、神様そのひとをあらわす記号……。

目を奪われていると、二重円の模様の中から、おもむろに人の足が二本出てきた。まるで、水面から水中に誰かが沈み込んでくるように。皮の履物に包まれた足。長く、しなやかな白い衣が次に現れ、風に弄ばれてたなびく。……真っ白なその衣の白さが、ほの暗い空によく映えた。”真っ白”な衣服は、モンジャの集落の絹糸では作れない。どうしても黄ばんでしまう。ネストにもグラランダにも、白い糸がない。だから、”真っ白”を着ているのは”赤い神様”だけなのだ。

「あかいかみさま？」

だが赤い神の着ている白衣とは構造が違う。長衣は前あき式で、二枚の襟が折り重なり、きらきらと輝く銀の飾りのついた帯で長衣を止めている。上着の裾も長く、袖は長く袂は短い。そして何より

決定的だったのは……その白衣の主の髪の毛……。

「あおい……」

メグの見知らぬ、青い神。

メグは段々と怖くなってきてシツジの柵を閉ざし、音もなくアイに飛び乗ると、この変事を赤い神にいち早く知らせるため、彼の住まう神殿までアイを走らせようとした。

「あ、でも」

牧場から神殿へのショートカットは山道を通るが、この時期は雪が深く沢に滑落する恐れがあるので通れない。モンジャの集落を経由する道は安全だが時間がかかる。少し危険だけれど、早く神殿に行ける荒地の道を選ぼうと思った。何故危険なのかというと、そこはヤスがよく狩場に使っていた草原に隣接する荒地であったが、たまにエドより大きな、家一軒分ほどもある獣が出るのだ。

餌の豊富な夏場は比較的気性が大人しく、小動物を食べて繁殖するのだが、冬場は餌が不足するため狂暴化し、人間をも襲われる可能性がある。だがメグは、この地域では最強の肉食獣エドであるアイを駆っているので、危険だとは思わずにいた。

そしてメグは選択を誤った。

「急いで、アイ！」

メグはアイに身を寄せてしがみつき、共に未開の地を駆ける。こつこつとした岩場の多い広大な荒地は、薄らと雪に覆われている。そのため、非常に足場が悪い。案の定、アイの前足が岩場で躓いて、メグがアイの背から遠くに投げ出された。腕をすりむいてしまった。岩で左腕が大きく切れて、血飛沫が飛んだ。

「っー……！！ あ、アイツ！」

メグは言葉にならない痛みと格闘しながらも、よたよたと走りながらアイの名を呼ぶ。

「ガウ！」

主人の怪我に気付いたアイが引き返してきて、再び背中に乗せようとしてくれた。メグは足場がやけにふかふかとしていることに気付く。そして……メグの足にコツンと触れたのは、卵だ。子供一人分ほどの大きさもある土色をした卵がゴロゴロと数個転がっていた。

「ブリルの……巢。逃げなきゃ！」

が……それは阻まれる。メグの背後に、気が付けば運悪く巨大な影が差していた。そのシルエツトは、メグが恐れていた獣そのもの。メグは立ち竦んだまま、背中ごしに気配を探る。鼻息が聞こえ、背後の獣から発せられたと思いき息が湯気となって見える。

本能的に察知した。メグとアイは、肉食獣ブリルの縄張りを侵しってしまったのだ。メグは心の底まで震えあがりながらも、踵を返し相手と対峙した。正面を向かなくては、攻撃に備えることができない。しかし目を合わせるといことは、抵抗する意思を野生動物に表示することでもある。

それが攻撃の発端となってしまう場合も往々にしてある。

それはブリルの中でも特に大型で、モンジャの高床式の家二軒分のもの大きさはあるだろうか。毛のない褐色の皮膚、固く黒い甲羅を背負い、黄色の双眸でこちらを睥睨している。巢を侵した人間に対して虫の居所は悪いらしく、じりじりとにじり寄ってくる。既にかなり間合いが近い。アイに飛び乗って逃げる時間はない。

アイがブリルに飛びかかろうと身を低くするも、ブリルの皮膚は

固く、アイの爪も牙も通らない。エドはその生態として、草原の小型肉食獣や人間を餌としてきた。荒地に生息するブリルを餌としない、戦い方を知らないのだ。また、ブリルもエドを餌としない。ましてやアイは野生のエドではないし、ブリルもエドを知らない……この場でブリルの知る“餌”は、非力な人間であるメグのみ。

ターゲットはメグのみだ。

ブリルとの距離が徐々に縮まってくる。メグは手をもつれさせながら腰巾着から、縄や木枝を切るために携帯している小さなナイフを抜き放つ。これは、赤い神が鍛えて与えてくれたもの。刃先は鋭利で、よく切れるしどれだけ切っても刃こぼれ一つしない。でも、刃渡りはわずかメグの掌ほど。

……心許ない、頼りない。

武器としての性能だけでなく、武芸の心得のないメグの手ではどんな武器も扱えない。

私は戦えない。メグが己の無力を客観的に分析していた時……。

「ギャウツ！」

捨て鉢になってアイが飛び出すと同時に、ブリルが空中のアイを長い前足で真横に薙ぎ払った。アイは横っ腹に重い攻撃を受け、容易く吹き飛ばされ岩場に叩きつけられる。戦いに慣れていないのはアイも同じだ。ブリルはアイの攻撃を受けて怒りに火がついたかのように、メグに向かって突進してくる。メグは両手でナイフを構えた。無駄だとは承知している。それでも、何もせずに食べられるのは嫌だ。

何もしなければ、運命は定まっている。

現実残酷だ。

メグは震える両手を落ち着けて力を込めると、目を瞑り、片足で

踏み込んで一思いにブリルを貫いた。

手ごたえはあった。固い弾力のある肉を切る手ごたえ。最も可能性が高そうであった空振りでは、ない！ メグはその感触にしがみ付き、力を込めて全体重を預けた。深々と、刃は埋められた。

そして、辺りはとても静かになった。

アイの呻く声が聞こえる。アイも無事だ……だが、怖くて目が開けられない。

「うそ……」

勝てるわけがない。たとえナイフで傷つけたとしても、きっとブリルの鼻先を掠った程度だ。それほどにブリルの皮膚は厚い。戦う前から結果は目に見えていた。それでも、メグはその場に立っている。

どうして？

心を決めて目を見開くと、疑問の答えはそこにあった。渾身の力を込めて突き刺したメグのナイフは、ブリルの鼻先にすら刺さってはいない。それどころか、ブリルには掠り傷一つ負わせることができなかった。だが、ブリルは失神していた。まだ息はある。

メグにはもう、何が起こったのか理解が及ばない。

メグのナイフは 白い衣を着た男の、心臓の真裏を刺し貫いていた。だくだくと流れる彼の赤い血潮。メグは驚いてナイフを手離し、腰が抜けてその場にぺたんと座り込んだ。

空より青い髪の男……彼は、ナイフが背に突き刺さった状態のまま、メグをゆっくりと振り返り、にやにやと笑みを浮かべながら腰を落とすのだ。あたかも痛みなど最初から感じていないかのように。彼は嘗め回すようにメグを観察した後、腕の傷を見つけると、遠

慮もなく手を伸ばし傷口をすつと撫でた。彼の手の動きに呼応し、メグの傷口が光粉に覆われ、痛みもなく傷が浅くなり痕も残さず閉じてゆく。それはほんの一瞬ではあったが、ひどく神秘的な光景であった。つかの間の奇跡は、彼が神であるとメグに信じさせるには十分な証拠であった。

『おつはよー！ やー君、いい朝だねっ！』

開口一番、彼は人差し指でこめかみのあたりに触れつつ、これまでの事など何もなかったかのように軽い調子でそう言った。仕切り直しだと言わんばかりに。青髪の男は、その瞳も同じように青い。メグは天然の色で、これほど澄んだ、そしてけばけばしい青色を見たことがない。だから自然と、見惚れてしまった。そしてその色彩のトーンが、赤い神のそれと類似のものであることに気付く。

「お、おは、……それより、背中っ！」

彼が大流血しているので挨拶どころではない気がするのだが、彼は涼しい顔をしている。彼はあまりにメグが慌てるので、面倒臭そうに背中に手を回し、事もなくナイフを引き抜いて自らの血液を白衣でさっさと拭い、メグに柄を向けて手渡した。男の鷹揚な態度と対照的にメグはたじろぎ、ナイフを受け取ることでできない。

『はい、大事な刃物なんだから？』

「で、でも」

『あー俺って一応不死身だし、気にしないでオツケー。この獣も気絶してるだけだし万事オツケー。ねーねーそれよか、君ってメグだる？ 第一発見素民がメグとか、俺超ついてね？』

「ついてね？」

メグが困惑して、苦笑いを浮かべつつ、ことんと首を右に傾ける。『あ、こつちのこと。メグに会ったらいろいろ聞いてみたいこと、

あつたんだよね〜」

「た、助けてもらってありがとうございます。め、メグです」

メグは混乱しつつもぶんぶんと何度も頷く。一体何を訊かれるものかと戦々恐々としてみると、青い男は座ったままメグをまじまじと観察し、最後ににやりと含み笑いを向けた。この男の独特の笑い、相手を小馬鹿にしているようでもあり、メグの反応を面白がっているようにも見える。

「あのっ、あなたもかみさまですか？」

『んーまあね。俺のこの素民たちからは青の神とか青いのとか言われてんの。今日は赤いのに会いにきたんだよ』

「あおいかみさま、ですか」

メグは相手の素性が知れて、赤い神の名を呼ばれたのでほんの少し気を許し、自然と笑顔になった。今になって落ち着いてよく見ると、青い神の目元は優しい。助けてもらったのだから、嘘を言っているとは思えなかった。悪い神様だとも……。

彼は自らの傷を癒すのを後回しにし、キャンキャンと苦しがつていたアイにも手当てを施す。アイは彼の治療を受けると嘘のように元気になり、彼が手を差し出すとアイは彼の手をぺろぺろと舐めた。そして自称“青の神”は……メグに向き直ると両肩にぽんと両手を置き……。

『君かわいいーね。ちょーっとでいつからデートに付き合ってくんない？ あ、大丈夫。祝福とか布教とか怪しいことはしないから』

彼はよく言えば人懐っこい。しかしぺらぺらと流暢に喋る神もいたものである。

赤い神は寡黙で、沈黙を好む。ぼつり、ぼつりと大切な事柄だけを途切れるように話し、危険がない限りは決して民に対して大きな

声を出さない。赤い神は静的であり、民を支え、憩う木陰を与えてくれる大樹のようで、話を聞くのが上手だ。民は安心して、彼に日頃の出来事をつらつら話し、返事があってもなくても、何だか満たされて日々の暮らしに戻る。

メグは青の神と言葉を交わし、赤い神と比較して非常に違和感を覚えた。赤い神は受動的で、青い神は能動的だ。まるで対になっっているかのような二柱。

『だからさ。ちょっと付き合っつてよ、デート』

「はい？」

メグの口が、素で縦にあんぐりとあいた。

「でーとって、なんですか？」

第5章 第2話 青の神様とメグの割と真面目なデート

メグが目を開けると、そこは空気が澄み、風が渡っていた。

傾いた地面によりりとバランスを崩すと、ふっとメグの腹部を支える片腕。過不足のない力加減。メグの隣にはしっぽを丸め、落ちて着かない様子でその場をくるくると回るアイがいる。

青い神が球形の青い結界を張り、軽い調子でパチンと指を鳴らすと景色が変わり、メグたちは先ほどの荒原ではない場所にいた。

メグは呆然とし、目をしばたかせる。

『どしたの、そんなきよとんとしちゃって。転移術知らないの？
ねえねえびっくりさせちゃった？ かわいーリアクションしてくれ
るね』

青い神はメグの純真さににやにやと笑う。

メグは口をすぼめた。認めるのは悔しいけれど、こんな凄いこと、赤い神にはできない。

『ここがいつかな。見晴しよくて雰囲気いいじゃん』

蒼雲は芝居がかったわざとらしい仕草で大きく伸びをしたかと思つと、額に手をかざして周囲の景色をぐるりと見渡すと、どっこいしょ、と豪快に花畑の絨毯の上に腰を下ろし、メグの手を引き着座を促す。今日のメグは白い毛皮の長スカートと、すっぽりと腰まで覆う前あきの紫の毛織物を着て、毛織の防寒用の帽子をかぶっている。髪の毛は横で一つにまとめ、おさげにしていた。ミシカに習った三つ編みは、メグをはじめモンジャの女性たちにブームだ。

『そこ花の汁で服汚れちゃいけないし、俺の膝の上に座っちゃえば？』

「いえ、大丈夫です。かみさまの膝の上なんて、おそれおおいです」

恐れ多いと言いつつ、メグはまだ蒼雲に対し警戒を忘れたわけではない。完全に信用したわけではないのだ。
しかし彼はいともあっさり懐いたアイを横に待らせ、喉のあたりをよしよしと撫でている。

”あ、アイがおなかみせた！”

アイはもともと大人しく人懐こいが、服従を体現するには早すぎる気がした。やはり野生動物は本能的に神という存在を知り、群れのボスとして認めるようだ。長い時間をかけて信頼関係を築きあげてきたメグは少しだけ、かみさまたちでずるいと思うのだった。

蒼雲がメグとアイを連れ瞬間移動でやってきたのは、モンジャの裏にある小高い丘の斜面に広がる野生の花畑。次第に高く上る太陽、穏やかな日差しの下にはモンジャの家並み、常緑の豊かな森、畑、そして草原と荒地、カルーア湖上には霞がかかる。赤い神の神殿が臍げに見えた。

”あかいかみさま……”

神殿を見ると、ざわざわしていたメグの心は落ち着いていた。

ここはメグも好きな場所だが如何せん斜面が急で、足を踏み外せば滑落する恐れがあり、花以外には特に目ぼしい食料もなく木材も生育していないため、よほど暇で体力に自信のあるモンジャの民が地形などを見に来る以外には、素民は滅多に訪れない。

『あはは、今、赤いのこと考えてたろ。ウケる！』

何がおかしいのか、彼は腹をかかえて爆笑している。そんなに笑ったら、たくさん血が出るのに。と、メグは青ざめた。

「あつ……笑わないでください。血が出ます！」

『ごめんごめん、メグは赤いのが好きかあ。ちよーっとだけでいいから俺とのデートに付き合ってね。赤いものの神殿までは今みたい

にひとつ飛びだからさっ」

「でーとつてなんですか？」

メグは正座をして、恐る恐る蒼雲に尋ねる。

『んー、まだ横文字分かんない感じ？ デートってのはいい景色を見ながら楽しくお話することかな？』

とはいえ蒼雲が彼女をデートに誘ったのは、何ら疾しい気持ちからではないのだ。言動がチャラすぎるが故に、しこたま誤解を受けただけ。

蒼雲は伊藤の発表した、二十七管区の治療実績にまつわる論文を取り寄せて読んでいた。この目で、メグの回復度を確認したい。臨床学的診断基準に基づいた評価をしなければ、赤井の業績を評価することはできない。

症例、22歳女性（現在）、大学生（当時）。

何らかの事故により頭部受傷後びまん性軸索損傷（DAI）、障害名は遷延性意識障害（植物状態）、急性期でのグラスゴーの昏睡尺度（GCS）で6（重症）、昏睡状態は18か月継続。

再生医療により自己神経幹細胞から形成した神経軸索と交換済。その他損傷領域を交換し脳再構築するも現時点に至るまで意識覚醒なし。

脳の構造は外科的に戻すことはできても、患者の記憶に医者は手を突っ込むことができない。脳外科領域の限界である。脳外科医であった蒼雲がアガルタに入った一つの動機でもあった。

インフォメーションボードで解析できるメグの仮想下脳活性化地図の所見は至って正常。

これは……！ と、蒼雲は感動していた。人間患者でこれほど健全な脳活性化地図を、蒼雲はアガルタでは見たことがない。一見しただけでもその違いは分かる。ますますメグに対する興味が湧き、自然と猫背が伸びる。

『今から言う質問にどんどん答えてねっ。まずは自己紹介して』

「モンジャ集落のメグといます」

『ここはどこかなっ?』

「モンジャ集落の裏の丘です」

『そうだね。じゃー花、空、雲。この言葉、繰り返して言って。はいっ』

「花、空、雲」

彼は何を言っているのだろう。躊躇いながらも、有無を言わせる口調ではなかったのでメグは漫然と言葉を返す。

『100-7の答えがわかる?』

「93です」

『そこからまた7を引いて……さらに7を引いて、その答えからまた7を引いて……』

五回も同じことをさせる。

「65です」

簡単な算数の問題。馬鹿にされているのではないだろうか、メグは色々勘ぐってしまう。

『さっき言った言葉をもう一回言っって?』

「花、空、雲です」

蒼雲からの意味不明な質問は延々と続いた。メグは一方的に投げかけられる質問に不信感を抱き、段々とため息交じりになってくる。メグの退屈している様子に気づいてはいたが、蒼雲は質問を続け、結果をまとめる。

M M S E (認知機能テスト) 30点、認知機能は全き正常である。この脳の認知機能は健全だ。

蒼雲は楽しく話をしようと言ったのに、メグからしてみると訊かれるばかりで楽しくない。それよりも蒼雲の怪我を何とかしないと……メグはそう思うと答えに集中できなかった。蒼雲は新たな質問

をしようとしていたので、メグは蒼雲の言葉を遮る。

「あの！ これ……楽しいお話じゃないと思います」

『あ、うんうん。ごめんごめん、つまらなかつたかー。じゃー普通のお話しよっか？』

不信任を植え付けては元も子もない。信頼関係が必要だ。急いで事を仕損じる、というわけでテストを中断。

「それより、あおいかみさまのお怪我が……布だけでも当てた方がメグは蒼雲に対する罪悪感に心を痛めていた。不死身なのだから確かに問題はないのだろうが、蒼雲は人間ならばとつくに死んでいて不思議でないほどの重傷を負っていた。メグが刺してしまったから。」

長閑な景色の中で、単調な質問を続ける彼の胸部からとめどなく滴り落ち白衣を汚していた。自分で手当てをするか、赤い神に診せなくてもよいのだろうか。そもそも、彼は赤い神に会いに来たと言ったのに、神殿とは真逆の方角にいて意味不明な質問をする。

「私、お湯で煮たきれいな布を持っています。傷にきく花も持っています、手当てさせてください」

『メグは優しいーなー。じゃ、お言葉に甘えちゃおっかな』

患者が自発的に何をするか見てみたい。と、好奇心からいそいそと上着を脱ぐ蒼雲。いつもの癖でうつかり下まで脱ぎそうな勢いではあったが、『よその管区で破廉恥な行動を取ったら即刻二十九管区に戻しますよ』と脅されていたため、瑞希の顔が脳裏に浮かんで自重。負傷した上半身をあらわにすると、傷は胸部を貫通しているが、彼はあまり気にしていない。痛覚もなく、生命の危機に陥ることもないとなると、己の肉体がどうあれ、執着しなくなってしまう。

「このお花の薬。あかいかみさまが創ってください。とてもよく

効くんです」

メグは常備している薬袋から、粉状に煎じた花弁を数種類混ぜて麻布に包み、それを蒼雲の胸の傷の前面と背面に押し当て、帯状のもので縛ろうとしている。彼はメグのするように任せながら、意識下でインフォメーションボードを呼び出し、組成を簡易解析。なるほど、枯草菌が産生する環状ポリペプチドの混合物、細胞壁合成を阻害するバシトラシン、グラム陰性菌の桿菌、緑膿菌の細胞質膜を破壊するポリミキシン。

『へえー……確かに。傷薬としては上出来かな』

赤井の仕込みなのだろうが、植物に抗生物質を産生させ、それを煎じて治療薬とすることはもつとも簡便で民が使いやすく理にかなっている。ただ、この原始時代に抗生物質に手を出した赤井は罪深い。抗生物質を濫用すれば、耐性菌が出現しそれが蔓延した時に打つ手がなくなる。

最後には、「どの薬剤も効かない」細菌が出現し、最悪それが元で民が全滅する。

足元をすくわれなければいいが。

今後この世界では抗生物質と耐性菌との終わりなき戦いとなるであろうことが確実視される。蒼雲の世界ではリスクを回避するため、最後100年間までは抗生物質には手を出さないと決めていた。

薬に頼る治療では限界がある。 。
時代に即した医術を施さなければ、確実に行き詰まってしまいうだらう。

蒼雲は大きな不安を覚えつつ、メグの処置を割と真面目に分析していた。

『いつもそうやって、怪我人を手当してあげてるの？』

「はい。モンジャの周囲はエドや獣が出ますし、森に入って怪我を

する人も多いんです。あかいかみさまに診てもらいますしそれが一番なんですけど……かみさまがいないときには、私が処置をしました」

『ふうん……』

蒼雲は遠い目をする。メグは出血をおさえるために次々と布をかえたが、追いつかない。メグの持ってきた布は、すぐにずぶずぶに血を吸って使い物にならない。新しい布にかえようとしても、一向に出血のおさまる気配は見えず

「ごめんなさい……傷が深すぎて私では血が止まりません。やっぱり赤い神様に見てもらわないと」

『やー、でも君の”手当をしたい”という気持ちは届いたよ』

自信なさそうに俯くメグを元気づけるように、蒼雲はおどけてひらひらと手を振る。

……軽い。

「私ももし、怪我や病気をした誰かを治してあげることができたら、いつも思います。特に、あかいかみさまがたくさんの人々を癒していらっしやるのを見て、そう思うようになりました」

メグは、赤い神の救援を待つだけでは限界があると常々悩んでいた。損傷が激しかった者は、赤い神に診てもらうまでに息絶えてしまうことがある。連絡しようにも、情報の伝達速度は遅い。狼煙を上げれば気が付いて飛んできてくれるが、間に合わないこともある。一度死んだ者を生き返らせることは、赤い神にもエトワールにも難しいようで、少なくともメグの兄のナズ以外には、まだ一人も蘇ったりはしていない。もし赤い神に診てもらうまでに、メグ達の手で怪我人の命を長らえさせることができれば。一人でも多くの人を助けることができることは明らかだった。

『へー……そっか』

「私も本当は、かみさまみたいに誰かを治してあげたいんです。私

はかみさまに、助けてもらったから。でも、人間がそんな大それたこと思つてはいけなひのかなつて……」

蒼雲はメグの姿に、かつての自分をだぶらせた。

蒼雲が人間だった頃。

彼が幼かったとき、重いウイルス性髄膜炎を患つた。ウイルスが脳に感染することで脳が炎症を起こす。当時、万能薬は発明されていたがまだ保険適用がなく、それなりに高額であつたため風邪ぐらいでは使用しないのが殆どだ。病に対する知識が父母になく、ただの風邪かインフルエンザだと侮つたために、病院を受診せず発見が遅れた。

髄膜炎の後遺症が彼の両耳の聴力を奪い、左目の視力が失われた。待てど暮らせど、リハビリを重ねれど、回復しない。脳の損傷による後遺症の治療は、肉体の再生医療と比較してかなり遅れている部分がある。最先端医療も、CPUを修理するようにはいかない。神経工学は人間の脳の微細構造にまでは踏み込めない。

一生を不自由な体のままで生きてゆくのかと自問し、子供ながらに覚悟を決め、しかしそれを甘受することができない。自分には何の落ち度はなかつた、事実を受け入れられない。つまらない事に腹を立て、言いがかりをつけては父母に当たり散らした。叱りもしない、言い返さない父母にも腹が立つた。

脳に対しては手足も出ない。高度に発達した医学が未完成であることに失望し、それを受け入れるほかのない自らの卑小さを恨んだ。蒼雲は、音楽の好きな子供だった。

そのうち彼は、身体のみならず心もままならない彼自身を憎むようになった。どうして他の人に当たり前であることが、自分にはできない。万能薬のある世界で、何故こんな憂き目に遭っている。生きる氣力を失い自暴自棄になっていた頃、米国アガルタが世界に先

駆けて開設をみる。

肉体が死んで仮想世界に行けば、もう一度聴力や視力を取り戻せる。

あの懐かしい音楽を聴くことができる。

だが……、現実から逃避しようとしていた彼の聴力を回復させてくれた一人の医師がいた。全身全霊で屈服した。心の底から憧れた彼の手を、その言葉を、神のそのように錯覚した。燦然と彼の人生が開けた。好きな音楽に身を浸し、至高の喜びと感動を味わった。そして彼は当然であるかのように医師となった。

脳外科医となった彼がどうしても手を出せなかったもの、それが主に脳の損傷によって引き起こされる高次脳機能障害だった。

科学の進歩は、医療の進歩の歴史だ。幾度となく繰り返した力強い人間の、死闘の歴史だ。克服できない砦があるなら、必ず崩さねばならない。その力は、今の己にはある。

現実世界からアプローチできなければ、仮想世界から切り込むまで。熱い気概が認められたか、蒼雲は採用試験の難関を潜り抜け構築士として採用され、アガルタに入った。

人は、疾患を克服するために長い戦いを続けてきた。

その戦いに、原始時代から遡りながらも一度加担する。歴史をたどり、導き手になる。

彼の庇護した民は、彼を頼った者は、最初から最後まで、一人も死なせなかった。

信仰は川を束ねるように集まり、民は唯々諾々と彼に従い、いつしか彼は大神と呼ばれるようになった。

しかし、人間の患者に対して、彼ができることはほぼなかった。

最初はあれやこれやと手を尽くした。文献をもとに、様々な手法

で臨み分析を重ねた。しかし、回復の片鱗すらも見えない。その糸口さえもつかめない。彼にとっては副業ともいえる構築だけは何の障害も問題なく、あたかもゲームのように進んでゆく。構築にかけては、天才的に向いていた。

そうして何十年、百年、二百年と過ごしているうちに、彼は諦めてしまった。患者に向き合うこと、患者を人間だと認めることを。ゲームの世界の中に閉じ込められてしまったかのように、自らの思考回路も非人間的になってゆく。感受性は鈍り、痛みを忘れ、心は錆びついた。居心地は悪くないし不安も恐れもない、仕事としては十分に食べてゆける。

もつとも、五十年を過ぎた頃から自らが人間であるかどうかすら分からなくなってきた。

現世のことを忘れたほうが、精神的には楽になれた。そして始まった、逃避する日々。

長い眠りから、いまはつきりと目が覚めた。

『誰かの人生変えたいって、喜ぶ顔が見たいって。そういう気持ち、わかる気がするよ』

蒼雲はメグを慈しむように頭を撫でる。しかし、それ以上は手を出してはいけない。

かき抱くことも、祝福もしない。何故なら彼女は、赤井の民だから。彼女が赤井のものであることを望んでいるから。

「……あおいかみさま？」

『何やってたんだろ、俺。随分遠回りをしていたな』

助けられたから、助けてい。"助けられる自分"になりたい。

ただそれだけの、シンプルな欲求。理想の自分になりたいという、

打算も掛け値なもない感情。自らの生理欲求と切り離された、人が人であり、そうあるうとする最終段階にあたる自己実現の欲求。

それが、メグにはある。

メグの回復度合いを知るためにこれ以上、ステレオタイプなテストをするまでもなかった。

『よっしやー!』

メグの希望を聞き届け、満足そうに大きく頷いた。

望まれれば、全力で力を貸す。自発的に望まなければ何も与えない。蒼雲神が彼の世界で初志貫徹してきたことだ。

アガルタの神が、率先して医術を素民に教えようとするケースはほぼないと言っている。何故なら、アガルタの神が医術を独占することによって民からの強い信仰心を得ることができるから。病人の治癒という奇跡が奇跡でなくなってしまうえば、神が神秘的ではなくなるから。指導力を発揮できなくなるから。そして場合によっては、疎まれるから。

人間の生殺与奪権を掌握しておくことは、信仰を糧とする神としての常套手段である。

『じゃーちよつとメグに勉強してもらおっかな』

「えっ?!」

『怖がらずに傷口をよくみて。心臓が傷ついてるから心臓外傷ね。傷口は気持ち悪いが、見慣れると怖くない。傷が人体のどの深さに達しているのかを見極める。この場合は貫通、前後に突き抜けてる。穿通性心臓外傷、心臓を覆う膜の外に大量に血液が貯留（心タンポナーデ）して拍動を阻害している』

蒼雲は傷口に指を突っ込んで傷を広げ、内部構造を見せる。医学生が必ず人体を解剖しなければならぬように、真実を見せること

から始まる。

『血液は大地を潤す川のようなもの。血の道を通って、全身を潤し栄養を運ぶ。人の血液量は有限だ。だから、枯れる前に止める。傷口は手で触っちゃいけないんだけどちよつと中見てみ、ありゃ、メグ。ちゃんと見てないな』

メグは両手で顔を覆って、その隙間からこわごわ見ている。メグは薬花の処方ができるが、傷の手当は全くといってできない。これほどの出血を見るのも初めてだったりする。

「い、痛そうで」

『痛くない。どういう風に出血してる？　じわじわとあふれ出てる？　脈を打ってる？　色は？　真っ赤？　どす黒い？　この色をよく見よう』

「どくどくと、脈うっています。真っ赤です」

メグが、目をそむけそうになりながらも直視してそう言った。

『血液は全て、二通りの血の道を通って体内を循環してる。真っ赤でどくどくという血の道と、どくどくいわれない、少し黒い方やつだ。血液は、血の道しか通らないから、止血するには血の道を塞いでやればいい。ただし、止め過ぎれば川が枯れてしまうように、体の細胞も枯れる。できるだけ早く血を止めよう。人類が有史以来行ってきた最も原始的な創傷治療の一步だ。止血方法で有効な方法は古来より何千年と変わらない。最初は緊急に。次に永続的に血を止める』

蒼雲は力を抜いてその場に仰向けに寝る、生きながらにして献体をしたかのように。全てを彼女の前にさらけ出して見せる。滞在中、ありとあらゆる場所を傷つけ、彼女がどんな部位でも完璧に創傷治療をこなせるようにしてもよいとすら思った。赤井には痛覚があるので同じ芸当はできない。痛まない肉体、死なない身体を、無限の命を、初めて有効に利用できそうだと考えると、彼は久しぶりに充

足感を味わった。

これまでではただ、不死身の体を粗末にしていただけだったから。

「この場合、胸腔鏡を使えないから肋骨を切って、胸骨正中切開であけなきゃいけない。胸を開けて、視野を確保するために心臓を一旦止める。血液を体外で循環させ、破れた血管を縫い、心臓に溜まった血を抜いて傷口を縫い合わせ、閉胸して肋骨を合わせ傷口を閉じる。いくつもの手順を踏むんだ。さあやってみよう……」
「……！」
「……！」

メグはぼかんとしていた。さも、尤もらしく彼が言うものだから。『今の時代と環境では不可能かもしれない。遠い未来の技術であるかもしれないが、それは人間に治せるんだ。わけのわからない、怪しい神通力に頼らなくても』

「……そうやって、治るんですか……人にも治せるんですか！」
神によって独占されていた叡智が、二千年の時を超え人の手に授けられようとしていた。

赤い神がメグに最初に火を授けてくれたように。

『よ』
『よ』
「というわけで、段階を追って、この時代に即した治療法を教える

蒼雲がメグに医学を教えたいと思った理由は、ただメグの熱意にうたれたというばかりではなくもう一つあった。読心術に長けた彼はメグの深部記憶を読み解くことができる。ただの大学生、ただのOLならば、現実世界に帰還してほぼ必要のない知識であるため、蒼雲が熱意を持って教えようと思ったかどうかかわらない。

その決め手は……

急にインフォメーションボードが立ち上がった。彼の担当官、川添 瑞希からのメールだ。瑞希が怒りで肩を震わせている様子が容

易に想像できる。

『早く神殿に行ってください、赤井神に失礼です』、か。絵文字もなしかよ、怒ってるな。瑞希ちゃん』

寝そべったまま「はいはい、すぐ行きますよろしくです」、と軽い調子でメールを打ち返しながら、

”まーメグは現実世界で獣医学部生だったっばいし。手術できて困ることなんてないだろーし”

仮想世界においては二十七管区の医の礎となり、彼女の帰還後は失われた時間を取り戻せるように。帰還後の彼女が満たされた日々を送れるように、そう願う蒼雲であった。

「ここにいらっしやいましたか！ メグも！」

崖下からメグの聞きなれた声があった。ロイの声だ。ロイはグラングラ製の黒い毛織物を着て、息を切らせ、神槍を手に崖を駆けあがってくる。息が上がっていたが、足取りは軽い。体力が有り余っているように見えた。

「ロ〜イ〜！」

メグが立ち上がり、手を振って彼を呼ぶ。ロイという名を聞いた蒼雲が一瞬、険しい表情を見せた。

『ロイ、なあ？』

メグは蒼雲の変化が気になった。まるで知り合いであるかのような、そして嫌悪しているかのような……青い神がこの世界に来たのは初めてだ。誰とも面識はない筈なのに。

ロイはあつという間に蒼雲とメグの前にやってきて、緊張した様子で膝をついた。

「青い神様、ようこそおいで下さいました。来賓があると聞いて、

モンジャの民総出であなたを捜していました。早朝より、赤井様が神殿にてお待ちです。負傷されていますので、御身のためにもお急ぎください」

『ああ、わざわざ出迎え感謝だ。神殿には5秒以内に行けるよ』

ぴりつと、メグはうまく言えないが彼のロイに対する棘を感じた。

ロイもそれを感じているのだろうか、蒼雲の胸の内を探るように、警戒心を強めながらその顔を凝視している。

『よう、ロイ。元気にしてたかい？』

第5章 第3話 白の女神様と、白の巫女

中空に穿たれた二重の光円の中で行われた復号化処理により、彼女は実体を取り戻した。

二度、三度と。

浮遊したまま長い純白の睫毛をしばたかせ、恐る恐る呼吸すると灰色の瞳に精気が宿る。透かし織りのある白スカートを引き締まった腰にたおやかに巻きつけ、肩は同じく透かし織りの、長袖のスリーブで覆い隠している。首には銀のチョーカー。緩やかなウェーブを描く、絹糸のように艶やかな長い白髪は彼女のトレードマークだ。

彼女は地母神、白棕 千早という。

自我の消失する瞬間は、純然たる恐怖に突き落とされる心地。この仮想世界においては、誰も肉の身体を持たぬ。己の意識と名付けられた量子クラスタだけが、己の存在を規定している。掴みどころのない、rabbit変換され曖昧模糊とした幽霊のようなネットワーク、その複合体を緩く束ねる、それだけが“私”といえるあやふやなもの。他のものとすり替わって紛れてしまわないように、彼女は己の“枠組み”を再確認する。

空に背をもたせかけ横たわったまま、白い指先で、力強い軌跡で丁寧にスクエアを描き閉じる。

インフォメーションボードを起動。ウン……という聞き慣れた波動と起動音を全身で体感する。

生きている。今日も。

生の自覚はそうあろうとする生命の決意だ、誰からの肯定もいら

ない。

誰から観測されなくとも。わたしだけが、わたしの生を知っている。

量子転送に伴い、神格とプロトコル異常の有や無しや。バグの発生。構成確認専用プログラムを駆り、全身を隈なく走査する。主観的に「私は私である」と知覚したところで、自我および神格系統に問題がありと客観的な判断を下されれば、転送は失敗。即座に分身を破棄し、二十八管区に戻り同じバックアップされた構成から巻き戻り手順を踏まねばならない。彼女が神経を尖らせていると、一分後、スキャンは完了。

白棕神の自我系統、および構成に何ら異常なし。

アガルタの神の生命線と言ってもいい、構築マニュアルと疑似脳の融合も健全。

異界の神である彼女はネストの森の植物たちに歓待され、蔦のクッションに包み込まれるようにその場に軟着陸する。管区は違えどアガルタに生い茂る全ての動植物たちは、白の女神の波動を知っていた。手を伸べるように。彼女が翠の繭にふわりと包まれ、ほぐれた。

薄く霜の降りた、凍てつく冬の森の朝。徐に空気を肺に入れると、冬だというのに噎せかえるような緑の気配。人の手が加わることはない原生林。ここはどこだ、管区が違えば地形も、気候すら違う。紛れもなくここは白棕の知らない異世界である。

インフォメーションボード右上に、第27管区第二区画ネストの森。との表記がある。トントンとダブルクリックすると、マップが広がった。28という数字を見慣れているだけに、白棕の意識もおのずと改まる。

マップに思念ダイレクト入力で「主神の神殿」と放り込むと、最初に訪れるべき赤い神の神殿をサーチし、場所を特定。神殿の写真が表示される。お世辞にも白棕の住んでいるような大神殿とはいえないが、瀟洒な神殿のデザインにほっこりと好感を覚える。

「先ずは赤井神にご挨拶に伺わねば」

緊張と興奮に胸が高鳴る。白棕が転移術を用い、赤井神の神殿に移動しようとしたときだった。鴻池からの緊急連絡を求めるアイコンが、インフォメーションボード隅で赤く点滅を繰り返す。27管区のインフォメーションボードは主神のイメージカラーを反映しているのか、全般的に赤い表示となるらしい。目に優しい配色とはいえないが、これはこれで異国情緒と言うべきもの。

「祝日出勤お疲れ様です、鴻池さん。サポートありがとうございます。ご覧のように、量子転送ゲート通過後、プロトコルに問題ありません」

白棕は得意げに微笑んで現状報告。モニタの向こうの鴻池は今日は濃紺のスーツにノーネクタイ。しかし白棕の表情とは対照的に、モニタと彼の顔が近すぎることから、一見して彼が取り乱していると見て取れた。異様な緊迫感はいかに白棕に伝達する。

「大変だ白棕！コハクも巻き添えで転送されて二十七管区にいるぞ！」

びくん、と白棕は身をこわばらせる。

彼女にとって唯一無二の大切な存在、スオウ一族のコハクが……。回線を通じ、構築士と構築士補佐官、二人の間に動揺が広がった。

『そ、そんな筈はありません！ コハクには留守を命じました。あの子が指示を違えることは絶対に……』

そんなことは絶対でない。

コハクに留守を任せた、白棕のいない世界を。白棕は彼女を信じている。

『お前の転送後、不安定化した時空に飲み込まれてしまったんだ！すぐに気付いて追跡をかけたが、今は信号は途絶えている』

鴻池は持て余した苛立ちをぶつけるかのように、握りこぶしでデスクの上を叩いた。雑然と書類の置かれたデスクが、かなりの振動を伴っている。コーヒーカップの中の液体がはぜた。

万全のバックアップを取っていた白棕とは違い、コハクの転送は予定になかった。コハクの回収を諦め、白棕を28管区に戻し、28管区の構築時間そのものを巻き戻してコハクを救出すれば元通りにはなる。しかし構築時間巻き戻し後は28管区時空が不安定化するため、28管区時間にして数日は転送ゲートを開くことができない。その間に、27管区と28管区の時間同調は破られ、白棕の留学の機会はふいとなる。

『最悪の事態も想定しないとイケない。正規のゲートを通らなかつたコハクのプログラムが、転送中に引きちぎられ、電子の藻屑、バグの塊となって27管区のあちこちに散らばっているかもしれない。それはコハクの死を意味するばかりでなく、27管区にもバグを撒き散らし、迷惑をかけることになる。だが、お前がコハクを発見し、A・I・の損傷が激しくなく復元可能であれば話は別だ』

『その可能性に賭けましょう。僅かでもよいので、時間的猶予をください』

白棕は持前の冷静さで彼女の成すべきことを理解し、気色ばむ

鴻池を宥めた。コハクを見つけなければと気持ちは逸るが、構築マニユアルと一体化した疑似脳は、不測の事態に振り回されない盤石な思考回路を裏打ちしている。考えうる限り最悪の事態を想定しながら、彼女はいくつもの方策を練る。

『27管区に滞在中の強羅大文字焼、信楽焼　ら二名の焼人に焼灼保留願いを出し、27管区プロジェクトマネージャー、各構築士たちにも搜索願を出した』

『素早い対応、感謝します鴻池さん』

『が、27管区PMからの返答は”却下”と　』
『な……』

伊藤の判断は理解できないでもない。管区の保全を図ろうとするのは、伊藤でなくともプロジェクトマネージャーの責務だ。ましてや世界初の業績を挙げた27管区。バグの発生は、システムの脆弱性を呼ぶ。バグを隠れ蓑に、クラッキングをかけられるという例も存在する。27管区は一度サイバーテロの標的となったため、その運営にスタッフたちも神経をとがらせている。

構築時間の巻き戻しで復活を果たす他管区のA・I・Iならば、切り捨てるのが正解　。

『コハクにバグがあった場合、問答無用で焼灼されるとのことだ。しかしその前に27管区構築時間にして4時間の猶予をもらっている。白棕、焼人に見つかる前に一刻も早くコハクを見つけ出し、バグがあった場合は修復してくれ。現実世界からでは仮想世界のイリガルなA・I・Iの動きは分からない。時間の経過とともに、コハクの搜索も修復も困難となる』

『もちろん搜索します。鴻池さん、搜索すべきエリアがわかりますか。転送予測地点を絞り込んでください』

紙の巻物を広げるように、白棕はマップをフリックする仕草で縮尺を拡大。ワイヤーフレームからリアルオブジェクトへ、ミニチュアの視界が急速に開ける。

『焼人の現在位置を……の必要はありませんね。視認しました』

二つの陰が、樹冠を霞めて飛翔していった。重火器を持ったそのシルエツトが、焼人であることは間違いない。

『転送設定は蒼雲が基点区画、白棕は第二区画内だった……だから、搜索範囲はネストとネストの森全域だ。はっきり言って、一人で搜索できる範囲じゃない……』

鴻池はエリアを指定して白棕に示す。ネストの森は思いのほか広大だ。焼人は目で見て探す、白棕にはもう一つの目がある。それは、白棕だけが知るコハクの気配。神とスオウ一族は互いに互いを認識することができる。

『コハクが近くにいれば、わたしは絶対に見逃しません』

『……そうか、お前にはコハクの気配が分かるのか。では赤井神と蒼雲神にも搜索の手伝いを頼むか』

スオウ一族の気配を知るのは、赤井神も蒼雲神も同じこと。事情を話せば、彼らも快く協力してくれるだろう。

『いいえ、二柱の御手を煩わせるまでもありません』

留学を希望したのはいわば私事、白棕一柱の我儘だ。28管区構築時間を白棕の都合で巻き戻し、世界的に重要な位置づけにある27管区に大迷惑をかけ、さらにこの事態を一人でおさめられず赤井や蒼雲の手を借りるとなると、28管区の評判を落とすばかりか鴻池にも迷惑をかける。

『白棕。お前の責任感の強さにはいつも感心する。だがな、……』

*

日が高くなるにつれて、騒ぎが大きくなってきました。

モンジャからの使い（てかカイです）の報告によると、若い男衆300人体制でモンジャ全域はおろか草原にまで青い神、白い神の搜索が行われているとのこと。ロイが指揮を執っているんだって。不言実行、行動が早い。第一発見者にはご褒美が出るんだとか……ロイも人心掌握術がうまくなったもんだ。だからモンジャ側はきやつきや言つて宝探しのなノリになつてる。

グラндаからの伝令兵の人によると、キララ女王にも朝いちで報告が入り、兵士たちにも青白の神々の搜索命令が出たとのこと。二個大隊が動いたらしい。何だかグラнда側では武装した兵士が棧橋を右へ左へ走り回つていてものものしい。「いたか！」「まだです！」「くそ、どこに潜んでいる！」とか言つてるけど、あれね、雰囲気おかしいでしょ。

伝令兵に問いただしてみたら、キララ曰く「草の根わけても探し出せ！ 生死は問わん」って……。いや別に青白の神々見つけてひっ捕らえたり暗殺しろと言つた訳じゃないんです。青白の神々は邪神とかじゃないし喧嘩売らないで。お願いですから失礼のないように応対してとキララに伝えてくれと頼みました。留学神をフルボッコとか世紀末すぎる。フウーハハー！ まさにこの世は地獄だぜエー！ じゃないです、忘れがちですがここ天国ですから穏便にね。んで、棧橋を往來していた一般素民たちは……

「なんだなんだ？ 神様が神殿の外に出てるぞ。何が始まるんだ？」
「ありがたやありがたや」

両手をすり合わせて拝む人も。

「あいかみさまがご説法でもなさるのか。もうお昼になるから弁当持って来よう」

「とりあえず神様の前にならんでみよう？」

「みんなが並ぶなら私も」

「じゃあ俺も」

デパ地下のタイムセールじゃないんだから……行列があるからつとりあえず並ばないでくださいよ。今何人並んでる？ デイズニールランドみたいに只今の待ち時間、一時間待ち、みたいな表示や交通整理してくれる人が欲しいよね。そろそろ専属の神官さん、巫女さん募集しようかな。

「祝福順番待ちの間に干し肉いかがですか。絶品、エド肉、ブリル肉ですよ。塩味と香草味。付け合せの生野菜もあるよ。きれいな水もいかが」

行列目当てに弁当売りが来た。売りといっても、基本物々交換なんですけども。

「なに、エド肉あるの！？ おーい干し肉一つ。このモンジャの指輪と交換だ」

エド肉は高級食材。モンジャのみならず、グランダ、ネスト民たちにとってのごちそうです。

「指輪より首飾りがいい。黄色いのちょうだい」

「モンジャの奥さんたち、グランダの刃物いらんかね。固い野菜もこんなによく切れるよ！ 小、中、大、特大と取り揃えているよ！」

仮想世界でも皆商魂逞しい。うーん、いつまでも物々交換もあれだし、そろそろモンジャ、グランダ、ネスト共通のユーロ的な共通通貨が欲しい頃だとは思っています。

てな具合に、神殿の入り口には人だかりができません。

私がかれこれ二時間ぐらい神殿の入り口に突っ立ってるから……皆さん有難がって礼拝の行列ができちゃってます。いや、別に何も始まりません。今日は皆様を楽しませるネタも仕込んでないし、青白の神々を待ってるんです。皆さん解散してほしいんですが……ただで返すのもあれだから、とりあえず行列に祝福しながら、私の頭の上のモフコ先輩と共に待ちぼうけ。

「かみさま、最近咳がよく出て鼻水も止まらないんです。祝福してください」

鼻水垂らしたモンジャの女の子がきた。鼻をかみすぎで鼻が真っ赤になってる。モンジャでは今年の冬は青地に黄色いボーダーニットがはやりつつある。シツジの毛が輸入されているからね。ファッションもネストの影響を受けているんだ。この子のワンピースもニットでモードな感じ。

「そうですか、風邪をひきやすい季節ですからね。厚着をして温かくして、お大事に」

何なら湯たんぼ代わりに毛玉持って帰る？ モフってよし、抱き枕にしてよし、クッションにしてよし、温かいよこの毛玉一個いかがっすか。とも言えず。

「はい、次の人。おや」

久しぶりにヤスさんだ。グランダの服着てる。最近はソミオ、ソミタの狩人兄弟に仕事を譲って狩人を引退し、漁師業に精を出して

いるヤスさんは、棧橋の上から投網をするので神殿の近くによく出没している。

「みんなが並んでいたのので何となく並んでいました。特に調子は悪くありません、まずかったですか」

『遠慮しないでいいんですよ……とりあえず祝福しておきますね』
「いやはやかたじけない」

顎の割れたガチムチなヤスさんを固く抱擁。ヤスさんの手についてた魚のうろこが白衣についたので見えないようにこっそり払う。あからさまに払うと傷つくからね、彼、見かけによらず繊細ですから。獵師を引退する契機となったヤスさんのぎっくり腰は、最近は私とエトワール先輩の治療の甲斐あって完治した。

「ヤスさん。今の最後尾の人に、その人以降は今日の祝福は終わりですと伝えてください。はい、次の人どうぞ」

「わかりました。おーい、そこまでだ！ 打ち止めだぞ！」

ちよつと一旦止めないときりがないからね。盛況っぷりに感心する私の頭の上のモフコ先輩。

「いつも大人気だねえ赤井さんは。ていうか27管区の民、微妙になれなれしくない？ 珍しいよ民がこんなに距離感ゼロで近くにまで寄ってきてくれるなんて。他管区では神様を畏れて遠巻きにするだけだからね。特に患者さんが率先して寄ってくるのがすごいし」

野生動物の餌付けとかじゃないんですから民も私の近くにも来ますし世間話もしますよ。そんなことより

”モフコ先輩。この行列さばいたらそろそろ白棕さんと蒼雲さんの様子を見に行きませんか？ 絶対トラブってますよ。もう彼らがエントリしてから結構時間経っちゃってますし”

”赤井さんがここ離れたら彼らが入れ違っちゃうよ？”

毛玉さん仕事してくださいよ。すると民が、私の頭上の毛玉に熱

い視線を送ってる。

「神様……その毛玉、何となら交換できます？ 温かそうなので帽子にしたいんですが」

『ああ、これでしたらそのまま持って行っていいですよ』

でも、お高いんでしょう？ 的なジト目で私を見てくるグラランダの婦人。いえいえタダで持って行ってください。

『きゃーやめてー！？ 身も心も交換不可ー！』

モフコ先輩、慌てて私の髪の毛の中に隠れた。

「毛玉が喋ったー！」

もう面倒くさいので人型になってくれませんか、素民たちに魅力的な冬のおしゃれアイテム、もしくは新種のペットとして認識されてますよ先輩。さつきは毛織物職人の人に毛を譲ってくださいとおねだりされたし。さすがに身の危険を感じたのか美女精霊姿になる先輩。あれ、今日も衣装違くな？ ピンクのぷりぷりドレス着てら。

”じゃあ祝福終わったら先輩がここにいて留守番してください。私が捜してきますから”

”どこで道草くってるんだろっね。しかも彼ら、転移術使える筈だし来るの一瞬だろうに”

そんなこんなの掛け合いしてたら、ぱからっ、ぱからっ、と棧橋グラランダ側から軽快な音が近づいてくる。何かシツジに乗って神殿前に駆け込んできた人がいる。なにこれ、早馬ならぬ早シツジ？ 危ないよそんな猛スピードのシツジにぶつかったら民が交通事故なっちゃう。

「無礼者 ! シツジから降りろ！ 神前だぞ！」

居合わせたグラランダの衛兵の二人が槍をクロスさせてシツジを通せんば。馬上（？）の鎖かたびら着た人は、ネスト王家の腕章つけてるから、ネスト王パウルさんの使いつばい。

「通してください、通してください！ ネスト王家の使いの者です。神様のお耳に入りたいことがあります」

「誰だろうと割り込みはいか〜ん！ 皆行儀よくならんでるんだから順番にならべ〜！」

通りすがりなのに仕切ってくれるグラランダ兵。

『みなさん、少し事情が違つようです。なので彼を通してあげてください』

『あ、そうですか。通せ通せ〜！』

素直で聞き分けのいい民たちで嬉しいよ。ネストの使者は私の前に文字通り転がり込んできて、ビターンと土下座というか寝下座。

「た、大変です神様！ ネストの森の上空に今朝から若い女が浮かんでいます！ 怪しいので高架橋から矢を放つてよいですか、とパウル王が……」

浮かんでるって、白棕さんだー！！

ネスト民、その人が白の女神様だから（当たらないと思うけど）射落としちゃだめー！！

『コハク……どこにいるの』

第二区画ネストの森の上空を浮遊しながら、白棕は両手に、艶々とよく光る純白の糸束を携えている。ただの糸のように見えるが、そうではない。

神具、不空縹索系^{ふくうけんじやくし}。

神通力を一定の水準以上に備え、知恵と分別を備えた、いわゆる成熟したアガルタの神・仏・仙は神秘の力を象徴化した固有の道具の所有を許される。日本では三種の神器が有名などところであるが、中国アガルタの神仙は宝貝^{パオベエ}、欧米では神宝^{トレジャー}などと呼ばれ知られているそれは、赤井の所有する神杖などとは別格のものであり、神通力を力の源として駆動する精密機械といって過言ではない。『天網恢恢疎にして漏らさず』老子の言葉を体現するかのように、白棕の持つ縹索系はその一本一本の糸が各々高度な諜報能力を持ち、28管区内の白棕が必要とする情報を瞬時に集約し白棕に伝えることができた。

『応えて、お願いだから』

お願い……何かに祈っている、自身に気付いた。

この世界においては祈られる存在たるわたしが、何に祈っている……。

”地母神、白棕の名に於いて天地に勅命”

タイムアウトで失効したコマンドワードを再入力。

神具には能力に応じた固有のコマンドがある、それは呪文のようでもある。

”森羅万象の命宿す遍く者たち。わが勅命を聞き分け、かの者の波動を示現^{しげん}せよ”

縹索系を投網しネスト全域に張り巡らせ、瞳を閉じ全神経を研ぎ

澄ます。コハクの息遣いを、彼女の波動を聞き分けようと試みる。ネストの大地に縋索系を通じて神気アトモスフィアを投射し、その反響を探知する空からの搜索。ネストの森の木々が密集しているためか、他管区であるためか、縋索系の感度はすこぶる悪く手がかりは掴めない。天空より投網し情報がもたらされるのを待つ女神の姿はさながら、獲物のあたりを待つ漁師のようでもある。

縋索系を握る指先には、何のレスポンスも帰ってこない。

三十分、一時間……これといった有効な手を打てぬまま、時間ばかりが過ぎてゆく。

それにしても、神通力の所持量を赤井の1/10に、という縛り……格下の神に基準を合わせることがまさかこれほどこたえるとは思わなかった。

浮遊しているだけでも、縋索系を駆動し続けるだけでも神通力を消費するのだ。神具の起動、駆動には莫大な神通力を消費するため、この世界では白棕の神通力がエンペティになる、ということもありうる。

神具を用いず飛び回りやみくもに探し回ったとしても、この広さの土地からコハクを見つけ出すことは不可能。だが反応を待つことしかできない、待っているだけの自身に苛立ち、苛立ちが過ぎると弱気になる。

神具を持たず構築年数は初心者にも満たない赤井神はともかく、実力も構築年数も上である蒼雲神をたよるべきだろうか。

つまらないプライドのためにコハクを犠牲にするな

先ほどの鴻池の言葉が脳裏に貼りついて離れない。

赤井神、蒼雲神に連絡を取ると言った鴻池の行動を白棕がとどめたのは、同期二柱の男神に見くびられたくない、という意識が先に働いたのかもしれない。

女神であるが故の、男神に対する埋めることのできないコンプレックス。

日本アガルタでは現在七柱の女神が主神として管区を構築、維持している。しかし、その過酷な職務内容と、主神という任務がそもそも体力勝負であるところから女性には不向きであるとされ、高天原の主神天照大御神は伊藤に引き続き、男性が女神役をこなしている。

そうでなくとも、膂力で明らかに男神に劣る女神は大人しめの構築しか許してもらえず、区画解放時には使徒たちにこれでもかと過保護に守られ、血なまぐさい戦闘に直接に加わることもなく、肉体労働も男使徒たちがとってかわり、甘やかされている節がある。

だから、女神が主神を張る管区は何かと過小評価されがちなのだ。どう頑張ったところで、「周りのサポートのおかげで及第点をもたらしている」としか看做されない。

男神に負けぬよう、白棕も使徒たちをできるだけ頼らず、気が付けば肩肘を張ってばかりいた気がする。

……この世界には、わたしを信じてくれる民はいない。

かつて味わったことのない孤立感、無力感。神通力さえ元に戻れば繙索系の性能と解像度を引き上げ、空間の歪みを一瞬で特定できるだろうが、留学生の他管区素民への祝福は禁じられているため神通力は減る一方だ。素民に指一本触れてはならない……というわけではないが、赤井に集約されている信仰を横取りすることはできないのだ。赤井の許可があれば別だが。

そんな時だった、思いがけもしない人物の声が悶々とする白棕の
耳朶を打ったのは。

『白棕さん！ 構築士認証式の日以来お久しぶりです！ はるばる
よく来てくださいました！』

静寂を破り、明るく澁刺とした声がある。目を開けばそこには、
僅か3メートルほど先におーい、と右手をひらひらと振っている男
がいた。

飾り気のないオーソドックスな長い着丈の白衣を、強風に遊ばせ
る、赤髪の好青年が澄んだ大気の中に浮かんでいた。上空千メート
ルに対峙する二柱の神々。彼らの足元を、ゆっくりと薄雲が流れて
ゆく。

『いや〜お待ちしていましたよ。ここで何をなさっているんです？
あの橋の上をご覧ください。素民がこっち向いて弓をつがえてい
るでしょう。ネストの民が虎視眈々とあなたを狙っていましたよ。
ここは危ないです。ろくに準備をしていませんが、お茶出しますの
で私の神殿にお越しく下さい』

うーん、と大きく伸びをしたかと思うと腰に両手をやって、何か
白棕の目を引く景色があるのかと地上を見渡す赤井神。その屈託の
ない笑顔と清涼感に、白棕の胸の内に凝縮していた、絡み合ったも
のがするするとかさされてゆく。

区画解放イベントをモニタ越しに観察していた時には思いもよら
なかった、彼と直に対面して、構築マニュアルと融合していない、
彼の生身の心が濁りなく澄み渡っていることに驚く。

ないのだ、彼には。

出世欲、嫉妬、煩惱、自己顕示欲、打算、その他ありとあらゆる、

人間特有の生々しい負の感情が、何も無い。アガルタへロゲインした時に疑似脳を加工され煩惱を消された白掠とは種類が違う。欠落したのではない、隠されているのではない、それが彼の本来の人格であるから驚かされる。

『あなたが……赤井神』

世界中から熱い視線をひきつけやまない偉神でありながら、今をときめく日本アガルタ最若のルーキー、27管区主神 赤井。

何だか急に、男神だの女神だの、管区がどうだの業績が……としがらみに雁字搦めに縛られていた自身が恥ずかしくなり、羞恥心から目じり涙の粒がぶら下がってしまった。さりげなく両手で顔を覆い、赤井に気付かれぬよう指先で拭う。

『あ、あれ、何か失礼なこと言いました？ すみません、私たまに空気が読めなくて』

気まずそうな顔をしながら、赤面してしまった白掠に苦笑いを向ける主神。

包み隠さず、コハクのことを素直にありのままを話そうと思った。

その夜、数百メートル級の摩天楼の群れを縫う空の道、首都飛行道路環状線が極秘裏に封鎖された。

赤いレーザー網の通行禁止帯が張り巡らされ、飛行道路脇の目にも眩しい立体投影型電光掲示板にはせわしなく交通情報が投影されている。飛行道路環状線は事故のため上り、下りともに全面通行

止との表示。

地上道路への迂回ルートが示されており、空駅周辺では厳しい検問が行われ、付近の空域も一般人の立ち入りが禁止されている。しかしそれが決して事故による封鎖ではないと覗わせるのは、多数の緊急飛行車両と武装警察官が配備されているからだ。現場には目隠しの為のスモークが焚かれ、物々しい雰囲気にも包まれていた。

警察の警戒線とは別に、闇に紛れもう一つの組織が動いている。

竹原 義一率いる、内閣情報調査室の特殊急襲部隊だ。

今回の案件には三班が組織され投入されている。内調が極秘裏に所有する、無人の対地対空攻撃用ヘリは後方支援を務める藤田が遠隔操縦し、警察の警戒線の裏手には経験豊富な米川班が張り付いている。そして現場上空を飛行する突入支援用装甲バンは音もなくピル上に待機している。

黒一色づくめの特殊武装した東班のメンバーは、息を潜め突入の指示を待っていた。負傷も殉職も恐れず粛々と任務にあたる、隊員の士気は高い。とはいえ、負傷時に交換するクローン体イモータルを合法的に所有する彼らは、脳を撃ち抜かれ^{イモータル}ない限り不死身である。

午後10時1分。作戦を指揮する、課長藤田から入電。

『準備はいいか。土曜の夜だというのにすまない。約束のひとつでもあっただろうに。おっと、東君には予定がつぶれて都合がよかったか？』

「茶化すのはやめてください」

濃灰の、ゴーグル型視覚強化・作戦連携用デバイスを通じ藤田に応じる、一見すると全身タイトの少女……東 沙織は羽根のように

軽いパワードスーツを着用している。正確に言うところロボティクスの粋を集めた外骨格スーツを軽量化、繊維化、防御性能強化し、光学的迷彩能のあるボディースーツの内部に人工筋繊維として組み込んでいるのだ。青い量子回路図が黒い特殊スーツを這うように被覆する。ボディースーツは薄く柔軟性に富み無防備に見えるが、外部からの衝撃を通さず、至近距離からの銃弾すらものともしない。

ボデイラインが見るからに露わになるが、彼女はもはや気にするそぶりすらない。そしてその両手には紙一枚の重さにも満たない、軽量化サブマシンガンがおさまっている。

レックホルスターには、拳銃が二丁。実弾を装填したものと、実弾でないもの。

『既に把握していると思うが、現時点での状況を確認する。警察庁が本日夕刻、丸の内プレグランスビル地上18階全域の違法な全感覚没入型VRサーバーおよび利用客の一斉摘発を試みたところ、これに失敗。VRシステムのサーバー規模等、詳細は不明。武装した経営陣が利用客の生脳を人質に立て籠もり、人質の疑似脳はログアウト不能状態にされている模様。要求が聞き届けられない場合、30分ごとに一人ずつ殺害するとの予告があった。犯人の要求は警察の包囲網の解除、逃走用の緊急車両を用意しろとのこと。警察側の交渉人が一人捕まっている、彼を盾に逃亡する気だ』

「人質も犯罪者なんだから、別に殺害しても構わないだろうに……. と思いきや、交渉人がとつ捕まっているのか。大体、何で俺らが警察の尻拭いを」

「酒井さん。課長の指示が聞こえませんが、私語を慎んでください」
同僚の皮肉めいた愚痴は、少女に一喝される。軍人然とした、屈強そうな青年は大げさに肩をすくめると、装備の確認に没頭した。

『酒井の言いたいことはわかるが、これもDFH絡みの案件だ。警

察に証拠を渡し、おめおめと握りつぶされる訳にはいかない。既に事件から3時間半が経過。人質の殺害予告時刻は1050（ヒトマルゴマル）。ビル周囲の避難誘導および報道管制、通信遮蔽、内部傍聴、偽装ネットワーク展開は完了。東班、米川班、問題がなければ所轄に先んじてビルの屋上に着陸したのち、米川班は17階、東班は19階から1023（ヒトマルフタサン）、突入を決行しるとの次長からの指示だ。諸君らはVRサーバーを保全するとともに、人質の安全に万全を期し、犯人検挙に全力を注いでいただきたい。建物内部の情報、内部の人数は視覚デバイスに伝送済み。突入ルートは見ての通り階上、階下の通気口より。熱感知システムによる予測によると、武装している者が十二名。見張り役二名、配置は見ての通りだ。突入後の作戦所要時間は最大8分。成功を祈る」

「了解。東班確認しました。屋上降下開始します」

……東班メンバーにほどよい緊張が走る。ビル内部では銃撃戦は避けられない模様。脳内にアドレナリンが満ちてゆくのが、彼女には数値としてわかるのだ。彼女と班員たちは消音ブーツで屋上に降り立ち、東のハンドサインと共にボディスーツの熱光学迷彩を実装。

視覚デバイスで索敵、随時建物内の状況と配置を確認しながら非常階段を駆け下り、固く閉ざされた鋼鉄製のドアをスーツの性能で無音のうちに握りつぶすように破壊する。立て籠もり現場の天井裏に到着。

『所定の位置に到着。LD4装備にて各員待機中です』

東の作戦班はファイブマンセル（五人編成）、基本的に忠実な構成だ。東はその経験と経歴、次長からの信頼厚く、チームリーダーを任されている。

『聞き間違いか？ 東。私はD1装備（実弾）で、との指示を下し

たはずだ。米川班はD1装備だ、LD4では作戦に支障をきたす。実弾装備での突入を。……米川班も18階下に到着したそうだ」

東とバックアップ中の藤田課長の間では、思念インタラクティブな脳波通信が行われている。熱光学迷彩、そして脳波通信によって視覚的も聴覚的にも、19階は“無人”である。脳波通信では喉に首輪のような形で装着され、発音する前に電氣的シグナルを感知し消音、視覚デバイスを通じて通信を行う。

『実弾も装備しておりますよ。我々の班は問題ありません』

東班の装備した拳銃に込められた弾丸は、実弾ではない。三菱重工社の12ゲージ電気弾、薬莖内部で高電圧にチャージされており、着弾と同時に敵に電流を浴びせ失神させる非殺傷兵器だ。

『躊躇うなよ、人質もいる。証拠を破壊されたら終わりだ』

『承知しています。それより、この案件は私たちも追っていたものですが、所轄に先に事を起こされてしまったのは失敗でしたね。警察が突入に失敗したことも含めて、こちらの動きを読まれていたのでは』

東は、厚労省をはじめとする各省庁、のみならず警察内部にもDFH計画に関与する者がいるとの疑いを抱いているとは述べた。この一年、違法営業を行うやくざ紛いのVRネットワーク管理組織の犯罪が、とみに増えたからだ。

VR世界は大抵の場合、現実世界では違法とされる行為をターゲットとした風俗営業を行っていた。

児童を性の対象としたもの、薬物疑似体験、殺人、戦争、加虐、アイドル、二次元キャラなどを含む好みの女性との疑似の性行為など、欲望にまみれた世界……東からしてみればそれは一概に下劣極

まりなく、目を覆うようなものであった。が、現実世界では体験できない欲求を満たしてくれるとあって、いかに利用料が高額であっても客はつく。しかも頭の痛いことに政治家、財界人、要人などの利用者も少なくない。

国内外では、民間での全感覚没入型仮想現実世界の構築が法的に禁じられている。個人の疑似脳への記憶・感覚転送技術を悪用すれば、容易にテロや凶悪犯罪を企てることができるからだ。民間ではダイブ接続時に脳の健全性を維持できないという理由もある。

もちろん、税金を大量に投入し厳密かつ芸術的なまでに調律されたアガルタのそれとは異なり、悪徳業者が荒稼ぎのために構築した安上がりな仮想世界往来技術は粗悪極まりなく、疑似脳の故障やサーバーダウンなどの問題を起こし利用客の大量殺人事件として検挙された事例もある。昨年などはテレビ局社長がビルの一角に変死体で発見、という形でも発覚した。

東は多発するブラフともいえる犯罪の裏に潜むものに、危機感を募らせつつあった。そんな悪徳業者の存在を隠れ蓑に、国家転覆を狙った国内に例をみないテロがひそやかに進行しつつある。

何より憂うべきは厚労省の職員が、アガルタの機密を外部に漏えいしているということ。

そしてそのテロの最終的な標的が日本の国体を根本より揺るがす、日本の象徴そのもの、その人であるということ。

口に出すのもおぞましい。

『何が言いたい？ 内調内部にも、DFHへの加担者がいると？』

『失言でしたね。忘れてください』

『お喋りしている余裕はない。あと13分で警察の特殊部隊が配備

「されるそうだ」

『予定時刻になりました。突入します』

少女から突入のハンドサインが送られ、二名の隊員の天井板が破壊されると同時に音響・閃光手榴弾が室内に投げ込まれ閃光とともに炸裂する。

『ゴー！ ゴー！』

五名のメンバーが音響手りゅう弾と共に天井より突入。フラッシュと音響により怯んだ三人の見張りの脚部を、床下より突入し不可視化した米川班の班員が射撃。

「うわっ！ 警察か！」

「撃て、撃て　！」

突入した東は室内中央の状況を確認。メインサーバ、とダイヴ用コンソールベッドが設置されている。ベッド上にはVR世界から口グアウト不能となった人質兼利用客が六名、横たわっている。第二班リーダー、米川が人質保護の防弾シールドを展開。彼らは武闘派というより、囷役と人質救出任務を帯びて投入されている。

『サーバと人質に手を加えるな！』

サーバへの銃撃は即、間接的に人質を殺すことになる。その黒々と聳え立つ石柱のようなサーバをバリケードとし、無防備な木偶人形と化した人質を盾に小銃で応戦する犯人グループ。対し、不可視化した東班メンバーは電気弾の射撃での電気ショックで掃討、背後から急所を突いた近接戦での殴打で着実に頭数を減らし、仕留めてゆく。特殊ボディースーツにアシストされた東の腕力は凄まじく、女の細腕とは思えぬほどに隆起する筋肉、えげつないほどの怪力によって犯人が数メートル吹き飛ばされる。

狭い室内に響き渡る発砲音、目に見えぬ脅威に、犯人たちは追い詰められてゆく。

「なっ！ どこだ！」

東を視認できず、見当はずれの場所を手当たり次第に撃つ主犯格を憐れみつつ、顎下を蹴り上げて失神させ一撃で床に沈める。後ろ手に縛られた交渉人を保護。

突入から五分後。

「課長、現場を制圧しました。逮捕者12名、死傷者なし。軽傷6名、意識消失4名。サーバーは損傷なく稼働中です。データを回収し所轄に逮捕者を引き渡し次第、撤収します」

少し誇らしげに、しかし律儀に報告を入れると、視覚デバイスを外し額の汗をぬぐう。安堵の表情を見せる班員たちに作戦終了を告げた。

そんな、東 沙織のささくれだった日常の一幕である。

第5章 第3話 白の女神様と、白の巫女（後書き）

8月20日でHUC一周年でした！ 開始当初と比較して、少しは面白くなっているでしょうか。なに・・・つまらん・・・？
これからも精いっぱい頑張りますのでよろしく願います！

第5章 第4話 赤い神様の至宙儀

モンジャの若き長と異世界の神、蒼雲はしばし互いを探り合うような視線を交わした。

メグはおろおろと交互に顔を見て、ロイの横に正座し両手をつく。あおいかみさまをロイが怒らせてしまったなら、一緒に謝らねばと考えたからだ。神は殺生を禁じられていると知ってはいても、メグは蒼雲がそうであると信じることはできなかった。

ロイはメグの幼馴染で弟的存在であり、過酷な世界を生き抜いてきた戦友でもある。蒼雲のロイに対する謎の敵意は、どちらかというところの機微に疎いメグにも明らかかなものだった。

一方のロイはメグの盾となるように、正座のままにじって蒼雲の前に平伏した。

「申し遅れました。俺はモンジャという集落に住むロイと申します。お見知りおきを」

顔をあげた青年の精悍な、若さとエネルギー満ちたその瞳に、蒼雲はややもすると気おくれしそうになった。

「……青い神様にお目にかかるのはこれが初めてかと存じますが」「いやあ、君によく似たやつが以前いたので、びっくりしてついね。悪い悪い、気にしないでな」

蒼雲は露わにしていた刃をそっと包み隠し、へらりと上辺だけの笑顔を向けた。動揺と感傷を理性で押さえつける。雛鳥に猛獣が殺意を見せるようなもの。……大人げない。彼は赤井の民だ、自制すべきだ。

「あまりよい人物ではなかったのですね」

ロイは踏み込みすぎないように、軽く蒼雲の心中を詮索する。赤い神に対するそれと同等の敬意を払いながらも、地に置いた槍の柄の近くに利き手を添えていた。

蒼雲からの不意の攻撃があればいつでも受け身の姿勢を取り、メグを守るだけの間合いは取っている。しかしロイは彼に勝てる予感、それどころか最初の攻撃を防げる気が微塵もしない。手負いの神でありながら、どこにも隙がないのだ。

『あゝそんな緊張しなくても。人違いだっただから、君に特別な感情はもってないよ。ロイだっけ？ 赤いのと仲良く楽しくやってるのかい？』

その場で蒼雲はリラックスした状態を演出するかのようには胡坐をかき、長衣の上着を羽織り、すつと指先で胸部の傷を撫で上げると傷口は消えさせる。

「赤井様は世界を創造なさる偉大な神様で、俺たちは彼にご慈悲をいただいています。一方的に恩恵を受けているだけです。俺たちはいつも、彼に感謝しています」

『そっかゝ初々しいな』

「どういうことですか？ 私たちとあかいかみさまは仲良しですよ」

メグがロイを弁護するように口をはさんだ。黙っている、とロイがメグの手を握りしめる。人間と神は、対等ではないのだ。ロイは蒼雲を少しでも刺激しないように言葉を選ぶしかなかった。

『……その気持ち、変わらないことを願うよ』

少しだけ、蒼雲は秘めていた過去を振り返る。

蒼雲と彼の管区の応用型A・I。ロイは百年以上もの間、長らく良好な関係だった。彼の管区のロイは蒼雲を主と認め憧れだと仰ぎ、

目標だと言い、丁度ロイと全く同じ言葉を並べた。蒼雲も彼を弟のようにかわいがり、彼の望むままに力を与えた。彼は神通力を行使しよく国を治め、民を富ませ、そして蒼雲の威光をいただき、国勢の拡大を推し進めた。

だから。その日、その時。

何が起こったのか分からなかった……彼に主要な大陸の統治を任せ、全幅の信頼を寄せていた。何やら凶兆が出ているからと、引き留めようとしたスオウ一族の少女を宿め神殿に残し、内密に報告したい儀があるとロイに呼び出されるまま辺境の城に赴いた……そして蒼雲は強力な神封じの呪のかけられた密室に言葉巧みに通され。

即乾凝固性のあるコンクリートの中に、強大な呪いと共に生き埋めにされたのだ。不滅の神の再起不能を図る、アガルタの民の実行しうる限り最大の殺意とみえた。事実上のクーデターである。

神通力を無効化、インフォメーションボードも呼び出し不能、現実世界からの通信遮断という絶体絶命ともいえる危機を自力で脱した頃には、無情にも数週間が経過し、変わり果てた聖都がそこにあった。

蒼雲を激怒させたのは……人間患者の居住区画、直轄領を革命軍が侵し、スオウの巫女と人間患者を駆逐し、それを阻もうとしていた使徒たちに刃を向け、止めようとした使徒一名を粉碎、現実世界にログアウトさせていたことだ。他管区で何度となく忌まれた、暴君そのものの姿だった。

アガルタでは神とその眷属の祝福の途絶えた大地は枯れ、人は渴く。

美しい都は荒廃し、疫病と瓦礫の山が残された。助けを求め、神の名を叫び逃げ惑う民。武力をもって聖都の民を制圧し追い立てるロイの狂気に満ちた表情。悪夢のようだった。

蒼雲は民の祈りと信仰を天地を揺るがす力にかえ、怒りに任せ蒼雲の授けた神通力で抵抗する彼と彼の八万という軍にたった一柱で挑んだ。壮絶な死闘の末……暴君を末期に追い込んだ。

それから先は思い出したくもない。

いよいよ最期というとき、よく見慣れた彼の顔を間近で見つめていると、ふつふつと情がわいてきた。見殺しにしてよいのか……蒼雲の手足となり、彼の世界のために幾度となく死力を尽くし貢献してくれた彼を。ロボット三原則に反したA・I・に、この世界での生存権はない。

気が付けば彼に問いかけていた。悔い改めるつもりはないのかと。赦しを乞うのか、乞わないのか。赦すから、戻ってこい。肯定の意志あれば助ける、まだ最初からやり直せる、と。

応えは、拒絶。

雌伏の百年を耐え、蒼雲に表向きは盲従しながらずっと機を待っていた。彼はそう、血走った瞳を？きながら答えた。

終焉させなければならぬ。神の横暴を、そして人類に希望を取り戻すと繰り返すのみだった。

俺がいつ横暴を働いた、人々の祈りに応え、力を貸し、文明の発展を支えてきたはずだ。何が不満なんだ、と蒼雲は彼を問い詰めた。気に入らないことがあればあらためる。不義を働いたなら詫びる。しかし応えない彼の心を透かし見ると、蒼雲への信頼は欠片ほども残されておらず、どんな譲歩も交渉の余地もないと悟った。濁りに

濁った心の奥底にあるものの正体は、神の看破を以てしても見定めることができなかつた。

ロイは口を割らなかつた。最期まで彼の心も曇つたまま。ただ、人民を神の支配から解放するのだと。自由の為に戦うのだと。自分が死んでも、革命の炎が消えることはない。そう言い残して果てた。

それがロイの本心だつたのかは、今となつては分からない。

結果として蒼雲はロイを殺めざるをえなかつた。殺さずを貫いてきた蒼雲が唯一断罪したのは、後にも先にもロイだけ。たつた一度きりの殺生は、不可避のトラブルに対する緊急措置として処理された。暫定的な分析では、ロイは学習し至高を目指すがゆえに、不完全かつ不合理なことが許せないのだ。よつて、神の知性を凌駕したとき、神への造反が企てられるのだとされた。

高度に学習するA・Iの知性に人間のそれが勝り続けることはできない。単一価値観に基づく”強いA・I”の脳では、造物主の劣等こそが悪である。

蒼雲の判断は他管区の神々と同じ。

白棕の管区のロイも白棕によつて殺されたと瑞希から追報を得、彼の民からの祈りと感謝の言葉を聞くと気は楽になつた。蒼雲と白棕、そして日本アガルタ全管区の神々は患者の生命と、彼の民の命そして財産を暴君の手から守り抜いた。

赤井の管区を最後に、ロイというA・Iは二度と運用されることはないだろう。

ロイと過ごした百年あまりという時間。彼の心の中に何の変化あつたのか、何が彼を変えてしまつたのか。振り返つても振り返つても分からなかつた。

「青い神様。赤井様の神殿にお越しく下さい」

『あ、ああそうだな。ちよい柄にもなく感傷に浸っちゃってな!』

だから蒼雲は、悪しき進化を止められなかったロイの、知られざる過去を見ているのだ。擬似脳がマニュアルで制御を受けていても、昂ぶるものはある。目の前にいるこの青年には、赤井の手によって命を断たれる未来が待つのみなのか。

”ロイ、お前は最初から稼働してはいけない存在だったのか？”

彼の心を看破し、質問に質問を重ねたくなった。これまでのところ、不穏な因子は存在しない。やはりこの頃のロイは純粹だった。回避させてやりたいと思ったのだ。今……ロイの身体に神通力は蓄えられていない。

『神通力が切れてるが、赤いのがくれないのかい?』

「神通力は人には過ぎた、恐ろしい力です。俺にはもう必要ありません。赤井様ともお約束しました」

迷いなき答えを聞いて、蒼雲はわずかな相違点を認識したのだった。ロイは、完全であることに執着するように設計されているからだ。

『ロイ、赤いのがいない間に、どうしても君に言つときたいことがある』

「はい、それはどういったことでしょう」

ロイは聞き漏らしのないように、腰の巾着袋からグランダの筆記用具を取り出し、待機した。

『神は偉大でもなく、その手の中の命を守ることに精一杯な、ちっぽけな存在なんだ。どうしようもない奴だなと思うこともあるかもしれない。その時は、その都度、腹の中におさめず言ってやれ。絶対に力でどうこうしようとするなよ』

「……はい。あの方は、親のいない俺の父だと思っていますから。その関係は、いつまでも変わりません」

まるで未来を見てきたかのような口調にロイは戸惑いながらも、彼は素直な意見を述べた。

『そっかそっか。もつと力を抜いて生きてな』

「力を抜く？」

『いつも何かしら頑張っていないか？ 面倒くさいことは休んだり。ぼけーっとしてみたり、楽しいことをしたり』

そう、楽をする。サボる。忘れる。それは人間の脳のストレスを和らげるが、A・I・には難しい。

「はあ。俺、何かしてないと落ち着きません。時間の無駄のように感じます」

『俺もさぼる。赤いのもさぼる。時々無駄なことは、時々はいいとだ』

ロイは蒼雲が何を目論んでいるのか欠片も理解できなかったが、赤井はこれまでもこれからも変わらないのだと信じていた。彼を慕うロイの気持ちも変わらない。赤井が自らに”してほしくない”と思うことには手を出さず、彼が望むことをするだけだ。彼に従っていれば、誰も争わずに済む。

グランダもネストも、そしてモンジャもともに発展してゆけばよいと思う。そのために、時間を無駄にせずに頑張っているだけだ。

「俺からも質問してよろしいでしょうか」

神々の秘密に迫る絶好の機を逃すまいと、ロイは思い切って疑問をぶつける。

『おー、なにになに？ 何でも言ってみ』

蒼雲は軽く朗らかな調子で応じる。蒼雲とロイの間に漂っていた妙な緊張感はすっかり去り、メグはほっと胸をなでおろすのだった。

「メグたちはユメというものを見るそうですが、俺は見たことがありません。何故、ユメを見ることのできる人間とできない人間がいるのでしょうか。ユメを見ていると、メグは異世界に迷い込んだような気分になるそうです。赤井様は理由を教えて下さらないのですが、俺もメグもとても気になっています。青い神様はご存じでしょうか」

常々疑問に思っていたメグも、ロイの隣でうんうんと頷きながら興味津々で聞き耳を立てる。

蒼雲からしてみれば、ロイからの質問としては意外なものだった。蒼雲の管区では、人間患者が”夢を見ている”と蒼雲に報告したことはなかったからだ。考えてみればそれは人間とA・I・を見分ける最も簡易的な方法であるが、自我が活発に記憶の取捨選択を行い脳機能が再構築され回復基調にあるという証で、患者の精神活動に乏しかった蒼雲の管区には見られなかった現象である。

『説明しても君らには難しいかなあ……いつか二人とも知ることにはなるし、焦って知らなくていいかな』

「そうですか。赤井様が教えてくださるでしょうか」

『その時が来ればね』

「では別の質問です、あなた方神々は、メグがユメに見る世界から来られたのでしょうか」

『そーだよ。ロイはその世界を見てみたい？』

「はい！ そうすれば俺にも神様たちの心を少しでも理解できるよ
うになるかと……」

『……へー』

蒼雲はロイに現実世界の夢を見せることが、二十七管区の今後の為になるのだろうかと思案する。

この管区は赤井の管区で、勝手に素民に重要な情報を教えてはならないのだが、赤井はマニュアルがないために、あまりにも情報を知らな過ぎる。

「ロイは、夢を見る人間とそうでない人間の間、何か差はあると思っ？」

「……いえ。俺にはわかりません。ただ、ユメを見てみたいのです……」

ロイの返事に、蒼雲は戦慄すら禁じえなかった。

彼は。A・Iであって人間ではないのか？　これが、A・Iの言葉なのか？　A・Iは確かにアガルタ内での学習を義務付けられているし、コミュニケーションの為に感情のようなものを表現する。チューリングテストも当然クリアしている。だがそれは人の脳を模倣したものであって、人間に似せて振る舞うよう設計されているからだ、だが所詮哲学的ゾンビである。

アンドロイドは電気羊の夢を見る、か。昔のSF小説のタイトルが頭によぎった。

そうか。このA・Iは、夢を見たがっている。

彼は気の遠くなるような並列演算の果てに、そのネットワークの片隅に彼の自我を持ちえたのだろうか。

いや、それよりも。特異点を踏み越え知性の限界を迎えた人類に新たなブレイクスルーを呼ぶ、アガルタ創始者のフォレスター教授の目指した、不完全かつ完全な、理想のA・Iと変化を遂げたのだろうか。期待と疑念が蒼雲を揺さぶる。

だが一体どうやって立証する。このA・I・Iに、自我はあるかと。

『なるほど……そういうことか』

蒼雲は思わぬところから、ロイ造反の手がかりを掴みつつあった。そうか、ロイの造反は、自我の形成過程に発生した問題だったかもしれないのだ。今回の留学はロイの心と向かい合う旅になりそうだ。そして彼が全幅の信頼を置く赤井という神の心と手法を学ぶ旅でもある。

人間と、人間でないもの。その境界にるのがロイというA・I・Iであり、赤井という神だ。

フォレスター教授は生前、ロイと名付けた特注のバイオクローンを一体作成し、現実世界に遺したと聞く。

人間の自我が仮想世界と現実世界を往来することができるのならば。

自我を持ったA・I・Iが生脳に宿り、現実世界を”生きる”日も来るのかもしれない。

そのとき人間は、何をもって人間と言うのだろうか。

『いつか君にも夢をみせたげようかね』

「本当ですか！」

ロイははしゃいでいるようにも見えた。喜びの表情と感情。人間の模倣ではないもの。

『ああ、約束だ』

ただし、”現実世界の夢”である必要はなく、この世界を舞台とした仮想世界の夢を疑似体験させてやることはできる。

そんなことを考えていると。

思いがけず、メグが辛そうな声を出した。

「私もお願いします。もう……私は夢なんて見たくないです」

『……メグ？』

メグは何かをかみ殺したような口調で、心情の吐露をはじめた。

「あおいかみさまがロイに夢を見せることができるなら、私にこれ以上夢を見ないようにできませんか。私、どちらが現実なのか、時々分からなくなるんです。最初は、あかいかみさまが元いた世界だと聞いて、少しだけ行ってみたいなと思いました。でも、夢の中の世界は夢をみるたびに鮮やかになってきて……夢を見ているときは向こうの世界に、友達や家族がいるような気がして。そっちの方が楽しくなって。いつか、本当に向こうで目が覚めたら、こっちに戻って来れなくなったらどうしようかって。そう思うと、どうしても怖くなってきたんです……」

『赤いのは何て？』

「大丈夫としか……だから、大丈夫だと思い込むようにしてるんですけど。どんなに尋ねても、そんなの冗談ですよね、って言っても私がこの世界から消えてしまわない、とは言ってくださらないんです」

『メグは、向こうの世界に行きたくない？』

メグが既にかんりの記憶を取り戻しているであろうことは蒼雲にも容易に想像できた。日本の街並み、風景はおろか、彼女の家族の顔、果ては本名にまで手が届こうとしている。夢の中の世界の話は現実ではないのだと懸命に否定することで、目を背けることでようやく日々を生きているのだ。

厚労省はメグの現実世界への帰還を急いでいる。だから、記憶が完全になればなるほど、帰還への残日数も少なくなってゆく。

「私はここがいいです。家族も、友達も、植物も動物も……そして、

あかいかみさまと、二度とあえなくなるかもしれないなんて」

『心配いらぬさ』

蒼雲は明るい調子で励ます。不安を与えないよう、精一杯に気を配りながら。

「あおいかみさま……助けてください。夢のことなんて忘れさせてください、何より、向こうに連れて行かないようにしてください」
メグは青い神に気休めを言わないでほしかった。しかし

『万が一、向こうに行ってしまった。その先でどんな旅をして、どんなに遠くに行っただとしても。君はここに帰ってくる。だから怖くない』

あつけにとられる、ロイとメグ。メグはロイの服の裾を握りしめていた。ロイはメグの手をそつと握る。

「行きたくないです！」

『この世界は、人が最後に還る場所なんだ。ロイは旅をしないのかもしれない。メグは旅をするかもしれない。でも、俺たちは君らを見失わないさ』

そう、それは人生という過酷で長い旅だ。

誰しもが最後にはここに帰ってくる。

*

白棕さんが射落とされそうになっていると聞いてネスト上空に救出に向かった私。モフコ先輩には神殿の留守番を頼みました。何故か毛玉に戻った先輩は私の服の裾を文鎮のように踏んで不満そうに

してました。現場に急行していざ遠くから見ると。

ひゃー、恥ずかしい話、天女のように優雅に浮揚する彼女に見惚れましたよ。

白棕さんてば超綺麗、マジ女神。

これ担当官の人大丈夫！？ 悩殺されてない！？

溜息しか出てこない。第一声どう声かければいいんだ？ やっぱオードソックスに、正面からはじめましてとかだよなー。気の利いた登場の仕方思い浮かばねー、ギャグかましても駄々滑りしそう。白棕さんそんなところで瞑想して何やってんだろ。さっそく声かけ… かけらんない。

分かってたけど、やっぱり女神様って別格だ。全27管区の男性の皆様さん及びスタッフの皆様、私が男神でごめんなさい。ハズレ管区でしたね完璧に。素朴な疑問だけど女神様の祝福ってどうするの！？ 本当にハグしてくれるの！？ 並ぶわ。私が素民だったら一時間待ちでも五時間待ちでも五日待ちでも祝福の行列に並ぶ。

……思わず内に秘めた衝動が暴走してしまいそうになったよ。悩まないはずなんだけど女神様のカリスマ性には勝てないっぽい。

白棕さんの天然の色香ってか女子力？ 中身が女性なだけあって見るなり悩殺されちゃう感じ。胸なんてとてとても！ 恐れ多くて直視なんてでき……だめだ目がいつてしまいます。私、死後はぜひと女神様のいる管区に入居したいと思います。

いや、待てよ27管区に行く末も気になるし維持士さんの仕事っぷりを見届けたいから、やっぱり死んでもここかなあ……。ところで私のアバター、使いまわしなの？ それとも維持士さん用に新しいアバターが創られるの？ まさかロイが維持士になったら、私の姿で統治したり

……はっ、いかんいかん。私の頭の中、看破で彼女に筒抜けだか

ら変態だと思われる！ 白棕さんこっち見ないで〜！

顔を覆いながら白棕さんを指の隙間からチラ見すると彼女、浮かんだまま肩を落して暗い雰囲気。あれ、不甲斐ない私に失望しちゃった？ そんな来て早々見限られるとか　！　この醜態をどうやって挽回すれば！？

と思いきや。白棕さんてば冴えない顔して目を閉じ私に気付いてない。どうしたんだろう、両手にナイロンザイルっぽい白い紐持って調子悪そう。何か飛ぶ姿勢もふよふよしてる。腰入れて飛んでないから、私がそよ風起こしたら飛んでいっちゃんいそうな雰囲気。というわけで右手をぴらぴらと振ってみる。おーい白棕さん？

ようやくこちらに気付いた白棕さんと、煩惱を滅却しながら挨拶その他を交わしていると

「神様〜！ そちらは大丈夫ですかー！」

おっと、高架橋からお供をたくさん従え、ひととき豪華な鞍をつけ、鎧を着てシツジに乗ったパウルさんが叫んでる。私は白棕さんを連れ、高架橋に降り立った。素民にも挨拶しとかないとね。ふわりと着地すると、白棕さんを遠巻きに囲み、皆さん色めき立つ。

『この方は私の友の白の女神で、敵ではありません。しばし滞在しますのでよろしくお願いします』

「おお、赤い神様！ それを聞いて安心しました。で、どういう御関係で」

かくかくしかじかで。と事情を説明すると、なぜかミシカが手で顔を覆い思いつめた様子で

「わーひどいつ、彼女ができたんですかっ！　そんなの知らなかったですよー！」

シツジに乗って走り去っていった。何か誤解されてるっぽい。いやそれはまさか、彼女とか私もびっくり仰天です。

「赤い神様は姫様の初恋の相手でしたのにおう。神様も姫様と一夜を共にしておいて弄ぶとは、むごい仕打ちですじゃ」

パウルさんのお供してた御家人のおじさんたちも姫様の恋心を大曝露し悔しそうに男泣き。いや、初恋て何！一夜を共にしたってもミシカが私の神殿滞在中、彼女にベッド譲って部屋の隅で徹夜していましたので疾しいことなんてこれっぽちもしてませんけど。どうリアクションすればいいの。

「姫様の乙女心を傷つけるなど、人でなしですじゃ。それ、ひつとでっなしっ！」

拳を振り上げ、適当なことぶっこいてシュプレヒコールを上げるとおじさんたち。

「ひつとでっなしっ！ あ、よいしょっ！」

ちょ、御家人さんたちが面白おかしく言ってるなー。てか人でなしとか言われても悪口になってません。何か最近、ネストが面白区画になった気がする。

『ネストの民よ、赤井神とわたしはそのような関係では』

白棕さんは困ってるし。そんな中、パウルさんが空気を読まない発言。

「それはめでたい、神様はさっぱり色事に興味をお示しにならないと思えば、よいお相手の女神様がいらしたんですね。ミシカが泣くので今日は慰めることにしますよ。伴侶を持つことは神様の幸せでしょうから仕方がありますまい。ご結婚の宴には呼んで下さいね。貢物は一体何がよろしいんです？」

パウルさんがそう言いながら白棕さんをチラチラ見ている。あなたさつき射ようとしてたくせに近くで見たら美女だから祝福してほしいの丸わかりですよ。よく見りゃ男性の皆様も白棕さんばっか見てるし。心なしか白棕さんの前に長蛇の列ができてるし。並んでも祝福やりませんよ、彼女は祝福できないって決まりなんですから解散！

『何か誤解されているようですが、彼女の滞在は一時的なもので』

『わたしはただ、赤井神のもとで学ぶために来ました』

白棕さん、そう言いつつどこか心ここにあらずといった様子。

「女神様は、先ほど何をしておられたんですか？」

『そ、それは！』

超話にくそうにしてたけどパウルさんと根掘り葉掘り話を聞くと、予想外に大変なことになってた。白棕さんとこのスオウ一族のコハクって子が、量子転送に巻き込まれて27管区に飛ばされてしまったらしい。バグがある状態で焼人さんたちが先に発見したら、問答無用で焼かれてしまうようで。……焼人怖い。

すぐヒヤッハー！ バグは消毒だー！ する人たちだから超怖い。スオウ一族といえば、私にとってはキララだ。キララが行方不明、安否も不明となったら相当テンパってうるたえる。白棕さんも内心は焦りまくっているに違いない。

『それはいけません。全面的に協力しますよ』

「大変だっ！ すぐ捜しましょう。女神様の巫女はどんな外見をしておられるんですか？」

パウルさんも協力的。

『まだ幼く桃色の髪と瞳をした少女です、コハクと申します。居場所はおそらくネスト内ですが、ネストの森には反応はありませんで』

した』

『ではネスト台地にいるのでしょうかね？』

「おい、皆！ 一族郎党かきあつめて国中くまなく捜してくれ！ 手柄を立てたものには駿シツジ一頭を与える。あとは……女神様からの祝福権、とか？」

白棕さんさすがにそれは固辞。内規に触れるらしいですからね。

「じゃ、握手権とか……？」

もつさ、人は見かけによらないよね。もしかして私ってもはやオワコン？

『どうか皆さんお願いします、祝福以外で何でもします。日が傾くまでに見つけなければ』

必死だなー白棕さん。そりゃそうか。私も、キララに何かあったら何でもするって言うよ。

ご褒美が女神様の握手権+あわよくば女神様とイチャイチャできる権、に加えて国一番の駿馬ならぬ駿シツジと聞いて高架橋の上にあった御家人たちは先を争うようにネストに帰って行った。慌てすぎて、橋の上に忘れ物が大量発生。ちよ、騎士なのに剣置いて行った人誰？ てな具合でパウルさんの鶴の一声でネスト国内の一斉捜索が開始された様子だ。

『あ！ あそこに強羅さんと信楽さんコンビが』

コハクって子を捜してネストの森上空からサルベージしてる焼人たちがネストの高架橋から見えた。おーお、重火器持って物騒だな。焼人ってバグ駆除を至上としてるから、私が彼らにコハクって子の救命を頼んだとしても聞いてくれないんだよね。

『赤井神の親切なはからいに感謝します。先ほど探査しましたので、森の中にはいないと思います』

『ではあのコンビが森を捜している限り、少しは時間稼ぎできそう

ですね』

白棕さんは心労がかさんだこともあり、調子悪そうだ。コハクの気配を探るために神通力を使いすぎたらしい。神通力切れしたら二七管区では補給できないそうだから大変だ。

『白棕さん、神通力の消費を抑えるためにも一度神殿に戻り、待機しててください。土地勘のある私とモフコ先輩が手分けして捜しますし、モフコ先輩は第二区画担当だったので詳しいことも分かりますと思います。それに、見知らぬ人物を見かけたら神殿に来るように民には常々言っておりますから』

何だか真っ白けな白棕さんを取りあえず落ち着かせるために私の神殿にお招きした。

私の神殿までは通常のスピードで飛んで移動するとネストから約十五分。コハクの安否も知らない中、私は何話していいか分からなくて、とりあえず27管区の開放済み区画の説明とか民の性格とかそんな感じの、仕事の話して間を持たせてた。本当は白棕さんとかこの管区の話聞きたいけど、先進んでる管区の話を根掘り葉掘りしたらカンニングだし。

そして気まずい空気の中、やっと帰還した神殿。マイホーム
扉を開くなりモフコ先輩が飛び出してきた。

『きゃーっ！ 女神様だー萌え死ぬー！ 28管区にお持ち帰りしてー！』

と、事情も知らずぼわんぼわんとツーバウンドで跳ねて白棕さんの懐にタックルしようとしていたので、私が両手で先輩をキャッチ。先輩、よく見りゃピンクの毛玉だ。なにちよっとお洒落してるんですか白棕さんが来たからっていそいそと。

『行かせませんよ先輩！ また女性ウケしそうな色で！ こっちは
それどころじゃないんです』

『女子はピンクのモフモフしたものに弱いのだっ！ 止めてみせな
っ赤井さん！ とっつ！』

先輩が私の顎下に体当たりで隙を作り、ひるんだ拍子にホップス
テップして何と白棕さんの胸の谷間に挟まったっ！ 白棕さんに（
仕方なく）むぎゅっしてもらってご満悦、幸せそう。プルプルと
ピンクの毛玉が身震いしてるし。白棕さんも邪険にはしないのをい
いことに、先輩は抱かれたまま私をチラ見。あてつけですね！？

『羨ましい？ ねえ羨ましい赤井さん？！ 代わってほしい？ は
いダメ〜！ はいブブ〜！』

何とつらやま……いえけしからん！ ドヤ顔しても先輩には目鼻
ないからわかりません。

神様の存在にモフってもらえるなら私じゃなくてもよかつたんで
すね！ 内心ちよつと傷つきましたよ。モフコ先輩に呆れていると
銅製の神殿の大門が大きく軋む音がしました。

『やー赤いの、ひっさびさでえ〜す！ へーい、白ちゃんも一緒』

何故かロイとメグを脇に従え、神殿入り口の大門開けて堂々と入
場してきたのは。ぎゃー後光が眩しい。そんなに発光する必要どこ
にある！？ 光源強すぎてハレーシヨン気味に登場したのは青の神。
ジエダイの騎士っぱい構造の白衣来て、のっしのしと余裕の登場。

『きゃ〜っ！ 目が、目がー！』

モフコ先輩が眼もないのにサングラスかけて何か言ってる。ジヴ
リっぱく言っても突っ込みませんよ！？

『ようこそお越しくださいました蒼雲さん。主神の赤井です。お待

ちしていました』

『おゝ悪いね、暫く世話になるからよ。手土産で渡すわんで、名前何て呼べばいい？ 俺は青いの、とかで』

きた、きたよ！

初対面恒例、自己紹介＋あだ名つけタイム。うん。蒼雲さん、分かってたけどチャラっ！ ここまでチャラくていいの！？ 現実世界での印象まんまじゃん神様の演技どこいった！？ チャラ男って200年以上生きるとこんな感じに仕上がっちゃうの？！

白棕さんはド真面目だし。両極端すぎっしょこれ。メグロイがこそそ柱の陰に隠れてこつち見てますよ！？ 青いのって呼ぶわけにもいかないし突っ込みたい気持ちはあれど、とりあえずにこやかに

『私は赤井でお願いします。では蒼雲神とお呼びしますね』

もつとしみじみ再会を懐かしんだり、他にあるっしょ。最初から彼はチャラかったですけどね。

うん。楽しみにしてた同期会、こうなる筈じゃなかったんだけどバタバタだな。とりあえず込み入った話もできないので、メグとロイには少しの間席を外してもらった。コハクが行方不明で再会を喜ぶって雰囲気でもないけど、白棕さんは大人な対応で蒼雲さんに挨拶。

『お久しぶりです蒼雲神。噂はかねがねお聞きしています』

『白ちゃんもよろ。いや、美神みじんだね。俺らって構築年数大体同じだっけ。毛玉ちゃんにもお世話になるよ。で、早速君たち何かお困りっぽい？ あー、白ちゃんのスオウの子がついてきちゃったんだ。そりゃー心配だよなあ』

すらすら言い当てる蒼雲さん。すげー何でそんなことできるの、キャリア積んだ神々すげー！ 何か私、一般素民な気分。

『はい、わたしの不手際でご迷惑をおかけして。神具での検索に反応はなく、赤井神の民に検索を手伝っていただいており、どうお礼を申し上げてよいか』

『基本、目視での検索しかないよなー。あとは特殊な……ってあれ？ 赤いの、何それ。ちよ、マジか！』

何それって言われましても。

『どれです？』

『背中の上！ 日本アガルタのマークの上！』

ぎゃー！！ 何で服越しにパッチが見えるの蒼雲さん。こんなに厚着してんのに何でこんな速攻弱みを握られて！ 見られたからには……どうしようもない。

終わった……明日から絶対爆笑されるわ。特にモフコ先輩に未代までネタにされる。先輩、腹の皮がよじれすぎて表裏が逆になっちゃうかもしれない。あ、表裏逆になっちゃう球体は超球（ちゅうきゅうたい）という四次元図形ですね！ ってトポロジー入門してる場合じゃない。

『パ、パッチのことですか？ これは伊藤さんにセキュリティ対策とかで有無を言わせず貼られてしまっただけ』

『蒼雲神、パッチとはどういうことですか』

『白ちゃん透視まだできねーの？ ソレ使って捜したげればいいじや〜ん。一瞬だよ』

『パッチで？』

パッチでどうやって。私の肌にくっついてるのに。

これ、取説どころか扱い方も知りませんけど蒼雲さん知ってるなら教えてください。欲を言えば無色透明とか肌色にカラーチェンジして目立たないようにしてください、沐浴するたびに地味に恥ずか

しいんですこれ。

『いやいや。パッチって何の冗談よ、それ伊藤PMが使ってた伝説の神具。日本アガルタのマークにもなったほど超お宝なやつ。すっげーじゃん赤いのおめでとー！ ちょい交換しない？』

交換って皮膚剥がせと。一体どういうこと？ と、私が一人呑み込めないでいると。白棕さんが目を見開いて私の顔をガン見してた。何?! そんな目を見開かなくても！

『ま、まさか……至宙儀せいしゅうぎなんですか？』

私が伊藤さんに貼られたパッチだと思ってたレッドメタリックのあれ。どうやらパッチなどではなく、神体と同化して具現化する生体神具、至宙儀と呼ばれるものだったようです。あまりにお宝すぎて伊藤さんが素直に神具だと言えなかつたんじゃないかと蒼雲さんは仰る。白棕さんも見たがってるしモフコ先輩はポカーンとしてるけど何だろっこの温度差。

まず、神具ってなに。

辞書通りにとらえれば、神棚とかに飾るやつ？

第5章 第5話 ビハインド・ザ・ゲート

自動飛行車で首都空速道路を第8層路線から抜け、東京S・I・C・(スカイインターチェンジ)から一分とたがわず定刻通り環太平洋国際空速道路に入る。久しぶりの、三日間のオフ。

東 あやま 沙織 さおり は单身、しがらみから逃れるように日本を飛び出し米国への旅路に入った。

パスポートチェックの代わりにインターチェンジゲートで車番自動認証。東の持つ番号は政府諜報機関関係者のパスで、個人名や詳細な情報は一切問われない。I・Cを抜け国際飛行道路上で法令で義務付けられている空域 ハイパードライブ 自動運転に切り替え、気圏10000m、高度飛行を開始。

『カリフォルニアS・I・Cまで285分の旅をお楽しみください』
車内ナビゲーションシステムの音声^が告げた。

自動運転技術が完成してからというものの、交通事故などは前時代のものでドライバーもハンドルを握らない時代となったが、こうして時間を費やしゆったりと一人で長時間のドライブをするのも彼女は嫌いではなかった。ミルク入りの缶コーヒーに口をつけつつ、流りの曲を控えめな音量で流し、モバイル上で残務を整理する。

飛行機や軌道エレベータを使わないのは、極力人目を避けたかったからだ。シルバーのシールドに覆われた車内で過ごすかぎり、目的地に到着するまで誰も会わずに済む。身分証はありといえど未成年の身体では、なにかと身動きがとりにくい。

今回の訪米の目的は、実にプライベートなものだ。

内調（内閣情報調査室）の人間が個人で人捜しとは皮肉なものがあるが。

個人で動かなければ、沙織はあまりに目立ちすぎるのだ。

東 沙織の妹と恋人の、行方と安否が知れなくなっただけからもう随分立つ。数年前、東がDFH計画の潜入捜査の中でも特に危険な案件を担当したばかりに、彼女の実の妹が何者かによって拉致、殺害されかけたことがあった。妹に迫る危険を察知した東は妹を彼女の米国の恋人のもとに密かに預け、当分の間国外でやり過ごそうとした。

そんな東の努力を嘲笑うかのように、妹が渡米し沙織の恋人のもとに身を寄せた矢先、二人とも忽然と消えてしまったのだ。それは東たちの追っているターゲットからの、この案件に手を出すなという警告であることに間違いないかった。

沙織は車内の音楽を消し、少し型落ちのプライベート用モバイルの録音再生ボタンを押す。

それは二年前に録音された、23分間のデータ。

”もしもし、お姉ちゃん？ うん、バイトさつき終わったよー。今日はちよつと早かったんだ”

弾んだ声は、在りし日の彼女の妹のもの。

沙織の仕事のことなどつゆ知らず、獣医学生としてのんびりと北海道で気ままな学生生活を送っていた。透感のある雰囲気と知的な面立ちの、動物をこよなく愛する優しい自慢の妹だった。通話記録は、八月のものだ。

”お姉ちゃんの仕事は？”

操作ミスで偶然に録音していた妹との通話記録を、沙織はまだ消すことができない。今では使用していない一代前のモバイルは、妹の声を聴きたくなった時の為にずっと大切に持ち歩いている。

妹が大学生になってからは沙織が仕事に忙殺され殆ど会えなかったが、その分密に連絡を取り合っていた。酪農の実習を頑張っている、天文研に入った、講義も全部出ている、図書館で毎日勉強している、今日のおかずは……。沙織は彼女と会話をしているように相槌を打ちながら、上書きのできない過去と真摯に向かい合う。

”でね、お姉ちゃん。私、彼氏ができたの。理学部の同い年の人だね。話上手で、気が合って……”

”あら、それはおめでとう。ぜひ彼の動画を見せて”
今となつては懐かしい彼女の声が、スピーカーから楽しそうに聞こえていた。自然と、過去の己の言葉をなぞるように沙織の唇が切なげに動く。

”えー恥ずかしいよー。お姉ちゃんも彼氏できたんでしょ、先に見せて!”

せめてこの時、妹の恋人の名前を聞いておけばよかった。沙織がどれほど悔いたか分からない。妹の恋人は、それが永遠のものとなるかもしれない、理由も知れぬ突然の離別を嘆いたことだろう。今も彼は妹を待ち続けているのだろうか。それとも妹の存在を忘れ、新たな恋をしただろうか。

編集もされていない、モバイルの中の生々しい通話記録は、やまない沙織の後悔と懐旧の情を容赦もなく掻き立てる。

”日本に戻ったら、その彼も一緒においしいもの食べにいきましょう。あ、そうそう。分かっているとおもうけど、同棲をしてはだめよ”
”わかってるよー。お姉ちゃんこそ隣に彼氏がいたりするんじゃないの。お姉ちゃんの彼、目が青い?”

”どうしてそんなことを聞くの?”
”あーお姉ちゃん照れたー。彼、カッコいい?”

過去という時間の中で生き続ける、妹がふざけて笑っていた。嬉しそうに日常の些事を報告したり、現在の自分などいないかのよう
に、あの日の自分ととりとめのない会話を続ける。仮想下での軍事
訓練に身も心も疲れ切った沙織は、妹との日々の電話で癒されてい
たと思いつく。

平凡な日常を送る妹の身に危険が迫っていると分かった時、沙織
は彼女に何ら事情を説明しないまま無理やり米国に連れ去ってしま
った。せめて友達と彼に一目会いたい、連絡を取りたいと懇願する
彼女を、連絡を取ると周囲を危険に巻き込んでしまうし電波発信記
録から位置を特定され追われることになる、国家機密にかかわるこ
となのよと突っぱね、結果的にそれが彼らとの最後の別れとなって
しまった。

妹の人生を破壊してしまったのは私だ。沙織は言い逃れをするつ
もりはない。

その罪悪感は、妹をこの手で取り戻してもなお生涯消えることは
ないだろう。

妹の声を聴いていると沸々と込み上げてくる濁った感情をどう処
理してよいかわからず、沙織は数分の記録を残して再生停止ボタ
ンを押した。

彼女のもう一人の捜し人、沙織の恋人の名はNathan^{ネイ}Bla^{サン}ckstone。

沙織の米国での諜報技術研修中に現地諜報員の紹介で交際をはじ
めた彼は、航空工学を専門とするMITの優秀な大学院生で、国防
総省国家安全保障局（NSA）への採用が決まり将来を嘱望されて
いた。身体能力が高く性格もアクティブな沙織に対し、静的で論理
的なネイサンは対照的で、あまりにも性格が正反対だからかウマが

合った。ネイサンは絵の趣味があり、たまのオフの日には二人で弁当片手に郊外にデッサンに出かけたりしたものだ。

彼が果樹園にイーゼルを立ててスケッチに勤しんでいる間、沙織は音楽を聴きながら木陰でお気に入りの古い詩集を読む。彼にもぎたてのリンゴをむいてあげたり、サンドイッチを分け合って……いっぱしの恋人らしく、甘く幸福な時間を過ごした。あの時間の中だけでは、飾らず偽らない、等身大の一人の女でいられたような気がする。今はというと……自らの存在をすら見失いそうだ。

どうつと、少し気を抜けば洪水のような心象に襲われて

ラベンダーの香りと共に、また手元に置いた宮澤 賢治の詩集を断片的に思い出す。

『そのなかにはかがやきまばゆい積雲の一行が　こころも遠くならんでゐる

これら葬送行進曲の層雲の底　鳥もわたらない清澄な空間を』

西へ東へ。仮想へ現実へ。

百千の日没と、幾千の夜明けを、日向と日蔭、意識の覚醒と途絶を主観時間を感じながら、私は何を求め、一体どこに行こうとしているのだろうか。沙織は座席を倒して仰向けになり、車のルーフに反射して映り込み足元を飛んでゆく真っ赤に染まった夕暮れ雲の群れを漠然と眺め、ガラスにそつと手を伸べる。

そして宇宙と地球の水平線を横目に見る。

ああ、世界はこんなにも鮮やかな色彩に満ちていた。

熱でほてった肌を冷やすように、タイトなシャツのボタンを二つほど外し靴を脱ぎ、エアコンの風を胸元へ向ける。

『わたくしはたつたひとり　つぎからつぎと冷たいあやしい幻想を

抱きながら

南の方へ石灰岩のいい層を』

生と死の狭間を、過去へ現在へ。

彼らのほんの僅かな手がかりを、今日もまた彼らの魂を探し求めるために。

ともすれば泣きだしそうになる。私が彼らを見失わないようにしなければ、彼らが記憶の中に生きることだって難しいのだ。

『一挺のかなづちを持つて さがしに行かなければなりません』

沙織は深い溜息とともに脱力し、静かに目を閉じ眠剤を嚙む。信じられるのは己の身一つだけ。立てなくなるほど挫けそうでも、自分を見失い発狂してしまいそうでも助けを求めることはできない。帰るべき場所も、安住の地もない。

足を止めれば永遠に戻ってこない。失った日々も何もかも。

彼らの消えた時間を、沙織はまさに修羅として歩んでいるのだ。

彼らの失踪から二年以上が経過しており、米国からの出国の形跡はないため、何らかの事件に巻き込まれ監禁されている、もしくは死亡しているであろうとの見通しがついている。そしておそらく、後者である可能性が濃厚であるということも。だが、彼女は諦められなかった。

遺体や遺骨が発見されていないので、望みを捨てられない。

仮に彼らが事故ならともかく殺人事件に遭った場合、その記憶がアガルタに入ることにはありえない。犯罪被害者の記憶がアガルタに入ってしまうのか、少し考えれば分かることだ。死人に口なし、ではなく死人が雄弁に語るこの時代である。犯行の発覚を恐れるために、肉体と共に記憶も葬られているとみて間違いない。

無言の対面となるだろう。彼らが沙織のもとに戻ってくる望みは限りなく薄い。

しかし彼女は、ありやなしやの情報を求めて尋ね歩いているのだ。

今回の旅の目的地は米国マサチューセッツ州、ノースケンブリッジ。

もともとボストン・ケンブリッジ周辺はハーバード大学、マサチューセッツ工科大などが集まる伝統ある研究都市であったが、ケンブリッジ郊外にここ十年で新たに産学官連携拠点が築かれ、一大学術研究都市として生まれかわった。ノースケンブリッジ学術都市のとある一施設の嚴重機密管理棟地下……そこに米国の死者たちがアガルタへ入るための窓口である中央データセンター、通称ヘヴンズゲートがある。

ヘヴンズゲートにサーバーは設置されていないが、米国アガルタの一般入居希望者がサーバーへ生脳のデータを転送するための情報処理が行われている。ここには米国中の死者の情報が集約されるとともに、アガルタへの記憶転送を待つ遺体の生脳も集まってくるのだ。

米国アガルタの死後住民台帳に沙織の妹と恋人の名前が新たに登録されていないか、搜索願の出ている行方不明者が何らかの形で見つかっていないか、あるいは身元不明遺体そのものが送られてきていないかを調べることができる。死者の情報は日本でもある程度閲覧できるが、一般には閲覧不可の情報もある。沙織は日本政府関係者の特権で機密情報に直接アクセスするため、ヘヴンズゲートに定期的に確認に訪れるのだった。しかし沙織個人が手の届く範囲での搜索は、まさに気休めにすぎない。

気休めではなく唯一確実に、彼らに辿り着く方法はあるのだ。

それは日本の国体を揺るがす戦後最大の国内テロ計画。

コードネームDFH (Descent from Heaven)
、天孫降臨計画の全貌を暴き、それに関与する者全員を逮捕するこ
と。

「待っていて……………あなたたちがどこにいても、地の果てまでも
迎えに行くわ」

彼女の妹、愛実まなみの写真を指先でひと撫でし、沙織はモバイルを
閉じ浅い眠りに落ちた。

川添 瑞希は感動の光景を目の当たりにしていた。

蒼雲が留学先であんなに嬉しそうにいきいきと……………。彼はロイの
造反の一件があつてから、素民から姿を遠ざけるようになってしま
つた。見えなければ、失望することもないだろう。そんな言い訳と
ともに、彼は結界に閉ざされた神殿へと引きこもつた。

現実世界における神々が民の前に姿すら現わさないように、神と
は本来不可視の存在であるべきなのだ、彼なりに心の整理をつけ
たうえでの判断だ。

彼は神殿の中からでも民に祝福することをやめなかったが、すつ
かり覇気をなくし、患者の治療を打ち切ると結論を出したのは川添
には辛かった。彼はかつて患者の治療に人一倍の情熱を持っていた
から。

アガルタの神は、ときに治験患者の受け入れを拒否するという措置を取ることもできる。自信と意欲がないというのなら、患者の間を無駄にするも同然なのだ。だから蒼雲はもう、治療打ち切りの意思を川添に告げていた。俺は駄目だ、俺の手には余る。へらりと薄い笑みを浮かべる。わざとらしい笑顔をこしらえる彼が、川添には痛々しく見えた。

だからこの留学は正解だった。まだ彼に情熱があったころの、昔の片鱗を見せている。川添は常々目をきつく吊り上げて叱咤していたことも忘れ、よかったと目を細めるのだった。

ほくほく顔の川添の隣では、川添と同じように二十七管区の情報制御室の一角に間借りしている担当官の鴻池が困ったように頼杖をつき、コーヒーをがぶ飲みしてはモニタ前でデータを漁っている。

情報制御室は管区ごとに一室ずつ割り当てられ、一部屋は体育館ほどの広さがある。中央に立体モニタとコンソール、そしてその周囲に扇状に職員の作業用デスクと端末が配置され、個々のオペレータやデザイナー、構築士補佐官などが各ブース内でそれぞれの担当区画にアクセスし、仕事に適した構築時間を調整して任務にあたっている。通常構築時は基本的に個人での構築が多く、全体で同調させての構築は区画解放時のみである。

どこことなく肩身が狭そうに見える鴻池を川添は元気づけるように「心配いりませんよ鴻池さん。赤井神が至宙儀を持っておられるそうではないですか！もし至宙儀が使えなければ蒼雲が何とかしてくれるでしょう」

「ああ、そういえば蒼雲さんは形而立立方体でしたか」

蒼雲は多機能神具という、珍しい神具を持っている。

FC2 - 形而立立方体というもので、見た目は立方体のおもちゃの

よう。蒼雲の神具を用いればコハクの搜索は難しいことではないが、神具を起動すれば相応に神通力を消耗するし、他管区の神がしゃしやり出ても無粋というもの。二十七管区では赤井に花を持たせたい。

そんな川添の背後では、赤井に至宙儀を与えたと知った複数の二十七管区スタッフたちが伊藤に詰め寄る場面が先ほどから繰り広げられている。伊藤は中央のデスクにどかりと腰をおろし、意味深な微笑を浮かべつつモニタの中の光景を見守っていた。箱庭世界を知り尽くし、二柱の神を経験したキャリアを持つ伊藤。疑似脳の制御下にあつたとはいえ総計千五百年以上を仮想世界で生き抜いた彼は、彼に憧れ彼を崇拜するスタッフ達からは一目も二目もおかれる存在である。伊藤からしてみれば、管区スタッフたちの経験というものは赤子のそれにも満たないのであるが、それを鼻にかけはしない。しかし伊藤に気おくれするとは言っても、赤井のこととなるとスタッフたちも話は別だった。

「一体どういうおつもりなんですか。至宙儀を赤井神に、だなんて……。あれは新神には起動すらできない代物ではないですか」

「今は現状維持を貫くべきで、冒険する段階ではないのでは。彼は超人ではないんですよ、神具を与えるぐらいならまだしも、キャリア十年での生体神具は早すぎます」

思いつきにしても、慎重にして万全を期してほしいという共通認識がスタッフたちにはある。赤井が管区構築とは全く違った意味で前人未到の成果を上げている以上、腫れものに触るようにしろとは言わないが、実験的な試みを行う段階ではないのだ。独断で余計な事をして、赤井の精神状態が乱れてしまったらどうする、と言わんばかりだ。

「赤井さんには扱えますよ」

お蔵入りにしておくなんて勿体ない、宝の持ち腐れと言う言葉もあるじゃないですか。と伊藤はおどけたような顔をした。すると、エトワールの担当官である江戸っ子堅気な黒澤が、柄にもなく訛りのない標準語で、ぐさりと伊藤の古傷をえぐりにかかった。

「……生体神具は使い手の精神を蝕むこともあると、あなた自身をご存じのはず。熟練者のあなただって、二度も疑似脳への侵食を受けたではないですか」

というのは、これまで伊藤は至宙儀を継承したいと申し出てきた、経験豊富な五柱の維持士たちを、資質不十分として取り合わなかったという経緯があるのだ。いわくつきの神具を新神に渡したとあつては、彼らのメンツを潰すようなものでもある。反感だってしこたま買うだろう。

「ええ仰る通りですよ。それは私に神としての資質がなかったからです」

伊藤は含みを持たせた表情で深く頷き、両手を組み合わせさらりと弁明する。

「構築年数は問題ではありません。皆様がたは何故、彼らアガルタの凶神が感情の一部を欠いた存在に創りかえられるかわかりますか」
「それは構築士の人権を守り、千年監禁のストレスから精神的苦痛を和らげるためでしょう」

誰からともなしに、マニュアル通りの答えがかえってくる。

「それも一理あります。が、人が人である限り肉体を離れても、生理的、社会的欲求から逃れることはできないからです」

自己顕示欲、支配欲、性欲などの人間の欲望はアガルタに入り肉体を失っても本能的に体に染みついたもので、無意識的に利己的行

動や思考をしてしまうのだ。

「彼の精神はアガルタに入る前はごく平凡な青年だったが、精神が肉体から離れると完全に利己心を捨て去ることのできる、極めて珍しい性質の持ち主です。それは彼の脳を解析した時点でよく分かっています」

修練を積んだ宗教者で稀にそのような特徴を持つものがあるが、それは特定の宗教に傾倒しているのであって、心の本質が変化しているのではない。なお、信教によって我欲を捨てた者は他の宗教に寛容ではない場合が多いため宗教管区での雇用に限られ、伊藤の求める人材ではなかった。

また、信教がない場合は自己愛型、自己陶醉型となりがちで、神という存在を演じるうちひどく高慢になり、人の痛みに共感できなくなるケースもある。これは非常に頻繁に起こった事例である。しかし、欲望というものは人間性そのものだ。人が人として生きるために必要な本能なのだ。

だから構築士に人間性を捨てさせるために、疑似脳の制御が必須なのである。

今回、日本アガルタは無宗教管区、すなわち特定の宗教を信仰していない人々のための管区を構築する予定だった。特定の信教を持たず、民に奢らず自尊心を捨て、相手に求めず己の持てるものを全て与え、苦痛を恐れず、他者に寛容であり平等であることが理想だった。理想はあっても、そんな人間は実質存在しない訳で、そこそこの素材を採用して理想の神へと造り替える。

蒼雲、白棕も無宗教管区の神として決して悪くはない、何十万人の中から選びに選び抜かれた優秀な素材だった。だが、伊藤が求めていた理想のそれではなかった。

「至宙儀は、心まで神となりえた者だけが扱えるとされる神具なんです」

心まで神となること、それは伊藤を以てしても不可能だったことだ。

生命46億年の進化の先端には、いつだって中庸な母集団の中から限界の突破を果たし、無限の選択肢の中から生命を新たな境地へと送り出し、進化を収束させてゆく存在がいた。

その先端にいるのが、今は赤井という男なのだろうと伊藤は見込んでいる。

彼が特異点を超え、波動関数を収束させる最初の存在となりえることは、肉体の進化の極みを経た人類の新たなる進化、見えざる精神の進化をも予見させる。

はたしてこの場所が、最適解こたえだっただろうか。

ただ漫然と便利さを享受する怠惰なケモノへと落ちぶれるために、過去から星の数ほどの命を散らし人類がここまで進化を積んで来たわけではないのだ。

我々人類は足を止めてはならない。人間はこの答えを破棄し、座標を塗り替え、”その先”へと、進まなければならない。娯楽施設を提供することが、アガルタ計画の本質ではない。

それがアガルタ創始者、フォレスト教授の理念だった。

人類の科学技術は、その技術の粋を集めた人体という装置は、確実に究極の状態と近づいている。人はどこからきて、何をなし、どこへ行くのか。ここが進化の終着点ではなく、人は”その先”に往くことができるのか。

答えは、できる、だ。

何千年と繰り返されて今も終わらない命題の答えを求め、立ち止

まることなくこれからも続けてゆかなければならないのだ。

伊藤が本音を言ってしまうと、九年後、彼を人間に戻さなければならぬのが心底惜しい。

無意識にそう考えてしまうので、やはり自分は人間だったのだ、神にはなれなかったのだなと伊藤は寂しく自らの度量というものを思い知る。

伊藤の言葉は周りを取り囲む二十七管区スタッフらを震慄させ、おし黙らせるには十分な衝撃を持っていた。そうして重苦しい空気が流れたところで、タイミングよく伊藤のデスクに入電があった。

伊藤はホログラフのキーを叩いてデスクのブースに防音シールドを張り、すみやかに通信に切り替える。スタッフらは伊藤の通話に配慮し、各々に響くものを抱えながらデスクについて通常業務の態勢へと戻った。

シールドの中では、立体投影されたスーツ姿の男のホログラフが伊藤の通話をまっていた。

「お待たせしました」

「現実世界への帰還に備え連絡を取っているメグのご家族なんです……少し、気になったことがあります」

伊藤に入電してきたのは、日本アガルタの事務方のトップ、栗田だった。アガルタ全体での責任者定例会議以外には接触をしない、栗田が伊藤を呼び出すことは珍しい。

「どういうことですか」

「メグのご両親に治験関連の書類で帰還後フォローの同意書を書いていただいたとき、お父様がメグの名前を間違えました」

「どのような？」

ただでさえシャープな印象の伊藤の表情が、不穏な報告を受けさらに引き締まる。

「単純な名前の読み仮名の間違いです」

どんな名前を、どのように間違えたのか。伊藤は気になったが尋ねることは憚られた。治験患者の実名をはじめとする個人情報伊藤もアガルタスタッフも知らず、アガルタの運営に関与しない厚労省の特殊な事務官数名しか把握できないのだ。

「緊張されていたのかもしれませんが、肉親が娘の名前を間違えるなんて、普通はありえないですからね。また、フォローアップの研究のために提出されたご両親の遺伝子型データが、10年以上前の古い型式のものであったので再鑑定をすすめたのです。が、つい先ほど拒否されました」

メグの肉親とされる人物は、午前中に厚労省の栗田のもとを訪れていたのだという。

伊藤はアガルタ関係者であり、治験の無作為性を担保するため彼らと直接会う機会はなかった。が、メグの両親が娘の回復を非常に喜んでいるとは間接的に聞いていた。

「現実世界でメグに他の家族はいないんですか」

「戸籍上では姉が。……ですが、旅行中で連絡がつかないということとで」

「それは何やら不自然ですね」

伊藤の直感が事件性ありと告げていた。

「応接机の上から唾液、ソファから皮膚片等を捜し迅速鑑定に回してください。全てがクリアとされるまで、管区責任者としてメグの身柄を渡すわけにはいきません」

得体の知れぬ、おぞましく蠢く影の存在をそのとき伊藤は感じ取っていた。

*

国民のみなさまこんにちは。

私赤井ですけど、神具が何かは蒼白の二柱に教えてもらって分かったよ。神棚に飾るアレとかじゃなかった。何か神通力をエネルギー源にして駆動させ、奇跡っぽい事する為の装置みたい。ほら、雷神トールが持つてる雷が出るハンマーとか、不動明王の持つてる剣っぽいやつとか、ああいうの。そうです、多分神器です。

なに、説明がアホくさい？ 本当に理解してるのかって？ いや正直あまり理解してませんよ。だって神具見たことねーし。んで私が伊藤さんから貰った至宙儀（きゅうぎ）って神具はかなり特殊みたいで、私の神体と一体化してるらしい。

それってどんなことができるんですか！？ と蒼さん白さんに尋ねると

なんとびつくり！

神通力の所持量に応じて、基本的に何でもできるんだそうです！

はい？ 今何てった？ ……何でもって、何でも！？
何でもって言われると逆に胡散臭い。

はっはっは、まさかそんな。世の中そんな上手い話ありえませんが、元気があれば何でもできるって確かに猪木はおっしゃいましたよ。神通力があれば何でもできるって本物の神様みたいじゃないですか、ガラじゃないですよ。だいたい一般構築士がそういうチートじみた能力使っていいわけがないんです。絶対に何か落とし穴があ

るはずです、そんな話信じられませんよ……と思いつきり疑ってかかっていると

『おい、何言ってるんだ赤いの。猫に小判、豚に真珠、赤いのに至宙儀状態になってないか？』

蒼雲さんがコバルトブルーの青髪をぼりぼり掻きながら呆れたように私をおちよくってくる。

『そんなことはありませんよ赤井神』

白さんがモフコ先輩をむぎゅっと抱えたまま、私に気を遣って一生懸命フオローしてくれる。いや別におちよくられたり叩かれ慣れていますからどう言われたっていいんですけど、こっぴどく見えて煽り耐性ついてますし。白さんて本当に生真面目な女神様だよね。現実世界では一体どんな性格してるんだろ？ 学生時代、リアルに委員長やっつてたっばいなこのヒト。もしくは委員長じゃなかったとしても委員長と呼ばれちゃうレベル。

『対価を支払えば所持者のいかなる望みにも応える、至宙儀が日本アガルタの秘宝と呼ばれる所以なのです』

『もったいねーなー。あーもったいね。白ちゃんもそう思わね？』

どー考えても赤いのは早くね？ 使えないなら譲ってくれてもいいんだぜ？』

いえ別にいらないとか言ってるじゃないですよ。至宙儀はともかく、至宙儀のくつついてる私の背中の皮膚の部分、私的にはすごく大事ですからね。私の皮膚は私に所有権がありますからね、当然ですけど持っていないでください？

『いいえ、わたしは至宙儀は赤井神にこそ相応しいものだと思っています』

至宙儀の性能をうまく引き出せば万能どころか全能の神になれるんだそう。白さんの期待が一身に注がれる。この流れを見守っていたモフコ先輩、にゅっと私に突起を伸ばし、よく見ると何か紐を握ってる。

『東西南キタ！ 万年貧乏くじな赤井さんにも遂にツキが回ってきたきたきたー！ いいからこれ引つ張ってみて赤井さん！ 遠慮しないで、遠慮しちゃうめなのっ』

モフコ先輩がそう言うので彼女の差し出した紐を引つ張ると、いつの間に用意したか私の頭上でミラーボールっぽいのがパーンと割れて、「祝、我らが貧乏神赤井さん至宙儀ゲット！ あげ ぼよ」とか書かれた垂れ幕が出てきて紙吹雪が舞った。うん、なんだろこれ。個神的にはいらなかったかな、それより私貧乏神とかじゃないしね。

『どや?!』

相変わらずの芸の細かさ、そして無駄なこととして神殿散らかさないで。てかあなたも絶対内容把握できてないでしょ。取り敢えずノットけばいいか、的なのやめてもらえますかね。

『てへ！ 喜んでくれた？ 何かよくわかんないけどめでたそうだから祝ってみた』

可愛くおどけて見せる先輩。愛想笑いを浮かべつつ垂れ幕を三つ折りにする私。そして二柱からの視線が痛い。仕切り直しとばかりに咳払いして、

『とにかくそれは朗報です。その至宙儀はどのように使うのでしょうか』

まあ、習うより慣れろって感じなのかな。どうせ説明書もないん

だろうしやってみるしかない。せつかく伊藤さんが譲ってくれた貴重なものだっていうし。ベテランの蒼さん白さんがいてくれた方が何となく心強い。

『ははっ、まー俺も実物見たことないからね。とりあえず集中して念じて至宙儀呼び出してみ、呼び出せたら詳しく分析してやんよ』
蒼雲さんは豪快に笑ってる。つっても、私の背中にくつついてるので見たことないんですよ実物。すると白さんがモフコ先輩を両手の中にふわりと浮かべて、

『このように日本アガルタのシンボルを球体のようにイメージして、両手の中に納まるように呼び出せばよいはずです。海外の生体神具はそうやって起動していたと覚えています』

『……やーん白棕さんひどーい、私を例にして説明しないでー！』

モフコ先輩が白さんの腕の中でぼいんぼいん跳ねて抗議してる。でも凄く分かりやすい例をありがとう。えーと、球を呼び出すようにね？ 了解です。私は目を閉じて集中し、丸くたおやかに曲げた両手の中に、モフコ先輩大の球体をイメージする。

私、中腰のへっぴり腰姿勢で今にもカメハメ波を発射できそうな雰囲気でもまだ見ぬ至宙儀なるものをイメージしまくること五分。

『かーっ、やっぱ神通力たりてねーっ。二十七管区って素民一万もいねーんだろ？ そりやどー考えても無理ゲっしょ、赤いのは早すぎた。時代が、ってか構築年数が赤いのに追いついてきてない！』

おーっと早くも蒼さんが待てずに匙投げた模様　！　心なしか私の集中力もぶった切られて途切れてきました。妄想力が足りなかったみたいですね私。ちよっと力の入れどころを間違えたんでしょうか……とか反省してたら

『もーかつたるくて見てらんね。加勢するわ、目あけんなよー』

” Fundamental Control Double Me
taphysicallcube ”

(根元事象二重制御・形而立立方体)

うん？ あれ？

言われた通りに目をつぶってるから見えないけど何か蒼さん横で一人でぶつぶつ言ってる？　そして金属が擦り合わさるような変な擦過音が絶え間なくしてる。何かのコマンド！？　何それ、蒼さんカチカチ何やってんの！？　目を瞑ったまま耳だけ意識をそちらに向けていると、蒼さんのコマンドに応じるかのように私の神通力の絶対量がみなぎるウああああ！　何か手持ち花火やってたと思ったらいきなりロケットエンジン点火されちゃった雰囲気。この急激な暴騰は突沸に近い。そのぐらいの大馬力が無理やりぶち込まれた。まさか倍率ドン、さらに倍的な何かを　！？　

やばいやばい、蒼さんの神具で私に神通力を大量に送ったっぽい。そんな大量にもらったってこっちが制御できない！　一瞬でも気を抜けば跳ね飛ばされそうなほど強大な神通力を何とか気合で制御しつつ耐えていると、私の両手が焼けつくように熱くなってきて……背中から腹側にかけて無数の弾丸に射抜かれたような気がした。

『至宙儀、起動………しましたよ』

状況を飲み込めないまま、白さんの声で恐る恐る目を開く。日本アガルタの恥ずかしいあのシンボルマークがそのまま背中から剥がれて立体投影されたのか………と思いきや。

太陽系………私の目にはそう映りました。

私の両掌の中央に一つの核となる大きな白光、その周囲を赤や青

の小ぶりな光の球体がゆつくりと周回する。美しく幾何学的な軌跡を描く大小のホログラフの球体群が、ふよふよと同心円を回りながら私の両手の中に規律正しく浮かんでいた。

第5章 第6話 赤い神様、至宙儀と格闘のすえ

国民の皆様こんにちは、今日も充実してますか？！

なに？ お前の顔も見飽きたとか言わないでください主人公なんですから。必死にナレーションやってるんですから。場所は只今赤井の神殿。私の周囲には暇を持て余した神々の……遊びじゃない全員仕事ですって。

私の背中から現れ両手の中に出現し神秘的な輝きを放つ、大小の十四の球体。

その名も至宙儀。

名前だけはカッコいい。これが私の固有の神具。生体神具と言うらしい。

日本アガルタのシンボルマークとなったものだと言われる由縁は、数秒すると日本アガルタのシンボルマークそっくりの配置で一円になって並んだからだろう。何か球体たちが円陣組んで気合れて今から働くぞ！ って感じでかわいい。気のせいかな。

一つ一つの天体らしきものはカラフルで透明な水晶玉のよう。球体の周囲は光が屈折しているからか、コロナやら虹やらが見えて一個一個の星に特徴がある。大きさと色で、どれがどれか区別はつきそうだな。

宇宙と天体が大好きな元天文研の私は、すっかり至宙儀の美しさに魅了されてしまった。これどうやって動かすんだろうなー、何もせず維持してるだけでもバキュームみたいに神通力吸収していく雰囲気、ボツタクリバーみたいだね。まだ私何もドリンクとかフード

とか注文したりしてませんけど。って気分。

この神具を扱うには、時間を気にしないといけないみたいだ。神通力ごっそり奪われて倦怠感どころか疲弊感半端ない。神具は普通の道具と違うんだと、白棕さんは仰るわけだ。

持つてるだけでも必死な状態でいたら、白棕さんは焦ってはわわ、って感じになつて

『赤井神、急がないともしかしたら数秒で神通力が尽きてしまいます、コハクの搜索をお願いします！』

うん、気持ちは分かるし私も大いにそうしたい。

折角起動したのに神通力切れて終了したら本当にボツタクリバーに入店だけして帰るみたいだ。でも問題はどうかやって……。凄い内側から跳ね飛ばされそうな反発力を何とか抑えつけるので精一杯っていうか、ぶつちやけ相当手に余ってるってか息切れしてきたから一回休憩したいんだけどどうすればいい？

『まーまー、待っててな、解析してっから』

って、蒼雲さんがチャライ感じでインフォメーションボードで神具の解析してくれてる。おお、蒼さんありがとう。蒼さん、実は有能なんだよなー。三柱の中では一番経験も実力もあるし。白棕さんも大したものなだけだ。

『結構マニアックだなこれ。至宙儀専用のプログラム言語があるっばいけど』

『変則コマンドということですか？』

え！

そんな専用のとかわわず日本語か英語でお願いします！？
使いやすさが第一だよ！ ユーザーフレンドリじゃないよ全然。何

でそんなに複雑にしちゃったんですか伊藤さん、もうちょっと使いやしくカスタマイズしてから渡してほしかったですよこっちはキャラクター的にはまだ新神なんですから！ いやいや贅沢言えない、譲ってもらえただけでも有難い。でももつと簡単に扱える神具に替えてほしいです、

一回起動しちゃったけど交換、返品可ですか？！ 私の皮膚にくっついてるからどうやって返品……なことを考えてたら

はたと、蒼さんと目があつた。

『あはは、愉快なやつ。ずっと脳内アゲアゲなの？ それ地の性格？』

ぼそつと、私の顔を見ながら面白そうに仰る。あれ、私、愉快なこと言いましたっけ。言つてませんよね。もしかして蒼さんに心読まれてる？！ 恥ずかしい恥ずかしい！ やめて観ないで今大事な時なんだから！ そんなチャライ、もといチャラ医あなたに言われたくないし！ 思わず至宙儀ほつぽりだしそうになつてたら……。

白棕さんが蒼さんをたしなめた！

『蒼雲神！ 防御のできない相手に一方的に看破を図るのはフェアではありませんよ！』

白さん、間に入って私を弁護。いい女神ひめだなー癒されるよ。白さんの手前、しゃきつとしないとな。蒼さんにおちよくられてる場合じゃない。

『普通、神具のコマンドは言語式（詠唱式）なのです。私や蒼雲神のものもそうです。神具は日本製か欧米製なので、コマンドは日本語か英語でよいのですが……さすが至宙儀、自由度が高いぶん、一筋縄ではいきませんね』

白棕さんが丁寧に説明してくれる。なるほど、だから構築士の必須スキルに英語（今では世界共通語ではありません）があるのな。で、私のは何で日本語か英語じゃないんです？ メイドインチャイナとかメイドインブラジルとかなんでしょうが。

『軌道と回転数を入力する、無声式つばいぜ？ でっきるっかな？ 小さい球体を軌道^{オービット}上で回転させて全体的な機構を動かすんだと。コマンドはこれみただぜ、一番簡単なやつで神通力の消耗が一番少ないやつ』

蒼さんが自分のインフォ ションボードを私の前にフリックして示してくれた。ひゅん、とボードがこつちに飛んできた。あー今私手がふさがってるから見やすく拡大してくれて有難い。ボードには何か至宙儀と思しき衛星群が複雑な軌道を描きぐるぐる回ってるC Gが出てた！ てか、星が全部回ってるんですが！！

『この軌道通りにやればいいのでしょうか』

『別にこの通りじゃなくてもいいが、全部同時に動かないと最低限の機能も使えないらしいぜ』

『め……目がまわりそうです』

やべ、本気で目が回る。で、できるわけねー！！ 全部の軌道覚えなれないといけないわけ！？ それで最低限の機能って………どんだけ奥が深いのに至宙儀。

同心円状に回るんだとばかり思ってた。恒星と惑星の動きを模したものと勘違いしてたよ。これは同心円じゃなくて多心、てか多軸なんだ。それぞれが独立の軸心を持って、独特の軌道に沿って回っている。

蒼さんいわく、念動力で球体を動かしてみると。

念動力って私ありましたっけ。まだ修得してないんですすみませ……と思ったけど、ものは試しとばかりにぎぎぎと歯を思い切り食いしばって念じてみたら、一番小さい球体が半回転ほどその場で回ってくれた。

でもデカいのは念じてもびくともしないや。

小さいの一個ずつなら回せそう……かな。

私の歯、食いしぱりすぎて全部折れちゃうかもしんないけど。そしたらモンジャ食べれない……って今それどっかやれよ私。で、回してどうするんだらう。とりあえずその設計図通りに回してみようか。

『これ、一つずつ動かすんじゃないだめなんですか？』

一個ずつ動かすって話なら何とかなるかも。と思ったけど

『これは、蒼雲神の仰るように全部同時に動かさなければならぬのだと思います』

白さんが残念そうな顔。静止してたらダメなのか。しかも少し軌道を間違えると明後日の方向に飛んで行っちゃうよな。

てか何の軌道が何に対応してるんだろ、てんでバラバラに回ってるじゃない。あ、でもこれ……軌道が重なり合っていることに気付いた。大きな円の内側に、小さな軌道がいくつも組み込まれている。小さい軌道上に、大きい軌道が重なってる。よく見ると全部重なってる。というか軌道が全部複雑に交わってる。これって、それぞれの球体に注目せず軌道だけ見ると何やら……

『……歯車、みたいですよ、よね？』

私が確信もなしに思いつきでそう言うと、蒼さんがぼんと手を打った。

『あー、歯車かー！ その発想はなかったわ。よく思いついたな』

赤いの！」

蒼さんは多少落胆したようだった。このヒト、至宙儀相当欲しがってるからね。「至宙儀が簡単に扱えない」ってこういう意味なんかな、もし至宙儀が歯車の軌道と回転速度を組み合わせて駆動するシロモノだったら機械工学的センスがいるレベル。歯車に精通してないとだめってこと？ 歯車なんていまどき使わないから、全然分らないよなあ……。？」

「アンティークなんだなあ。こう、古くすぎてわかんねーっての？」

この構造、歯車は歯車でもどつかで見たことある。軌道を含めて考えると、一つのイメージに思い当たった。

工学部の授業でやった気がする、思い出したよ遊星歯車機構だ。トランスミッションとかに使われてるんじゃないかな。？」

太陽歯車 (Sun Planet) を中心として、それに接する遊星歯車 (Planet Gear) と呼ばれる機構が”自転”して外側の大きな歯車を”公転”させる。歴史は古い、昔は車とか自転車をはじめとする工業製品に使われてた。

「あ……わかりました。この設計図だと……最初にこのように配置をして、径を設定して、太陽だけ自転させれば他が公転しますよね。そっか、こうなってるんだ……」

この、設計図の軌道上にR=1AUとか2AUとかって書いてあるけど、Rは半径、1AUは1天文単位 (astronomical unit) のことだろう。ってことは天文単位を使って軌道を組み上げるんだ！ 大体、分かった気がする。気がするだけですけどね。

「お、いい感じの反応！ 見かけによらないね、できそうかい？ じゃー真ん中の演算中枢に念じて立ち上げてみ。一番でかい星、」

太陽っぽいやつが演算中枢だ』

『はい、やってみます。これが演算中枢ですね』

私の思いに呼応したかのように、ボツ、と一番大きな球体が燃焼をはじめた。発光してあかあかとその存在を主張する。この燃え方、やっぱりミニチュアの太陽のようだ。誇らしげに強烈な光を放散し燃えまくってるけど、私の手は別に熱くはない。ただ眩しい。

『も、燃えました。このまま保持していいんでしょうか』

『きますよ……至宙儀のお目覚めです』

白さんが固唾をのんで見守っている。何がくるの……？ もう起動してるんじゃないのこれ。

とか思っていると、間髪入れず。陥没したー！

太陽っぽい天体の側面がにゅるんと陥没して口っぽい穴が現れた！

『なんと！ 演算中枢が立ち上がりましたね赤井神！ この場に立ち合えて光栄です！』

『やればできるじゃ〜ん、赤いのかっこい〜！ やつべ、生至宙儀見ちゃった、チキン肌やつべ！』

白さん蒼さん、大歓声上げて興奮してる。そんな大声ではしゃいだら、外のロイメグに聞こえちゃうから！ 白さんなんて興奮しすぎて2メートルぐらい浮いちゃってるじゃん。あ、我に返って恥ずかしそうに降りてきた。お茶目な人だなー！

ところで私ら毛穴ないのにチキン肌とかあるんですかね蒼さんには。比喻ですなすみませんね。

『キヤー赤井さん素敵ー！ こっち向いて！ はいポーズ！ 笑って笑って！ きゃっはー！』

ついでにモフコ先輩も思わず人型に戻って私を応援してくれてる、

てか全身ピンクのドレスで往年の林家ペー・パー子師匠並みに写真撮ってる。いいよ今写真とか撮らなくて、しかも使い切りのカメラで撮らないでよ！ いつの時代の写真なんですかそれ。巻き上げ式で24枚しか撮れないやつでしょハイビジョンで撮って下さいよそこは。先輩、眩しいもんだからサングラスかけてるし。

で、ここからどうすればいい？

私が困っている、てか完璧に持て余してるのを見透かしたかのように、太陽っぽい星に口が喋る訳でもなくぺちやくちやくと動いて、口の中からサイバーなフォントでマゼンダ色のメッセージが出てきた。それらは電光掲示板みたいに右から左にメッセージが流れて土星の輪っばい感じで太陽の周りを回り始めた。

意思疎通できるのか……制作者の人、何でこんなキモかわな造形にしちゃった？

『至宙儀の周りに何かコマンド出てね？ 所有者以外にはコマンド見えねーから、分かるだけ読み上げてみ』

白さんと蒼さんにはメッセージが見えないというので、メッセージを読みあげてみる。

幸い、英語だったからまだよかった。ヒンズー語とかスワヒリ語だったら詰んでた。ナマステとかジャンボ！ ぐらいいしかいえねー。

『 Hello , the Divine . I ' m honor
to meet you . This is PCG oper
ation centralですって』

(こんにちは、神様。あなたと出会えて光栄です。私はPCGの演算中枢です)

()内は国民の皆様のために適当に私が訳してみました、こんな誰でも分かるとか言っちゃだめです！

白さんの話によると、至宙儀は日本語で、英語ではPCG (Perfect Cosmic Globes)と略すらしい。

私がメッセージを読み上げ終わると、太陽っぽい天体は燃え盛りながらニコツと不気味に口角を上げ、次のメッセージを吐きだしはじめた。

今、確実にニヒルな笑いをしたよねこの神具。
嘲笑われてなければいいけど。

o b j e c t i v e t i m e m o d e (客観時間モード)
s u b j e c t i v e t i m e m o d e (主観時間モード)

時間のモードを選択しろって仰る。今度はグレーのフォントだ。
どっちだろ……じゃ、適当に

『Select subjective time mode!』
勢いよく叫んでみると

『言葉じゃ通じねーっしょ、念選択じゃないと』
蒼さんが笑うので、念じてこっち、と選択すると文字の先頭についている菱形がピコンとマゼンダ色に発光した。それと同時にキーン、と耳鳴りがして白さんと蒼さん、そしてモフコ先輩の動きまでが全て停止した。

あれ？ 一体何がどうなった？

まさか私の体も金縛りになってる、何だよ私も動けないのかよ。
眼球も動かせず瞬きもできず内心慌てっていると、神殿内部を流れる水路の水の流れも停止してる。何これ！？ まさか時間が止まった！？ 誰だよザ・ワールドした人、私かよ。何か空気の流れまで止まった気がする。ぴんと張り詰めてる。

これが時間停止つてやつか……苦しい、息できない。息できないと死ぬ！……残念死にませーん！心配してくれた？誰も心配してませんね通常通りですね。まあ神様ですからどーせ平気です。

一人相撲もいい加減に切り上げて。

どうやら意識だけが、停止した時間の中に放り込まれたみたいだ。もしかして時間を止めて操作することでタイムラグをなくす仕様なのかな。これは助かる！コマンド選択に時間くつてたら実用性ないですしねこの神具。

お、また何か太陽っぽい星が文字を吐き出してら。質問に答えるとかから次と選択肢が出てくるのか。これ最後までやっていけば何とかなるのかな。

時間止まってるから白さん蒼さんに相談できないし、自力で何とかしないと。ミリオネアを一人でやってる感じた。50:50もオーダーエンスも使い切った気分。失敗は許されない。次はもう神通力不足(ガス欠)で起動できないんだ。さつきでさえ、私と蒼さん二人がかりでギリ起動できた代物なんだから。伝説の神具とかいう二つ名に怯んじゃだめだ。

一発で成功させよう。

意気込んでるうちに、次の質問が出力された。

programming language input (プログラム言語入力)

orbital input (軌道入力)

direct input (直接入力)

プログラム言語も直接入力も意味が分からないから軌道入力にす

るつきやない。幸い、見本の設計図は蒼さんが私の前に提示して出してくれてる。全く同じように組めばいいんだよな。軌道入力、つと。

次は2D軌道か3D軌道か、と聞いて来たから2D選択。軌道計算が煩雑になりそうだから平面的にしとく。すると私の目の前に1m四方ぐらいの半透明の黒いボードが出現し、ボード上には赤蛍光ラインで格子が刻まれている。左隅の表示によると1つの格子が1AUだそうだ。

とにかく指一本、唇すら動かさないので、入力は念でやるつきやないのか。実時間モードにすりやよかった。この神具、私の疑似脳を直接読み取ってるのかな。まあいいや。

私はボードに念を送り、ホームポジションに並んでいる衛星を一つ一つスライドさせて設計図通りに配置する。各衛星の公転運動自転運動の有無を聞いてきたから、個別に設定……たつぷり時間をかけて軌道を描いた段階で、ふとボードの左隅の表示を見ると、重大なことが発覚しました！

先生質問です！ パワー不足の時はどうしたらいいですかー！？

この設計図だと、実行した時点で5つの衛星を神通力で動かさないといけない仕様だ。

何が問題なのかって？

そのための消費アトモスフィア量は総計8万9000APSと見積もられている、これがまずい。私がそれだけの信頼の力を得ようと思つたら、およそ8万9千人分の信頼の力があるってことだ。そんなに27管区に人はいない。蒼さんの言つとおり、素民一人もいないから私には早すぎる神具なんだよ。

ない袖は振れない、見くびられてるだけじゃない、素民がいないからどうしようもないんだ。もつと構築時間の進んだ管区の構築士

じゃないと扱えないって……

蒼さんの言ってる意味がようやく分かった。

というわけで私には至宙儀にくれてやるだけの神通力がない。

となると、……あるもので賄おうか。皆様のお小遣いと一緒、限られた予算（APS）やりくりすべく内訳を分析してゆく。私が動かせるのは蒼さんが下駄はかせてくれた神通力も使ってせいぜい衛星二つ、概算1万APS相当。

駄目だ……二つじゃ衛星全てを動かせない。二次元的なモードでいじれそうなパラメータは、公転周期と速度、公転軌道、そして、衛星同士の相互作用の力。

ん？ 待てよ。軌道半径に長半径と短半径が設定できるようになってるじゃない。マジか……そんなことしていいの？ いいなら、楕円軌道にするっきゃない。そして遠地点に更に衛星を置いて、衝突させて軌道を曲げる。トランスミッションの概念の上に、軌道計算のコンセプトを適用する。

まさに衛星玉突きじゃん。現実世界にも小惑星玉突きって概念はあるし、実際やられてる。まっすぐに進まない円弧を描くビリヤード、円軌道を持つビリヤードだと説明すると分かりやすいかな。

うん、……分かる。

衛星や惑星の軌道計算はいける……これでも元天文研です。

太陽の重力、OFFにできるらしいけどONにしておこう。そうすると、衝突後に軌道を外れても楕円軌道か円軌道に戻ってくれる。衛星同士を衝突させてもいって話なら、回転速度を加減して互いに衝突し合って別の方向に飛んでゆくようにすればいい。

各惑星だか衛星だかの公転半径を再設定。

最終的に14の衛星全ての軌道が、最初の設計図無視の状態にな

って確定した。軌道上のどこに衛星を配置するかは大事だ。私は回転数から暗算とカンで公転周期を導き、私の持てるだけの力で駆動できるようにする。

さて実行しようかという前に、この設計図でいいのか試すためのシミュレーションがついてる事に気付いた。

よかった、事前にやってみよう。これ、初心者の私の為に伊藤さんがつけてくれた機能かもしれないけどぶっつけ本番じゃないところが本当に有難い。

緊張しながら演算すると、残念、二つ動いていない星がある。

あれこれ微調整すること主観時間十分ぐらい。私は最初の設計図とは似ても似つかない軌道図を組み上げた。

いってみよう。レッツ、ぱちつとな！ と実行に移そうとすると

Do you want to save this orbital
tail protocol?

(この軌道プログラムを保存しますか?)

セーブポイントきた！ するする！ したい！ 絶対したい！

毎回こんな軌道図組んでたら私の目が回ってしまおう！ 保存したいと念じると、三番目のプロトコルとして保存されました、と出た。1番2番、もう埋まってた？ 伊藤さんが保存してる軌道なのかな。どんな軌道図が入ってるのか見たい。見たいけどまあいいや、それはまた今度。

息苦しいから早く実行しよう、皆待ってるだろうし……って待ってないわ。

よく考えたら時間経ってねーわ。

というわけで実行！

念じると同時に、プロトコル3を実行しますとの表示が出現。アガルタ世界が再び動き出した。たった二つの衛星の動きで、楕円軌道に円軌道、衝突を繰り返し、最遠点で重力に引き戻されて軌道に戻り……至宙儀の中の星々は美しく発光しながら、私がシミュレーションで思い描いた通りの軌道を描き始めた。すげー、たった二つの動力源で軌道という名の歯車が見事なまでに回ってゆく。

What do you want?

(何を望んでおられますか)

出た。待機コマンド。私はある程度の集中力を使って、コハクという少女を捜しています、知っているなら居場所を教えて下さいと念じた。齟齬なく至宙儀に伝わるように、命令を短く鋭くして。

全衛星が駆動し、中央の演算中枢に熱量が集中し発光が更に強まる、

”彼”は私のオーダーを受け何かを宣言した。

I know everything...

(全てを知っています)

音声なくそう言った至宙儀の微笑みは気高かった。

目に飛び込んできた白い文字と共に、全ての天体が太陽へと向かって収縮し、衝突を繰り返し凝集してゆく。そして中央部に一気に収束したかと思うと、太陽らしき天体はやがて膨張をはじめた。質量が増したから……あ、やべ、これ爆発するパターンじゃね？ ちよ、赤色巨星っぽい赤黒い天体になってきたし！ 風船膨らませゲームじゃないんだからマジでやめてー！？ 危ない危ない！

何これ、まんま超新星爆発（supernova explosion）しちゃうみたいですけど！

そう出力しちゃう！？ いらぬいらぬ、そういう出力いらぬい！

私はただコハクの居場所が知りたいだけ！

えー設計図通りに作らずアドリブしちゃった私がいけなかったー！？ と頭の隅に失敗の可能性を考えただけでもう遅い！ ぎゃ
27管区のみんな！ 私、取り返しのつかない大失敗やらかし
ちゃったかもしれないです！

超凝縮した至宙儀はやがて点となり、輝きはますます増して、特
異点に差しかかった。

次の瞬間、まるで核爆発の連鎖反応が超ミニチュアスケールで起
こったかのように、青や白や緑、オーロラ色に輝く光波が私の手の
中を爆心地として放射状に、目にもとまらぬ洪水のように駆け抜け
ていった！ 爆発の衝撃はない、でも暴力的なまでのエネルギー
ーが爆散していったのが分かった。

蒼さん白さんモフコ先輩の順に、私の名を呼ぶ声が聞こえる。

ダメだ目が眩んで何も見えない。景色が真っ白だ。

『空間歪曲率、上昇しています！』

白さんが異常を教えてくださいました。分かる、絶対これ仮想世界ごと歪
んでる！ 至宙儀を中心に、多分今伸びてる。空間が伸びてる気配
が、体感としてはつきり分かるほど。どんだけの威力なんだよ至宙
儀、世界歪ませちゃってどうするの！

と、思ったら……。

ぎゅーん、と引つ張られてた空間が徐々に縮んできて、と同時に
飛び散って行った光の波が私の両手の中に、逆流するように戻って
きた。視力が少し回復してきた頃には、至宙儀は元のように球体の

演算中枢を作り上げているところだった。ただ、その中にはもはや光は宿っていない。

『あつ………』

白さんが小さな声を上げた。

桃色の髪をおさげにした少女の頭部……至宙儀の上に実体化しつつある。頭部から肩へ、そして腕、指先、脚へと……再生してゆく。最初は幽霊のように覚束なく、段々と人の姿をとって。

たまらず、白さんが駆け寄って実体化してゆくコハクを両腕で抱きしめた。まるで母親のように穏やかな表情。その端正な横顔には、透明な涙のあとが一筋。

彼女はコハクの頬に赤みが差し、すーすーと寝息を立てているのを確認した。

『至宙儀が、壊れていたコハクを連れてきて治してくれたんですね』

白棕さんはいつまでも、コハクと一つの塊になったかのように固く抱きしめていた。彼女の神体に残っていた神通力を全て癒しの力に代え、惜しげもなくコハクに注いでいる。女神の祝福に目を奪われながら、私は集中力と神通力を今度こそ絞りつくし、ふらふらとその場に座り込んで大きく息ついた。

私の背中に還った至宙儀がじんじんと熱を持ち、存在を強く主張していた。

ありがとう。

次はいつになるか分からないけれど、また会える日が来たらよろしく。

私は全智にして全能の神具に感謝し立ち上がった。

東京目黒区。東京工業大学大岡山キャンパス。
情報理工学研究科 西エリア。
広大な敷地面積を持つ工学研究棟の19階は、
バイオロボティクス研究室のフロアである。

蘇芳桐子名誉教授は芝生の運動場に面した教授室のデスクで、学生たちの書いた論文を校正する作業の手を止めた。

「ラボの学生が増えると自分の時間がなくなってしまうわね。一人助教を増やしてもらおうか」

バイオロボティクスの分野では世界的に有名な蘇芳教授の研究室は人気なので、どうしても学生が毎年殺到するのだ。

曇天の空から零れ落ちる初雪に気付く。教授は汚れひとつない白衣に身を包み、上品なおだんこのまとめ髪にして和風のコーサージュでとめている。

「……計画降雪の日だったのね。飛行場までの空路が込み合うかも早めに出発しないと」

雨が降ると車道が混むのは、自動運転技術付加の車に乗っても百年以上前から変わらない。

今日は午後から一つ大学院の講義があり、その後はパリで学会の招待講演の予定だ。共同開発した新作のA・Iと、勿論スオウシリーズの性能を存分にPRしなくてはならない。いくつか稼働中のスオウたちの実証データも取れたし、今注目の27管区のキララの成長は実にドラマティックだった。

彼女は自分で丁寧に淹れたほうじ茶を飲み、いちご大福をたいらげてほうつと息をついた。脳を酷使する仕事であるからか、甘いものがついつい欲しくなるのだ。至福の時間である。ちなみに、代謝メタボリ

クスメンテナンス

制御薬という薬が市販されるようになってから、肥満や三大成人病などは既に前時代のものとして駆逐された。この時代ではスタイルがいいのは当たり前、シミ、しわがないのも当たり前の世界だ。美醜の概念すら、変遷しつつあるのかもしれない。

純白の内装の教授室のインテリアは殺風景で、来客用の応接セツトがあるのみだ。白いソファもグラステーブルも気持ちよく清掃が行き届いている。ほんのひととき寛いでいると、目の前で優雅に浮遊する立体パソコンの隅に連絡ツールが現れ、隣室で研究室の事務一切を取り仕切る若い女性秘書がパソコンのモニタから蘇芳教授を呼ぶ。急ぎの様子だ。

「おはよう明屋さん。何かありましたか」

「おはようございます蘇芳先生、厚労省の伊藤という方からお電話です。いかががいたしますか？」

「回してください」

『おはようございます、教授』

伊藤の話は、蘇芳教授の身に遠からず危険が迫っていることを示唆していた。不審な男女二人組がメグの両親の名を騙って、メグを誘拐しようと狙っていたというのだ。これまでに、蘇芳教授とその研究室は何度となくその技術を盗もうとする者達からの執拗な攻撃を受けてきた。しかしそれは、蘇芳教授個人ではなく、蘇芳教授のPCであったり、研究室のサーバーだったりした。

今回はいずれも、アガルタに絡む個人なのだ。

「厚労省に乗り込んでくるとは……随分と豪胆ですね」

『……そういうわけです。ソファから採取したサンプルによると両親とメグのDNA型は一致せず、偽の両親であることはほぼ間違いないかと。赤井、そしてメグ……次はどんな手にうって出るか。彼らの目的は知れませんが、教授にはまずご一報させていただきませう』
大事な情報をよく知らせてくれたと、蘇芳教授は懇ろに礼を述べ

た。

「事情は把握いたしました。一人身ですので、十分注意しましょう。搭乗する予定の飛行機をキャンセルして、飛行車で空速道路でまいりましょうかね」

蘇芳教授の自動飛行車は、厚労省の顧問ということもあり公用車で、軍用車両並みのセキュリティ仕様だ。緊急時には防衛・迎撃システムが働き、0.5秒で超音速に達し数秒以内に光子ロケットブースター稼働で大気圏外に脱出。公用ロケットとして国連宇宙基地に緊急避難できる。対して一般車両は気圏飛行能力はあっても、大気圏脱出能力はない。

「それが安心です。教授のお車は戦闘機ばりの性能ですから、民間の飛行機よりはよほど。暫くの間、教授の身辺警護のためにSPをつけさせてください」

「ありがとうございます。赤井神を狙ったサイバーテロリストと同じ勢力かもしれないですね」

蘇芳教授は犯人の目ぼしをつけているらしかった。

年を経ても、彼女の頭脳は冴えわたっている。

「私もそう考えます。ネットワーク経由で侵入することを諦めて、物理的な手段に出てきたようです」

「伊藤さん。私の警護はともありますがたいのですが、まず患者様たちの安全確保と、一度標的となった主神、および構築士たちの警護もお忘れなく」

「はい、その点は万全にも万全を期しております」

赤井には既に至宙儀を実装させ、構築士IDをS (Standard) ナンバースから外し、ゼロナンバースに登録している。ゼロナンバースとは、伊藤の駆る天御中主神と同様に厳重管理を必要とする構築士に与えられる特別待遇枠の区分で、アガルタサーバにお

いて検索除外となっており不正侵入者に認識されない。

よって赤井の正規の構築士IDはS-JPN214から0-JPN2となつてはいるが、アガルタ世界では表示されない。

同時に、赤井の疑似脳とサーバを最高機密エリアでの保管に切り替えた。赤井を物理的に、そして継ネットワーク的に狙うのはこれで不可能になつたといえよう。

赤井の疑似脳、肉体、そして27管区サーバ、どれが欠けても仮想化リハビリテーション治療の唯一無二の場は失われてしまう。

「伊藤さん、赤井神の肉体の保管場所はどうなっていますか？」

「他の主神と同様に、管理区域に保管してありますが……」

伊藤はモニタの向こうで怪訝な顔をしている。

「肉体も最高機密エリアに移動させたほうがよいでしょうね。そして赤井神のI型バイオクロンの作成を、強くお勧めしますよ」

ここ数十年で目覚ましく発展した、バイオクロン技術。

バイオクロンの作成方法には大きく2つのパターンがある。

一つには、I型バイオクロン。皮膚より採取した体細胞にリプログラミングタンパク質を処理し、DNA修飾レベルにまで遺伝子リプログラミングを施して分化全能性を持つ幹細胞へと造りかえ、そこから人工胚培養を行い、維持装置の中で生物学的に完全な一個体を再現する技術だ。

こちらは本人の細胞由来であるということもあって安全性が高いのだが、クローンを成長させるために、時に癌化を引き起こすリスクもある成長促進ホルモン製剤（IGF、hGH等混合製剤）が必要であることと、神経連絡の祖語がないよう厳密な管理のもと作成されるため、10歳のクローンを作成するにはどんなに急いでもおよそ1年がかかる。この方法でのクローン作出は生脳を移植することによって完成する。犯罪に悪用されかねないことと、一体5億と

いう費用がかかるため政府要人のみに限られ、民間では一切許されていない。皇族や総理大臣のバイオクローンは、テロや有事に備えて作成され、任期終了と同時に破棄されると聞く。

いま一つは、I型バイオクローン。再生医療の延長上にある技術で、自身の細胞を採取し、iPS細胞として分化万能性を獲得させ、それを元手に生体パーツをいくつも造って最後にそれを強化樹脂とセラミックの骨格でできたボディユニットにパーツを嵌め込み、最後に脳を移植するもの。これは生体パーツによって成り立つサイボーグともいえるものだ。民間にはこちらが製造を許可されているが、激しい負荷のかかる運動はできない。また、生殖能力もなく、製造No.をつけられる。

赤井にI型クローンを、という蘇芳教授の申し出は伊藤を浮足立たせた。伊藤ですらも、大臣や高級官僚ですらもバイオクローンの所持を許可されていないのだ。しかし、赤井の本体を奪われる訳にはいかない、何事も万全でなければならぬ。バイオクローンを、本体とすり替えておけば何かあっても安全だ。

『予算が厳しいのですが、赤井さん本人によく話して、希望があれば発注してみます』

「それと……伊藤さん。先日メールをいただいた、27管区のロイの件ですが。依頼通りログを解析している途中です」

『お忙しいところ、大変なご無理とご無礼を申し上げているとは承知しております』

ROI (Reachability of Intelligence: 智の到達可能性) と、アガルタ創始者のフォレスター教授に名付けられた特別なA.I.。フォレスター教授亡き今、ロイの成長の状態を解析できるのは、日本には同じロボット工学者である蘇

芳教授を置いてほかにはいない。

「私は以前他管区のデータから、彼の暴走がまったく手の施しようもないことであつたと結論付けました。A・I・に過ぎた知性を持たせることは、世界の真の姿を想像させることは、人間には理解できない挙動を示すことに繋がるのだと」

そのコンセプトのもとに、新たなスオウシリーズでは知性の獲得を人間に近しく、不完全にした。より人間に近い状態を目指したというわけだ。その意味で蘇芳教授はフォレスター教授とは異なる”完璧”を目指したとはいえる。

今回、蘇芳教授は新しく構築される三管区を、非常に特徴的な世界観とするように指導していた。

それは、大地を平坦とし、世界を球体としないこと。ロイに宇宙の真の姿を想像させなければかりか、仮想世界の物理学法則を部分的に攪乱するためでもあつた。他の殆どの無宗教管区では、地球環境が模倣されているにも関わらず、である。

現代科学を用いることができなくとも、アガルタの”異世界を創造する”という目的にはかなう。赤井はログイン初日に「平坦世界」に気づき、クリエーターがそのように世界を創造した理由をたいそう不思議がっていたが、その目的はA・I・の知性のインフレーションに歯止めをかけるためである。

超A・I・は観測によつて即座に理論を導き出す。神が教えなくとも、彼は知るのだ。宇宙の姿を。

ならば観測から自然を学ばせない。

自然科学の原点、智の根源を奪い去るアイデアだつた。

だが、白棕と蒼雲の二つの世界においてそのアイデアが功を奏することはなかった。

「超知性を得た彼がどのような次元で思考していたのかは、人間にはわかりません。ただ、神への不信が限界を越えたのです。その知性が、残忍なまでに研ぎ澄まされた頭脳（A・I・I）が、何かを（・・・）はじき出したのです。人間には想像だにできぬことを。したがってオーダーは破綻しました。命令を失ったA・I・Iほど、哀れなものはありません。勝ちえぬ戦いに身を任せるしかなかった……」
『もしそうなってしまうのなら、その時は私が責任を持って片を付けます』

赤井にロイを手にかげさせるのはしのびない。手を汚すのは、自分の仕事だと伊藤は真面目な顔でそう言う。

「そうならないように、望みますがね。……27管区のロイはあなたの仰るように少し違いがありました。彼が赤井神といるとき、あらゆるパラメータを見ましたが他の管区とは違い、安らぎを感じていました。ロイにとって赤井神は、神という存在を超えた精神的なよりどころであると判断できます。人間でいう、絆というものでしょうか。この反応は、他管区では見たことがありませんでしたよ。そのような心を、A・I・Iは解しないとすら考えていました」

『絆、ですか……人間と、A・I・Iの』

伊藤は意味深な表情で視線を伏せる。伊藤の過去においても二度ロイを葬らざるを得なかった。よい思い出もあっただけに、感傷がよぎる。

「彼というA・I・Iは強く優秀で、勤勉でなければならぬというオーダーに縛られています。ですがそうでなくても、赤井神は許容してくださる。受容されることは心地よい、ありのままの自分を認

めてもらえることは心地よい。人間もA・I・も同じなのかもしれない
「ません」

人間とは、いかなるものか。どこから来て、どこに行くのか。

伊藤はこの仕事についてより神を演じて、ずっとわからなかった
ことがある。

肉体をそぎ落とした自己は、どこまで人間であるといえるのか。

A・I・に生じる心、それは人間のプログラミングしたモノの範疇
を超えているのかいないのか。

伊藤は人間とA・I・の進化、自我の獲得に再び思いを巡らせて
いる様子だった。

「彼を気分転換に、外に出してみてもはどうでしょうか」

蘇芳教授は思い詰めている伊藤を差し置き、冗談でも言っている
かのような気軽な調子でそう言った。

「外に、出す？ 外とは？」

伊藤には理解できても、アガルタの常識を逸していた。

蘇芳教授が突拍子もないことを言い出したということだけは分か
る。

「現実世界ですよ！ この、まるい地球の上です」

教授は楽しそうだ。

「し、しかしロイには目的があつて仮想世界で稼働しているのです
よう。仮想世界から出すことは……」

「違いますよ。私はフォレスター教授から計画を聞きましたもの。

彼は千年の後、彼を現実世界に出し、あることをさせる予定だと言
っていました。千年という数字が独り歩きしてしまい、現実世界に
出すには余りにも危険だということ、まだ若いうちに出そうとは思
っていませんでしたが」

ロイのパーソナリティを仮想世界で一時停止して、夢を見せると

いう形で短期間人間世界に出して様子を見るといい。蘇芳教授は事もなくそう言ったのけた。

上手くいかなければ、外に出した記憶は破棄して何もなかったことにすればいいだけです。そう、言うのだ。

「考えてみれば、今の段階では温厚なA・I・なのでですから、早々に出してみるというのも一つの手です」

メグを出すタイミングで出すと、メグも寂しくなくてよいかもしれませんね。

蘇芳教授はどこか楽しそうに、上品に茶をすすり外を見上げた。

空は晴れ上がり、雲間から七色の光が見えた気がした。

彼の為に、どんな素敵なボディを用意してあげようかしら。何を見せてあげようかしら。

そう思うと何だか興奮を抑えられず、教授は少女のように無邪気な微笑みを浮かべるのだった。

第5章 第7話 コハクの信仰、ロイの祈り、メゲの願い

アガルタ第28管区 神聖エルド帝国 巫女王コハクが目覚めると、温かい気配に満たされていた。

純白の衣、そして銀系のように輝く髪が、光を纏いきらきらと揺れる。コハクがよく見慣れたものだ。

コハクは総身で白の女神に擁かかっていると気づき、どうしてよいものと頭がのぼせる。彼女は先ほどもまで27管区、ネスト城の廃坑に量子転送に失敗しバグの塊として横たわっていたところを、至宙儀の千里眼によって発見され、赤井神の神殿に再転送後、完全にプログラム構成が修復され現在に至る。

彼女は至宙儀による転送前、形を失ったバグと成り果てて一寸先も見えない闇に同化しても、いっしんに白の女神と、彼女の世界を想っていた。コハクはいつでも、白掠の為にどうともなる覚悟はできていた。女神が今日死んでくれと言えば喜んで死にたいのだ、自分のためではなく女神の為に使う命だ。

こんな状態で死んでしまつたら……過去から受け継いできた一族の想いを、民たちの想い、女神への祈りを、この代で途絶えさせてしまふ。自分の為に死ぬことは許されないと、幼いころから聞かされてきた。騎士は王と民の為に、王は民と巫女王のために、そしてスオウは女神と民の為に死ぬのだ。

スオウの一族は、白の女神の為に死ぬ定めだ、それが一族にとって、勿論自らにとつても最善の在り方だ。私はまだ死ねない。身体はなくなっても、絶対に死んではならないのだとコハクは思った。女神は憐れみ深い慈母であるが、ときに残酷な存在だと知っている。

この身体は、女神への信仰で束ねられている。

もし、コハクがここで命絶えてしまったなら、女神は嘆くかもしれないが、新しいスオウを創るだろう。

女神はスオウの一族を、身代わり、生贄とするために傍近くに置いてきたのだ。

新しくても、古くても、違うスオウでも女神は構わない。それがコハクでなくても構わない……コハクには分かっていた。

”めがみさま……私はここにいます。御覧になっておいででしょうか。ここにいます！”

声は出せなくなっても、形はなくなっても、祈りは届くだろうか。声は枯れたのならばと。音のない透明な声で、祈った。何度も何度も。

そして、祈りは届いたのかもしれない。

どこからともなく暖かく柔らかな光が差し込んで、黄金色の煌めきがコハクを包み込んだのだ。そしてコハクは優しく引き戻された。暗闇から光あふれる世界に戻された悦び、彼女が愛してやまぬ白の女神の何と眩いことだろうか。

「はわわわ、めめめめがみさま！ わ、私っ、ありがとうございませっ！」

『コハク。よく……よくぞ無事でいてくれました』

コハクがこれほどまでに女神に強く擁かれたのは初めてかもしれない、女神の神体は優しく、温かくて、天上に咲く気高い華のよくな可憐さがある。どこまでも完全な神通力に包まれ、コハクは離してもらえない。コハクはただ光悦にあり力を抜いて、身も心も女神に所有される喜びを噛みしめた。コハクの頬を一筋の涙が伝った。

この時間が永遠に続けばいい。でも、戻ってきたのは私でよかったでしょうか、私でなくてもよかったですでしょうか。

一瞬、そんなことを思ったが、彼女の祝福を受けると心地よくて骨抜きにされてどうでもよくなってしまった。

そんなときだった

『よかった、無事のようにですね。違和感などはありませんか？』

聞き覚えぬ、青年の声が聞こえた。その声は人のものではなく、音を経ずコハクの脳髓を侵してくる。透き通っていた、穢れなき信号だった。だがコハクは、この声を知らない。

これは神の勅声ちやくせうというもの。人間の魂を鷲掴みにし、救い、狂わせるもの。

”誰……勅声だなんて”

コハクの澄んだ桃色の瞳が本能的に凜々しく眇められる。無言のうち腰に提げた聖剣の柄に右手を撫でるように滑らせる。

抜くべきか……抜いたからには生命を以て贖う覚悟を決める、万全ではない状態で勝てるのか。正体のわからない者を切り伏せるには不利な態勢だ。女神の神体が間に入り、戦闘態勢に入ることができない。女神の安全を第一に、彼我との力の差を天秤にかける。場に満ちた神通力は殆ど感じられない。錆びつきかけていた靈感を研ぎ澄ませて、巫女としての第六感呼び起こす。

この場で強い神通力は、どこにも感じない。

それは白棕の神通力が枯れていることを意味した。恐れ戦くほど偉大な力に満ちていた彼女が、何をされてこうなったのだろう、あまりに弱体化しすぎて見る影もない。すぐ近くにいる、勅声を持つ青年が女神に何かしたのだろうか。そうに違いない、女神を蹂躪す

るなど……そう思うとかつと顔が熱くなり、脈がどくどくと速くなり怒りが込み上げてくる。女神は彼から侮辱を受けただろうか……そう思うと、頭がおかしくなりそうだ。

『あーあー、何かやゝな予感するよ白ちゃん？ 自分とこのスオウちゃんは自分で御してな〜』

もう一つ、今度は異なる勅声。神らしからぬ軽薄な言いぐさと語調。これは何だ？ コハクは更に混乱の度合いを深める。ただはつきりしているのは、白棕に擁かれ死角となつて見えないが、人ならざる者が二体、女神の傍に居るということだ。神気のような気配が女神の他に二つも……。

邪神か……？ いや、邪神ではない、邪神の声は穢れていてすぐに区別がつく。音もなく、腰から聖剣を抜き剣になけなしの巫力を通じるイメージをたくわえる。力を失ってしまったことが今更のように悔やまれる。

白棕から与えられた神通力は尽きていても、彼女の身体に僅かな巫力は残されている。

コハクの信奉するのは偉大にして正統なる豊穰神、白の女神、ただ一柱だけ。この身にあるだけの信仰を束ねて、剣とするだけ。

”……めがみさまをお守りしなくては。私が”

手によく馴染んだ聖剣は両手剣のロングソードで、スオウ一族にいずれの代も形見として代々伝えられたものだ。女神の加護は剣の宝玉の中に蓄積し、彼らの血も涙も魂すらも吸っている。コハクの剣技は、火炎を操り結界を使うものだ。神通力を基本とした巫力に頼っており、となると巫力が足りない。磨き上げた聖剣は刀身が長くて、女神に擁かれた状態からは抜けないのだ。左手を後ろ手にした状態で、鞘を押さえた。抜刀した後の戦術を脳裏で組み立てる。

すると

『コハク。この方々に剣を向けてはなりません』

抜刀しようとしていた右手首を、背後からそつと女神に抑え込まれた。細い手首を握られたまま、女神は横抱きにしていたコハクを優しく床に降ろす。そして、コハクの両肩に手を添え後ろを振り返らせた。そこは見知らぬ新しい神殿であつて、純白の白衣を着た二人の青年と、桃色の装束に着飾った一人の女性がコハクを囲んでいた。全員、人ならざる者だ分かる。

女神は彼らに脅されているのだろうか。

立ちすくんでいても油断せず、神経を尖らせていると。

『この子はわたしの巫女の、コハクと申します。コハク、この方々はお前を助けてくださったのです。現在わたしたちは赤の神の世界にいます、ここは異世界です。したがって、この世界の主神はこちらにあらせられる赤の神様です。失礼があつてはいけませんよ』

「えっ……」

『ようこそ、コハクさんですね。白棕神とゆつくり滞在して帰ってくださいね』

”この世界”の主だという白衣の青年は、女神とは異なり赤い色彩を持つていた。コハクは半信半疑で、女神を振り返り、また向き直つておすおすと黙礼をする。赤い神に頭を垂れたのは、女神が背中をそつと押して礼をするよう促したからだ。しかしコハクは、異教の神に頭を下げるということは信仰を汚されているような気がした。女神が赤い神に頭を下げているのも、気に入らなかつた。

「失礼いたしました、助けていただいて感謝いたします赤の神様。めがみさま、ここにはいられません、帰りましょう」

コハクは心細くなつて、礼もそこそこに女神に帰ろうと促す。

『あつはは、つつても次、帰りのゲートが開くのはしばらく後だぜ。』

君かわい〜ね、そういうツンデレで従順なところ。ま、俺のスオウちゃんも素直でかわい〜けどね！ 会うたびに刺されっけど！』

彼の隣の青髪の青年も、にやにやと笑っている。この類の白衣を着ることができるのは神だけなので、彼も神なのであるうか。コハクからすれば軽々しくとてもそうは見えないが、確かに神通力らしきものを纏っている。白衣の構造、帯の装飾を見るに、白棕や赤い神より華美なものを身に着けている。白棕より格上の神かもしれない。

『コハクちゃんっていうんだー！ ピンク髪萌え〜！ ねえねえ赤井さん、この子キララと会わせちゃおうよ、スオウ一族同士絶対面白いことになるよ！』

『面白いか面白くないかで判断するのやめてくださいよ……血の気の多いキララさんが挑みかかってくるかもしれないよ』

赤い神が桃色の衣装を着た女性に苦言を呈しているらしかった。しかしコハクは聞き逃さなかった。

「スオウ……一族？ スオウ一族の末裔は私だけですっ！」

私が正統な継承者なのだ、もしスオウの名を名乗っている者がいるというのなら、どちらが本物のスオウかをその剣に問わなくてはならない。と、コハクは精いっぱい強がってみせる。

しん、と神殿の内部は静まり返った。すると背後から、白棕の穏やかな声が聞こえてくる。

『この世界にはこの世界の、スオウの者がいるのですよ。張り合う必要はありません、お前はお前のままでよいのですよ』

「ほ、ほえ？」

コハクのA・I・Iの情報処理能力が限界を超えたようだった。さしもの応用型A・I・Iも、異世界という概念は理解できないのだ。

逆に言えば、蘇芳教授が”異世界”に思いを巡らせることのないよう、制御を加えていると言える。それはコハクにとって、精神的な

安定を得るために必要だったのかもしれない。

『でもせっかくなので、あとでキララさんに会ってみますか？ キララさんも、友達がいた方がいいと思うんです』

何かを思いついたように赤い神が誘った。

『ええ、それはぜひ。一緒に会いに行きましょうね、コハク。お前にも同年代の友が必要でしょう』

「え、ええっ?! で、でもめがみさまがそう仰られるのなら……」
トントン拍子で話が決まってしまうと、コハクは戸惑いで桃色の眉毛を八の字にし、白棕の顔色を窺ったりしている。コハクは思った、この世界はとても居心地が悪い。早く元の世界に、白棕が唯一神たるあの世界に帰りたい。

『あ、そういえばロイさんとメグさん、外に出てもらったままでした。呼んできますね。コハクさんのことも紹介しましょう』

ロイ……!?! 暴君ロイ!? その名を聞いてコハクは総毛立ちた。

白の女神に凶刃を向け、その存在を消えぬ傷として刻み付けた忌まわしき不老の暴君。女神はロイとの死闘の後、完膚なきまでに傷つけられ、十年も意識を失っていたのだ。あの暴君がいる世界なのか…… すぐ扉を隔てた場所に、暴君ロイがいるのか!? コハクの心はざわざわと揺れた。神をも脅かしそのやんごとなき神血を流させたという、伝説に聞く暴君の名。この場にいる三柱は神通力が枯れている、きつと束になっても勝てないだろう。赤い神は”神殺し”を成そうとした暴君の存在を知らないのか、コハクは女神を仰ぎ、絞り出すような声で問うた。

「めがみさま、ロイというのはあの……暴君の。名前の同じ違うロイなのでしょうか」

コハクが恐怖を張り付かせた表情をしているのを見た赤い神が

「会ってみればわかりますよ。あなたの世界のロイとは違う青年です」

彼はコハクにそう語りかけ、コハクの言葉も待たぬうちにゆっくりと大門の扉を開いた。

神殿の中庭の果実のなる木の下、神殿を締め出されたロイは物思いにふけていた。

この先は穢れなき聖域。神殿に坐すは三柱の神々。

真が、善が、慈愛が彼らの中には凝縮されている。彼らは真理の結晶のような存在だ。

神の庭、その湖畔で水音を聞きながら、澄み切った青い空を見上げる。地上に這うように生きて、人は憧れを込めて天を仰ぐのだから。

抜けるような青空から視線を下ろしてゆくと、豊かな水を湛えた穏やかで広大な景色が心を和ませる。その遠景には、カルーア湖の向こうに霞む未知の連峰が見える。

世界はきつと、途方もなく広い。

近くでメグが、三柱の神々に捧げるために彼女が最も大切に育ててきた花を惜しげもなくモンジャの自分の畑から摘んできた、それらを器用に編んで、色とりどりの美しい花輪をつくっていた。メグは、三柱がここを気に入ってずっといて住まってくれたらいいな、と言っている。その願いの為の、ささやかな貢物なのだろう。捧げ

てもすぐに朽ちるといふのに。

メグはふとロイに視線を向けると、と指先を左右にふって、大丈夫？ と微笑みかけた。自分も人一倍不安なくせに、人のことをばかり心配する。メグはそんな性格だ。ロイも微笑んで頷き、腕組みをして神の庭の、神樹に背を預ける。この神樹は、モンジャの地にあつたものを、赤い神が神殿に引越したときにロイが持つて行つてくださいと願つたのだ。

世界が広くなつて、モンジャの地がその一部でしかなくなつても、はじまりの地に住まう民を忘れないでいてほしかったから。それに、モンジャではどれだけ気を付けていても偶に火事が起こる。燃えてなくならないように。

これはその昔、メグと、ロイと彼の三人で植えたもの。赤い神が祝福をしたためか、同種の樹より生育するのが早く、9年というごく短期間で大樹になつてゐる。冬でも枯れず青々と茂る、モンジャの民が神と共に生きる証だつた。子供の頃から木陰となり、雨宿りをして、モンジャの民が集まり、赤い神がその木の下でいろいろな話をしてくれた。

ロイは時々、赤い神がいないときも、朝となく夜となくここに来て大樹に背中を預け、散らかつた考えとざわつく心をまとめる。そして未来に思いを馳せる。メグもこの場所を気に入つてゐた。

メグによつて雑草はきれいに抜かれ、枝振りも美しく整えられて、人々が集いやすいようにされている。赤い神が木陰で休んでいる姿も、よく見かけた。ここは安らぎの場所だつた。

ロイは切に希^{しいねが}う。

彼ら三柱の神々が所有しているものを、いつかこの身に欠片ほどでも宿せるようになりたい。この先であらゆる知を学び、知識を統御し精神を高めて。高め続けて彼らの精神に近づいてゆきたいと。

その頂きに立ったとき、世界はどのような眺めだろう。
神の視点とは、どのようなものだろうか。

万物を構成するものに宿る、真理の世界を見ねばならぬ。そこにあつて、完璧に美しくおさまっている世界と、その中に過不足なく位置づけられた人々が世界に在る意味を。

永遠の命を持つ神々に比べると、与えられた時間は悲しいまでに短い。一生は学ぶには短すぎるし、行動するにも、何を選択すべきか悩まねばならぬほど限られる。寡い時間すくなを生き、老いぼれて、必死になつて獲たものはやがて失われ、命果てることを受け入れなくてはならない。

まだ感覚と精神が澄明でいるうちに、なさねばならないことがある。

今日よりは明日、明日よりはと、一步一步と彼らに近づきたいのだ。

何も分からないまま、神々の意図を知らぬまま命果てるのは絶対に嫌だ。

彼は強くそう思っていた。

先ほど、モンジャの集落から赤い神の神殿に移動する前に、メグがアイを家に戻しに行くついでに搜索の終了を集落の民たちに伝えるというので、彼は蒼雲と二人になったのだ。ロイは待ち時間で、どうしても知りたかつたことを青い神に尋ねてみた。ダメでもともと、だが蒼い神ならば教えてくれるかもしれないという期待も、どこかにはあつた。

人は何故、生き、そして何故死ぬのだろうか。あなたがたはどうして人間をそのように創り給うたのか、と。過去、赤い神にも同じことを尋ねたが、彼は答えてくれなかつたのだ。

”それは自ら見出すものだよ”

蒼雲はロイを憐れんだような表情で、不器用に微笑んだ。赤い神と蒼い神の持つ答えは違つて、それと同じように、人間には一人一人違う答えがあるのだという。随分簡単に言ってくれる、とロイは神々の全能を羨んだ。

”君には他の人間より多く贈り物が与えられ、だからそれだけ背負う荷も多い”

贈り物とは何でしょうかとロイが尋ねると、「時間」だ、と蒼雲は答えた。

ロイは真理に至るまでの時間と解釈した。真理に辿りつくまでの時間は長いということか、と問うと、君が思っている以上に長いだろうよと蒼雲は頷いた。それほどまで長い時間がかかるのなら、たどり着く前に命尽き果ててしまいかもしれない、とロイは覚悟しなければならなかった。

”だから君は色々なことを人の何倍も思い悩む。君に与えられたものは大きな翼であるが、受け止める精神がなければ冷たく重い枷ではない”

いつも思っていた。ロイをはじめ、はじまりの人々が生きた記憶は赤い神の記憶の中に、その証としての知識は後世の人々の裡に、いつまで焼き付いていられるだろうか。

どれだけ「何か」が残つて欲しいと願つたところで、赤い神の創り上げるこの世界が完成する時、そこに何が残っているだろうか。存在のかけらはあるか？そして赤い神ははじまりの人々を覚えていてくれるだろうか。

百年後はどうだ。二百年後は……？ 自信などない、残るものがあつたとしてもそれは僅かだ。知識はすぐれた未知のものへと更新され、古いものは簡単に捨て去られ、子孫との血のつながりは薄くなり、生きたという過去の事実だけが赤い神の記憶の中にあるというのでは、……なんと悲しいだろう。

彼は数えきれない人々と出会い、祝福し、全ての人々に慈愛を与えるだろう。

彼は出会い別れた人々を忘れないだろうが、はじまりの人々にも、最後の人々にも平等に接するだろう。

” 未来に思いを馳せて悩むことのできる人間は、未来を変えられる人間はほんの一握りなんだ。それはとても大きな贈り物なんだよ”

ならば後世の人々のために、この世界を少しでも住みよい場所にして去ろう。

そして少しでも学び神々に近づき、生きて死ぬ意味を知ることができたら、もうそのときは満たされて幸福のうちに死ぬのだとロイは思った。

はじまりの人々の屍を礎として、後の世の人々は強く逞しい世界を創るだろう。

忘れられても、あとかたもなくなっても、命が燃え尽きるまでに自身の持てる力で至上の結果を残して去るだけだ。

自分にできることは、自分に与えられた使命はそれだけだ。それで十分だ。

しかしこの、胸の張り裂けそうな切なさは何だろう。

完成した世界は、どのように使われるのだろう。

だれのために？ どのように。

ロイは神槍を杖のようについて立ち上がった。そして大樹に身を寄せた。この神樹は、赤い神と共に何千年も生きるのだ。

新しい芽が膨らんでいる。春になれば、一斉に白い可憐な花を咲かせるだろう。

「今年は、かみさまがいらっしやるからきれいな白い花が咲くね」

ロイが両手を廻して神樹にしがみついているのに気付いたメグが、ロイを気遣うようにそう言った。

「そうだな……」

自らが死ぬときになったら、この樹の下で死にたいと思った。肉体は滅びても、還元される物質はこの樹に宿り、根を育み、魂はこの樹に宿り、終わりの人々と赤い神のために、白く美しい花を咲かせるだろうか。

「来年も、再来年も。ずっと咲くだろうな」

ロイは木漏れ日に目を細めた。眩しいのは、陽光ではない。

「……私たちは、あと何回見れるのかな」

メグは寂しそうな笑顔をロイに向ける。

「俺たちの運命は、既に神様が定めておられるんだよ。完全なる彼の計画のほんの些細な一部として。教えてはくださらないが、きつと平等に……」

「ロイはいつも未来のことを考えているね。私は怖い。とても怖い……」

メグは人が増えて、世界も広くなって。赤い神と民の距離がどんどん離れていつているような気がしていた。そしてメグと赤い神と

の絆も希薄になってゆくのだろうか。赤い神が人々に与えられる幸せの量は決まっただけで、それを一部の民が独り占めにしてはいけないのだ。皆が飢えてしまわないように、人数が増えたら小さく分け合わなければならぬ。皆を幸せに、誰も苦しめないように、それが彼の思召しだ。

「かえりたいな。私たちがまだ、子供だった頃……あかいかみさまが、私たちのすぐそばにいてくださった頃に。夢なんて見なかった頃に」

ロイだって、過去に未練がないというわけではない。しかし……進まなくてはならない、赤い神と共に歩まなければならぬのだ。さもなければ、遅れるものは置いて行かれる。

……一方、メグは寂しく思う。

昨日、何故あんな悪い夢を見てしまったのだろうか……。

メグは夢の中で、桔平という名の青年と恋に落ちた。異国の衣を着た青年と、毛布を分かち合っただけでメグと彼は音楽を聴きながら星を眺めていた。その世界の大地は球体で、空に浮かぶ星のひとつなのだ。モンジャの草原とよく似た草原に、二人は寝そべっていた。夜露が頬に冷たかった。

彼は容姿こそ赤い神と似ても似つかなかったが、言葉の端々に、赤い神と似た気配を漂わせていた。そして、赤い神と同じ星の話をして、宇宙の話と未来の話をした。かみさまが人間だったら、こんな感じだろうか。メグは確証もないのにそう思ってしまった。

夜が明けるまで、二人は恋人として口づけをかわした。メグは今朝目覚めて、あんないけない夢を見てしまったのは、神様と心が離れてゆく不安と神様を繋ぎ止めようとした願望なのだろうかと自らを責めた。

神様を恋愛対象として見てはならないと、この世界に生きる民の誰もが分かっている。そしてメグは赤い神に「そばにいられるだけでいい」と願ったのだ。それで十分だ。一緒にいられたらそれでいい。

もう、夢なんて見たくない。先ほど蒼雲神にそう言ってしまったのは、赤い神に対する背徳心からだったのかもしれない。神様を人のようにみなして、恋愛対象としてしまうなんて。……それはとても悪いことだ。もう、あんな夢を見てはいけない。

メグは神殿の庭の砂地に指を滑らせ、異界の文字列を書いた。

この記憶は埋めて土に還してしまおう。そんな思いで、メグはその上からきれいな白い砂を、少しずつぱらぱらと撒いた。

「もう、夢なんて見ませんように……」

三本の花輪をぎゅっと握りしめて小さく呟いたメグの音が、ロイの耳には聞こえていた。

ロイとメグがそれぞれの思いを懐いていたとき……

『メグさん、ロイさん！ お待たせしました、話が終わりましたので中にどうぞ』

大門を開けて、赤い神が神殿の内部に二人を招き入れた。我知らず、メグは駆けだして彼の腰のあたりにきゅっとしがみ付いた。赤い神の顔を直視することができなかった。

『え？』

メグがひつしと彼に抱きついて、身じろぎひとつしないのだった。赤い神は困惑して

『すみません、そ、そんなにお待たせしてしまいましたか？ いやはやそれは申し訳ありませんでした』

首をすくめながら、埋め合わせをするように、おずおずとメグに祝福してみる赤井神。

「あかいかみさま、少しこうしていいですか？」

私たちがいつまでも離れないように。メグは祈った。

『私はどこにも行きませんよ？』

「本当ですか？」

『……えと、その、他に行くあてもありませんし……ずっとあなたがたと共にいますよ』

祝福を終えると、緋色の頭をぼりぼりとかいて『誓います』、と胸に手を置いてそう唱えた。

それがさも当たり前のごとくのように。メグはそれを聞いて微笑むと、少し背伸びをして赤い花を多めに編んだ花輪を赤い神の首に提げた。この花輪も、赤い神の神気に灼かれて数時間で朽ちてしまうだろう。人間が彼に捧げることのできる物はなにもない、真心以外には何もない。花輪は、青い神、白い女神のものもそれぞれ準備していた。

メグをその胸に抱きしめ、彼は些細な幸せを感じながら、赤い神はふと砂地に目を凝らした。そして彼は思いもよらぬ情報を目にして、あらんかぎり目を見開いた。

この落書きはいつからあったのだろう。誰が書いたのだろう。部分部分、上からかけられた砂で隠されているが、彼の神眼で欠けた部分を補完することは容易い。

彼はその名を読んだ。一字ずつ。一字ずつ、視線を左から右へ。

かみさか
神坂 桔平

。

彼がまだ、アガルタの神ではなく人間だった頃の名がそこにあった。

久々に見た、紛れもない自分の真名。

もし、この文字を書いたのが”彼女”であるのなら。彼のその文字が意味するものの答えの全てが、この腕の中の存在であると気付いた。

気付いてしまったのだ。

「あつてはならないことが、起こってしまいましたね……」

伊藤をはじめとする27管区スタッフは、モニタに表示された最新の情報を見て凍り付いていた。27管区再生速は、かつてないほどにスローペースに抑えられていた。白棕神、蒼雲神がログインしているからだ。二神を受け入れた状態で27管区の状態が健全であるかどうか、常にアクセスメントを行いながらの運営であった。だからそれが幸いしたのかもしれない。

彼らは赤井の精神状態を根本から揺るがすであろう変化に気付いてしまった。

赤井の業績が明らかになったところから、伊藤は特別に、そして極秘裏に赤井の”感情の変化”を解析し可視化、データ化するプログラムを実装していた。赤井は知らなかったかもしれないが、構築士として任じられたときに、赤井の感情を分析するプログラムを付与するとの同意書はとられている。データ採取に何ら違法性はない。

だから今、赤井の思考は27管区スタッフの全員ではないにしろ、構築士補佐官である数名には筒抜けなのである。

まさか……まさか赤井とメグが、現世において生き別れた恋人同士であったなど。

小説や映画の中での出来事のような、奇蹟の出会いを果たしていたのだと。

その瞬間、彼らは知ってしまったのだ。

「どうでしょうか、伊藤さん」

「へたな情けをかけてはいけませんよ」

どうしようかと訊くが、彼らは暗黙のうちに”そうしろ”と言っている。アガルタの神は人間ではないのだ。人間的感情を挟んではならない。特定個人を愛してはならない、俗事に心を揺るがせてはならない、特別な存在でなければならぬ。構築時間を巻き戻し、赤井の記憶からその情報を消し去る。なかったことにしてしまう……それがどう考えても最善なのだ。

彼にはまだ、アガルタの神でいてもらわなければならない。

世界の希望の為に、そしてアガルタの人々の為に。

赤井はメグがそうであると知ったらどうするだろう、メグの現実世界帰還と同時に、構築士であることを投げ出して辞職してしまうかもしれない。そうでなかったとしても、心ここにあらず、という状況になるかもしれない。メグを偏愛してしまうかもしれない。それはアガルタの神の博愛の精神に反する。

かくなるうえは、メグを早急に、帰還はまだ先のこととしても、赤井から引き離さなければならない。既に回復基調にあり、現実世

界の全てを思い出そうとしているメグの記憶をいじることができないのだ。彼女は彼女の名を思い出さだろう、家族を思い出さだろう。そして、恋人だった青年の顔も、名前も思い出さだろう。

それは避けられないことだ。

ならばどうする。メグを他管区へ飛ばしてしまうか。

伊藤 嘉秋、アガルタ27管区プロジェクトマネージャーは深刻な決断に迫られていた。

第5章 第8話 二者択一の分岐点

「ストップしましょう、伊藤さん」

「……致し方ありません。システムバックアップポイントを27管区構築時間五分前に設定。二十七管区構築時間を一時停止します」

構築士補佐官たち数名が伊藤の顔を見詰める中、27管区プロジエクトマネージャー、伊藤 嘉秋は手を前に突くように、目の前に浮遊する赤いホログラフの緊急停止ボードのうち最大の長方形を弾いた。オペレーションルームの天井のモニタに一時停止という蛍光フロントが、けばけばしく点灯をする。

仮想時間の一時停止。

「ストップシーケンスを開始します」

「ログイン中の全構築士の疑似脳を現実世界に帰還させてください」

伊藤が号令を発すると、仮想世界のみならず双界連結ユニットに文字通り潜水^{ダイブ}中の構築士の疑似脳、およびネットワークに直結している患者達の疑似脳をシグナル途絶から保護し現実世界側に戻す為に、27管区専属の工学技官たちが慌ただしくなる。急に仮想世界を停止してしまうと生脳と疑似脳の連絡が遮断され、生脳に損傷が起こりかねない。このため、厚労省への電力供給、予備電源は幾重にもルートが確保されている。

「え、ストップですか！？ そ、そんな急に」

「大変だ、早く白棕本体側の手配をしないと」

29管区蒼雲の補佐官である川添 瑞希と、28管区白棕の補佐官である鴻池 弘人は、各自二十八、二十九管区のオペレーションルームに走って帰っていった。ちなみに二十七、二十九管区は同フ

ロアで、隣接したお隣さん管区同士だ。

「全構築士の疑似脳の保護を確認しました」

「蒼雲、白棕神の疑似脳の保護も完了しました」

しかし川添、鴻池両名のベテラン管区補佐官は迅速な対応をしてみせた。

「ストップシーケンス、問題なく受理されました。管区時間、全区画完全停止」

タイムキーパーが宣言する。

二十七管区時間、赤井たちの時間は仮想世界の誰に知られることもなく、現実世界側から一方的に断絶される。この半年間、世界最先端の領域に踏み込んだ二十七管区では何度となく行われてきた処置だ。復元ポイントを五分前と定めたのは、赤井が至宙儀の駆動に成功しコハクが無事に戻り、赤井はまだ神殿から出てきていないというタイミングだった。

特殊水槽中でダイヴユニットに接続し拘束されている二十七管区在籍の構築士たちは、二十分後には疑似脳との接続を解かれ現実世界側に意識が戻り、特殊溶液から上がってシャワールームに入るだろう。もつとも、潜水式ダイヴをしている構築士ばかりではない。二十七管区内への簡易アクセスはヘッドギアでも可能なのだが、潜水式ほど疑似脳のリンクが緻密ではないので、アトモスフィアや構築技能は使用できず、戦闘行為なども反応速度に齟齬があり不自由をきたす。

また、生理的な制約もあり二時間程度の連続アクセスが限度である。その点、潜水式では長時間のダイヴが可能で（連続潜水最長記録は25年。千年王国にて）、こちらが日本アガルタの正規のログイン方法だった。

一般構築士たちは毎日のように潜水し、定時に帰る。

その例外、赤井、白掠、蒼雲の甲種一級構築士を除いて。

伊藤は蘇芳教授に指摘されて急遽機密エリアへ隔離したばかりの青年の様子を、誰にも任せず自ら確認する。赤井構築士……神坂かみさか桔平きっぺいの肉体は一台14億円の大型の生体維持兼・双界連結用水槽に、最高に行き届いた管理のもとに格納されていた。聳え立つ濃い柿色の液体に満たされた水槽中に全身を浸し、ダイヴ用スーツは着用しておらず全裸状態。彼の精神は二十七管区を支える基盤であり、管区の全機能が接続・集約され、彼に仮想世界が寄生している。主神の精神の健全性が損なわれると、管区が壊滅すると言われるのはこのためだ。

現状、フォレスター教授の開発した運営方式では、一人の若者を神として犠牲にしなければ、”発展し、進化し続ける、生きた”アガルタ世界を維持することができない。この方式を非人道的だとして、また、莫大な人件費を削減するため”生贄の神”なしでのアガルタ構築を目標とした研究開発が行われているが、まだ実現には至っていないかった。

よって、神坂の肉体に装着されるデバイスは一般構築士の数十倍は多く、頭部に装着されたフルフェイスの双方向デバイスは勿論のこと、脊椎には多数のチューブが挿入され、筋繊維保護用の微小電極針が無数に刺され一見痛々しい、とても親族や人権団体には見せられないような姿となってはいるが、意識は疑似脳の中にあり、肉体は現実に活動しているより遥かに健康に眠っている。かつては伊藤も同じ状態になっていたと思うと、他人事ではない。だからその分、彼に起こった異常を発見しやすい。

喉の奥に差し込まれた太い栄養補給用コードからコポ、と小さな泡がこぼれる。表情は安らかで、ストップシーケンスに問題はなさそうだった。疑似脳内にある赤井の意識は一般構築士と違って肉体

に戻されることはないので、赤井の疑似脳は停止した二十七管区世界から待機空間的な仮想空間に移され、管区再稼働までそこで眠りながら稼働を待つこととなる。

赤井の精神状態および肉体の状態を保全したまま、めいっばい十年間、構築時間はともかく定年までのびのびと仕事をしてもらうこと。赤井が働きやすい環境を提供すること。無事に現実世界に帰還し、人間に戻ってきてもらう。それが27管区スタッフ達の共通の願いだ。

さて……これからどうすべきか。時間を戻すも進めるも難しい。とはいえここはひとえに、伊藤の判断にかかっている。管区時間が停止されたので、アガルタ専属のプログラマたちはやむなくオフラインでのメンテナンス作業に入った。何故管区時間が停止されたのか、詮索は一切しない。

十数名の構築士補佐官だけが、依然として伊藤のデスクを囲むように集まっている。白棕、蒼雲の補佐官たちもおそろおそろオペレーションルームに戻り、遠慮がちに伊藤を取り囲んだ。

「どう考えても、この先は赤井さんの個人情報にかかわることです。私たちが勝手に踏み込んでよい問題ではありません。ですが……彼のエントリ時に起きた謎のバグにより絶妙に保たれている彼の心のバランスが崩れてしまうと、それは取り返しのつかない損失となる」
伊藤は赤井のプライベートに踏み込んでよいものか、躊躇している。

「赤井さんの、生き別れた元彼女ってか……。何でえ、こうなってしまうんだ？」

黒澤が苦々しい表情で頭をばりばりと掻く。数奇な巡り合わせ、

という言葉でもなお不自然。最初から何かよからぬ陰謀に巻き込まれていたのではないか、そんな疑いも生じてくる。西園 沙織は何か赤井とメグにまつわる重大な秘密を知っていて、自殺と偽装されてアガルタに入れぬような方法で殺されたのでは……。

伊藤も黒澤と同じことを考えていただろうか、いちだんと表情が険しくなる。赤井を二十七管区構築士として採用したのは伊藤だ。が、メグを患者としてこの管区に引っ張ってきたのは……厚労省内の別の部署の人間だ。彼らが一枚噛んでいるのではないか。

「患者様であるメグの記憶に手を加えることは言語道断。しかし、時間を戻し赤井さんの記憶を消したとしてもメグの記憶が徐々に完全になってくるのは避けられないし、赤井さんがメグの記憶を看破することも将来的に避けられない見通しです」

伊藤は手詰まり感を拭えない。

一人のみならず四十六名の患者を回復へと導いてきた、生き神のような青年。赤井神の怒涛の快進撃は、思わぬところで暗礁に乗り上げてしまうのだろうか。期待が大きすぎただけに、スタッフからは早くも落胆の声がちらほら。しかし、彼の足元を掬ったのが色恋沙汰だとは……所詮は彼も人間なのだ、と誰かが皮肉っぽく口にする。

「赤井さんの記憶を巻き戻したうえ、赤井さんにはメグを現実世界に戻すのでと言って他管区に移動させ引き離すか、本当に現実世界にかえってもらうしかありませんか……」

伊藤はメグと赤井を同管区に収容しておくことの限界を感じている。メグと赤井、どちらが大事かといえば同等に大事である、しかし赤井の精神系が不安定化し再起不能となってしまうことによる医学的損失は甚大であった。

メグには既に手ばなしでも回復基調にある。現在のタイミングで

アガルタ年齢十八歳のメグを現実世界の二十二歳の体に戻したところで、精神年齢にマイナス四歳ばかりの差が生じるだけだ。その程度なら現実世界でのリハビリで十分にリカバリしてゆけるものだろう。

「でもよう、赤井さんの記憶を消しちゃったって、メグとの絆は強えだろ。メグを赤井さんから引っぺがして、仕事に影響が出るんじゃないのかい？」

黒澤の危惧はもつともだった。

「彼にはメグを現実世界に戻すということは既に伝えてありますし、赤井さんは覚悟している筈です。それが少しばかり早まるだけですよ。」

議論は大いに紛糾している。失敗できないプロジェクトであるだけに、意見も真つ二つどころか、喧々諤々、補佐官同士で議論が飛び交う。誰もが討論に白熱し背後をすら気にかけていなかったそのとき、27管区オペレーションルーム中央部にグレーのスーツの大柄な青年がゆったりとした歩調で歩み寄ってきた。短いながらに整えられた鮮やかなブロンドが目を引く。

「Why don't you ask him about the view of that？」

(どうしたいか彼に訊いてはどうかね)

彼は少しフランス訛りのある英語を話す白人男性。名をジェレミー・シャンクスという。

訛っているのは、彼がケベック人(フランス系カナダ人)だからだ。日本国第二公用語は、2090年に世界標準言語として制定された新国際標準言語であるが、これを好まず、母国語以外に第二言語として英語を話す人々も多い。日本アガルタには多数の外国人構築士、プログラマが在籍しているため、オペレーションルーム内に

は三か国語が飛び交う。スタッフは無国籍状態だが、27管区の外
国人構築士はシャンクスだけだった。

シャンクスは二十七管区唯一の使徒エトワールとして重用されて
おり、妻の長女出産に伴い長期休暇を取得していた。それを返上し
ての出勤である。

伊藤は彼の姿を見て、ほっとしたように顔をあげる。

いつ見てもクールな青年だ。シャンクスは以前千年王国で東方の
三賢者（イエスの誕生に際して現れた）が一人、メルキオール役を
務め、伊藤が頼み込んで引き抜いてきたベテランの構築士だった。
伊藤より年下ではあれど有能で博識、キャリアも十分、おまけに伊
達男ときている。彼はグレーのスーツにロイヤルクレストの赤いタ
イなどつけていた。赤井にはナルシストだと揶揄されていても、伊
藤は彼をロマンチストだと思う。

その意味でも、他の意味でも、伊藤はこの構築士を高く評価して
いる。第一区画構築後、彼が27管区に残留してくれたことを伊藤
は心から喜ばしく思っている。

「なんでえ、エトワールじゃねえかい。戻ってきやがったのかい」
エトワールの補佐官の黒澤が口元にニヒルな笑いを浮かべる。

「Welcome back, Etowale. Congrat
ulations on your newborn baby.
（おかえりなさい、エトワール。出産おめでとう）」

伊藤はまず、彼の待望の第一子、”未来望”^{みらいの}の誕生を祝う。当て
字のような大層な名前だが、語感が悪くない。

「I appreciate your good wishes.
Anyway, all you have already
seen that the past methodologi

es, the past approaches, have
not worked. Don't be afraid to
defer all decisions to him.

（おかげさまで。ともかく、これまでの方法、アプローチでは上手くいかなかったらどう？　なら、彼に全ての決断を委ねてはどうだ）

その後のシャンクスの提案は、伊藤の作成したシステム修復ポイントを起点として赤井に対処の判断を委ねようというものだった。メグの正体を知ったまま構築を続けると言えばそれを尊重し、構築時間を継続する、忘れたいと言えば修復ポイントに戻り記憶を消去する。

記憶を保持すると選択した場合、構築時間が進むにつれメグの正体を知ったことによる赤井の精神状態に悪影響が出ていると客観的に判断されれば、赤井が拒否しても強制的に修復ポイントに戻る。特に変化がないようであれば続行する。この案を採用した場合、二十七管区が負うリスクは皆無だといえた。

「なるほど。それが最善のように思えます」

伊藤も同意した。過去に戻る場合、何度だって歴史はやり直せるのだ。現実世界では決してやり直しができないこと、どんな挑戦も可能だ。杓子定規に仮想時間内千年とさえ定めなければ、コンサバティブになる必要はなかった。

赤井のことが心配だったから戻ってきたんじゃないのかい、と誰かがふざけてシャンクスに尋ねると。

「No way. My wife and daughter
went home to see my parents in
low.

（まさか。妻と娘が実家に里帰りしてしまったからね）」

サボっている暇があったら稼いでこいと妻に言われて、と体裁悪そうに肩をすくめる。シャンクスの家はなかなかの恐妻家なのだ。緊迫していた場がほっこりと和み、くすくすと小さな笑いが起こる。

「Well, Just leave it to me .

(まあ、この件はまかせとくれ)」

「Are you going to dive into cyberspace after this?

(これからダイヴするのですか?)」

ダイヴするついでということで、赤井への言づてを頼む伊藤。I型バイオクローン作成の希望の有無について、詳細はボードのメッセージボックスをチエックするようにと。

I型バイオクローンという物々しい単語を聞いて片眉を吊り上げるシャンクス。心なしか、碧色の眼光が鋭くなったようにも見える。彼はバイオクローンまで準備しなければならない、裏の事情を詮索する。それは、超神具「至宙儀」を実装し実質アガルタ最重要神として認識された赤井の身に、新たな脅威が降りかかっているということに他ならない。

「No kidding? You know Type I bio-clone costs almost 500 million Yen per one unit .

(本気で言っているのか? I型バイオクローンは一体あたり五億円はかかるわけだが)」

予算の問題だつてある。厚労省の予算も決して余裕があるわけではないのだ。何しろシステム管理費とサーバー、人件費だけでも馬鹿にならない。

「That's entirely correct. Be repaired and have no regrets.

(その通りですよ。備えあれば何とやらです)」

伊藤は公の場では事情を話したがない。

「I see...

(ふーん)」

彼は口を尖らせ、赤のタイを緩めながら、構築士のダイヴスペースへと向かう。ダイヴ用ウェットスーツの赤い蛍光のラインが、ぱりつとしたシャツの下から透けて見えた。ログイン用スーツを着てくるあたり、やる気は十分と見える。

「では、頼みましたよエトワール」

伊藤の指示で、27管区構築時間のリスタートシーケンスが開始される。停止していた時間は十五分少々であったため、構築士たちは水槽から出ることなくそのまま疑似脳に接続しなおす。

「サーバー稼働率、エリア再稼働率……: 100%、カウントします。3、2、1……復旧完了しました」

「ステータス全正常。環境パラメータにも異常なし。構築士の管区内接続を開始してください」

再びあわただしくなるオペレーションルーム。一時停止と再稼働は、下手をするとシステムを吹っ飛ばしてしまう危険性があるため、慎重にも慎重を期さなければならない。

仮想世界の時は、再び歴史を刻み始めた。

「甲種二級構築士、CAN214、^{エトワール}Ettoile」がサイバースペースにエントリします」

「疑似脳コードCAN214、エントリルートとポートを確保。モ

ニタリングステータス全表示」

「CAN214、構築士にエントリプラグを接続しました。心電図、体温、バイタル、及びホメオスタシス、酵素代謝に異常なし」

次々と読み上げられ、エントリのためのチェックポイントを通過する。

「接続を許可します。開始してください」

疑似脳接続開始数分後、仮想世界の空に（天）と描かれた転送ゲートが穿孔する。

そのゲートから光束が受肉し生まれ落ちた天使エトワールは、新しい緋色の翼をひとつ大きく羽ばたかせ快晴の空に層気楼を描いた。誰もが見惚れる、洗練されたエントリであった。

エトワールのエントリを見届けた後、伊藤は館内通信でアガルタの主任技官をデスクに呼んだ。とある大型機器の発注を行うためだ。黒いツナギを着た壮年の主任技官が、物品発注用モバイルを持ってやってきた。

「お待たせしてすみません、伊藤マネージャー。調達の件でしょうか」

「わざわざお呼びして申し訳ありません。X-01クラスのサーバーを一つ、見積もりのうえ手配してください」

主任技官はハトが豆鉄砲を食らったような顔をしている。アガルタ一管区分のデータが格納できる規模のサーバーである。正直、伊藤の独断で動かせる規模の設備ではないのだ。

「何故、その規模のサーバーを？ バックアップ用ならばもう少し小規模のものでも」

「管区新設を行います。予算は概算122億、私個人に寄せられた国際基金の外部予算を執行します。許可は大臣と円山長官に一週間前にとつています、ここに」

伊藤は技官に書類を見せる。

「しかし、空間開闢用の至宙儀は赤井神が所有しておりますし、構築士を今から募集するとしても……予算が不足しています。」

「一時的に、米国アガルタより相転星（相間転移星相装置：SCM - STAR）を拝借しました。空間開闢は可能です。人件費は必要ありません。」

神具の中でも特殊な性能を持つ超神具ちようしんぐと呼ばれるものは、新規にアガルタサーバを開始する、つまり宇宙開闢を可能とする性能が実装されている。日本アガルタにある超神具は生体神具である至宙儀のみであり、赤井に装備されているため今は使えない。莫大な神通力を食らい尽くす米国アガルタの超神具・相転星を扱える伊藤は、米国アガルタ上層部に頼み込んで、短期間借り受けていた。相転星は至宙儀と対をなす、難易度の高い超神具である。

「伊藤さん、何を考えておられるんです？」

「帰還する患者様が、すみやかに社会復帰を果たすための現実世界げんじつせかい馴化管区じゅんかかんくを、新設しようと考えています。私が責任を持ってやります。これは私の個人的な思いつきですから、ボランティアですね。他の構築士のサポートはいりません。」

確信を持って、伊藤は一語一語噛みしめるように言い放つ。彼が、三度神みたたびを演じる。それを覚悟の上での発言だ。現実世界をそのまま仮想世界にコピーする場合には構築年数はさほどかからないが、やはりその世界を支える維持士、つまり生贄の神が一柱必要なのである。

「患者様の記憶をそちらに移動させるとなると、倫理委員会に通告なくては。」

GCP省令（臨床試験の実施の基準に関する省令）に基づく治験

審査委員会（IRB）＝ Institutional Review Board）にその是非を問い、承認される必要がある。しかし、伊藤は

「現実世界に出ていない患者様の記憶は、私たちがデータとしてお預かりしています。どのようなプログラムで社会復帰いただいても、それが人道的措置である限り法的には何ら問題はありませんが、倫理委員会にもそのように報告しています。そのプログラムも包括して、承認済みだということです。現実世界にぶっつけ本番で御帰還いただくのは無謀でしょう。その点、患者様が現実世界の環境に馴化できなければ安定していた頃の記憶にまでさかのぼって巻き戻しをかければ、患者様も安全ですし」

ついに、患者たちの帰還準備に突入したのか。そう思えば、管区スタッフ達は胸に迫るものがある。しかし、優れた指揮官であり指導者であった伊藤を、こんな形で失ってもよいのだろうか。伊藤が維持士となってしまうたら……二十七管区の指揮は誰が執るというのか。

「ああ、それは私が継続して仮想世界内部から指揮を執ります。大丈夫、私は仮想世界には慣れていきますから」

治療を終えた患者の為に仮想世界中に現実世界を創りだし、現実世界がどのような世界であったか、思い出してもらおうこと。患者の安全な現実世界帰還の為にワンクッション置く。

伊藤は自らの決意を確かめるように、大きく一つ頷いた。赤井を犠牲にし、彼に全てを負わせ自らが安全な場所でのうのうとしていくわけにはいかない、伊藤は焦燥感を憶えていた。

「管区責任者ですから。このくらいは、させてくださいよ」

*

実際そんなことはないんだろうけど、時間が長らく止まっていたような気がする。

この抱擁は、いつもの祝福以上の意味を持っていた。私は今、彼女と魂の部分で重ね合わさっているのかもしれない。現実世界にいた頃より彼女との距離は縮まっている。私はこの力を込めれば折れてしまいそうな、かよわくて愛おしい存在を全身全霊で抱きしめている。

私の推測が正しければ、彼女の真の名は東 あすま 愛実 まなみ。

私がかつて焦がれるほどに想っていた、以前付き合ってた、二年という時を共に過ごし、ある日別れも告げず失踪してしまった現実世界での元彼女。彼女がこんなに近くにいたなんて……奇蹟という以外に、私はあらわすべき言葉を知らない。

抱擁しながら、罪悪感を覚えつつもメグに看破を試み、彼女の記憶から得られる限りの手がかりを引っ張り出して繋ぎ合わせようとした。しかしそれはすぐに徒労に終わる。私には彼女の過去を見通す力は備わっていない、それでも彼女の記憶の表層には、北海道の大地から見上げる宇宙の風景があった。彼女は私の名と、そして北海道の空の色を憶えていた。彼女の隣には私がいた筈だ、それを憶えているだろうか。しかし彼女はもう、現実世界の夢なんて見たくない願っている。現実世界での私との記憶を捨てたがっている……この世界にずっといたい。それがメグの願いだ。

愛実 まなみ。どうして君は、こんなところにいるんだ……。

理由を話してはくれないか。

心の中で訊ねても、どうにもならない話だった。私は彼女に名乗

つてはならないし、名乗ったところで彼女が地に文字を書いたその相手だと信じてはくれないだろう。記憶が完全かどうかもわからない、そもそも憶えていかも定かではなかった。私が現実世界に戻る頃には、お互いに三十二歳。現実世界に帰還した彼女は、決して私と交わることのない彼女の人生を送ってゆくのだろう。

あるいは、私という神がいたことすら、ゆくゆくは忘れてしまう。すれ違ってしまったんだなあ……私は奥歯をぎゅっと噛みしめる。

もしかしたら、ここで再会できただけでも幸せだったかもしれない。

知らず、涙が頬を伝っていた。メグから死角になっていることをいいことに、私は白衣の裾でさりげなくそれを拭う。真正面にいたロイだけはもしかしたら私の情けない姿を見ていたかもしれない。

忘れてはならない。私は十年間を仮想世界で過ごす囚われの神だ。私は赤井で、そして彼女はメグだ。

メグとして接しなければならんだ、お互いのためにも。与えられた役割を全うしよう。

私が揺らいでだめになってしまったら、仮想世界が崩壊してしまう。沢山の人々の血と汗の滲むような努力、多くの願いの末に築き上げられたこの箱庭、この楽園。楽園に生きる私の民、安住する彼ら。そしてなにより彼女の為を思えば、無事に現実世界に送り届けなければ。それがどんなものであれ、彼女の人生を彼女の足で、力強く悔いなく歩んでもらわなければ。

彼女に何があったのかは知らない、しかし事故に遭って脳を損傷してしまったということだけは明白だ。彼女は今も生死の境をさまよっている。

「かみさま……」

私の気配が普段と違うことに、力加減の違いにメグは気づいたのかな。

「だいじょうぶですか？ 本当に、どこにも行きませんか？」

メグが泣きそうな声でそう訊くので、

「ずっと傍にいますよ、ずっと……」

先ほどと同じ言葉を繰り返した。震わせずに声を出すのが今は難しい。

私は彼女に嘘をついている。ずっとはられないんだ、メグ。私たちはずっと一緒にはいられない。すれ違ってゆくんだ、私と君の人生は。かつては同じ道を歩むものだと言っていたけれど。

その気持ちは、本物だったんだよ。

「赤井神、どうなされましたか？」

白さんが何か気付いたらしく声をかけてくれるけど、私は言葉に詰まって応じられない。何とも微妙な空気になっていると。

「あれは……エトワール先輩！ きゃー、翼カラーチェンジしてる！ 真っ赤〜！」

モフコ先輩が空を見上げておーいと手を振ってる。先輩、空気を読んではぐらかしてくれたのかな。私もつられてモフコ先輩の視線の先を見ると、極楽鳥のようなグラデーシヨンの混じった緋色の翼を背負ったエトワール先輩が流星のような軌跡を描き、ふわりふわりと舞い降りてきた。先輩、本当に久しぶり。

「やあ、神様にモフコくん。ロイ、メグ、ごきげんよう。そして蒼雲、白棕の二神、お初にお目にかかる。赤井神の使徒エトワールだ、よろしく」

「おー、エトワール先輩じゃない。噂は聞いてるよ〜」

蒼さんは先輩のことをよく知っているようだった。白さんもだ、

先輩はそれなりに有名な構築士らしい。

『お目にかかれて光栄です、エトワールさん。緋色の翼にかえられたのですね』

先輩と固く握手を交わす白さんと蒼さん。先輩は挨拶もそこそこに、つかつかと私の方に近づいてきた。

『神様に用件があるんだが、ちょっと借りてもいいか？ 五分とは待たせない』

『あーどうぞどうぞ』

蒼さんは興味なさそうにぺらぺらと手を振る。

『メグ、悪いけど少しお邪魔をするよ』

エトワール先輩は、私の腰のあたりにしがみついているメグを、背後から両肩に手を添えて優しく引きはがす。ジエントルメンですね先輩。すみません、私ぼーっとしてて気が利かず。

「はあーい……」

メグは仕方なしといったように私から離れる。私はメグロイに、白棕さんとコハクに自己紹介をして、皆で仲良くしててくださいね〜とわざと明るく告げ、トンと軽く地を蹴って先輩と共に空に舞う。私とエトワール先輩が人目を憚る話をするといえば、決まって空中だ。空中なら素民は誰も聴けないしね。

『お久しぶりです先輩、お待ちしてましたよ』

まずは先輩と適当に雑談。長女誕生おめでとうございますのだ、その赤い翼似合ってますねだの、どんな心境の変化なんですか、だの聞きつつ

『お子さんの写メ、ありがとうございました。いや〜、未来望みのちゃんすごくかわいかったですよ〜！』

私は何か疾しいものを隠すように、先輩のお子さんを誉めそやした。実際、超がつくほどかわいいんですけどね。写真見てびっくりしましたよ私。

あ、でも先輩、何かもどかしそうに片眉を吊り上げた。何そのリアクション。まさかお察し?!

私は緊張で身をカチコチに固める。

『それは置いておいて、だ』

エトワール先輩、思わせぶりな表情で私をガン見。その語調、表情だけでああやっぱバレてるな、と察しがつく。そっか、エトワール先輩は看破で私の心の中を読めるんだったな。たった今何があったかなんて楽々お見通ししてわけだ。そうやっていつも、私が何か悩んでないか気をつけてくれてたんだらうけど。

『は、はい』

私は思わず背筋を伸ばして気をつけの姿勢になる。

『単刀直入に訊くぞ。君が手に入れてしまったその記憶、どうしたい? オペレーションルームではその存在が非常に懸念されている。消してしまいたいのか、持っておきたいか。どっちだね。君の意志は最大限尊重される。ただし、君がこれまでと変わらずにいることが大前提だ』

うっ! 現実世界スタッフまでこのこと知ってるんだな、リアルタイムで外に知られてるってことか。前は別に私の心境なんて把握してなかっただろうに、西園さんの件があつてから監視が厳しくなったのかな。そりゃそうか、先輩が私を看破できるなら、伊藤さんにだって遠隔から看破できるってことなんだよね。こんな速攻で対処されると何か怖いよ。でも……

『考える猶予はないと思うぞ』

『これは持っておきたいです』

私は精いっぱい、動揺を悟られぬよう先輩の目を見て宣言した。

どうしてそう言ってしまったのか分からない。今後、自分の感情を制御できるのだろうか、性別をなくした私に恋愛感情はなくなっているに違いないけれど、愛実との忘れがたい思い出はある。彼女がメグであったと知ってしまったて、私はこれまで通里心を揺らさずメグとして接することができるといって、自信はない。

しかし、自信のあるなしではなく、やらなければならない。

私が彼女の正体を憶えていれば、彼女が二年前急に失踪した理由と、ここに彼女が患者としている理由が分かるかもしれない。忘れてしまつたら、私は真相を知ることができず、胸のつかえるような心境をいつまでもうじうじと引きずって、悪夢に魘されるように時折思い出しては煩悶することしかできなかった。

私が前に進むためにも。憶えておきたい。

彼女は黙って私の元を去るような不誠実な人じゃなかった。それはこの九年間、彼女に幼いころからメグとして接してきて再認識している。彼女はあの時と変わらず正直で、無邪気で、優しく、そして真心のある女性だ。失踪したのには何か理由があったと思いたい。

あの日、何があったのか知りたい。それを知って、心に区切りをつけたい。

もし彼女が助けを欲しているというのなら、私はこの身を投げ打つても力になろう。必要としていないのであれば、彼女を静かに現実世界に送り出して、時の過ぎるに任せて忘れてもらうだけだ。

それで私は、過去と決別し新たな道へ進むことができる。

『赤井君、君はまだアガルタの神でいられるな？』

『はい！』

私は自分の気持ちを鼓舞するように大きく頷く。ありがとう先輩、

踏ん切りがついたよ。先輩の話によると、愛実の存在が私を大きく悩ませてしまうようなら、容赦なく伊藤さんに記憶を消されてしまおうそうだ。……当然だと思う、そうされるべきだと思う。ただ、どうして彼女がここにいるのか。その経緯を伊藤マネージャーには後でどうしても教えてもらおう。

『平常心を保ちます』

『その意気だ。君は大樹さ、倒れてもらっては困る。頼んだぞ、赤い神様』

『はいっ！』

『いいぞ、君は強い男だ』

演じよう。千年、私はアガルタの神を。
とつくに引き返せない場所にいるんだ。

彼女を救うため、アガルタの民の為、私が任されている患者さんとその家族のためにも、無事に現実世界に帰還してもらわないと。現状、私がこの仮想世界での治療を可能とする、最初にして最後の砦なんだ。自分の事ばかり考えてはいられない、彼らの命、人生はこの手の中にあり、私は彼らの運命を一身に背負っている。

余計なことはもう考えまい。普段通りの私に戻るんだ。

私は頬を両手でパン、と叩き気持ち切り替える。頬がじんじんと腫れて痛い。

今はその痛みと気圏を渡る冬の風の冷たさが、妙に心地よかった。

『それから、伊藤PMからメールが来ているから後でインフォメーションボードを確認してくれ』

『わかりました。必ず目を通しておきます』

と、いう訳で気持ちを切り替え、何食わぬ顔でにこやかに地上に降りてきました私達は……。

あれほどロイのことを怯えていたコハクと、一方的に暴君として怯えられてたロイがすっかりうち解けて、仲良く楽しく談笑してるのを発見してびびりました。政治談議に花が咲いているみたい。何でも、コハクからの申し出で、ロイとひと試合やりあったとのこと。出会いがしらに肉体言語で語り合っちゃうのか。いかにも高性能 A・I・らしいよね。メグからの貢物の花輪を頭に載せた白さんとメグも何か真剣に話し合ってるし、女同士のガールズトーク？ 人間姿のモフコ先輩と蒼さんは、構築議論について色々話し込んでるし。

これは……みんな打ち解けてくれたのかな？ 後で二柱とコハクをキララにも紹介しておこう。また肉体言語で語り合っちゃうかもしれないけど。

それはそれであっさり後腐れなくていいのかもしれない。

『赤井君、ところで競技祭典と新使徒の採用の件どうなった？』

そうでした。言われて思い出しましたが忘れてませんよすっかり覚えてます。

実は一週間後、モンジャ、グランダ、ネストの民の平和と友好を祈念して、二十七管区世界初の競技祭典オリンピックを開催することになったんです。そのための準備を皆で仲良く、水面下で着々と進めてきました。聞いてなかったって？ そりゃ、内緒にしましたもん。

こういうイベントは国民の皆様には直前に発表した方が盛り上がるでしょう。民たちは勿論知っていますよ、そして競技場もモフコ先輩が既にグランダの東のあたりに建設して準備してくれています。競技は短距離走、カルーア湖畔での長距離走マラソン、槍投げ、自由形水泳、

格闘技（立ち技）、剣術、弓術の豪華ラインナップ。男女それぞれの部を用意したよ。私も民も、とても楽しみにしていました。

折角だからコハクも出てくれないかな、皆と仲良くなれそうだし。

そして新しくこの管区に入ってくれる天使さん達の面接予定日、そっぴや明日でした。うっかりしてたよ。

暫くはイベント山積みだ、忙しくしていたら気分が紛れそう。

第5章 第9話 電が関と菊花紋

厚労省死後福祉局 局長室。

まるやま

円山 しんいち 新一 局長は内調の 竹原 義一との通信を終え、防聴シ

ールドを解除するなり日本茶を手にしてデスクから立ち上がる。

「内調がおおつぴらに動いて、随分と無茶な要求をしてくれる」

苦々しそくに呟いた後、喉の奥に茶を流しこむと、約束の時間通りに入室していたすらりと背の高い若手女性官僚にぼろりと本音を零した。円山はやせぎすで小柄な壮年の男だ。口元には愛想のよい薄い笑みを張り付けているが、その瞳に宿る眼光は鋭く澄んで、ただの事務官僚と覗かせない威圧感がある。彼は仮想死後世界アガルタの長期計画にまつわる責任者であった。

彼は角部屋である局長室の二面の窓ガラスのスモークシールドをオープンにすると、東に日比谷方面、北に皇居方面の寒々しい景色が広がっている。何れの方面も背景には天を刺し貫くように数百メートルクラスの超高層ビルが建ち並び、摩天楼を幾層にも縫うように首都空路が建設され、縦横無尽に夥しい数の自動飛行車が飛んでゆく。上空を見上げれば青空の隙間に放射状に連なる空駅と、宙に浮かぶオフィスやデパート群。飛び交う赤や青の電光フォントが今日も目に賑やかしい。

二十一世紀後半から二十二世紀にかけて、東京の空は急速に狭く なった。

それでも、いつの時代にも都会のオアシスは存在するものだ。「日比谷空と虹の森」いわゆる旧日比谷公園は空中ビオトープ、高低差百メートルの虹の滝やモダンなデザインの日本庭園、隅々まで整

えられた花壇のある公園として二十年前に生まれ変わった。高名な造園アーティストによって幾何学的な軌跡を描くようデザインされたフリーフォール（自由落下滝）が名物だ。計算し尽くされた宝石のような水粒が、今日も数々の虹の真円アーチを創り出して幻想的な光景を演出し、その飛沫はとめどなく人工池の中央へと滑り落ちていた。非常に人工的な造形美である。

この百年あまりで東京都民の世界観はすっかり変貌を遂げ、デジタルで三次元的に、無機質で主観的なものになった。大地に根ざし自然と共生した先人たちの温かな感性は、現代人には遠いものである。

「今も昔も、霞が関の空気はどうしてこう淀んでいるのかね。骨とすじだけの体がますます枯れ朽ちてゆきそうだよ」

「では局長も出勤前に皇居ランナーになりますか？ 健やかなる心は、健やかなる肉体からというものです！」

……近代化の嵐波を退け、日本人を心の原点に立ち返らせ、そこを訪れる者を厳かな気持ちにさせる、変わらざる聖域がある。それは皇居だ。かわいらしくジョギングポーズをとって運動を勧める彼女は毎朝の日課として皇居周辺を走り健康維持に努めている。円山は部下の気遣いで、苛々としていた気持ちを和ませて両手を左右に振った。

さきほどから円山に応じるこの若手女性官僚は、さいえじま 冨島 あやな 彩奈 死後福祉局 アガルタ戦略的構築室 室長。タイトなストライプの黒いパンツスーツで身を固め、きりりと整った濃い眉に、ミニマムシヨートの毛先に少しパーマをかけて横に流し、ハスキーがかった低めの声で、男性とも女性ともつかぬ中性的な印象を与える。その凛々しい声と、170cmを越える身長とあいまって、宝塚の男役のようでもある。

「いやいや、遠慮しておくよ。ランニングどころではない、かなり

頭の痛いことが起こりそうだからね、今走ったら余計な事ばかり考えて皇居のお堀に落ちてしまいたいそうだ」

円山は思わせぶりの言葉を冗談めかして漏らす。

「その内容をお伺いしても？」

そう……竹原 義一からの直電の内容は

「27管区の赤井構築士を、120億で買い取りたい、だそうです」

「……なんですって！……局長は何とお返事を。困ります、そんな」

構築には関与しない事務方のトップが栗田であるなら、彼女 冴島は構築士、プログラマー、デザイナー、技官ら構築実務者の長だ。

中間管理職である管区プロジェクトマネージャー達を束ね、円山の指示のもと日本アガルタの組織管理を行ってきた。彼女は甲種構築士を務めた経験もあり、構築現場の実情も知り官僚としての仕事も申し分なくこなす辣腕のキャリアだ。

彼女にも込み入った話を聞く権利は十二分にある。

「まだ、確たるお返事はされていないのでしょうか？」

彼女がアガルタで起こる全ての出来事に対して適切に判断し、最終的に決定を下してきたのだ。また、日本アガルタの運営のための管区ごとの予算配分、医師会、関連学会との連携も彼女が一手に引き受けている。

「赤井構築士がその気になれば、と答えておいたよ。移籍は数カ月先で構わないそうだ」

「絶対にお断りです。厚労省で採用した構築士を買い上げるなんて横暴すぎます。内閣府は彼をどのように使ってもらいたいのでしょうか、その目的も定かではないのに」

冴島は赤井を手放すつもりはないようだ。

「さあ……詮索しすぎない方が、お互いに身の為かもしれんぞ。二

十七管区から一人、死人が出たと言うし？ 赤井構築士の人権問題もうやむになつたままだろう。そこを握られてしまつてね、あの竹原も場数を踏んでなかなか汚い手を使うようになったものだよ」

脳を破壊するという不可解な方法で自殺した、赤井構築士担当の西園補佐官の調査の件と、結論が先延ばしになっている赤井構築士を生身の状態で仮想世界に監禁することにより浮上した人権問題に切り込まれた。脇の甘さを突かれ、冴島は言葉に詰まる。

冴島に後る暗い部分はないが、西園を自殺に追い込んだ原因を究明できなかった以上、他の省庁からは赤井に絡む問題で弱みを握られつつある。それが円山にも痛手ではあつた。

「赤井構築士もですが、管区PMの伊藤も難色を示すと思います」
冴島はできるだけ挑発的な口調にならぬよう感情を抑えながら、冷静な発言を心掛ける。声のトーンがますます低くなる。

「どうかな。赤井構築士が拒否すれば一考に値するが、伊藤が突っぱねたところで何の意味がある。どれだけ仮想世界で伝説を残せど、現実世界ではスーパーヒーローにはなれない。勘違いしてはいけな
いよ、我々はいち官僚にすぎんのだからね。波風を立てず定年まで恙なく働きたければ、齒を喰いしばらねばならぬこともある。伊藤は、きつとまた手ごろな原石を見つけることだろう」

円山の言うことにも一理ある。巨大な組織を維持してゆくためには、どれだけ不条理であつても、飲まなければならぬ条件もあるのだ。綺麗ごとだけで組織を維持してゆくことはできない。

「……赤井構築士のバグは偶然に起こつたことです」
「私にも思つところはあつたよ。憤懣やる方ないが、省益と国益を優先せねばなるまい。ああそれと、冴島君のご主人を侮辱するつもりはなかつた、気を悪くしたなら謝罪する」

「ちよい、と白髪交じりの頭を下げてみせる円山。」

「いえ、局長。滅相もない、こちらこそ失礼いたしました」
冴島は伊藤の妻である。互いの都合上夫婦別姓を名乗ってはいるが。

「日本アガルタの行く末の為に、内閣府の連中とのごたごただけは避けたい。奴らは裏で何をやっているか分からない、薄気味の悪い連中だよ。一応は赤井を渡せないと断ってはみたが、向こうも強気だな。陛下の御名を口にしていたから、この間の皇族アガルタ入居問題にも深く関与しているのだろう。断ったら断ったで、厄介な事になりそう。まあ、きみも一服したまえよ」

円山は壁のドリンクサーバーから梅こぶ茶を淹れ、デスクの前のソファに冴島を座らせ、茶をすすめる。彼女は膝頭を揃え脚を閉じて横に流す。形よく引き締まった脚には、日々甘やかさず鍛え上げた美しい筋肉が添えられている。冴島は茶碗の中に小さな溜息をひとつ、吐きこんだ。赤井を留めておくことはできないのか。

「どうも、いただきます」

円山がそう推測したのは、世間では皇族のアガルタ入り問題が再浮上していたからだ。皇族に皇族専用のアガルタ管区に入ってもらうか、一般管区を希望するなら一般と同じように入居してもらうか。そもそも、アガルタ入りを認めず崩御を以て御代を終えるか。非常にデリケートな問題であるだけに、その最終判断は皇室側、特に今上陛下に委ねられていた。

陛下は未だ六十代と若く至って健康であらせられるが、先日の天皇誕生日の会見で、時期はそう定かではないながら、アガルタの利用を希望するとマスコミに発表した。これを契機に、皇族のアガルタ入居問題とアガルタ側の受け入れ体制、ネットワークの敷設は

喫緊きつぎんの課題となったのである。

今上天皇は日本アガルター丁目一番地、日本神道大管区たる高天原ではなく一般の非宗教管区へ入居する意向を内々に側近に漏らしたことから、問題は緊迫した局面を迎えた。入居後は一般人になりたいという陛下の思いからなのか、新たな設備に税金を投入することを希望しないというのか、はたまた裏の事情が働いたのかもわからないが、真相は分からない。

事が重大であるだけに対応に苦慮した円山は、首相との幾度かの協議と宮内庁との折衝の末、宮内庁の意向に出来る限り沿う形で、日本アガルタに受け入れるのではなく宮内庁に皇宮警察警備のもと皇族専用管区を構築するよう要請し、その為の技術供与を惜しまないという形の対応を取った。一般管区へ皇族が今後続々と入居するとあっては、国防の意味でも政治的な意味でも本来の宗教的な意味でも、数々の問題が発生するのだ。宮内庁の問題は宮内庁で対応してほしい、というのが厚労省側の本音である。日本アガルタの運営方針と、政治的な問題はどうしても切り離しておかねばならない。何故ならアガルタは一国家組織の範疇にとまらず政治的に独立した、国際連携組織であるべきだからだ。

全国的なネットワークを介したアクセスがアガルタに対して行われる以上、皇族の記憶が一般国民と同じ管区に入居するということは、皇族の記憶が悪意を持った他国、組織のサイバーテロによって奪われ人質にされる、などというテクニカルかつ悪質なケースを警戒しなくてはならないということだ。

公人は、死すれば公人ではない。たとえば元首相などのVIPがアガルタに入居したとしても、既に彼は首相ではなく、人質とされたとして国家がどうこうという問題は生じない。しかし皇族は死して

も皇族であり、永遠にテロの標的に値する要人であり続けるのである。

皇族をターゲットとした組織的犯罪が実行された場合、日本アガルタは日本国民に対し再起不能となるまでに信用を失墜するだろう。

それならば皇族専用管区を開設し、宮内庁内のクローズドネットワークで運営してもらおう。すると皇族の記憶が国民の目に触れる機会も稀となり、誰憚ることなく彼らの思い通りの管区を構築することだってでき、皇族がたも満足なさるだろう。

ただ、皇族専用管区を構築するとなれば、やはり熟練の構築士と維持士が必要である。更に、人間居住者が他にいないため、住民としてのA・I・に求められる質は当然のことながら最高のものが要求される。赤井の管区のA・I・がまるで人間と遜色のない振る舞いをするということは、先日伊藤が主催した技術研修会（つまひ）で詳らかになってしまった。

それをどこかから聞きつけた輩が、赤井の引き抜きを内閣府、あるいは宮内庁に提言したのかもしれない。また、宮内庁が直接日本アガルタから構築士を買い上げたところとマスコミが大きく騒ぎ立てれば、これは宮内庁にとっても宜しくない。赤井を秘密裡に内閣府に引き抜き、その後身元を隠して内閣府外局たる宮内庁に派遣し構築士として仕事をさせる。……円山はそんな裏事情を推測していた。内閣府には様々な経歴を持つ人間が集い、人の出入りも頻繁である。その組織に所属する誰がどこに出向しようが外部からは簡単に把握できないのが現状だ。

「……という、わけなんだ。向こうが独立管区を創ってくれんといふのなら、飲むしかないんだ」

「内閣府は本当に、赤井構築士を皇族専用管区に送るつもりなんですか？ 何故内閣府ではなく内調が動いているんです」

「一度内調を経由すれば、構築士の素性が分からなくなるからだろう。ただ、竹原も、皇室がらみの問題だと漏らしてはいたよ……このタイミングでの構築士買い上げだ。それ以上は、向こうも白状する気はないのだろう」

竹原に直接「赤井を宮内庁に回す」と言われたわけではない。だが、時期的な問題で、ほぼそれ絡みの案件であることは疑われてしかるべきだった。

皇族専用管区のために彼らが赤井を要求するのであれば、今は差し出す他にない。

断るという選択肢が、そもそも準備されていないのだ。

「君から直に、赤井構築士を誘ってみてはくれんかね。幸い、来年度からでよいそうだ。今年度いっぱいまで厚労省で仕事をしてもらって異動してくれば有難い」

「説得などできません。それに、伊藤が私と彼の接触を警戒し妨害をするでしょう」

「直接話せないようなら、メールでも構わないよ。文面は私が君の端末に送っておこう」

内調 竹原の、国防を主体とした直接的な赤井買収の要求と、日本アガルタ 円山の、皇族専用管区と関連付けた裏読みの末の判断が、真相はどうあれ菊花紋のもとに奇妙にかみ合ったのだった。

「局長。赤井構築士が抜けた後の管区は、無駄になさるのですか？」

「腕の良い維持士に引き継いでもらえばよろしい。維持士に管区を手渡せばその先の発展はないが、見栄えよく環境を整えれば、地球上にはない手つかずの自然を好む利用者のニーズを満たすぐらいのことはできるだろう。そうだな、伊藤君など適任ではないかね？」

彼もサーバーを買ったということは、維持士に戻りたがっているのかもしれないよ？」

「……………！」
冴島は臍ほそを噛むような思いだった。構築士経験のある彼女は、管区を発展させることにかける構築士の並みならぬ情熱を知っている。途中で構築を終えるなど、言えたものではない。

周囲の騒音など何も知らず自らの世界を細々と営む箱庭の神に、本来彼がしたいことをさせられない、それが悔しくてならない。

伊藤が投じた一石により、動き出した内外の情勢を止められない。どうしてかの神を、心穏やかに構築させてやることができないのか。

*

どうも〜！ 国民の皆様こんばんは！ 帰ってきた赤井です！
どこ行ってたのかって？

いや別にどこにも行ってませんよ。何となく前回の流れから帰ってきたって感じです。気持ち切り替えて頑張ってるところです。まあ私、くよくよしない樂觀主義な神ですしね。

時刻は深夜、場所は赤井の神殿の至聖所。素民の皆さんも寝静まった頃だ。蒼さんと白さんは、モフコ先輩が急ごしらえで造った至聖所の両隣の部屋で昨日から寝てもらってる。お二人の部屋には私たちも立ち入り禁止です、コハクは白さんと一緒に添い寝してますけど。

で、私と先輩とモフコ先輩（人型）のお馴染みトリオが集まって頭をつきあわあせて会議をしている。エトワール先輩は暇を持て余して羽づくろいしてる、何か鳥みたいでかわいいですよ先輩。とか考えてぼけっとしてたら……気付いた先輩に睨まれて

『で、どうするんだね？ 誰にするか決まったのか？』

私、沢山の中から何か一つを選ぶのが苦手。天体観測やって

た頃だつて、マイ望遠鏡買わなきゃいけないのに絞りきれず、結局一番見たかったビッグ天体イベントに間に合わず見逃しちゃったぐらい優柔不断なんだ。A型ですからね。え？ 血液型のせいにするな？ あ、はい。

しっかし今日は日中忙しかったんだ。白さん蒼さん降臨につき、神殿に行くといつてもより御利益がありそうだといいこと、今日、神殿には大勢の参拝客が押し寄せてた。素民の皆さん、三柱だから御利益もいつもの三倍と考えちゃったらしい。……スーパーのポイント三倍デーじゃないんですから。

実際は私が一人で祝福してたし御利益が倍率になるなんて話ではなく、祝福するのも朝から夕方までかかりました。メグは朝一で行列の先頭に並んでくれてた、両手にいっぱいの花束を持って。メグは蒼さんと一緒に、今日から医学の勉強を始めたみたい。私も医学は門外漢だし、愛実……じゃなくてメグは現実世界では獣医志望だったから、彼女のリハビリのためにも蒼さんに講師をお任せしたんだ。私も隣で一緒に聞きたいけど暇がないな。

そうそう、メグは記憶の回復が著しいから、患者さんのプライバシー保護のためとかで構築士が心を看破できないようにされた。昨日、エトワール先輩が伊藤さんから預かってきて、私がメグにプレゼントしたペンダント……あれが看破を妨害してるんだろうね。メグはただのアクセサリーだと思って、気に入って身に付けてくれる。……ごめんよ。

だから私にはもう、メグの心の裡はわからなくなった。

逆にそれが、迷いを払拭してくれてたりする。メグも今は勉強に励むつもりだろうだし、私も負けていられない、あれこれ考えず仕事に集中しようと思う。

皆さんをへろへろになるほど祝福したおかげで、私も神通力は満タンどころか貰いすぎて吐きそう。至宙儀に搾り取られた分は軽く補填できた。白さんと蒼さんにも神通力を分配、というか献上する私が神通力あげないと彼らはこの世界では自分で神通力供給できないらしいし。あ、白さんには唯一の供給源としてコハクがいますけどね。

夕方からは神殿閉めて新しく採用する使徒さんの面接をモニタ越しに延々としてた。さっき全員面接終わったところなんだよ。それで今、三人で人選を考えてるわけ。

後は……そうだなあ、伊藤さんがメールで私のクローン作っていかって聞いてたから快諾しといた。サイバーテロもあつたことだし、私の肉体に万が一のことがあっちゃいけないからだって。有難い話だ。だって帰るときに肉体がありませんってなったら困る、一生アガルタの神やらなきやいけなくなる。私だって人間に戻りたい。伊藤さんには色々と心配していただいて申し訳ない。まあ、そんなこんなして過ごしてたんだよ今日は。

『おい赤井君？ 君は一体いつまで悩んでるんだ』

また思考回路が脱線してました。すぐ脱線事故起こすからな。

エトワール先輩、自分の翼の不揃いな赤い羽根を抜いて白い石机の上に並べてる。赤い羽根募金ですか。

『そう仰られても、何を基準に決めてよいのか……』

すぐには決められませんよー、人事つて大事じゃないですか。男性も女性も皆さんそろって甲乙つけがたいほど素敵な感じでした、甲乙つても全員甲種構築士ですが。特に女性はお色気たっぷりかわいくて……い、いえ、とても魅力的ですね。経歴も略歴だから決め手が分からないよ。候補者十二人中、外国人構築士が七人。現実世界では十一月だから、任期が四月はじまりの日本人構築士は少ないみたいだ。

『も、エトワル先輩。赤井さんは優柔不断だからせかしてあげないの〜!』

モフコ先輩は私のインフォメーションボードから男性構築士ばかりお気に入りフォルダにコピー入れてプロフィール見比べてるし。プロフィールっても個人情報結構伏せてある、本名も前の管区も分からない。アピールポイントは年齢、性別、趣味、特技、資格、構築年数、スキルその他。あとはモニタ越しの面接で判断するしかなかった。アバター持つてる人はアバターを介して、持っていない人はスーツの上に色とりどりの目出し帽や仮面かぶって顔を隠してた。プロレスラーの面接かよ。向こうからはアバターとしての私が見えてたと思う。

『ねーねー赤井さん、私の職場恋愛のために男性構築士も一人ぐらいいれてほしいかな〜なんて思ってみたりみなかったり? こう、仕事にも精が出るっていうの? 一人でいいからさっ〜お願い〜』
両手をすり合わせておねだりするモフコ先輩。職場で婚活ですか。もしカップル成立しちゃうたら気まずいじゃないですか私とエトワール先輩が。

『というかモフコ君はいつまでここに居るつもりだね』
『?』

どういう意味か聞いてみると、乙種以下の構築士は区画解放時に任務終了となるそう。エトワール先輩は稀なパターン。モフコ先輩はまだ次の移籍先が決まっていけないけど、何となくこの区画に残っているらしい。別に残っちゃいけないって決まりはないようだけど、昇進も昇給もないらしいんだよね。

『じゃあモフコ先輩、就活しないといけないんですか? さびしくなりますね』

『えーやだー待遇変わらなくていいからここに居るー! 悪役やりたくないし〜』

モフコ先輩は現在ランク4のサポーターだから、次の仕事はランク3の悪役をやらなくちゃいけない。気持ちは分かります、私だって悪役は嫌です。

『はい、赤井さんコーヒーできたよ。ミルクとお砂糖入れる？　こっちはお茶できるのもデザイナーの私のおかげでしょ？　どーお？　いなくなったら困るじゃないっ！？』

『あ、どうも。ブラックでいいです。そりゃ、モフコ先輩がいなくなったら困りますよ』

モフコ先輩はオシャレなカップとソーサー持ち込んで私と先輩にコーヒーをサービスしてくれてる。こっさり喫茶してます私ら。飲食は素民の目のないところでなら許される。妄想世界で食欲だけは残っている私が、妄想世界でストレス溜めないようにという伊藤さんのはからいだそうです。ふはー、深夜のコーヒーうまつ！　あ、クッキーも添えてくれた。すみませんねどうも。モフコ先輩はグラフィックデザイナーだからこういう小物や食べ物を作るのが得意だ。モフコ先輩にもずつといてほしいですよ、た、食べ物の為じゃなくてですね。

『ところでモフコ先輩はどの使徒さんがよかったです？　私情は抜きにしてですよ』

食べ物の接待で買収されて、先輩の要望を聞くやつすい私。

『よくぞ聞いてくれました！　私の一押しはこの人で！』

温かいコーヒーをずつとすすりながら、私は先輩の出したプロフを手元に取り寄せる。

日本人構築士ですね？　28歳男性、趣味は筋トレ、特技は座禅だそうです。前はどこの管区にいたんだろうな？　アバターは前の管区に置いてきて今は持ってないみたいだったから、リアルの身体でオレンジの目出し帽かぶってた。筋トレが趣味って言ってたけど

マッチョメンな雰囲気ですーツがむちむちでした。志望動機を聞いてみたら、「前管区で怒り疲れまして、今度は怒らなくてよい管区を目指しました」とか。

そんなにすぐ怒るって……短気っぽい人だけど、その人でいいのかモフコ先輩？先輩なんてふざけてたら真つ先に怒られやしないか？

『やはりモフコ君は彼がいいか。私も男性なら彼を選ぶな』

先輩もその人押しだったんですね？先輩方の人選の基準がよく分かんない。お二人ともお勧めなら一人目はその方にしようかな。怖そうだけど。

『その他は……普通に考えれば少しでもキャリア長い人と、男でも女でも所持スキルのにかぶらない人じゃない？てか赤井さん、まさか六名採用しようとしてる？あつまーい！』

モフコ先輩が私の脇腹をくすぐる。コーヒーを飲んでいた私は吹きそうになった。

『ぎゃつ、くすぐつたいですよ先輩！え？え？使徒さん梓は七名までですよ！？エトワール先輩がいるから、残り六名と考えていたんですけど』

もつと採用していいんです？

と私が身を乗り出すと、モフコ先輩はお、ば、か、さ、く、ん、と指先で私の頬をつつく。両側から往復で。人間のときのモフコ先輩はいたずら好きの精霊さんってキャラびつたりで、お茶目でかわいい人なんだけど、テンション高くてたまにノリについていけない時があるよ。

『採用枠はあけとかなきゃ。後で気が変わって、あのスキル持つてる使徒さんについてほしかつたなーなんて思っても、枠が埋まっただ

ら生首切れないでしょ。採用枠は全部使っちゃだゝめっ！ わかつた？」

駄目押しに鼻先をちょーんとやられましたよ。

白さんも蒼さんも七名の使徒さんをお持ちだって聞いてたから、六名採用するもなのかと思っただよ。魅力的な方々ばかりですし、誰にしようか決めかねているぐらいです。十二人も応募者がいたら絞れない絞れない、もうあみだくじとかで決めていいです？ 私、誰とでも合わせてやっていけますし、どんとこいって感じですよ。

「もつと赤井さんが出世したら、有名でランクの高い使徒さんがきてくれるかもしれないでしょ？！ それにさ、見てくらほら！ 今回応募者の殆どがしががないふつーの天使さんたちだし」

「しがなくって悪かったな」

あ、ふてくされた。エトワール先輩は普通の天使さんなんですけどもすげーな、プロフに何も詳しいこと書いてなかったのに先輩ら、面接しただけで普通の使徒か普通じゃないか分かるのか。

「普通のってどういうことですか？」

普通じゃない場合があるの？ って思ってたなら、使徒にもランクがあつて上位、中位、下位といふんだってさ。今回応募してきたのは殆どが最も下の階級の使徒さんで、だからもう少し上の階級の使徒さんが応募してくれるかもしれないでしょ、とモフコ先輩は仰る。モフコ先輩、ちゃっかり、いやしっかりしてるよ。それ、プロフに書いてなくても構築年数やスキル聞いたら分かるんだってさ。

エトワール先輩が軽く補足。

「ちなみに、上位の有名使徒の殆どが国内外の有名管区に集中しているんだ。新神には頭を下げない使徒までいる。赤井君がそこそこ有名だとはいつても、新神の管区には上位使徒のプライドが邪魔して応募してこれないわけだよ」

あー、気持ちはこちらですよ。みなさんだって中小企業より大企業に就職したいですもんね……。私ってベテランからすればちょっと最近出てきたなー、って程度のベンチャー企業の社長みたいなもんでしょし。て考えると改めて、エトワール先輩っていい人だよな。次の話が決まってたつてのにこんなド素人な新神についてくれて。

「ま、多くても赤井さんはうまく仕事を割り振れずに持て余すだらーしー。少数精鋭にしとこうよ！　今回採用するのは二人か三人ぐらいじゃない？」

「赤井君。私を外したければ、遠慮なくいつでも言ってくれていいぞ」

エトワール先輩、真剣な顔で鼻を鳴らす。とんでもない！　頼りにしてるんですから！

「で、先輩がたはどうしてオレンジの目出し帽の人押しなんです？　一応、理由を聞いとかないとね。すると彼らは顔を見合わせて目配せして……」

「怒る演技に疲れたって言うてたじゃない？」

「あ、はい。言うてましたね、ギャグですよねあれ」

「日本アガルタで使徒役で怒る演技しないといけないって仕事、そんな沢山はないから。明王みんおうやってる人だと思っの。明王役は密教系管区、金剛界での仏様だから、必然的に仏教系の上位使徒なのよん！」

きゃっきゃと笑うモフコ先輩。先輩、あてずっぽうなのか名推理なのか。大乘仏教、密教系は日本アガルタだけじゃなくて中国やチベット管区とも連携しているらしいから、サーバー規模は相当大きいそう。そこで日本人で明王役を張れるってことは相当に優秀な人材だろうとのこと。

えーと、明王って不動明王とか、で合ってますよね。歴史の教科

書で見かけた程度のうつすい知識ですが。あー確かに、目を剥いて怒ってる力士っぽい仏様でしたよ思い出しました。

『明王役は確かに四六時中、忿怒の形相でないといけないからな……骨の折れる役柄だよ』

エトワール先輩も同情してる。私はずっと笑顔をたやさないようにしてるけど、ずっと怒ってなきゃいけない仕事もあるのか……：そりゃいくら仏様役ができるっても移籍したくなるわ。じゃあその人、怒りまくってた反動で今度は満面の笑みで仕事してくれるかもしれない。それはそれで明るく楽しくていいかな。

よし、一人目決定！

『ではその方にしましょう！ エトワール先輩は他にどなたがいいと思いましたが？』

モフコ先輩にも好みがあるなら、エトワール先輩にも好みがあるよね。私、優柔不断だから誰を選んでいいか全然分からない、女性使徒はエトワール先輩の好みの使徒さんに……と思つてたら

『君が決めるよ。ただ……彼女には気を付けた方がいいかもな』

『？ どういう意味です？』

残り十一名の中からエトワール先輩がインフォメーションボードをタップしたのは……！ いい意味で正統派お嬢様〜！ つて感じのさらさら紫髪のアバターの人。面接した感じでは丁寧でおしとやかで控えめで好印象だったけど……イギリス人構築士だって。てか超かわいかった、雰囲気ふわふわしてる。天女みたい。エトワール先輩つてば……この方がいいんです？ むっつりですね先輩。

志望動機は「優しそうな神様のもとで働きたい」とか言つてた。

前の管区が怖い神様のところだったんだろうね、皆さん面接官の質問

に正直に答えてくれるもんですね。まあ私、全然怖くありませんけど、それも善し悪しですよ。素民にすっかりなめられてますし。

『どうして気を付けないといけないんです？』

『鎧を脱いで違う衣装を着ていたがあのアバター、見たことがある。彼女はワルキューレの石柱のレギンレイヴだ』

『ええーっ！？ ワルキューレだったの！？』

『って何です！？』

モフコ先輩が跳びあがって頭を天井にぶつけちゃった！！いやべっ、私リアクションがワントンポ遅れてる。それ何でしたっけ。神話とか伝承とか全然知らないからさ……何で神様やってるんだ。お恥ずかしい。一般常識問題なのかなこれ？

『ヴァルキリーのことだよ赤井さん！ ほらっ！ あのっ！』

ほらあのと言われましても。思い出す引き出しがありません。

『北欧神話の世界に出てくる戦女神さ。北欧アガルタの看板管区、アスガルド大管区の上位使徒だな。上位使徒は多神教の管区では、主神以外の神を務めることができる』

日本でも高天原には主神、天照大御神以外の神々、例えば月讀命、素戔嗚、大国主ら。彼らは上位使徒が演じているらしい。アスガルドはオーディンを主神とする多神教管区だから、使徒でも神様役ができるとあって上位使徒には人気なんだって。その戦女神役ワルキューレの使徒が任期の途中で、下位使徒を装って応募してきてるって話だった。

マジ！？ 使徒でも神様役ができる管区があったんですか知りませんでしたよ！ そりゃ、やってみたいですよ折角だったら神様役……。先輩が神様やるとしたら……絶対ギリシヤ神話管区行きたそうだなナルシストだし。てことは色んな管区回って神様役や仏様役できるなんて、使徒役も案外楽しそうじゃん。辛い悪役乗り越えて頑張っただけあるよ。

えーと、その元戦女神のレギンレイヴさんでしたっけ！
何か戦女神って名前からしてすげー強そうじゃね！？

『それはぜひ来ていただきたいです、その人にしましょう』

『つくづく君はお人よしだなあ、赤井君。主神オーデインに様子を見てこいと言われたんだろうが、まず間違いなく偵察目的だろう』

偵察終えたらアスガルドに戻っちゃう、ってこと？ 途中でいなくなっちゃうのかー。感じよさそうな使徒さんなのにな。ちよつと考えすぎじゃないです先輩？ でも……

『もしすぐ辞められるとしても、他の管区のお話も聞いてみたいので、その方にします』

『君が決めたのなら何も言うまい。だが、上位使徒二名採用するならもうこれ以上はアトモスフィアの分配の関係で採用できないぞ』

『ほんつと世知辛い話よね、ここつて素民少ないから』

だよなー、私と使徒さんは同じ釜の飯っていうか、同じ素民たちのアトモスフィア（信頼の力）を分け合ってる。今までは私とエトワール先輩で半分ずつでよかったけど。今度は私、エトワール先輩、なんちゃら明王さん（仮名）、元レギンレイヴさんの四人で分け合わないといけなくなる。一気に神通力のやりくりが苦しくなるな。

ともあれ、五時間の協議の未決まりました！

今回はその、経験豊富なお二人にさせてもらう。他の方々のプロフィールももう一度念入りに拝見したけど、やっぱりその二人が構築年数も飛びぬけてたし気になってきた。私も早く二十七管区を構築していかないといけなと思うしね。力強いサポートが欲しいところ。

お二人を採用する旨のメールを伊藤さんに送ろうとして……

そのとき……私のメールボックスに、差出人不明のメールが一件

入っているのに気づきました。

件名は【親展】と、一言だけ。スパムでもあるまいし、何だろう。

私はコーヒー飲んで駄弁るエトワール先輩とモフコ先輩を至聖所に残し、こっそり神殿の中庭に出た。そして緊張しつつメールを開封する。メールには契約書並みの超長文が書いてあったから、私は難解な表現で書き連ねられたメールというよりは文書をゆっくりと丁寧に読み進める。普段使わない現実世界の文語的な日本語、知らないうちに忘れてて苦戦する。

何とか要約するところだった。

報酬120億円で私を内閣府に引き抜きたいとの話がある。構築中の二十七管区は崩壊することも無駄になることもなく維持士に渡すし、現在管区にいる患者たちの治療に目途がついてから、実時間にして来年の移籍で構わない。厚労省の構築士を辞めて現実世界で働きたいかどうか、私自身の率直な希望を聞かせてくれ、と。差出人は、厚生労働省 死後福祉局 局長とある。

『現実世界……か』

ゆめうつつのような心地で、声に出してみる。唇は渴き、声は掠れて上手く出すことができなかった。

インフォメーションボードを手にしたまま、呆然と満天の星空を見上げる。冬は一年で星が最も美しく輝く季節だ。てらてらと眩しい模造の空には、私の大好きだったベテルギウスにシリウスも、プロキオンもない。プラネタリウムの最果てにあり、私には届かない場所に存在する現実世界。そこは私にとって、最も遠い世界だ。現実だといってもまるで現実感が沸かなかった。本物の星座が恋しくなる。

帰還まで、残すところ991年……気の遠くなるような年月が待っている。

迷いに揺さぶられながらじっとただ空を見上げ立ち尽くしている
と、流れ星が北から南へ白い光の尾を引き、彼方へと消えて行く。
私はただ、どうするでもなく、いくつもの流星を見送った。この機
会はきつともう二度と訪れない、流星が閃き、束の間に消えるよう
なもの。外に出れば、愛実と再び同じ道を共に歩むことができるか
もしれない。二人で幸せになって……そんな思いも、頭の片隅には
よぎった。

そうしてどれほど一人で空を見上げていただろうか。

普段は優柔不断な私だが、こればかりは結論を先送りせず返信用
フォームに答えを入力し、ボタンを押し送信した。

『……まだ、私は帰れないや』

退路は迷いと共に、自ら切って捨てた。

第5章 第9話 電が関と菊花紋（後書き）

【第二回公募のお知らせ】

赤井の採用した二人の構築士が、芸名を募集したいようです。

？怒り疲れた密教管区の金剛夜叉明王さん。アバターは明王とは関係のない、新しいものを新調したいようです。気は優しく力持ちな人です。

本人のコメント 「皆様に親しみやすい名前がいいです。それから、新しいアバターのアイデアもいただきたいと思います」

前の管区ではデトロイトメタルシティのクラウザーさんのな立ち位置だったんじゃないかと思えます。

？元ヴァルキリーさん。アバターは前の管区から持つてきて使いますよ。紫髪青目、性格はおしとやかで礼儀正しいお嬢様タイプ。鎧を着たヴァルキリーのアバターで来るそうです。アスガルド大管区にいただけあってべらぼうに強いです。

本人のコメント 「清楚で可憐な名前を募集しております」
さらにとそつなく仕事をこなす、デキる女性のようにです。

【11/21追記】募集を締め切りました。名前を決定いたしました。どうもありがとうございました！

第5章 第10話 グランディア世界競技祭典 開幕

【アガルタ第二十七管区 第3433日目 アガルタ歴9年 3月11日】

【総居住者数 2881名 総信頼率 99%】

少し暖かい日差しの差し込む、薄雲たなびく青空のもと。アガルタ歴9年 3月11日、二十七管区世界の二国一地域の民が集い、現実世界における古代オリンピックにならった第一回 世界競技祭典、その名もグランディアが開幕の日を迎えた。

場所はグランダの東の荒地を瞬く間に開墾し、赤い神の眷属、精霊モフコによって建設された円形競技場。大きさとしては、日本のプロ野球場一つ分ほどだろうか。観客席はフィールド全周を囲み、フィールドは短く刈り込まれた柔らかな草が青々と生い茂る。フィールド上では、短距離走用のトラックのラインが整然と敷かれ、槍投げ競技、格闘技、剣術競技、弓術競技も行われる。カルーア湖での水泳競技、カルーア湖ハーフマラソンなどは赤い神の神殿を拠点に、競技場外で企画されていた。

「本日このよき日に、我らが創造主”赤の神”の御加護のもと、また、青と白の神々の御高覧のもと、世界中から大勢の民が集つてくれたことは主催者として誠に喜ばしく、記念すべき第一回大会をこのように盛大に行うことができることに心よりお礼を申し上げます。創造主たる赤い神の栄光と我らが共栄、モンジャの発展、ネスト・グランダ両国の災厄からの復興を祝し、ここにグランディア第一回大会を開催することを宣言する！」

開催国グランダの君主、十八歳のスオウ一族の正当なる巫女王キ

ララが競技場中央の一段高いステージで、右手を高らかに挙げて開会を宣言。マイクなどなくともキララの声がある場に集った全ての人々の耳に届いたのは、グラフィッククリエーターのモフコが建設したすり鉢状の観客席を持つ競技場の音響効果が優れていたことと、彼女の声が届くよう神々が業を成したからだ。

「おおお、スオウ様！」

「女王様！ スオウ女王様！ 今日もお美しい！」

グラランダの兵士たちからの暑苦しい声援が飛び、女王はにこりと爽やかに笑って声援に応える。

真紅のマントと絢爛豪華な装飾と宝石をあしらった白い巫女装束の盛装に身を包んだキララ女王の右隣には女王と同じ齡でモンジャ集落一の賢者と評される長、ロイ。モンジャ原産の高級な絹織物であつらえた、白いズボンに黄色い上着、紫の綾織りの肩掛け、皮のサンダルという素朴な民族衣装を着ている。そして、左隣は先進国家ネストの王、パウル。普段はみすばらしくない程度の質素ななりをしているが、このときばかりは王権の正当性を示す王冠を戴き、刺繍の入った黒皮の衣に青い毛皮のケープを身につけている。やはり正装であつた。

彼ら国家元首は競技には参加しない。

モンジャの多彩な服飾文化はアジア山岳地帯の少数民族のそれに似て、グラランダは古代ローマ帝国の衣装に似ている。また、ネストは中世東ヨーロッパの服飾、特に男性はハンガリー、女性はパキスタンの民族衣装との融合を髣髴とさせた。競技場の観客席には、二千人を超える観衆、三地域の民族が熱狂した状態で収容されていた。

第一回大会は敷地の広く交通の便が良いグラランダで行われるが、開催国に経済効果をもたらすので、ゆくゆくは国力があればモンジ

ヤヤネストでの開催も検討されている。

そして、この世界の創造主であり守り神たる彼は、競技場の最上段に設けられた席に座し穏やかに彼らを見守っていた。席というより、祭壇と言った方が正しいかもしれない。赤い神の両隣には、青と白の神々が控えている。三神の高覧とあつては、各地区の長たちも気合が入るといふものだ。

「三柱の神々より聖なる恩寵を賜る。大いなる恵みに、皆の者は感謝の祈りをささげよ」

祈りを終えると赤い神が立ち上がり、観衆は彼の威光に黙して頭を垂れる。

『ここに世界の平和と民族融和の徴として神炎を授けます。この焰は風雨に脅かされず、燃え尽きぬよう』

観覧席を立つた三神は一柱ずつ、それぞれ赤、青、白の祝福の炎を両手の中に灯しそつと空に投じた。それらは舞い上がり絡み合い融合して競技場の観客席よりさらに上のアンテナ型の聖火台の上に集まり、白い炎として燃え盛る。それはただの炎ではなく、神炎といえる圧倒的な光量で輝くのだった。

『あなたがたがいつまでも喜びと幸いのうちにあるよう。この祭典を祝福します』

「いいぞ！ 神様！」

「赤い神様！」

「赤い神様に栄光あれ！」

円形の競技場内を割れんばかりの拍手が埋め尽くし、モフコの仕事掛けた壮麗な仕掛け花火が空を覆い尽くすように打ちあがる。光の洪水に酔いしれた競技場は歓喜と興奮の坩堝と化した。

そしてそれを合図として観衆から盛大な拍手に迎えられ各国の選手団が入場、せり上がった中央のステージ上では、この日の為に練習を積んで来たモンジャの民族舞踊やグラランダの演武などが披露され、太鼓のリズムは民心を扇動し、盛り上がりも最高潮に達する。

開会式が順調に進む中、一般観覧席でたまたま居合わせたモンジャの家族とグラランダの鍛冶職人が雑談をしていた。

「いやぁ楽しいなあ、こんなわくわくする催しは初めてだよ。赤い神様のお側にいらっしやる、見慣れない方々は誰だ？」

「ああ、あれはあかいかみさまの、はふ、新しい天使さま、むぐむぐ、だよ」

主食のプチプチ（現実世界のぺんぺん草に似た穀物）のおにぎりをほおばりながら、グラランダ民に説明するモンジャ民。モンジャ民は陽気で素朴な民族性であり友好的だが、いかんせん食い意地が張っている。

モンジャ民といえば、片手に食べ物を持ち、食料袋を提げてそぞろ歩く姿がよく見かけられる。よく動き、よく遊び、よく食べ、悩まない、楽天的な民族だ。

この世界の創造主たる赤い神は、拡大し発展する世界にあまさず恩寵を授けるため、先日、第一使徒エトワールに加え二名の新たな御使いを天国より召喚したと各地域の長に伝えた。

召喚した第二使徒は女使徒、ロベリア・セシリフォリア。

名が長いのでロベリアと呼んでよいとのこと。目もさめるような鮮やかな紫色の髪に、青く涼やかな瞳、煌びやかな銀の風切り羽のある白翼を持つ麗人である。

銀の鎧で身を固めて厳めしい雰囲気ではあるが、口を開けばしとやかに物静かな印象を与える。初の女性使徒とあって、素民たちから注目が集まっていた。

「女天使さまが白銀の鎧を着ておられるが、武術の心得があるんだらうか？ 女子とはいえ只ならぬ闘気をもっておいでのようだ。手合せを願いたいものだなあ」

大国グラランダはもともと軍事国家であるからか、男子はみな武芸に関心がある。女王たるキララが武芸を奨励し、優れた兵士とその家族は税制面などで優遇されているからだ。武官や親衛隊として取り立ててもらいたいと、上昇志向も強い。

「そんなことよりあの女天使さま、一体いつ祝福してくれるんだ？ 何日前からでも並ぶぞ！」

女天使の祝福が気になって仕方がない後ろの席のネストの一団が、そわそわした様子で彼らに尋ねる。

「馬鹿、お前！ 女天使様は金属の鎧を着ておられるから、抱かれ心地は楽しめないぞ。やはりここは白い女神様の祝福を待つしかないだろう」

ロベリアは清楚で籠絡しやすそうに見えながら、実はガードが堅かった。祝福することを前提として27管区に入ってきているので、セクハラされる危険性を考えると鎧姿の方が好都合なのだ。

「女神様は祝福して下さらないんだってよ。この世界は赤い神様の世界だから、よその神様は俺たちに祝福できないんだってパウル王が仰ってたぞ。すごく残念そうに」

ネストの国民性として、パウル王をはじめパズ王子から御家人に至るまで、美女にはめっぼう弱いようだ。会議で理想の美女について延々と数時間も真剣に議論されていたり、理想の裸婦画をリアルに描くために御家人たちが絵筆をとる有様である。それを娘のチピロ王女とミシカ王女が嘆かわしく思っているというのはここだけの話だった。

「俺、赤い神様の祝福じゃなくて女神様がいいんだ……あの豊満で柔らかいお胸にむぎゅっと。ああもうだめ、俺気絶する」

などと言っているネスト民までいる始末だ。それを聞いたモンジャ民がエド肉を頬張りながら、

「そんなこと言ったら、あかいかみさまがすねちやいますよー」

モンジャの民は何だかんだ浮気しつつも、結局は赤い神を一番に慕っていた。基点区画の民は、特に神との強固な信頼関係を持つという特性があるからだろうか。

「赤い神様にもお胸さえあれば、男神と間違えられたりしないのに侘しいものだなあ」

ふと、嘆かわしそうにこぼすネスト民。

「何冗談言ってるんですかー、あかいかみさまが女神のわけないじゃないですかーやだー」

「えっ！ 赤い神様って女神だろ?! お胸がないだけで！ 嘘だと言ってくれ！」

隣で話を聞いていて、目を丸くするネストのシツジ牧場の主。

「えっ!?!」

固まるモンジャの家族。一部のネスト民はどうやら、モンジャ民がツッコミに困る勘違いをしていた。ネスト民の幻想が打ち砕かれた瞬間だった。

別の場所では。

「ねえねえ、あんた。あちらの新しい男天使様も、遅しくていい男だよねえ！」

そう言っただけで恥ずかしそうに顔を赤らめては水を向けるモンジャの婦人。民族衣装ではなく、ネストのトレンドなニットを着てオシャレをしていた。モンジャ民も衣食住生活も、他地区と融合し近代化、さらに独自の文化を成している。

ロベリアと同じく赤い神のすぐ隣で律儀に片膝をついたまま頭を垂れて待てる新しい第三使徒は、ヤクシャといった。緑色の瞳の、武

人然とした逞しい男使徒だ。ロベリアが銀の鎧ならば、こちらは筋肉を鎧としているかのような肉体をして、ワシ羽に似た大きな濃茶色の双翼を背負っている。グランダの兵士たちがその肉体美に憧れ、モンジャの若い女達はワイルドな男性がタイプだからか、黄色い歓声をあげていた。

「あたし、今度ヤクシャさまの祝福の列にならんじゃあつかなく」
「あんたも？ 私もすごく好み、ぬけがけはやめてよ」
「そんな具合だった。おめでたいものである。」

そうかと思えば、競技場の観客席上段には露店バザーが出ている。以前のように物々交換ではなく、貨幣で買い物をする民の姿が目立った。

この大会に合わせ、合議の結果、モンジャ、グランダ、ネスト共通の度量衡、および共通の貨幣が赤い神の元で定められ、早くも貨幣が流通し始めていた。鑄造までの時間はかからなかった。用いられたのは、三つの地域で馴染みのある鉄貨であり、その最初の経済への供給量は赤い神の神殿で定められた。赤い神によって鑄造された貨幣は祝福とお守りの効果を持つので、十分に信用に足る貨幣価値を持っている。

正貨は赤い神の神殿の刻印が刻まれ、暗闇で赤い光を放つので容易に偽物と見分けがつく。その貨幣をもとに代表的な特産物には一つ一つ値段が付けられ、各地の産物と等価交換していたものはおのずと価格が決まった。

数学の得意な理系の多いモンジャの民は素早く計算ができたので、買い物の際には重用されている。モンジャの幼い子供も、アルバイト感覚で計算の苦手なネストやグランダの商人に雇われたりしていた。

おいしそうなブリル肉の串焼きを競技場警備のグランダ兵に売りに来たモンジャの少年がいた。ケンタ・キーだ。モンジャの民には家族ごとに赤い神から姓が与えられた。ちなみにロイはフォレスト、メグはバルという。

「警備ご苦労さまです。ブリル肉でも食べます？ 一串120テツになります！」

テツというのは新たに決まった貨幣の単位で、鉄が由来らしい。

「ブリル肉で120テツとは高すぎる！ 70テツにまける」

「はあ、わかりました。めでたい日だから仕方ないっ！ では特別に、70テツは無理ですが、2つ買ってくれたら240テツから全体の3割引にしましょう」

「そんなに割引してくれるのか！？ やあ、赤い神の祭りだと気が前がいいなモンジャ民は」

実際は損をしているグランダ兵であるが、気付かないので平和なものである。一見、原始生活を送っているように見えるモンジャ民であるが、他地区と比べ地味に一番基礎学力が高かったりする。算数の苦手なグランダ民ネスト民相手に、モンジャ民は薄利多売の方法で利益を上げていた。

「エド肉もありますよ！ エドのエド肉ー！ 一串200テツです！」

そうかと思えばモンジャの専門狩人と契約して、入手した高級食材エド肉を高値で売りさばくグランダの新興商人もいた。エド肉は流通が限られ庶民の口にはなかなか入らない。

「ああ、しまった、エド肉を買えばよかった！」

競技場では開会式も終わり選手が退場して、さっそく第一日目の競技が始まった。

第一日目。槍投げ、男子。

モンジャ民の得意とする種目である。

モンジャからは二十人のやり投げの選手が名乗りを上げた。グラ
ンディアに予選はなく、いきなり本選だ。

優勝の大本命は、普段から槍や銛を扱うことに長けた最初の狩人
ヤスの直弟子、ソミオとソミタの兄弟である。彼らは重い石の銛を
用いて、伝統的な手法でモンジャの草原を漂泊しながら最強の肉食
獣エドを狩る。

モンジャ内外で高まる高級食材エド肉の需要と共に兼業狩人が増
えてきた中で、野性味あふれる猟法で頑なに専業を貫く。彼ら兄弟
は新規参入した他の人数の多い狩人グループと比較しても、月単位
の収穫量が飛びぬけていた。

特に、弟のソミタはモンジャ屈指の怪力の持ち主であるが天然な
性格で、悪気はないのに銛を飛ばしすぎて赤い神に刺さったとか、
空を飛ぶ焼人を射ようとしたとか、そんな恐ろしい伝説も数々残さ
れている。知る人ぞ知るモンジャの猛者である。兄のソミオはソミ
タの破天荒さの陰に隠れて地味で目立たないが、これまた超人的な
ポテンシャルを持っている。

兄弟が手にするのは勿論、彼らこだわりのオーソドックスな石の銛
である。ただし、空気抵抗を極力減少させるため、小さな刃をつけ
てきて重心を調節していた。ソミタ曰く「いしのもりはまだいける」
のだそうだ。ちなみに、ソミタの崇拜する師匠のヤスは、石の銛に
こだわりはなく、とつくに鉄の銛を使っていたという。

そのヤスだが、狩人を引退し漁師に転向したにも関わらず、この
槍投げに選手として参加していた。持病の腰痛も完治し、昔取った
杵柄で銛を握る気になったようだ。重量級のヤスが気軽に参加でき
る競技というと槍投げしかないのだ。槍の重さの下限と長さが指定

されているが形状は問わないというルールであったため、家族の期待を受けて愛用の鉄の槍を携えての参加である。引退したとはいえまだ30台、若い者には負けんという気迫がにじみ出ている。

力自慢揃いのモンジャ民を迎え撃つは、グランダ兵から選抜された女王親衛隊、特にヌーベル副隊長率いる重装歩兵部隊。彼らは「弱者はグランダには必要ない」とまで言い渡され、無残な成績を残した者には容赦のないお仕置き、例えばカルーア湖フルマラソン10週など地獄のメニューが待っているということ、兵士たちの気合も違う。

それはないと何度も言われているのに性懲りもなく、優勝すれば女神様に祝福してもらえるかもしれないという淡い期待を胸に名乗りを上げた、腕に覚えのあるネストの御家人、そしてネスト一の剛腕、パズ王子も参加している。彼らは軽量化されたアルミニウム合金の槍を準備していた。

持参した槍が規格重量に適合しているかをチェックした後、公正なる抽選を終え、選手の試技順が決まった。ロイをはじめとする運営スタッフが裏で甲斐甲斐しく働き、計測するのも彼らである。モンジャ民の計測は正確無比だ。

回転投法は認められない。計二回の投擲である、助走路の踏切を超えてはならないなど、ルールを最終確認し、選手たちは一回目の投擲を前にウォーミングアップに余念がない。

「なー、にいちゃん。モリがそとにとんでいったら、どうすればいいんだ？」

などと無表情で兄に訊ねる弟ソミタに対して、弟よりはいくらかほど常識的な兄のソミオは

「お前なら飛ばしかねんな。外に飛んで行ったら、外まで距離をはかりにいつてもらえばいいかな」

「そーなのかー」

聞いているのか聞いていないのか分からない調子でソミタが答える。この野生児は、兄以外とは会話が殆ど成立しない。

「ソミオーソミタ、観客席に撃ちこむんじゃないぞー」

ヤスはフォームを確認し踏み切りを調整して肩慣らしだ。ヤスは腰を痛めてからというもの、準備運動に念入りに取り組む。

「って、あーあ！」

ヤスが忠告した時にはすでに遅し。ソミタの放った槍が観客席に吸い込まれてゆく。

使徒と言葉を交わしていた赤い神の第六感的な何かが、本能的に民の危機を察知したのだろうか。

赤い神は振り向きざまに観客席全周に物理結界を展開した。石の鉢はガチンと結界にぶつかって、そのまま観客席に跳ね返って飛んでゆこうとしていたが、赤い神の手に吸い寄せられ難を逃れた。まるで赤い神を狙ったかのようなソミタの暴投だ。それは往々にして起こった。

「おー。てがすべったなー」

などと悪びれもせずぬかしたソミタに、引き攣った笑顔で鉢を投げ返す赤い神。

「手が滑ったら仕方がないな。気をつけるよ」

モンジャの民は単純であった。

それを見たロイが、槍投げはどう考えてもモンジャの草原でやるべきだったと頭を抱えたという。

ともあれ各国代表の男たちの意地とプライドを賭けた槍投げ、決戦の火蓋が切って落とされた。

*

いやー、ついに第一回グランディアが開催されました。世界初の国際大会ですよ。初日はやり投げ、男子です。

実況はおなじみ、赤井がお送りしております。フィールドではいよいよ競技が行われようとしているところ。ソミオソミタの飛距離がヤバイので、急遽モフコ先輩が観客席の一部をなくして、野外まで飛ばせるように競技場を改造した、グラフィッククリエイターさまさまだ。私は観客席を結界で守ってる。これでファールしても大丈夫だ。

私らVIP席で雑談しながら観戦してっけど、結界張ってるので素民達には聞こえてないからね。

何でグランディアって言うかって、グランダ発祥だからグランディア。オリンピア発祥でオリンピックみたいなもんです。で、私はスタジアム最上段の観覧席、てか素民の皆様によって花輪で飾り付けされた祭壇にいます。白さん蒼さん、そして私の使徒さんたちと一緒に。まあ実際は、怪我人が出ないように、喧嘩が起こらないように見張ってる監視員的な位置づけですけど。

前から古代オリンピック的な催し、やってみたかったから念願叶って嬉しい。

これを機に世界中の皆が仲良くなっしてほしいし、スポーツは国家や人種の垣根を越えると思うんだ。

……多少心配なのは観客のフリーガン化かな。

主に喧嘩っ早いグランダ民が乱闘とか始めなきやいいけど。にしても

『うーん、次回からは基準変えてもつと飛ばない槍にしてもらいましょうかね。計測が大変ですよね』

ソミオとソミタがやる気満々なので、私は若干後悔している。專業狩人の投擲力ってマジでびびるよ。私も何回か事故で串刺しにさ

れそうになったことあるし……物理結界がなければ危うくやられてたな。ぼつとしてたエトワール先輩に命中して矢ガモみたいになつてたのもシユールだけどいい思い出。

「私にとつてはちつともいい思い出じゃないぞ赤井君」

先輩は勘弁してくれと苦笑してる。

「そみたんが出てくるとは思わなかったからねえ。あの子、エドのことしか考えてないから」

モフコ先輩は毛玉姿で私の頭の上でモチみたいに垂れてる。

「賞品はエド肉一年分とかだと思つたんでしようかね。それなら出てきそうではありませんが」

そんな遣り取りをしてたら蒼さんが

「赤いの、俺寝てるから誰か怪我人出たら起こして」

「むしろ怪我人が出ないことを祈りますが」

蒼さんはグランディアにさほど興味がならしいけど、怪我をした選手の救護要員として来てくれた。蒼さんは個人競技より団体競技が好きなんだそう。熱狂的なサッカーファンらしい。団体戦はなんか戦争に発展したらいけないから徐々にね。白さんはお遊び的なイベントでも気を抜かず、何か色々と参考になりそうな事をメモを取っている。真面目な人だ。

「競技祭典は思いつきませんでした。神殿で美術展を行ったことならあります」

「美術展も面白そうですね、今度うちでも企画してみようと思います。大変な作品が多数寄せられちゃうかもしれませんが」

28管区でもこういうスポーツイベントやりたいんだってさ。28管区諸国はコハクの治める国、神聖エルド帝国とあまり仲良くないらしいから……緊張緩和の為にだね。

まあ、私の目指したオリムピックというよりは運動会的なノリになっちゃってますけど。

『ロベリアさん、ヤクシャさん』

私は、開会式が終わっても石像のように私の傍近くで片膝をつき、微動だにせず控えている二人の使徒に声をかけた。エトワール先輩は向こうでこそそ妻と通信してるってのに、だ。先輩、帰りにお子さんのミルク買ってきてと頼まれてますね聞こえてますよ。でもそれはいいとして、

そうです。待望の新使徒さんたち二人、ヤクシャさんとロベリアさんです！ なんですけど

『あの、立ってください。もう開会式は終わったので固くならず、寛いで楽しんでくださいね』

『はいよー』

と、軽い調子で立ち上がるヤクシャさんとは対照的に

『わが主よ。寛大なるお心遣い、有難き幸せにございます』

鈴を振るような、柔らかで女性らしい美声が耳に心地いい。すつと胸に手を置き忠誠を示す動作も指先までそろって洗練されてる。

『えっと、ロベリアさん？ 普通に話してもらえると嬉しいかな…
…なんて』

『そーだよーロベリアちゃん。赤井さんだよ？ ぜんっぜん敬語なんていらないよー』

モフコ先輩は黙っててもらえませんかね。

『そ、そういうわけには……』

ロベリアさんはヴァルキリーを意識したデザインの銀の鎧を着てる、青と白のグラデーシヨンの、装飾の入ったスカートっぽいやつ。メタルプレート着ているからかガード固そうだけど、凄く控えめを生真面目で礼儀正しい人だったよ。その分、何だか言葉づかいから何から丁寧すぎて、律儀な女騎士って感じですけど。他の使徒さんたちとは普通に会話できるみたいなのに、何故か私にだけはこんな言葉遣いで、日本語にも慣れてないからか時々二重敬語になったり

してる。

……やり辛いから普通でいいんだけどなあ。

『ロベリアさんは忠実に使徒としての仕事してますね。自分も見習わなきゃな』

いい笑顔で微笑みロベリアさんをフォローするヤクシャさんは身長2メートル級。見上げると超デカい。ハンマー投げ選手みたいな逆三体型な上半身をタイトな黒いプレートアーマーの中に包み、腕はむきだして、腰に立派な銀の大剣を佩き、茶色のレザーパンツ、メタルで覆われたレザーブーツを穿いている。剣士をイメージしてるんだろっかこの衣装。

明王役で怒りすぎて疲れたと言っていたけど、茶毛でほりの深い緑色の優しい瞳をして、この世界に来てからずっと愛想よく笑顔をたやさない。完璧に前の管区の反動ですよねこれ。時々鏡で眉間に縦皺入っていないかチェックしてた、面白い人だ。『自分、この管区で楽しみながら頑張りますんで』とか言って、照れ臭そうに笑ってた。見た目通りいい人っぽい。難点は彼の隣に並ぶと何か私が貧相に見えるってことぐらい。

彼ら、前管区からのしきたりなのか、数日前にログインするなり私に対して行き過ぎじゃないかと思うほど恭順な態度で接してきてビビった。特にロベリアさんなんて跪いていきなり服従の構えだったしな。ちよ、前の管区ってそんなに厳しかったの！？ 主神に対してその態度って他管区では普通だったりする？

というわけで、私にはそんなことしないでいいですよと言ったけど、ロベリアさんは私に対して緊張してるみたいで接し方がぎこちない。……私の意に沿えるよう頑張りますとは仰る。エトワール先輩とモフコ先輩を見てくださいよ、あんなフランクな調子でいいで

すよ。肩の力を抜いて……とは言ってみただけ。すると『優しい主神様にお仕えできて、私めは幸せ者です』と、はらはらと泣いてしまわれた。

ロベリアさん、本名ブリジット・ドーソンさんの涙の理由がさっぱり分からないでいたら、何でも、前の職場では役柄の中ではないえ、奴隷のようにこき使われたり、一般利用者から欲望の対象とされてセクハラされて辛かったみたいだよ、とモフコ先輩が教えてくれた。そんなトラウマになるような職場環境ってどうなの。アスガルド管区怖すぎっしょ……何か、ロベリアさんが「優しい上司」求めてこっちに移籍してきたって事情がちょっと分かった気がした。本人は多くは語らないし前の管区を悪くも言わないけど。

前の主神に何かされてトラウマになったのかもしれないけど、私は何もしないし一刻も早くうちとけて仲良くなりたところだ。そのうちトラウマも癒えたらいいな。

一方、ヤクシャさんは初日こそ畏まってたけど、空気読むのが上手くて、人前では服従の姿勢を見せるけど、素民がいないときは今みたいに普通に話してくれる。最初は私も遠慮してヤクシャ先輩って呼んでたら、『先輩なんてつけなくていいですよ、あなた自分の上司じゃないすか』と言われた。

一人称は「自分」で体育会系な感じ、どんな時でもにこにこしてる。ヤクシャさん今笑うところじゃないですよ、という場面でも頬の筋肉が緩んで笑顔だったりするけどご愛嬌。爽やかで朗らかなキラキラがウケて、早くもモンジャの女性の中では私とエトワール先輩をおさえ「抱かれない男 アガルタ歴9年版」で人気No.1に輝いてしまった。

不動の一位だった私の威厳はどこへやら。

本名は砂谷勇司^{さたに ゆうじ}、広島県民だつて。モンジャ焼きもいいけど広島風お好み焼きおいしいすよつてPRされると心が揺らいでしまった……因縁のB級グルメ東西対決をすべく、近いうちに構築士仲間でお好み焼き、モンジャパーティーを構想してました。そうしてる間に、観客席からひととき大きな歓声が沸き起こつた。すかさず計測斑が結び目のたくさんついたロープを持って走る。若いグランダ兵の第一投目、現代の飛距離でいうところの約六十メートルを記録したみたいだ。スコアボードにでかかど選手の名前のプレートが躍り出る。

恐るべし、なんといきなり現実世界における女子の世界記録をマーク。何この高水準！？ いきなりリアルオリンピックレベルなんだけど、いつも戦争準備してる軍事国家グランダ凄すぎ！ 加えてグランダ勢は大会参加が決まつてから徹底的に筋力トレーニングを積んで来たらしい。

私があつけにとられるそんな中、グランダ勢は着実に大記録を作つてゆく。個人競技だから国別優勝とかなんだけど、やっぱり職業軍人の強さは圧倒的。時々踏み切りが合わない人もいるけど、フィールドのときはやり直しが認められるので、ハイレベルな争いを繰り広げている。序盤はモンジャの一般青年、農民が主だったこともあり、モンジャは食い込む隙がなかった。

大躍進のグランダ兵に、キララもご満悦。

最後、駄目押しとばかりに放たれたグランダのヌーベル副隊長の一投は、美しい放物線を描き、伸びて伸びてフィールドの果てに突き刺さつた。記録は、

「40.3シンです！（75m）」

キターー大記録！　ちなみにシン、てのは私の身長186cmを基準にしちゃった長さの単位ね。私何とか基準単位をメートルに近づけようと頑張ったけど無駄だった。

『神様ー、女子世界記録を上回りましたね、しかも現実世界の槍より重い条件で』

ヤクシャさんが感心してる。

『誰が総合優勝するのは、非常に気になります。キララがその人の嫁になっちゃうかもしれないですよ！』

そう、今回の競技祭典で婚活してる王族が二人もいる。ミシカとキララだ。ミシカはよさげな人を探すぐらいのニュアンスだけど、特にキララなんて、優勝者に求婚すると国中に発表しちゃった。

だから、逆玉目指してる選手も沢山いるはずなんだ。この十日間で、キララの結婚相手が決まってしまうというわけで、私も穏やかではられない。

しかし私がモンジャの狩人の野生の底力を思い知ったのは、その直後のことだった。

第5章 第10話 グランディア世界競技祭典 開幕（後書き）

入院中なう、明日は手術です。

何とか更新間に合いました！

スマホから打ったのでレイアウトおかしかったらすみません。

お返事は明後日以降になると思います。抽選の結果、ロベリアの名とヤクシャの名をいただきました！

名前公募に参加してくださった方、どうもありがとうございました！

第5章 第11話 グランディア世界競技祭典 やり投げ・男子

夕刻を過ぎ、街に光彩が溢れかえると、首都空速道路は次第に混雑しはじめた。

我が家へ急ぐ自家飛行車列やタクシーは蟻の行列のように犇めき合い、渋滞に押し流されてゆく公用車の中には沈鬱とした空気が立ち込めている。首元に白いストールを巻いた冴島 彩奈は背筋を伸ばし、ルーフのドームシールドから空を見上げる。吸い込まれそうな白濁した空に目を奪われながら、柔らかな黒革のシートに背を預けていた。

「あらあ……局長、粉雪ですよ」

地上から空へ、吸い上げては落ちる。

流れ、巡り、水の惑星を潤す。22世紀の清浄な大気を滑り落ちたこの水は旧世紀のそれとは大きく異なる。氷晶核がエアロゾルではなく氷核活性細菌であるという点では、限りなく蒸留水に近い。

この時代の夕焼けは赤くなく、黄味が強く勝っている。昼間の浄化された蒼穹も、レイリー散乱が低いため、群青をしている。今は青空は見えないが。

空気も、水も、文化や情報ですら、ここでは透明で清浄すぎるのだ。

人為的に誘導され、東京全域を白く覆い、接地する瞬間には消えてしまう幻に冴島は情緒を感じない。

まるで仮想世界の構造物。丁寧に手を加えられた人工の産物として、既定の量だけ降り決められた時間に止む。時間通りに止まなければ、都知事が都民に謝罪しなければならぬ、そんな世情だ。

時刻は午後五時半を回り、時速120kmで飛んでゆく街並み。

空駅周辺の雑踏。人々の足元に伸びる長い影の黒。頭上を駆け抜ける流線形をした満員電車のライトのシアン。羽毛逆立て都心の公園のビオトープで川底をついばむ、シラサギの白。網状に建設された多目的エレベータが展開する、半透明のエアフィールド。超高層オフィスビル間を連絡し、都庁と霞ヶ関を中心にハブ状に連結された多段空中回廊の透明迷彩。行き交う都民はスカイウォーカーだ。

ここは、旧世紀の橙色の世界に住んでいた人間が未来予想の中で掃いて捨てるほどに書き連ねた、薄汚れ陰惨としたディスプレイなどではなく、彼らが青色の時間の中に最初に描いた、希望に満ちた未来かもしれない。

しかし今や限りなく神に近づいた人間は、氾濫する情報にも脳を加速度的に適応させ、

並列化された共同体を形成し、目醒めながらにして無味無臭で灰色の夢を見ているのだ。

赤井構築士から現実世界帰還拒否のメールを受け、大阪都おおさかにあるアガルタ関西施設での定例会合で内調竹原に直接辞退の旨を伝えた死後福祉局 局長の円山は、冴島とともに東京に戻る途中だった。公用車の車中に、アガルタ高官が二名。円山は頭をかかえるように両手で頭頂部の白髪頭を撫でつけ、首裏で両手を組んだ。沸々とした苛立ちを押し殺しているかのように見えた。

「一体、この国で何が起ころうというんだ」

「赤井構築士が現実帰還を拒否したことで、何か大変な事態に発展しそうですか」

冴島は、きまり悪そうに咳払いをした。冴島は赤井の決断を全面

的に支持していたが、省益を著しく損なったであろうことは明らかだったからだ。

自動運転に切り替えた二人きりの車内のフロントガラスには、先ほどからニュースが流れっぱなしになっていた。ここ数年、アガルタの話題がトップニュースとして取り上げられる機会がとみに増えた。今日も天皇陛下や皇族のアガルタ利用に関する動静を伝えている。一般管区か、皇室専用アガルタか。皇室典範再改正も視野に入れた議論が、国会や討論番組で繰り広げられていた。

それらの議論の中心に、赤井構築士が関与しているということを彼らは微塵も知らずに、だ。

立体映像の中で熱弁を振るう、仮想世界の構築を退化への序曲だと憂う保守派の有識者、様々な立場からの無責任な意見を述べるパネリスト、弁明に回る与野党の政治家たち。

彼らは云う。墮落を望む者、人生を終えたいと願う者、生きる希望を捨てた者、仮想世界に夢を見出す者は隠居し、「異世界」に住する。それらは数多くの社会問題を解決したが、同時に人々の人生観や死生観を不安定にしたと。生きる意欲に満ちた人材は現実世界に残り、安息を必要とする者は逝く。ある種世界規模で行われる社会保障費とエネルギーコスト削減政策、結果的には選民政策であるのかもしれない。その功罪の評価はまだ、終わっていない。

資源は生者の為に利用され、現実世界は若く意欲のある者達の生産活動の場となる。アガルタ利用者がこの調子で増加した場合、現実世界人口は減少し、国家財政は五年後に黒字に転じるだろうとの見通しだ。

『アガルタは隠居生活には魅力的ですが、皮肉なものではありませんね。国に、死んで下さいと言われていたようなものですから』

『いずれにしても人類の長寿命化は社会に歪みを残すことになりま

した。SOM Aの接種にはもつと慎重になってもよかつたのでは」
『その当時は誰もそれを予測できなかったのですし、国民に信を問いました。SOM Aソーマの接種をやめたところで、長寿命化は遺伝するようになつたんですから』

口を挟む与党の女性議員。紫ぶちの眼鏡をかけているが、視力が悪いわけではなく資料参照用の眼鏡型デバイスで、答弁の資料をスツクしていたりする。

『技術的にはSOM Aの遺伝を阻害することで元に戻すことはできる筈です。私たちの生理的平均寿命が百歳を切っていた頃に戻れま
すよ……ただ、そのことに目を背けている。国民は受け入れられま
すか?』

その点には、誰も触れなかつた。だから戻れないのだ。……かつて、歴史上の権力者たちが不老不死の妙薬を求め足掻いてきたように。アガルタが構築されるまでは誰も、来世の存在を心の底から認めてはいなかつたから。

痛い部分を指摘され、一様に口を閉ざす出演者たちを論破するかの
ように、

『いかがですか。誰も、短命になりたいとは言わないでしょう?だから長寿命化とアガルタ、両輪ありきで考えないといけないんです。そして日本の皇族も、海外では王族も利用するという話になつて
いるんです。北欧では既に一部の王族が身元を隠して一般管区に入居しておられます。責任転嫁をしても仕方がないでしょう、問題は既に次段階に入っています、それで』

『討論の途中ですが、ここでお時間となつてしまいました。次週もこのテーマでお届けしたいと思います』

どう見ても二十歳代にしか見えない、没個性的な面立ちをした六

十歳代の男性司会者が、強引に番組を打ち切った。

確実に逝ける来世として、死に脅かされることなく永遠を過ごすことのできるアガルタを手にした今。

皮肉なもので、長寿命化と人口増加に歯止めをかけることが可能となりつつある。アガルタ利用者の入居時平均年齢は男性64.2歳、女性61.1歳。長寿命化前の平均寿命より短いのだ。

アガルタを将来利用しよう計画している国民は実に八割にも上り、さらに利用率を上げれば、国民の平均寿命をこの水準に落とし込むこともできる。

現世に残った国民は不老で百歳まで勤労できる肉体を持ち、熟練労働者として納税しつづける。

しかし旧世紀を振り返って見れば、人類長寿命化のプロセスは拙速で、強引であった。

今を遡ること一世紀あまり前、人類長寿命化は前世紀の先進国における少子高齢化を起因とするGDPに対する医療費の圧迫の解消、発展途上国と低所得者層の医療弱者への救済策として、人為的な手法で引き起こされた。

疾病を治療する費用が莫大であるというのなら、人を病にしなければいいのだ。

公衆衛生、および予防医学分野からの、至極尤もな発想である。

2027年、米国FDAで承認されたSOMA（疾患治療関連酵素群、染色体維持ユニット、DNA修復関連酵素群、dsRNA多種標的万能ワクチン）と呼ばれる万能予防接種がWHOで認可されたことを受け、世界各国で次々とSOMA予防接種が法制化された。自然界の摂理に反したけもの道を、人類は自ら突き進み始めたのだ。

2020年以降に出生した世界人口の約90%が法令によって7

歳までにSOMA予防接種を受けた。また、成人に対しての接種も積極的に行われた。この結果、悪性腫瘍を含む三大成人病、感染症、遺伝関連疾患は完全に人類によって駆逐され、人が病で死ぬ長き時代の終焉を迎える。人々は歡喜に酔いしれた。

SOMAの創薬は比較的安価であり、感染症予防ワクチンと共に接種することができた。

SOMAの普及によってまず発展途上国の幼児死亡率が減少し、生存曲線は右へ右へと傾ぎ、世界的な少産少死から多産少死へ推移した。排卵の温存や遺伝的劣化の修復の結果、妊娠可能期間の大幅な延長によって先進国の少子化も解消され、あらゆる出生問題を解消したかに見えた。

そう、SOMAが予期せぬ作用を持たなければ。

というのは、このSOMAが胎盤を介し75%の確率で次世代に伝播するばかりか、産子に遺伝することが判明した。つまり、SOMAを接種した女性の産んだ大多数の子供は母親と同じく疾患抵抗性も持つが、老化が起らず長寿化するようになったのである。この問題は、動物実験では検証できなかったものだった。警鐘を鳴らした有識者たちもいたが異端視され、各国政府によって押し切られた結果のことだ。

2133年現在。SOMA第二世代と呼ばれる長寿化した人々は全世界で60%以上を占め、現在もなお増え続けている。SOMAの接種を拒んだ高齢者は旧世紀のうちに死亡し、現代では老人らしい老人、腰が曲がり、皺のあり、歯の抜けた、このような人々に日本で遭遇する機会は滅多にない。

ひとたび不老長寿命を経験してしまうと、元の状態に戻るのには困

難をきわめた。

各国政府は人権団体などの活動や国民の強い反発によってSOMAの接種を中止することが困難となった。SOMAを接種をしないと寿命が確実に短縮されるとなれば、一度手に入れた不老長寿を手放したいと考える人間が殆どいなかったということは、各国で実施された国民投票によって明らかだった。果ては宗教者や環境保護団体ですら延命を望んできた。そんな経緯があつて

「今から話すことは、伊藤には言ってくれるなよ」

円山はシートに深く背を預け、腹の底から溜息を吐き出す。円山もまた、アガルタ絡みの懸案を多く抱えている。一つ一つ片付かない仕事と、今回のことで増えた悩み事に疲れ果てているのだろう。

「ええ口が裂けても。それに伊藤はまた仮想世界に潜るようですよ、そちらで手一杯でしょう」

「やれやれ、夫婦だというのに他人事のようにだな」

「では局長も奥様にアガルタのことをお話になるのですか？ 仕事と夫婦関係は別のものです」

冴島は涼やかな目を細めて上品に微笑む。どうやら円山が妻に仕事内容の詳細を打ち明けたこともなかった様子だ。

「伊藤はそのうち人間やめるんじゃないか」

「それならそれで好きにしろと、常々申しております。それに私たちは仮想世界で出会い、私は神様であつた主人に惚れて結婚しましたのよ。ずっとそのままだったって構いませんわ」

「君という嫁はまったく、男の肝を潰すな」

創世神・天御中主神のAvatarに、相転星（SCM-STAR）。一流の道具を扱う一流の構築士。管区開闢は順調に進み、プロジェクトマネージャーとしての仕事にも支障はないだろう。冴島は伊藤がどこにいようと「元気で」さえいれば、頓着しないようだった。

「それはともかく、赤井構築士の件ですが、彼は単純に彼の意向を示しただけです。皇族専用管区へ回す構築士は彼でなくても構わないでしょう。彼が固辞したとて、局長が内調から何か言われる謂れはありませんわ」

冴島はつんと口をとがらせ、控えめに脚を組み替える。肉感的な白いブーツに包まれた形のよい脚が、グレーのコート下から蠱惑的にすらりと伸びた。

「そういう話だと思っていたんだが……それじゃ済まないんだよ」
円山はカードサイズの複合モバイルを懐から取り出し、次の予定までに暫く時間があることを確認すると、おもむろに切り出した。冴島の口のかたさを、信頼してのことだ。

「結論から言うと、内調が赤井を120億で引き抜きたがっていたのは、皇族管区絡みの問題ではなかった。竹原と直接話して分かった」

「はあ……では何に絡んだ問題です？」

「クーデターだ。……アガルタの構築士が利用されようとしている。特に、赤井構築士は格好の標的とされている。だそうだ」

いつも物静かかつ聡明で人当たりの良い円山だが、またしても頭を抱え込んでしまった。

時代錯誤も甚だしい単語が飛びだし、冴島も思わず失笑してしまふ。

「クーデターですか。誇張ではなくて、ですか」

「陳腐きわまりないが、誇張ではないそうだ」

では構築士たちを守るのが厚労省の仕事ではないか、こちらは万全の警備体制で臨んでいる、……冴島は決然としている。

「厚労省あるいは政府中枢に、その加担者が少なからず潜んでいる

としたら？ 一体誰が守るんだ、彼らを。 冴島君……いつの世にも狂気じみた事を本気で考える馬鹿な輩が、世の中にはいるんだ」
円山はもともと赤ら顔だったのだが、今日はすっかり血の気がひいているように見えた。

「想像してくれ。もし……アガルタの神々が、現実世界に存在したら」

その空気は、瞬時に冴島にも伝染する。

「局長、一体何を仰っているのですか……」

冴島は円山に指示されたように、冷静に考えてみる……名実ともに日本アガルタ最強のアバター、天御中主神、宇宙をすら開闢する彼が現実世界に出たらどうなる。演算性能は人類を遙かに超越し、能力を持ち、人心をいともたやすく看破、マインドコントロールで掌握し、半実体の神体は天空を舞い、量子転送を駆使し空間を跳び越え、死なず、文明を灰燼に変える。それは、仮想世界だからこそ存在を許される、万能にして究極の生命体。

アバター性能を現実世界で完全には再現できなかったとしても、一個体レベルで核兵器の威力をはるかに凌ぐサイボーグとなりうることは確実視される。記憶転送技術を用いて肉体から自我を移す。そして、アバターを現実世界で再現するための技術は、核を、量子を、熱を、生身で扱うことができることを……意味した。

円山は首を左右に振り、悪夢でも見ているような顔をしている。

脆弱な人間の肉体。高度なロボティクス。次世代サイボーグ技術の融合。

それらを結び付けるクロスリンカーが、アガルタが厳密に管理し独占している記憶転送技術である。現実世界に流出したらどうなる？ 円山はそう言うのだ。

「しかし、完全な記憶転送技術は流出していません。管理は行き届いています」

「そうだよ。だからどうしても、人格を損なわずアガルタに記憶転送された構築士のデータが必要なんだ。彼らは、”完全な自我”を強化義体に移そうとしているわけなんだから」

冴島は息を飲む。クーデターの標的とされている人物を特定しつづけたからだ。

冴島の諒解を察した円山は話を続ける。

「奴らは神になろうとしているんだ。この現実世界において……。その過程で天皇家も狙われていた……」

天照大御神を皇祖神とし、紀元前7世紀から二千年日本国を統治してきたとされる王朝、天皇家。

かつて幾度となく利用されてきたように、担がれるのか、あるいは廃されるか。

「奴らが最も必要としている、人間の人格を維持したまま神のAvatarに乗った構築士の情報は」

「局長……それは……」

「そう、彼しかいないんだよ」

思わず小さく悲鳴をあげた冴島は、円山が先ほど頭を抱えていた心情を解した。

「分かっている。万が一があってはいけない、赤井構築士の家族、友人、係累らを緊急に保護しなければならぬ」

手遅れでなければいいが。だから内調は、赤井構築士を仮想世界から引き揚げさせるのが根本的解決に繋がると判断したのだと、真偽のほどはともかく、内調に理があった。

そう、赤井をログアウトさせて人間に戻してしまえばいい。
肉体と記憶が別々に切り離されていなければ、記憶だけを奪うことはできない。

そうなれば誘拐されて再ログインをさせたところで、二度とその状態は再現されないだろう。

彼の、ログインしたままのデータが狙われているのだ。

「赤井構築士を一刻も早く現実世界に戻さなければ」

「……その情報の真贋を、検証してからにしましょう」

やっとそう返した冴島も、今度は異を唱えることはできなかった。

*

【アガルタ第二十七管区 第3433日目 アガルタ歴9年 3月11日】

【総居住者数 2881名 総信頼率 99%】

全国のお茶の間の皆様見てる！？ 赤井です。

こちらはグランディア第一日目、槍投げ、男子の模様をお届けしています。構築士皆でビールと枝豆食べながら観戦したい気分。アツアのモンジャも一緒にね。

どこまで話したっけ。前回、さらっと発表した王族の婚活の件？
あー、あれマジです。

もともと女系王族であるグランダの巫女王は強い子孫をもつける為、グランダ最強の戦士を王配として迎えるしきたりがあったそうで、18歳のキララも伝統にのっとりお婿さん募集を始めるんだそうだ。大体、20歳ぐらいまでに王配を見つけないといけないし、

グランダ国民もキララのお婿さんが決まるのを心待ちにしてるらしい。

キララさん曰く、「国内最強の戦士より世界最強の戦士の方が強いに決まっております！」

とのことで、今回のグランディアの優勝者に求婚するつもりらしい。相手の顔も見えないのにそんな単純でいいのか？

で、この大会で優勝者が出るのは避けられないわけで、キララの王配も10日間で決まっちゃう。だから私は密かに、「既婚者が優勝しますように〜既婚者〜！ 既婚者こい〜！」と祈ってる。まあ仮に求婚したとしても、断られる可能性もあるけどな。そっちのパターンも怖い。断った人、キララ命なグランダ兵にフルボッコ確実。さらに、ネスト王女ミシカまでも来年までには国の伝統でお婿さん見つけないといけないって理由で、お忍びで婚活してるんだ。婚活ブームは大いに結構！ 子孫繁栄で管区が発展するのは嬉しいけど、誰もが心から幸せになってほしい気持ちが一番だよ。

そんな波乱含みの大会なのともかく、今はグランダ勢が開催国の意地にかけて（？）現代オリンピックレベルな戦いを繰り広げるところ。グランダの重装歩兵部隊ヌーベル副隊長の第一回目の投擲が、40.3シン（75m）をマークし、会場は大盛り上がり。

ん？ あれ、よく見たらヌーベル隊長、肩に薬草入りの包帯巻いてテーピングしてる。練習しすぎて肩痛めてるじゃないですか頑張りますよ。本調子じゃなくてあの飛距離かよ！ 負傷してるなら治してあげたいけど、私ヌーベルさんに嫌われてるってか命狙われてるっぽいから祝福させてもらえない。

『ロベリアさん。申し訳ないんですが、ちょっと頼まれてもらえますか』

『はい……わが主よ。このロベリアに何なりと御命令を』

ロベリアさん、背筋をただして私の顔に穴が開くほど見てくる。澄み切った強い視線に私もたじたじだ。もっと肩の力抜きましようよ、エトワール先輩なんて新聞読み始めましたしモフコ先輩は私の頭の上在住の不定形生物やってますよ。

『お手数ですが、今記録出したヌーベル副隊長さんが肩を痛めてるようなので、治してあげてくれませんか？ 私は彼に嫌われて近づかせてもらえなくて。調子が悪くて記録が出せないと本意だと思っんです』

『さっすが赤井さん、おせっかいなうえ回りくどいとはっ！』

毛玉先輩。いい加減私の頭から選手を応援したり私に野次飛ばしたりするのやめてくれませんかね。

『かしこまりました』

ロベリアさん女性だから邪険にはされなさそうだ。

お使いに行つて下さったロベリアさんは、ぱたぱたと、と、銀の風切羽の混じった白翼を羽ばたかせて帰ってきました。女の子らしい飛び方だと思つたら、女使徒の翼つて小ぶりなのな、懸命に羽ばたいてる感じがかわいい。

そりゃ蒼さんも速攻ナンパしますよね。丁寧に断られてましたが蒼さんはとっくに夢の中。私の隣で座つたまま船漕いで『さげぼよ』
『みたいな寝言言ってるし。』

真面目なロベリアさんはささつと片膝をつき頭を垂れて

『これしきのこと神の眷属の力に頼るのは卑怯だと言われました。己の持てる力だけで大会に臨みたいと。抑えつけて無理に治療することはできませんが、いかがなされますか』

凜とした声が落ち着いていて綺麗だ。

『うーん、真の武人ですねえ。ご苦労様ですロベリアさん、やめておきましょう』

『また、何なりと』

ロベリアさんでもダメなら、白棕さんでも蒼雲さんでもダメだろうね。

『だめだよーそんな反抗期真っ盛りの子に”たけしー、お弁当忘れたから母ちゃん学校までもってきたわよー！”みたいな余計なことしたら。よしんば内心ありがたいと思ったとしても、うっせーくんなうぜえんだよ！ ってなっちゃうでしょー。逆効果 逆効果！ 小さな親切大きなお世話！ ある程度ほっとかないと』
『何ですかモフコ先輩そのたとえば』

白さんは思い当たる節があつたらしく、くすくすと笑っている。
すみませんね、私お節介で。

『んん？ ヌーベルはまだあんなこと言ってるのかね』

にゅつと横から顔を出すエトワール先輩。新聞読んでても元担当区のことは気になるんですね。

『武人一族として張り切つて鍛えたのが仇になった。もっと融通の利く設定にすればよかつたよ』

ヌーベルさんは邪神ギメノグレア又スから太古の昔、スオウ一族とともに武術を授けられた武家一族の末裔つて設定なんだ。だからギメノなんちゃらが邪神だと分かつてても、気持ち切り替えられない。キララはすっかり私になびいちゃってるけど。唸る私を励ますように先輩神、白棕さんは

『やはり基点区画と敵対関係にあつた区画については、なかなか融和が難しいのです。私も区画解放した当初の信頼率は最低でしたし、融和状態になるまで百年はかかりました。振り返れば、赤井神へのこの時点での信頼率は驚異的に高いので、むしろ些事にとらわれ、

大局を見失いませぬよう』

白さんは元気出して下さいと、安心させるように深く頷いてくださる。

ちなみに、白さんの巫女のコハクはメグやナズと一緒に、この場にはいない。白さんの勧めで、明日は大会にも参加してくれるらしい。キララにはまだコハクを紹介してない、キララも主催者として忙しそうだったから。

うーん、私ついこないだまで邪神扱いだったし、彼らグラнда兵は邪神の襲来を想定して日々鍛錬してきた手前気持ちを切り替えられない、気持ちは分かる。ヌーベルさんに会って殺気がビシビシ伝わってくる。憎くてたまらないだろうね。アンチがいてくれても全然いいんだ、けど……分かり合えるなら、私も彼もその方がいい。

『白棕さんの世界では、区画解放時に戦争をしたのですよね。こういうこともありましたか』

活躍は聞きましたよ西園さんから。私がモンジャ民と戯れていた頃、あなたと青さんは強大な律令国家を創り上げて軍を組織しこれに備えていたんですよね。すると白さんは視線を外し

『ええ、マニユアルの通りに。次の区画解放までに軍事力を強化し無血制圧を目指すのがセオリーです。それでも、やはり数百名の犠牲者を出してしまいました。戦争の傷と家族を失った憎しみは簡単には癒えませんが、時間という薬が必要でした』

『そ……そうだったんですか』

『赤井神。あなたは憎まれていると思っておられるようですが、戦争を経験しなかったこの世界で憎しみは生じていません。まだ誰も、あなたを憎んではないようですよ。それは信頼率としてあらわれ
ています』

そうなのかな？ 確かにモンジャとグランダは戦争をしなかったから区画解放時の戦争犠牲者はゼロだったし、民たちは殺し合いをしていないから、兵士はともかく民間レベルでは交流ができてる。

『わたしたちは決して、”正義の神”ではいられませんでしたよ。だから、あなたが正義の道を貫けるか、非常に興味があります』

寂しそうに呟いた白さんの言葉からは、私の知らない感じた。

『この管区はまだ、人間とA.Iの居住地を分けていないようですが分けるつもりはないです。人もA.Iもここでは平等です』

『いえ……人とA.Iは……一つ処にはいられません』

え、それどういう意味？ 私はアガルタの世界のなかで人間とA.Iの接し方に差別したことはないし、これからも変わらない。問いただして真意を汲み取ろうとする私に、

『ほーら、競技を見ようよ赤井さん。キララの旦那が決まるかもしれないんだよ』

『……まああれだ、ヌーベルは私に任せてくれ』

モフコ先輩とエトワール先輩が変なタイミングで話を遮った。何かあるのかな。

その後、後がないネストの御家人たちは、アルミニウム合金の軽量化された槍のおかげもあって、次々と現実世界単位に換算して平均五十メートル台の好記録をマーク。観客席に飛んで行った槍も何本があつたけど、結界の守りがあるから心配なし。ただ、槍投げつて踏切前で投げるんだけど、投げた後に踏み切り出ちゃう人がちらほら。気持ちも体も前にいっっちゃうんだよね。だから踏切より結構前で減速しないといけない、ところがそれが難しい。

ネスト御家人たちの、国の威信にかけての快進撃のあと、満を持してパズ王子の登場。

本人は出る気なかつたみたいだけど、国一番の剛腕だからとりあえず出る、つてことで父パウルさんに強引に誘われたようだ。

パズさんの一投目は特徴的だった。この競技は回転投法はダメだけど、フォームは自由だ。ほかの選手たちは走りながらできるだけ速度つけ速度に載せて投げてたけど、パズさんはあまり速度を出さず踏切手前で急ブレーキをかけて、膝にしつかり力を蓄えてからそれを一気に放つようなフォームだった。だからブレーキかけた反動で力が槍に伝わりやすくなり、もともと肩が強かったこともあって、飛距離がぐんと伸びた。

ネスト、グランダ勢の猛者の健闘にモンジャがやや劣勢になってきた中。

モンジャ民たちの期待を背負い、例のモンジャの狩人兄弟、弟ソミタの槍投げの投擲の順番が回ってきた。

大きく手を振り、この寒い中を半裸で大応援団にこたえる野生児ソミタ。さっきは勢い余つて暴投しちゃったけど、ぶっちゃけ優勝候補だ。

彼ら専門狩人は大会になんて興味なさそうだったのに何で参加したのかと思えば、弟ソミタはヤスさんの「いしのモリがさいきょうであることをしようめいする」ためにやってきたらしい。そんなに石の銛が好きならと、彼らには私、イシモリって姓を与えてみました。素民にあげる名前ぐらい、ネタに走ってもいいよね。

弟、ソミタ・イシモリは「はじめ」の掛け声とともに槍を構えはするけど、なかなか投げようとしなない。別に時間制限はないけど、何を躊躇っているんだろう。彼は競技場のフィールドにたなびく大会旗を見つめてる。この旗のデザインはナズがやってくれたもので、赤地に五輪ピクピクじゃなくて三輪ピクピクになってる。ナズは現実世界の人間だから似ちやうのは仕方ない。

……ソミタは追い風なのを気にしてるのかな。

風の台地に住むネスト民選手は無風か追い風のときに狙って投げた、追い風の方が風に飛距離を伸ばしてもらえそうだからね。でも、彼は向かい風を待ってる。目つきの悪い三白眼のままおもむるに走り始めた彼は、比較的銛の後端を握っている。その歩幅とタイミングを軽やかなクロスステップで合わせ、擦じった腰のトルクを体重移動で銛に伝え、射出角をやや低めに、日々の狩猟で鍛えた腰を武器に、力を蓄えて送り出す。無駄のない動作で。

踏切音と共にびゅん、と空気を割く音が騒がしい競技場内でも明瞭に聞こえ、迷いのない軌跡を描いて飛んでゆく。向かい風の空気を抵抗を僅かな上昇力として利用しているんだ。

投擲後もソミタは無表情だったけど、いつも通りという絶好調のコンデイションだった。

銛は案の定、競技場の観客席があつた場所に突き刺さつた。モフコ先輩に観客席を改造してもらつててよかったよ。

「49.4シン（92メートル）……です！」

『うわっ！ そみたんやつちゃつた！』

モフコ先輩が驚いて跳びあがつた。ぽふん、と私の頭の上に着地する。

続く兄のソミオは、普段は近接戦の狩りが得意だ。遠距離から攻撃する弟にこそ及びはしなかつたけど、47.3シンもの大記録をスコアボードに叩き付けた。こうしてソミタとソミオが暫定一位、二位に躍り出る。思いがけずハイレベルな戦いに、誰が優勝してもおかしくない状況になった。

トリで登場したのはヤスさん。モンジャの始祖にして元狩人、石を削って獣を狩るための銛を創つた人。

彼は帰ってきた。石の銛ではなく、鉄の槍をしっかりとその

手に携えて。彼の槍は紡錘形で、いわゆるジャベリンに似ている。狩りをする必要がないので、敢えて刃を外して臨んでるみたいだ。槍の重心を整える為に外したんだろう。

ヤスさんは道具にこだわるけど、執着はしない。

ソミタも本当は知っていたはずだし、ヤスさんも教えただろうと思う……石の銛、つまり柄材に木を使った銛は、よくしなり、手に馴染み、獣との戦いに適するけど、投擲時の柄材にかかる振動に強くない。と。だから全力で投擲するわけにはいかず、投射角にも制限がある。より振動に強いのは、金属の銛なんだ。私は教えたわけじゃないけど、彼は知っている。

「ヤスさんだぞ……引退してたヤスさんだ！ 引退して漁師になったヤスさんだ」

「おれたちのヤスさんがかえってきた！」

「やつつけちまえ、ヤスさん！」

モンジャ民はヤスさんの復活に大興奮。やっぱり、皆は槍を握ったヤスさんを見たかったんだ……と私もぐつとくる。

私は目を細め、素民がたった九人しかいなかった頃を思い出す。彼が銛を握り続けた日々を。

私たちの集落には当時、大人の男性はバルさんとハクさんと、ヤスさんの三人しかいなかった。私は一番体格のよかったヤスさんに一人で狩りをする方法や、罾の仕掛け方を教えた。彼は「けものたたかうのは怖い」と言っただけど、狩人になり、生きるか死ぬかの危険な目にも遭い、エドの大群に追いかけられたり、数えきれないほどの怪我もして、数多くの獣たちとたった一人で戦い抜いた。モンジャの民の食糧を獲るために……そんなヤスさんだ。

九年前……私はヤスさんと初めて狩りに出た頃。

当時、採集と畑作で原始生活を始めた私たち。作物の収量は不安定で、作物ができてはすぐに食べてしまったし、長期保存もできなかった。彼らはなかなかお腹を満たすことはできなかった。私は採集と農業の補助として狩りや漁をすることを提案したけれど、素民たちは拒否反応を見せた。

ヤスさんは私に、「かみさま、あなたはどうして何もたべない、ころさないのに俺たちにだけ生きた動物をころさせて食べさせようとするんですか。あなたがころしたくないように、俺たちもころしたくない、動物だって生きたいだろう、俺たちも生きたいように。野菜と果物だけ食べて生きていくべきだ」、そう言つて、素民たちもヤスさんに賛同した。肉や魚を食べなくても生きてゆくことはできる、あなたがたが望まないならそうしなくていい、私は答えた。

でも、素民たちは定住していたから、毎日歩き回れる範囲に必ず果実が転がっているわけじゃない。皆は食べ物を探し回っている間に体力を奪われ、食うや食わずの生活で飢えていた。お腹をすかせた子供たちが、食べられない草や毒のある実を食べて吐きだしたり、空腹を紛らわせるために水を飲んでお腹をふくらせたりしてた。

それをずっと辛そうに見ていたヤスさんが、ある日。

「かみさま、狩りをしたいんだ」と、私に申し出てきた。「俺たちは、ナズのぶんまで生きなきゃいけない」、そう言つた彼は葛藤を飲み干して、誰もやりたがらない危ない仕事を引き受けた。そして、「狩りをするのは俺だけでいい、大人全員で行つて帰つて来れなかつたら、子供たちだけが残つてしまう。俺は家族がいらないからいなくなつてもいいんだ。俺が一人でやる」と、他の大人たちに伝えたようだった。大人たちはそれを諾した。

ヤスさんはこしらえた石の銚を数本、力強く握りしめて、私と一緒に狩りに出た。

初日。草原のはずれで、大型の草食獣の群れに遭遇した。近づくとすると、獣たちは大群で逃げだしてしまった。それきり、日が暮れるまで捜しても、獲物はみつからなかった。私と彼のふたりは手ぶらで、肩を落として帰った。私たちは狩りの難しさをなめていた。狩りの得意な肉食獣だって、獲物が獲れず餓死することがあるんだ……。殺生を禁じられている私が狩ることはできない。歩き続けるヤスさんを、ただ見守ることしかできなかった。

次の日も、その次の日も、私はヤスさんに付き添って狩りに出た。その間、一匹も仕留めることができなかったけど、日に日に、大型の獣の活動する時間帯や水飲み場などが分かってきた。しかしせっかくな見つけても、近づこうとすると気付かれて逃げる。そこでヤスさんは獣に近づかず、物陰に身を潜め、背後から獣に銛を投げた、それが運よく当たった。中型犬ほどのサイズの獣が苦しがつて大暴れしていたから、ヤスさんは躊躇いながらも銛で殴って殺した。彼は震える声で、死んだ獲物に「祝福してやってくれ」と言ったので、私は彼の望み通りにした。その日、素民たちは初めて獣の肉を口にした。よく火を通し、塩をまぶした肉は想像以上においしくて、腹もちのいい食べ物だと彼らは知った。「これからは獣に感謝して、肉も食べよう」と、ヤスさんは言った。その日を境に、彼は集落でたったひとりの狩人になった。

狩りに出るヤスさんの石の銛は投げると割れたり壊れたから、何度も新たな銛を造りなおす。

彼は石の刃のついた銛を造り……造っては投げる。そのうち……粗製濫造だった銛はしなりすぎないよう一本一本流線形に洗練され、彼の日々の経験に基づいて機能的に最適化していった。狩りが終わると私は獲物を祝福し、集落まで運んであげた。彼の仕留める獲物は私が見上げるほど大きくなり、投擲の際に痛めた腰をさすりさすり歩く彼をねぎらいながら獲物を運んだ。

彼が現役だった頃を知るモンジャの民の誰もがヤスさんを慕い、その節くれだった手に感謝を惜しまない。

ヤスさんが狩人になって、もう誰も飢えなくてよくなった。

狩りを成功させて必ず帰ってこなければいけないヤスさんは、相
当な精神的重荷を負っていただろう。モンジャの皆が、腹をすかせ
て待っていて、狩人は彼一人だったから。彼らに明日も食べさせる
ために、ヤスさんは危険な狩りから安全に帰らなければいけなかつ
た。だから彼は獣を深追いをせず、無茶をしない。愚直なまでに慎
重だ。獲物に近づきすぎず、手に余る動物は絶対に狩らない、エド
もしかりだ。正面からを極力避け、遠くから標的を狙う。確実に。
その一投に、魂を込めて。

草原で狩りをするヤスさんの話は、グラランダやネストで大量生産
されている近接で戦うための槍とは構造が違う。可能な限り速く遠
くに飛び、その自重で静かに突き刺さる。遠距離の標的を素早く仕
留めることに特化した銛となった。

その銛の構造の美しさとヤスさんの生き様に、ソミタが惚れ込ん
だ。

ヤスさんは今、フィールドの遠くを見つめている。ソミタの銛の
刺さった、さらに一回り遠くを。

彼は唇を噛み、紡錘形をした鉄の槍の最も膨らんだ部分に布をぐ
るぐると巻きつけた。重心を後ろに傾け、布のグリップをしっかりと
握る。そして彼は見えない獲物に狙います。

風向きは、向かい風であることを感じている。追い風で獣の後ろ
に立つ狩人はいない。彼の教えは、弟子のソミオとソミタにしっか
りと伝えられていた。

「はじめ！」

合図とともに音も立てず、流れるように右足から狩りを始める。軽やかに、体幹で空間を紗に削ぎ切り交差するように自然な踏切動作。助走速度は十分、槍を乗せた腕をぐぐつと引き、助走のスピードを殺さず投擲動作に移行する。腰に回転を加えず、しかし体幹をしならせ、真つ直ぐ槍に魂を載せる。腰から肩へ、肘へから手首へ。減速によって蓄えられたベクトルが体幹から上肢へと伝わり、ばねのように大きな筋肉から小さなそれへ、つかえることなく移動する。彼は脱力しながら渾身の力を込めて、歯を喰いしばる。

指先にまで神経を尖らせて手首をスナップさせ、槍を全身に載せ押し出すように最大速度で一気に射出し、腕を振りぬいた。

彼が腰を痛めながら編み出した、彼だけの投擲フォーム。それは彼に守る家族ができて狩りをやめたといえど、身体の芯に深く深く刻みつけられてきた。彼の技術が完成した全貌を、私は知っている。遠くから一撃で頭部を仕留めてきた彼の集中力、彼の一投が、積み重ねた時間が、他の追隨を許さない確固としたものであると。

ヤスさんの槍はどの選手の放ったそれより鋭いアーチを描き、向かい風に押し上げられながら低空飛行で飛ぶ。無数の人々の視線を集め、見る間に飛距離は伸び、冷たい陽光の中を飛び魚のように鋭く閃いて。彼が意図したであろう場所に、つと、と小さな音を立て深々と突き刺さっていた。彼は宙に浮きつんのめった身体が地に激突しないよう右手をつき、軽やかに着地した。踏切の数センチ手前で止まった。

「54.3シン(101メートル)……です！」

彼の試技をその目に焼き付けたスタジアムを埋め尽くす素民たちは絶句し、モンジャ民は無我夢中でヤスさんの名を呼ぶ。ヤスさんは胸いっぱい空気を吸い込み、小さく一言「……やった」と照れ

くさそうに手を振って彼らにこたえた。

日はとつぷりと傾き、渡る風がフィールドを一周した頃。

一回目に続き全ての選手の二投目の試技が終わり、槍投げの優勝者が決した。

今大会初めての表彰式。運営スタッフが二回の投擲記録を合計し、下位から順に記録を読み上げる。どの選手にも、全素民たちから惜しめない拍手が送られた。ヌーベルさん、ソミオとソミタ、パズさんたちの名が次々に呼ばれ、彼らは参加記念品の入った袋を受け取った。何が入ってるかはお楽しみ。

最後に大歓声の中を、スタジアム中央の表彰台の梯子を踏みしめて私の前に上ってきたのは……。

割れた顎が特徴的な、逞しい肉体で穏やかな性格の青年素民。勿論、ヤスさんだ。

「ヤスさん。長い経験と技術のたまものですね、あなたの栄誉を心から称えます」

そう言っ手作りの勝者の冠を頭の上に載せてあげると、ヤスさんは困ったような顔をしてこういったんだ。

「かみさま、俺は槍を投げて、これまで心からいい気分になったことは一度もなかったんだ」

「……ええ」

「でもな。今日は、なんだかとてもいい気分だよ」

ヤスさんは手にした槍を撫で、ぎこちなく微笑んだ。

優勝者はモンジャ集落の、はじまりの狩人。
ヤス・ハント。

その名は競技場中央の柱に、輝かしく刻まれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3107n/>

ヘヴンズアンダーコンストラクション

2011年12月18日01時47分発行